北埋調報　62

美沢川流域の遺跡群XIII

―― 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

平成元年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

美沢川流域の遺跡群XIII

—— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

美沢3遺跡

美々3遺跡

美々8遺跡

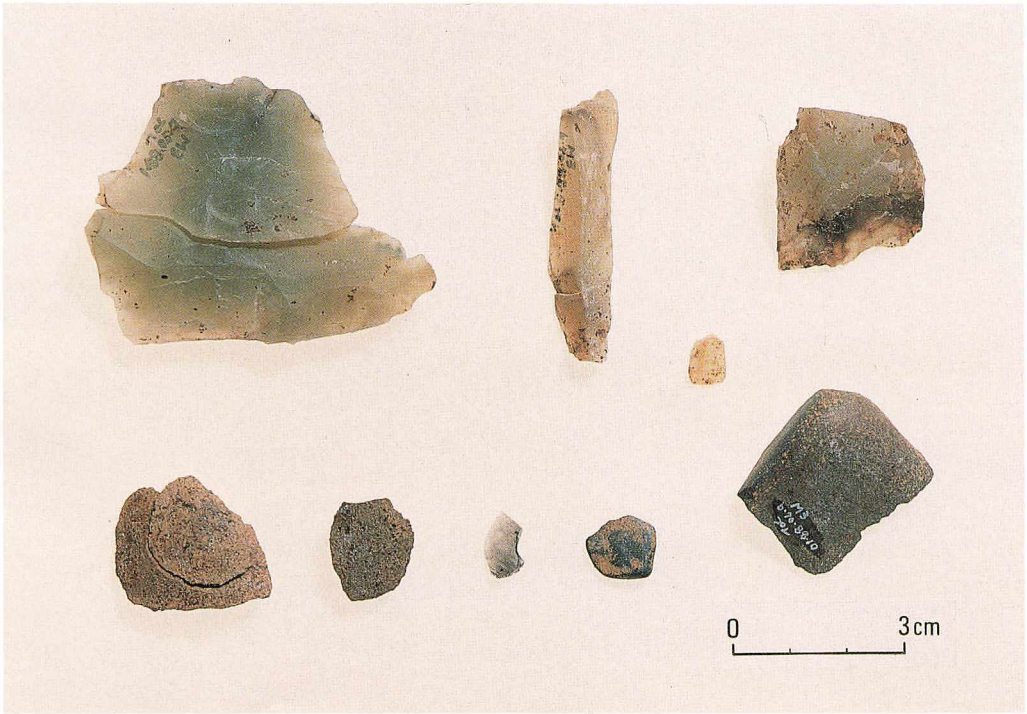
平成元年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

口絵1



旧石器時代遺物出土状態



旧石器時代の遺物

口絵 2



美沢 3 遺跡調査状況



美沢 3 遺跡出土土器



美々 3 遺跡調査状況



美々 8 遺跡擦文土器出土状況

口絵 4



美々 8 遺跡中・近世道跡調査状況



美々 8 遺跡「ビビ小休所」跡

例　　言

1　本書は、平成元年度に実施した新千歳空港建設用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。

2　調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施し、本書は調査を担当した調査部調査第2課が作成した。文責は文末に記す。

3　放射性炭素による年代測定は、京都産業大学山田治氏に依頼した。

4　種子の鑑定は、北海道開拓記念館矢野牧夫氏に依頼した。

5　動物遺存体の鑑定は、早稲田大学金子浩昌氏に依頼した。

6　室内整理後の出土遺物、諸記録は、北海道教育委員会が保管する。

7　調査にあたっては、つぎの人びと、諸機関のご協力をいただいた。

文化庁、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、北海道開拓記念館野村崇、平川善祥、千歳市教育委員会大谷敏三、田村俊之、高橋理、豊田宏良、苫小牧市埋蔵文化財調査センター佐藤一夫、工藤肇、宮夫靖夫、渡辺俊一、兵藤千秋、苫小牧市咲間清治、恵庭市教育委員会上屋真一、松谷純一、札幌市教育委員会加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、江別市教育委員会高橋正勝、直井孝一、園部真幸、稲垣和幸、市立函館博物館千代肇、長谷部一弘、函館市教育委員会田原良信、上ノ国町教育委員会松崎水穂、乙部町教育委員会森宏樹、江差町教育委員会藤島一己、今金町教育委員会寺崎康史、松前町教育委員会久保泰、七飯町教育委員会石本省三、八雲町教育委員会三浦孝一、柴田信一、南茅部町教育委員会小笠原忠久、阿部千春、鍋島直久、森町教育委員会藤田登、戸井町教育委員会古屋敷則雄、木古内町教育委員会鈴木正語、知内町教育委員会高橋豊彦、釧路市立博物館沢四郎、西幸隆、松田猛、石川朗、斜里町教育委員会金盛典夫、標茶町教育委員会豊原熙司、標津町教育委員会椙田光明、羅臼町教育委員会湧坂周一、帯広市百年記念館北沢実、旭川市教育委員会斎藤傑、瀬川拓郎、富良野市教育委員会杉浦重信、石狩町教育委員会石橋孝夫、工藤義衛、小樽市教育委員会土屋周三、石神敏、大島秀俊、余市町教育委員会宮宏明、鎌田望、青森県埋蔵文化財センター三宅徹也、三浦圭介、成田滋彦、遠藤正夫、八戸市教育委員会工藤竹久、宇部則保、八戸市博物館大野亨、岩手県立博物館赤沼英男、名久井文明、熊谷常正、佐藤嘉宏、東北大学須藤隆、北海道大学横山英介、札幌医科大学百々幸雄、大島直行（順不同敬称略）

記号等の説明

1．遺構等の表記は以下に示す記号を用い、発掘順に番号を付した。

Ｈ：住居跡及び類似遺構　　Ｐ：土壙（墓を含む）および住居跡に伴う柱穴状小ピット

Ｔ：Ｔピット　　Ｆ：焼土

2．遺構図は、発掘区基線の北（西偏7°22′38″）を上にして示した。図版は原則として下記の縮尺である。例外については、その都度スケール・方位を示す。

1/40：住居跡、土壙、Ｔピット、焼土　　1/10：遺物出土状況図

1/4：土器実測図　　1/3：土器拓影図、礫石器の実測図

1/2：剝片石器、土製品、石製品の実測図

3．レベルは標高（単位ｍ）で示す。

4．遺物分布図では、原則として各種の遺物を下記の記号で表記する。例外については、その都度凡例を示す。

床面出土　●：土器　▲：剝片石器　■：剝片　▼：礫石器

◆：礫　★：土・石製品

5．遺構の規模は、確認面での長軸長×短軸長／床（底）面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深（単位ｍ）の順で記した。

6．石器、土製品、石製品の大きさについては、最大長、最大幅、最大厚の順で記す。

7．遺構出土の遺物は、伴出遺物、混入遺物ともに合わせて各遺構の項の中に記載する。

8．土層名は、下記の略号で記す。

樽前ａ降下軽石層：Ｔａ－ａ層（ａ）　　樽前ｂ降下軽石層：Ｔａ－ｂ層（ｂ）

有珠山b_1火山灰：U_s-b_1層　　第Ⅰ黒色土層：Ⅰ黒層（Ⅰ黒またはⅠＢ）

苫小牧火山灰：ＴＭ

樽前c_1降下軽石層：Ｔａ－c_1層（c_1）　　樽前c_2降下岩片層：Ｔａ－c_2層（c_2）

第Ⅱ黒色土層：Ⅱ黒層（Ⅱ黒またはⅡＢ）　　樽前d_1降下岩片層：Ｔａ－d_1層（d_1）

樽前d_2降下スコリア層：Ｔａ－d_2層（d_2）　　第Ⅲ黒色土層：Ⅲ黒層（Ⅲ黒またはⅢＢ）

恵庭ａローム層：Ｅｎ－ａローム層（ＥｎＬ）　　恵庭ａ降下軽石層：Ｅｎ－ａ層（ＥｎＰ）

支笏軽石流堆積物：Ｓｐｆｌ層。

※火山灰の土層名・略号は、曽屋・佐藤（1980）、北海道火山灰命名委員会（1982）、横山ほか（1973）を引用し、（　）内はそれをさらに簡略化したものである。

9．土層の混在状態は、上記の略号を用いて下記のように表わす。

Ａ＋Ｂ：ＡとＢはほぼ同量にまじる。　　Ａ＞Ｂ：ＡにＢが少量まじる。

Ａ≫Ｂ：ＡにＢが微量まじる。

目　　次

口絵
例言
（記号等の説明）
目次
Ⅰ　調査の概要 …… 1
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査の経緯 …… 1
4　調査結果の概要 …… 4
5　遺物の記載について …… 7
Ⅱ　美沢３遺跡旧石器包含層の調査 …… 9
1　調査の概要 …… 9
2　遺物出土状況 …… 11
3　出土遺物 …… 11
4　まとめ …… 13
Ⅲ　美沢３遺跡第Ⅱ黒色土層の調査 …… 15
1　調査の概要 …… 15
2　縄文時代早期の遺構 …… 19
(1)　Ⅰ群ｂ－３類土器の時期の遺構 …… 20
(2)　Ⅰ群ｂ－４類土器の時期の遺構 …… 25
3　縄文時代前期の遺構 …… 54
4　縄文時代後期の遺構 …… 62
5　縄文時代晩期の遺構 …… 78
6　包含層出土の遺物 …… 89
7　まとめ …… 156
Ⅳ　美々３遺跡第Ⅱ黒色土層の調査 …… 173
1　調査の概要 …… 173
2　遺構 …… 173
3　包含層出土の遺物 …… 191
4　まとめ …… 207
Ⅴ　美々３遺跡第Ⅰ黒色土層の調査 …… 213
1　調査の概要 …… 213

2　遺構及び遺物の出土状況 …… 214
3　包含層出土の遺物 …… 215
4　まとめ …… 218
Ⅵ　美々8遺跡第Ⅱ黒色土層の調査 …… 219
1　調査の概要 …… 219
2　遺構 …… 220
3　包含層出土の遺物 …… 227
4　まとめ …… 232
Ⅶ　美々8遺跡第Ⅰ黒色土層の調査 …… 235
1　調査の概要 …… 235
2　縄文・続縄文時代の遺物 …… 236
3　擦文時代の遺構と遺物 …… 239
4　中・近世の遺構と遺物 …… 271
(1)　遺構 …… 272
(2)　包含層出土の遺物 …… 297
5　まとめ …… 307
Ⅷ　美々8遺跡表土層の調査 …… 323
1　調査の概要 …… 323
2　近世の遺構 …… 324
3　近代の遺構と遺物 …… 326
4　まとめ …… 339
Ⅸ　総括 …… 341
1　調査の成果と課題 …… 341
2　東釧路Ⅳ式土器について …… 348

挿図目次

図Ⅰ－1　遺跡の位置 …… 2
図Ⅰ－2　標準土層模式図 …… 3
図Ⅰ－3　美沢川流域の遺跡群の位置と発掘区の呼称 …… 5
図Ⅰ－4　美沢川流域遺跡群の分布 …… 6
図Ⅱ－1　旧石器時代遺物確認調査範囲と土層 …… 10
図Ⅱ－2　炭化物・焼土の広がりと遺物の出土状況 …… 11
図Ⅱ－3　ローム質粘土層出土の遺物 …… 12
図Ⅲ－1　Ⅱ黒層全体遺構位置図（等高線はTa－d_2層上面） …… 16
図Ⅲ－2　c－68区の縄文時代早期の盛土のセクション図 …… 18
図Ⅲ－3　縄文時代早・前期の遺構位置図 …… 19
図Ⅲ－4　P－56と出土の遺物 …… 21
図Ⅲ－5　P－61と出土の遺物 …… 22
図Ⅲ－6　P－62 …… 23
図Ⅲ－7　P－65と出土の遺物 …… 24
図Ⅲ－8　P－66と出土の遺物 …… 24
図Ⅲ－9　P－67と出土の遺物 …… 25
図Ⅲ－10　H－20と出土の土器 …… 26
図Ⅲ－11　H－20出土の石器 …… 27
図Ⅲ－12　H－22と出土の遺物 …… 28
図Ⅲ－13　P－37 …… 29
図Ⅲ－14　P－42と出土の遺物 …… 30
図Ⅲ－15　P－43と出土の遺物 …… 32
図Ⅲ－16　P－44と出土の遺物 …… 33
図Ⅲ－17　P－45と出土の遺物 …… 35
図Ⅲ－18　P－46と出土の土器 …… 36
図Ⅲ－19　P－46と出土の石器 …… 37
図Ⅲ－20　P－47と出土の遺物 …… 38
図Ⅲ－21　P－48と出土の遺物 …… 39
図Ⅲ－22　P－50 …… 40
図Ⅲ－23　P－51と出土の遺物 …… 41
図Ⅲ－24　P－53と出土の遺物 …… 42
図Ⅲ－25　P－54と出土の土器 …… 43
図Ⅲ－26　P－58と出土の遺物 …… 44
図Ⅲ－27　P－59と出土の遺物 …… 45
図Ⅲ－28　P－60と出土の石器 …… 45
図Ⅲ－29　P－63と出土の遺物 …… 46
図Ⅲ－30　P－64と出土の遺物 …… 47
図Ⅲ－31　P－70と出土の遺物 …… 47
図Ⅲ－32　縄文時代早期の焼土の分布図 …… 48
図Ⅲ－33　焼土(1) …… 49
図Ⅲ－34　焼土(2) …… 50
図Ⅲ－35　焼土(3) …… 51
図Ⅲ－36　焼土出土の遺物 …… 53
図Ⅲ－37　P－38と出土の遺物 …… 55
図Ⅲ－38　P－38出土の遺物 …… 56
図Ⅲ－39　P－39 …… 57
図Ⅲ－40　P－49と出土の遺物 …… 58
図Ⅲ－41　P－55と出土の遺物 …… 59
図Ⅲ－42　P－57と出土の遺物 …… 61
図Ⅲ－43　縄文時代後期の遺構位置図 62
図Ⅲ－44　H－18 …… 64
図Ⅲ－45　H－18の盛土の範囲 …… 65
図Ⅲ－46　H－18出土の土器 …… 65
図Ⅲ－47　H－18出土の石器 …… 66
図Ⅲ－48　H－19 …… 68
図Ⅲ－49　H－19出土の土器 …… 68

図Ⅲ－50　Ｈ－19出土の遺物 …… 69
図Ⅲ－51　Ｈ－21 …… 70
図Ⅲ－52　Ｈ－21出土の遺物 …… 71
図Ⅲ－53　Ｐ－52と出土の土器 …… 72
図Ⅲ－54　Ｐ－68と出土の土器 …… 73
図Ⅲ－55　Ｐ－69と出土の土器 …… 74
図Ⅲ－56　Ｔ－18と出土の遺物 …… 75
図Ⅲ－57　Ｔ－19・20と出土の遺物 …… 76
図Ⅲ－58　Ｔ－21 …… 77
図Ⅲ－59　縄文時代晩期の遺構位置図　79
図Ⅲ－60　Ｐ－25・26・27 …… 80
図Ⅲ－61　Ｐ－28 …… 81
図Ⅲ－62　Ｐ－29 …… 82
図Ⅲ－63　Ｐ－30 …… 83
図Ⅲ－64　Ｐ－31 …… 84
図Ⅲ－65　Ｐ－32 …… 85
図Ⅲ－66　Ｐ－33・34 …… 86
図Ⅲ－67　Ｐ－35 …… 87
図Ⅲ－68　Ｐ－36 …… 88
図Ⅲ－69　Ｐ－41 …… 88
図Ⅲ－70　土器分布密度(1) …… 89
図Ⅲ－71　土器分布密度(2) …… 90
図Ⅲ－72　土器分布密度(3) …… 91
図Ⅲ－73　Ⅰ群ｂ－１類土器(1) …… 92
図Ⅲ－74　Ⅰ群ｂ－１類土器(2) …… 93
図Ⅲ－75　Ⅰ群ｂ－１類土器(3) …… 95
図Ⅲ－76　Ⅰ群ｂ－１類土器(4) …… 96
図Ⅲ－77　Ⅰ群ｂ－２類土器(1) …… 97
図Ⅲ－78　Ⅰ群ｂ－２類土器(2) …… 98
図Ⅲ－79　Ⅰ群ｂ－３類土器(1) …… 100
図Ⅲ－80　Ⅰ群ｂ－３類土器(2) …… 101
図Ⅲ－81　Ⅰ群ｂ－３類土器(3) …… 102
図Ⅲ－82　Ⅰ群ｂ－４類土器(1) …… 104
図Ⅲ－83　Ⅰ群ｂ－４類土器(2) …… 106
図Ⅲ－84　Ⅰ群ｂ－４類土器(3) …… 107
図Ⅲ－85　Ⅰ群ｂ－４類土器(4) …… 108
図Ⅲ－86　Ⅰ群ｂ－４類土器(5) …… 109
図Ⅲ－87　Ⅰ群ｂ－４類土器(6) …… 111
図Ⅲ－88　Ⅰ群ｂ－４類土器(7) …… 112
図Ⅲ－89　Ⅰ群ｂ－４類土器(8) …… 113
図Ⅲ－90　Ⅰ群ｂ－４類土器(9) …… 114
図Ⅲ－91　Ⅰ群ｂ－４類土器(10) …… 115
図Ⅲ－92　Ⅰ群ｂ－４類土器(11) …… 117
図Ⅲ－93　Ⅰ群ｂ－４類土器(12) …… 118
図Ⅲ－94　Ⅰ群ｂ－４類土器(13) …… 120
図Ⅲ－95　Ⅱ群ａ類土器(1) …… 122
図Ⅲ－96　Ⅱ群ａ類土器(2) …… 123
図Ⅲ－97　Ⅱ群ａ類土器(3) …… 124
図Ⅲ－98　Ⅲ群ａ類、ｂ－１類土器　125
図Ⅲ－99　Ⅳ群ａ類土器 …… 126
図Ⅲ－100　Ⅳ群ｂ類土器(1) …… 127
図Ⅲ－101　Ⅳ群ｂ類土器(2) …… 128
図Ⅲ－102　Ⅳ群ｂ類土器(3) …… 130
図Ⅲ－103　Ⅳ群ｂ類土器(4) …… 131
図Ⅲ－104　Ⅳ群ｃ類土器 …… 132
図Ⅲ－105　包含層出土の石器(1) …… 136
図Ⅲ－106　包含層出土の石器(2) …… 137
図Ⅲ－107　包含層出土の石器(3) …… 138
図Ⅲ－108　包含層出土の石器(4) …… 139
図Ⅲ－109　包含層出土の石器(5) …… 140
図Ⅲ－110　包含層出土の石器(6) …… 141
図Ⅲ－111　包含層出土の石器(7) …… 142
図Ⅲ－112　包含層出土の石器(8) …… 143
図Ⅲ－113　包含層出土の石器(9) …… 144
図Ⅲ－114　包含層出土の石器(10) …… 145
図Ⅲ－115　包含層出土の石器(11) …… 146
図Ⅲ－116　包含層出土の石器(12) …… 147
図Ⅲ－117　包含層出土の石器(13) …… 148
図Ⅲ－118　包含層出土の石器(14) …… 149
図Ⅲ－119　包含層出土の石器(15) …… 150

図Ⅲ－120　包含層出土の石器(16) …… 151
図Ⅲ－121　包含層出土の石器(17) …… 152
図Ⅲ－122　包含層出土の石器(18) …… 153
図Ⅲ－123　包含層出土の石器(19) …… 154
図Ⅲ－124　包含層出土の石器等(20) …… 155
図Ⅳ－1　遺構位置図 …… 173
図Ⅳ－2　Ｈ－2(1) …… 176
図Ⅳ－3　Ｈ－2(2) …… 177
図Ⅳ－4　Ｈ－2出土の土器(1) …… 178
図Ⅳ－5　Ｈ－2出土の土器(2) …… 179
図Ⅳ－6　Ｈ－2出土の土器(3)・
石器(1) …… 180
図Ⅳ－7　Ｈ－2出土の石器(2) …… 181
図Ⅳ－8　Ｈ－1 …… 183
図Ⅳ－9　Ｈ－1出土の土器(1) …… 186
図Ⅳ－10　Ｈ－1出土の土器(2) …… 187
図Ⅳ－11　Ｈ－1出土の石器 …… 188
図Ⅳ－12　Ｐ－6と出土の土器 …… 189
図Ⅳ－13　Ｐ－7 …… 190
図Ⅳ－14　Ｐ－7出土の土器・石器 …… 190
図Ⅳ－15　包含層出土の土器(1) …… 196
図Ⅳ－16　包含層出土の土器(2) …… 197
図Ⅳ－17　包含層出土の土器(3) …… 198
図Ⅳ－18　包含層出土の土器(4) …… 199
図Ⅳ－19　包含層出土の土器(5) …… 200
図Ⅳ－20　包含層出土の土器(6) …… 201
図Ⅳ－21　包含層出土の土器(7) …… 202
図Ⅳ－22　包含層出土の土器(8) …… 203
図Ⅳ－23　包含層出土の石器(1) …… 204
図Ⅳ－24　包含層出土の石器(2) …… 205
図Ⅳ－25　包含層出土の石器(3) …… 206
図Ⅳ－26　包含層出土の石器(4) …… 207
図Ⅴ－1　遺構位置図 …… 213
図Ⅴ－2　焼土・出土状況 …… 214
図Ⅴ－3　出土状況 …… 214
図Ⅴ－4　包含層出土の土器(1) …… 216
図Ⅴ－5　包含層出土の土器(2) …… 217
図Ⅴ－6　包含層出土の石器 …… 217
図Ⅵ－1　遺構位置図 …… 219
図Ⅵ－2　Ｐ－1 …… 220
図Ⅵ－3　Ｔ－1 …… 221
図Ⅵ－4　Ｔ－2・3 …… 222
図Ⅵ－5　Ｔ－4・5 …… 223
図Ⅵ－6　Ｔ－6と出土の土器 …… 224
図Ⅵ－7　Ｆ－1～8 …… 225
図Ⅵ－8　道跡 …… 226
図Ⅵ－9　土器出土状況図 …… 227
図Ⅵ－10　包含層出土の土器(1) …… 228
図Ⅵ－11　包含層出土の土器(2) …… 229
図Ⅵ－12　包含層出土の石器 …… 230
図Ⅵ－13　包含層出土の石器・
石製品 …… 231
図Ⅶ－1　遺構位置図 …… 235
図Ⅶ－2　遺物出土位置図 …… 237
図Ⅶ－3　土器出土状況図・包含層出土
の土器・石器 …… 238
図Ⅶ－4　擦文時代の建物跡
位置図 …… 239
図Ⅶ－5　擦文時代の柱穴群
位置図 …… 240
図Ⅶ－6　擦文時代の焼土・集中礫
位置図 …… 241
図Ⅶ－7　集中礫の長さと幅 …… 241
図Ⅶ－8　集中礫の重量分布 …… 242
図Ⅶ－9　包含層出土の土器(1) …… 254
図Ⅶ－10　包含層出土の土器(2) …… 255
図Ⅶ－11　包含層出土の土器(3) …… 256
図Ⅶ－12　包含層出土の土器(4) …… 257
図Ⅶ－13　包含層出土の土器(5) …… 258
図Ⅶ－14　包含層出土の土器(6) …… 259

図Ⅶ－15　包含層出土の土器(7) …… 260
図Ⅶ－16　包含層出土の土器(8) …… 261
図Ⅶ－17　包含層出土の土器(9) …… 262
図Ⅶ－18　土器出土位置図 …… 263
図Ⅶ－19　土製品、黒曜石、金属製品等出土位置図 …… 265
図Ⅶ－20　Ｐ－71、包含層出土の土・石製品 …… 266
図Ⅶ－21　包含層出土の石器 …… 268
図Ⅶ－22　金属製品等 …… 269
図Ⅶ－23　Ⅰ黒層の中・近世の遺跡 …… 271
図Ⅶ－24　中・近世の遺構位置図 …… 273
図Ⅶ－25　Ｈ－１ …… 275
図Ⅶ－26　Ｈ－２ …… 277
図Ⅶ－27　Ｈ－１・２出土の遺物(1) …… 278
図Ⅶ－28　Ｈ－１・２出土の遺物(2) …… 279
図Ⅶ－29　貝製品・骨角器 …… 280
図Ⅶ－30　焼土位置図 …… 282
図Ⅶ－31　焼土(1) …… 283
図Ⅶ－32　焼土(2) …… 284
図Ⅶ－33　焼土(3) …… 285
図Ⅶ－34　焼土(4) …… 286
図Ⅶ－35　焼土(5) …… 287
図Ⅶ－36　焼土(6) …… 288
図Ⅶ－37　焼土と焼土出土の金属製品　289
図Ⅶ－38　杭跡群位置図 …… 291
図Ⅶ－39　杭跡分布図 …… 293
図Ⅶ－40　道跡位置図・断面図 …… 295
図Ⅶ－41　珠洲系摺鉢 …… 296
図Ⅶ－42　中・近世の金属製品(1) …… 298
図Ⅶ－43　中・近世の金属製品(2) …… 299
図Ⅶ－44　擦文時代の土器(1) …… 313
図Ⅶ－45　擦文時代の土器(2) …… 314
図Ⅶ－46　擦文時代の土器(3) …… 315
図Ⅷ－１　遺構位置図 …… 323
図Ⅷ－２　建物跡 …… 325
図Ⅷ－３　炭焼窯跡・灰原・燃材位置図 …… 327
図Ⅷ－４　炭焼窯跡１号 …… 329
図Ⅷ－５　炭焼窯跡２号 …… 331
図Ⅷ－６　竪穴状遺構 …… 335
図Ⅷ－７　表土層の金属製品等(1) …… 336
図Ⅷ－８　表土層の金属製品等(2) …… 337
図Ⅷ－９　表土層の金属製品等(3) …… 338
図Ⅸ－１　東釧路Ⅳ式集成図(1) …… 349
図Ⅸ－２　東釧路Ⅳ式集成図(2) …… 350
図Ⅸ－３　東釧路Ⅳ式集成図(3) …… 351

表目次

表Ⅱ－1　ローム質粘土層出土の石器等一覧 …… 13
表Ⅲ－1　焼土一覧 …… 48
表Ⅲ－2　包含層の出土遺物一覧 …… 159
表Ⅲ－3　遺構の出土遺物一覧 …… 159
表Ⅲ－4　遺構別出土遺物一覧 …… 160
表Ⅲ－5　遺構の掲載土器一覧 …… 163
表Ⅲ－6　遺構の掲載石器一覧 …… 165
表Ⅲ－7　包含層の掲載土器一覧(1)　Ⅰ群ｂ－1類 …… 166
表Ⅲ－8　包含層の掲載土器一覧(2)　Ⅰ群ｂ－2類 …… 166
表Ⅲ－9　包含層の掲載土器一覧(3)　Ⅰ群ｂ－3類 …… 167
表Ⅲ－10　包含層の掲載土器一覧(4)　Ⅰ群ｂ－4類 …… 167
表Ⅲ－11　包含層の掲載土器一覧(5)　Ⅱ群ａ類 …… 167
表Ⅲ－12　包含層の掲載土器一覧(6)　Ⅲ群ａ類、ｂ－1類 …… 167
表Ⅲ－13　包含層の掲載土器一覧(7)　Ⅳ群ａ類、ｂ類、ｃ類 …… 168
表Ⅲ－14　包含層の掲載石器等一覧 …… 168
表Ⅲ－15　遺構一覧 …… 171
表Ⅳ－1　包含層の出土遺物一覧 …… 209
表Ⅳ－2　遺構の出土遺物一覧 …… 209
表Ⅳ－3　遺構別出土遺物一覧 …… 210
表Ⅳ－4　遺構の掲載土器一覧 …… 210
表Ⅳ－5　遺構の掲載石器一覧 …… 211
表Ⅳ－6　包含層の掲載土器一覧 …… 211
表Ⅳ－7　包含層の掲載石器一覧 …… 212
表Ⅳ－8　遺構一覧 …… 212
表Ⅴ－1　包含層の出土遺物一覧 …… 218
表Ⅴ－2　包含層の掲載土器一覧 …… 218
表Ⅴ－3　包含層の掲載石器一覧 …… 218
表Ⅵ－1　ピット一覧 …… 224
表Ⅵ－2　Ｔピット一覧 …… 224
表Ⅵ－3　Ｔピット掲載遺物一覧 …… 224
表Ⅵ－4　焼土一覧 …… 225
表Ⅵ－5　包含層の掲載土器一覧 …… 233
表Ⅵ－6　包含層の掲載石器一覧 …… 234
表Ⅵ－7　包含層の出土遺物一覧 …… 234
表Ⅵ－8　遺構の出土遺物一覧 …… 234
表Ⅵ－9　遺構別出土遺物一覧 …… 234
表Ⅶ－1　縄文・続縄文時代の掲載遺物一覧 …… 237
表Ⅶ－2　擦文時代の建物跡柱穴一覧 …… 239
表Ⅶ－3　擦文時代の柱穴群柱穴一覧 …… 240
表Ⅶ－4　擦文時代の土器の観察表 …… 243
表Ⅶ－5　擦文時代の土・石製品一覧 …… 267
表Ⅶ－6　擦文時代の土製玉大きさ一覧 …… 267
表Ⅶ－7　擦文時代の掲載金属製品等一覧 …… 269
表Ⅶ－8　擦文時代の遺構出土の動物遺存体 …… 270
表Ⅶ－9　擦文時代の包含層出土の動物遺存体 …… 270
表Ⅶ－10　Ｈ－1・2掲載遺物一覧 …… 280
表Ⅶ－11　中・近世の焼土一覧 …… 290

表Ⅶ－12　中・近世の焼土の掲載金属製品一覧 …… 290
表Ⅶ－13　中・近世の掲載金属製品一覧 …… 300
表Ⅶ－14　Ｈ－１・２出土の動物遺存体 …… 302
表Ⅶ－15　中・近世の焼土の動物遺存体 …… 306
表Ⅶ－16　中・近世の包含層出土の動物遺存体 …… 306
表Ⅶ－17　表土層出土の動物遺存体 …… 306
表Ⅶ－18　擦文時代の土器の発掘年度一覧 …… 316
表Ⅶ－19　土製玉遺跡別一覧 …… 317
表Ⅶ－20　包含層の出土遺物一覧 …… 318
表Ⅶ－21　遺構の出土遺物一覧（擦文） …… 318
表Ⅶ－22　遺構の出土遺物一覧（中・近世） …… 318
表Ⅶ－23　遺構別出土遺物一覧（擦文） …… 318
表Ⅶ－24　遺構別出土遺物一覧（中・近世） …… 321
表Ⅶ－25　擦文時代の掲載石器一覧 …… 322
表Ⅷ－１　近世の建物跡柱穴一覧 …… 324
表Ⅷ－２　炭焼窯跡１号杭跡一覧 …… 333
表Ⅷ－３　炭焼窯跡２号杭跡一覧 …… 333
表Ⅷ－４　炭焼窯跡２号の掲載金属製品一覧 …… 338
表Ⅷ－５　表土層の掲載金属製品一覧 …… 338
表Ⅷ－６　包含層の出土遺物一覧 …… 340
表Ⅷ－７　遺構の出土遺物一覧 …… 340
表Ⅷ－８　遺構別出土遺物一覧 …… 340
表Ⅸ－１　「ビビ小休所」関係主要記録一覧 …… 347

Ⅰ　調査の概要

この調査は、北海道開発局札幌開発建設部が建設を進めている新千歳空港の用地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の緊急調査で、本年度は第14年次にあたる。

1　調査要項

事　業　名　新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者　北海道開発局札幌開発建設部

事業受託者　財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調査遺跡・所在地・面積

遺跡名	道教委登載番号	所在地	面積	備考
美沢3遺跡	J－02－81	苫小牧市美沢164番地ほか	5,478㎡	旧石器包含層調査
美々3遺跡	A－03－98	千歳市美々988－25ほか	6,000㎡	Ⅱ黒層は1,500㎡調査
美々8遺跡	A－03－94	千歳市美々1292－133ほか	4,182㎡	
計			15,660㎡	

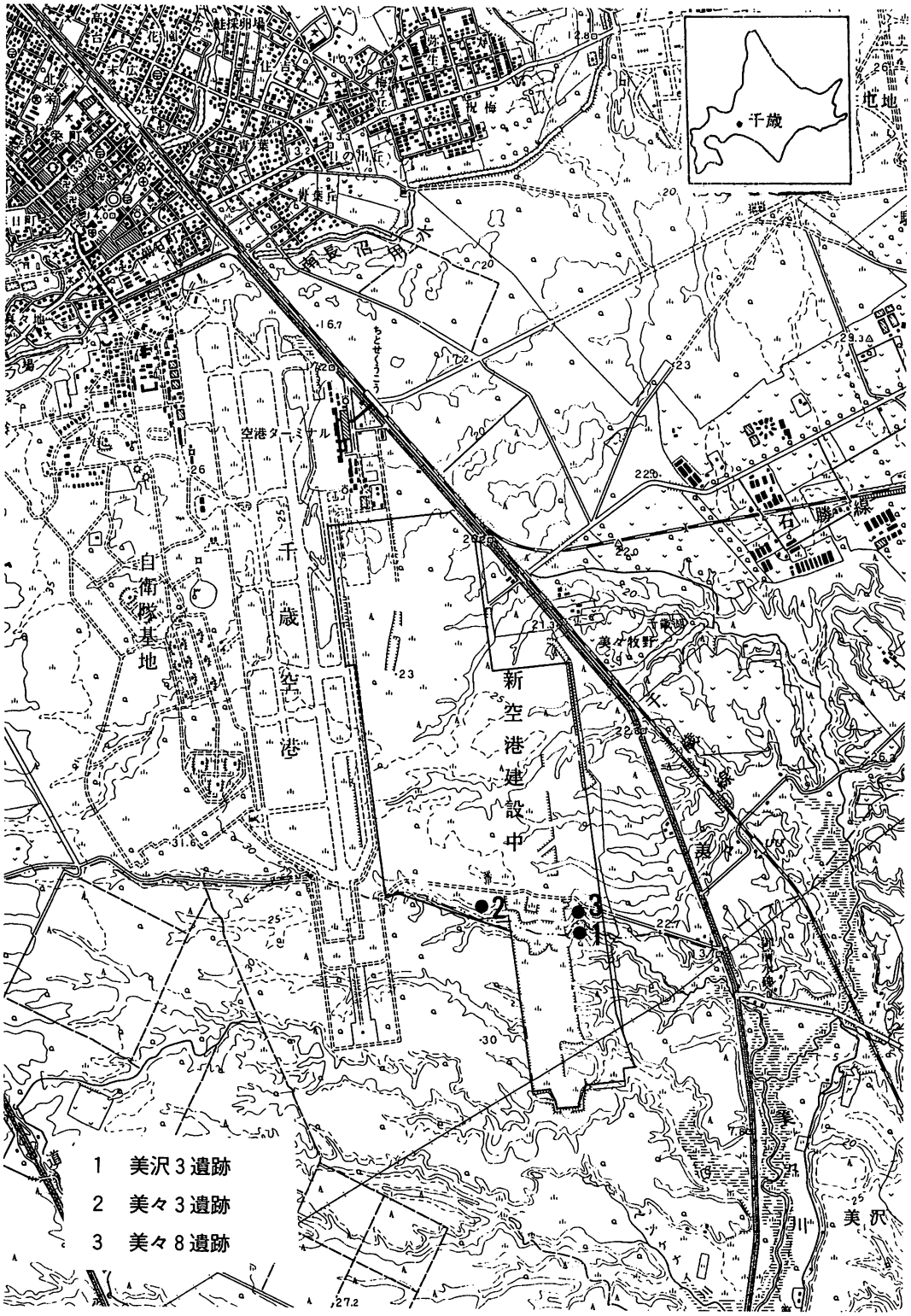
調査期間　平成元年5月7日～平成2年3月27日

2　調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター　理事長　澤　宣彦
専務理事　永田春夫
常務理事　竹田輝雄
業務部長　伊藤庄吉
調査部長　中村福彦
調査第2課長　大沼忠春
文化財保護主事　佐藤和雄
〃　遠藤香澄
〃　田口　尚
嘱託調査員　越田雅司

3　調査の経緯

新千歳空港のある千歳市・苫小牧市は、北海道の中で道央の低地帯の南部に位置している。この道央の低地帯は、日本海側と太平洋側をつなぐ内陸交通路として古くから利用されてきた。ここには北へ向う石狩川の支流の千歳川があり、南へ下る美々川があって、この川をさかのぼり、千歳市街から、苫小牧市境間のわずかな陸路を経て、また川を下り、人々は往来していた



図Ⅰ－１遺跡の位置（この地図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「千歳」を利用したものである。）

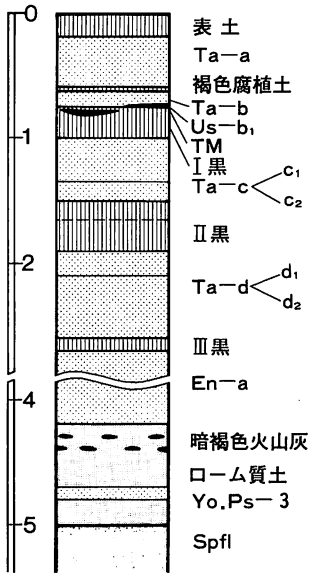
のであった。丸木舟が利用されるようになったのは一万年以上も前のことと考えられ、それ以来、国道や鉄道が建設される明治時代に及ぶまで、少なくとも一万年もの長い間これらの川と陸路が利用されてきたと考えられる。このような交通の要地であったことから、これらの川の流域には、古くから、特に多く人々が居住してきたようである。またそれに伴い、南方や、北方からの物資がもたらされることともなったようである。

この道央の低地帯の南部は、過去において数次の火山灰の降灰により、壊滅的な打撃を蒙りながらも、現在に至るまで、人々の居住の場として、交通の要地として利用され、地域の特色は、天然の環境に育くまれて継続してきている。ここに新千歳空港の建設計画が立てられることとなり、この計画が具体化するとともに、昭和49・50年度には千歳市教育委員会によって埋蔵文化財の分布調査が行なわれ、昭和51年度から北海道教育委員会によって、発掘調査が実施された。この事業は昭和54年度に設立された財団法人北海道埋蔵文化財センターに引継がれ、以来、毎年調査を実施している。

本年度調査された美沢3遺跡・美々3遺跡・美々8遺跡はそれぞれにこれまでに調査が進められてきた遺跡である。美沢3遺跡は、これまでに3度（昭和51・55・63年度）調査されていて、第Ⅰ黒色土層と第2黒色土層とに遺跡のあることが知られていた。第Ⅰ黒色土層では続縄文時代から擦文時代を経て、中・近世に及ぶ遺構・遺物が発掘されている。遺跡の状態は対岸の美々8遺跡と共通するものであった（昭和63年度）。第Ⅱ黒色土層では縄文時代早期から前期、中期、後期、晩期の各時期の遺構や遺物が発見されている。早期後葉の墓壙からは足形付の土版が出土し、当時の集落を示す竪穴住居跡も多数存在していて、その時期の主要な拠点となってたことが知られる。前期の初頭を示すこれまで類例の乏しい資料や、中期、後期の住居跡、Ｔピット、晩期の土壙が知られていた。また表土層に炭焼窯跡も存在していた。

美々3遺跡は、昭和63年度に北側の第Ⅱ黒色土層の調査を行い、縄文時代中期を主体とし、後期、晩期の遺物の出土する状況が知られている。

美々8遺跡は、これまで4度（昭和56・57・60・62年度）調査が行なわれていて、表土、第Ⅰ黒色土、第Ⅱ黒色土、ローム質土層の各層から、旧石器時代から近・現代のものまで出土することが知られていた。これまでの調査では第Ⅰ黒色土層から、多量の擦文時代の遺物が出土し、この時代の遺跡が、通例、竪穴住居跡群を伴うものであることから、特異な性格をもつ遺跡ではないかと考えられてきた。第Ⅰ黒色土層からは擦文時代以前の縄文時代晩期から続縄文時代の遺物や、



図Ⅰ−2　標準土層模式図

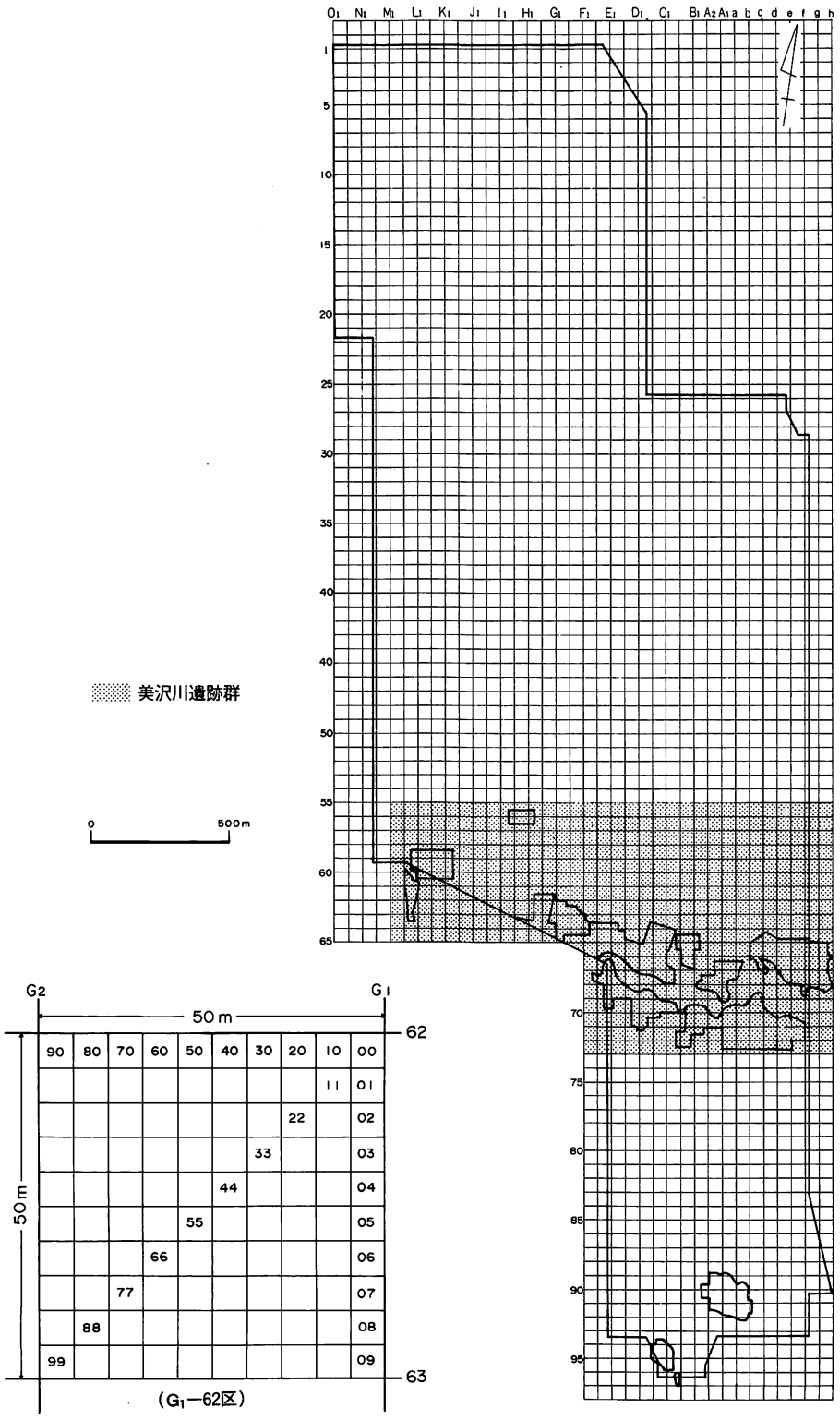
中・近世に及ぶ道跡・建物跡などの遺構や、すり鉢、金属器などの遺物も発掘されていた。第Ⅱ黒色土層からは、縄文時代早期の遺物と、前期・中期の住居跡や後期のＴピット、晩期の遺物が出土している。旧石器包含層のローム質土層からは剝片が１点認められている。表土層には近代の道路跡や炭焼作業に伴う遺物、さらには駐留アメリカ軍関係の遺物が存在していた。

4　調査結果の概要

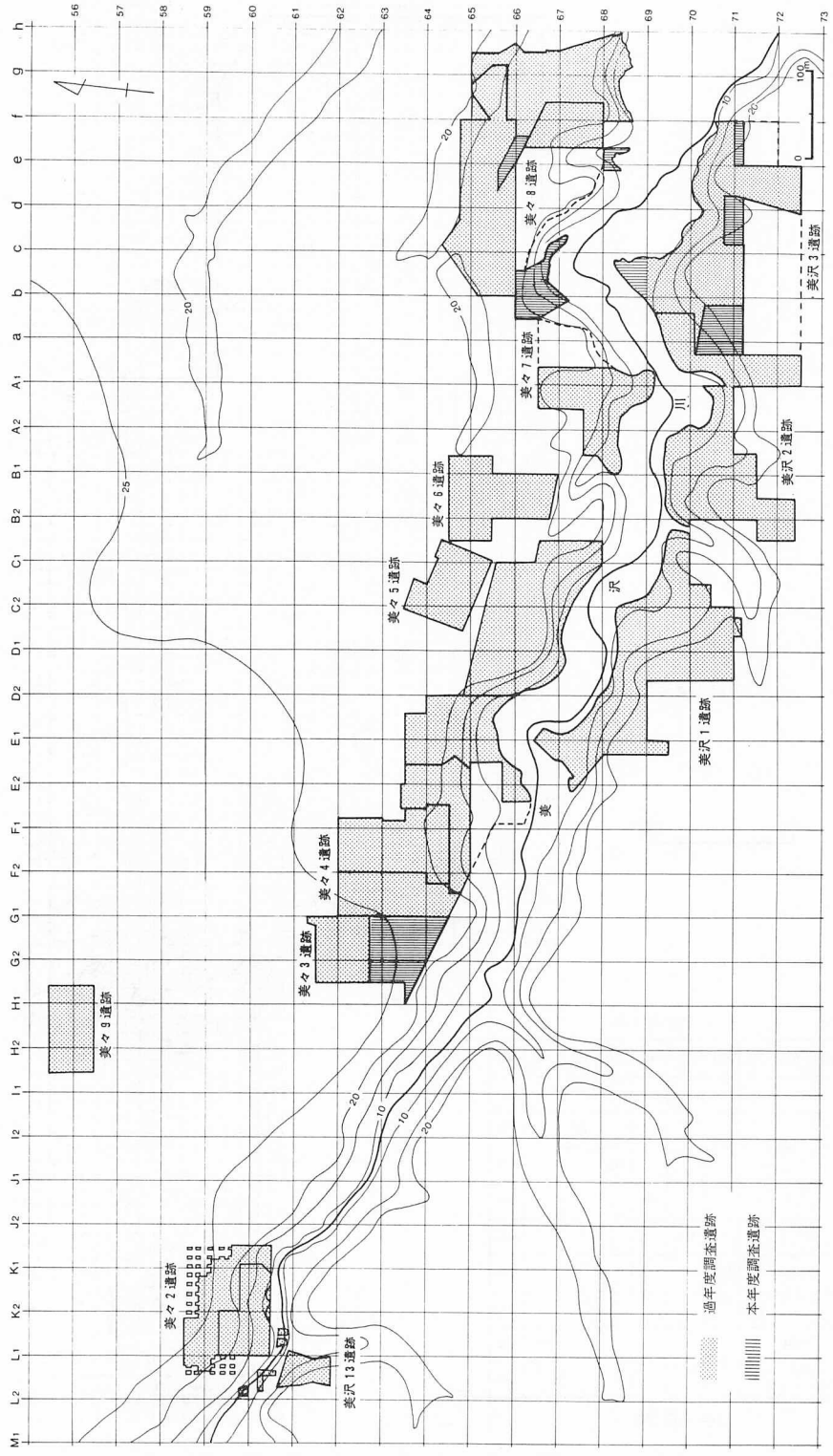
美沢３遺跡では、昨年度に斜面を中心に調査したのに続き、低位段丘と、斜面上部から台地上にかかる位置３か所、合わせて４か所の地区を調査した。上流側からｂ－70、ｃ－68、ｄ－70、ｆ－71の各地区付近となる。ｂ－70区付近では第Ⅱ黒色土層上面で縄文時代晩期の円形プランのピットが13個発見された。さらにEn－ａ層下のローム質土層の調査を実施し、炭化木片とともにフレイクなどが発掘された。ｃ－68区では縄文時代早期の住居跡２、後期の住居跡３、早期の墓壙２に加え、ピット、小ピット、焼土などが発掘され、土器、石器、土、石製品などの遺物が多量に出土した。なお第Ⅲ黒色土層の調査を行ったが、包含層は存在していなかった。ｄ－70区付近ではＴピットが４個発見されている。これは昨年度の調査地区のＴピットに連らなるものである。ｆ－71区は昨年石刃鏃の出土した地区に隣接するので、出土が予想されていたが、認められなかった。なお第Ⅲ黒色土層には包含層が存在していないので、石刃鏃の所属はTa－ｄ層上と判断された。

美々３遺跡の東側に隣接する美々４遺跡では第Ⅰ黒色土層中に包含層が存在していたことから、第Ⅰ黒色土層の調査を実施し、さらに第Ⅱ黒色土層の一部（1500㎡）を調査した。第Ⅰ黒色土層からは焼土と、完形に復元された土器が４個体、道南の亀ケ岡式を含む破片が若干出土した。また黒曜石の石器類、剝片、石核などが出土している。第Ⅱ黒色土層からは縄文時代中期の住居跡と、多量の北筒式土器とそれに伴う黒曜石製の石槍と石斧類などが認められ、土器には道南地方のノダップⅡ式・煉瓦台式・天祐寺式などが少量含まれている。

美々８遺跡では表土、第Ⅰ黒色土、第Ⅱ黒色土の三層の調査を行った。第Ⅱ黒色土層に発見された遺構にはＴピット、焼土、道跡がある。Ｔピットは昭和56年に調査されたものに続くものとみられる。出土遺物には縄文時代早期、中期、晩期のものがある。第Ⅰ黒色土層から出土した遺構・遺物には、縄文晩期末から続縄文時代前期のものが若干認められた他、擦文時代の土器が多量に出土し、中・近世の道跡、住居跡、焼土、多数の杭跡が認められている。焼土にはシカやサケの骨が多量に含まれていた。出土遺物には珠洲系のすり鉢、近世の磁器、北宗銭、古實永銭、刀子、マレック、刀や鍋の破片、鋤先などがある。表土層の遺構には大正時代頃の炭焼窯跡と、その下層から発見された３間×４間の長方形に配列された柱穴列からなる建物跡がある。これは沢の斜面を切り下げて、平坦面を造成した所に建てられたものとみられる。時代を示す遺物は得られていないが、層位的に大正時代以前であり、Ta－ａ層上にあることから18世紀後半から19世紀、幕末から明治時代の時間的幅におさまるものである。弘化三年（1846年）に松浦武四郎が、この場所を描いた図に、沢の中に建てられた比較的大きな建物が



図Ⅰ－3　美沢川流域の遺跡群の位置と発掘区の呼称



図Ⅰ－4　美沢川流域遺跡群の分布

ある。この建物は、「ミミ憩所」とされ、また「ビビ小休所」と記されたものであり、発見された建物跡はこの「ビビ小休所」の遺構とみなされる。この建物は文献の上では1801年に番屋と記録されたのが初見で、1858年には廃されていた記録がある。

5　遺物の記載について

土器については昭和51年以来時期毎の区分を行ってきた。その間若干の変更をみているが、本年度の調査結果と、近年の調査結果を考え合わせ、以下の区分によって表示することとした。石器については、器種別の大分類にとどめている。

(1)　土器

Ⅰ群　縄文時代早期に属するものを本群とする。本群は大きく二つに分類される。

a類　貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。今回の発掘調査では出土していない。

b類　縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群、これらには東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式に相当するものがある。

b－1類：東釧路Ⅲ式に相当するもの。c－68区から出土した。

b－2類：コッタロ式に相当するもの。c－68区から出土した。

b－3類：中茶路式に相当するもの。c－68、d－70･71、f－71区から出土した。

b－4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。c－68、b－70区から主に出土した。

Ⅱ群　縄文時代前期に属するものを本群とする。本群は大きく二つに分類される。

a類　縄文の施された円底、尖底を特色とする土器群。さらに二者に分類される。

a－1類：綱文土器に相当するものと、結束のない羽状縄文の施された円底を特色とする土器を本類とする。c－68区から主に出土した。

a－2類：春日町式、中野式など、縄文の施された尖底を特色とする土器を本類とする。c－68区から主に出土した。

b類　円筒土器下層式、植苗式に相当する土器群。今回の調査では出土していない。

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器を本群とする。さらに二者に分類される。

a類　円筒土器上層式に相当するもの。c－68区から出土した。

b類　天神山式・柏木川式・北筒式等に相当するもの。さらに三者に分類される。

b－1類：天神山式等に相当するもの。b－66、c－68区から出土した。

b－2類：柏木川式等に相当するもの。b－66区から出土した。

b－3類：北筒式（トコロ6類）等に相当するもの。G_1・G_2－62・63区から出土した。

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器を本群とする。さらに三者に分類される。

a類　余市式・入江式に相当するもの。c－68区で主に出土した。

b類　船泊上層式・手稲式・鮭澗式・エリモB式に相当するもの。c－68区から出土した。

c類　堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。c－68区から出土した。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属するものを本群とする。さらに三者に分類される。

a類　大洞B式・上ノ国式に相当するもの。今回の調査では出土していない。

b類　大洞C_1・C_2式に相当するもの。f－66区で主に出土した。

c類　大洞A・A′式に相当するもの。G_1－63・64、G_2－63区から出土した。

Ⅵ群　続縄文時代に属する土器を本群とする。f－68、c－66区から出土した。

Ⅶ群　擦文時代に属する土器を本群とする。e－65、f－65・66区から主に出土した。

(2)　石器

出土した石器には剝片石器に石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー類、異形石器があり、礫石器には石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石錘、砥石、石皿、台石などがある。この他に石核（コア）、剝片、石屑（フレイク、チップ）、擦切痕のある礫、自然礫などがある。使用痕、加工痕のある剝片はRフレイクに一括している。石製品には玉類、ミニチュア石斧などがある。

なお表に示した石材の略号は次のとおりである。

Aga.：メノウ。Aga－Sh.：メノウ質頁岩。And.：安山岩。Che.：チャート。Gni.：片麻岩。Gr－Mud.：緑色泥岩。Gr－Sch.：緑色片岩。Mud.：泥岩。Obs.：黒曜石。Per.：カンラン岩。Pro.：プロピライト。Qua.：珪岩。Qua－Sh.：珪質頁岩。Rhy.：流紋岩。Sa.：砂岩。Sch.：片岩。Ser.：蛇紋岩。Sh.：頁岩。Sl.：粘板岩。Tu.：凝灰岩。

(3)　土製品

土製品には、土器片を利用した円盤、土玉などがある。

(4)　陶磁器

珠洲系陶器と近世磁器がある。

(5)　金属製品

鉄製品に刀、刀子、釣針、角釘、カスガイ、鍋、マレック、火打金、小札、鋤先があり、銅製品に縁飾り、煙管、角釘と天禧通寶、寛永通寶の銭が第Ⅰ黒色土層から出土した。表土層からは炭焼窯跡に伴う遺物や、アメリカ軍関係の遺物が出土した。（金属製品の保存処理は「北埋調報26」に準じて行った。）

(6)　その他

コハク原石、火打石砕片、貝製品（穂摘具？）破片、骨製品破片、シカ・サケ等の獣魚骨がある。動物遺存体の検出にあたっては、現場で取上げたものの他、土壌サンプルを乾燥してフルイ分け（4㎜～0.42㎜）により検出したものがある。一覧表、写真の略号は次のとおりである。R：右。L：左。P：近位部。Dあるいはdis：遠位部。fr：破片。＋：0.01未満。

Ⅱ　美沢３遺跡旧石器包含層の調査

１　調査の概要

本遺跡では、更新世の堆積物である恵庭ａ降下軽石層と支笏軽石流堆積物の間のローム質粘土層を対象に、旧石器時代遺物確認調査を行なった。確認調査の対象面積は当初、６グリッド150㎡（25㎡×６）であったが、遺物が検出されたため、発掘区を拡張し最終的には約295㎡になった。その結果、13点の遺物が検出された。

本年度の調査は、昭和63年度調査区に続く南西側の比較的平坦な台地縁辺部を対象とした。この部分は西側に深い沢が入り込み、東側はなだらかに傾斜して、やや尾根状に高まった地形をなしている。Ⅲ黒層調査終了後、重機により下層の軽石層を除去し、ｂ－70－78・79・88・89、ｂ－71－70・80区の、幅10ｍ、長さ15ｍの範囲を当初の調査区とした。ｂ－70－88区で遺物が出土した時点で周囲を拡張した（図Ⅱ－１）。

層序は下位から以下のとおりである。

14層　淡橙褐色土　支笏軽石流堆積物（Spfl）

13層　暗黄褐色土　径２～３㎝程の支笏軽石が混じる。

12層　暗灰色土　　11層中にレンズ状に薄く堆積する。

11層　黄褐色土　　径0.5～１㎝程の支笏軽石が混じる。炭化物が比較的多くみられる。

10層　赤褐色土　　レンズ状に堆積する。径１～２㎜の軽石、細かいスコリア粒が混じる。下層に炭化物が多い。羊蹄第３軽石層（Yo．Ps－３）に対比されると思われる。

９層　暗黄褐色土　径１～２㎜の火山灰が混じる。７層に似る

８層　灰白色土　　部分的に大きなブロック状に堆積する。鉄分によるかとみられる赤褐色を呈するところがある。

７層　暗黄褐色土　遺物包含層。径１～２㎜の火山灰が混じる。炭化物が比較的多い。

６層　黄褐色土　　遺物包含層。他の層と比べて炭化物が多い。遺物はこの層の中～下部を中心に平面的に検出された。

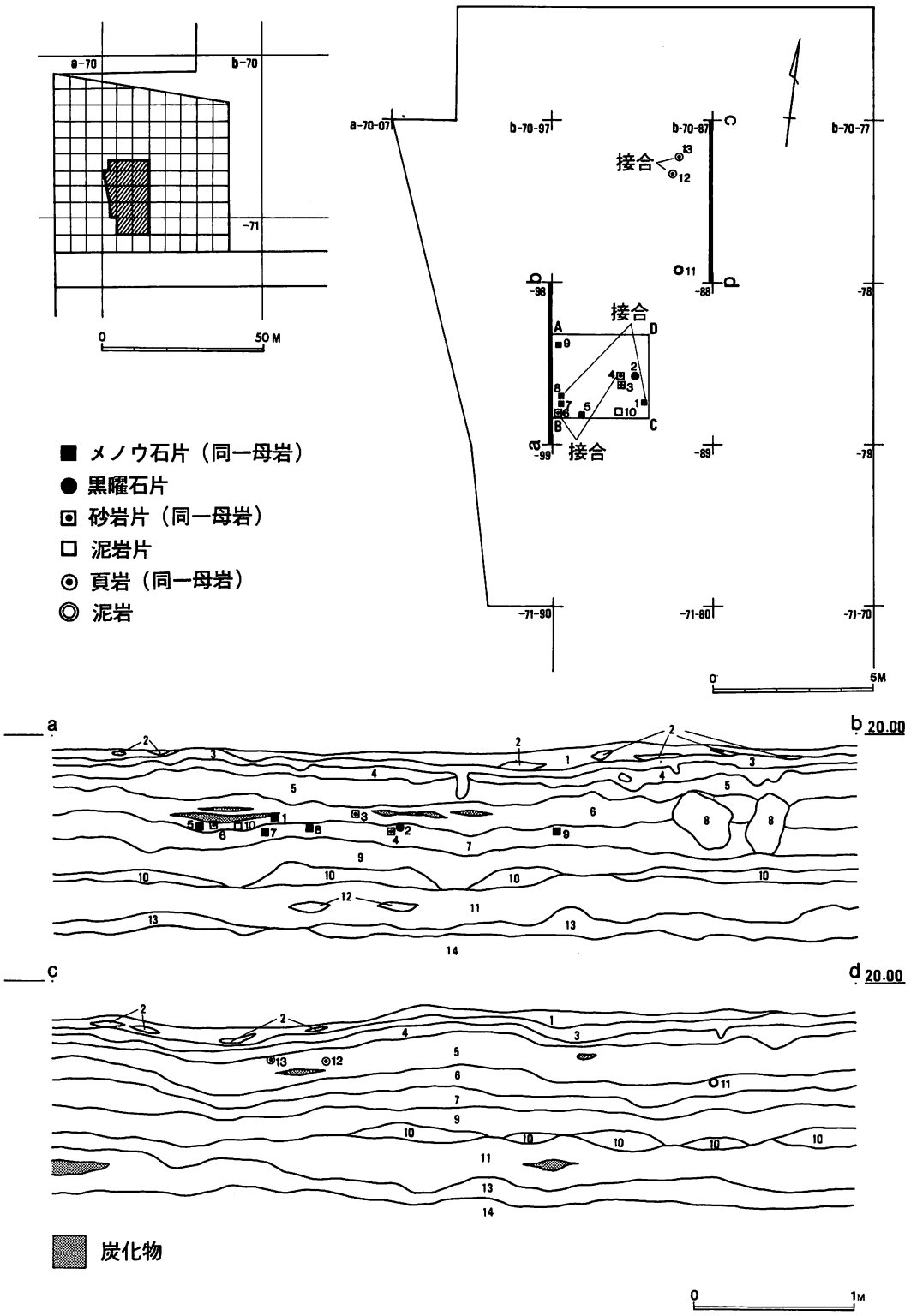
５層　黄褐色土　　遺物包含層。４層よりも黒味を帯びる。炭化物が集中する部分がある。

４層　明黄褐色土　１層に似るが、１層よりも粘性がある。炭化物が少量混じる。

３層　灰白色土　　極微細な炭化物を含む。

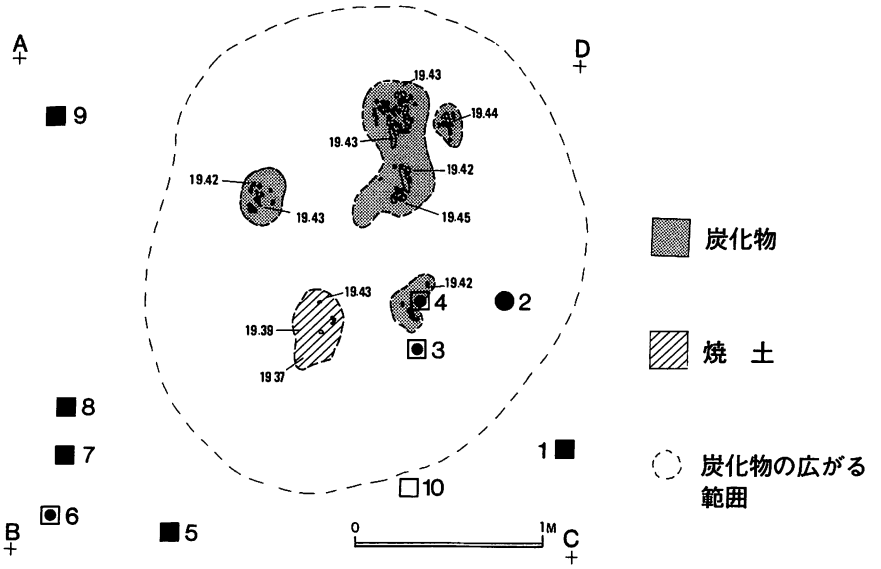
２層　暗灰色火山灰　レンズ状に堆積する。

１層　明黄褐色土　小さな岩片を含む。



図Ⅱ－１　旧石器時代遺物確認調査範囲と土層

◎11



図Ⅱ－2　炭化物・焼土の広がりと遺物の出土状況

2　遺物の出土状態

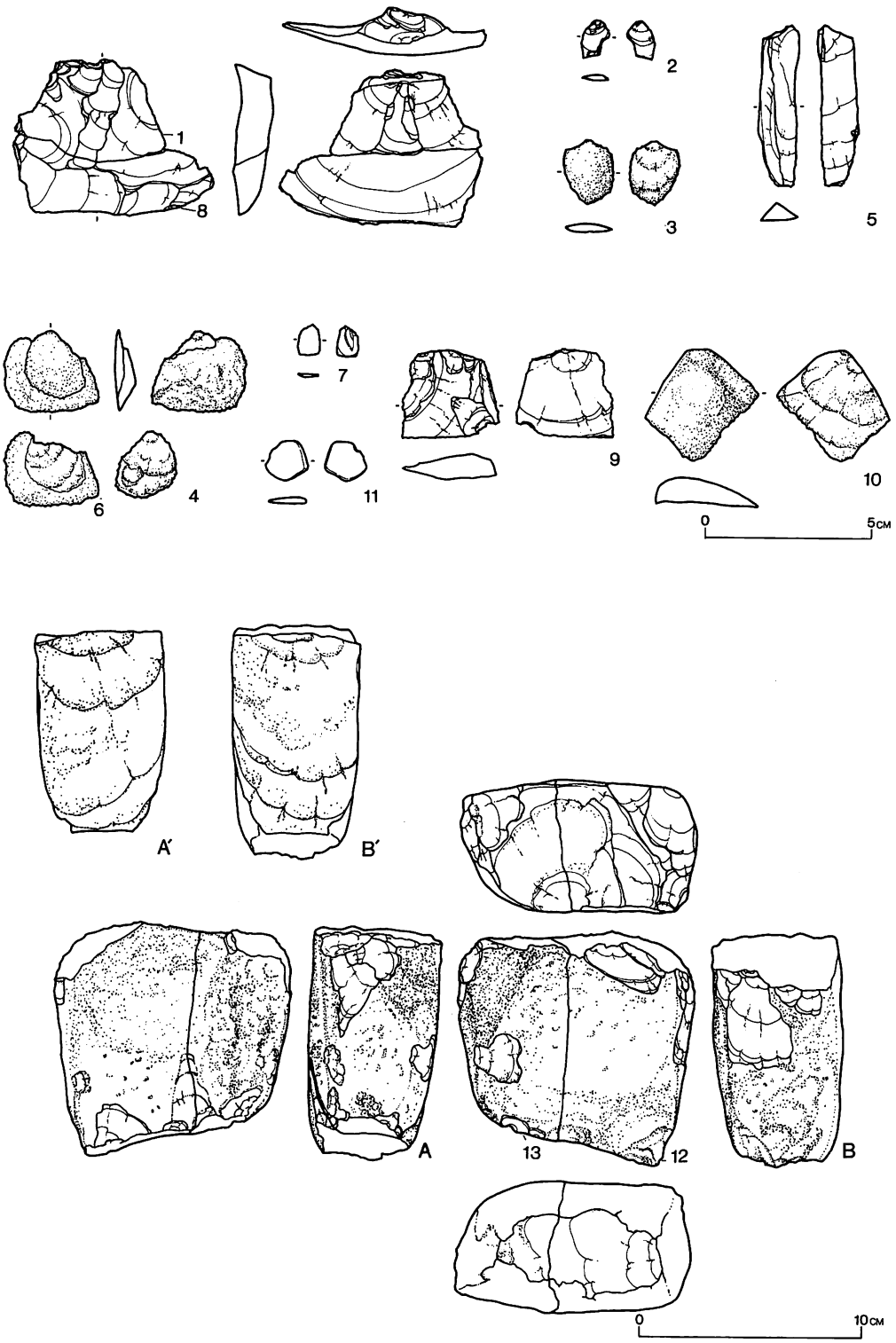
発見された遺物は、石核2点（接合資料）、フレイク6点、チップ1点、礫片4点である。これらの遺物のうち、石核を除く11点（No. 1～11）は、b－70－87・88区の約5m四方の範囲から出土した。出土層位は6層下部から7層上部である。石核（No.12・13）はこれら11点の遺物が集中している範囲から4m程離れた地点の5層上部から出土した。

11点の遺物は、炭化材と焼土が1～1.5m四方の範囲に平面的に広がるその外側から出土した（図Ⅱ－2）。炭化材の残存状態は良好で、焼土が広がっていることを考え合せると、住居跡である可能性も考えられる。

接合資料である石核2点は出土層位が5層上部から中部であることから判断し、先に述べた遺物群とは別なものととらえたほうが良いであろう。

3　出土遺物

1、5、7、8、9はメノウのフレイク、チップである。1と8は接合資料である。5には



図Ⅱ－３　ローム質粘土層出土の遺物

原石面が残る。これらの資料は同一母岩である可能性が高い。2は黒曜石のフレイク。3・4・6は砂岩の破片。4と6は接合資料である。たたき石の破片かもしれない。10・11は泥岩の破片。11は磨滅している。

12・13は約20㎝程離れた位置から出土した頁岩の石核。接合資料である。火熱を受けておりその際に石の摂理面から割れたものと思われる。

4　まとめ

美沢3遺跡から発見された13点の剝片、石核はかつて調査された美沢1遺跡（『美沢川流域の遺跡群　Ⅲ』昭和53年度　北海道教育委員会）、美沢10遺跡（『ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ』　昭和61年度　北海道埋蔵文化財センター）で発見された石器群とその石材がメノウ、黒曜石、砂岩であること、定形的な石器がわからない事、散点的な出土状況など共通する点がある。

美沢3遺跡はこれらの遺跡同様、台地の縁辺部に位置する小規模な遺跡であるといえよう。

（遠藤香澄）

表Ⅱ－1　ローム質粘土層出土の石器等一覧

図番号	名　称	発掘区	大きさ（mm）	重さ(g)	材　質	写真図版番号
1	フレイク	b-70-88	28.4×44.8× 8.9	11.7	Aga.	図Ⅱ－3－1
2	フレイク	b-70-88	11.9× 7.7× 1.8	0.2	Obs.	〃
3	礫　片	b-70-88	18.4×14.7× 3.9	1.1	Sa.	〃
4	礫　片	b-70-88	19.5×19.2× 3.4	1.1	Sa.	〃
5	フレイク	b-70-88	47.5×10.8× 5.2	3.1	Aga.	〃
6	礫　片	b-70-88	22.1×27.0× 4.5	2.1	Sa.	〃
7	チップ	b-70-88	9.4× 6.7× 0.7	＋	Aga.	〃
8	フレイク	b-70-88	23.5×61.2× 8.5	11.3	Aga.	〃
9	フレイク	b-70-88	26.4×28.8× 7.7	6.5	Aga.	〃
10	礫　片	b-70-88	32.7×34.2× 7.3	6.4	Mud.	〃
11	礫　片	b-70-87	11.4×12.8× 2.3	0.4	Mud.	〃
12	石　核	b-70-87	67.0×40.5×38.0	101.8	Che.	図Ⅱ－3－2
13	石　核	b-70-87	11.9× 7.7× 1.8	99.4	Che.	〃

Ⅲ　美沢３遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

１　調査の概要

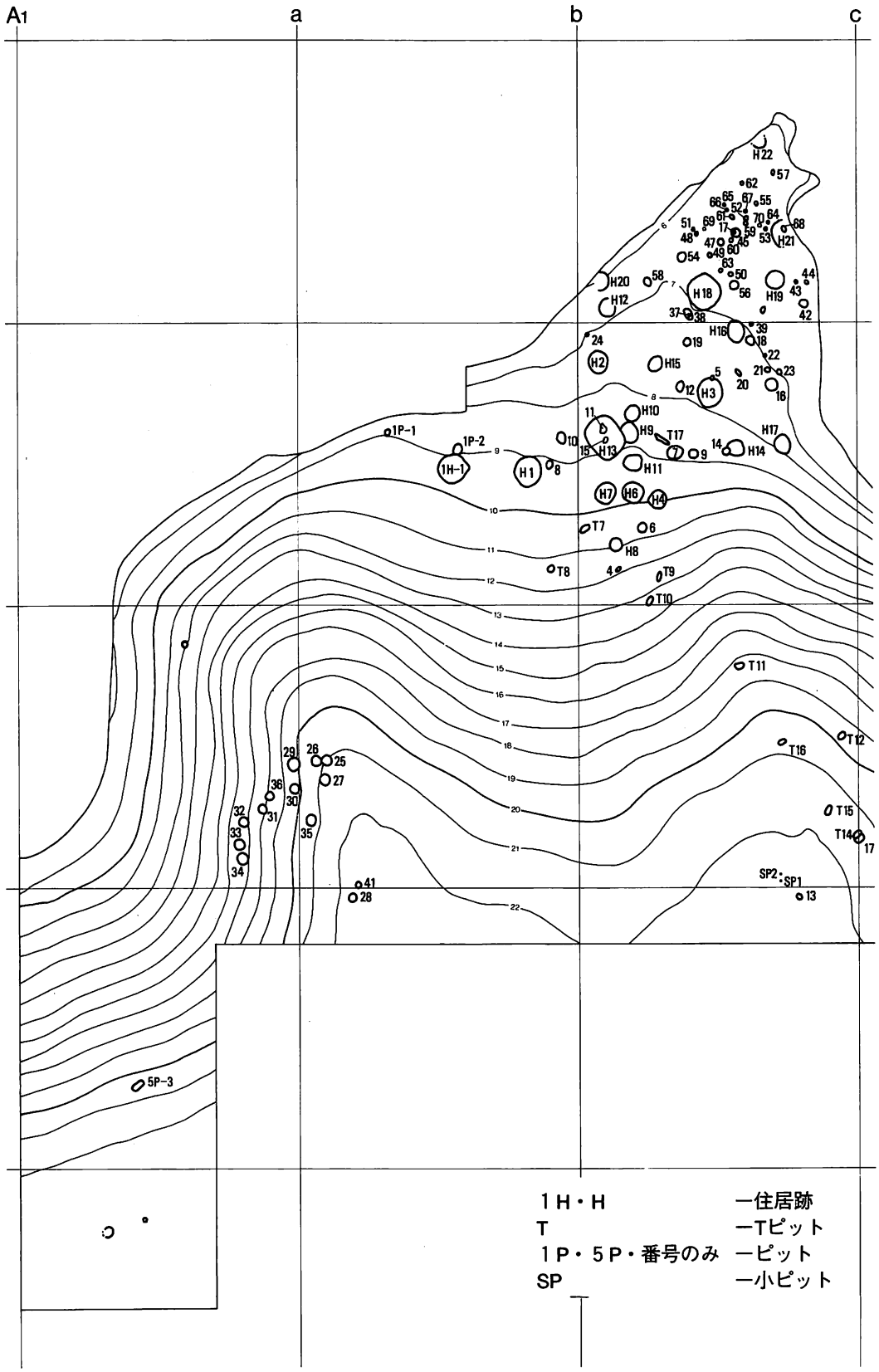
調査地区は昨年度の調査区の周囲に隣接するｂ－70区周辺、ｄ－70区周辺、ｆ－71区周辺、ｃ－68区の四か所である。

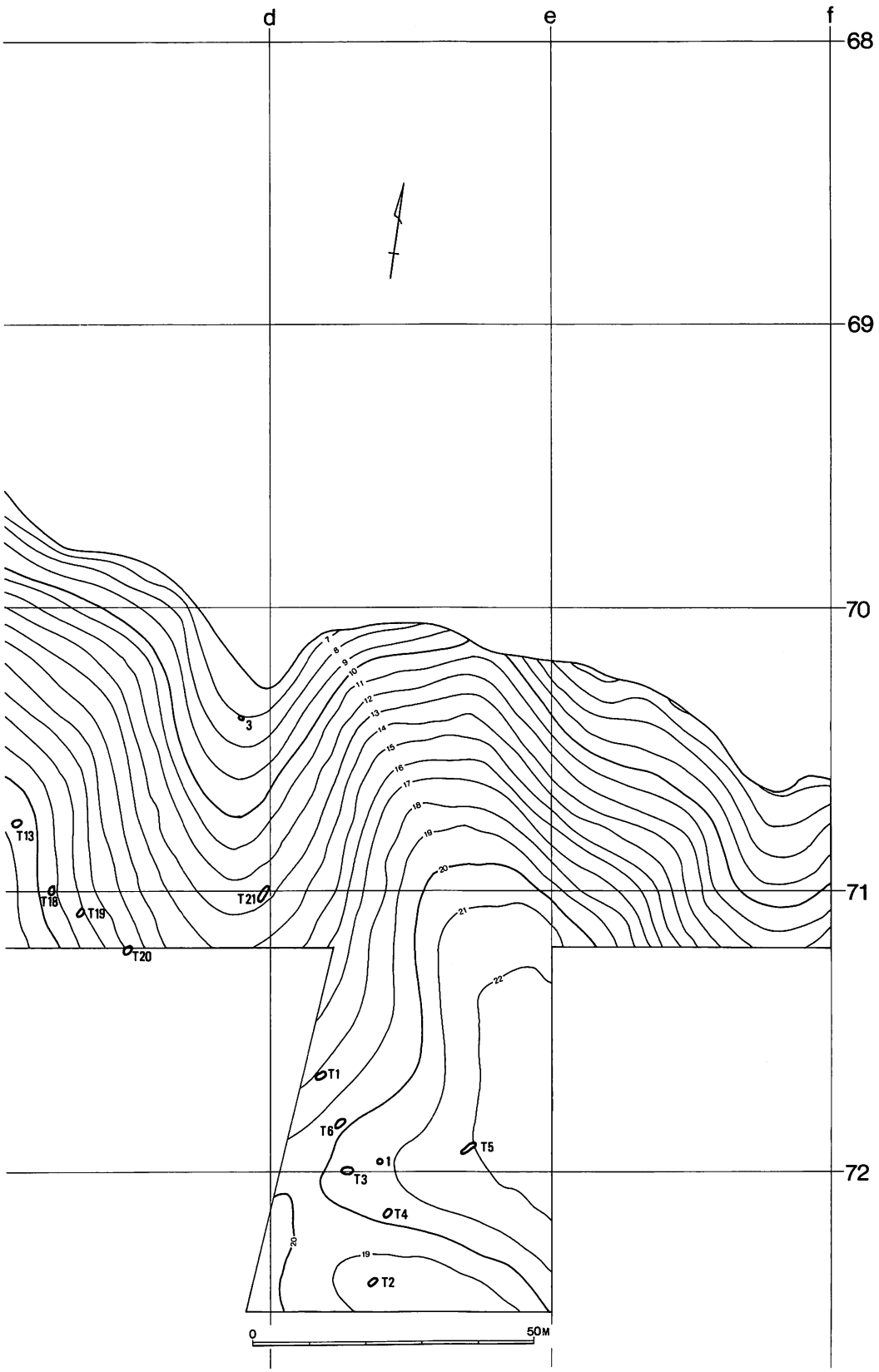
調査はｂ－70区の台地上から開始した。ｂ－70区周辺は標高約22ｍ～17ｍの台地上から斜面にかかる位置でⅡ黒層が薄く遺物の量はあまり多くない。早期の土器が主体で後期のⅣ群ｂ類、ｃ類土器がわずかにある。早期のⅠ群ｂ－１類、ｂ－４類土器は台地上からややまとまった状態で出土した。石器は石鏃が多い。晩期の円形プランの土壙が13個、西側の急斜面から検出された。これらの土壙はＴａ－ｃ火山灰を除去した段階から凹んでおり、掘り上げ土がⅡ黒層上面にのっており斜面の下側に広がっていた。

ｄ－70区周辺は標高20ｍ～11ｍの幅の広い沢地形を東西に横断する位置に発掘区が設定されていて、西側の斜面から早期のⅠ群ｂ－３類土器が比較的まとまった状態で出土した。またⅠ群ｂ－４類土器が散点的に出土した。沢底からは前期のⅡ群ａ－２類土器（１個体分）が出土し、その周辺からは石錘の破片や径10㎝の楕円形の扁平礫がまとまって出土している。また西側の斜面のⅡ黒層上部からは平面形が楕円形で底面に杭穴が２個あるＴピットが３個、西側の低い位置からは細長い溝状のＴピットが１個検出された。これらのＴピットは昨年度調査したものと同一の列をなすと思われる。

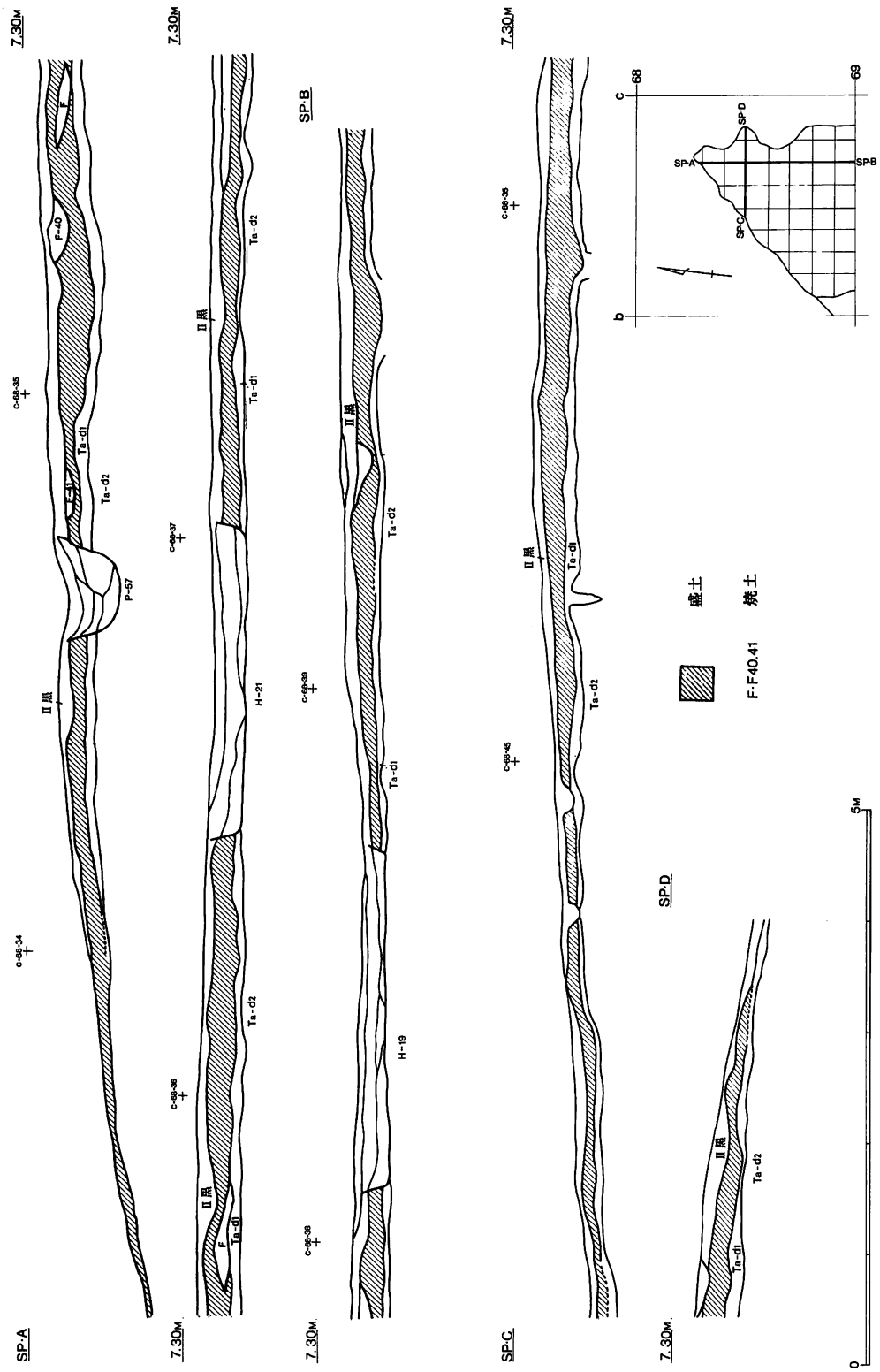
ｆ－71区周辺は台地上から沢底にかけて細長く調査区が設定されていて、遺構は検出されなかった。遺物も稀薄で出土したのはⅠ群ｂ－３類土器のみで、西側の急斜面上から沢底にかけて数個体分の破片がまとまって出土した。また石鏃は有茎のものがある。

ｃ－68区は昨年度調査した緩斜面に続く平坦な低位段丘面である。昨年度Ⅰ黒層を調査した際、ｃ－68－58区周辺でＴａ－ｃ火山灰上面が大きく凹んでおり後期頃の遺構の存在が予想された。また北側部分にやや高まりがあり、Ⅱ黒層が通常よりも薄い状態であった。Ⅱ黒上面から確認できる遺構の調査と並行して、高まりを縦横断するようにグリッドラインに沿って10か所トレンチを掘り土層を観察したところ、この高まりはⅡ黒層下部に形成されたもので人為的に土盛りがなされたものであることがわかった。盛土はＴａ－d_1・d_2火山灰を主とする暗黄褐色土で、盛土中からは縄文時代早期のⅠ群ｂ－４類土器が多量に出土した（約27,000点）。このことから盛土がⅠ群ｂ－４類土器の時期に形成されたことがわかった。セクション図（図Ⅲ－２）でわかるように盛土は50ラインより西側では顕著ではなく、段丘面の北側ｃ－68－35区周辺で最も高まりがある。盛土は縄文時代早期Ⅰ群ｂ－１類土器の時期の住居跡群の内側に位置していると考えられる。ｃ－68区では縄文時代早期から後期の各時期の土器、石器、土・石製品、自然遺物が出土している。早期のⅠ群ｂ－４類土器が最も多い。


A1
a
b
c
1H・H　一住居跡
T　一Tピット
1P・5P・番号のみ　一ピット
SP　一小ピット



図Ⅲ－1　Ⅱ黒層全体遺構位置図（等高線は Ta － d_2 層上面）

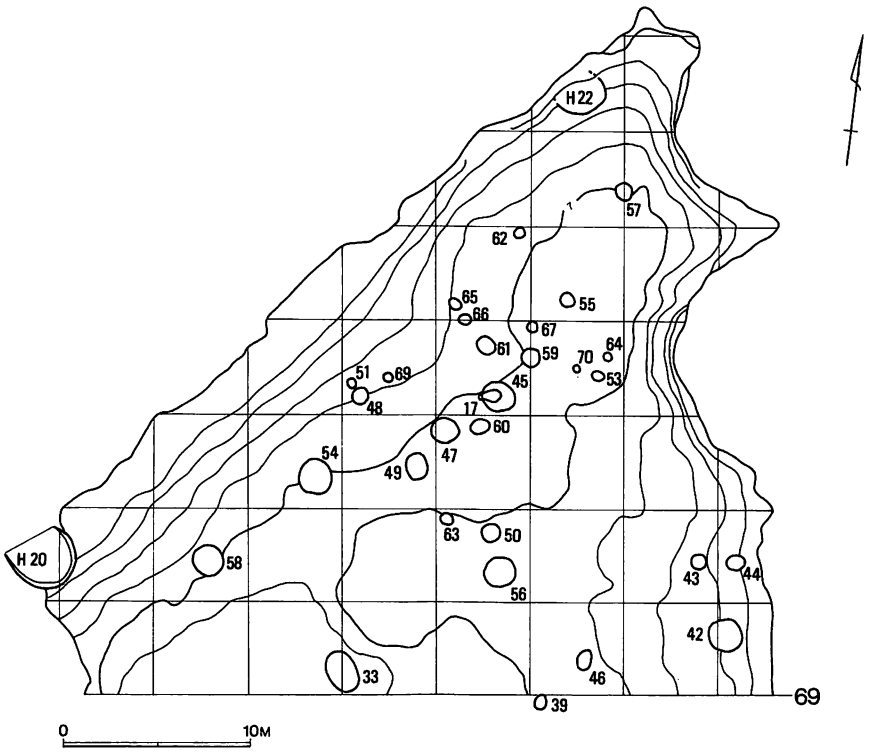


図Ⅲ－２　ｃ－68区の縄文時代早期の盛土のセクション図

Ⅱ黒層上面からはⅣ群ｂ類土器がややまとまった状態で出土した。Ⅳ群ａ類土器は東側のその時期の竪穴住居跡（Ｈ－19）の周辺から散点的に出土している。Ⅱ群ａ－１・２類土器はⅡ黒層をやや掘り進んだ段階で、その時期の遺構の覆土（Ｐ－38・49・55・57）とその周辺から検出された。Ⅲ群土器は散点的であるが、Ⅲ群ｂ－１類土器は北端の水際でややまとまって出土した。Ⅰ群ｂ－３類土器は盛土の下部に認められた。Ⅰ群ｂ－１・２類土器は西側の水際の部分に比較的まとまっていた。水面下からも遺物が出土しており、土砂とともに掘り上げ水洗を行いながら調査を行った。包含層は水面下まで広がっていそうである。

遺構は住居跡５、土壙基２、土壙33、焼土跡37が発見された。縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期の住居跡（Ｈ－20・22）はいずれも低位段丘面の縁辺に位置し、川の侵食により半分以上が削られている。後期の住居跡（Ｈ－18・19・21）は平坦面に位置する。いずれも浅い掘り込みのものである。土壙墓（Ｐ－56・61）は盛土の下部から発見された。Ｐ－56の壙底からはベンガラが検出されている。土壙には早期、前期、後期のものがある。早期のⅠ群ｂ－４類土器のものは盛土の周辺に多い。焼土はほとんどが盛土を調査中に検出されたもので、Ⅰ群ｂ－４類土器の時期のものであると思われる。　（遠藤香澄）

2　縄文時代早期の遺構



図Ⅲ－３　縄文時代早・前期の遺構位置図

早期の遺構にはⅠ群b－3類土器の時期のものと、Ⅰ群b－4類土器の時期のものがある。いずれもc－68区の低位段丘面から検出された。

Ⅰ群b－3類土器の時期の遺構には、墓壙と考えられるP－56・61、性格不明のP－62・65・66・67がある。墓壙はいずれもⅠ群b－4類土器の時期に形成された盛土下から検出された。P－56の壙底にはベンガラもみとめられた。性格不明の土壙は小形で平面形が円形を呈するものと、浅い皿状（P－67）を呈するものであった。

Ⅰ群b－4類土器の時期の遺構には竪穴住居跡(2)、性格不明の土壙（18)、焼土（33）がある。住居跡は低位段丘面の縁辺から検出されたもので、川の侵食により削られており確認できたのは遺構の一部である。遺物は少なく、柱穴はH－20の壁際から1か所検出されたのみである。性格不明の土壙は盛土中（P－42～47・49・53・54・59・60・63・64・70）と盛土の周辺（P－37・48・51・58）から検出された。盛土調査中に検出された土壙は、覆土中からⅠ群b－4類土器が多数出土している。

焼土は盛土中から検出されたものと、その周辺のTa－d_1上面から検出されたものとがある。

早期の遺構の分布は、Ta－d_1層上面の等高線図に示してある（図Ⅲ－3）。

(1)　Ⅰ群b－3類土器の時期の遺構

(a)　土壙墓

P－56　（図Ⅲ－4、図版Ⅲ－13－1）

位　置　c－68－48　　**規　模**　1.88×1.73／1.35×0.83／0.43

土　層　1　明黄褐色（EnL≫d_2≫d_1　硬い）

2　橙褐色（d_2≫d_1　硬い）　　3　暗黄褐色（d_1＞d_2）

4　橙褐色（d_2＞d_1　2よりもd_2が少ない）

5　黄褐色（d_1＋d_2）　　6　橙褐色（d_1＋d_2　5よりもd_2が多い）

7　暗橙褐色（d_2≫d_1）　　8　暗灰褐色（Ⅲ黒＋d_2　硬い）

9　暗橙褐色（d_1＋d_2＋Ⅲ黒　ボロボロとしていて崩れやすい）

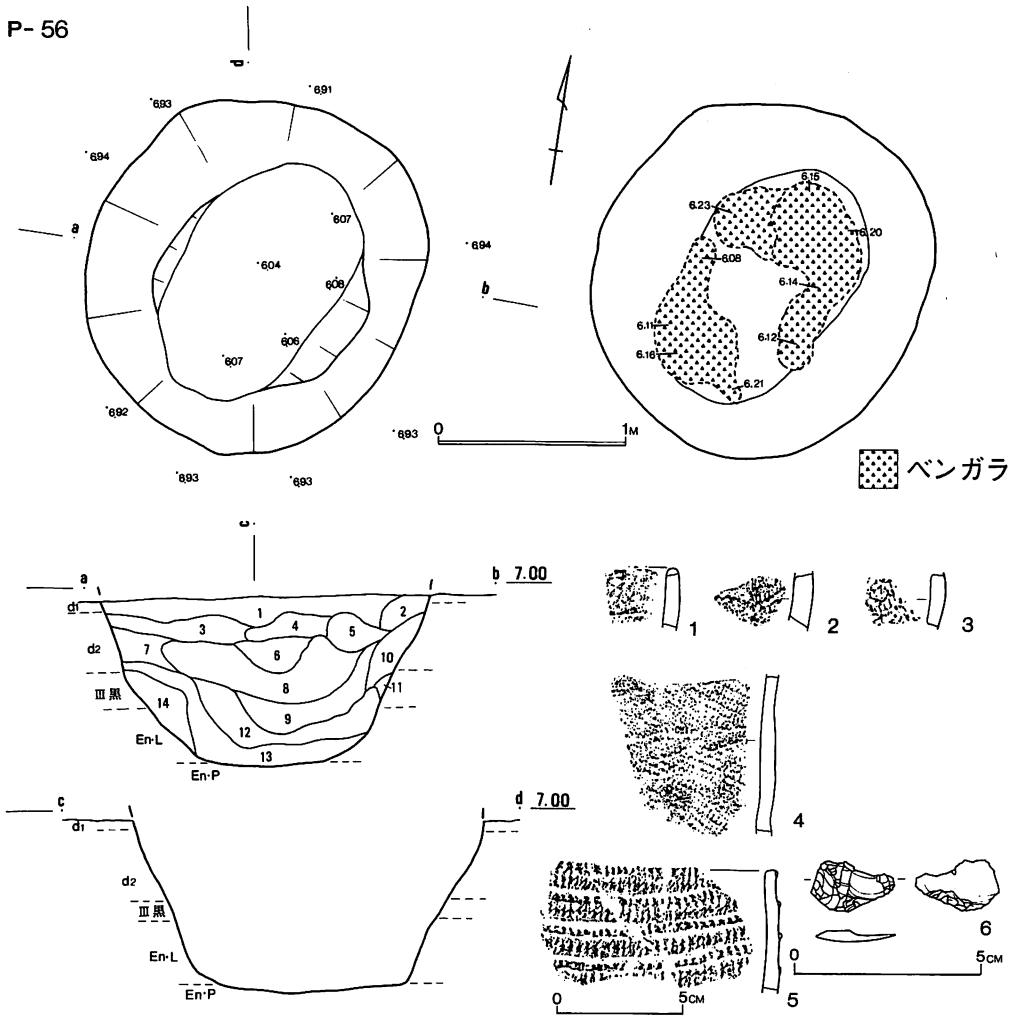
10　黄褐色（d_1＋d_2）　　11　灰褐色（Ⅲ黒）

12　明黄褐色（EnL≫d_2＞d_1）

13　黄褐色（EnL　軟らかい　この層中に淡い赤橙色のベンガラと思われる土が堆積している）

14　黄褐色（EnL≫d_2　13層と同様にベンガラと思われる土が壁際に堆積している）

特　徴　縄文時代早期Ⅰ群b－4類（東釧路Ⅳ式）土器の時期に形成された盛土の最下部を調査中に、En－aロームが混じる黄褐色土の円形の落ち込みが確認できた。掘り込み面は盛土の下位、Ⅱ黒層下面と思われる。確認面からⅠ群b－3類土器（図Ⅲ－4－5）が検出された。半截して調査したところ、覆土の堆積状態が自然の堆積とは異なり、人為的に埋め戻された様相を呈することがわかった。当初は覆土14層、10層が硬く、ひとまわり小さな土壙と考えていたが調査を進めていくうちに、壁際の土は遺構の覆土であることが判った。平面形は不



図Ⅲ－4　P－56と出土の遺物

整な円形。底面はEn－a軽石層中に作られており、やや凹凸がある。壁は壙口部にむかって広がっている。北西側と南東側では底面からⅢ黒層上面にかけては段状になるところがある。底面から10cm程上位、覆土の13層中と壁際の14層を調査中、淡い赤褐色土が壁から底面にかけて堆積していることが判った（図の網の部分）。この土は軟らかくその下位が空洞になっているような状態であった。淡い赤褐色土はベンガラと思われる。人骨は検出されなかった。遺物は確認面と覆土1層から検出された。

覆土の堆積が人為的な埋め戻しの様相を呈していること、底面から壁際にかけて、ベンガラと考えられる土が検出されたことから判断すると、墓壙であると考えられる。

遺　物　確認面からⅠ群b－3類(5)土器、覆土1層からⅠ群b－2（1～4）類、b－3類土器、加工痕フレイク(6)、礫片が出土した。1と4は同一個体の破片。薄みで口唇上は指頭により刻み目がつけられている。口縁部には縄端の圧痕文が施されている。体部にはRL原体

による斜行縄文が施されている。5は確認面から検出された。口唇の断面形は角形で器面には細い貼付帯を横環させている。貼付帯間と貼付帯上には2段LRの原体による短縄文が施されている。6は黒曜石製である。

時　期　掘り込み面がⅡ黒下部であること、遺構が検出された面からⅠ群b－3類土器が出土したことから、縄文時代早期Ⅰ群b－3類土器の時期と思われる。

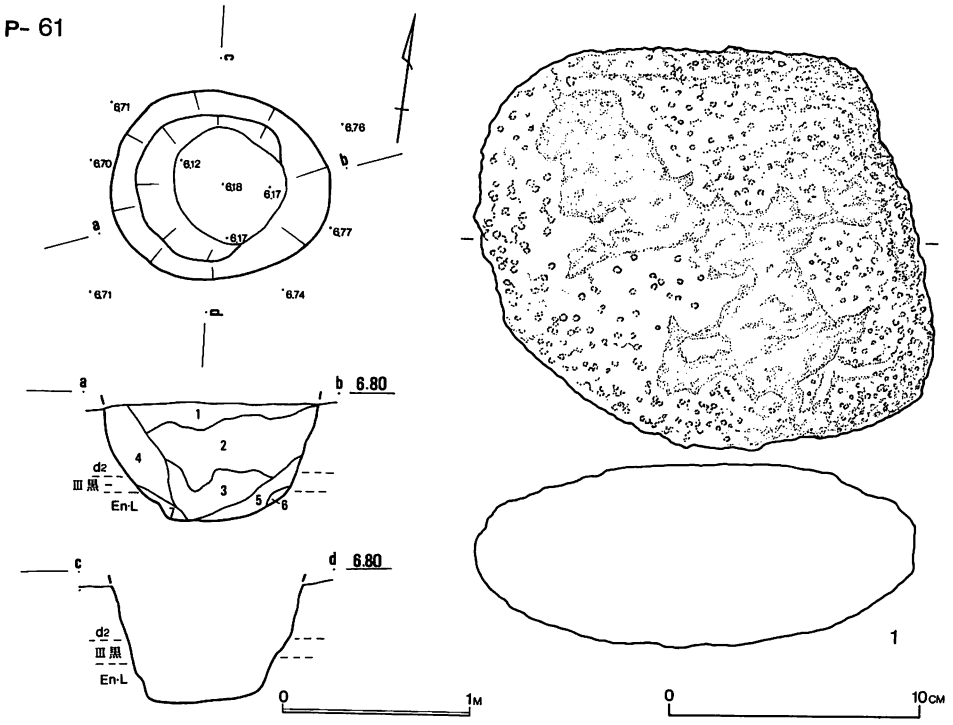
P－61　（図Ⅲ－5、図版Ⅲ－13－2）

位　置　c－68－46　　**規　模**　1.17×1.00／0.58×0.59／0.62

土　層　1　黄褐色（$d_1 \gg d_2 > EnL$）　2　橙褐色（d_2　硬い）
3　暗橙褐色（$d_2 \gg d_1$　軟らかい）4　灰橙褐色土（d_2＋Ⅲ黒）
5　暗黄褐色（d_2＋EnL＋Ⅲ黒）6　黄褐色（EnL）
7　灰黄褐色（EnL＋Ⅲ黒）

特　徴　縄文時代早期Ⅰ群b－4類（東釧路Ⅳ式）土器の時期に形成された盛土の下部を調査中に台石が検出され、台石を取り上げると黄褐色土の小さな落ち込みが検出された。覆土の堆積状態は自然の堆積とは異なる。P－56同様な人為的な埋め戻しの状態であると思われる。平面形は不整な円形。底面はEn－aローム層を20cm程掘り込んでおり凹凸がある。壁は壙口部にむかって広がり、西側部分では段状になるところがある。覆土の堆積状態がP－56と似ていることから同様に墓である可能性が高い。

遺　物　遺構の確認面から台石（1）、覆土上部からは黒曜石のフレイク・チップが出土した。



図Ⅲ－5　P－61と出土の遺物

1は表裏面ともに磨滅が著しいため石材は不明である。長い間水にさらされていた様な状態である。

時　期　遺構の検出面が東釧路Ⅳ式土器の包含層である盛土の下部であること、規模は小さいがP－56と似ていることから判断して、縄文時代早期Ⅰ群b－3類土器の時期と思われる。

(b)　その他のピット

P－62　（図Ⅲ－6）

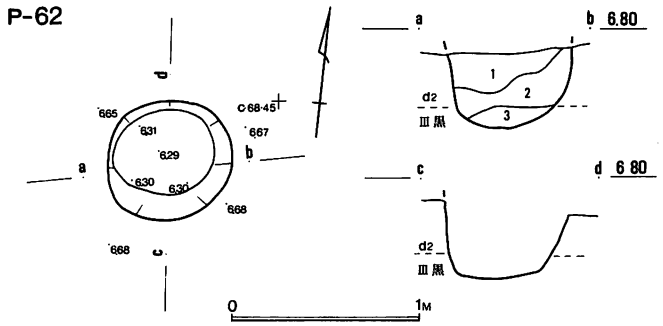
位　置　c－68－45　　**規　模**　0.66×0.62／0.54×0.46／0.42

土　層　1　黄褐色（$d_1 \gg d_2$　硬い）　2　橙褐色（$d_2 \gg d_1$）

3　灰黄褐色（$d_1 + d_2 \gg$Ⅲ黒）

特　徴　Ta－d_2層上面を精査中に黄褐色土の小さな落ち込みが確認できた。平面形は円形。底面はⅢ黒層を10cm程掘り込んでおり、中央部分が凹んでいる。壁の立ち上がりは全周でほぼ垂直である。覆土、遺構の形状はP－65、P－66に似ている。遺物は出土していない。

時　期　掘り込み面が縄文時代早期の東釧路Ⅳ式期に形成された盛土よりも下位であると考えられることから判断して、Ⅰ群b－3類（中茶路式）期か、それ以前であると思われる。



図Ⅲ－6　P－62

P－65　（図Ⅲ－7、図版Ⅲ－13－3）

位　置　c－68－45　　**規　模**　0.70×0.70／0.49×0.43／0.36

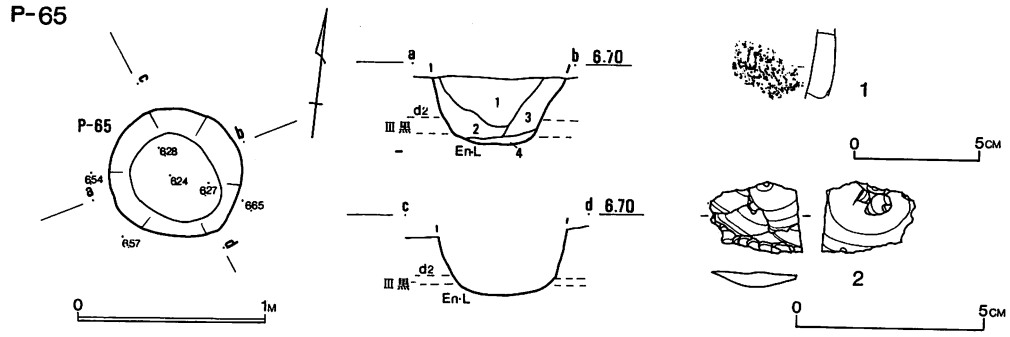
土　層　1　灰褐色（$d_1 \gg d_2$　非常に硬い）2　暗黄褐色（$d_1 + d_2$）

3　暗黄褐色（$d_1 > d_2$）　4　黄褐色（EnL＋d_2）

特　徴　Ta－d_2上面を精査中に暗黄褐色土の落ち込みが確認できた。隣接するP－66もほぼ同じレベルで確認できた。平面形は円形で底面はEn－aローム層を5cm程掘り込んでおり、やや凹凸がある。壁は壙口部にむかってやや開き気味である。覆土は非常に硬い。覆土中から炭化したクルミの堅果が出土した。

遺　物　覆土からⅠ群b－1類土器(1)、黒曜石の加工痕のあるフレイク(2)、頁岩のフレイク、チップが出土した。1には縄文が施されている。

時　期　掘り込み面が東釧路式土器の時期に形成された盛土よりも下位であると考えられることから、Ⅰ群b－3類土器の時期かそれ以前であると思われる。隣接するP－66もほぼ同時期であろう。



図Ⅲ－７　Ｐ－65と出土の遺物

Ｐ－66　（図Ⅲ－８、図版Ⅲ－13－３）

位　置　ｃ－68－45・46　　**規　模**　0.70／0.62／0.54×0.49／0.36

土　層　1　灰褐色（$d_1 \gg d_2$　硬い）　2　暗橙褐色（$d_2 \gg d_1$）

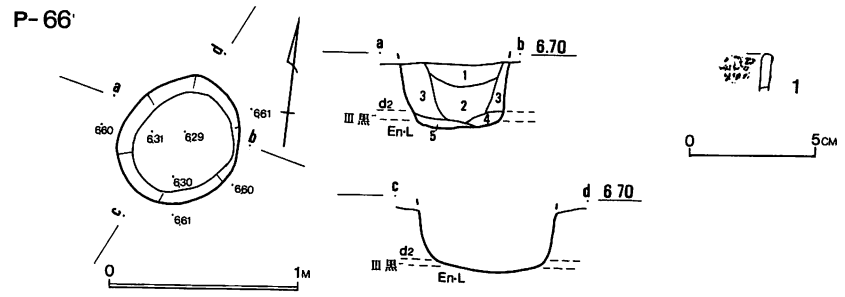
3　暗黄褐色（$d_1 + d_2$）　4　暗橙褐色（d_2＋Ⅲ黒）

5　灰褐色（Ⅲ黒＞d_2）

特　徴　Ta－d_2層上面を精査中にＰ－65とほぼ同じレベルで確認できた。平面形は円形。底面はEn－ａローム層をわずかに掘り込んでおり、平坦である。壁は全周でほぼ急角度で立ち上がる。覆土は硬い。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－３類土器(1)と頁岩のフレイクが出土した。１には細い貼付帯と短縄文がつけられている。

時　期　Ｐ－65と同様に盛土より下位が掘り込み面と考えられることから、Ⅰ群ｂ－３類土器の時期かそれ以前と思われる。



図Ⅲ－８　Ｐ－66と出土の遺物

Ｐ－67　（図Ⅲ－９、図版Ⅲ－13－４・５）

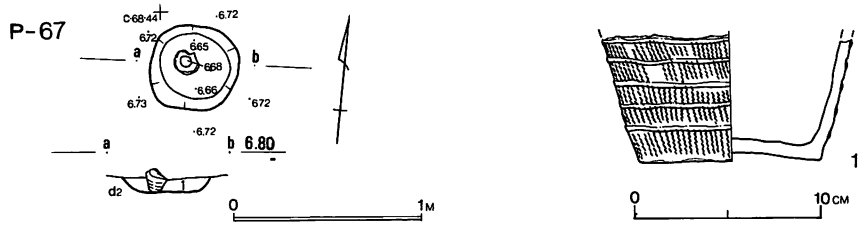
位　置　ｃ－68－36・46　　**規　模**　0.51×0.48／0.34×0.37／0.09

土　層　1　暗黄褐色土（$d_1 + d_2$）

特　徴　縄文時代早期東釧路Ⅳ式土器の時期に形成された盛土の下部を調査中にⅠ群ｂ－３類土器が浅い凹みから検出された。平面形は不整の円形で、断面形は浅い皿状で土器はこの凹みに置かれているような状態であった。覆土には炭化物が混っていた。

遺　物　Ⅰ群ｂ－３類土器(1)と頁岩のフレイク、黒曜石のフレイクが出土した。１は底面から７㎝位の輪積の位置で割れている。底面はあげ底気味、器面には細い貼付帯を積環させてその間に短縄文を施している。

時　期　掘り込み面が盛土よりも下位であること、出土した遺物から判断して、縄文時代早期Ⅰ群ｂ－３類土器の時期と考えられる。



図Ⅲ－９　Ｐ－67と出土の遺物

(2)　Ⅰ群ｂ－４類土器の時期の遺構

(a)　住居跡

H－20　（図Ⅲ－10・11、図版Ⅲ－４・５）

位　置　ｃ－68・88・98　　**規　模**　(2.64)×3.37／(2.42)×3.16／0.65

土　層　1　茶褐色（Ⅲ黒＋d_1≫d_2　軟らかい）

2　黄褐色（d_1＋d_2　硬い）　3　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2）

4　黄褐色（d_2≫d_1）　5　黄褐色（d_1≫d_2）

6　暗黄褐色（d_2≫Ⅱ黒＋d_1）　7　赤褐色（d_2＞d_1）

8　暗褐色（d_2＞d_1）　9　橙褐色（d_2≫Ⅱ黒　硬い）

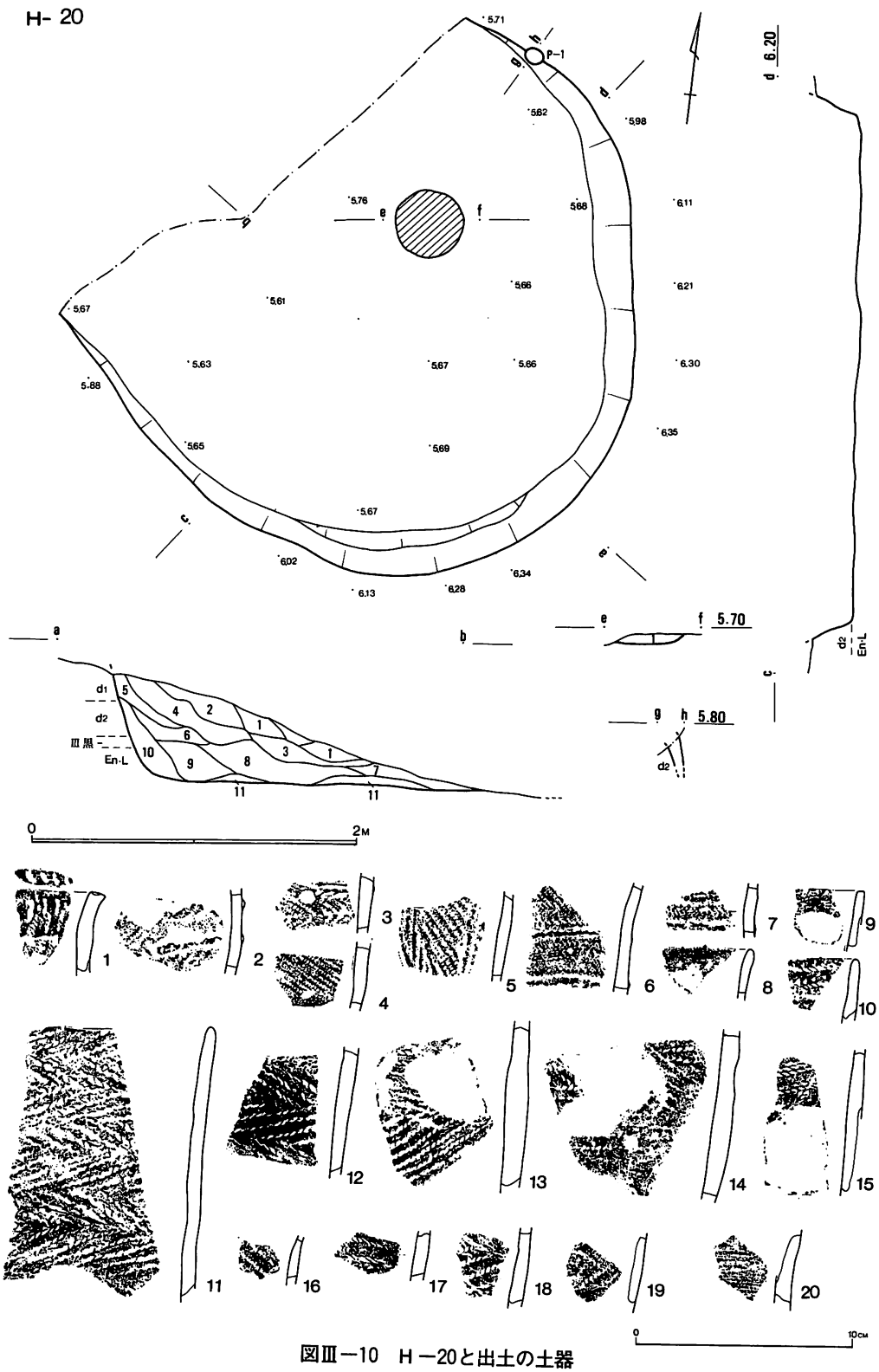
10　黄褐色（d_2≫EnL　硬い）　11　黄褐色（Ⅱ黒＋d_2≫EnL）

特　徴　ｃ－68区の西端、標高約6.30～5.80ｍの低位段丘面の水際に位置する。美沢川による侵食が著しい部分で、包含層は削られて、緩斜面になっている。

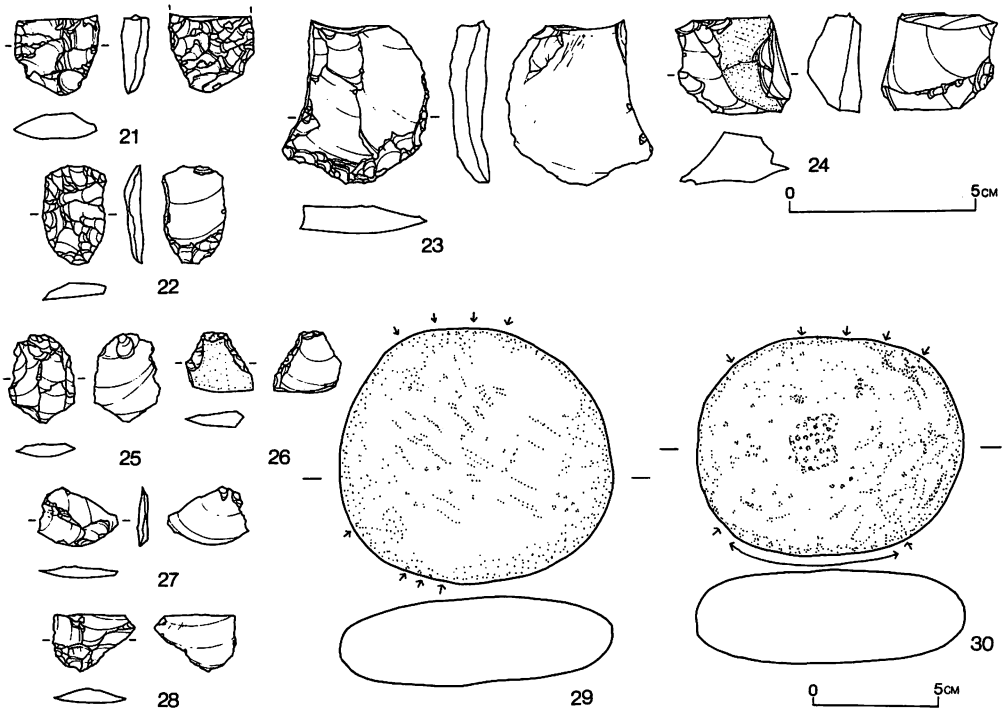
Ta－d_2層上面を精査中に茶褐色土の小さな落ち込みとして検出された。土壙の存在を予想して半截したところ、竪穴住居跡であることがわかった。遺構の北側部分は、川の侵食により削られているため確認できなかった。冠水が著しく、常時ポンプで排水しなければ調査が困難な状態であった。

平面形は円形、あるいは楕円形かと思われる。床面はEn－ａローム層を10㎝程掘り込で作られている。壁は確認できた範囲ではほぼ垂直に立ち上がる。遺構の中央部と推定できる位置からやや東側寄りの床面から、炭化物の混じる土が検出された（図の網の部分）。常に水がつく状態であるために、この炭化物混じりの土が焼土であるかどうかはっきりとしなかった。

床面と壁を20㎝程掘り下げて柱穴の有無を調査したが、東側の壁際から径0.8㎝の細い杭穴状の柱穴（Ｐ－１）が１本検出されただけである。先端部は侵水のためはっきりと判らなかった。



図Ⅲ－10　Ｈ－20と出土の土器



図Ⅲ－11　H－20出土の石器

本住居跡は昨年度調査した、隣接するｃ－68－89・99区から検出されたＨ－12に平面形、覆土の状態が似ている。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－１類(1)、ｂ－２類(2)、ｂ－３類（３～７）、ｂ－４類（８～20）、Ⅲ群ａ類土器(図Ⅲ－98－18)、つまみ付ナイフの破片(21)、スクレイパー(22・23)、コア　(24)、たたき石（29・30)、加工痕のあるフレイク（26～28)、黒曜石、頁岩のフレイク、チップが出土した。床面からは、黒曜石の加工痕のあるフレイク（25）等が出土した。

１はやや外反する口縁部の破片。口縁部と口唇上に短縄文が施されている。２はLR原体による斜行縄文が施され、その後扁平な貼付帯がつけられている。貼付帯上は縄による刻み目がつけられている。３は貼付帯間に結束羽状縄文が施されている。４には細い原体による縄文が施されている。５は細い貼付帯が斜め方向につけられ、その間に細い軸に撚糸を巻いた絡条体圧痕文を鋸歯状に施している。６は短縄文と絡条体圧痕文が施されている。５～６は同一個体かもしれない。７は短縄文が施されている。８～11は口縁部の破片。９は薄みで口唇断面は角形、細い原体による縄文が施されている。10は口縁部がやや丸みを帯びる角形で、器面には比較的太い自縄自巻のLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。13は撚糸文かと思われる。15は器面が剝落していてはっきりしないが、２条並列する縄の圧痕がみられる。16には細い軸に細い撚紐を巻いた絡条体圧痕文が施されている。17～19には縄文が施されている。20はニシンの腹椎骨の回転文が施されている。なおⅢ群ａ類土器は包含層出土の破片と接合していたので包含層の土器の項で記載することとする（図Ⅲ－98－18)。

22は頁岩製の小形のつまみ付ナイフ。片面加工のものでつまみ部が欠損している。23は剝片の縁辺に加工を施している不定形のもの。24には原石面が残る。21・24～27は黒曜石製。29は扁平な円礫の側面のところどころに使用面がある。30は扁平な円礫の一面と側面のところどころに使用面がある。また側面はすり石としても利用されている。いずれも安山岩製。

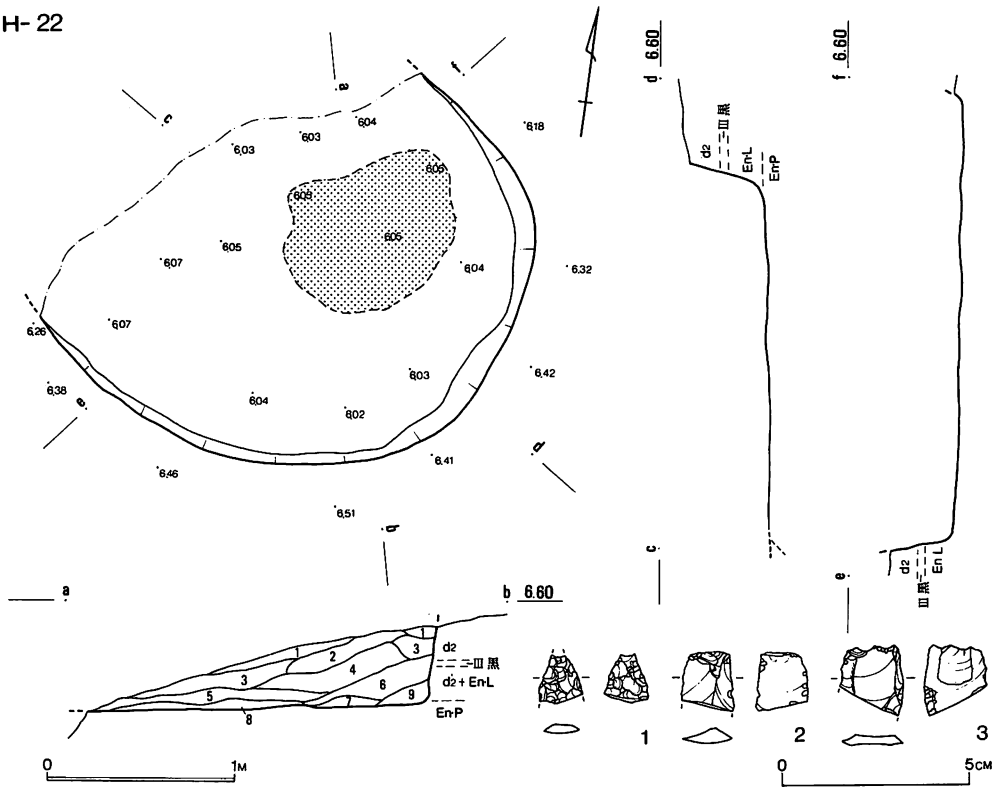
時　期　遺構の検出面、出土した遺物等から判断すると、縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と考えられる。

H－22　（図Ⅲ－12、図版Ⅲ－６－１）

位　置　ｃ－68－33　　**規　模**　（1.97）×2.32／（1.87）×2.27／0.46

土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒＋d_2　軟らかい）2　暗黄褐色（d_1＋d_2　炭化物が混じる）
3　赤褐色（$d_2 \gg d_1$　4よりも赤味を帯びる）
4　暗黄褐色（$d_2 \gg d_1$＋EnP　炭化物が少量混じる）
5　暗黄褐色（d_2＋EnL＋EnP　4よりもEnPが少ない）
6　暗黄褐色（EnL≫d_2）　7　暗黄褐色（$d_2 \gg d_1$）
8　黒褐色（炭化物が多量に混じる土で、床面に部分的に堆積している。床面に貼り付く様な状態で焼土も検出された。非常に硬い。
9　暗赤褐色（d_2　硬い）

特　徴　ｃ－68区の北端、標高6.00ｍ～6.40ｍの低位段丘面に位置する。ｃ－68区の西端にあ



図Ⅲ－12　Ｈ－22と出土の遺物

るＨ－20と同様に、美沢川による侵食が著しい地区で、遺構の北側半分程は失われている。

遺構が検出されたｃ－68－88区周辺は川による侵食のためと思われるが、土層断面図でもわかるように、Ⅱ黒層の堆積が非常に薄い状態であった（図Ⅲ－２）。遺構はこの様な堆積状態のⅡ黒層を調査し、その下位の縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期に形成された盛土の下部を調査中に確認できた。掘り込み面は盛土の下部と思われる。平面形は円形あるいは楕円形と考えられ、床面はEn－ａパミス層を10cm程掘り込んでいる。床面は部分的には非常に硬い状態で（図の網の部分）、炭化物が多量に混じる土が堆積していた。壁は確認できた範囲では、全周でほぼ垂直に立ち上がる。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－４類土器の小さな破片、黒曜石製の石鏃（1)、加工痕フレイク（２・３）が出土した。

時　期　掘り込み面、出土した遺物等から判断して縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と思われる。

(b)　その他のピット

Ｐ－37　（図Ⅲ－13）

位　置　ｃ－68－59・69　　**規　模**　1.04×0.73／0.99×0.64／0.29

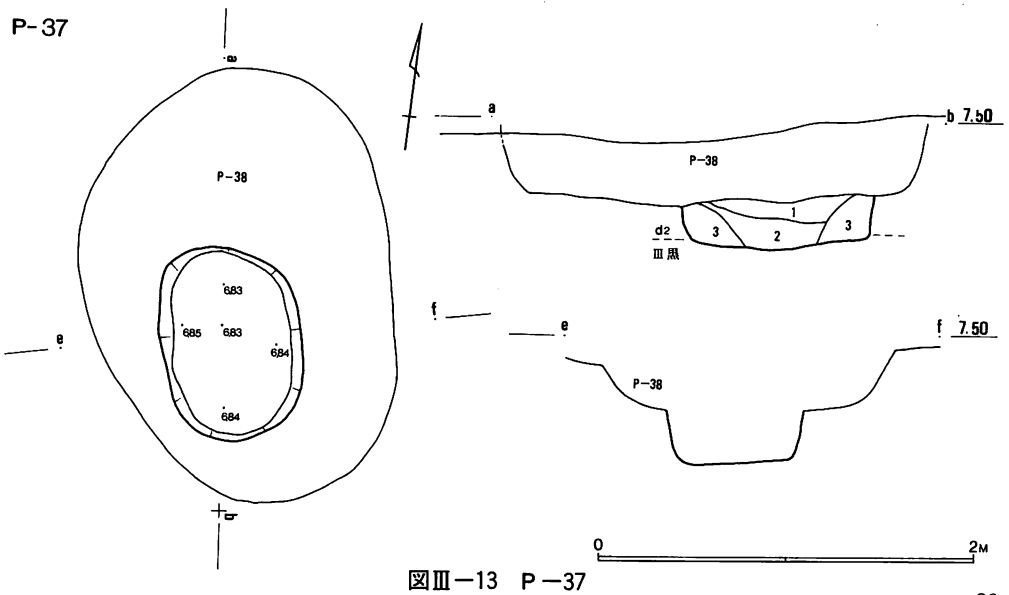
土　層　1　暗黄褐色（d_2≫Ⅱ黒）　　2　暗黄褐色（d_2≫Ⅱ黒　1よりⅡ黒が多い）

3　黄褐色（d_1＋d_2）

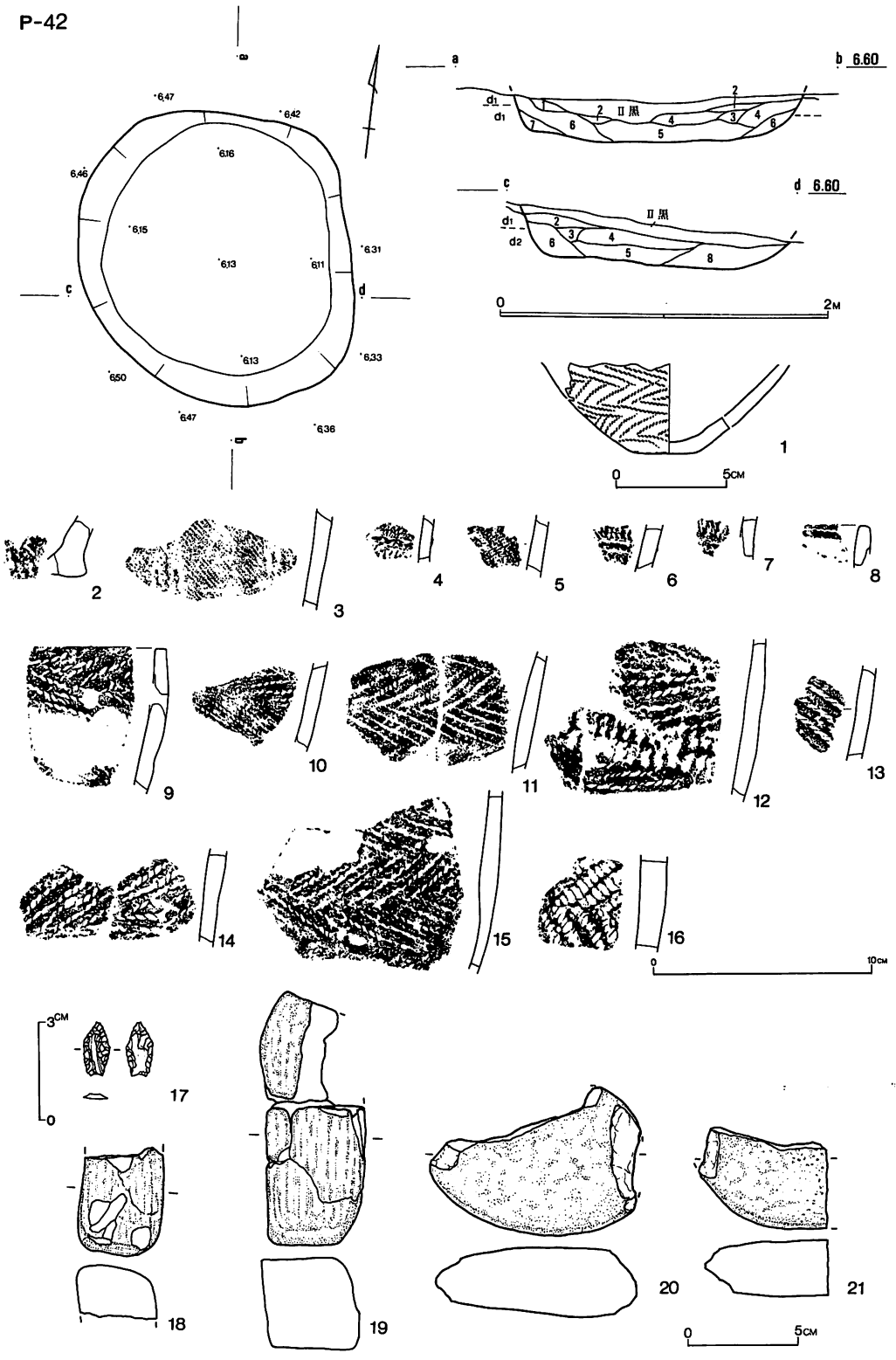
特　徴　縄文時代前期の遺構（Ｐ－38）の底面を調査中に暗黄褐色土の円形の落ち込みが確認できた。平面形は長円形。底面は平坦で、Ⅲ黒層をわずかに掘り込んでつくられている。壁は全周で、壙口部までほぼ垂直に立ち上がる。覆土はTa－d_2火山灰を主とする土で、硬い。

遺　物　覆土１層から黒曜石のフレイクが出土した。

時　期　縄文時代前期の土壙（Ｐ－38）の底面で確認されたことから判断し、縄文時代早期と考えられる。



図Ⅲ－13　Ｐ－37



図Ⅲ－14　Ｐ－42と出土の遺物

P－42　（図Ⅲ－14、図版Ⅲ－14－1）

位　置　c－68－19・29　　**規　模**　1.90×1.64／1.48×1.41

土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒＞d_1＋d_2）　2　茶褐色（Ⅱ黒≫d_1）
3　橙褐色（d_2）　4　橙褐色（d_2≫d_1＞Ⅱ黒）
5　暗黄褐色（d_2≫Ⅱ黒＋d_1）　6　橙褐色（d_2≫d_1　硬い）
7　橙褐色（d_2＋d_1）　8　暗黄褐色土（d_2＋d_1≫Ⅱ黒）

特　徴　c－68区の東端に位置する、この辺りは美沢川による浸食が著しい部分である。

Ta－d_1層上面まで掘り下げた段階で、黒色土の落ち込みが確認できた。平面形が明瞭でないため、東西方向にトレンチを設け調査したが、川による侵食が著しい地区である東側の壁は、一部確認できなかった。平面形は不整な円形、底面はTa－d_2層中につくられているが、底面の標高が現在の美沢川の水位面とほぼ同じであるため、冠水する状態である。壁は西側でやや急角度で立ち上がる。

遺物は覆土上部から出土したものが多い。

遺　物　覆土上部からⅠ群b－1類（2）、b－4（8～15）、Ⅱ群a－1類（16）土器と、石鏃（17）、砥石の破片（18、19）、石斧細片、石錘（20、21）、加工痕フレイク、チップ、礫片が出土した。覆土中～下部からはⅠ群b－2類（3）、b－3類（4～7）、b－4類（1）土器と、黒曜石、頁岩のフレイクが出土した。

1は平底の底部。体部には比較的太い自縄自巻のRLとLRの原体により、羽状縄文が施されている。2は短縄文がつけられている底部の破片。3は非常に細い原体による斜行縄文が施され、その上に細い貼付帯がつけられている。貼付帯上には、刻み目がつけられている。4～6は同一個体の破片と思われる。貼付帯と短縄文がつけられている。9は口唇の断面形が角形で薄みである。器面には、比較的太い自縄自巻のLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。12・14・15は自縄自巻のLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。12には縄端圧痕文がある。16は包含層から出土した土器（図Ⅲ－97－15）と接合した破片。体部には太い原体による羽状縄文が施されている。

17は黒曜石製の五角形鏃。18・19は砂岩の砥石片。20・21はいずれも片麻岩製の石錘の破片である。長軸方向に打ち欠きがある。

時　期　遺構の確認面、遺物の出土状況から判断して、縄文時代早期Ⅰ群b－4類土器の時期と思われる。

P－43　（図Ⅲ－15）

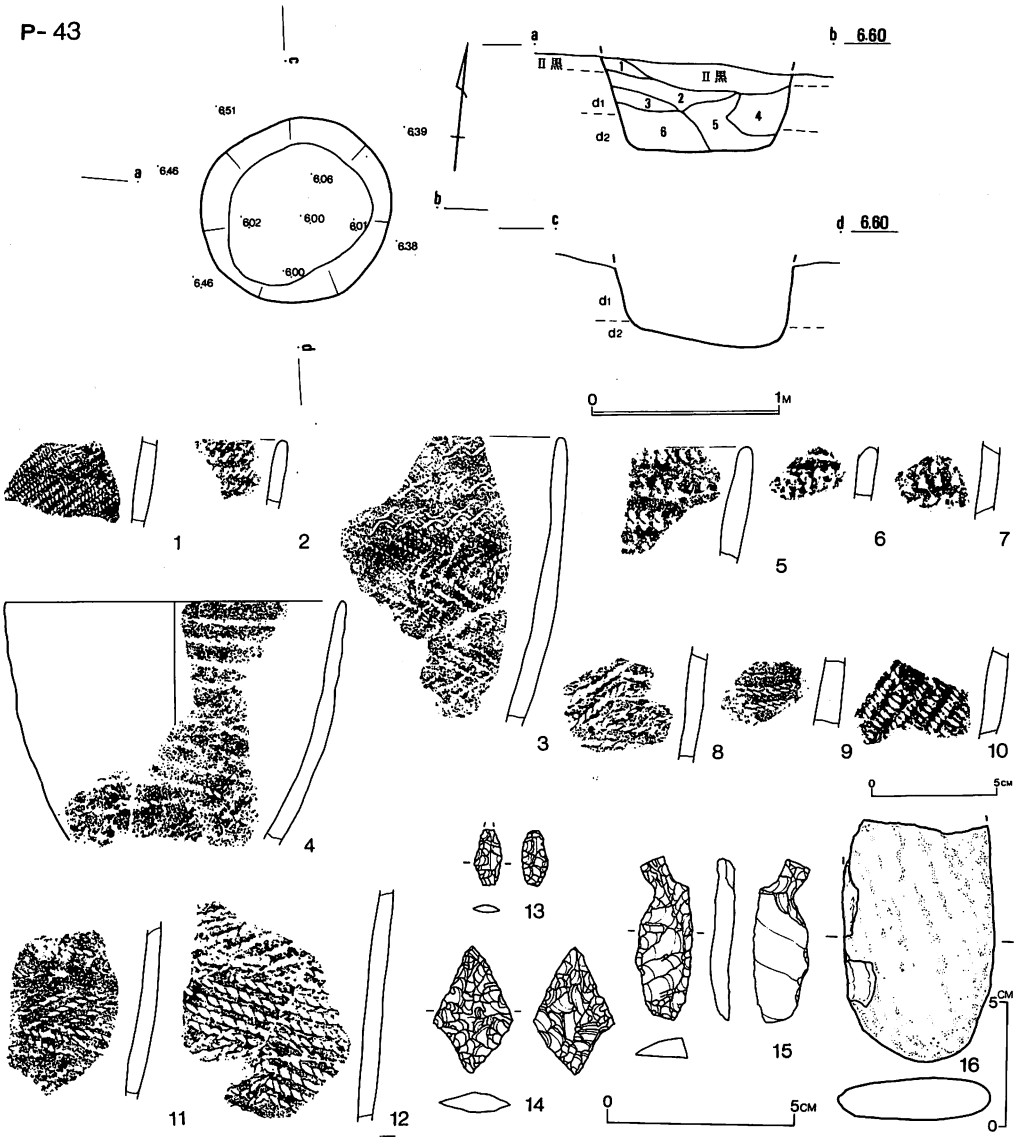
位　置　c－68－28　　**規　模**　1.02×0.96／0.74×0.65／0.53

土　層　1　暗黄褐色（d_2≫d_1＞Ⅱ黒　軟らかい）
2　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2　軟らかい）
3　橙褐色（d_2≫d_1）　4　暗黄褐色（d_2≫d_1＞Ⅱ黒）
5　橙褐色（d_2≫Ⅱ黒）　6　暗橙褐色（d_2≫d_1＋Ⅱ黒）

特　徴　Ⅱ黒層を15cm程掘り下げた段階で、黒色土と、それを取り囲むTa－d_1、d_2火山灰混りの暗黄褐色土の落ち込みが確認できた。平面形は不整な円形。底面はTa－d_2層を10cm程掘り下げて作られているが、冠水のため常に底面から10cm程水が溜まる状態であった。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。覆土は硬くd_1、d_2が主として混じる土である。遺物は覆土１・２層から主として出土した。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－２類（1)、ｂ－４類（２～12)、Ⅳ群ｂ－２類土器と、石鏃（13・14)、つまみ付ナイフ（15)、たたき石（16)、使用痕・加工痕を含むフレイク、礫片が出土した。

１はLR原体による斜行縄文が施されている。２は口唇断面が薄みで、口縁部は丸形の軸になるとみられる絡条体圧痕文がつけられている。３は口唇断面が薄みで、器壁も薄い。口縁



図Ⅲ－15　Ｐ－43と出土の遺物

部には、1段の縄による2列に連続する綾絡文が3段施されている。体部には、自縄自巻のLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。4は口唇断面、器壁ともに薄い。器面が磨滅してはっきりとはしないが、口縁部には比較的太い原体による縄線文が4条施されている。体部には羽状縄文が施されている。5～7は縄端圧痕文がつけられている。8、10～12は比較的太い自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。9は自縄自巻のRRLの原体による2条並列する縄文が施されている。13、14は黒曜石製で、13は木葉形鏃。14は有茎鏃。側縁は直線的で、茎部は一方のかえしが不明瞭である。15は珪岩製のつまみ付ナイフ。16は扁平礫の両側縁に使用痕がある。片麻岩製。

時　期　検出面、覆土の状況、出土した土器から判断して縄文時代早期Ⅰ群b－4類土器の時期と思われる。

P－44　（図Ⅲ－16）

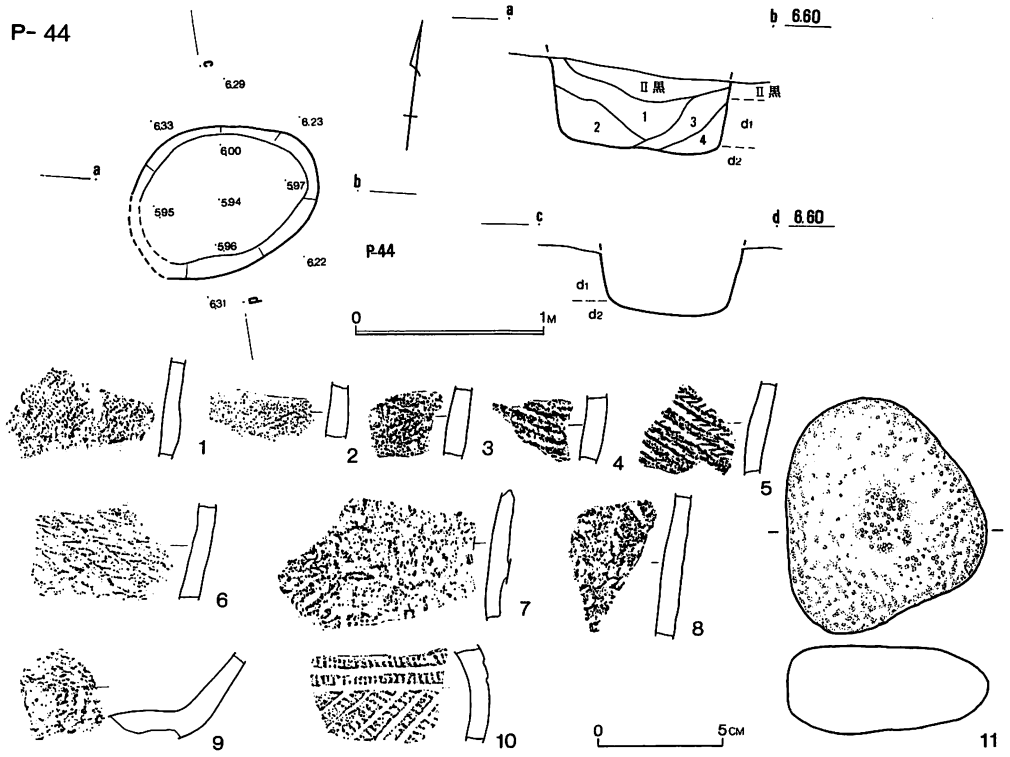
位　置　c－68－18　　**規　模**　(1.05)×0.78／(0.92)×0.66／0.50

土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2）　2　橙褐色（$d_2 \gg d_1$）

3　茶褐色（Ⅱ黒＞d_2）　4　暗黄褐色（Ⅱ黒＋d_2）

特　徴　標高約6.50mの低位段丘面、c－68区の東端に位置する。川による侵食が著しいところである。

Ta－d_1層上面まで掘り下げた段階で、黒褐色土の浅い落ち込みが確認できた。検出面はP－43とほぼ同じで、当初はこれら2個の土壙を一個のものと判断して調査したため、壁の一部



図Ⅲ－16　P－44と出土の遺物

は削平してしまった。平面形は楕円形。底面はTa－d_2層を10cm程掘り込んでいるが、Ｐ－43と同様に冠水が著しい。壁は全周でほぼ急角度に立ち上がる。覆土は硬い。

遺　物　覆土1、2層からⅠ群ｂ－2類（1)、ｂ－4類（2～9)、Ⅳ群ｂ類（10）土器とスクレイパー片、たたき石（11)、黒曜石、頁岩、めのうのフレイク、礫が出土した。1は整った斜行縄文が施されている。2～8は、体部に自縄自巻の原体により縄文が施されているものである。2～4は細い原体、5～6は比較的太い原体による。7、8は同一個体の破片で縄端圧痕文がつけられている。9は平底の底部。自縄自巻のRRの原体による縄文と、縄端圧痕文がつけられている。10はRL原体による斜行縄文が施され、沈線による鋸歯状の文様が描かれていると思われる。横走する沈線間は先の細い工具で刻み目がつけられている。11は安山岩製。扁平礫の一面に使用面がある。

時　期　遺構の確認面、出土土器から判断し、縄文時代早期Ⅰ群ｂ－4類土器の時期と思われる。

Ｐ－45　（図Ⅲ－17、図版Ⅲ－15－1・2）

位　置　c－68－46・47　　**規　模**　1891×1.79／1.48×1.33／0.49

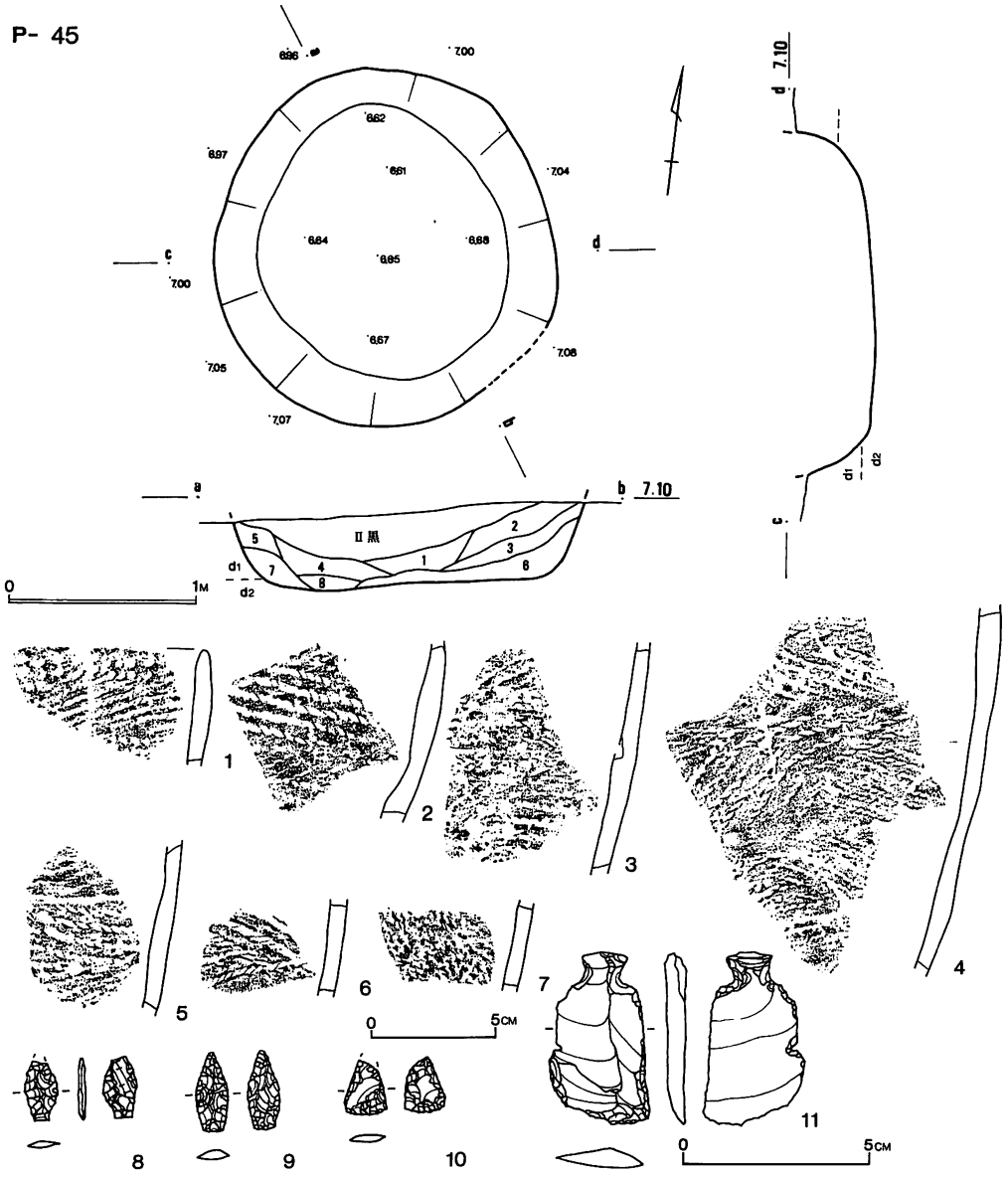
土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒≫d_1＞d_2硬い）　2　暗橙褐色（d_2≫d_1＞Ⅱ黒　硬い）
3　橙褐色（d_1＋d_2）　4　茶褐色（Ⅱ黒＋d_2）
5　黄褐色（d_1≫Ⅱ黒）　6　灰黄褐色（d_1≫d_2）
7　暗橙褐色（d_2≫Ⅱ黒）　8　暗橙褐色（d_2＞d_1＋Ⅱ黒）

特　徴　Ⅱ黒層下部の縄文時代早期（Ⅰ群ｂ－4類）に形成された盛土を調査中に、径1ｍ程の円形の黒褐色土の落ち込みが確認できた。また、凹みに流れ込む様な状態でⅠ群ｂ－4類が検出された。平面形は不整な円形。底面はd_2層をわずかに掘り込んで作られている。壁は全周でほぼ急角度で立ち上がる。覆土は非常に硬い。覆土の堆積状態はＰ－46に似ている。遺物は覆土上部から中部にかけて比較的まとまってⅠ群ｂ－4類土器が出土したが、磨滅している破片が多いため、接合する資料は少ない。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－4類（1～7）土器、石鏃（8～10)、つまみ付ナイフ（11)、石皿の破片、黒曜石、頁岩のフレイク、礫片が出土した。

1は覆土2層の壁際から出土した。口唇断面は薄みで丸みがある。体部には比較的太いLRの原体による縄文が施されている。口縁部と縄文の間には、縄端圧痕文がつけられている。2～6は比較的太い自縄自巻の原体により羽状縄文が施されている。4は自縄自巻のLLとRRの原体による羽状縄文である。7は10ｍ以上離れたｃ－68－59区からまとまって出土した土器（図Ⅲ－89－33）と接合した破片である。細い2段の原体による縄線文で区画された中に、短縄文を規則正しく施している。8、9は五角形鏃。10は平基に近い凸基の三角形鏃。いずれも黒曜石製。11は素材である剝片の形状をあまり変えることなくつまみ部と刃部を作り出している。頁岩製。

時　期　遺構の検出面のレベル、覆土から出土した土器から判断して、縄文時代早期Ⅰ群ｂ



図Ⅲ－17　P－45と出土の遺物

－4類土器の時期と考えられる。

P－46　（図Ⅲ－18、図版Ⅲ－14－3）

位　置　c－68－39　　**規　模**　1.24×1.01／0.85×0.66／0.34

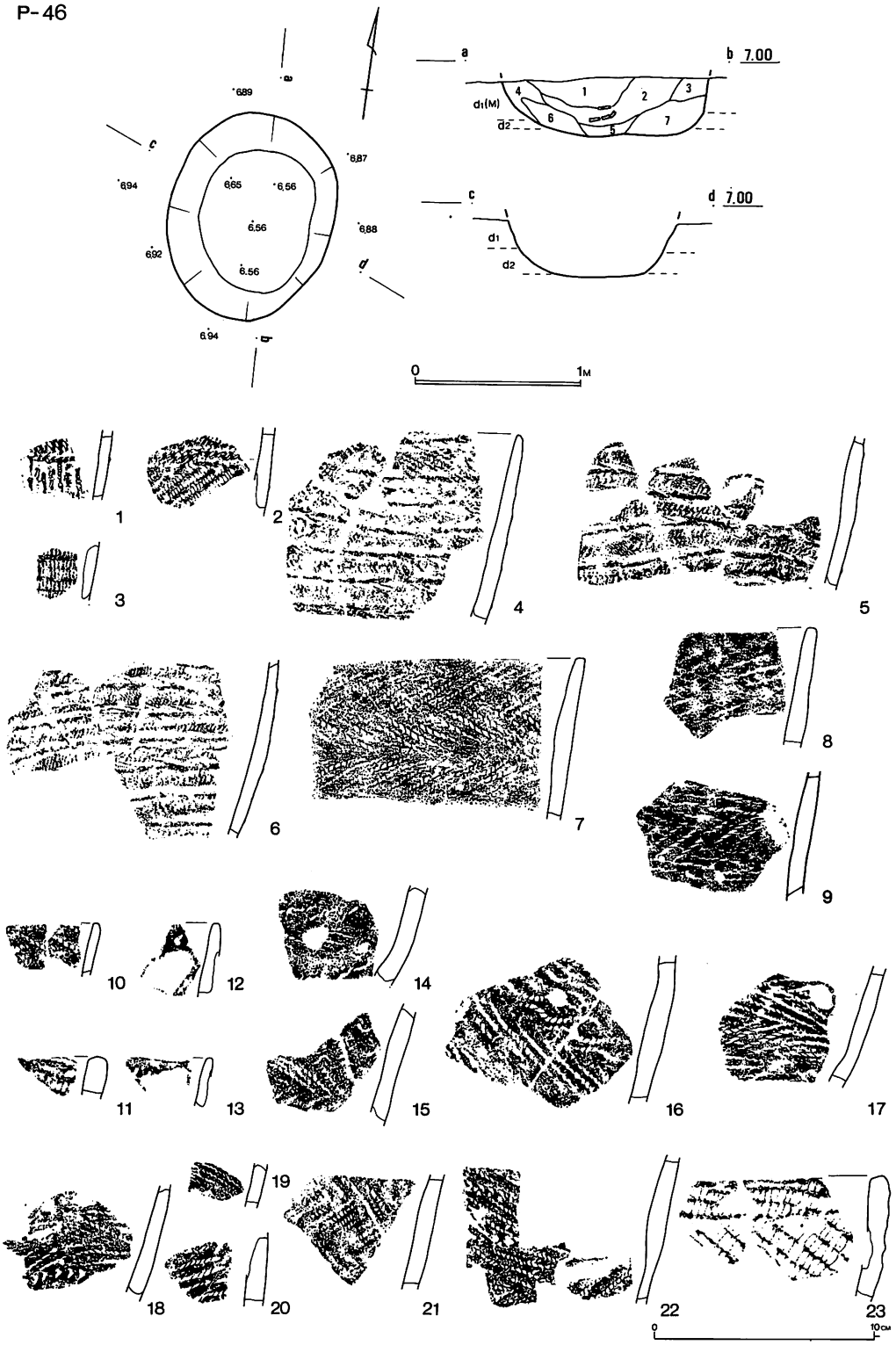
土　層　1　黒褐土（Ⅱ黒＞d_2　硬い）　2　茶褐色（Ⅱ黒≫d_2　硬い）

3　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2）　4　暗茶褐色（Ⅱ黒＋d_2）

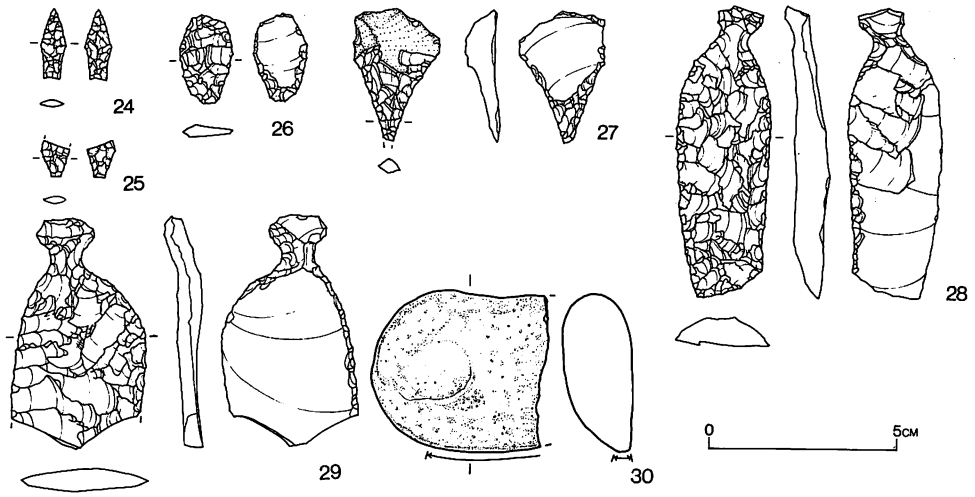
5　茶褐色（Ⅱ黒≫d_2）　6　橙褐色（d_1＋d_2　硬い）

7　暗橙色（d_2≫Ⅱ黒）

特　徴　Ta－d_1層上面で径50㎝程の黒褐色土の落ち込みが確認できた。平面形は楕円形であ



図Ⅲ－18　Ｐ－46と出土の土器



図Ⅲ－19　Ｐ－46と出土の石器

る。底面は平坦で、Ⅲ黒層上面に作られている。壁の立ち上がりは全周で急角度であるが、南東側がほぼ垂直である。覆土は非常に硬い。遺物は覆土１層と東側の壁際からⅠ群ｂ－４類土器が、覆土２層からはⅠ群ｂ－３類土器が比較的まとまって出土した。

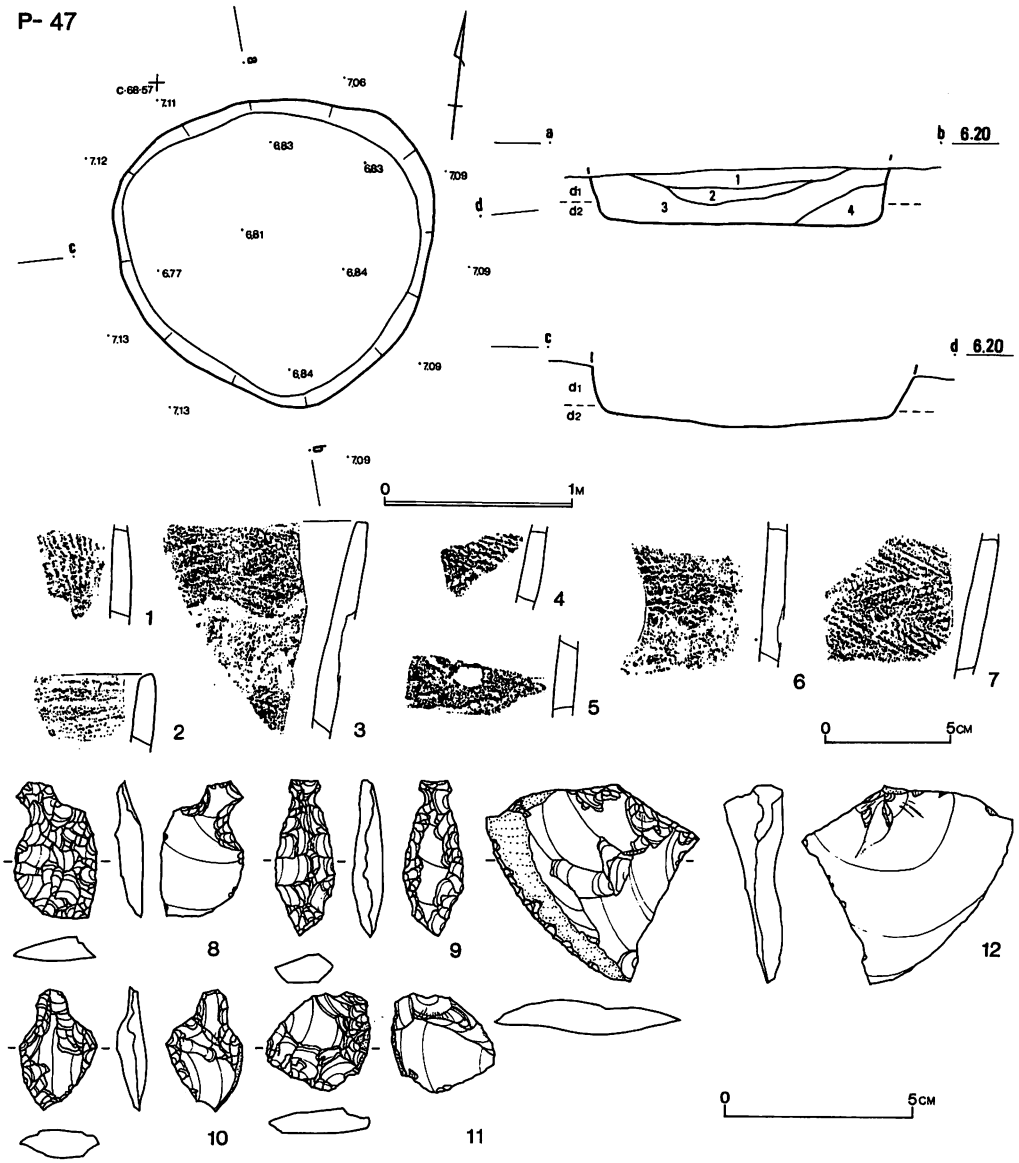
遺　物　覆土からⅠ群ｂ－２類（3)、ｂ－３類（４～６）、ｂ－４類（７～22)、Ⅱ群ａ－２類(23)土器、石鏃（24～25)、ドリル（27)、つまみ付ナイフ（28、29)、スクレイパー（26)、すり石（30)、石斧剝片、砂岩の破片、加工痕のあるフレイクなどが出土した。底面直上からⅠ群ｂ－２類(2)、ｂ－３類(1)土器が出土した。１は包含層から出土した図Ⅲ－79－１と接合はしなかったが、同一個体と思われる破片。細い貼付帯と短縄文が施されている。貼付帯上には、縄をころがすことにより刻み目をつけている。斜行縄文と絡条体圧痕文が施されている。３は角形と思われる軸に、細い撚紐を巻いた絡条体圧痕文が施されている。４は口唇の断面形が薄みで、やや丸みを帯びる。貼付帯はつぶれている。横環する貼付帯間には、短縄文とRL原体による斜行縄文が粗く施されている。５、６は同一個体の破片。貼付帯は４同様つぶれている。貼付帯間には、細い１段Ｒの原体による短縄文が施されている。４～６はいずれも短縄文を施す際の爪の跡がある。７は口唇断面が角形で、器面には自縄自巻のRLとLRの原体による羽状縄文が施されている。８、９は同一個体の破片と思われる。口唇の断面形は角形で、細い自縄自巻のLLとRRの原体による羽状縄文が施されている。10は器壁が薄い。11は太い原体による縄文が施されている。12は波状口縁をなす。口縁には、縄端の圧痕文が施されている。13、14は同一個体の破片。器面が磨滅してはっきりしないが、細い原体による綾絡文がつけられている。17は胎土が橙色を呈する。縄端圧痕文がつけられている。21は自縄自巻のRLとLRの原体により交叉するような羽状縄文と、縄端圧痕文が施されている。23はＰ－49出土の土器（図Ⅲ－40－３～５)、包含層出土の土器（図Ⅲ－97－11・12）と同一個体の破片と思われる。口縁部には太い１段Ｌの原体による縄線文が施されている。体部には羽状縄

文が施されている。24、25は黒曜石製の五角形鏃。27は原石面を残すもので、三角形状の剝片に機能部のみ作り出している。28、29は片面加工のもの。28はやや厚みがある珪岩製のもの。29は頁岩製。26は小形で楕円形を呈する頁岩製のスクレイパー。30は扁平礫の側縁に細長い使用面がある。片麻岩製。

時　期　出土した遺物、遺構の検出面から判断し、縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と思われる。

P－47　（図Ⅲ－20、図版Ⅲ－14－４）

位　置　ｃ－68－47・57　　**規　模**　1.68×1.66／1.53×1.51／0.31



図Ⅲ－20　Ｐ－47と出土の遺物

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　　2　茶褐色（Ⅱ黒＞d_1＋d_2　硬い）
3　黄褐色（d_1≫d_2　非常に硬い）4　暗黄褐色（d_1＋d_2　非常に硬い）

特　徴　Ⅱ黒層下部の縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期に形成された盛土を調査中に、黒褐色土の落ち込みが確認できた。平面は不整な円形。底面はd_2層を10cm程掘り下げて作られている。中央部でやや凹むほかは、ほぼ平坦である。壁は全周ではほぼ急角度に立ち上がる。覆土は１層を除き、非常に硬い。Ｐ－45、46の堆積状態と似ている。遺物は覆土１、２層から出土した。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－３類（1)、ｂ－４類（２～７）土器と、つまみ付ナイフ（８～10)、スクレイパー片（11)、加工痕、使用痕のあるフレイク、チップ、礫片等が、床直上からスクレイパー（12）が出土した。１は短縄文がつけられている。２は口唇の断面が角形を呈し、口唇上には縄端圧痕文がつけられている。口縁部には１段Ｌの原体による縄線文が施されている。３の口唇の断面は角形で自縄自巻のＬＬとＲＬの原体による羽状縄文が施されている。４・６・７は自縄自巻のＬＲとＲＬの原体による羽状縄文が施されている。８は体部が丸みのある片面加工のもので珪岩製。９は小形で厚みのある両面加工のもので頁岩製。10はやや丸みのあるものである。黒曜石製。11・12は剝片に加工を加えずに縁辺に刃部を作り出しているもの。

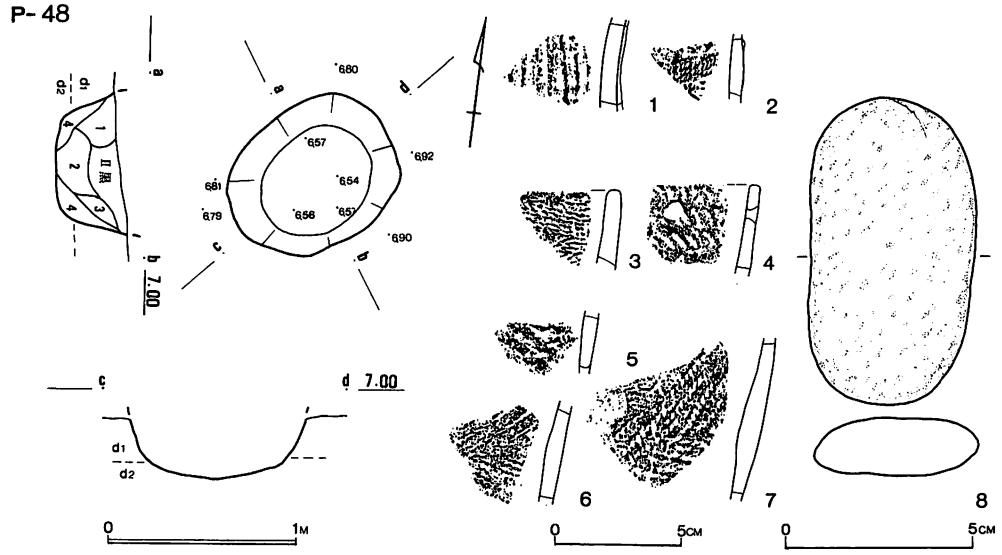
時　期　出土した遺物、覆土の堆積状態から判断し縄文時代早期後葉Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と思われる。

Ｐ－48　（図Ⅲ－21、図版Ⅲ－14－２）

位　置　ｃ－68－56　　**規　模**　0.95×0.76／0.64×0.52／0.40

土　層　1　茶褐色(Ⅱ黒＞d_1非常に硬い）2　黒褐色（Ⅱ黒＋d_1　非常に硬い）
3　茶褐色(d_1＞Ⅱ黒）　　4　暗黄褐色（d_1≫d_2）

特　徴　Ta－d_1上面で黒色土の小さな落ち込みが確認できた。平面形は楕円形。底面は断面



図Ⅲ－21　Ｐ－48と出土の遺物

形が皿状を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全般的に非常に硬い。遺物は覆土1層と壁際から出土している。

遺　物　覆土1・2層と壁際からⅠ群b－2類（1)、b－3類（2)、b－4類（3～7）土器とたたき石(8)、フレイク、チップ、礫が出土している。1は断面形が三角形の細い貼付帯がつけられている。2は貼付帯と短縄文がつけられている。3の口唇の断面形はやや丸みを帯びた角形で体部には自縄自巻RRLの原体による2条並列する縄文が施されている。4は磨滅してはっきりしないが、縄端圧痕が施されている。6・7はいずれも羽状縄文が施されている。8は扁平礫の側縁に使用痕がある。片麻岩製。

時　期　遺構の検出面から判断して縄文時代早期後葉Ⅰ群b－4類土器の時期と思われる。

P－50　（図Ⅲ－22）

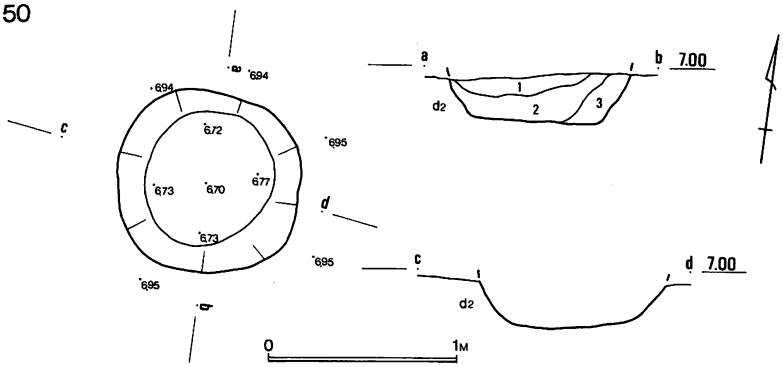
位　置　c－68－48　　**規　模**　0.99×0.94／0.66×0.67／0.24

土　層　1　茶褐色（$d_1 \gg d_2 \gg$ Ⅱ黒）　2　暗褐色（$d_1 + d_2 \gg$ Ⅱ黒　非常に硬い）
3　暗橙褐色（$d_2 \gg d_1 +$ Ⅱ黒　非常に硬い）

特　徴　Ta－d_2層上面を精査中に検出された。平面形は円形。底面は平坦で硬い。壁の立ち上がりは全周で緩やかである。覆土はd_1・d_2火山灰を主とする土で非常に硬い。遺物は覆土から黒曜石のフレイクが出土した。

時　期　縄文時代早期Ⅰ群b－3類、あるいはb－4類土器の時期の頃かと思われる。

P-50



図Ⅲ－22　P－50

P－51　（図Ⅲ－23、図版Ⅲ－15－3）

位　置　c－68－56　　**規　模**　0.65×0.55／0.39×0.33／0.47

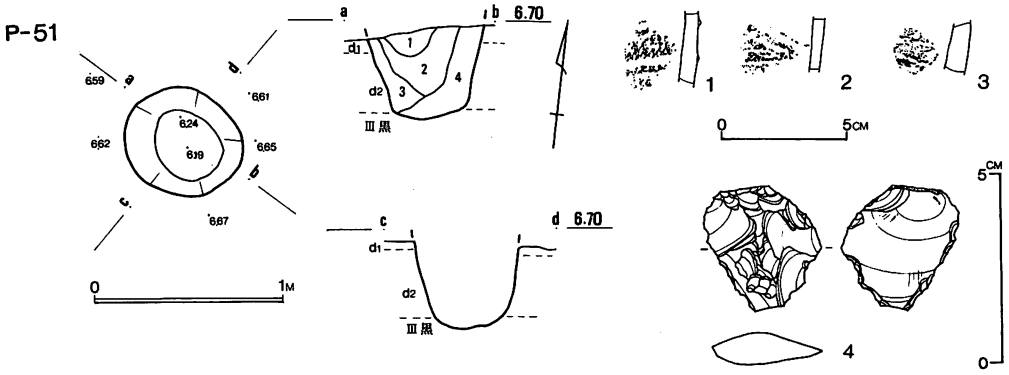
土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_1）　2　茶褐色（Ⅱ黒≫$d_1 + d_2$）
3　暗黄褐色（$d_1 + d_2 \gg$ Ⅱ黒）　4　橙褐色（$d_2 \gg d_1 \gg$ Ⅱ黒）

特　徴　Ⅱ黒層下部を調査中に確認できた。平面形は楕円形。底面はⅢ黒層をわずかに掘り込んで作られており、凹凸がある。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。覆土は比較的硬い。

遺　物　覆土1、2層からⅠ群b－3類（1)、b－4類土器（2・3）と、加工痕フレイク

(4)が出土した。1は細い貼付帯と2段の原体による短縄文がつけられている。2・3は自縄自巻の原体による縄文が施されている。

時　期　覆土の堆積状態、出土した遺物から判断して縄文時代早期後葉Ⅰ群b－4類土器の時期と思われる。



図Ⅲ－23　P－51と出土の遺物

P－53　（図Ⅲ－24）

位　置　c－68－36　　**規　模**　0.82×0.71／0.44×0.41／0.36

土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒≫d_1）　2　黄褐色（d_1≫d_2）

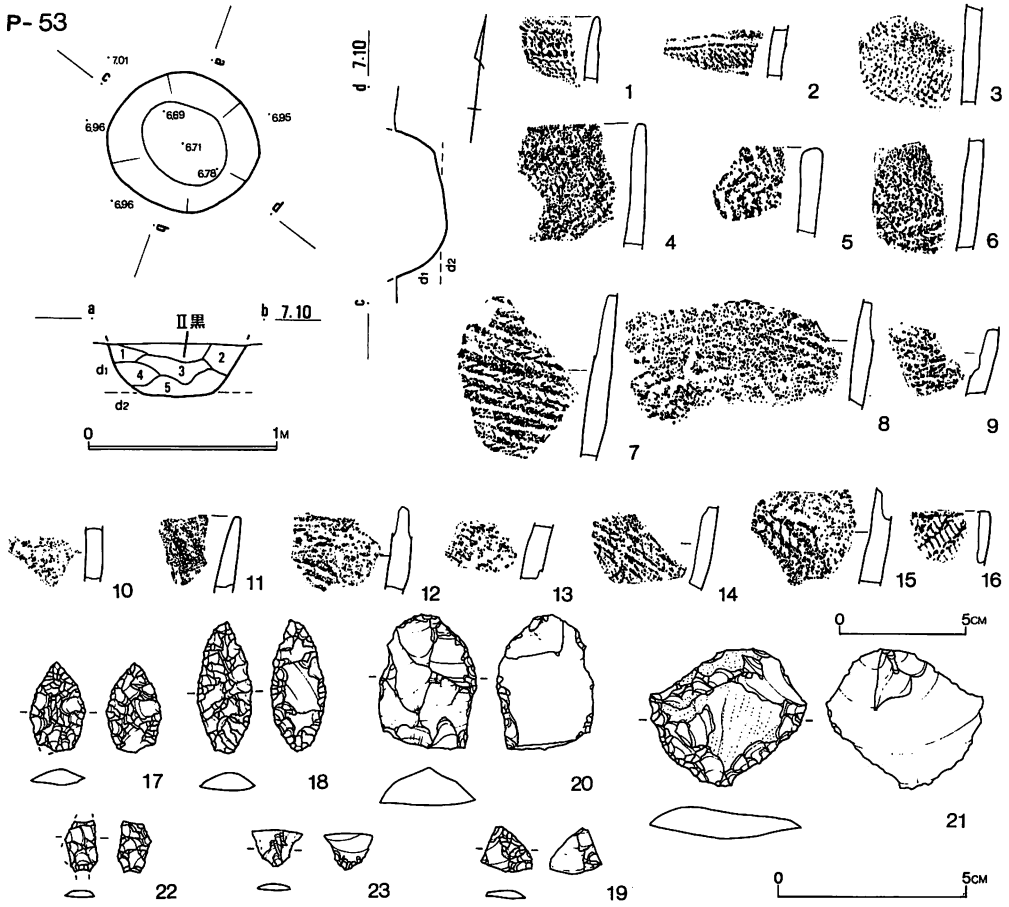
3　暗黄褐色（d_1＋d_2）　4　灰褐色（d_1≫Ⅱ黒　軟らかい）

5　灰黄褐色（d_1＞d_2＋Ⅱ黒　硬い）

特　徴　Ⅱ黒層下部の縄文時代早期Ⅰ群b－4類（東釧路Ⅳ式）土器の時期に形成されたと考えられるd_1とd_2火山灰を主とする盛土を、調査中に確認できた。平面形は楕円形。底面はd_2層中にあり東側でやや斜めになっている。壁は壙口部にむかって広がり気味である。覆土は比較的硬い。

遺　物　覆土からⅠ群b－3類（1～3）、b－4類（4～15）、Ⅱ群a－1類（16）土器と石鏃　（17・18）、使用痕、加工痕フレイク（19～23）が出土した。

1・2は細い貼付帯がつけられ、1には細い原体による斜行縄文と短縄文、2には短縄文がつけられている。3には羽状縄文が施されている。4は口唇断面が角形で薄みである。表面に炭化物が付着してはっきりしないが、条と条の間隔があく縄文が施されている。自縄自巻の原体によるものとみられる。5は口唇断面がやや丸みがあり厚手である。口縁部には短縄文と縄端圧痕文を施している。7は撚りの方向の異なる太い1段の原体を軸に並列に巻いた撚糸文が施されている。8～14は表面が剝落して文様が明瞭ではないが、自縄自巻の原体による縄文が施されているとみられる。16は包含層c－68－36区から出土した土器（図Ⅲ－97－15～17）と接合しなかったが、同一個体の破片である。この土器は、P－57からも出土している。口唇断面は角形で0段多条の原体による縄文が施されている。焼成が非常に良い。17は平基の木葉形鏃。18は覆土最上部から出土した比較的大形の木葉形鏃。17～23はいずれも黒曜石製である。



図Ⅲ－24　Ｐ－53と出土の遺物

時　期　出土した遺物等から判断し、Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と考えられる。

Ｐ－54　（図Ⅲ－25）

位　置　ｃ－68－57　　**規　模**　1.75×1.68／1.38×1.30／0.36

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_1＋d_2）　2　暗灰褐色（Ⅱ黒＋d_1d_2）

3　暗黄褐色（d_1＋d_2）　4　暗褐色（Ⅱ黒＋d_1）

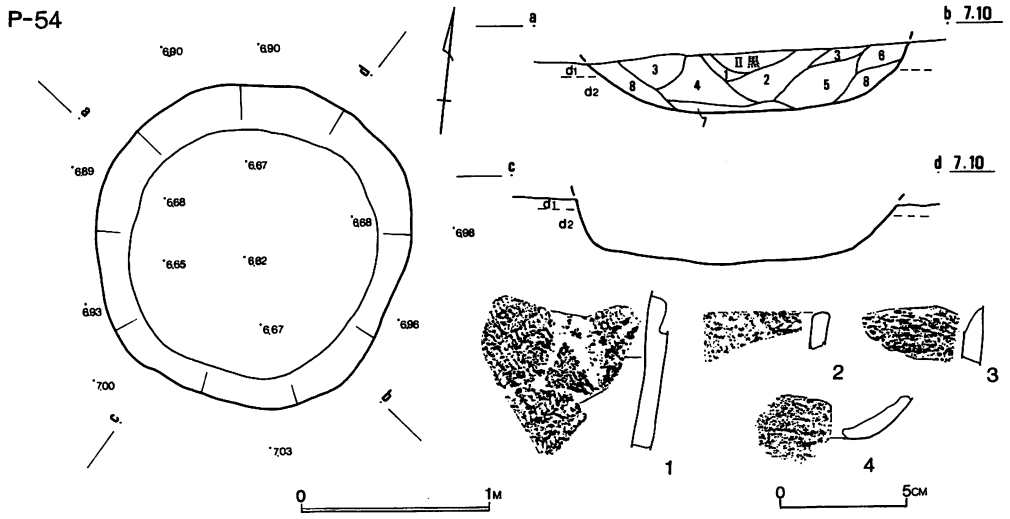
5　暗黄褐色（Ⅱ黒＞d_2＞d_1　硬い）

6　暗茶褐色（Ⅱ黒＋d_1≫d_2）　7　橙褐色（d_1＋d_2　硬い）

8　橙褐色（d_2≫d_1　硬い）

特　徴　土層観察のために設けたトレンチの壁の断面により確認できた。平面形は円形。底面はTa－d_2層中に作られ軟らかい。壁の立ち上がりは南西側で急角度であるほかは緩かに立ち上がる。覆土は全般的に硬い。

遺　物　覆土３層からⅠ群ｂ－４類土器（１～４）が出土した。１・３は自縄自巻の原体による縄文が施されている。２は口縁部に縄線文が施されている。４は丸底気味の底部。



図Ⅲ－25　P－54と出土の土器

時　期　出土した土器から判断して縄文時代早期後葉Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と思われる。

P－58　（図Ⅲ－26、図版Ⅲ－15－４・５）

位　置　ｃ－68－78　　**規　模**　1.70×1.60／1.40×1.21／0.49

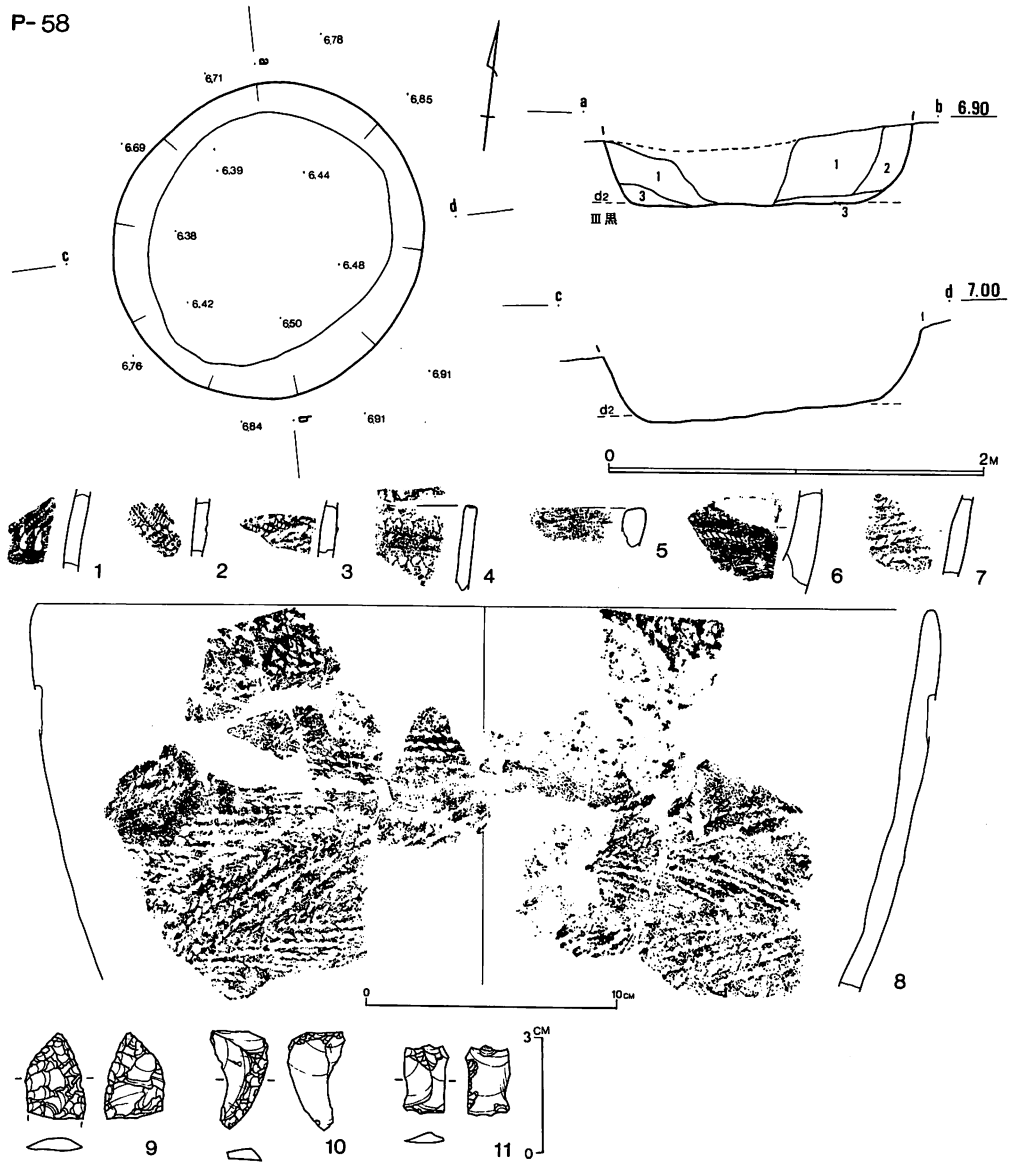
土　層　１　暗橙褐色（d_2≫Ⅱ黒　硬い）　２　橙褐色（d_2≫d_1＋Ⅱ黒）

３　橙褐色（d_2≫d_1）

特　徴　土層観察のために掘ったトレンチにより黒褐色土の落ち込みが認められ遺構が確認できた。当初は覆土１層が非常に硬かったため壁面と考え、小さな土壙と判断した。その後再確認のため、エレベーションｃ－ｄに沿ってトレンチを設けて調査した結果、覆土１層・２層から遺物が検出され、平面形が不整な円形の土壙であることがわかった。底面はⅢ黒層上面に作られており、凹凸があり、北側がやや傾斜している。壁は全周でほぼ急角度に立ち上がる。遺物は覆土中から下部に比較的多い。

遺　物　覆土１・２層から、Ⅰ群ｂ－１類、ｂ－２類（１・２）、ｂ－３類（3)、ｂ－４類（４～８）、土器と石鏃（9)、加工痕フレイク（10、11)、黒曜石・頁岩・めのうのフレイク・チップ、底面からⅠ群ｂ－４類土器（8)が出土した。１は細い原体による縄文と縄端圧痕文が施されている。２は０段多条の原体による羽状縄文が施されている。結束に似せて縄端の圧痕文を施している。３は細い貼付帯による文様が施されている。４の口唇の断面は角形で口縁部と口唇上には縄端圧痕文が施されている。５は口唇の断面は角形で比較的厚みがある。８は覆土下部と床面から出土した。波状口縁をなすと思われる。口唇の断面形は角形で口縁部には縄端圧痕文が２列施されている。体部には太い自縄自巻のLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。９は側縁がやや膨らむ三角形鏃。９～11は黒曜石製。

時　期　出土した遺物から判断して縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と思われる。



図Ⅲ－26　Ｐ－58と出土の遺物

Ｐ－59　（図Ⅲ－27）

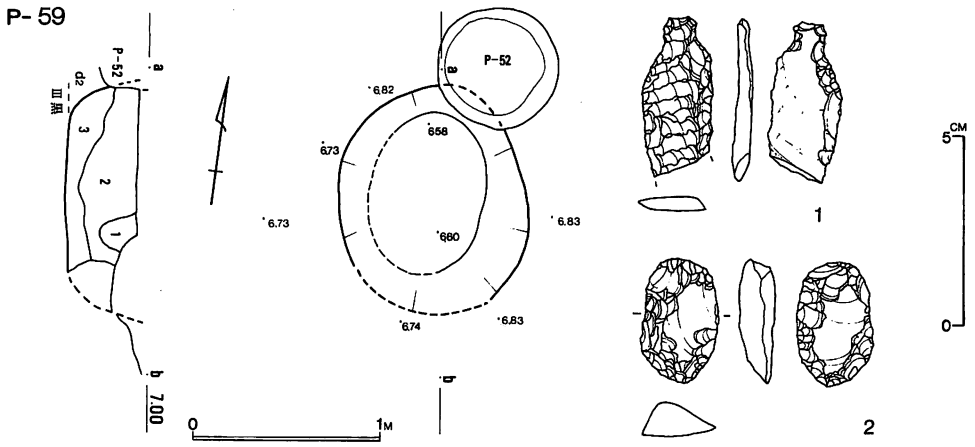
位　置　c－68－36・46　　**規　模**　(1.16)×0.99／0.72×(0.62)／0.38

土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＞d_2　軟らかい）

2　灰黄褐色（d_1≫d_2　非常に硬い）

3　黄褐色（d_1≫d_2）

特　徴　40ラインの南北の土層断面で灰黄褐色土の落ち込みが確認できた。北東側でＰ－52によって壁の一部が壊され、南東側はテストピットにより削平されているため平面形は明瞭ではないが、楕円形を呈するかと思われる。底面はⅢ黒層上面に作られている。壁は東側でほぼ垂直に立ち上がることがわかったが、西側では不明瞭であった。覆土２層が非常に硬い。本来



図Ⅲ－27　Ｐ－59と出土の遺物

の Ta － d_2 層との境がはっきりしなかった。

遺　物　覆土上部からⅠ群ｂ－４類土器、つまみ付ナイフ（1)、黒曜石のフレイク，覆土中部からは、スクレイパー（2)、黒曜石、頁岩のフレイク、チップが出土した。１は頁岩製で片面加工のもの。２は黒曜石の側縁に急角度の刃部が作られている。

時　期　出土した遺物、縄文時代前期のＰ－52により壁が壊されていることから判断し、縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期と思われる。

Ｐ－60　（図Ⅲ－28）

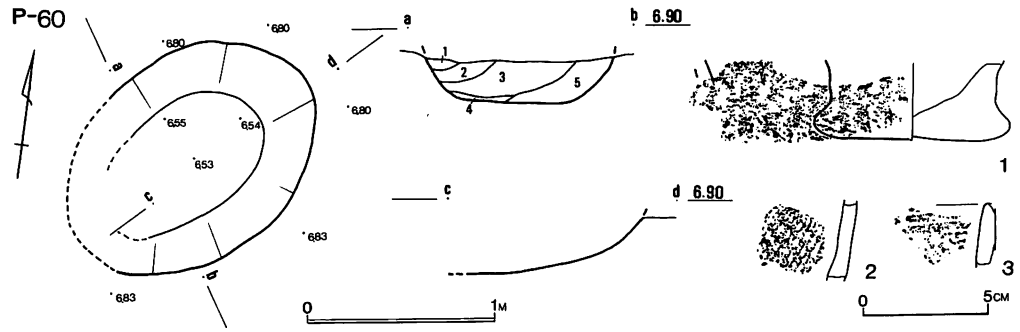
位　置　ｃ－68－47　　**規　模**　（1.47）×1.07／（0.96）×0.59／0.25

土　層　1　茶褐色（$d_1 + d_1 \gg$ Ⅱ黒）　2　灰褐色（$d_1 + d_2$）

3　暗黄褐色（$d_2 \gg d_1$　硬い）　4　茶褐色（$d_2 > d_1$）

5　暗黄褐色（$d_1 > d_2$）

特　徴　Ta － d_2 上面で灰褐色土の落ち込みが確認できた。確認面での平面形がはっきりとしないため、トレンチを掘って調査したが、西側の壁の立ち上がりや平面形が明瞭にとらえられず、確認できたのは東側部分のみである。覆土が非常に硬く、壁との境が区別つかない状態は



図Ⅲ－28　Ｐ－60と出土の石器

P－59の覆土と良く似ている。底面はd_2層中に作られ断面形は浅い皿状である。

遺　物　覆土からⅠ群b－1類 (1)、b－2類 (2)、b－4類 (3)土器と黒曜石のフレイクが出土した。1は底部の破片。くびれの部分には縄端圧痕文、張りだしている部分には絡条体圧痕文がつけられている。2はRL原体による斜行縄文が施されている。3は波状口縁と思われる。口縁部に細く撚りの緩い1段Lの原体による縄線文がつけられている。

時　期　遺構の検出面等から判断して、縄文時代早期Ⅰ群b－4類土器の時期と思われる。

P－63　(図Ⅲ－29)

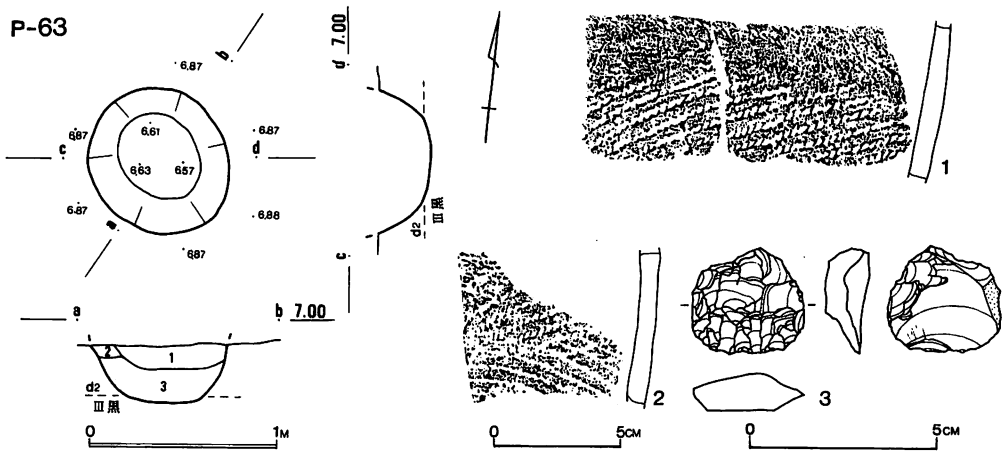
位　置　c－68－48　　**規　模**　0.82×0.72／0.49×0.41／0.32

土　層　1　暗黄褐色（$d_2 > d_1$　硬い）　2　暗橙褐色（$d_1 + d_2$）
3　橙褐色（$d_2 \gg d_1$）

特　徴　Ta－d_2層上面を精査中、小さな黄褐色土の円形の落ち込みからⅠ群b－4類土器が出土し、遺構が確認できた。平面形は楕円形。底面はⅢ黒層上面に作られ、平坦である。壁は土壙口部にむかってやや広がる。遺物は覆土上部から出土した。覆土は硬いTa－d_2火山灰を主とする土である。

遺　物　覆土1層からⅠ群b－4類土器（1・2）とスクレイパー (3)、黒曜石のフレイクが出土した。1は焼成の良い土器片で太い自縄自巻のLRの原体による縄文が施されている。2は自縄自巻のLRとRLの原体により羽状縄文が施されている。3は黒曜石製。

時　期　出土した遺物から判断し、縄文時代早期後葉Ⅰ群b－4類土器の時期と思われる。



図Ⅲ－29　P－63と出土の遺物

P－64　(図Ⅲ－30)

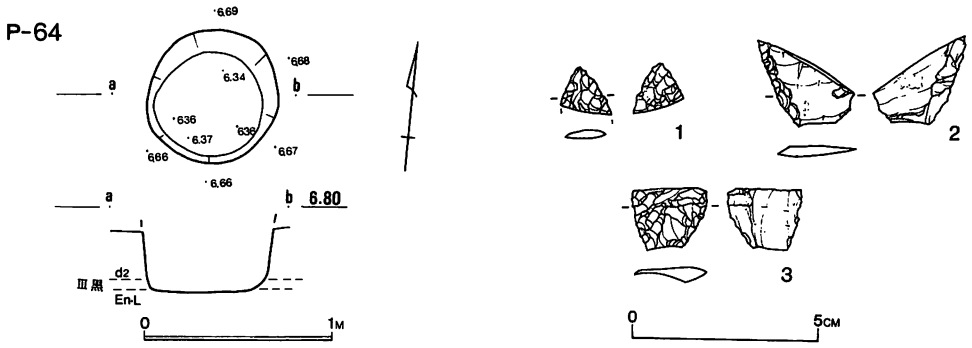
位　置　c－68－36　　**規　模**　0.72×0.68／0.56×0.53／0.33

特　徴　縄文時代早期後葉Ⅰ群b－4類（東釧路Ⅳ式）土器の時期に形成された盛土の下部を調査中に暗黄褐色土の落ち込みが検出された。落ち込みの輪郭がはっきりとせず、当初は遺構とは考えられなかったため、土層観察用のベルトを設けず調査した。セクション図は作成で

きなかった。平面形は円形。底面はEn－aローム層を僅かに掘り込んでおり、平坦で硬い。壁は全周で壙口部までほぼ垂直に立ち上がる。覆土はd_1、d_2火山灰を主とする軟らかい土が堆積していた。覆土の上～中部から黒曜石のフレイク、チップが多量に出土した。フレイク、チップを多量に含む土壌をフローテーションしたところ、炭化したクルミの堅果が出土した。

遺　物　覆土上部からⅠ群b－4類土器、石鏃片(1)、使用痕・加工痕フレイク（2・3）、覆土上～中部から、1,388点もの黒曜石のチップ、フレイク、頁岩のチップ、礫片が出土した。1は三角形鏃の先端部と思われる。1～3は黒曜石製。

時　期　掘り込み面等から判断して縄文時代早期Ⅰ群b－4類土器の時期と思われる。



図Ⅲ－30　P－64と出土の遺物

P－70　（図Ⅲ－31）

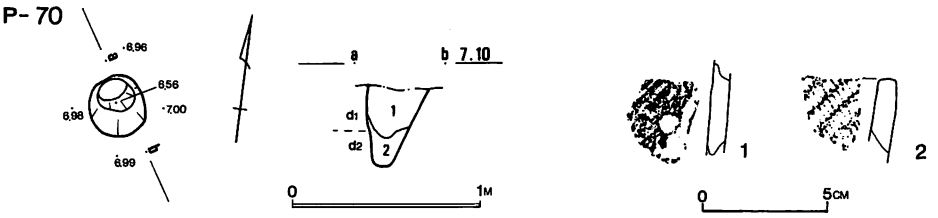
位　置　c－68－36　　**規　模**　0.31×0.25／0.10×0.16／0.42

土　層　1　黒色（Ⅱ黒）　　2　灰褐色（Ⅱ黒＋d_1　軟らかい）

特　徴　縄文時代早期Ⅰ群b－4類土器の時期の盛土を調査中に、黒色土の径10cm程の円形の落ち込みが確認できた。平面形が不整な円形を呈する柱穴状の土壙である。

遺　物　覆土からⅠ群b－4類（1)、Ⅱ群a－1　(2)土器と頁岩のフレイクが出土した。1は自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。2は包含層c－68－36周辺で出土した土器（図Ⅲ－97－15～17）と接合はしなかったが、同一個体の破片。P－53、P－57からも出土している。

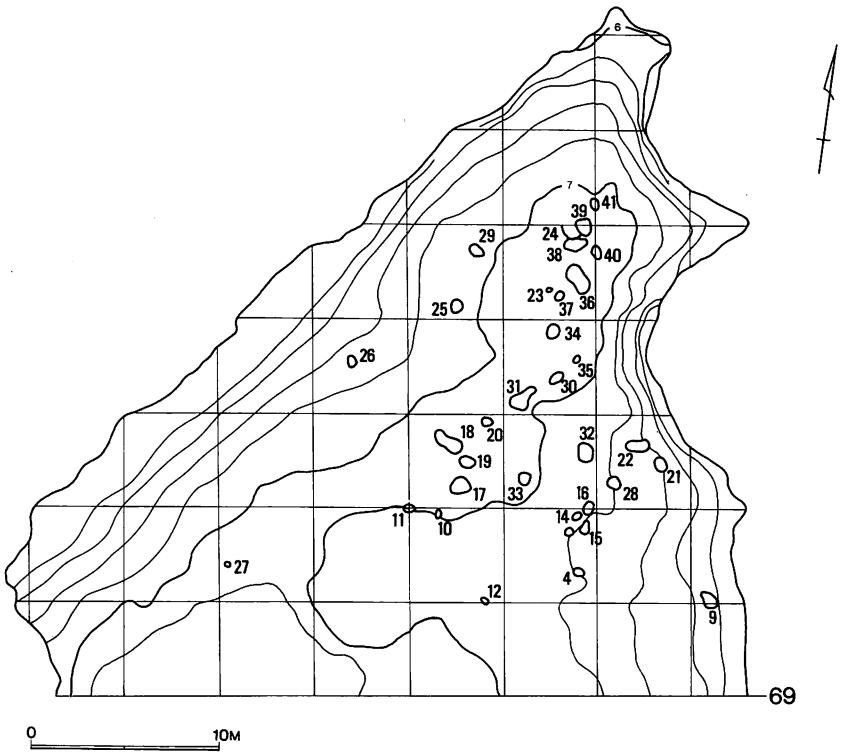
時　期　遺構の確認面等から判断して、縄文時代早期Ⅰ群b－4類土器の時期と考えられる。



図Ⅲ－31　P－70と出土の遺物

(c) 焼　土　（図Ⅲ－32～36、図版Ⅲ－20）

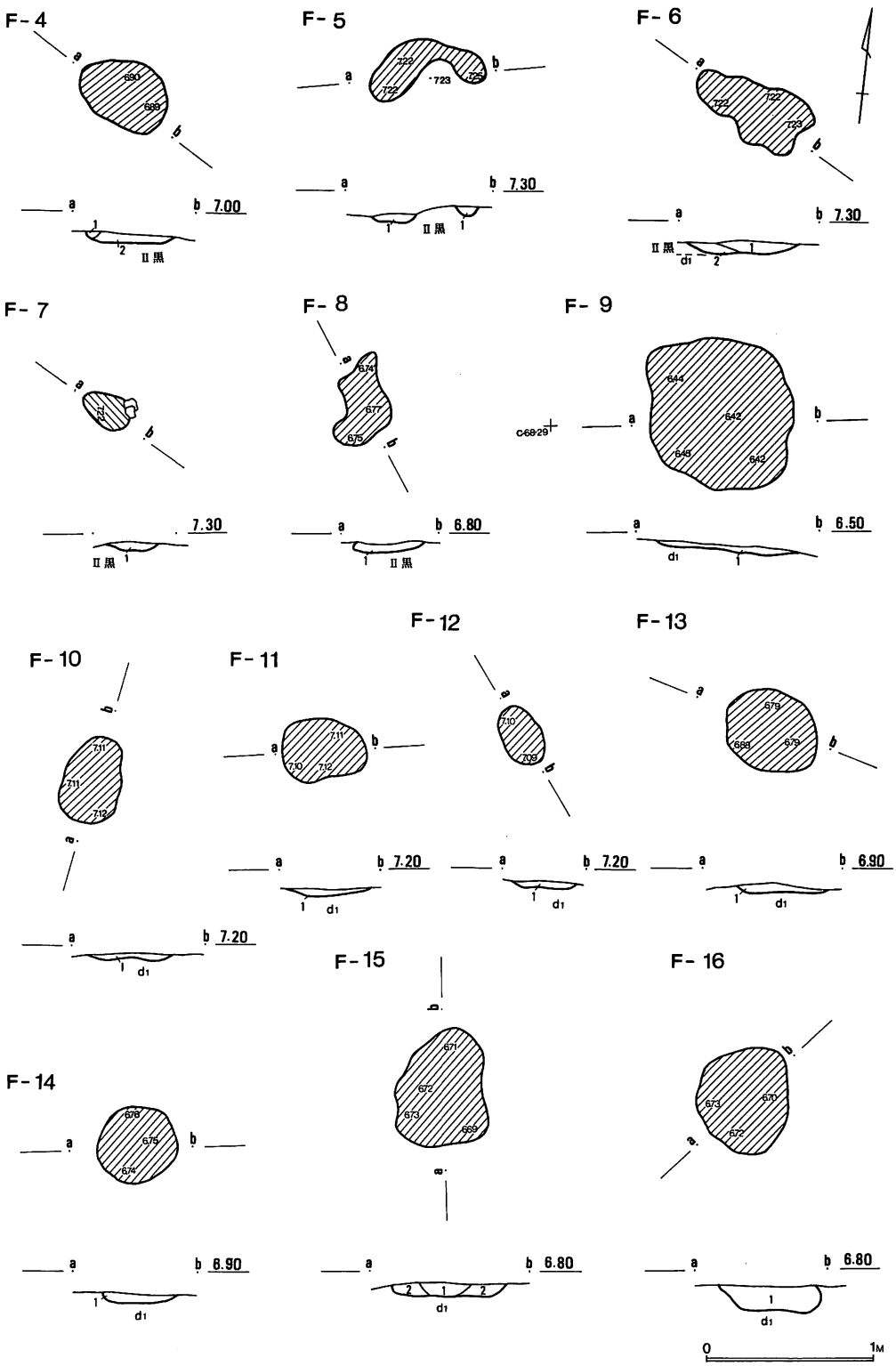
早期の焼土は34か所（Ｆ－9～41）検出された。すべてｃ－68区である。盛土を調査中に検出されたもの（Ｆ－4・9～24・28～41）とTa－d_1層上面で検出されたもの（Ｆ－25・26）がある。これらの焼土跡はⅠ群ｂ－4類土器の時期ものとみなされ、盛土の北側の一番



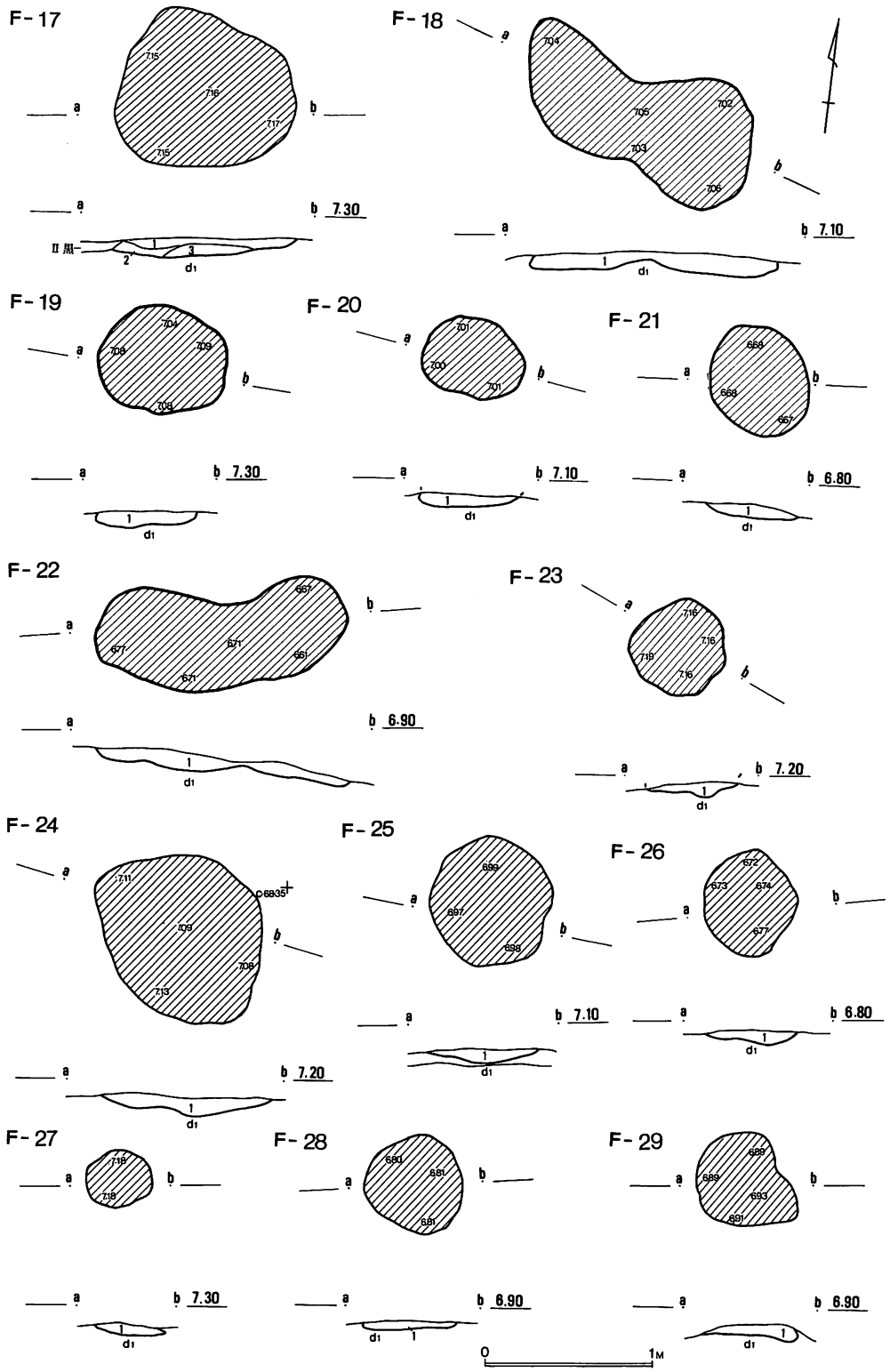
図Ⅲ－32　縄文時代早期の焼土の分布図

表Ⅲ－1　焼土一覧

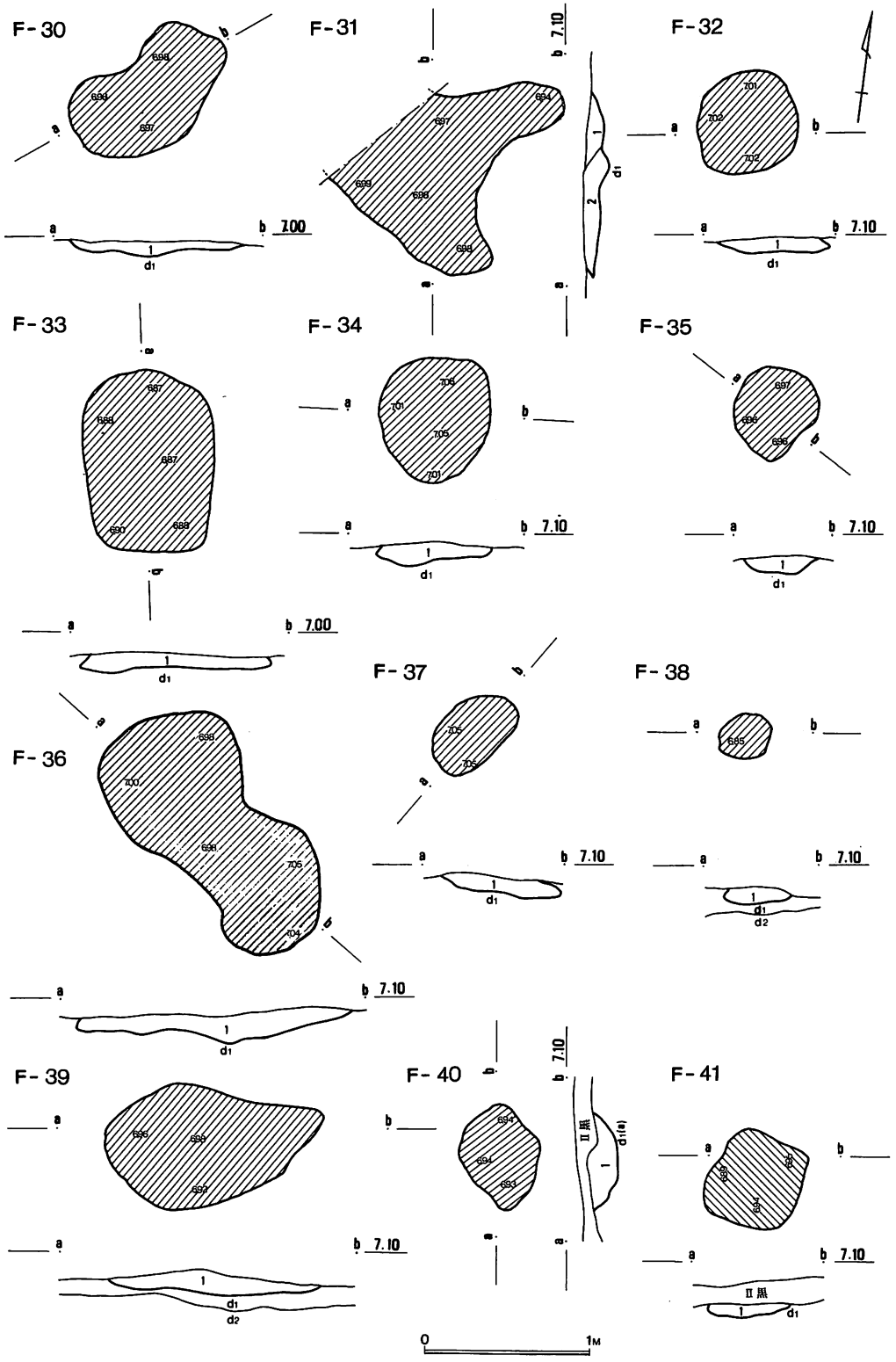
焼土番号	位　置	規模(cm) 径	規模(cm) 厚さ	土　　層	焼土番号	位　置	規模(cm) 径	規模(cm) 厚さ	土　　層
Ｆ－4	c-68-38	55X39	6	1.暗赤褐色土　Ⅱ黒＞焼土＋炭化物 2.赤褐色土　焼土＋炭化物	Ｆ－23	c-68-27	55X53	9	1.赤褐色土　焼土
5	c-68-49	66X24	5	1.暗赤褐色土　焼土＋Ⅱ黒	24	c-68-25・35	113X91	13	1.赤褐色土 焼土＋炭化物
6	c-68-68	69X36	8	1.赤褐色土 焼土　2.暗赤褐色土 Ⅱ黒＞焼土	25	c-68-45	75X73	8	1.赤褐色土　焼土
7	c-68-68	30X19	5	1.暗赤褐色土 焼土＋炭化物	26	c-68-66	55X54	8	1.赤褐色土　焼土
8	c-68-69	57X29	7	1.赤褐色土 焼土＋炭化物	27	c-68-68	38X33	7	1.赤褐色土　焼土
9	c-68-18・19	105X91	8	1.暗赤褐色土 焼土≫Ⅱ黒	28	c-68-27	54X58	5	1.赤褐色土　焼土
10	c-68-48	51X34	4	1.暗赤褐色土 焼土＋炭化物	29	c-68-45	66X54	10	1.赤褐色土　焼土
11	c-68-47・48・57・58	50X38	4	1.赤褐色土　焼土	30	c-68-36	103X53	10	1.赤褐色土　焼土
12	c-68-48・49	37X23	4	1.赤褐色土 焼土＋炭化物	31	c-68-36	100X66	15	1.赤褐色土 焼土＋炭化物 2.暗赤褐色土 焼土≫Ⅱ黒
13	c-68-38	57X47	6	1.暗赤褐色土 焼土≫Ⅱ黒	32	c-68-37	66X61	10	1.赤褐色土　焼土
14	c-68-38	48X45	6	1.赤褐色土 焼土＋炭化物	33	c-68-37	110X76	12	1.赤褐色土　焼土
15	c-68-38	73X52	8	1.赤褐色土 焼土　2.暗赤褐色土 焼土＋d_1	34	c-68-87	75X64	14	1.赤褐色土　焼土
16	c-68-37・38	62X53	17	1.赤褐色土　焼土	35	c-68-37	54X49	11	1.赤褐色土　焼土
17	c-68-47	104X88	13	1.赤褐色土 焼土　2.暗赤褐色土 焼土＋Ⅱ黒 3.暗赤褐色土 焼土≫Ⅱ黒	36	c-68-35	163X54	22	1.赤褐色土　焼土
18	c-68-47	145X51	15	1.暗赤褐色土 焼土＋炭化物	37	c-68-35	57X35	15	1.赤褐色土　焼土
19	c-68-47	75X63	10	1.暗赤褐色土 焼土＋炭化物	38	c-68-35	32X27	10	1.暗赤褐色土 焼土＋炭化物
20	c-68-47	59X44	8	1.赤褐色土　焼土	39	c-68-35	130X76	15	1.赤褐色土　焼土
21	c-68-27	65X57	9	1.赤褐色土 焼土(黒曜石のチップが多数混入)	40	c-68-25・35	63X46	18	1.赤褐色土　焼土
22	c-68-27	149X51	14	1.赤褐色土 焼土＋炭化物	41	c-68-24・34	63X62	8	1.赤褐色土　焼土


F-4
F-5
F-6
F-7
F-8
F-9
F-10
F-11
F-12
F-13
F-14
F-15
F-16
7.00
7.30
6.80
6.50
7.20
6.90
Ⅱ黒
d1
0
1M

図Ⅲ－33　焼土(1)


F-17
F-18
F-19
F-20
F-21
F-22
F-23
F-24
F-25
F-26
F-27
F-28
F-29
a
b
7.30
7.10
6.80
6.90
7.20
Ⅱ黒
d1
0
1M

図Ⅲ－34　焼土(2)



図Ⅲ－35　焼土(3)

高まりのあるところに集中している。焼土中からは、土器・石器・フレイク・チップ・礫が出土した。F－15・16・17・28からは炭化したオニグルミの堅果が出土している。F－21からは、黒曜石のチップがややまとまって出土した。なお図Ⅲ－33中のF－5～8は、縄文時代後期の焼土跡、図Ⅲ－36－1はF－7の遺物である。

遺　物　遺構ごとに掲載資料の説明をする。なお遺構出土遺物の内訳は巻末の表に示してある。

F－11（2・3）　2はⅠ群b－4類土器。自縄自巻の原体による縄文が施されている。3はⅣ群a類土器で、0段多条の原体により羽状縄文が施されている。

F－13（4～6）　いずれもⅠ群b－4類土器である。

F－14（7・8）　7はⅠ群b－3類、8はⅡ群a類土器で条の太い原体により縄文が施されている。

F－15（9）　Ⅰ群b－4類土器である。

F－17（10～12・30）　10・11はⅠ群b－4類、12はⅣ群a類土器である。10の口唇断面は角形で、口縁部に絡条体圧痕文が施されている。12は0段多条の原体により羽状縄文が施されている。30は黒曜石の加工痕のあるフレイク。

F－18（13・14）　14はⅠ群b－2類、13はⅠ群b－4類土器。14は無節の縄文のもの。

F－21（31）　31は黒曜石製の石鏃の破片。

F－24（15～22・32～38）　15～22はⅠ群b－4類土器。自縄自巻の原体による縄文が施されている。32・33は黒曜石製の石鏃の破片。34・35は頁岩製のつまみ付ナイフ。34は刃部が磨耗している。36・37は黒曜石の加工痕のあるフレイク。38は安山岩製のすり石の破片。

F－29（23・24）　23はⅠ群b－3類土器で細い貼付帯がつけられており、その間に細い撚紐を軸に巻いた絡条体圧痕文が施されている。

F－30（39）　39は薄身な頁岩製の三角形鏃。

F－31（25）　25は細い貼付帯がつけられているⅠ群b－3類土器。

F－32（40・41）　40は側縁にふくらみのある黒曜石製の木葉形鏃。40は黒曜石の石核。

F－33（26・27・42～45）　26はⅠ群b－1類土器の底部の破片。短縄文がつけられている。27はⅠ群b－3類土器。42は側縁にふくらみのある木葉形鏃かと思われる。43は薄みで木葉形を呈する石槍またはナイフ、44・45は加工痕のあるフレイクである。42～45は黒曜石製。

F－34（28）　28はⅠ群b－4類土器。比較的条の太い原体による羽状縄文が施されている。

F－35（29）　29はⅠ群b－4類土器。口唇断面は薄みで丸みがある。口縁部には縄端圧痕文が2条つけられている。体部には自縄自巻のLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。

F－36（46～50）　46は五角形鏃かとみられる。47は薄身の剝片の側縁に刃部を設けている。48～50は加工痕のあるフレイク。いずれも黒曜石製である。

F－38（51）　51は黒曜石製の石椎。剝片の一部に機能部のみを作り出している。縁辺は磨耗している。

F－41（52）　52は黒曜石製の五角形鏃かとみられる。　（遠藤香澄）



図Ⅲ－36　焼土出土の遺物

3　縄文時代前期の遺構

前期の遺構はｃ－68区から性格不明の土壙が４個（Ｐ－38・49・55・57）検出された。いずれもⅡ群ａ類土器の時期とみられ、Ⅱ黒層上面からわずかに凹んでいたＰ－38・57、盛土を調査中に黒色土の円形の落ち込みとして検出されたＰ－49・55がある。Ｐ－38の覆土中からはⅡ群ａ－１類・ａ－２類土器片が多数出土している。

前期の遺構の位置図は早期の遺構とともに、Ｔａ－d_1層上面の等高線図に示してある（図Ⅲ－３）。

(1)　Ⅱ群ａ類土器の時期の性格不明のピット

Ｐ－38　（図Ⅲ－37・38、図版Ⅲ－16－１～４）

位　置　ｃ－68－59・69　　**規　模**　2.33×1.63／2.01×1.18／0.44

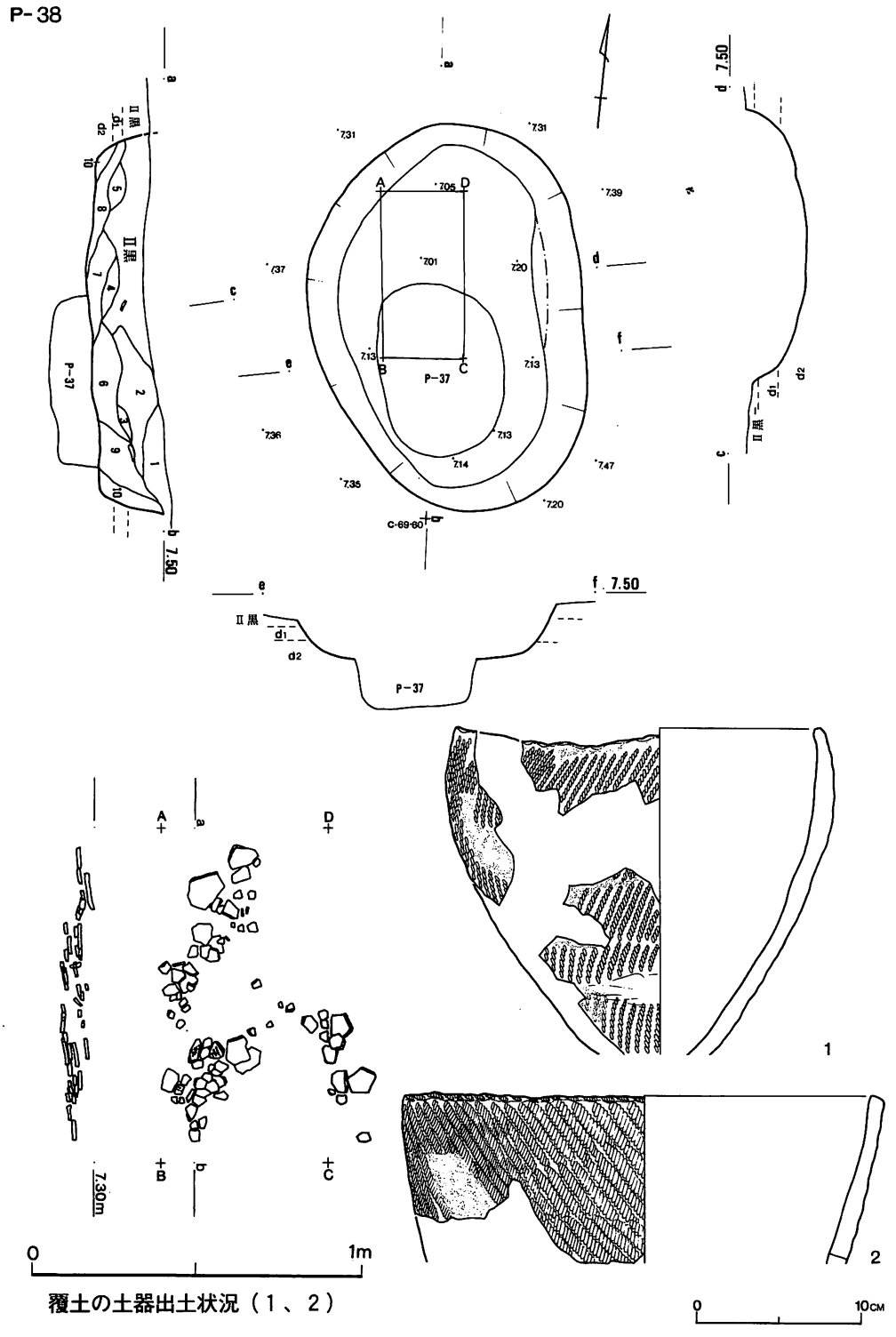
土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_1）　2　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2≫d_1）
3　橙褐色（d_2　硬い）　4　暗黄褐色（d_2≫d_1＋Ⅱ黒）
5　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1）　6　黄褐色（d_2≫d_1）
7　黄褐色（d_1≫d_1＞Ⅱ黒）　8　暗黄褐色（d_2＞d_1　硬い）
9　黄褐色（d_1＋d_2）　10　橙褐色（d_2　硬い）

特　徴　ｃ－68区南端の標高7.30ｍの平坦面に位置する。Ｔａ－ｃ火山灰を除去した段階で、Ⅱ黒層上面がわずかに凹んでいることが確認できた。又この凹みに流れ込む様な状態で、Ⅱ群土器が多数出土したことからも遺構の存在が予測できた（図Ⅲ－37）。

平面形は不整な楕円形で、壁は東側で風倒木痕により攪乱されているが、全周でほぼ急角度に立ち上がる。底面はＴａ－d_2層は10㎝程掘り込んでおり、凹凸がある。覆土は上部がⅡ黒を主とする土、下部はＴａ－d_1・d_2火山灰混りの硬い土である。底面を調査中にＰ－37の茶褐色土の落ち込みが確認できた。この土壙が廃棄された後に堆積したⅡ黒層中と覆土１・２・３層から、Ⅱ群ａ－１類土器とａ－２類土器がまとまって出土した。Ⅱ群ａ類土器の破片は、494点を数え、３ないし４個体分はありそうである。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－１類（８～10）、ｂ－２類（11・12）、ｂ－４類（13～15）、Ⅱ群ａ－１類（３・４）、ａ－２類（１、２、５～７）、Ⅳ群ｂ類（16～18）土器、石鏃（19・20）つまみ付ナイフ（21）、黒曜石の加工痕フレイクが出土した。

１・２は覆土の最上部から出土した。１は全体の約二分の一程が残存する。中形の鉢形土器で底部は欠損するが、尖底あるいは尖底に近い丸底になると思われる。器形は底部付近から胴半ばまでやや直線的に立ち上がる。胴上半部で最も膨らみ口縁部は内傾する。口唇断面は丸みのある角形で、口縁は不規則に波打つ。器面は内外ともに凹凸が著しく、器壁の厚さは口縁部で薄くなるが、胴上半部では口縁の倍ほどである。器面には条の幅が４㎜程の比較的太いＬＲ原体による斜行縄文が粗く、深く施されている。底部付近では縦行気味になっている。作りが雑な感じである。胎土には植物繊維と小砂利が混じる。２は破片が多数あったが接合できたの



図Ⅲ－37　P－38と出土の遺物



図Ⅲ－38　Ｐ－38出土の遺物

は口縁部から胴上半にかけてのみである。５・６は同一個体の破片と思われる。１と同様に尖底あるいは尖底に近い丸底になるかと思われる。器壁は胴部に較べて口縁部がやや薄みである。口唇断面は角形であるが、縄文の施文により外側の角がつぶれている。口唇上から体部には条の幅が約７㎜の０段多条のRL原体による斜行縄文が整然と施されている。５は色調が赤褐色を呈する破片で、底部に近い部分とみられる。条は縦行気味になっている。焼成が良く胎土に植物繊維と小砂利が混じる。３・４は同一個体の破片と思われる。４は丸底の底部である。１・２の土器片が出土した位置よりもやや下部から出土した。器面には、撚りの異なる太い０段多条の原体で、菱形を構成する文様が施されているが、底部付近では条が横走している。条の中の節はすり消されている。８～10は短縄文が施されている。８には器面に縄文が浅く施されている。10は軸が角形と思われる絡条体圧痕文が施されている。12・13は細い原体による縄文が施されている。12は羽状縄文になると思われ、縄文帯の間に刺突文を加えている。15は波状をなすとみられる口縁部の破片。17には非常に細い原体による縄文が施されている。

19～21はいずれも黒曜石製。19・20は凹基の三角形鏃。20は側縁にふくらみをもつ。Ⅱ群a

類土器に伴うものであろう。21は片面加工のもの。

時　期　Ⅱ黒層上面から窪みが認められたこと、出土した遺物から判断して、縄文時代前期Ⅱ群a類土器の時期と考えられる。

P－39　（図Ⅲ－39）

位　置　c－68－39、c－69－30　　**規　模**　0.78×0.72／0.45×0.42／0.30m

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_1＋d_2）　2　黄褐色（d_1）

3　暗黄褐色（d_2≫d_1）　4　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2）

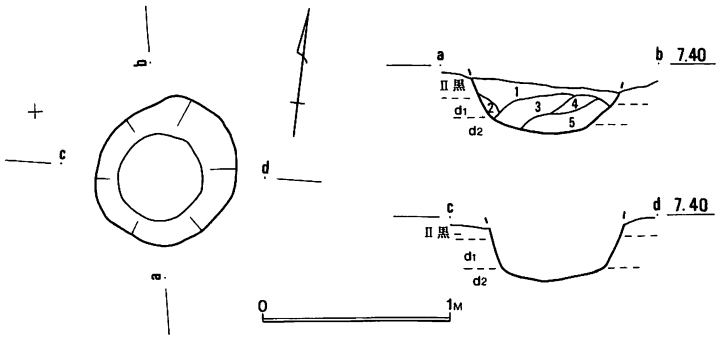
5　茶褐色（d_2≫Ⅱ黒）

特　徴　c－68区とc－69区の境界に位置する。昨年度H－16を調査する際に土層観察のためにベルトとして未発掘のまま残したところである。

Ta－c火山灰層を除去した際、Ⅱ黒上面から浅く凹んでいた。平面形は円形で、底面はTa－d_2層を僅かに掘り込んでいる。断面形は浅い皿状である。覆土はⅡ黒を主とした土で軟らかい。遺物は出土していない。

時　期　Ⅱ黒層上面からわずかに窪みが認められたことから判断し、縄文時代前期頃と思われる。

P-39



図Ⅲ－39　P－39

P－49　（図Ⅲ－40、図版16－5）

位　置　c－68－57　　**規　模**　1.41×1.27／0.97×0.76／0.35

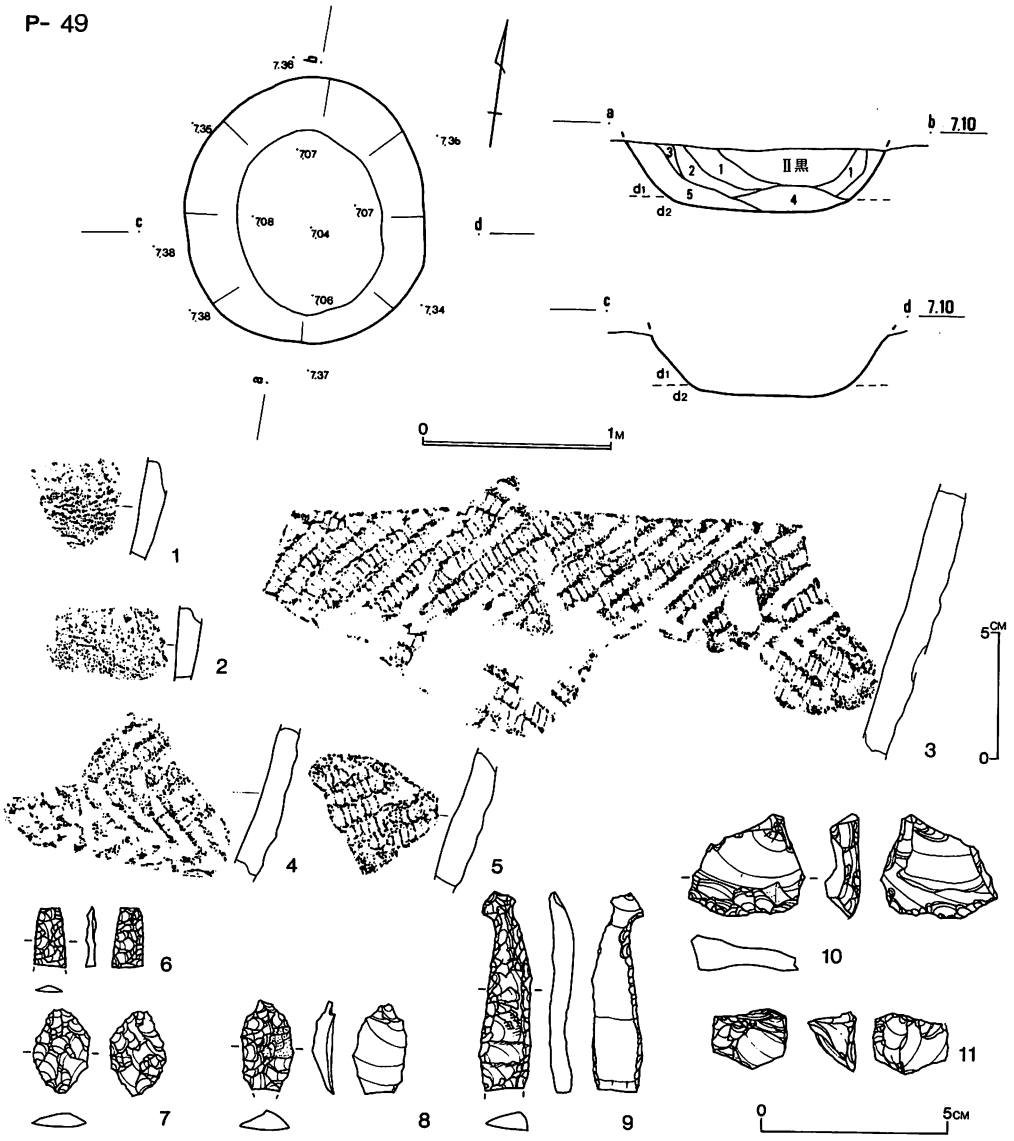
土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_1＋d_2　硬い）2　暗黄橙褐色（d_2≫d_1＋Ⅱ黒）

3　暗黄褐色（d_1＞d_2　硬い）　4　橙褐色（d_2＞d_1）

5　暗黄褐色（d_1＋d_2）

特　徴　Ⅱ黒層上面がわずかに凹んでおり、遺構の存在が予想できた。平面形を確認するため包含層を掘り下げたところ、平面形は円形。底面はd_2層を10cm程掘り込んで作られており平坦である。壁の立ち上がりは、全周でやや緩やかに立ち上がる断面形は皿状である。遺物は主に土壙が廃棄されたあとに堆積したⅡ黒層中と、覆土上部から出土した。

遺　物　覆土上部からⅠ群b－4類（1・2）、Ⅱ群a－1類（3～5）土器、石鏃（6）、つ



図Ⅲ－40　Ｐ－49と出土の遺物

まみ付ナイフ (9)、スクレイパー片 (8)、石核 (11)、加工痕、使用痕のあるフレイク、底面直上からⅠ群ｂ－４類土器、石鏃 (7)、フレイクが出土した。

１は自縄自巻のRRとLRの原体による羽状縄文が施されている。３～５は同一個体と思われる。同一個体の破片はｃ－68－57区（図Ⅲ－97－11・12)、Ｐ－46、Ｐ－49、Ｐ－55の覆土中からも出土している。広範囲に散らばっている土器である。文様は０段多条の太い撚りの原体により羽状縄文が施されている。条の中の節は磨り消されている部分が多い。６は五角形鏃、７は菱形に近い。未製品であろう。いずれも黒曜石製。９は肩の張らない細身の片面加工のもの。刃部に磨耗痕がみられる。珪岩製。９～11は黒曜石製。

時　期　Ⅱ黒上面から凹みがみとめられたこと、遺物の出土状況から判断して、縄文時代前期Ⅱ群ａ類土器の時期と思われる。

Ｐ－55　（図Ⅲ－41、図版Ⅲ－17－１）

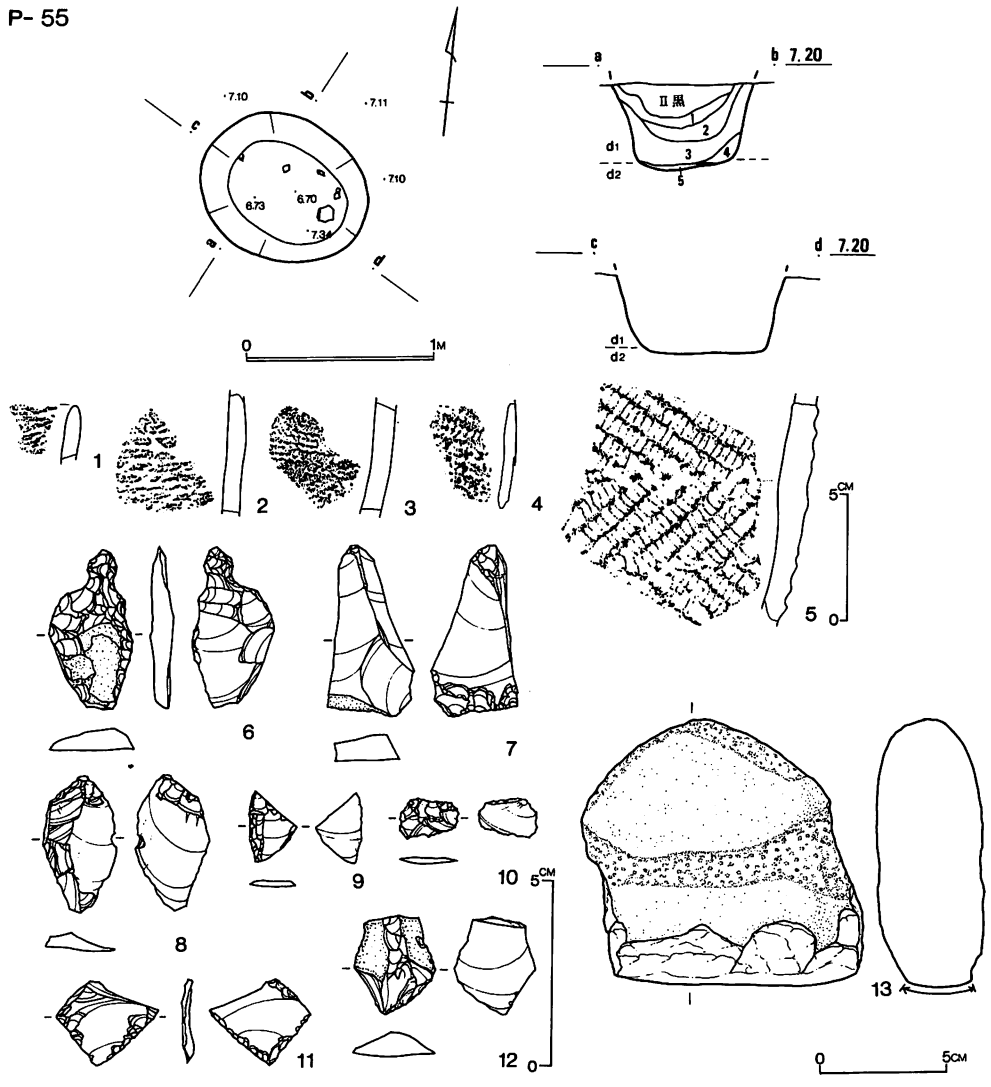
位　置　ｃ－68－35　　**規　模**　0.90×0.77／0.66×0.48／0.44

土　層　１　茶褐色（d_1＞Ⅱ黒　軟らかい）２　暗黄褐色（d_1≫Ⅱ黒）

３　茶褐色（d_1＋Ⅱ黒　硬い）　４　暗黄褐色（d_1＞Ⅱ黒）

５　黒褐色（Ⅱ黒＋d_1　炭化物が混じる）

特　徴　ｃ－68区の南側、縄文時代早期Ⅰ群ｂ－４類土器の時期の盛土が形成されている標高約7.00ｍのやや高まりのある部分から検出された。ｃ－68－35区周辺はⅡ黒層の堆積が通常よ



図Ⅲ－41　Ｐ－55と出土の遺物

りも薄く黒みも少ない。この様な状態のⅡ黒層を5㎝程掘り下げた段階で、黒色土の小さな円形の落ち込みとして確認できた。確認面からはすり石（図Ⅲ－41－13）が検出された。

平面形は楕円形、底面はd_2層を僅かに掘り込んでおり、南東側がやや凹むがほかはほぼ平坦である。壁は全周でほぼ急角度で立ち上がり壙土は上部が軟らかく中～下部は硬い。

遺　物　確認面からすり石（13）が出土した。覆土上部からは、Ⅰ群ｂ－4類土器（2～4）、つまみ付ナイフ（6）、覆土下部からはⅠ群ｂ－4類（1）、Ⅱ群ａ－1類（5）、土器、加工痕フレイク（7～12）、床面からはⅠ群ｂ－4類土器、加工痕フレイクが出土した。覆土下部からはクルミの堅果が出土した。1は口唇断面が尖り気味で薄みである。体部には比較的細い原体により縄文が施されている。2は自縄自巻のRLとLLの原体により羽状縄文が施されている。5は包含層ｃ－68－57区（図Ⅲ－97－11、12）、Ｐ－46（図Ⅲ－18－23）、Ｐ－49（図Ⅲ－40－3～5）からも同一個体の破片が出土している。条の太い原体による縄文が施されている。6は片面加工のもので、背面に原石面が残る。刃部に磨耗痕がある。6・11は頁岩製、7～10・12は黒曜石製である。13は遺構の確認面から出土した。いわゆる北海道式石冠。砂岩製である。

時　期　遺構の確認面、覆土の堆積状態、出土した遺物から判断し、縄文時代前期Ⅱ群ａ類土器の時期と考えられる。

Ｐ－57　（図Ⅲ－42、図版Ⅲ－17－2）

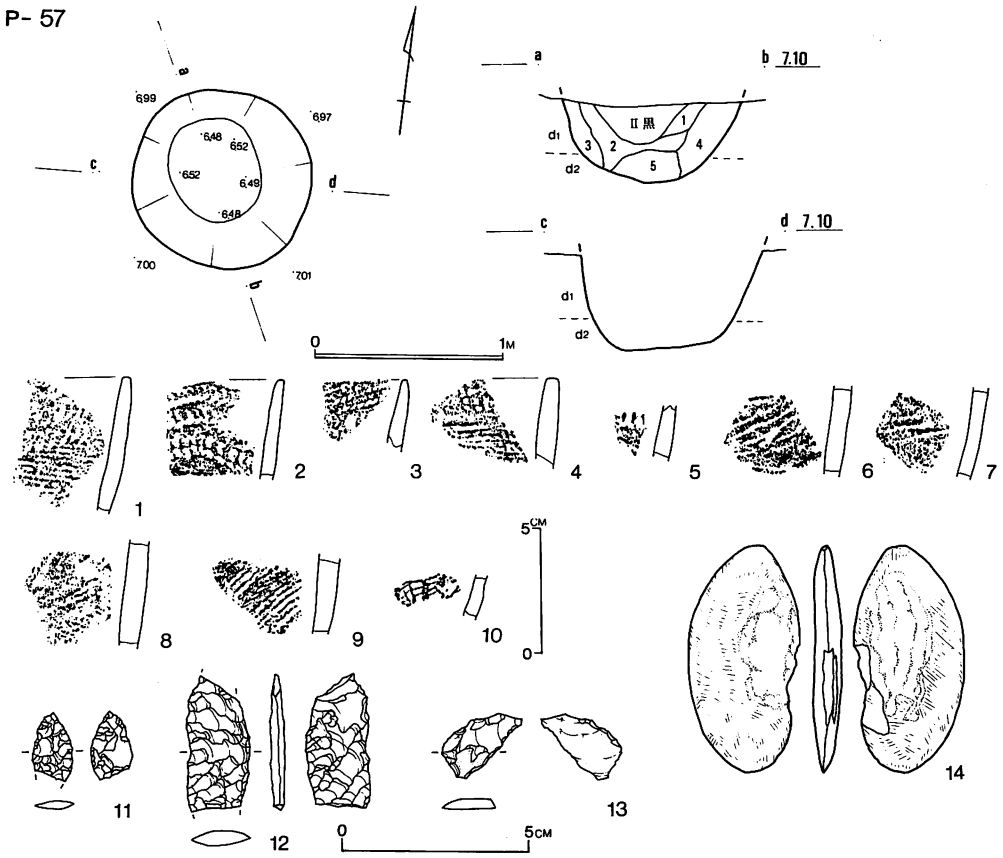
位　置　ｃ－68－24・34　　**規　模**　0.99×0.94／0.56／0.47／0.53

土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒≫d_1　軟らかい）2　暗黄褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2）
3　黄褐色（d_1＋d_2）　4　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1）
5　暗橙褐色（d_1＋d_2）

特　徴　Ta－ｃ火山灰を除去した段階でⅡ黒上面が凹んでおり、遺構の存在を予想できた。また土層を観察するために掘ったトレンチの断面からも確認できた。平面形は円形。底面はTa－d_2層を10㎝程掘り込んで作られている。壁は東・西側ではほぼ垂直に立ち上がるが、南・北側でダラダラと立ち上がる。覆土は上部にⅡ黒層を主とする軟らかい土、下部には、Ta－d_1・d_2火山灰を主とする比較的硬い土が堆積していた。遺物は覆土上部から多く出土した。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－4類（1～9）、Ⅱ群ａ－1類（10）土器と石鏃片（11）、石槍片（12）、石斧（14）、加工痕フレイク（13）、黒曜石のフレイク、チップが出土した。

1は口縁部に縄端圧痕文が3条施されている。体部には自縄自巻LRとRLの原体による羽状縄文が施されている。この口唇断面は角形で、口縁部には縄端圧痕文がある。3は自縄自巻LRの原体による縄文が施されている。4の口唇断面は角形で口唇上と口縁部には縄端圧痕文がある。体部の縄文は自縄自巻LLの原体による。8は自縄自巻LLとRLの原体により羽状縄文が施されている。9は比較的太い自縄自巻LLの原体による縄文が施されている。10は包含層ｃ－68－36区（図Ⅲ－97－15～17）、Ｐ－53（図Ⅲ－24－16）からも同一個体の破片が出土している。非常に焼成が良く色調は明黄褐色を呈する。11は木葉形鏃。12は薄みで木



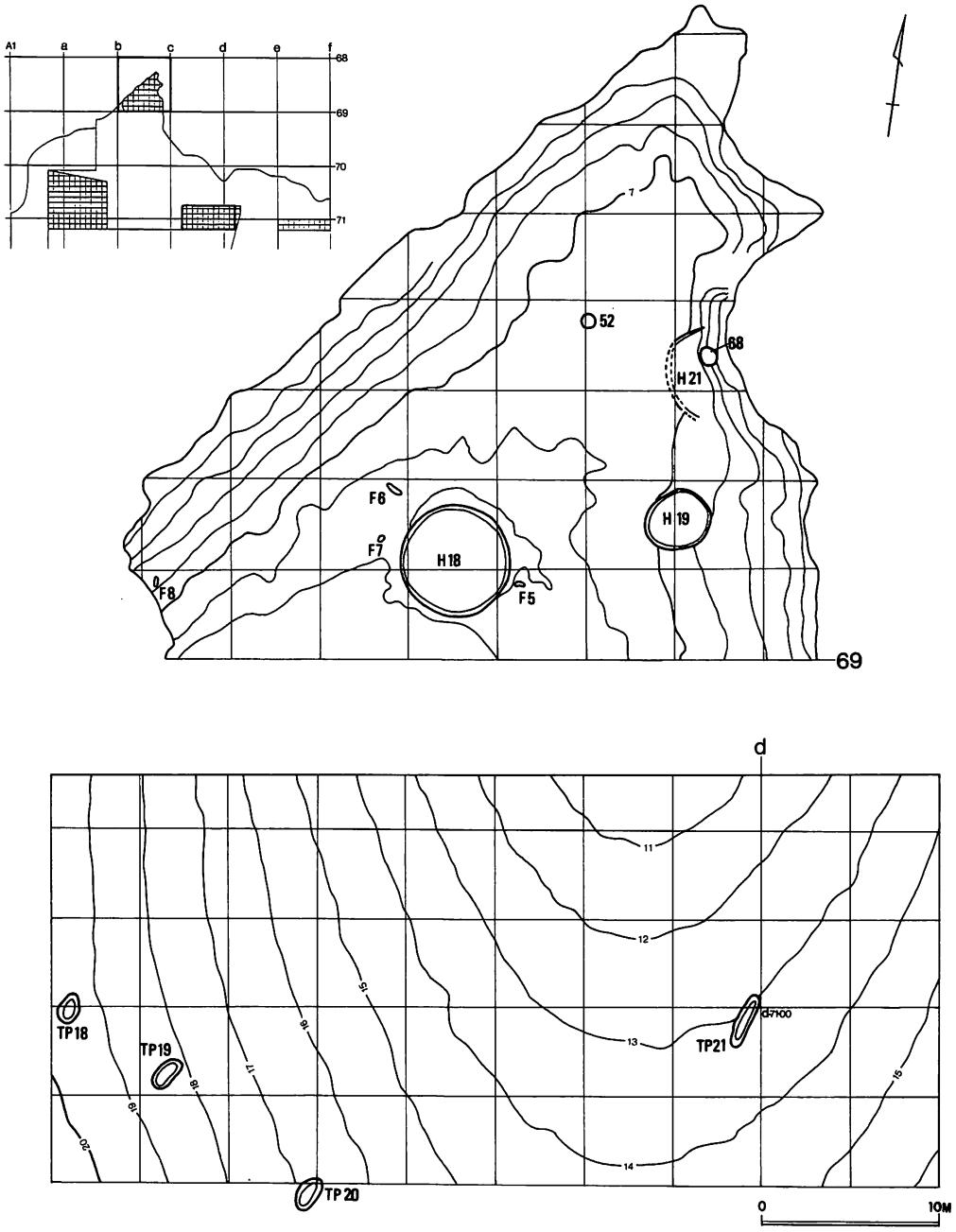
図Ⅲ－42　P－57と出土の遺物

葉形を呈する。11～13は黒曜石製。14は扁平礫の側縁に整形痕を残し、刃部を磨いている。蛇紋岩製。

時　期　Ⅱ黒層上面から凹みが認められたこと、出土した遺物から判断し、縄文時代前期Ⅱ群a類土器の時期と思われる。（遠藤香澄）

4　縄文時代後期の遺構

後期の遺構には住居跡　(3)、Ｔピット　(4)、その他性格不明の土壙　(3)、焼土　(4)がある。Ｔピット以外はすべてｃ－68区の低位段丘面から検出された。



図Ⅲ－43　縄文時代後期の遺構位置図

住居跡は、低位段丘面の平坦部から検出された後期のⅣ群ａ類土器の時期とみなされるＨ－19と、Ⅳ群ｂ類土器の時期とみなされるＨ－18、Ｈ－21があった。いずれも掘り込みが浅い竪穴である。

Ｔピットはｄ－70・71区の西側斜面から、楕円形で底面に杭穴があるＴ－18・19・20が、東側の斜面の低い位置から溝状のＴ－21が検出された。いずれも昨年度調査したものと同じ列をなすとみられる。

性格不明の土壙（Ｐ－52・68・69）は、Ⅳ群ｂ類土器の時期とみられる。焼土はⅡ黒層上面が検出された。

後期の遺構の位置図は、Ⅱ黒層上面の等高線図に示してある（図Ⅲ－43）。

(1)　Ⅳ群土器の時期の住居跡

Ｈ－18　（図Ⅲ－44～47、図版Ⅲ－６－２～８－２）

位　置　ｃ－68－48・49・58・59・68・69　**規　模**　6.37×6.06／6.14×5.98／0.20

土　層　1　暗黄褐色（d_2≫d_1＋Ⅱ黒　軟らかい　掘り上げ土の崩落したもの）

2　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2）

3　暗黄褐色（d_1＋d_2≫Ⅱ黒　床面に薄く堆積する）

4　暗橙褐色（d_2≫Ⅱ黒　炭化物が少量混じる）

5　暗褐色（d_1≫d_2 Ⅱ黒）

6　茶褐色（Ⅱ黒＋d_1＋d_2）

7　黒褐色（Ⅱ黒≫d_1　粘性があり軟らかい）

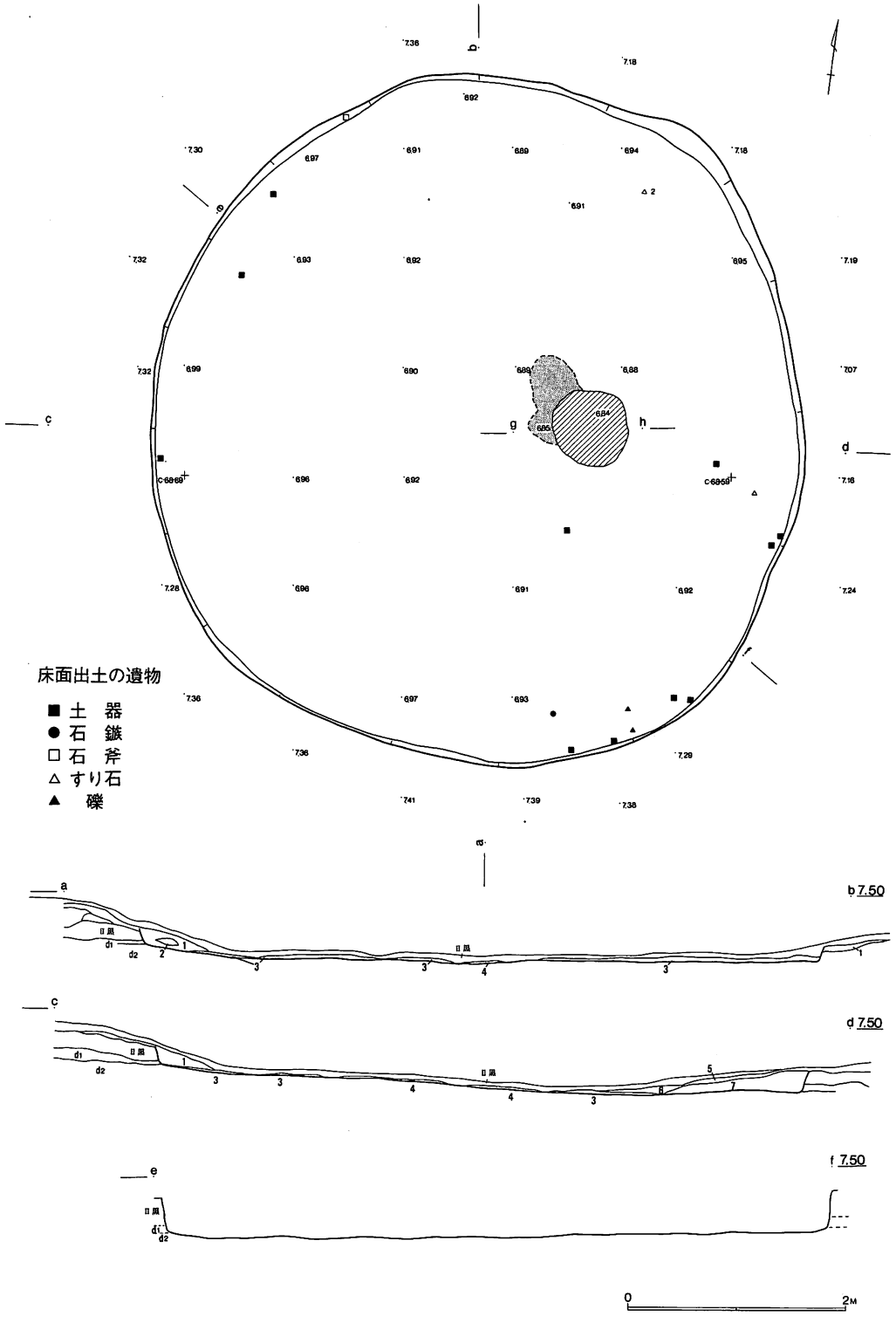
特　徴　ｃ－68区の低位段丘面、標高7.30ｍのほぼ平坦なところに位置する。昨年度Ⅰ黒層を調査した段階で、Ｔａ－ｃ層上面が大きく凹んでおり遺構の存在が予想できた。本年度の調査では、重機で除去した後の10㎝程堆積していたＴａ－ｃ火山灰を除去すると、径５～６ｍ程の凹みとそれを取り囲むように$Ta-d_1$、d_2火山灰混りの黄褐色土が広がっているのが認められた。凹みを四分割するようにトレンチを掘り調査した結果、径が６ｍを超える平面形が不整な円形の竪穴住居跡であることがわかった。掘り込み面はⅡ黒層上部である。床面は$Ta-d_2$層を５㎝程掘り込んでおり、ほぼ平坦で軟らかい。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。周辺に馬蹄形状に広がっている火山灰混じりの土は掘り上げ土である（図Ⅲ－45）。掘り上げ土は北西側で厚く、南東側で薄い。

床面中央からやや東よりの位置から、炉が検出された。明瞭な掘り込みは認められなかったが、浅い径60㎝程の範囲に焼土（図の網の部分）が薄く堆積していた。又、焼土の北西側には、炭化物と焼土が混じる土が検出された。

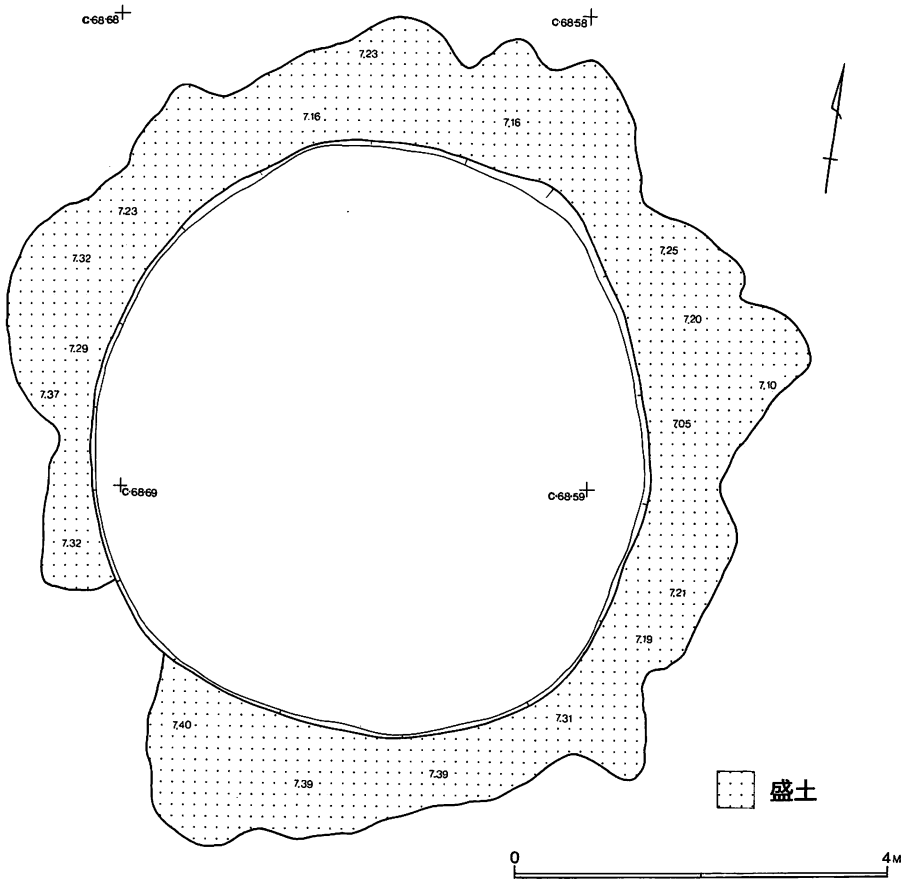
柱穴を確認するため、床面をⅢ黒層上面まで掘り下げ、又周辺に分布する掘り上げ土とその下部を調査したが検出されなかった。床面から出土した遺物は少ない。

遺　物　床面からⅠ群ｂ－４類（8）、Ⅳ群ｂ－１類（15・16）、Ⅳ群ｃ類（23・24）土器と石鏃（36）、たたき石（42）、黒曜石のフレイク、チップが出土した。覆土中からは、Ⅰ群ｂ－

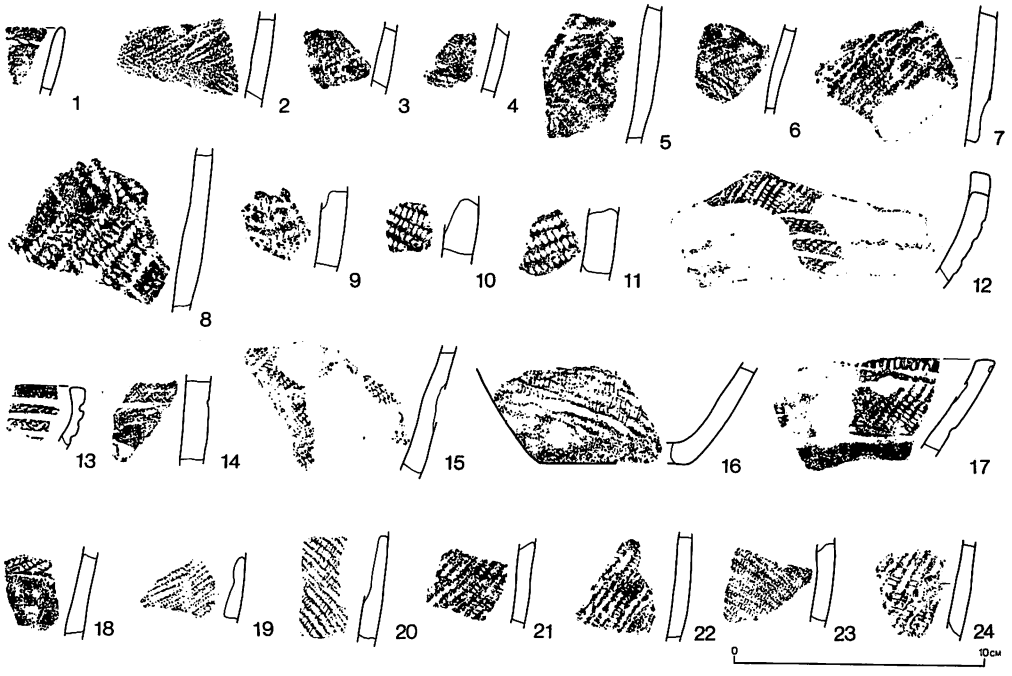
H-18



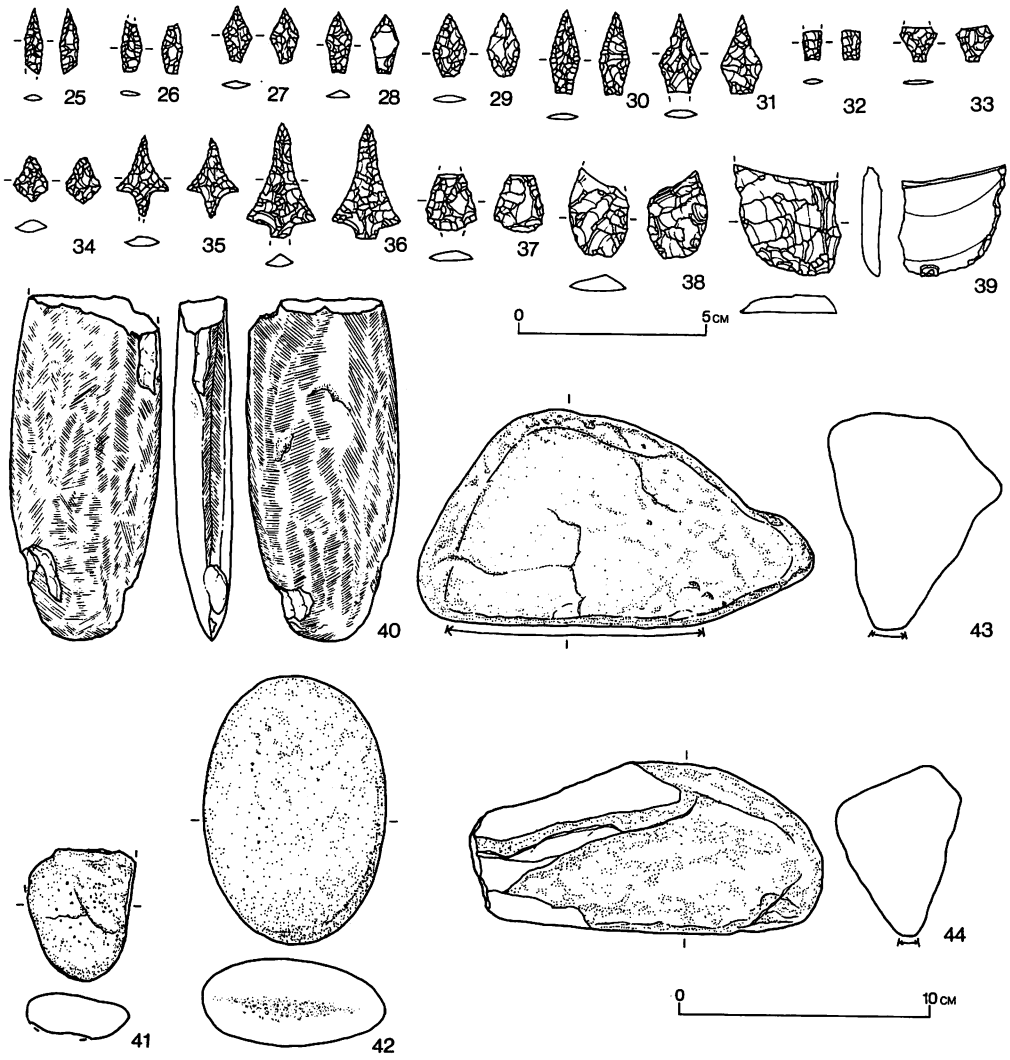
図Ⅲ－44　H－18



図Ⅲ－45　H－18の盛土の範囲



図Ⅲ－46　H－18出土の土器



図Ⅲ－47　Ｈ－18出土の石器

４類（１・２・４）、Ⅱ群ａ－１類、Ⅳ群ａ類（10・11）、Ⅳ群ｂ類（13・17・18）、Ⅳ群ｃ類（19～22）土器と石鏃（25～30・33・34・37）、石斧（40）、すり石（43）、たたき石、フレイク、チップ、礫等が出土した。掘り上げ土中からはⅠ群ｂ－３類、Ⅰ群ｂ－４類（３・５～７）、Ⅱ群ａ－１類（9）、Ⅳ群ｂ類（12・14）土器と石鏃（26・31・32・35・38）、つまみ付ナイフ片（39）、すり石（44）、たたき石（41）等が出土した。炉の中の焼土中からは黒曜石のフレイク・チップが出土した。

１は口唇の断面形はやや丸みがあり薄い。口縁部には縄線文が施されている。２は自縄自巻のＬＲとＲＬの原体により羽状縄文が施されている。３～８も自縄自巻の原体によるとみられる縄文が施されている。９は比較的太い原体により粗い縄文が施されている。11は包含層出土の土器（図Ⅲ－99－３）と同一個体と思われる。12は波状の口縁部。ＬＲ原体による縄文

を施文後、沈線を施している。口唇と内面は磨かれている。13は口唇の断面が角形で縄文を施文後沈線を施し、口縁部を磨いている。16は底部の破片でRL原体による斜行縄文が施されている。17は口唇の断面形が切り出し形で、LR原体による斜行縄文を施した後沈線をひいている。口唇部には刻み目が粗くつけられている。19～24は斜行縄文が施されている。20は0段多条のRL原体による。25～33は五角形鏃。25は細身である。29は側縁にふくらみがある。31はやや幅広い。32は小形のもの。34～37は有茎鏃。34は小形で厚みがある。35は側縁が内湾気味で平基のもの。36も側縁が内湾気味で凸基のもの。38は幅広の木葉形鏃で平基のもの。25～38はいずれも黒曜石製。39は片面加工のもので頁岩製。40は全面磨製の蛇文岩製石斧。41は側面に使用面がある。泥岩製。43・44は断面が三角形の礫の側縁に幅の狭い使用面がある。いずれも安山岩製である。

時　期　掘り込み面がⅡ黒層上部であることと、出土した遺物から判断して、縄文時代後期中葉Ⅳ群b類（手稲式）土器の時期と考えられる。

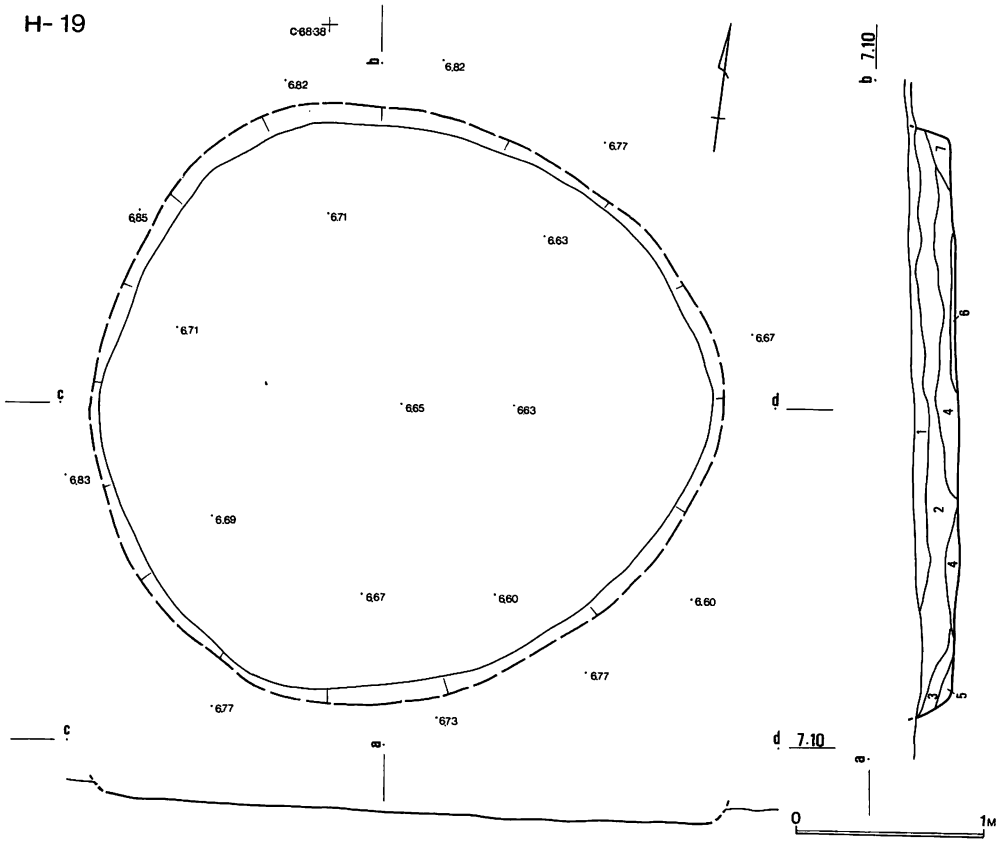
H－19　（図Ⅲ－48～50、図版Ⅲ－9－2～11－1）

位　置　c－68－28・38　　**規　模**　――／――／0.20

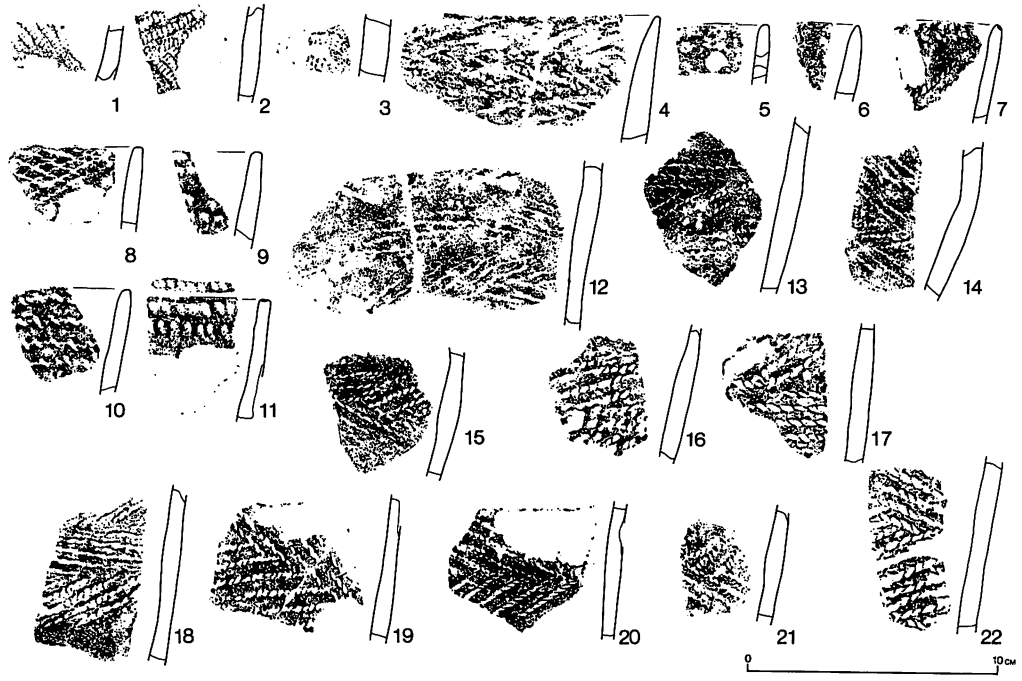
土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_1＋d_2）　2　黒色土（Ⅱ黒）
3　茶褐色（Ⅱ黒≫d_1）　4　暗黄褐色（d_1≫Ⅱ黒）
5　黄褐色（d_1＞Ⅱ黒）　6　暗黄褐色（d_1≫Ⅱ黒、4よりもⅡ黒が少ない）
7　茶褐色（d_1＋Ⅱ黒）

特　徴　標高6.60mの低位段丘面、c－68区の東端に位置する。縄文時代早期Ⅰ群b－4類土器の時期に形成された盛土の堆積状態を観察するために、30ラインの南北に縦断するように設けたトレンチの壁に浅い落ち込みが確認できた（図Ⅲ－2）。当初はこの落ち込みを遺構であるとは考えなかったため、周辺の包含層を掘り下げてしまい、ベルト部分を除く東と西側の床面、壁の立ち上がりは明瞭に捉えられなかった。ベルト部分では明瞭な壁の立ち上がりが確認されたことから竪穴住居跡であると判断した。平面図に破線で示した部分は調査した時点での床面の状態等から判断した推定線である。ベルトの部分で判断できる限りでは、床面はTa－d_2層上面で、掘り込み面はⅡ黒層上面と考えられる。壁はやや急角度で立ち上がる。覆土はⅡ黒を主とした土である。

遺　物　覆土からⅠ群b－1類（1・3）、b－2類（2）、b－4類（4～30）、Ⅱ群a－1類（31）、Ⅳ群a類（32～35）土器と石鏃（36～40）、つまみ付ナイフ（42）、スクレイパー（43）、加工痕フレイク（41）、砥石片（44）、安山岩製の台石の破片、黒曜石、頁岩、めのうのフレイク等が出土した。2は0段多条の原体による縄文が施されている。3は比較的細い軸による絡条体圧痕文が施されている。4～21・24～30は体部に自縄自巻の原体で縄文が施されているものや、口縁部に縄端圧痕文が施されている破片である。4～7は薄みで口唇の断面がやや尖り気味になる。4は口唇に縄で刻み目を施している。8・9・11は口唇の断面が角形を呈する。11は口唇上に縄による刻み目がつけられている。12～14は同一個体の破片。細い自縄自巻の

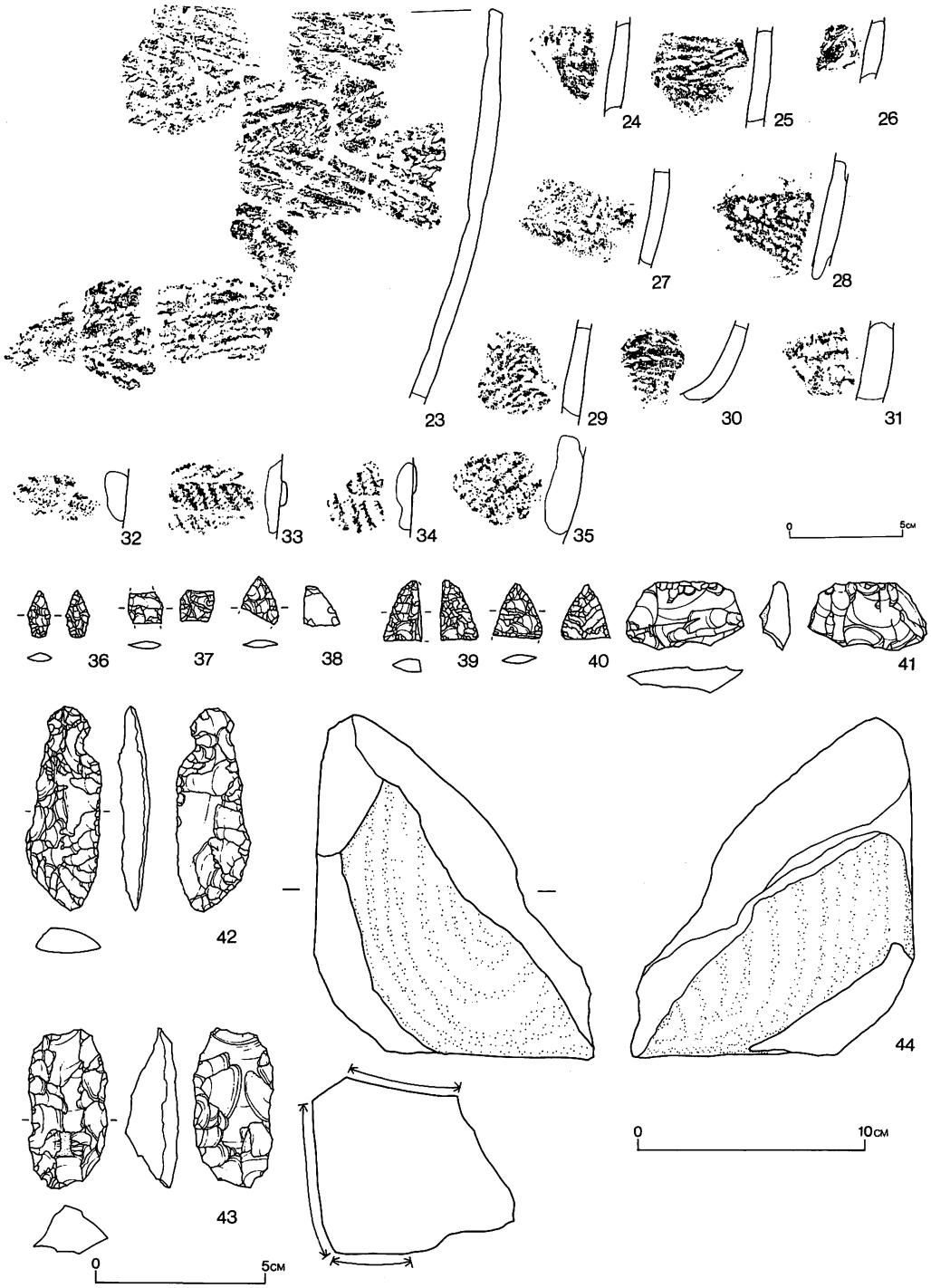


図Ⅲ－48　Ｈ－19



図Ⅲ－49　Ｈ－19出土の土器

LLとRLの原体による縄文である。16は体部にも縄端圧痕文が施されている。17～20は比較的太い原体による縄文が施されている。22・23は同一個体の破片と思われる。器壁には凹凸が



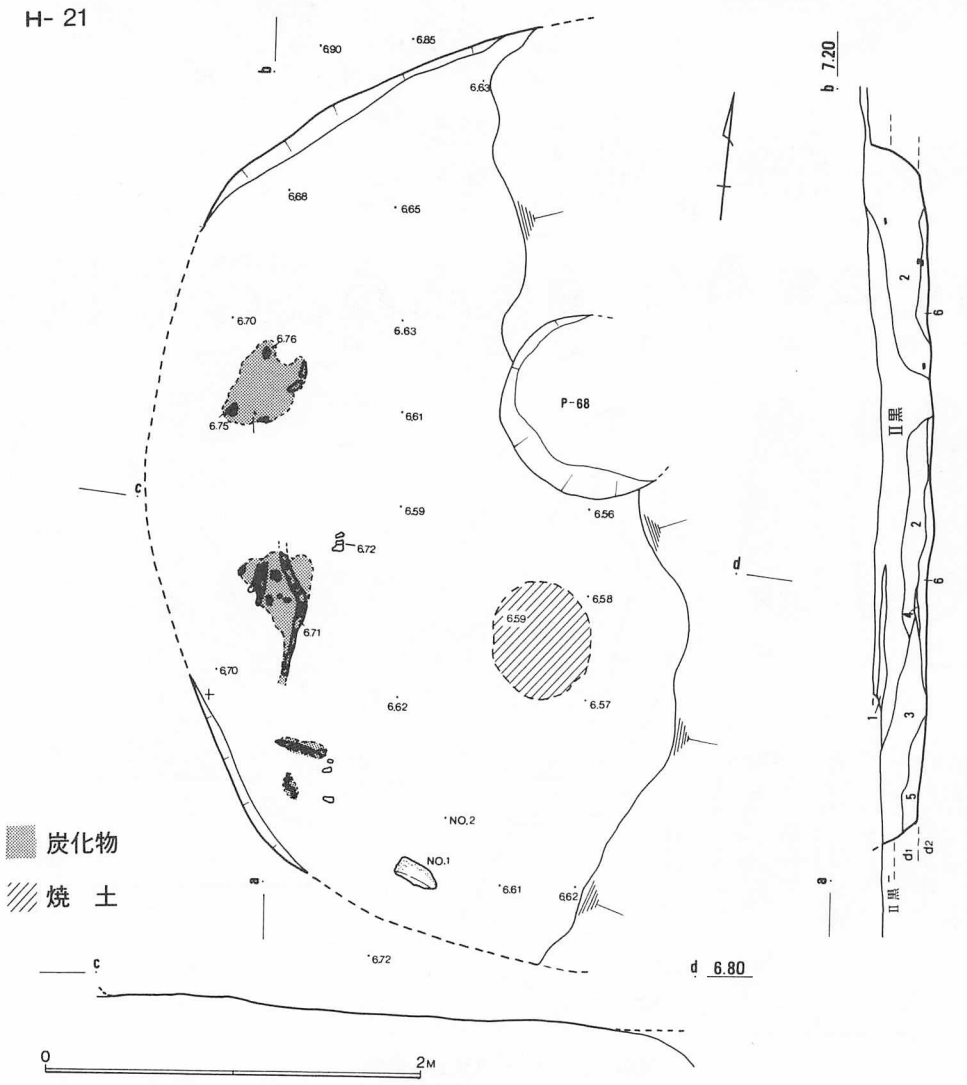
図Ⅲ－50　H－19出土の遺物

ある。口唇の断面は角形で羽状縄文が施されている。撚糸文かもしれない。30は底部付近の破片。31には条の太い原体による横走気味の縄文が施されている。33・34は包含層出土の土器（図Ⅲ－99－１、２）と接合しなかったが同一個体とみられる。体部と貼付帯土に０段多条の原体による縄文が施されている。35は磨滅していてはっきりしないが、０段多条の太い原体による縄文が施されているとみられる。36は五角形鏃。37は両端が欠損しているが五角形鏃かとみられる。40は厚みがある。有茎鏃かもしれない。42はやや厚みがある。刃部に磨耗痕がある。43は縦長の剝片の側縁に急角度の刃部を形成している。36～47は黒曜石製。44は砂岩製。

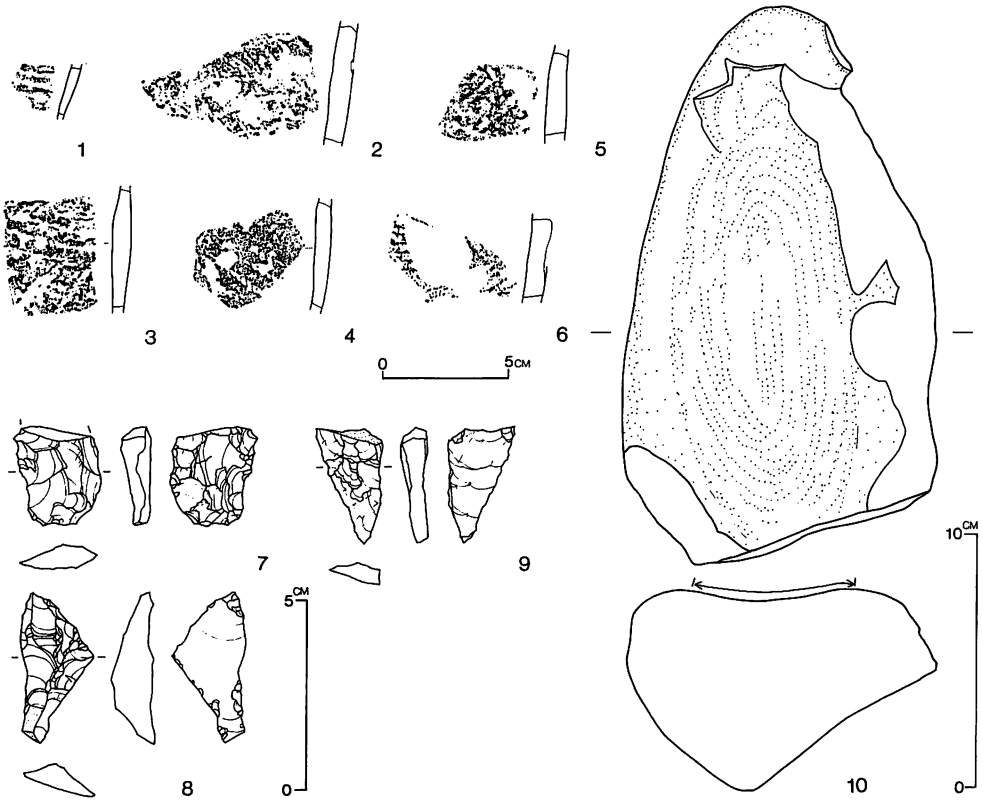
時　期　掘り込み面がⅡ黒層上部であること、出土した遺物等から判断して、縄文時代後期前葉Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。

Ｈ－21　（図Ⅲ－51・52、図版Ⅲ－11－２～－12－４）

位　置　ｃ－68－26・27・36・37　　**規　模**　――／――／0.28



図Ⅲ－51　Ｈ－21



図Ⅲ－52　H－21出土の遺物

土　層　1　暗黄褐色（$d_2 \gg d_1$）

2　暗黄褐色（$d_2 \gg d_1$＋Ⅱ黒　部分的に炭化物が混入する）

3　茶褐色（Ⅱ黒≫d_2　軟らかい）4　茶褐色（Ⅱ黒に炭化物が混じる）

5　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）

6　茶褐色（$d_1 + d_2$＞Ⅱ黒　この層の上面に炭化物が薄い層をなす）

特　徴　c－68区の東側　標高約6.70mの平坦面に位置するが、東側部分は美沢川の侵食により包含層が削られているため遺構の半分以上は確認できなかった。

30ラインに沿って南北に縦断するように、土層断面観察用に設けたベルトに浅い落ち込みが認められた。H－19と同様、遺構であると考えず30ラインの東側部分の包含層を調査したところ黒褐色土の落ち込みと、明瞭な壁の立ち上がりが確認できたことから、竪穴住居跡であることがわかった。掘り込み面はⅡ黒層上部である。

床面はTa－d_2層上面に作られており、凹凸がある。侵食の著しい東側部分では床面の状態がはっきりしない。壁の立ち上がりは部分的にしかとらえられなかったがほぼ急角度で立ち上がる。

覆土2層から床面にかけて炭化物が検出された（図の網の部分）。覆土2層上部では小さな破片が多かったが、6層上面ではややまとまっている。図示した様に残存状態がやや良好なも

のもあった。

中央部からやや北側よりの床面から炭化物混じりの焼土かと思われる土（図の斜線部分）が検出されたが、掘り込みは認められなかった。

遺　物　覆土からⅠ群ｂ－4類（1～5）、Ⅳ群ｂ類（6）土器とスクレイパー（8）、砥石(10)、黒曜石の加工痕のあるフレイク（9）、床面からスクレイパー（7）が出土した。1は非常に器壁が薄い。2～4は同一個体の破片、自縄自巻の原体によると思われる縄文が施されている。6は0段多条の原体による縄文が施されている。7・8は不定形な剝片の側縁に刃部を設けている。7～9は黒曜石製。10は砂岩製で二面に使用面がある。

時　期　掘り込みの面がⅡ黒層上部であること、Ｐ－68（縄文時代後期Ⅳ群ｂ類土器の時期）の上面をＨ－21の覆土あるいは床面に堆積していた土と考えられる黒褐色土が覆っていたことから判断し、縄文時代後期Ⅳ群ｂ類土器かそれよりもやや新しい時期かと思われる。

(2)　性格不明のピット

Ｐ－52　（図－Ⅲ－53）

位　置　ｃ－68－36・46　　**規　模**　0.64×0.64／0.50×0.50／0.24

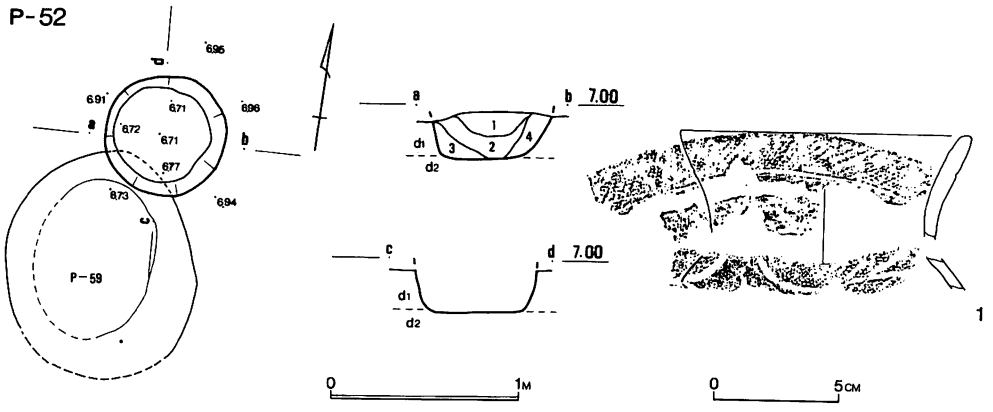
土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒＋d_1　軟らかい）2　茶褐色（Ⅱ黒≫d_1）

3　暗黄褐色（d_1＞Ⅱ黒）　4　黄褐色（d_1≫Ⅱ黒）

特　徴　Ⅱ黒層を調査中にⅣ群ｂ類土器。破片がまとまって出土した。これらの土器片は凹みに落ち込んでいるような状態であったため、遺構の存在を予想し、平面形を確認するためTa－d_1上面まで掘り下げた。Ta－d_1上面で径30cm程の小さな黒褐色土の落ち込みとして確認できた。平面形は円形。底面はTa－d_2層上面に作られ、平坦である。壁は全周でほぼ急角度に立ち上がる。南西壁でＰ－59と重複する。本遺構のほうが新しい。

遺　物　覆土上部からⅣ群ｂ類土器（1）が出土した。1は小形の壺形土器。破片は多数あったが接合できた部分は少ない。斜行縄文を施した後、沈線と磨消縄文による文様が描かれている。内外面は軽く磨かれている。

時　期　出土した遺物から判断して、縄文時代後期前葉Ⅳ群ｂ－1類土器の時期と思われる。



図Ⅲ－53　Ｐ－52と出土の土器

P－68　（図Ⅲ－54、図版Ⅲ－17－3・4）

位　置　c－68－26　　**規　模**　1.01×(0.71)／0.91×10.34／0.41

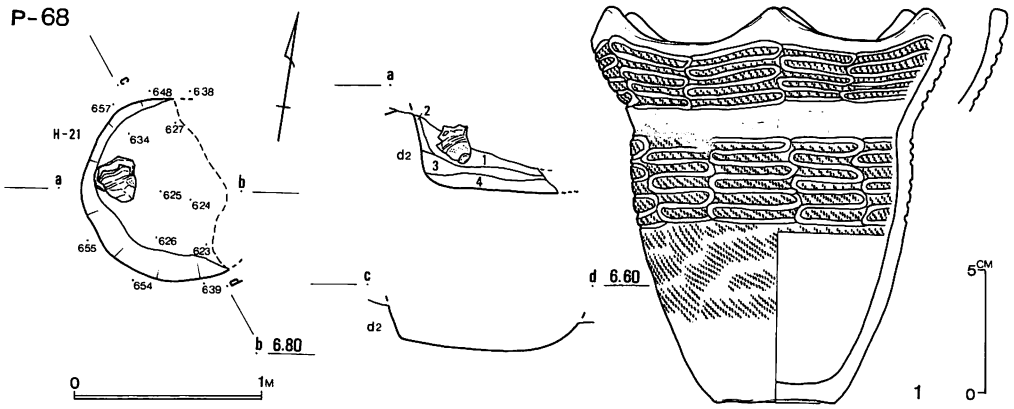
土　層　1　茶褐色（$d_1 + d_2 > Ⅱ$黒）　2　暗黄褐色（$d_1 + d_2 \gg Ⅱ$黒）

3　暗橙色（$d_2 \gg d_1$）　4　暗赤褐色（$d_1 + d_2$）

特　徴　縄文時代後期前葉Ⅳ群b類土器と考えられる住居跡H－21の床面の下部を調査中に確認できた。H－21は遺構東側部分が美沢川の侵食により削られて、急角度に落ち込んでおり床面より下部の土が露出していた。茶褐色の落ち込みを半截し調査したところ、覆土の上部からⅣ群b－1類の深鉢形土器が出土した。東側の平面形は円形かと思われる。壁は東側では美沢川の侵食により確認できなかったが、その他ではほぼ垂直に立ち上がる。覆土は軟らかい。

遺　物　覆土1層からⅣ群b－1類土器の完形土器が凹みに落ち込むような状態で出土した。このほか覆土からⅠ群b－4類土器、黒曜石のフレイク、炭化物が出土した。1は中形の深鉢形土器。波状口縁で頸部がくびれ、胴部がやや張り出す器形である。6か所に山形の突起部があるが、突起部の間隔は不揃いである。器面には地文としてRLの原体による斜行縄文が施されている。口縁部と胴部上半に平行沈線をそれぞれ6条ずつ巡らし、突起部の下位とその中間の位置で沈線を上下に短い弧線で継ぐ文様が描かれている。その後口縁部と頸部、胴下半から底部にかけて縄文を磨耗している。内面も丁寧に磨かれている。焼成は良く、内面の色調は黒褐色を呈する。

時　期　出土した土器から判断し縄文時代後期中葉Ⅳ群b類（手稲式）土器の時期と考えられる。



図Ⅲ－54　P－68と出土の土器

P－69　（図Ⅲ－55）

位　置　c－68－56　　**規　模**　0.58×0.45／0.30×0.22／0.15

土　層　1　暗黄褐色（$d_1 + d_2$）　2　暗橙褐色（$d_2 \gg d_1$）

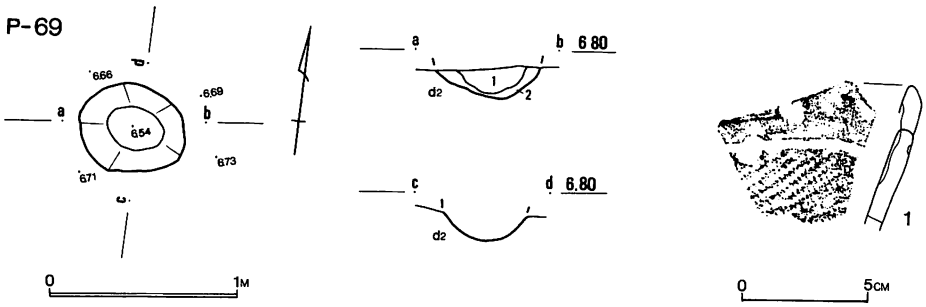
特　徴　Ⅱ黒層下部を調査中に確認できた。平面形は歪つな楕円形で、断面形は浅い皿状を呈

する小さな土壙である。

遺　物　覆土１層からⅣ群ｂ類土器（１）が出土した。１は包含層ｃ－68－48区出土の土器片（図Ⅲ－102－21）と接合はしなかったが、同一個体の破片。波状の口縁部で、LR原体による斜行縄文を施した後、沈線を引き口縁部と口唇を磨いている。

時　期　出土した土器から判断して縄文時代後期Ⅳ群ｂ類土器の時期と考えられる。

（遠藤香澄）



図Ⅲ－55　Ｐ－69と出土の土器

(3)　Ｔピット

Ｔ－18　（図Ⅲ－56、図版Ⅲ－21－２、３）

位　置　ｄ－70－79・ｄ－71－70　　**規　模**　2.41×1.29／1.21×0.43／1.73

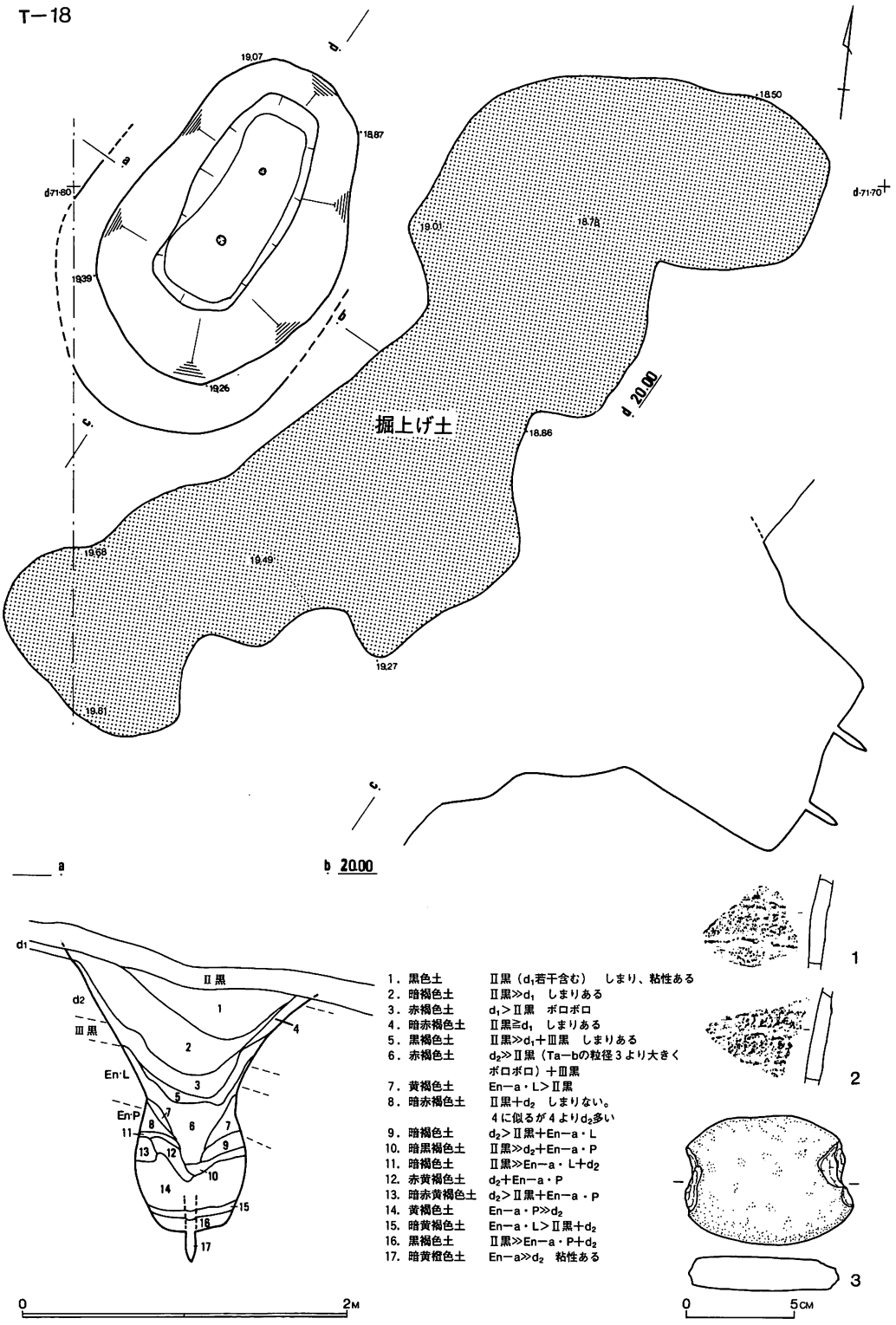
特　徴　調査区西端の北東方向に傾斜した標高19.0ｍの斜面に位置し、等高線にほぼ直交している。Ta－ｃ層除去後のⅡ黒層上面で浅い凹みが認められ、確認のためにｄ－70－79側をさらにTa－d_1上面まで掘り下げた。その結果、平面形が楕円形を呈する黒色土の落ち込みが確認され、Ｔピットであることがわかった。長軸方向はＮ－23°－Ｗである。底面の長軸は南にわずかに傾斜しており、長軸線上に先端の尖った二個の杭穴が確認された。杭穴の底面での大きさは北側が径3.7cm、南側が径６cm、深さ22cmである。短軸の両壁は底面から70cm位までがオーバー・ハングしている。形態（註１）はD_2型である。また、Ｔピットの東側には5.0ｍ×1.5ｍ程のTa－ｄとEn－ａにⅡ黒層がわずかに混在する掘り上げ土と考えられる攪乱土が分布する。

遺物が覆土上部から土器２点と礫石器１点が出土した。１・２は微隆起線文の間に短縄文が施されたⅠ群ｂ－３類の胴部破片である。３は扁平な礫の長軸を打ち欠いた石錘である。

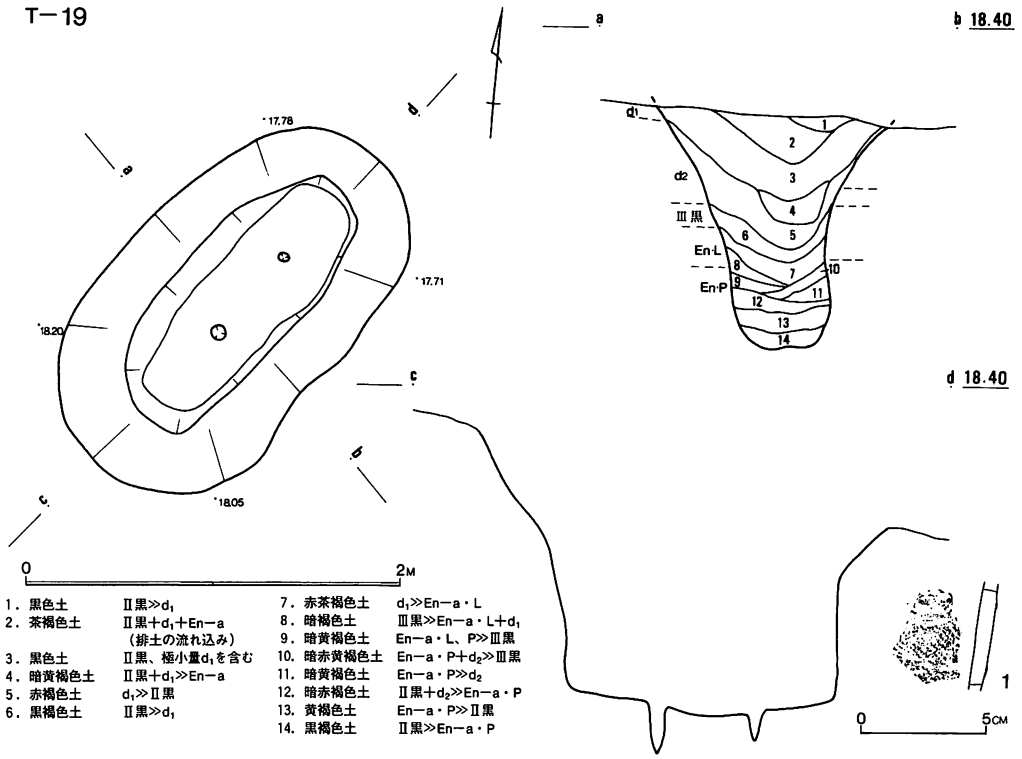
Ｔ－19　（図Ⅲ－57、図版Ⅲ－22－３）

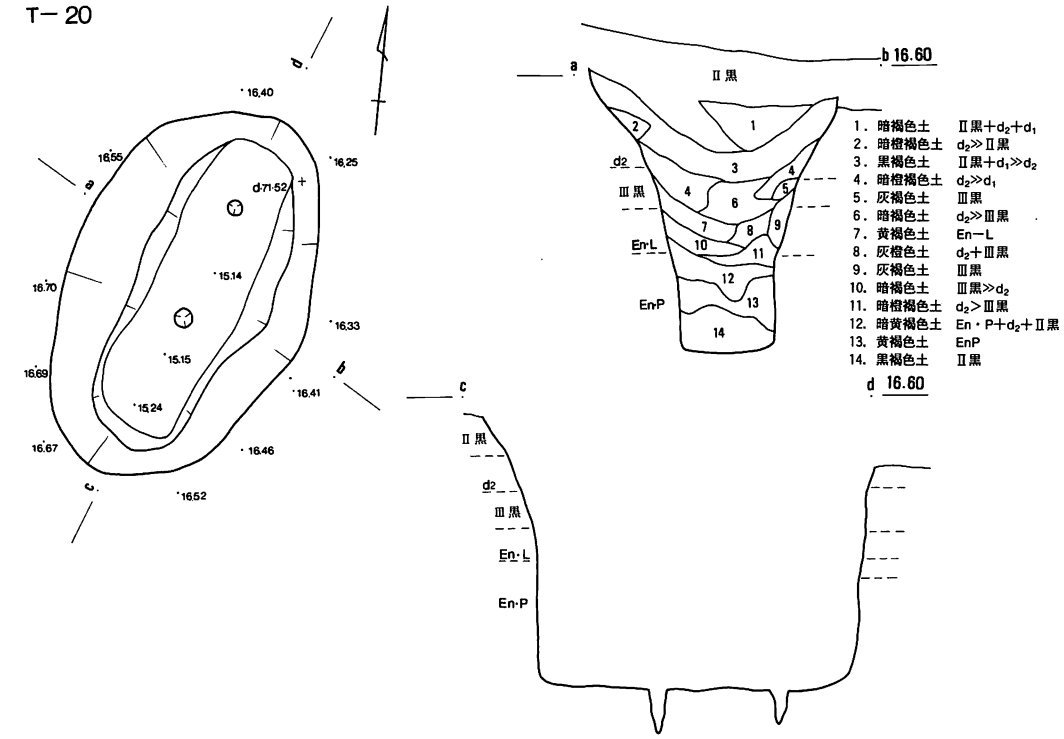
位　置　ｄ－71－60　　**規　模**　2.18×1.23／1.42×0.44／1.27

特　徴　Ｔ－18から南東に６ｍほど離れた北東方向に傾斜した標高18.0ｍの斜面に位置し、等高線にほぼ直交している。Ⅱ黒層上面で浅い凹みが認められたが、平面形をさらにはっきりするためにTa－d_1上面まで掘り下げＴピットとして確認した。長軸方向はＮ－33°－Ｗである。底面の長軸線上に先端の尖った二個の抗穴が確認された。抗穴の底面での大きさは北側が径5.1cm、深さ16cm、南側が径８cm、深さ27cmである。短軸断面は底面に近い東壁のみわ

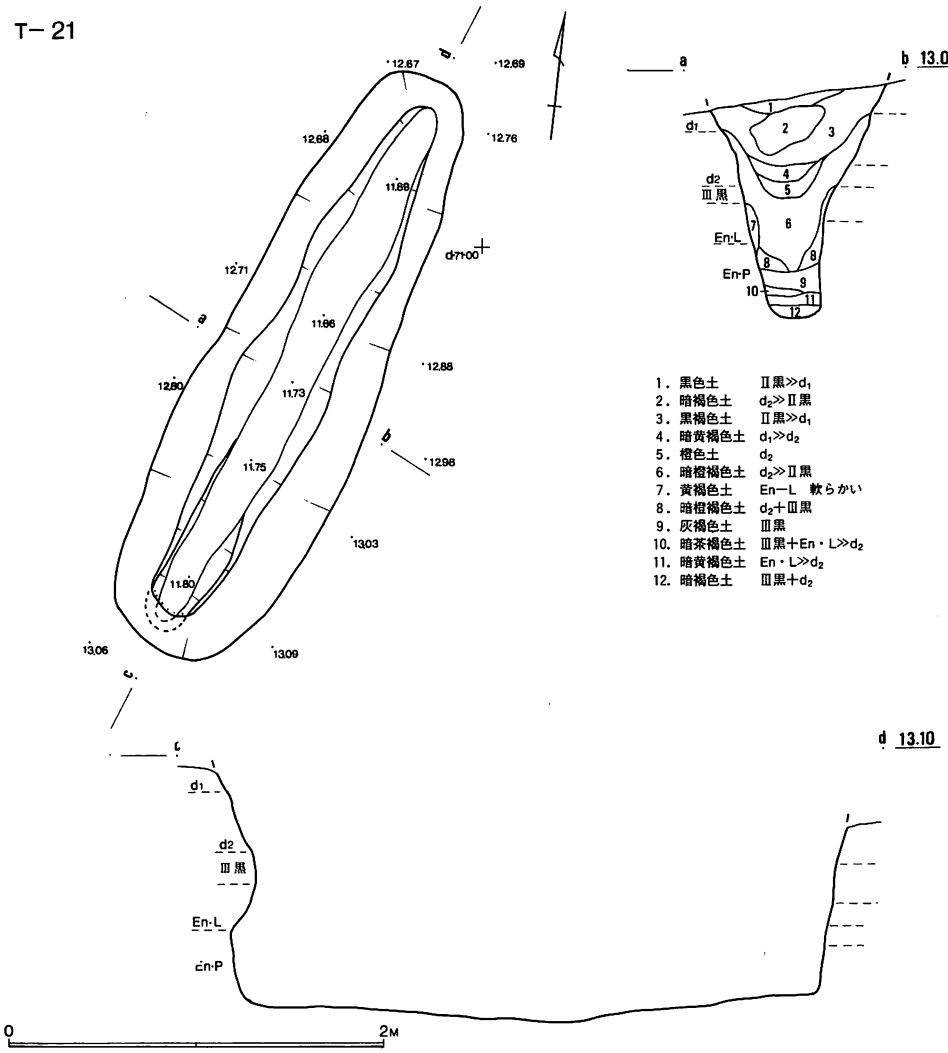


図Ⅲ−56　T−18と出土の遺物





図Ⅲ－57　T19・20と出土の遺物



図Ⅲ－58　T－21

ずかにオーバー・ハングしている。形態（註１）はD_2型である。

遺物は覆土上面から土器が１点出土した。１は微隆起線と斜行縄文の施されたⅠ群ｂ－３類の胴部破片である。（田口　尚）

註１　「Ｔピット」『美沢川流域の遺跡群　発掘調査の概要（昭和56年度)』（遠藤）および柱穴の有無でさらに細分した「Ｔピット論」『北海道の研究Ⅰ　考古篇Ⅰ』（森田・遠藤）（1984）に基づいて平面形、長幅比、杭穴の有無を中心に行った。

Ｔ－20　（図Ⅲ－57、図版Ⅲ－22－１・２）

位　置　ｄ－71－41・42・51・52　　**規　模**　2.10×1.30／1.64×0.50／1.54

特　徴　ｄ－70・71区周辺の沢地形部分の西側の斜面、標高約17ｍに位置する。Ⅱ黒層を10㎝掘り下げた段階で、黒色土の落ち込みが確認できた。遺構の半分以上が本年度の調査区域外に

及んでいるため拡張して調査を行った。平面形は楕円形を呈する。斜面上側の壁は大きく崩落している。底面の長軸線上から杭穴が２個検出された。径８㎝、深さ20㎝、径７㎝、深さ24㎝でいずれも先が尖っている。Ｔ－18・19とともに昨年度調査したＴピットと列をなす。

（遠藤香澄）

Ｔ－21　（図Ⅲ－58、図版Ⅲ－22－４）

位　置　ｄ－70－09、ｄ－71－00　　**規　模**　3.36×0.94／3.12×0.23／1.36

特　徴　ｄ－70、71区、沢地形の標高約13ｍの低い緩斜面に位置する。Ⅱ黒層を10㎝程掘り下げた段階で細長い溝状の黒色土の落ち込みが確認できた。平面形がはっきりしないためＴａ－d_1層上面まで掘り下げたところ、平面形は溝状で長軸方向の南西側の壁はオーバーハングしている。底面の幅は狭く壁はやや凹凸がある。Ⅲ黒層上面まではほぼ垂直に立ち上がるが壙口部にかけては崩落のために漏斗状に大きく広がっている。昨年度調査したｅ－71区にあるＴ－５と同じタイプのＴピットで、約50ｍ程離れてはいるが列をなすものとみられる。

（遠藤香澄）

(4)　焼土（図Ⅲ－33、－36－１、図版Ⅲ－20－3・４）

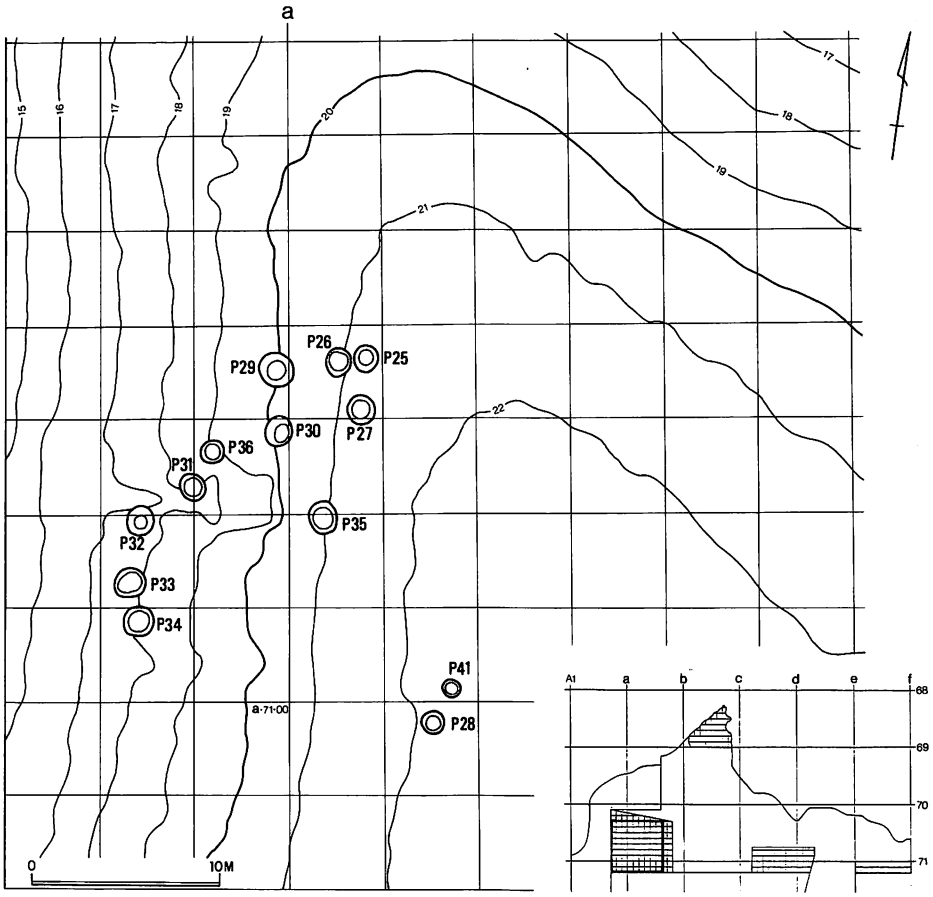
後期の焼土は４か所（Ｆ－５～８）検出された。Ⅱ黒層上面を調査中に検出されたもの（Ｆ－６～８）と、後期の住居跡Ｈ－18の掘り上げ土の下部から検出されたもの（Ｆ－５）がある。Ｆ－６・７はⅣ群ｂ類土器が出土したレベルとほぼ同じ面から検出された。

Ｆ－６からはⅠ群ｂ－４類土器、チップ、礫片が出土した。Ｆ－７からはⅠ群ｂ－１類土器（図Ⅲ－36－１）と黒曜石・頁岩のチップが出土した。Ｆ－８からはⅣ群ｂ類土器の細片が出土した。

（遠藤香澄）

５　縄文時代晩期の遺構

ａラインを中心にａ・ｂ－70区、ｂ－71区にまたがって13基の土壙が検出された。美沢川右岸の台地の肩部から西側斜面にかけて、Ⅱ黒層上面の標高17ｍから22ｍにかけて位置している（図Ⅲ－59）。Ｐ－28・41を除いた11基は斜面上にまとまって位置している。Ｐ－41を除いた12基については、Ｔａ－ｃ火山灰除去後のⅡ黒層上面に、径約１ｍ、深さ約25㎝程の浅い落ち込みが確認されたのでⅡ黒層上面より調査を行った。斜面には、Ⅱ黒層上面にＥｎ－ａ層が拡がっており、土壙を構築した際の排土と考えられる。斜面上に位置しているＰ－25～27・29～36は形態・規模ともに類似している。壁の壙口部に近い部分が拡がっている土壙があるが、覆土の状況により崩落したと考えられる。遺物の出土は、僅かにＰ－28で頁岩製のフレイク１点、Ｐ－35でⅠｂ－４類土器が１点出土している。いずれも覆土第１層からの出土であるので土壙に伴なう遺物ではない。土壙の性格は不明である。昭和51・52・55年度に、美沢３・美沢２・美沢３の調査が行なわれており、美沢２遺跡で類似する土壙が58基調査されており、同じように出土遺物は少ない。美沢２遺跡では、標高６ｍから22ｍ付近に位置しており、６ｍから８ｍ付近に集中している。時期は、検出面の状況により縄文時代晩期と考えられる。



図Ⅲ－59　縄文時代晩期の遺構位置図

P－25　（図Ⅲ－60、図版Ⅲ－18－1・2）

位　置　b－70－96　　**規　模**　1.52×1.41／0.78×0.70／0.90

土　層　1　茶褐色（Ⅱ黒＋d_2）　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）

3　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　4　赤褐色（Ⅱ黒＋d_2）

5　褐色（Ⅱ黒＋d_2）　6　明褐色（d_2＞Ⅱ黒≫EnL）

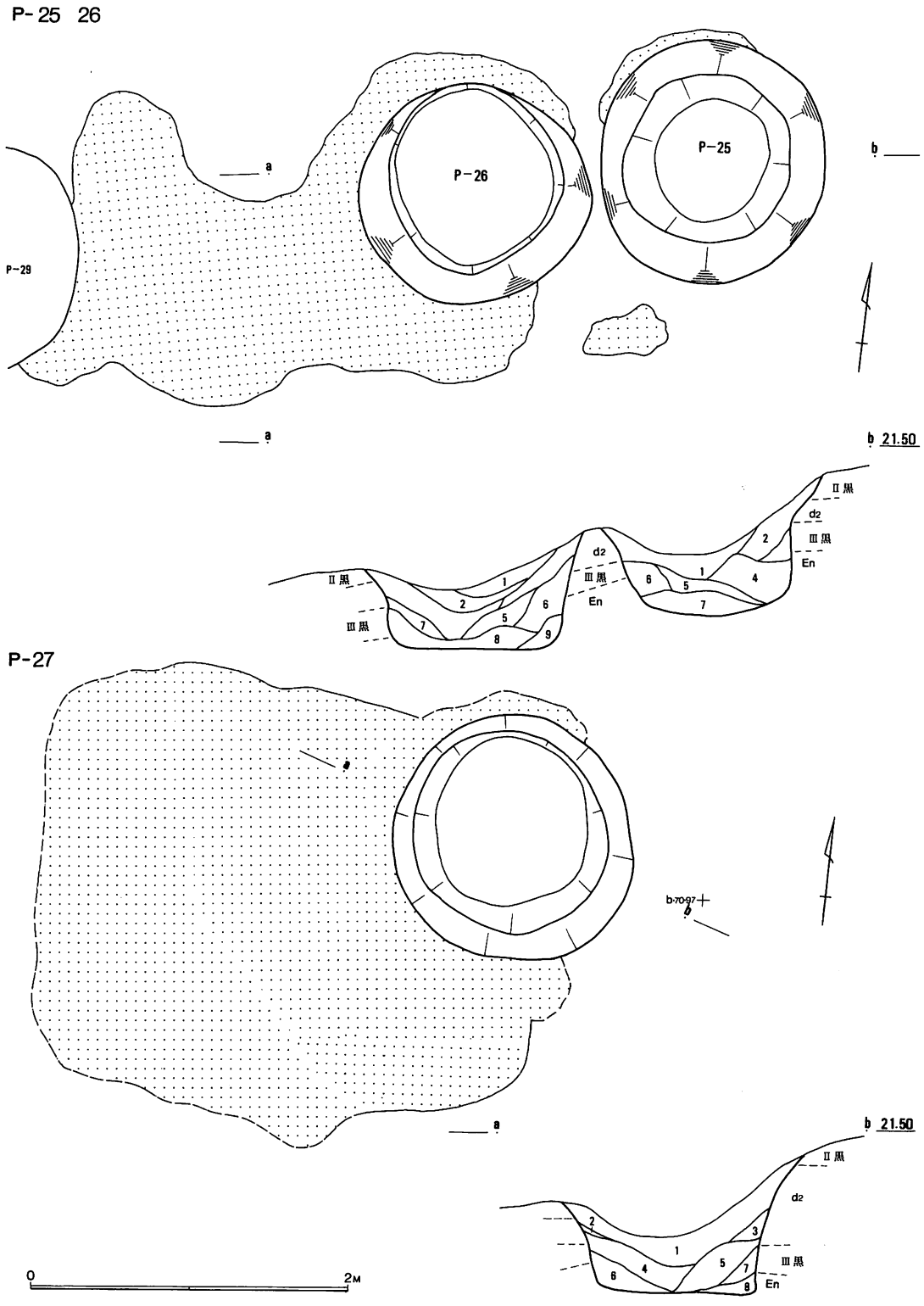
7　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）　8　淡赤褐色（d_2≫Ⅱ黒≫EnL）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い窪みが検出された。壙口部・壙底部の平面形態は不整円形である。断面の形態は、平坦な底面よりはほぼ垂直に立ち上がる。壙口部の近くは、壁面が崩れている。壙底面はEn－L層を掘り込んで構築されている。P－26と近接しており、P－25の掘り上げ土と考えられる。En－L層がP－25の上面で確認された。（越田雅司）

遺　物　出土遺物はない。

P－26　（図Ⅲ－60、図版Ⅲ－18－1・2）

位　置　b－70－96　　**規　模**　1.46×1.37／1.10×1.00／0.74



図Ⅲ－60　Ｐ－25・26・27

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2＋EnL）　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2＋EnL）
3　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）　4　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2＞EnL）
5　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）　6　赤褐色（d_2≫Ⅱ黒）
7　褐色（d_2＋Ⅲ黒）　8　明黄褐色（d_2＋Ⅲ黒＋EnL）
9　明褐色（d_2＋Ⅲ黒＋EnL）

特　徴　P－25に近接して、浅い窪みが検出された。平面形態は壙口部で不整円形、壙底部でやや隅丸方形を呈する。壙底面は平坦でEn－L層まで掘り込んで構築されている。断面形態は、壙底面より垂直に近い角度で立ち上がる。

遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

P－27　（図Ⅲ－60、図版－18－1・2）

位　置　b－70－96・97　　**規　模**　1.57×1.50／1.08×0.96／0.89

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　2　橙色（d_2≫Ⅱ黒）
3　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）　4　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）
5　暗黄褐色（Ⅱ B≫d_2）　6　黄褐色（d_2＞Ⅱ黒）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い窪みが検出された。平面形態は壙口部で不整円形、壙底部で不整楕円形を呈する。壙底面は平坦でEn－L層を掘り込んで構築されている。断面形態は、壙底面より垂直に立ち上がるが、壙口部に近い壁面は崩れている。土壙の掘り上げ土は、土壙の下に広がっている。

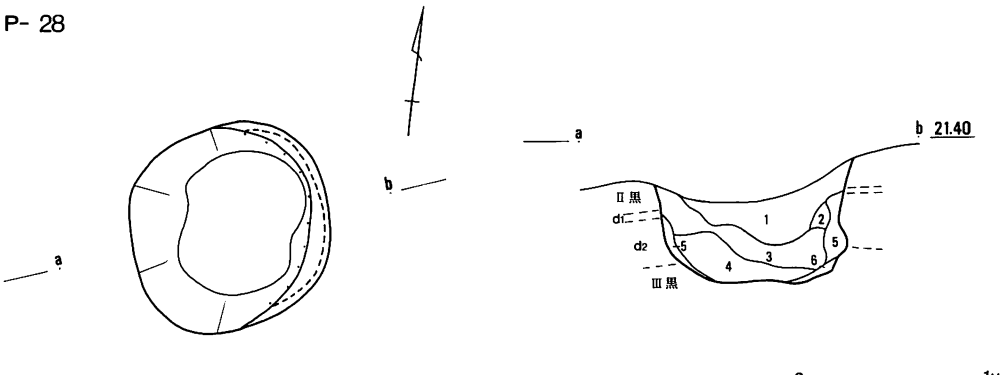
遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

P－28（図Ⅲ－61、図版Ⅲ－19－2）

位　置　b－71－80　　**規　模**　1.19×1.10／0.79×0.68／0.66

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）　2　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）
3　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）　4　明褐色（d_2＞Ⅱ B）
5　橙色（d_2≫Ⅱ黒）　6　暗褐色（Ⅱ黒≫d_2）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い窪みが検出された。台地上に位置しており、平面形態は、壙口部・壙底部ともに不整円形を呈する。壙底部はやや凹凸がみられ、En－L層を掘り込んで構築



図Ⅲ－61　P－28

されている。断面形態は東側が崩落しているため、オーバーハングしているが、壙底面からほぼ垂直に立ち上がる。

遺　物　掲載していないが、覆土１層より頁岩のフレイクが１点出土している。（越田雅司）

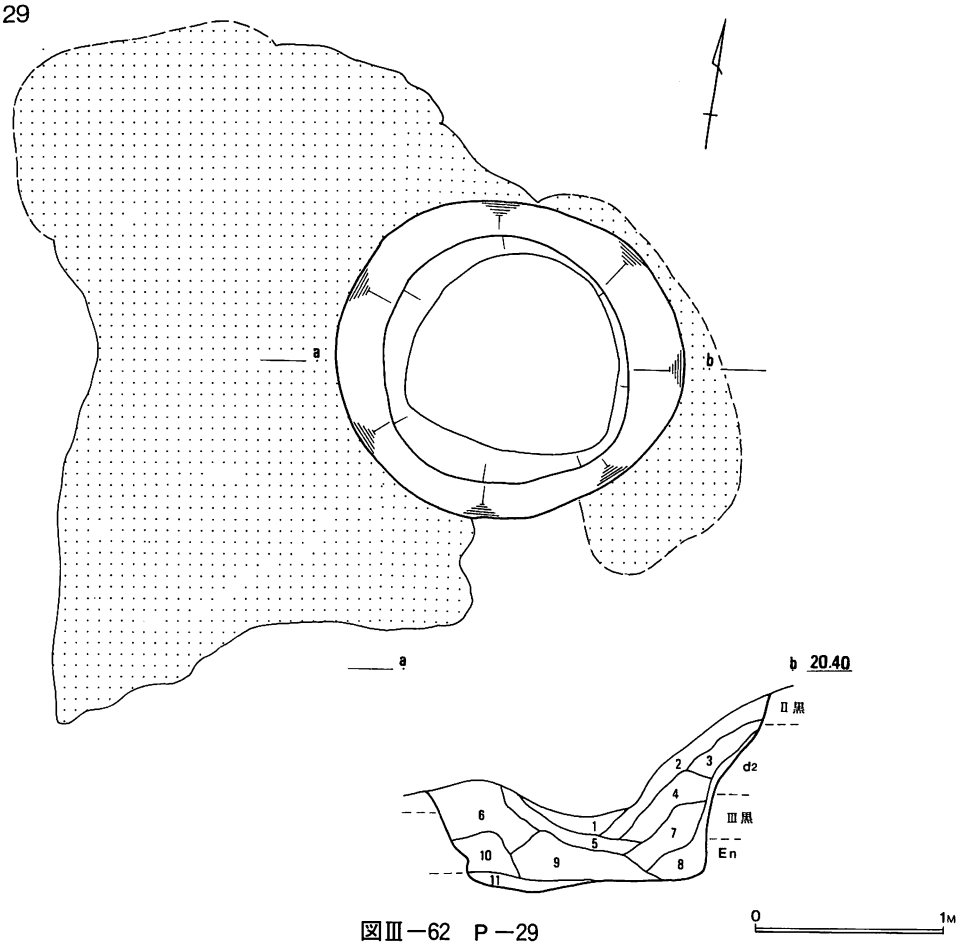
P－29（図Ⅲ－62）

位　置　a－70－06　b－70－96　　**規　模**　1.85×1.68／1.16×1.12／1.07

土　層
1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2＋EnL）　2　黄褐色（Ⅱ黒＋d_2＋EnL）
3　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2＋EnL）　4　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）
5　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2≫EnL）　6　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2＞EnL）
7　褐色（Ⅱ黒＋d_2≫EnL）　8　赤褐色（d_2（塊状）≫Ⅲ黒）
9　黄褐色（d_2＞EnL）　10　赤褐色（d_2）
11　黄褐色（d_2＋Ⅲ黒）

特　徴　Ⅱ黒層上面に、浅い窪みが検出された。平面形態は壙口部・壙底部ともに不整円形である。壙底面は平坦で、En－L層を掘り込んで構築されている。P－25・26の掘り上げ土を切って構築されている。

P-29



図Ⅲ－62　P－29

遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

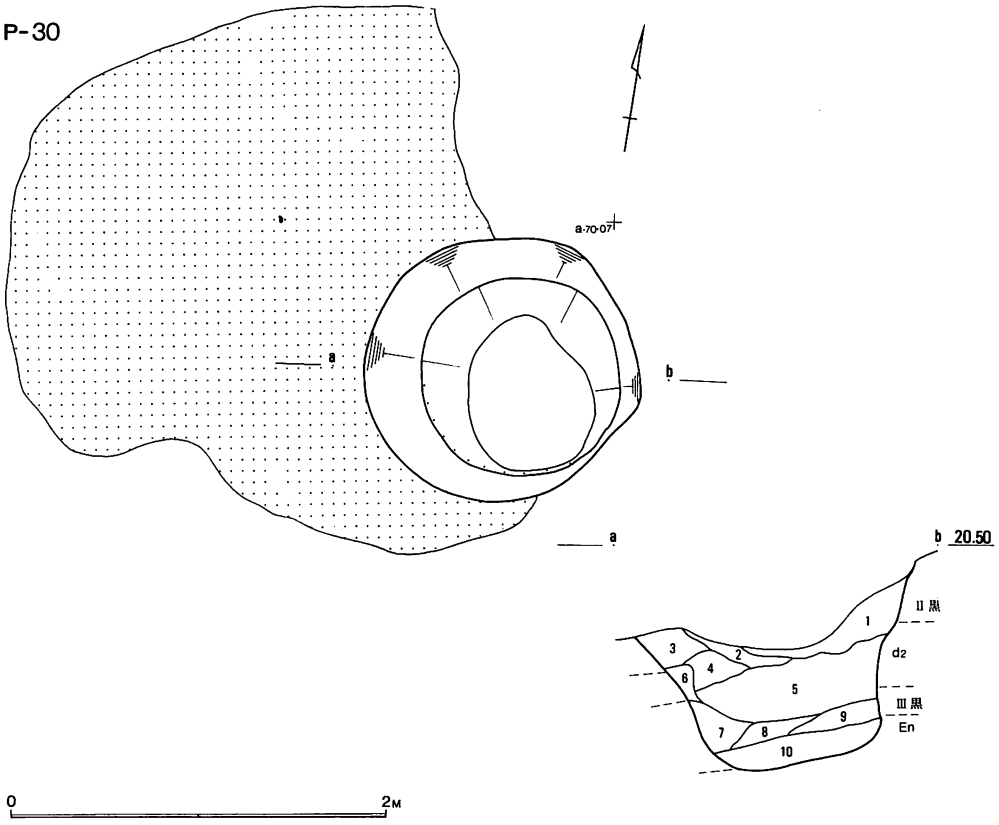
P－30（図Ⅲ－63）

位　置　a－70－07　b－70－97　　**規　模**　1.48×1.40／0.82×0.77／1.04

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2＋EnL）　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2塊（1～2㎝））
3　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）　4　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）
5　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2塊）　6　赤褐色（d_2）
7　暗褐色（Ⅱ黒＋Ⅲ黒＞EnL≫d_2）　8　暗褐色（Ⅲ黒＋EnL）
9　黄褐色（Ⅲ黒＞EnL）　10　黄褐色（Ⅲ黒＋EnL）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い落ち込みが検出された。平面形態は、壙口部・壙底部ともに不整円形を呈する。壙底はEn－L層を掘り込んで構築され、ほぼ平坦であるが、斜面に沿って緩やかな傾斜がみられる。壙口部付近で、壁面が崩れているが、壙底面よりほぼ垂直に立ち上がる。掘り上げ土は、土壙の下方と横に拡がっている。

遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）



図Ⅲ－63　P－30

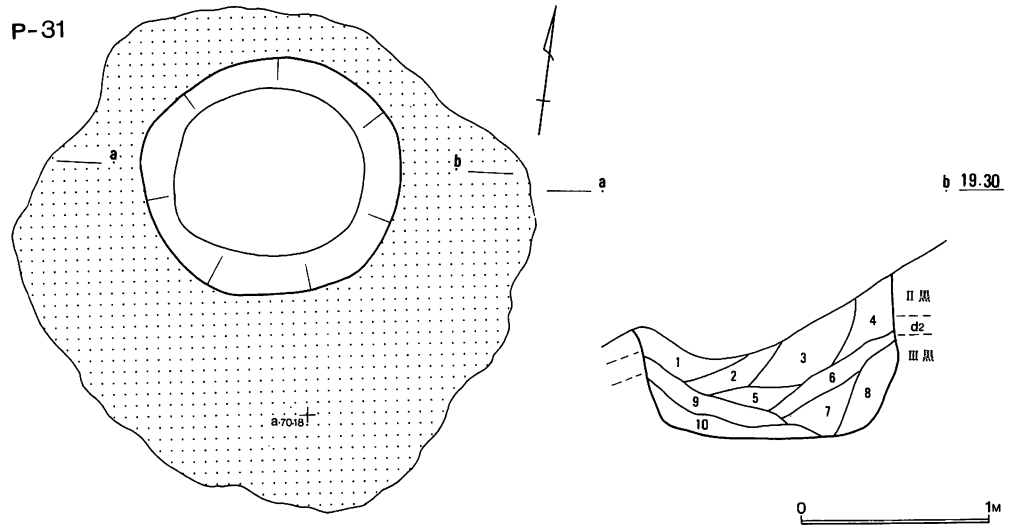
P－31（図Ⅲ－64）

位　置　a－70－07・17　　**規　模**　1.40×1.26／1.00×0.91／0.87m

土　層　1　暗褐色（Ⅱ黒≫d_2塊≫EnL）　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2塊）
3　褐色（Ⅱ黒＋d_2）　4　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）
5　明褐色（Ⅲ黒＋d_2＞Ⅱ黒）　6　暗褐色（Ⅲ黒＋d_2＞Ⅱ黒）
7　淡赤褐色（d_2＞Ⅲ黒）　8　暗褐色（Ⅱ黒＞Ⅲ黒＞d_2）
9　黄褐色（Ⅲ黒≫d_2）

特　徴　Ⅱ黒層上面に、浅い窪みが検出された。平面形態は、壙口部・壙底面ともに円形を呈する。壙底面はほぼ平坦で、Ⅲ黒層を掘り込んでおり、底面の一部はEn－L層上面で構築されている。断面形態は、壙底面よりほぼ垂直に立ち上がっている。壁面はⅢ黒層で構成されている部分が多く他の土壙に比べしっかりとしている。掘り下げ土は、土壙の周囲に拡がって確認された。

遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）



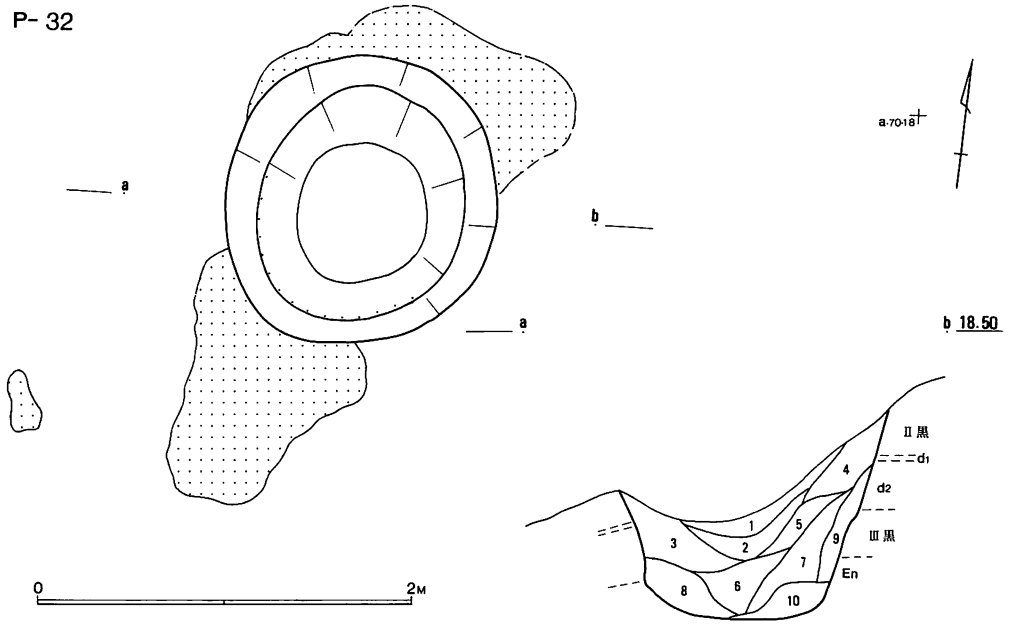
図Ⅲ－64　P－31

P－32（図Ⅲ－65、図版Ⅲ－19－1）

位　置　a－70－17・18　　**規　模**　1.58×1.46／0.76×0.72／1.90

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　2　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）
3　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2塊）　4　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2＋EnL）
5　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）　6　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）
7　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　8　明褐色（Ⅱ黒＋d_2）
9　赤褐色（d_2≫Ⅱ黒）　10　明赤褐色（Ⅲ黒＋d_2）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い落ち込みが検出された。平面形態は、壙口部・壙底部ともに円形を呈する。壙底面は平坦であり、En－L層まで掘り込んで構築されている。順面の形態は、壙底面からやや開きぎみに直線的に立ち上がり、中程で緩やかな段をもつ。壁面には一部、オーバーハングしている部分もみられるが、崩落したと考えられる。掘り上げ土は土壙の下方では



図Ⅲ－65　P－32

なく、横に拡がりがみられる。

遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

P－33（図Ⅲ－66、図版Ⅲ－19－1）

位　置　a－70－18　　**規　模**　1.66×1.52／1.46×1.10／0.98

土　層　1　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）　2　暗褐色（Ⅱ黒≫d_2）
3　明褐色（Ⅱ黒＞d_2）　4　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）
5　暗褐色（Ⅱ黒≫d_2）　6　赤褐色（d_2≫Ⅱ黒）
7　明褐色（d_2≫Ⅱ黒）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い落ち込みが検出された。平面形態は、壙口部・壙底部ともに楕円形を呈する。壙底はTa－d_2層とⅢ黒層を掘り込んで構築されている。凹凸がみられ、中央部が少し窪んでいる。断面形態は、壙底より、垂直に立ち上がる。壁面はしっかりしている。掘り上げ土は土壙の下に拡がっている。

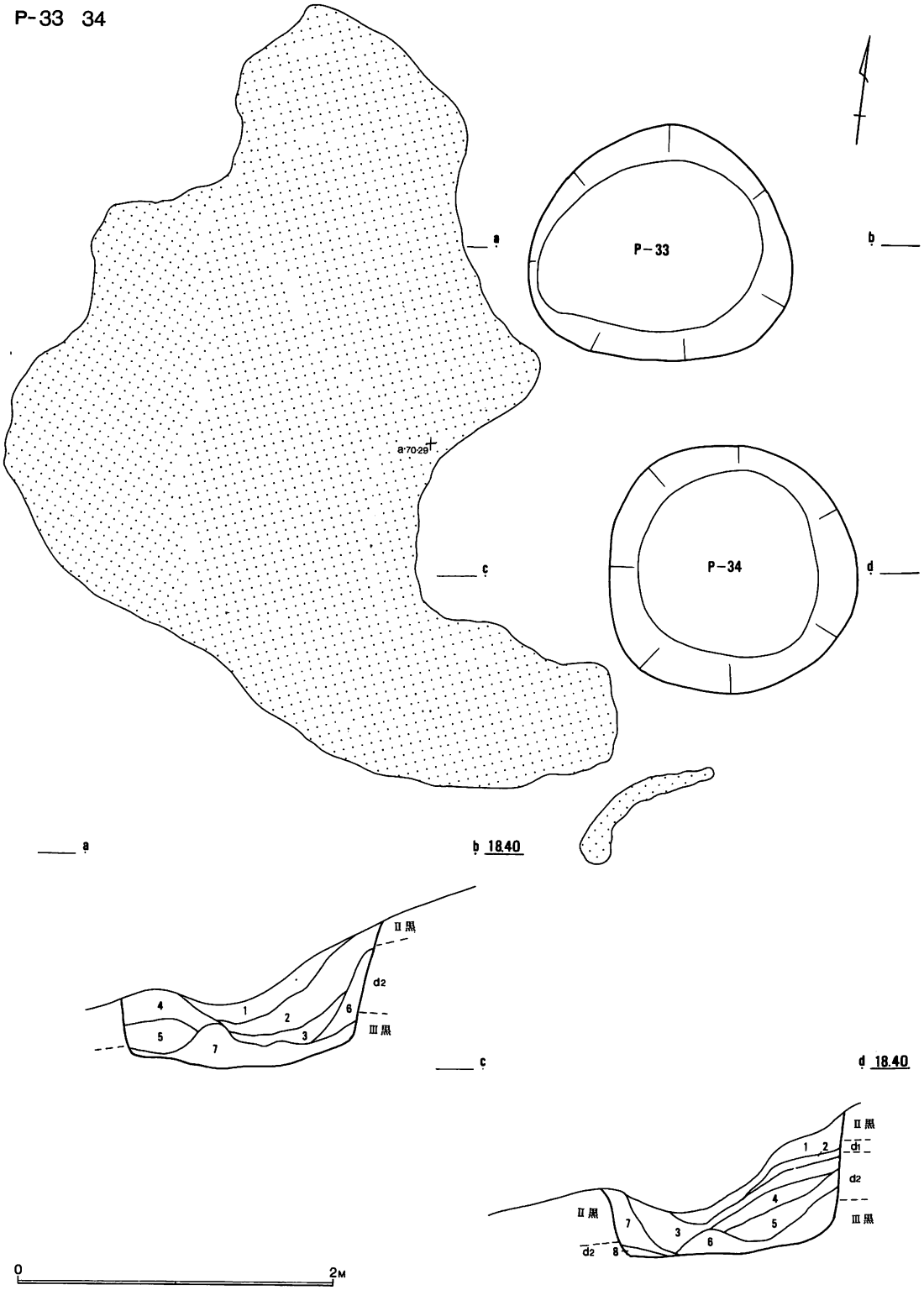
遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

P－34（図Ⅲ－66、図版Ⅲ－19－1）

位　置　a－70－19　　**規　模**　1.58×1.56／1.18×1.16／0.96

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　2　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）
3　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）　4　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）
5　明褐色（d_2＞Ⅱ黒）　6　橙色（d_2）
7　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2＋EnL）　8　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い窪みが検出された。平面形態は、壙口部・壙底部ともに不整円形



図Ⅲ－66　Ｐ－33・34

を呈する。壙底面はTa－d_2層とⅢ黒層を掘り込んで構築されており、平坦である。断面形態は、P－33と同じく、壙底面から垂直に立ち上がる。P－33・34は標高17m付近と、低い部分に位置している。P－33・34の掘り上げ土は、明瞭であり、U字形が重なり合った状態で拡がっているが、時間差は確認できなかった。

遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

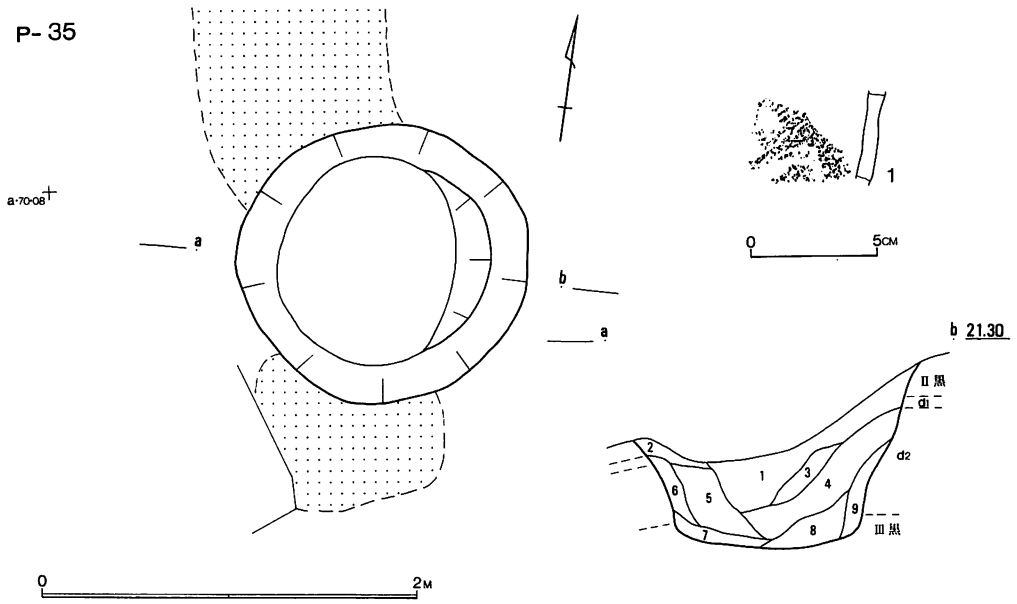
P－35（図Ⅲ－67、図版Ⅲ－18－3）

位　置　b－70－97・98　　**規　模**　1.56×1.49／1.14×1.11／1.00

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）　2　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）
3　赤褐色（d_2）　4　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）
5　暗黄褐色（Ⅱ黒＞Ⅲ黒＞d_2）　6　赤褐色（d_2）
7　明褐色（Ⅱ黒＞d_2≫Ⅲ黒）　8　明褐色（Ⅱ黒＋d_2）
9　赤褐色（d_2）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い窪みが検出された。平面形態は、壙口部・壙底部ともに不整円形を呈する。壙底面は、ほぼ平坦でⅢ黒層を掘り込んで構築されている。断面形態は、壙底面より、開きぎみに立ち上がる。壁はもろく、崩れている部分が多い。掘り上げ土は、土壙の下ではなく、横に拡がっている。遺物は1点出土しているが、覆土1層からの出土であり、土壙に伴う遺物ではない。

遺　物　Ib－4類土器の胴部破片が1点出土している。　（越田雅司）



図Ⅲ－67　P－35

P－36（図Ⅲ－68）

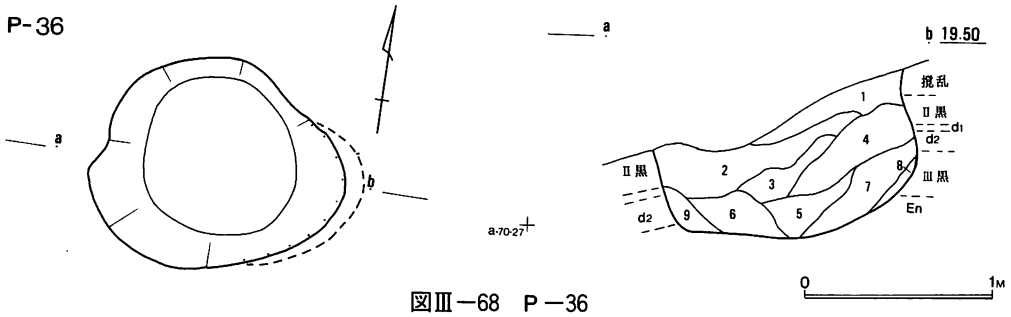
位　置　a－70－07　　**規　模**　1.38×1.11／0.82×0.74／0.90

土　層　1　暗赤褐色（Ⅱ黒＋d_2）　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2≫Ⅲ黒）
3　赤褐色（d_2）　4　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）
5　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　6　明褐色（Ⅱ黒＋Ⅲ黒≫d_2＋EnL）
7　赤褐色（d_2）　8　黄褐色（Ⅲ黒＋d_2）
9　暗赤褐色（Ⅱ黒＋d_2塊）

特　徴　Ⅱ黒層上面で、浅い窪みが検出された。平面形態は、壙口部が不整楕円形、壙底部が不整円形を呈する。壙底面は浅く窪んでおり、En－L層を掘り込んで構築されている。壱断面形態は、崩れてオーバーハングしているが、壙底よりやや開きぎみに立ち上がると考えられる。他の土壙より、平面の大きさは小形である。掘り上げ土は認められなかった。

遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

P-36



図Ⅲ－68　P－36

P－41（図Ⅲ－69、図版Ⅲ－19－2）

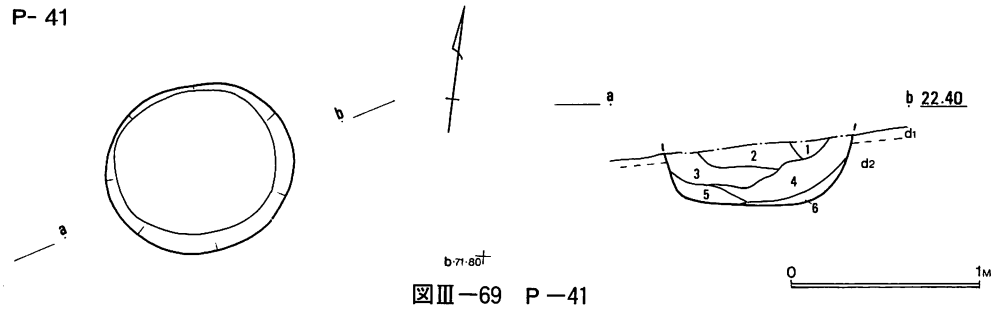
位　置　b－70－89　**規　模**　(1.01×0.90)／0.85×0.78／(0.38)

土　層　1　明褐色（Ⅱ黒＋d_2）　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）
3　明褐色（d_2塊＞Ⅱ黒）　4　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）
5　赤褐色（d_2＞Ⅱ黒）　6　赤褐色（d_2≫Ⅱ黒）

特　徴　Ⅱ黒層除去後d_1層上面で検出された。台地上に位置しており、P－28と近接している。Ⅱ黒層上面では浅い窪みは確認できなかった。平面形態は、壙口部・壙底部ともに円形を呈する。壙底面は平坦で、Ta－d_2層を掘り込んで構築されている。断面形態は、壙底面より垂直に立ち上がっている。

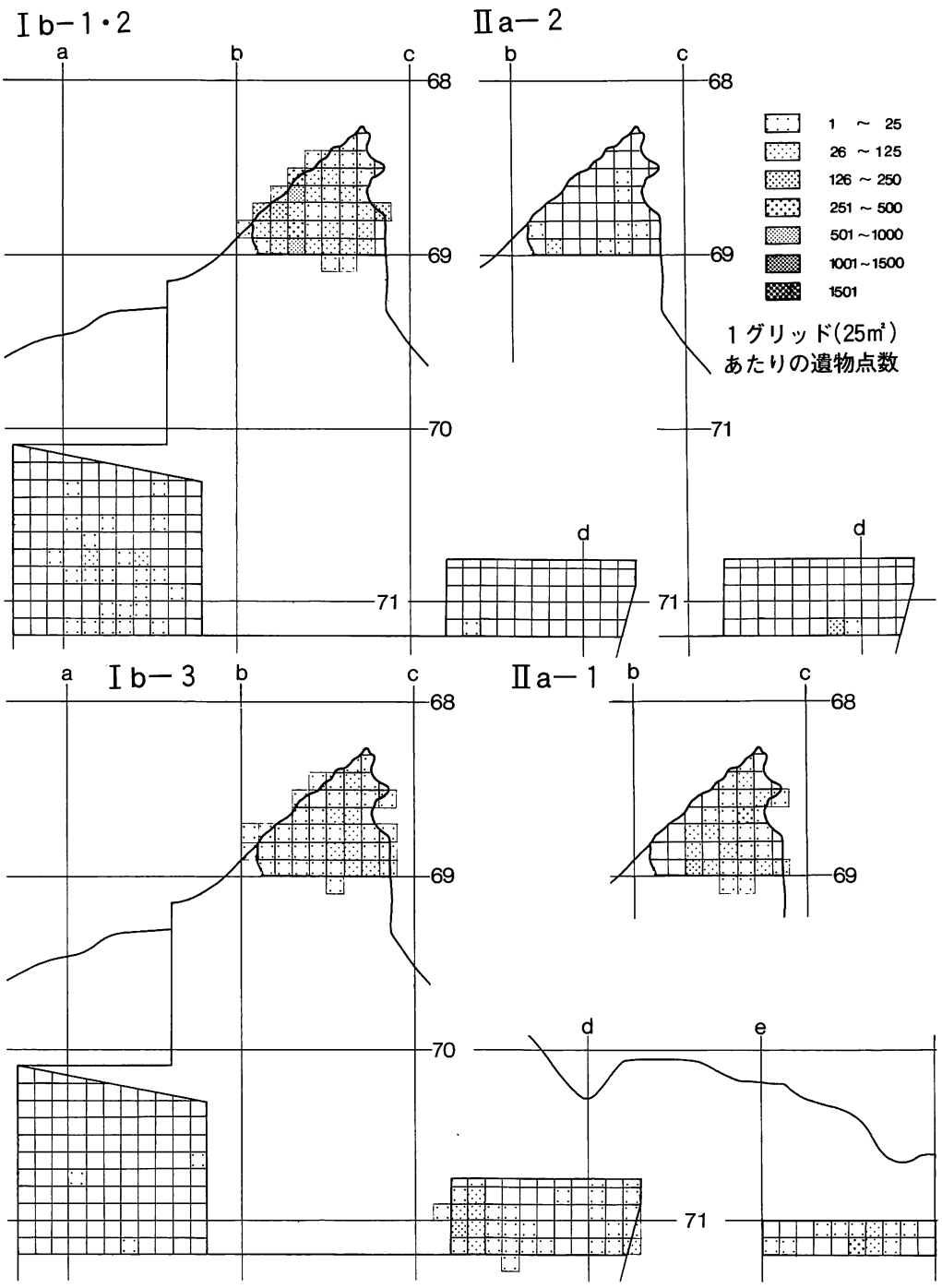
遺　物　出土遺物はない。　（越田雅司）

P-41

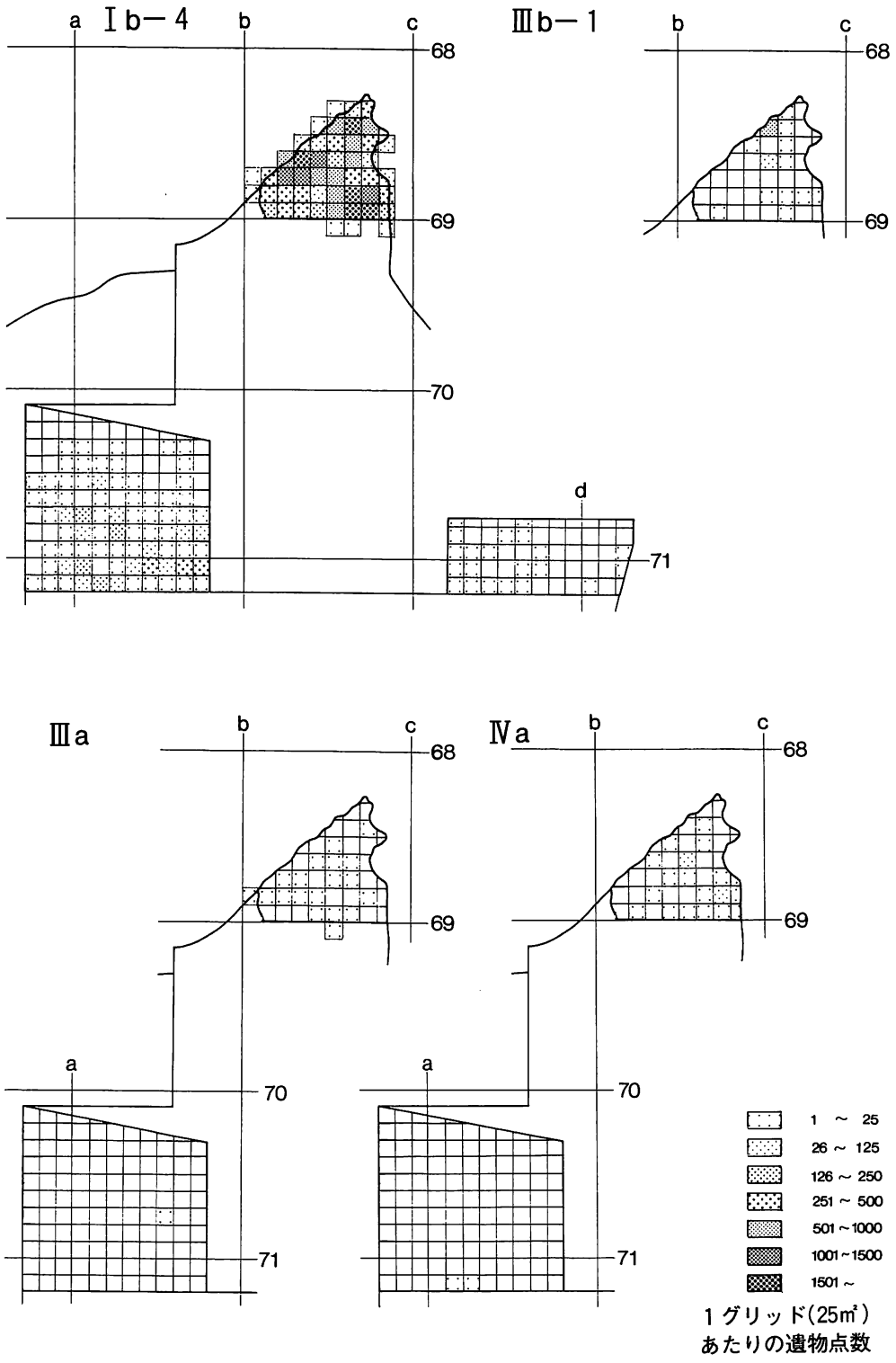


図Ⅲ－69　P－41

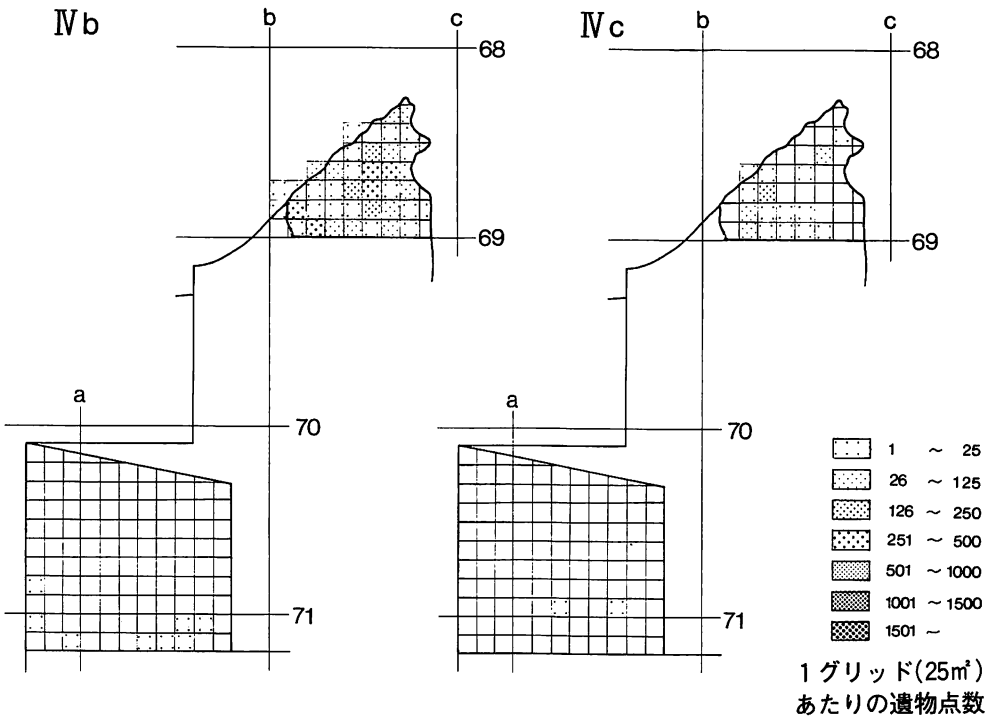
6　包含層出土の遺物



図Ⅲ－70　土器分布密度(1)



図Ⅲ－71　土器分布密度(2)



図Ⅲ－72　土器分布密度(3)

(1) **土器**（図Ⅲ－70～105、図版Ⅲ－23～38）

Ⅰ群に属するものからⅣ群に属するものまである。

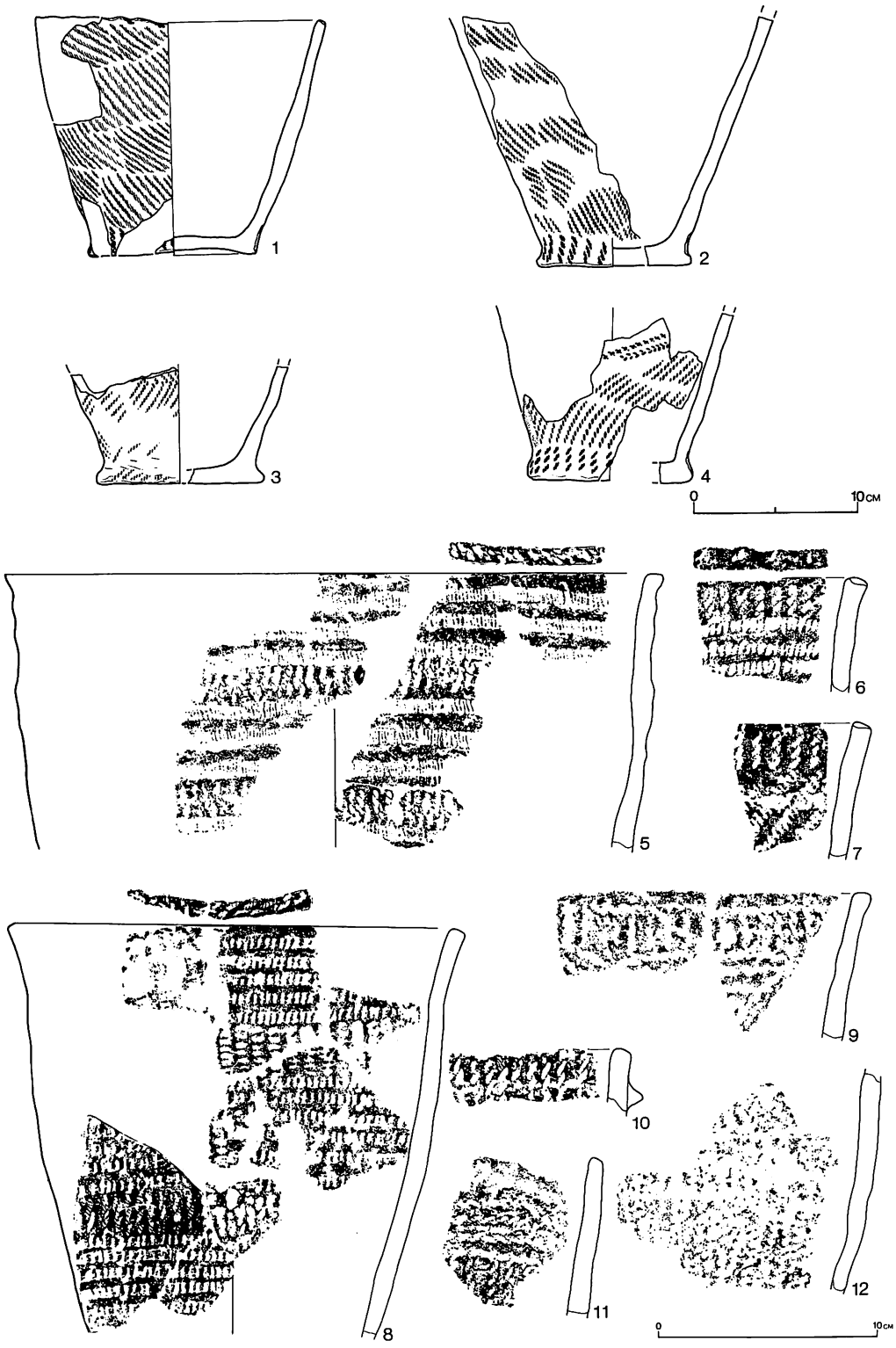
Ⅰ群ｂ－1類（図Ⅲ－73～76－1～87、図版Ⅲ－26－3～5、－32、－33－1）

器形は底部が外側に「く」の字にくびれて口縁部までやや直線的に開く、鉢形、深鉢形がある。厚手のものが多く、器面は凹凸が著しい。口唇の断面は口唇上に文様を施文する際に押しつぶされ外側に張り出すものが多い。口唇上には指頭による圧痕、絡条体圧痕、縄の圧痕を施すものがみられる。器面には断面が三角形をなす短い貼付帯が施されているものがある。貼付帯上には縄端の圧痕文がつけられる。器面には条の太い原体による縄文が施されている。内面に施されるものもある。文様は口縁部から胴部までに、角形や丸形の軸による絡条体圧痕文、三本平組紐の圧痕文、短縄文、縄線文を組合せて施し、底部付近は縄文だけになるようである。底部のくびれ部には短縄文が施されている。

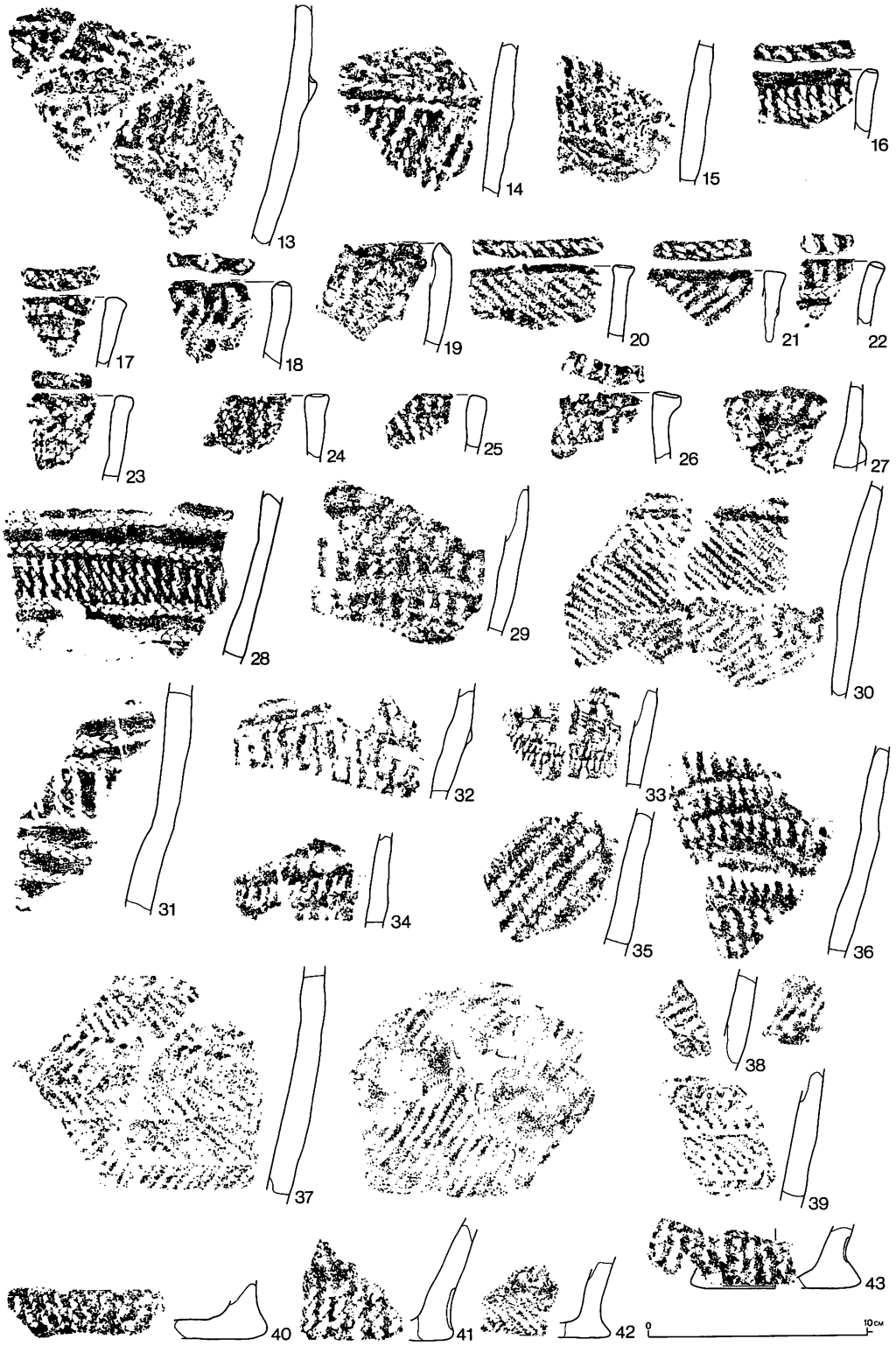
口唇の形、底部の形、器面に施される文様の原体などからａ、ｂ類に分類した。

ａ類（1～3、5～43）

口唇の断面は、口唇上に文様を施文することで外側に張り出し逆三角形を呈するものが多い。口唇上には指頭の圧痕、縄の圧痕、絡条体圧痕文を施すものがある。器面に施される組紐、絡条体、短縄文の原体は太い。貼付帯は短く、部分的に縦・横、斜めに施される。器面に施される縄文は結束のない羽状縄文で、内面に施されるものもある。底部のくびれは強く、短縄文が施されるものが多い。



図Ⅲ－73　Ⅰ群ｂ－１類土器(1)



図Ⅲ－74　Ⅰ群ｂ－１類土器(2)

１は縄文だけが施されるもの。２～４は胴部下半から底部までのもので、縄文が施されている。５～８、17～19、33～35は絡条体圧痕文が施され、５～８、18、33には短縄文も施されている。20、21は斜行縄文が施されている口縁部の破片。４、22、27、31は組紐圧痕文が施され、22、27～29、31、32には組紐圧痕文間に短縄文が加えられている。36は短縄文が施されている。９～15は縄線文と短縄文、貼付帯による文様が施されているものである。

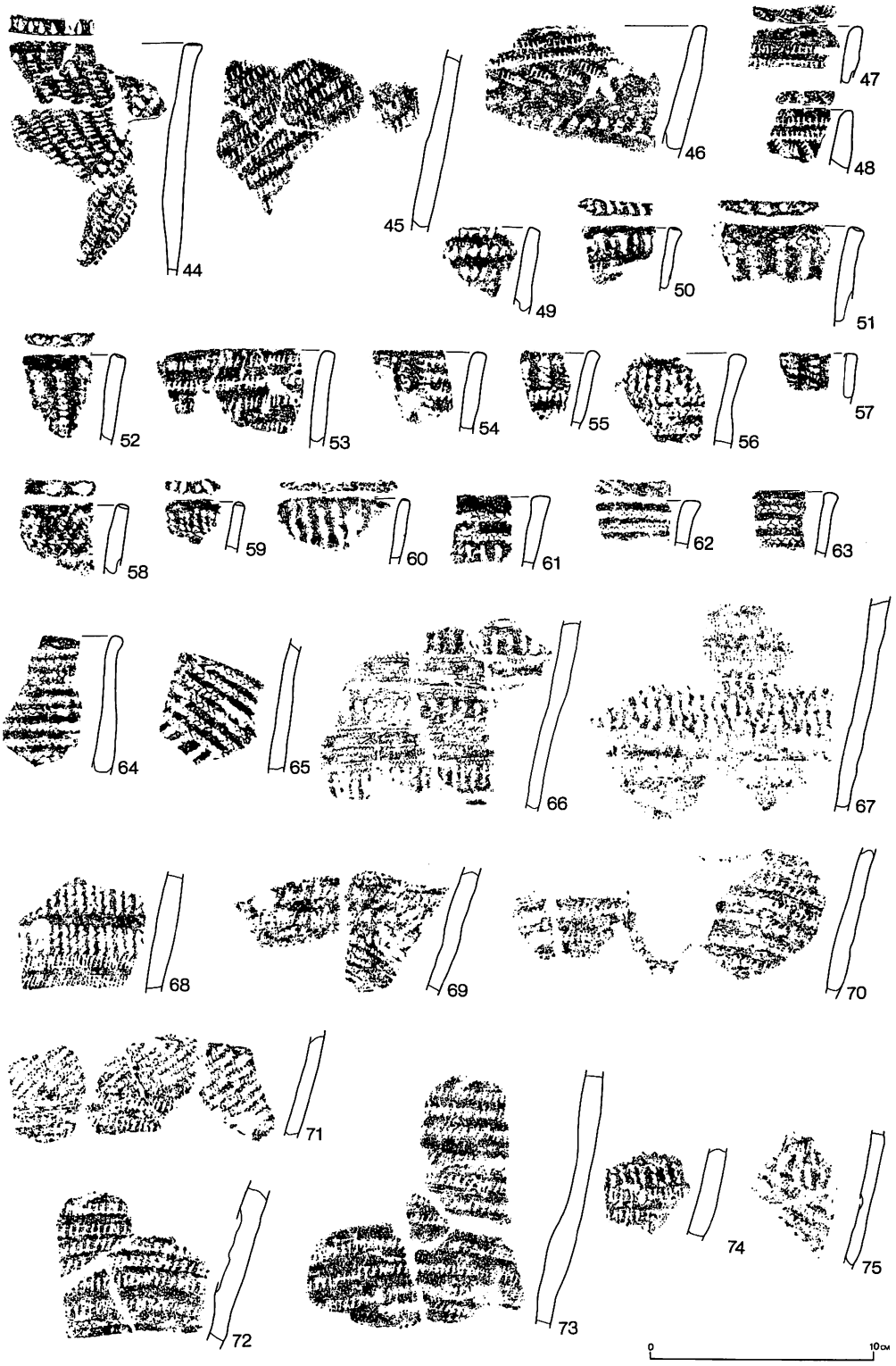
１は口縁部から底部の約二分の一が残存する。器面には１段Ｒの原体による無節の縄文が粗く施されている。器面は凹凸があり、口縁部から胴部にむかって厚みが増す。口唇上には縄の圧痕がつけられている。底部はあげ底気味である。２は胴部下半から底部にかけて約三分の一が残存する。器面には縄文が浅く疎らに施されている。底部のくびれが強い。３は羽状縄文が施されている。底部のくびれ部は無文になっている。５は幅が約８㎜を測る絡条体圧痕文を３条１単位で帯状に施し、その間に短縄文を縦に施している。口唇上には縄の圧痕がつけられている。６・７は口唇に指頭の圧痕がある。７の絡条体の原体は丸軸かとみられる。８は絡条体圧痕文を帯状に４・５条１単位で施し、その間に縦に絡条体圧痕文と短縄文を施すもので、５と似た文様構成のものである。短い貼付帯がつけられている。口唇上には縄の圧痕がある。９～15は同一個体の破片。器面は磨滅している。文様は横走する太い縄線文を２・３条１単位で施し区画した中に縦や斜めに短縄文を施している。文様の間には部分的に、断面が三角形を呈する短い貼付帯を施している。５・８も類似の文様構成とみられる。

口唇上に、16～21、23、26には縄の圧痕文、22、24には指頭の圧痕が施されている。27は短い貼付帯がつけられている。29には縄端による刺突文が施されている。31は大柄な文様構成のものである。37～39は同一個体の破片。厚手で赤褐色を呈する。羽状縄文が施されているが、縄文帯が帯状になっている。内面にも部分的に縄文が施されている。40～43は底部の破片。42は底部の張りだした部分に縄文が施されている。

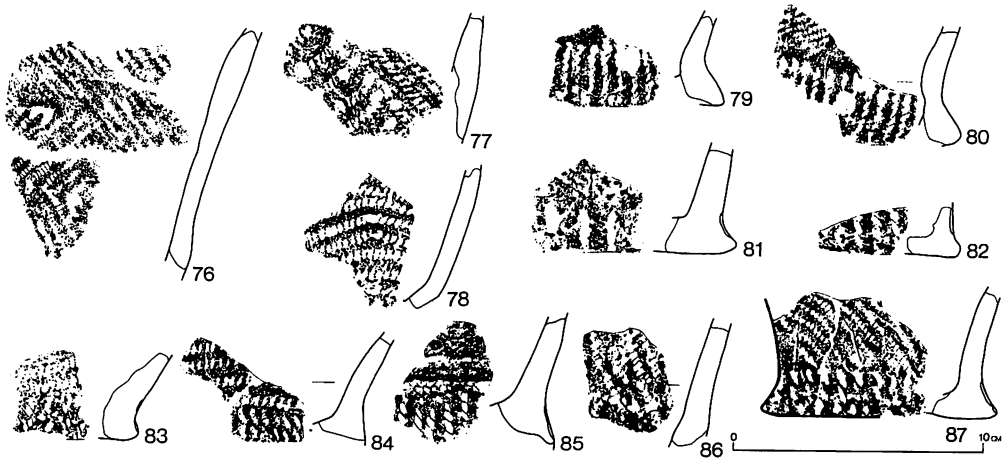
ｂ類（４、44～87）

口唇断面はａ類ほど外側に張りださない。口唇断面がやや薄みになるものがある。前段階にひき続き口唇上に指頭の圧痕、絡条体圧痕文を施すものがある。絡条体、組紐、短縄文の原体はａ類よりも幅が細い。縄文は結束のない羽状縄文が施されている。底部のくびれは弱い。

44～57、67～75、77は絡条体圧痕文が施され、50、56、67、68には短縄文も加えられている。56の原体は軸に縄を２本右巻と左巻に交叉させるものである。４、61～66は組紐圧痕文が施されている。59、60、78は短縄文が施されている。４は整った縄文が施されているもので、組紐圧痕文が浅く２条施されている。44・45は同一個体の破片。口唇断面は角形で、やや外側に張りだす。器面には絡条体圧痕文による文様の間に縄端による刺突文が施されている。口唇上に棒状工具による刻み目がつけられている。46～48は同一個体。口唇上に絡条体圧痕文が施され、器面の無文の部分には絡条体の末端部による刺突文がつけられている。49～64は口縁部の破片。口唇上に50、52、62では縄の圧痕、51には絡条体の末端部の圧痕、58、59には指頭の圧痕がそれぞれ施されている。63の口縁部はやや外に張りだす。



図Ⅲ－75　Ⅰ群ｂ－１類土器(3)



図Ⅲ－76　Ⅰ群ｂ－１類土器(4)

66は組紐圧痕文で区画した中に短縄文を施している。71は０段多条のＬＲ原体による縄文が施されている。76は比較的細い原体により羽状縄文が施されている底部付近の破片。81～88は底部の破片。84には絡条体圧痕文、85には組紐圧痕文が施されている。

Ⅰ群ｂ－２類土器（図Ⅲ－77・78－１～53、図版Ⅲ－24－２、－33－２）

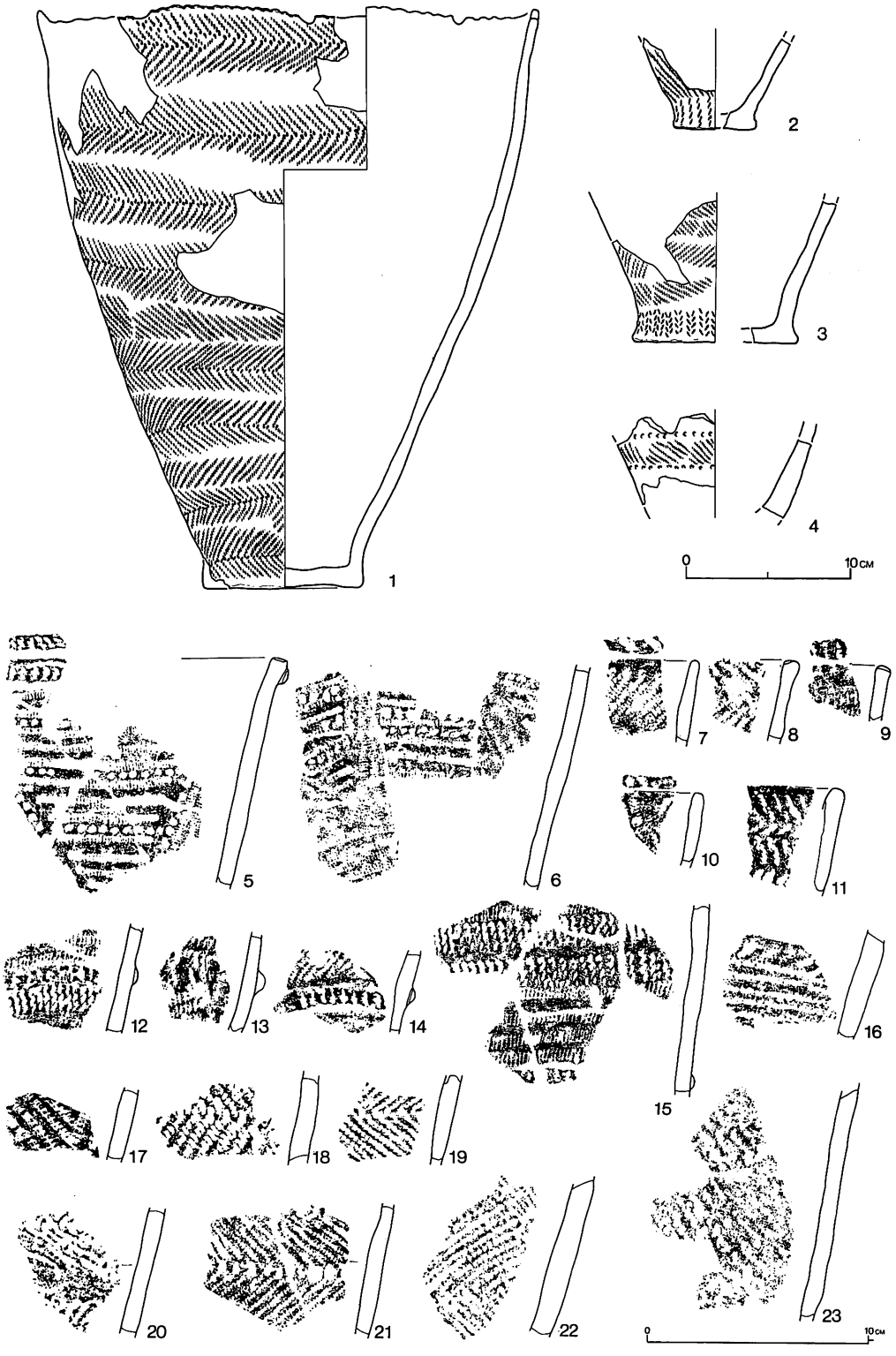
器形がわかるものは少ないが、底部があまりくびれず、口縁部が開く器形のものがある。羽状縄文が一般的で結束羽状縄文が出現する。斜行縄文も整ったものとなる。結束のない縄文では縄文帯の間に刺突文を加えるものもある。貼付帯はｂ－１類に比べて細くやや扁平である。文様は軸が角形の絡条体圧痕文、組紐圧痕文、刺突文、短縄文が施されている。器面の文様の原体、口唇の形、底部の形等からａ、ｂ類に分類した。

ａ類（２・３、５～23）

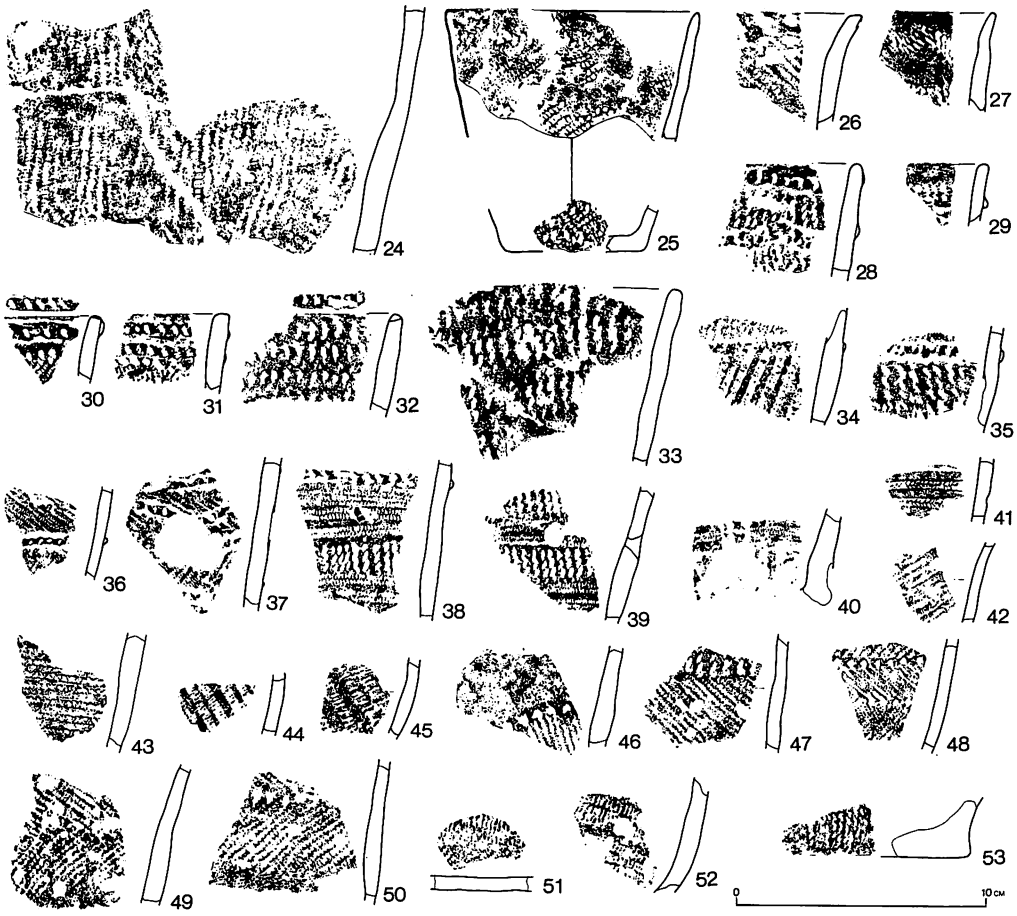
口唇断面はｂ－１類よりも落みで、丸味を帯びるものがあり、外側にはりだすものは少ない。口唇上には縄、絡条体、指頭の圧痕を施すものがみられる。絡条体圧痕文、短縄文の原体は前段階に比べて細い。貼付帯は扁平でその上に縄の圧痕がつけられるものがある。底部はｂ－１類ほど強くくびれない。器面には斜行縄文、羽状縄文、縦行気味の縄文が施される。

２、３、は胴部下半から底部にかけてのもの。５、６、８、９、12～17には絡条体圧痕文が、12、15には短縄文も施されている。５、６、11～15には口縁部や胴部に貼付帯がつけられている。

２は底部付近の約二分の一が残存する小形のもの。器面にはＲの原体による無節の縄文が施されている。くびれ部には１段のＬの原体による短縄文が粗く施されている。３は０段多条の原体による羽状縄文が施されている。撚りの異なる０段の縄を交互に施す短縄文がつけられている。５、６は同一個体の破片。口縁にそって扁平な貼付帯を貼りつけている。貼付帯上と口唇上には縄端の圧痕文が施されている。器面には絡条体圧痕文を縦・横・斜め方向に帯状に施し、その間に部分的に縄端による刺突文をつけている。７～11は口縁部の破片。７は口唇



図Ⅲ－77　Ⅰ群ｂ－２類土器(1)



図Ⅲ－78　Ⅰ群ｂ－２類土器(2)

断面が丸みを帯びている。斜行縄文が施され、口唇直下に幅の狭い無文部分があり、縄端圧痕文がつけられている。８は結束羽状縄文が施されている。口唇上に、８、10では指頭の圧痕、９は絡条体の短い圧痕文が施されている。11の口唇断面はやや丸みを帯びる。

12、14、15は貼付帯上に縄の圧痕がある。13は粘土をつまんでつけた様な小さな貼付帯がつけられている。16は絡条体の原体の末端部の圧痕文が施されている。軸に巻いている撚紐は他のものと比べてやや太い。18～20は結束羽状縄文が施されている胴部の破片。21、22は０段多条の原体による羽状縄文のもの。21は縄文帯の縄端による刺突文を加えて結束羽状縄文に似せている。23は０段Ｒの原体による無節の斜行縄文が粗く施されている。24は厚手のもので RL 原体による縦行気味の縄文が施されている。

ｂ類（１・４、25～52）

口唇の断面は薄みで尖り気味である。底部はａ類ほどくびれず直立気味となる。貼付帯は細く扁平で、貼付帯上には縄端による圧痕や刻み目がつけられる。絡条体、組紐、短縄文の原体は細い。器面には条の細い原体による整った羽状縄文、斜行縄文が施される。

1、25は器面に結束羽状縄文のみが施されているもの。28～31、34～38は口縁部、胴部に貼付帯があるものである。42～45、51、52には絡条体圧痕文が施されてる。3、4、27、44～50には羽状縄文、斜行縄文が施されている。

1は口縁部から底部までの約二分の一が残存する。底部がややくびれて口縁部まで直線的に立ち上がり口縁がやや外反する器形のもの。口唇断面は薄みで、口唇上には縄端による刻み目がつけられ、10cm程の間隔で指頭による圧痕も施されている。器面には0段多条の原体による結束羽状縄文が施されているが、部分的に磨り消されているところがある。焼成は良く、口縁部から胴部半ばまで炭化物が付着している。4は胴部のみの破片。小形のもので細い原体による斜行縄文を帯状に施している。縄文帯と縄文帯の間は幅の狭い無文帯になっていて、縄端による刺突文と竹管状工具による円形の刺突文をめぐらし縁どりをしている。25は口縁部と底部を図上で復元したものである。小形の鉢形土器。口唇断面は薄みで尖っている。器壁にはやや凹凸がある。26、27は口縁部がやや外反する。28～31、34、35の貼付帯上には縄端による刻み目がある。28の貼付帯はやや太い。30、31は器面に縄端による圧痕文が施されている。36は貼付帯が細く繊細な感じがする。縄文の原体も条の細い0段多条のものである。新しい段階のものであろう。38～40は同一個体の破片。細い軸による絡条体を2条1単位で帯状に施し、その間に短縄文をつけている。43は軸に縄を2条右巻と左巻にして交叉させる原体による絡条体圧痕文のもの。46～48は縄文帯の間に縄端による刺突文を加えている。51は細い絡条体圧痕文と縄文が施されている。底部の内面かと思われる。

Ⅰ群b－3類土器（図Ⅲ－79～81、図版Ⅲ－24－2・5、－26－6、－27－1～3、－34－1）

器形は胴部でやや膨らみ口縁部が開くものと、筒形に近いものがある。口縁は平縁のものと波状のものがある。器面に貼付帯をめぐらし、その間に絡条体圧痕文、短縄文、羽状縄文、斜行縄文などを施すものがある。貼付帯の施される間隔が比較的広いものとやや狭いものがあり、貼付帯を器面に直線的あるいは曲線的にめぐらすもの、大きく鋸歯状に施すものもある。貼付帯は幅広で扁平なものと、やや細いもの、微隆起線に近いものもある。口唇の断面形はやや丸みを帯びるものと尖り気味のものがみられる。底部は角形に近いもの、丸みを帯びるものがある。

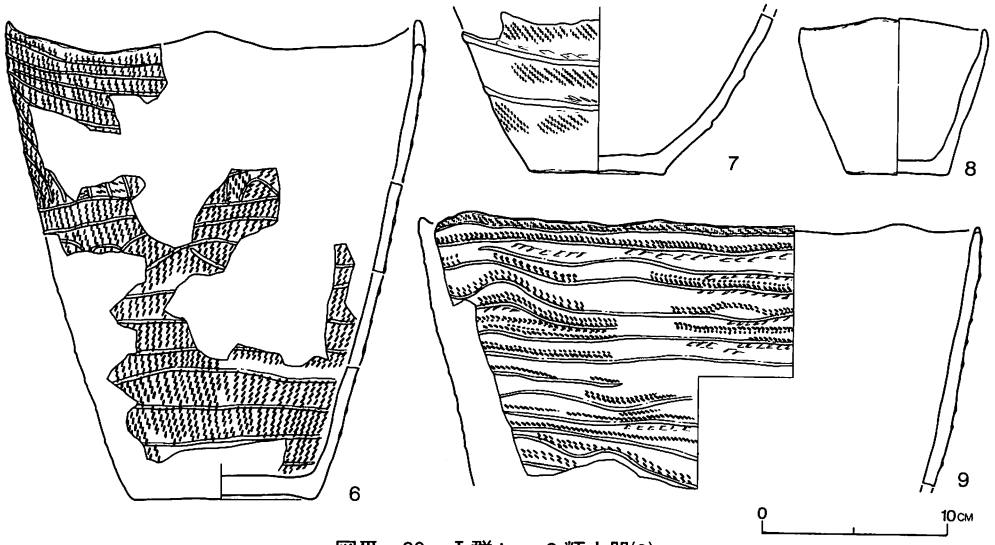
Ⅰ群b－3類土器はd－70区、f－71区、c－68区から出土している。それぞれの地区でやや特徴を異にする土器が出土していることからa～d類に分類した。

a類（1・10～12）

Ⅰ群b－3類土器の一番古い段階か、あるいはb－2類に分類されるかとみられるものである。1は昨年度出土した破片（北埋調報58　p－169　図Ⅲ－98－35）と接合できた資料である。b－2類として報告したが、文様構成から判断してb－3類と考えられる。胴部がやや膨らむ器形で、口縁部は直立気味、緩やかな波状を呈する。口唇の断面は薄みで尖り気味である。口唇には扁平な貼付帯をつけ短縄文を施している。器面の胴部上半から口縁部にかけては、細い貼付帯で大柄な鋸歯状の文様を施し、その間を横位の貼付帯でつないでいる。貼付帯



図Ⅲ－79　Ⅰ群ｂ－３類土器(1)



図Ⅲ－80　Ⅰ群ｂ－３類土器(2)

上は縄をころがすことで刻み目をつけている。その間は一段おきに短縄文を密に施している。胴部下半には短縄文を帯状に施しているようである。

10、11は絡条体圧痕文が施されている。10には絡条体の軸の端を押しつけたかとみられる刺突文が施されている。11は小形の土器の底部。細い原体による縄文が施され、底部からの立上がりはやや内反り気味である。

ｂ類（２・13～28）

ｄ－71区の西側の斜面からまとまって出土した資料を主に本類とした。口唇の断面は丸みを帯びる。貼付帯は扁平で間隔をあけて直線的に施されるものが多い。貼付帯は文様の施文の際につぶれている。

文様は貼付帯間をその上に斜行縄文を施すもの（13～15・17～22・24・27・28）、短縄文を施すもの（２・16・23）、撚りの異なる原体による羽状縄文を施すもの（25・26）がある。底部は角形のもの（20・25～28）、やや丸みを帯びるもの（24・25）がある。

２は口縁部と底部が欠損している。２段の縄による短縄文が施されている。17・18は同一個体の破片、大形の深鉢形を呈すると思われる。貼付帯が口唇直下からつけられている。19～21は同一個体の胴部と底部の破片。底部（20）の内面に短縄文が施されている。23は貼付帯上に縄による刻み目がつけられている。26は筒形になるかとみられる。底部の内・外面にも浅く縄文が施されている。

27・28は同一個体の破片で小形の土器とみられる。細い貼付帯が波状につけられ、その間には短縄文が、底部付近には縄文が施されている。

ｃ類（３～７、29～37）

ｄ－70、ｅ－70区の東側斜面、ｆ－71区の西側斜面から出土したものを主に本類とした。

口唇の断面はｂ類よりも尖り気味である。貼付帯はｂ類よりも細く、貼付帯が施される間



図Ⅲ－81　Ⅰ群ｂ－３類土器(3)

隔はｂ類よりも狭くなる。貼付帯を直線的に器面に横環させるもの（３・５・７・29・32・33・37）に加え、波状にめぐらすもの（４）、上下の貼付帯を縦の貼付帯でつなぐもの（30）、斜めや弧状の貼付帯をつけるもの（６）がある。

文様は貼付帯間に斜行縄文を施すもの（７・29・36）、短縄文を施すもの（３～６、30・31・34）、縄文と短縄文が施されるもの（５・37）、絡条体圧痕文が施されるもの（32・33・35）がある。底部は角形のもの（３・37）、やや丸みをおびるもの（35・36）がある。

３は底部の内面にも短縄文が疎らに施されている。４は口縁部から胴部にかけてのもの。貼付帯のところどころで階段状の文様を構成するところがある。５は胴部のみの破片。６は口縁部から底部までのほぼ三分の一ほどが残存する。波状口縁である。貼付帯が曲線的で、鋸歯状の文様や階段状の文様を構成するところがある。30は32・33と焼成、色調がよく似た土器である。口縁部の貼付帯はやや間隔が広く、上下を縦の貼付帯でつないでいる。32・33は同一個体。絡条体圧痕文を縦位に施しているものである。31の短縄文は非常に密である。34は貼付帯が微隆起線になっている。35は底部付近に浅く斜行縄文が施され、丸軸に細い撚紐を巻いたとみられる絡条体圧痕文が横位に施されている。

ｄ類（８・９、38～41）

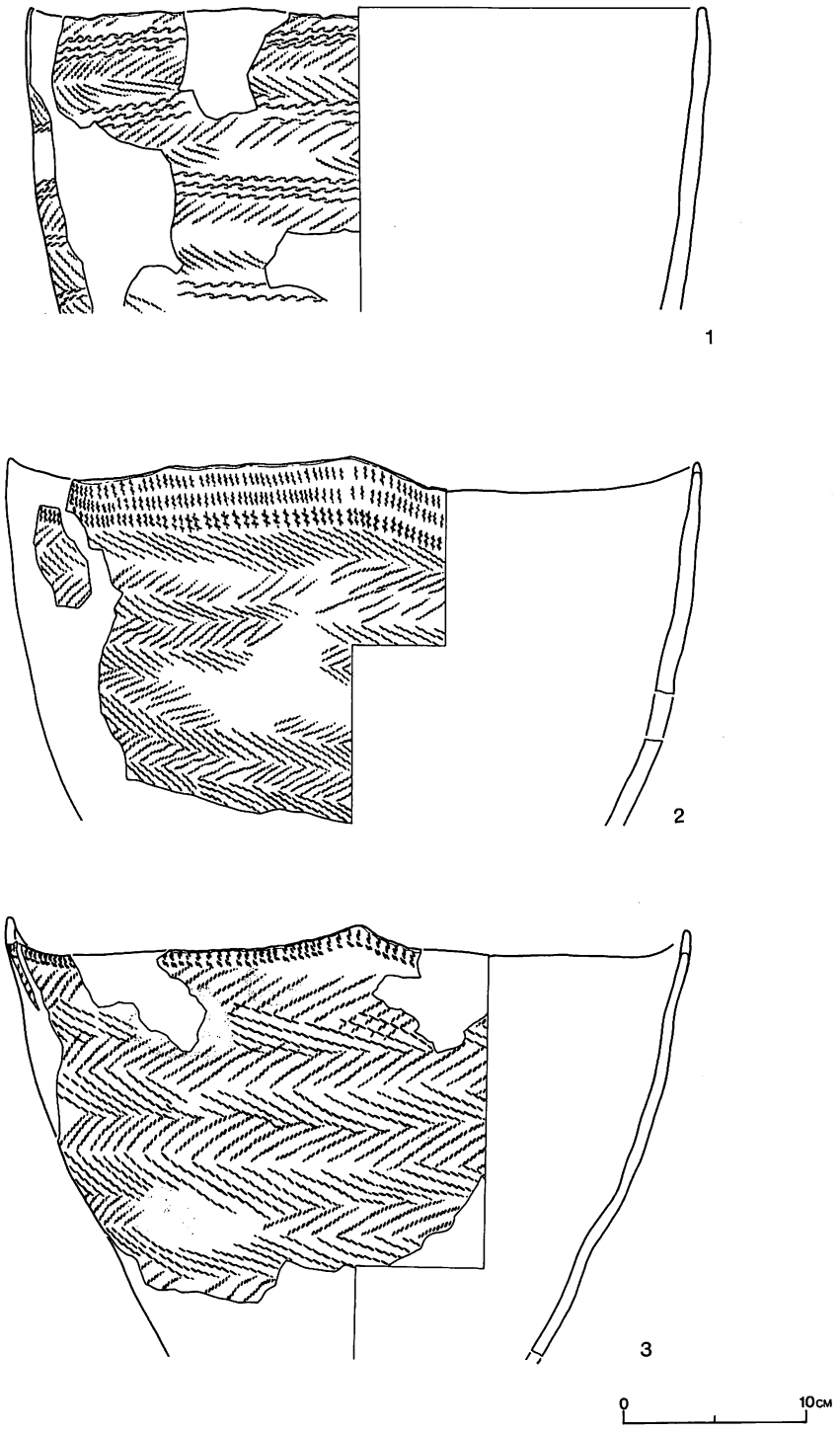
ｃ－68区から出土した資料を主として本類とした。口唇の断面は薄みで尖り気味である。貼付帯は微隆起線になっている。貼付帯の間隔は狭い。文様は貼付帯の間に施されている。

８はｃ－68－36区からまとまって出土した土器でこの土器が検出されたレベルより下位からＰ－67の土器（図Ⅲ－９－１）が出土した。一応本類に含めておく。小形の鉢形土器で無文である。口唇断面は薄みで器面には凹凸がある。

９は口縁から胴部にかけてのもの。貼付帯の間隔は狭く、その間に短縄文が施されている。37～40は同一個体の破片。小さな破片が多数あったが接合したものは少ない。小形の器形になるかとみられる。焼成が良い黄褐色の土器である。口唇断面は薄みで尖り気味で微隆起線が縦・横に施されているかとみられる。器面に細い原体による斜行縄文が浅く施され、貼付帯間には細い軸に細い撚紐を巻いた絡条体圧痕文が縦、横に施されている。

Ⅰ群ｂ－４類土器（図Ⅲ－82～94－１～91、図版Ⅲ－25－２・３、－27－４～－30－３、－34－２、－35、－36－１）

器形には深鉢形、鉢形、舟形のものがある。小形で口径に比べて器高が長い砲弾形のものもみられる。口唇断面は古い段階のものは尖り気味で薄みのもの、角形のものが多く、新しい段階のものでは器壁に厚みがあり、角形や切り出し形、丸味を帯びた角形になるものが多いと思われる。口縁部には文様帯を設けるものと文様帯を設けないものがある。いずれも器面に自縄自巻の原体による羽状縄文、斜行縄文が施されるもの、撚糸文により羽状を構成する文様が施されるもの、普通の縄文のもの、撚糸文と縄文を組み合せて施すもの、魚骨回転文が施されるものがある。縄文は古い段階のものが整っているようである。菱形を構成する縄文があるが新しい段階のものかとみられる。自縄自巻の原体による縄文が施されるものでは条と条の間に節



図Ⅲ－82　Ⅰ群ｂ－４類土器(1)

のみられるものがある。撚糸文では縄を1条軸に巻きつけるものと、同じ撚りの縄を2条一組にして並列して巻きつける原体によるものがある。巻きつける縄には細いものと太いものがあり、太いものが新しい段階かとみられる。縄線文により幾何学的な文様を構成するものもある。菱形を構成する縄文に近い段階かとみられる。縄文に重ねで縄端圧痕文、綾絡文を施すものもある。

口縁部に文様帯を設けるものでは、原体の縄端の圧痕文、縄端による刺突文、縄線文を口縁部に沿って複数めぐらすものがある。2・3本一組の綾絡文を施すものもある。口唇上には縄の圧痕を施すものがみられ、縄端で口唇角に刻み目をつけるものもある。

昨年度分類したａ～ｆ類に基づいて今年度の資料を分類したが、ｆ類については資料が追加されたことから新たにｇ類を設け、ａ～ｇ類として分類した。

a類（34）

口唇断面は薄く尖り気味である。口縁部と器面には細い原体による綾絡文を3条一単位で施している。それぞれの結び方が異なっているため、綾絡文の形が異なっている。自縄自巻LRの原体による整った縄文が施されている。

b類（1・2、35～37）

口唇断面は薄みで尖り気味のもの、やや丸味のあるものがみられる。器面には細い自縄自巻の原体による比較的整った羽状縄文が施され、口縁部には縄端圧痕文、綾絡文が施される。縄文帯の間に綾絡文が施されるものもある。器壁はやや凹凸があるものが多い。

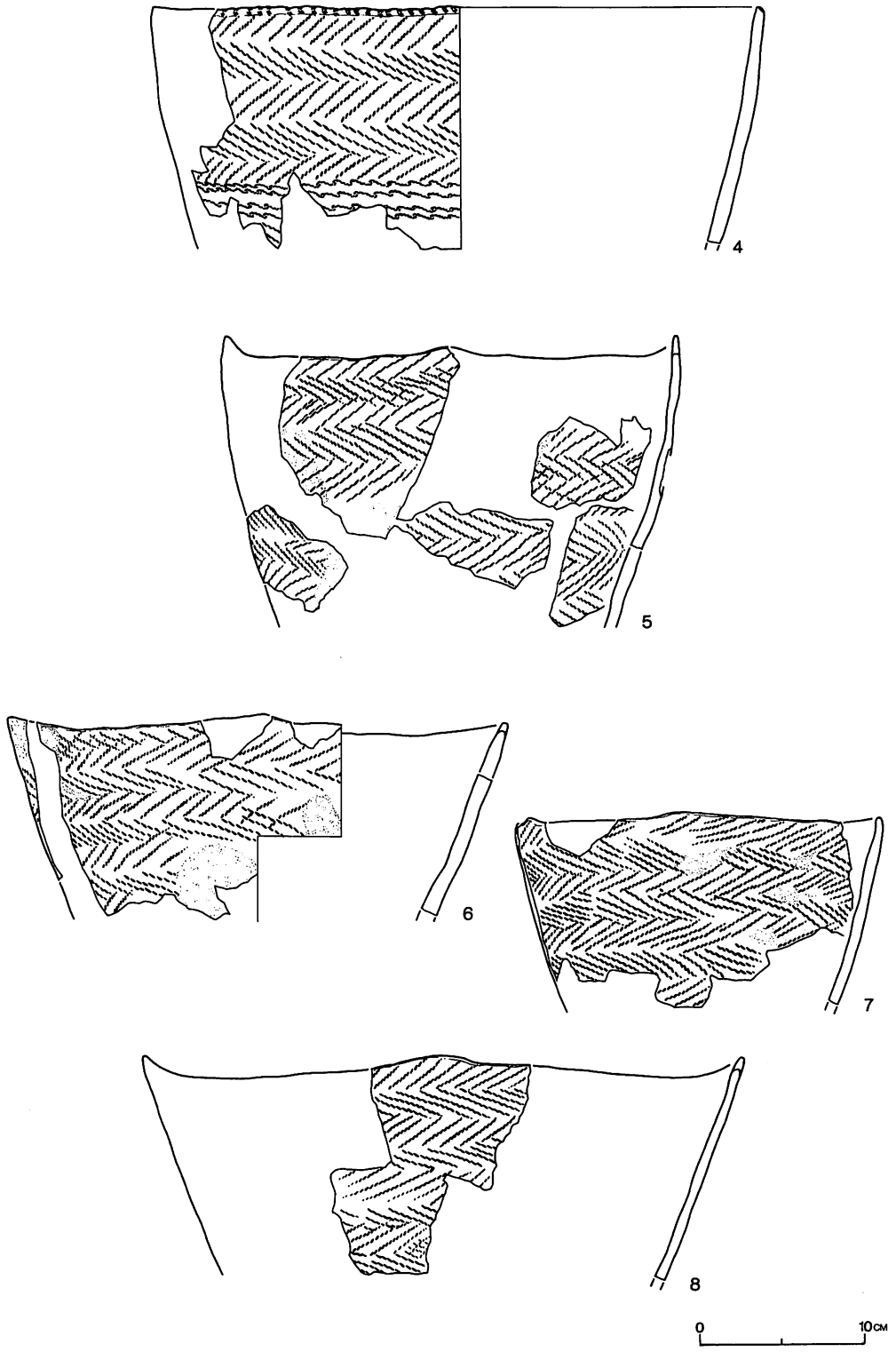
1、2、35～37は器面に自縄自巻LRとRLの原体で羽状縄文が施されている。1は3条一単位の綾絡文が羽状縄文の間に施されている。2は口唇断面が薄みである。波状を呈する口縁部には縄端の圧痕文が3条施されている。35は底部に近い破片とみられる。36は平底部分にも縄文が施されている。37は縄文が菱形を構成する文様になっている。あるいは新しい時期のものかもしれない。

c類（3～5、38～52）

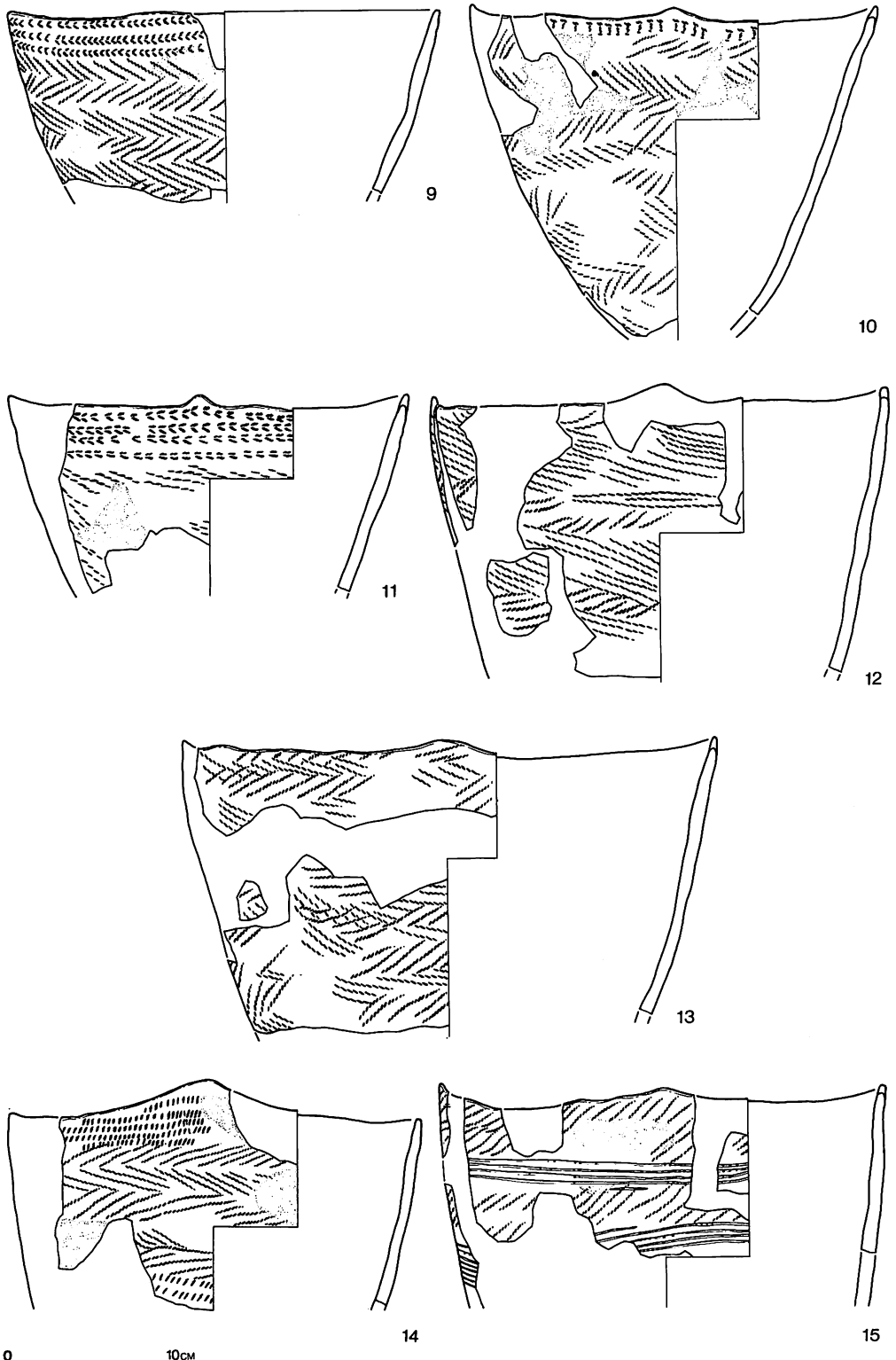
口唇断面は薄みで丸味を帯びるもの、尖り気味のもの、角形のものがある。口縁が山形をなすもので頂部が尖るものがみられる。文様帯のあるものでは口縁部に縄端圧痕文が施される。器面には自縄自巻の原体により羽状縄文が施され、綾絡文や縄端の圧痕文が施されるものがある。縄文の原体はａ、ｂ類よりは条がやや太めである。綾絡文は2、3条組み合せて施されるが、ｂ類よりも条が太く、その間隔も広くなる。

3・4、38～40、49～51は自縄自巻LRとRLの原体、5は自縄自巻LLとRL、41～46は自縄自巻LRとRRの原体による羽状縄文が施されている。

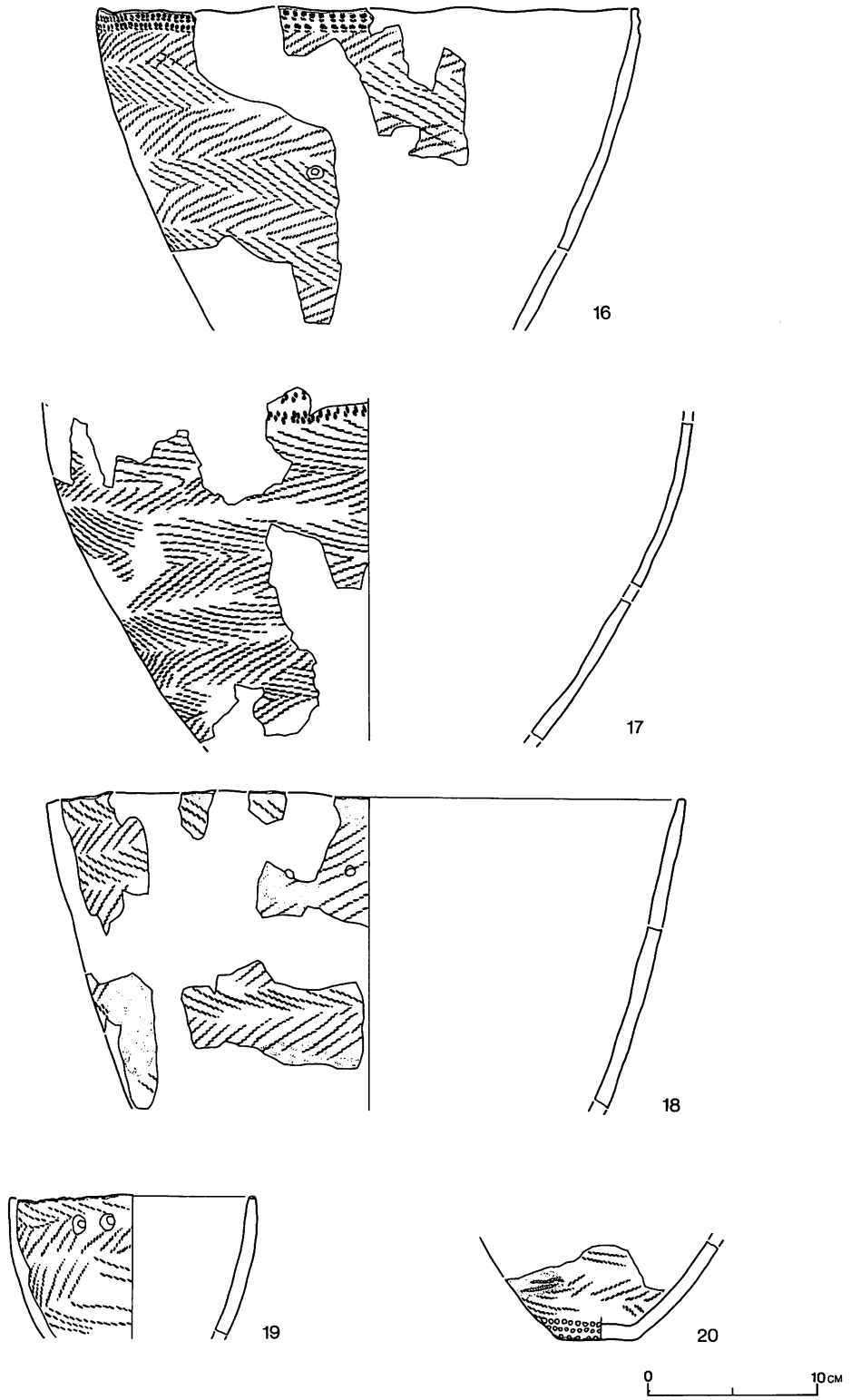
3は口縁部から胴部までの約三分の二が残存する。山形口縁の頂部が尖るもので、口唇は薄みである。器壁は凹凸があり薄手である。口唇角に縄端の圧痕文が施されている。4は口唇断面が薄みで尖り気味である。比較的整った羽状縄文が施されている。胴部には3条一単位の綾絡文が施されている。5は器壁に凹凸がある。口唇は角形で、器面の縄文はやや乱れて交叉し



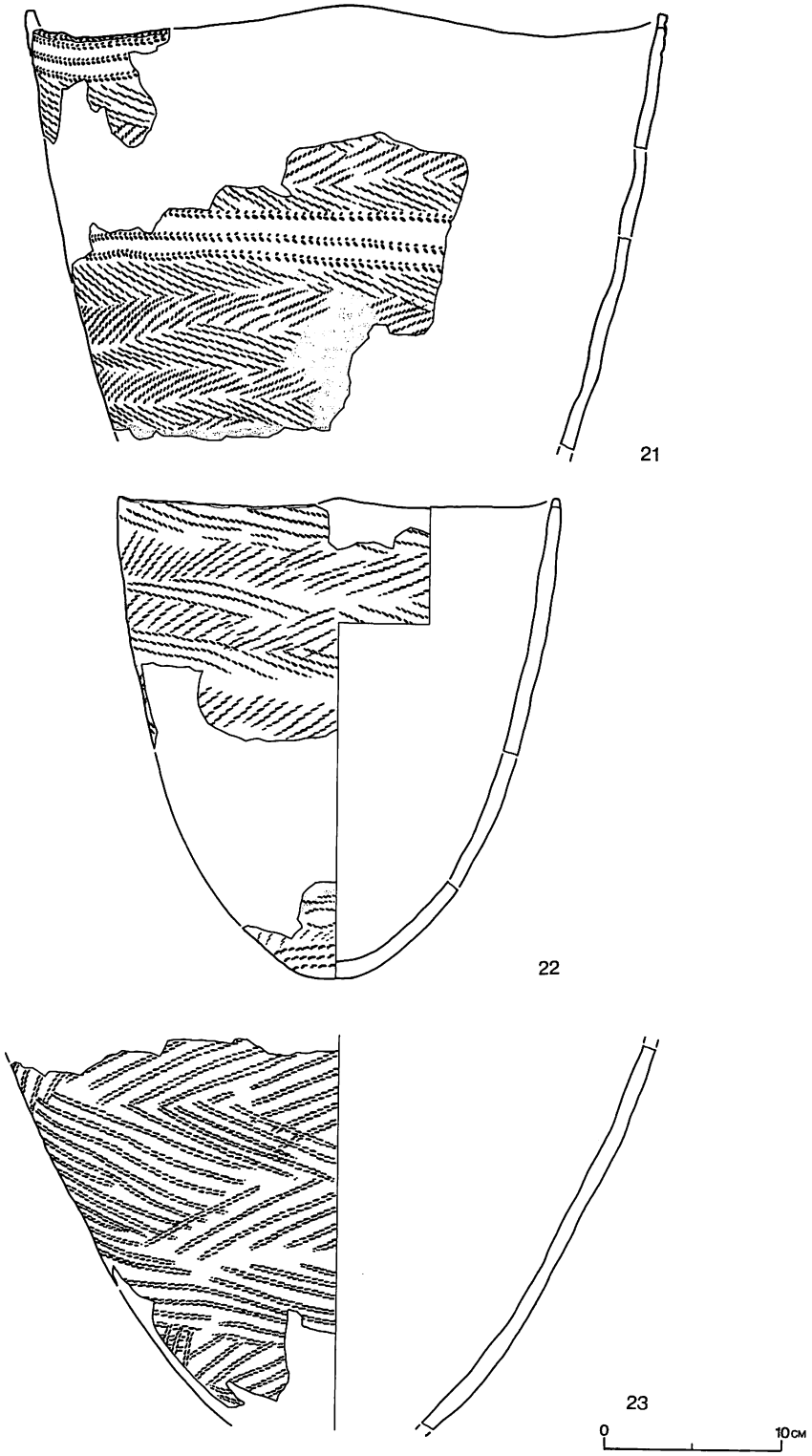
図Ⅲ－83　Ⅰ群ｂ－４類土器(2)



図Ⅲ－84　Ⅰ群ｂ－４類土器(3)



図Ⅲ－85　Ⅰ群ｂ－４類土器(4)



図Ⅲ－86　Ⅰ群ｂ－４類土器(5)

ているところがある。38は胴部にやや太い原体による2条一単位の綾絡文が施されている。39・41は波状口縁のもので、整った羽状縄文のもの。41・42・44は口唇の断面が角形である。42・44の縄文はやや乱れている。42の口唇部には縄端の圧痕文が2条施されている。43は口縁部と胴部に縄端の短い部分の圧痕文が施されている。器壁には凹凸がある。

45・46は同一胴部の破片。縄端圧痕文が3条施されている。47～50には2条あるいは3条一単位の綾絡文がある。47は口唇断面が薄みで角形である。49・50は同一個体の破片。45・46・49・50はやや厚手である。51・52は縄端圧痕文が施されている底部の破片。

d類（6～15、53・54）

口唇断面が薄みで尖り気味のもので大きな山形の隆起部をもつもの、丸味を帯びた角形を呈するもので小さな頂部をもつものがある。器面には自縄自巻の原体による羽状縄文が施されるがa～c類に比べてやや乱れている。条が横走気味のものもみられる。条は前段階のものよりは太くなる。口縁部や体部に縄端圧痕文、絡条体圧痕文、魚骨回転文を施すものがみられる。

6～10、12～14、54は自縄自巻LRとRLの原体による羽状縄文が施されている。53には条の細い自縄自巻RRの原体による縄文が施されている。

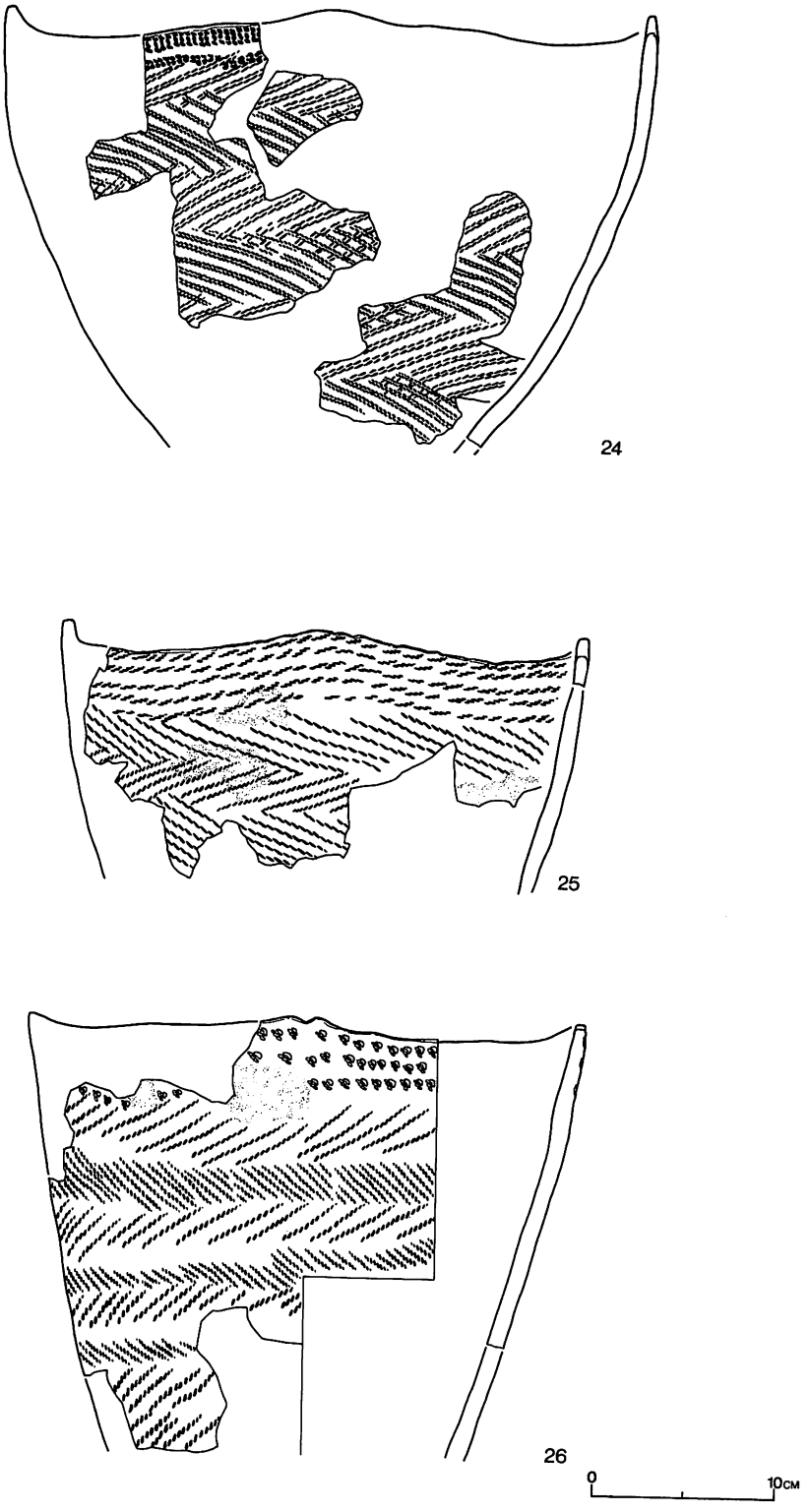
6は口縁部から胴上半部までの約四分の三が残存する。器壁は胴部で厚く凹凸があり、口縁部にむかって薄くなる。7～11の口唇断面は薄みである。9～11の口縁部には縄端による圧痕文がある。10～12は口縁部に小さな波頂部がある。10は口縁部から底部まで約三分の二が残存する。器壁は薄い。器面の縄文はやや乱れている。11は口縁部に縄端圧痕文が深く施されている。器面の縄文は乱れている。12はRL原体による縄文が部分的に乱れて横走気味となっている。13は口唇断面が薄みで、口縁部は緩やかな波状を呈する。14、53は絡条体圧痕文が施されている。14は口縁部と胴部に角形の軸に細い撚紐巻いた絡条体圧痕文が施されている。15・54はニシンの腹椎骨の回転による魚骨回転文が施されている。15は昨年度調査したc－69－54・55区から出土した破片と本年度調査したc－68－50区から出土した破片が接合できたものである。口唇断面は丸味を帯びた角形である。器面には自縄自巻LRの原体によるやや乱れた縄文が施されている。

e類（16～22、55・56）

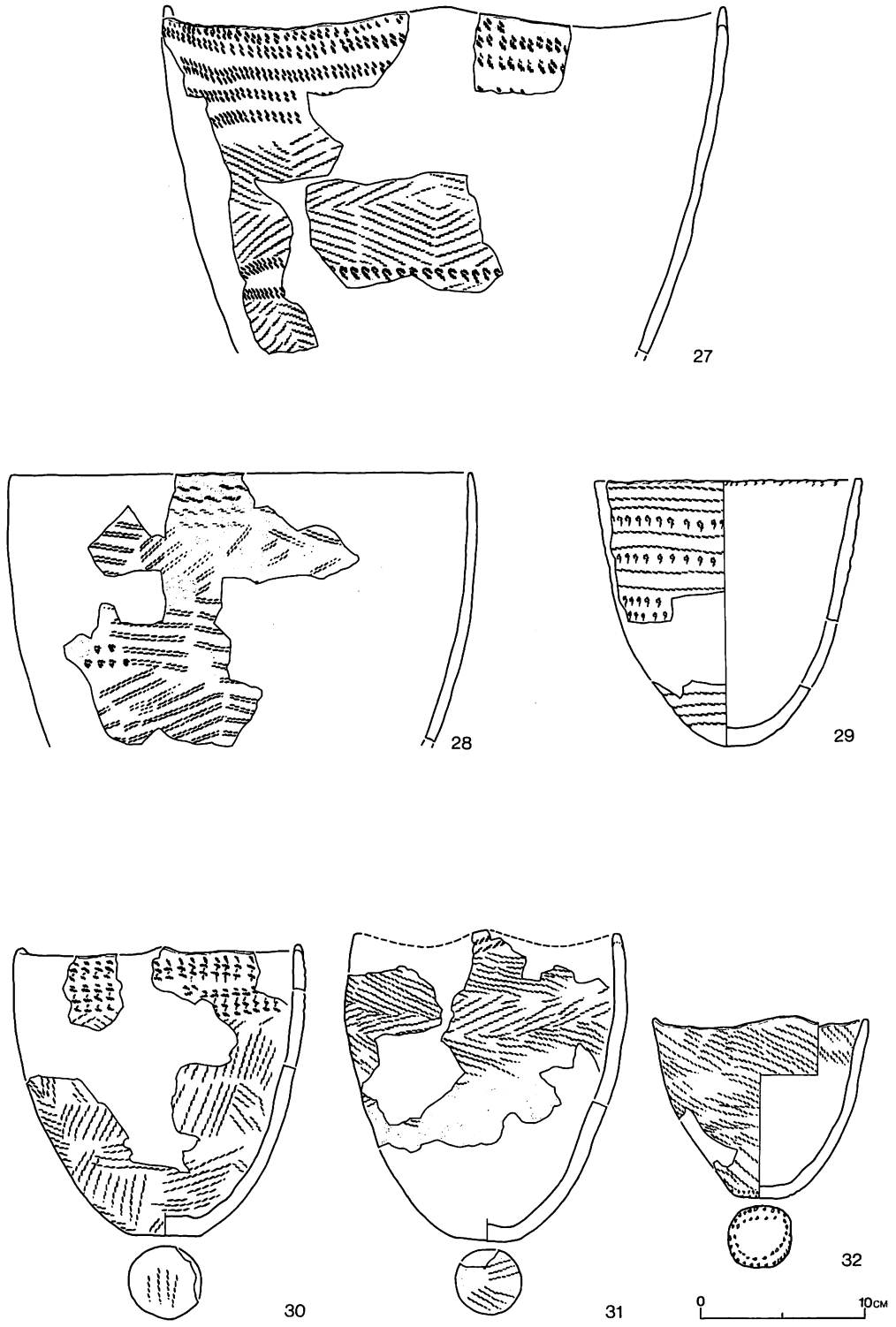
口唇の断面は比較的薄手で、角形のもの、切り出し形のものがある。縄文は自縄自巻の原体による羽状縄文が施されるものであるが、条が乱れて長く撚糸文風になるものもある。口縁部と体部に縄端圧痕文を施すものがある。口唇上に縄端の圧痕をつけるものもみられる。

19～21・26は自縄自巻LRとRLの原体による羽状縄文、16は自縄自巻LRとRR、18・22は自縄自巻RLとLL、17は自縄自巻RRとLLの原体による羽状縄文が施されている。

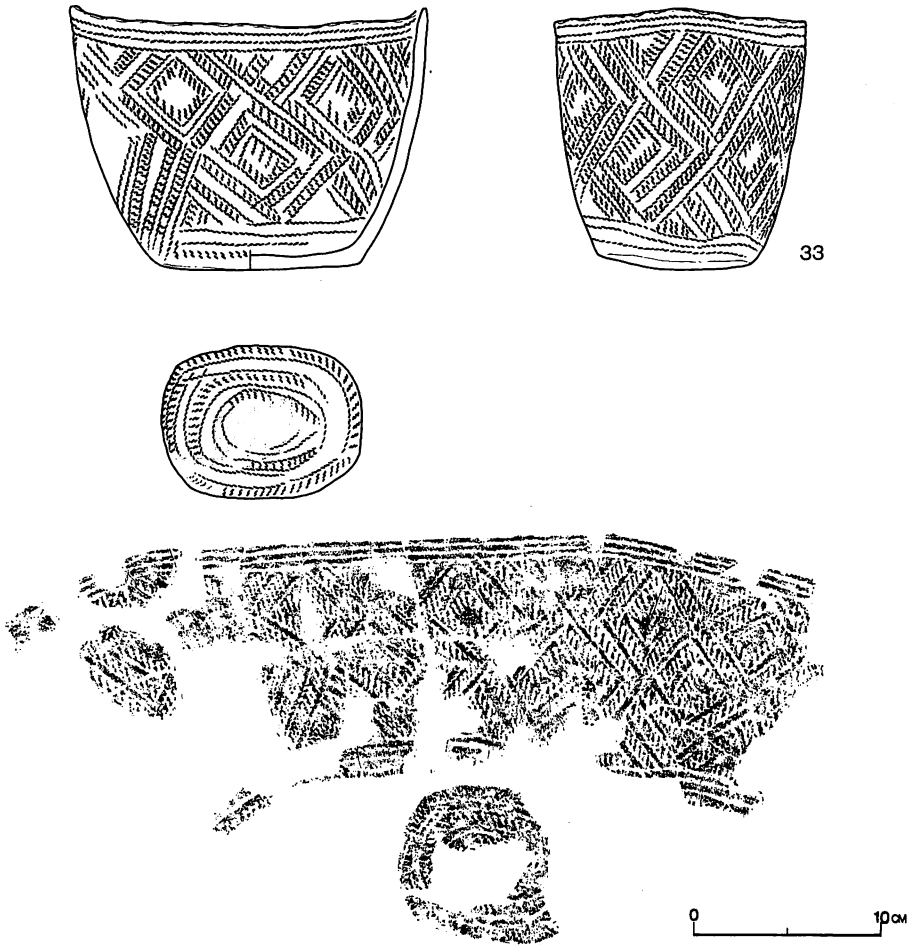
16は口唇断面が薄みで角形である。器壁は薄い。口縁部には縄端圧痕文が2条施されている。17は胴部上半の約三分の一が残存する。波状口縁を呈すると思われる部分に縄端圧痕文が施されている。19は小形のもので口縁部がやや内傾する。器壁は厚手で、口唇にむかって薄くなる。口唇断面は丸味を帯びた角形で、口唇上に縄端による圧痕文がつけられている。



図Ⅲ－87　Ⅰ群ｂ－４類土器(6)



図Ⅲ－88　Ⅰ群ｂ－４類土器(7)

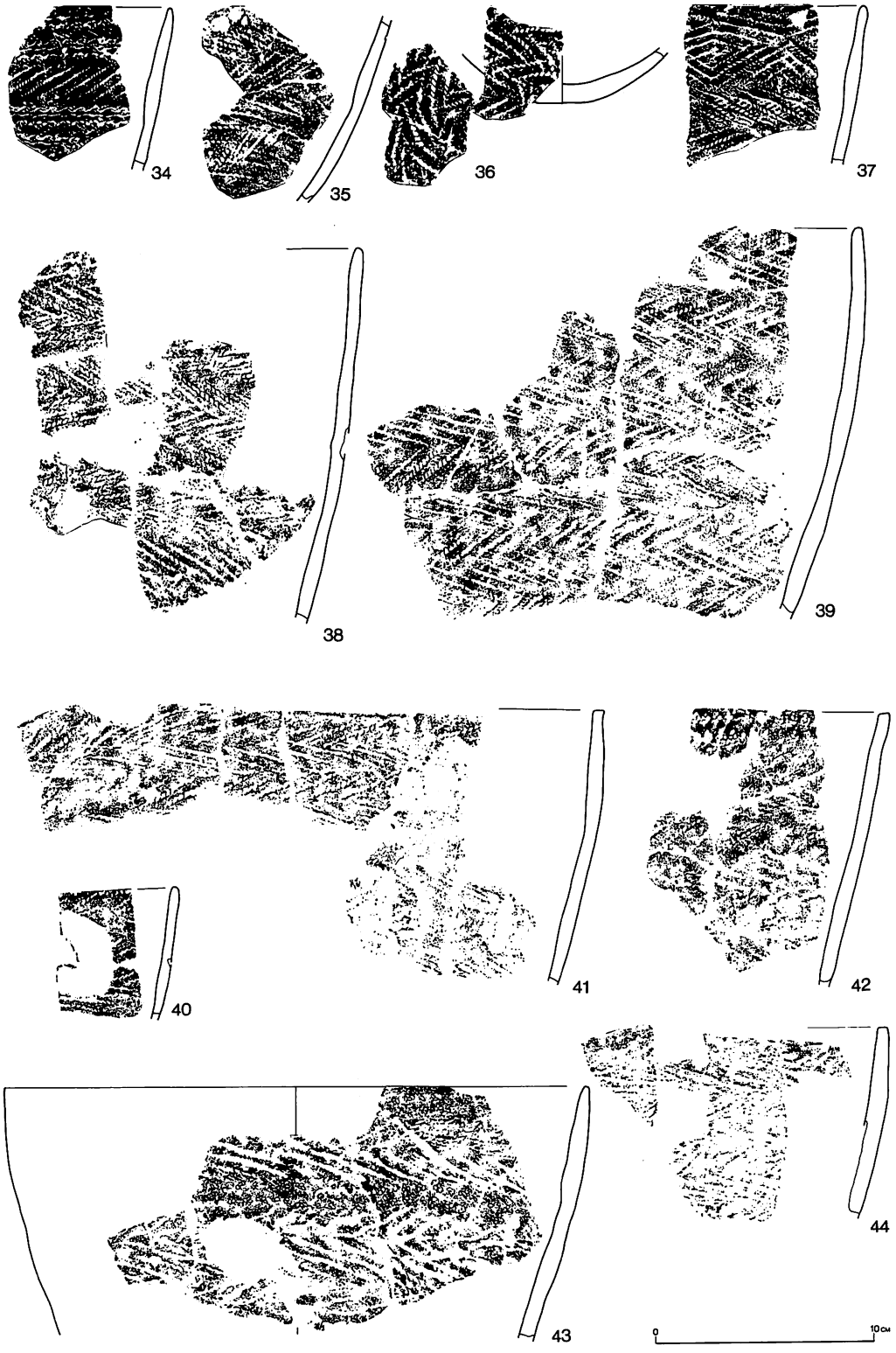


図Ⅲ－89　Ⅰ群ｂ－４類土器(8)

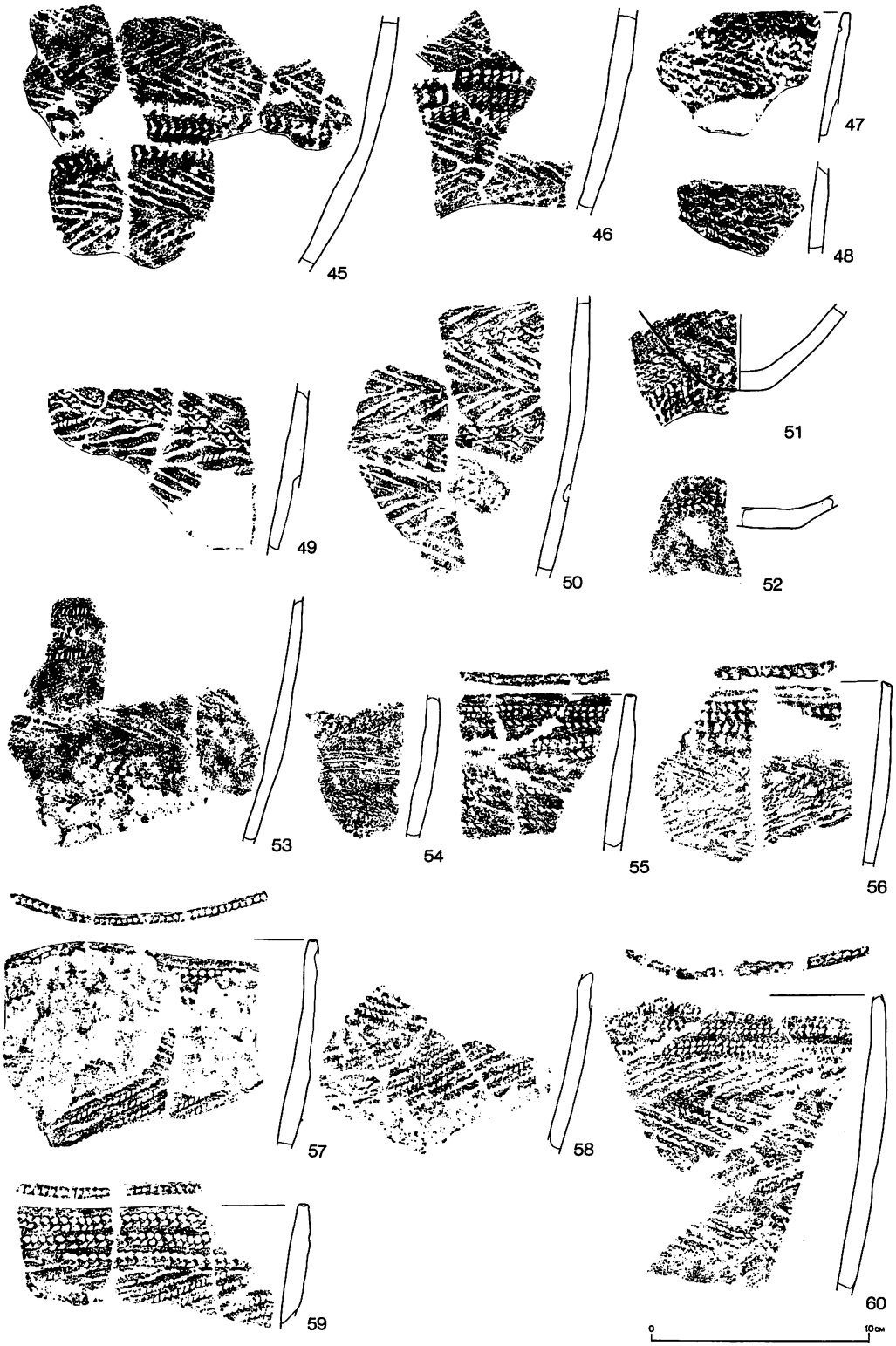
20は底部に縄の末端の圧痕文が３条施されている。表面が剝落し下の粘土が露出した部分に縄文が施されているのがわかる。21は口唇断面が角形で、器壁はやや凹凸がある。口縁部と胴部に自縄自巻 RL の原体の縄端圧痕文が３条ずつ施されている。22は口縁部から底部にかけて約三分の一が残存するもので、図上で復元したものである。口唇断面は薄みで底部は小さな平底である。四か所に小さな山形の頂部がある。器面にはやや乱れた羽状縄文が施されている。55は角形の口唇上に縄端の圧痕文がつけられている。口縁部には自縄自巻 RL の原体の縄端の圧痕文が深く施されている。口縁部には半截竹管状工具で沈線が浅く施され、その下位には縄端圧痕文が施されている。

f類（23・24・57～67）

口唇断面が角形で口縁部が薄く体部がやや厚手のもの、口唇が丸味を帯びた角形で体部が薄



図Ⅲ－90　Ⅰ群ｂ－４類土器(9)



図Ⅲ－91　Ⅰ群ｂ－４類土器(10)

手のものがある。口唇上には縄端の圧痕文がつけられるものがみられる。口縁部に文様帯をもつものでは、縄端圧痕文を数条施すもの、縄線文が施されるものがある。器面には自縄自巻の原体による縄文に加えて、撚糸文の施されるものがある。器壁は前段階に比べて厚手である。

23、61～65は２条並列する撚糸文、24・57～60、66、67は自縄自巻の原体による縄文が施されている。

23は胴部から底部付近までの約四分の三が残存する。器面には２本の原体（１段ＲとＬの縄をそれぞれ２条ずつ軸に並列に巻いた原体）による撚糸文により羽状を構成する文様が施されている。器壁はやや薄手で凹凸がある。24は口縁部から胴部下半までの四分の一程が残存する破片を図上で復元したものである。器面には自縄自巻RRLとLLRの原体による縄文が施されている。２条並列する撚糸文に近い文様が施されている。口縁部には器面と同じ原体によるとみられる縄端圧痕文がつけられている。57～60・66は自縄自巻RLとLRの原体による縄文が施されている。

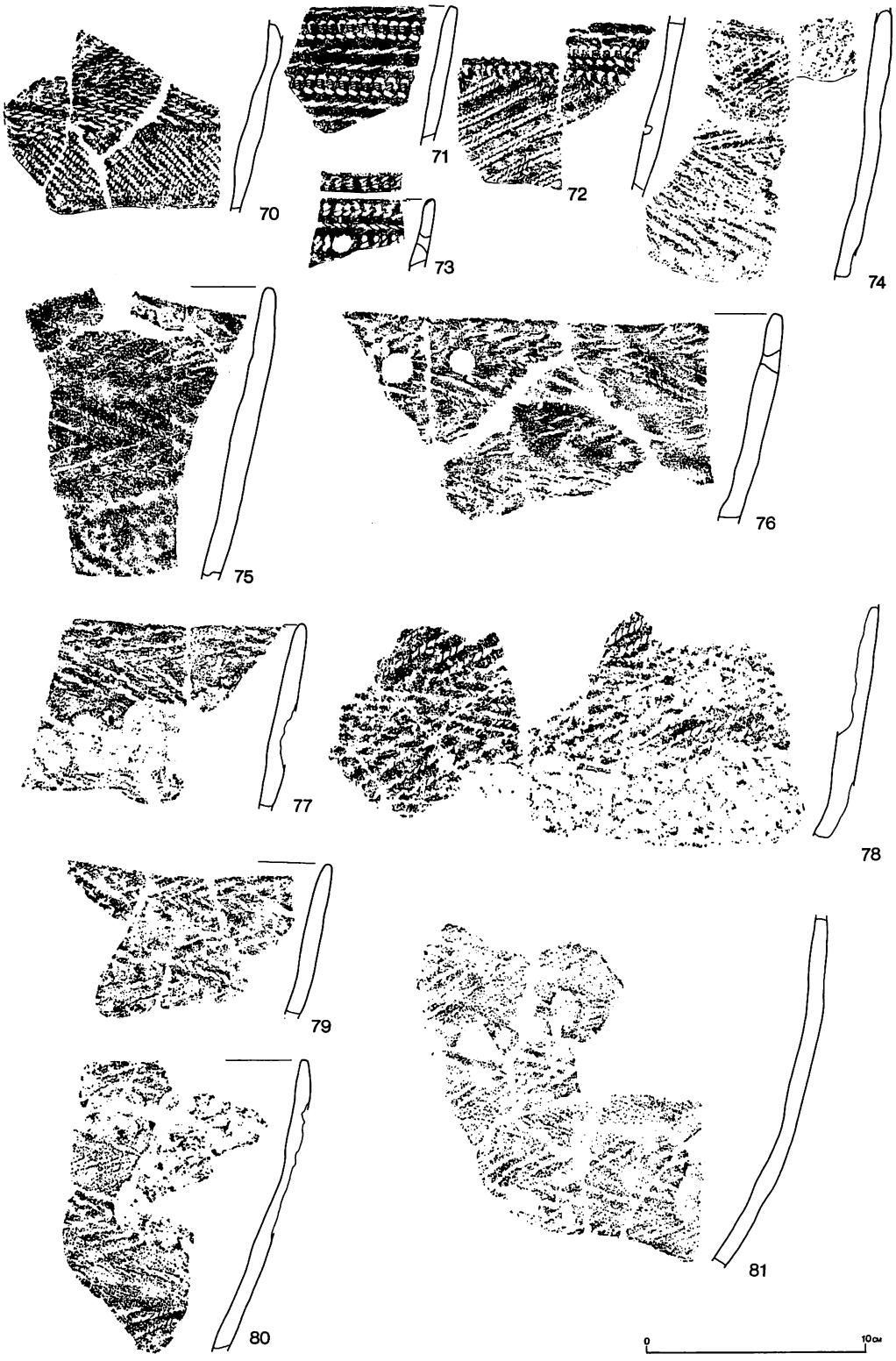
57～59は同一個体の破片。口唇の断面は角形、やや薄みで体部にむかって厚みを増す。口縁部には自縄自巻LRの原体の縄端圧痕文が３条施されている。口唇上には縄端の圧痕文が刺突の様に深く施されている。60は小さな波頂部をもつもので、口縁部に自縄自巻LRの原体による縄端圧痕文が３条施されている。口唇上にも同様の圧痕がある。61～63、65は１段Ｌの縄を２条並列して軸に右巻と左巻にした原体による撚糸文である。64は２本の原体（１段ＲとＬ）をそれぞれ２条ずつ軸に並列に巻いた原体である。61・62は同一個体の破片。器壁は薄手で、やや凹凸がある。口唇断面は角形。軸に巻きつけてある条は細く整っている。63は口唇断面が丸味を帯びた角形で、体部にむかって厚みを増す。条は61よりも太い。焼成、胎土は61・62と良く似ている。65は撚糸文による文様が鋸歯状の文様構成になっている。66の器壁は厚手で、口縁部でやや薄みになっている。口縁部には縄端圧痕文が２条と２段LRの原体による縄線文が２条口縁に沿ってめぐらされている。67は波状口縁を呈すもので、体部にむかって厚みが増す。口縁部には自縄自巻RL原体の縄端の圧痕文が２条施されている。

g類（25～33、68～91）

器形には深鉢形に加えて、小形で口径に比べて器高が高い砲弾形のもの、舟形のものがある。器壁は厚手で口縁部から体部にむかって厚みを増すものが多い。口唇断面は角形、丸味を帯びた角形、切り出し形のものがある。口縁部にやや幅の広い文様帯が形成されるものがみられる。器面には自縄自巻の原体による縄文、撚糸文、普通の縄文が施されるもの、撚糸文と自縄自巻の原体による縄文、普通の縄文が組み合されるもの等、様々な原体による縄文がみられる。原体の条は太いものが多く、横走気味になるものがある。縄線文で区画した中に短縄文を加えて非常に整った菱形の文様を構成するものがみられる。縄文時代前期の土器の文様に共通する要素があると思われる。口縁部には縄線文を複数めぐらせるもの、縄端圧痕文と縄線文を組み合せるもの、短縄文、縄端圧痕文、縄端による刺突文を口縁に沿って２・３条めぐらすものがある。



図Ⅲ－92　Ⅰ群ｂ－４類土器(11)



図Ⅲ－93　Ⅰ群ｂ－４類土器(12)

25・26・31・56・68・77～81・87は自縄自巻LRとRLの原体、75・76は自縄自巻RLとLL、27は自縄自巻RRとLLの原体による羽状縄文が施されている。30は自縄自巻LR、32・82は自縄自巻RLの原体による縄文が施されている。28・69～74、85は撚糸文が施されているもので、69・70、85には普通の縄文も組合されている。88～90は普通の縄文が施されている。

26は緩やかな波状口縁を呈するもので、口縁部から胴部にかけての二分の一程が残存する。口唇断面は角形で、体部にむかって厚みを増す。口縁部には自縄自巻RLの原体の縄端による刺突文風な深い圧痕を3条めぐらしている。27は器壁に凹凸があり、口縁でやや薄くなる。四か所に山形隆起部をもつものであるが、欠損しているため図上で復元した。口縁部から胴部の約二分の一が残存する。大柄な菱形を構成する文様が施されている。口縁部の文様帯はやや幅が広く、ループ状の縄端圧痕文が5条めぐっている。菱形の縄文の間にも2、3条施されている。28の器面は磨滅している部分が多い。1段Lの縄を2条軸に並列して巻つけた撚糸文が施されているが、鋸歯状を構成するものとみられる。口縁部には磨滅していてはっきりしないが、縄端圧痕文が1条と2段LRの原体による縄線文が施されているようである。縄端圧痕文は胴部にもつけられている。

29～32は小形のもので、29～31は器高が高い砲弾形を呈するものである。29は昨年度出土した破片（北埋調報58　p－184　図Ⅲ－109－99、100）と接合できたもので、口縁部と底部を図上で復元したものである。小さな丸底に近い平底である。比較的薄手で口唇断面は角形である。器面には底部までLRの原体による縄線文と縄端圧痕文が2・3条単位で交互に施されている。口唇上には縄端圧痕文がある。30は四か所に小さな波頂部があるとみられる、小さな平底のものである。口唇は薄みで体部にむかってやや厚みを増す。器面の文様は自縄自巻LRの原体を縦・横に回転施文することで鋸歯状に近い文様構成となっている。口縁部の文様帯はやや幅広く自縄自巻RLの原体の縄端圧痕文が施されている。底面にも縄文がつけられている。31は口縁がやや内傾する。四か所に山形隆起部をもつとみられるが、いずれも欠損しているため図上で復元した。丸底気味の平底のもの。縄文はやや乱れている。口縁部に沿って縄線文が2・3条めぐっているとみられる。32は約二分の一が残存する。薄手で器面に凹凸がある。口唇は薄みで、丸味を帯びた角形である。底部に縄端圧痕文が2条めぐっている。口縁部の内面にも縄文が浅く施されている。33は全体の約四分の三が残存する。非常に精巧な作りの舟形土器である。薄手で口唇は角形である。口縁部と底部に2段の原体による縄線文をそれぞれ3条ずつ施して区画した中に縄線文で菱形の文様を構成している。縄線文の間には短縄文を整然と充填させている。口縁部と底部の縄線文はLRとRLの原体を上手に使い分け、上下で違う撚りの縄線文が配されるようになっている。底面には縄線文を同心円状にめぐらし、その間にも短縄文を加えている。

68はやや幅の広い口縁部に縄端圧痕文が4・5条めぐっている。器面の縄文の条は太い。69・70は同一個体の破片。大きな山形の隆起部をもつ。2本の原体（1段LとRの縄をそれぞれ2条ずつ軸に巻いた原体）による羽状を構成する撚糸文に加えて、RL原体による縄文が施



図Ⅲ－94　Ⅰ群ｂ－４類土器(13)

されている。口縁部には条の太い１段Ｒの原体による縄線文が５条めぐっている。71・72は同一個体の破片。焼成の良い土器で黒褐色を呈する。口唇断面は角形で、体部にむかって厚みを増す。２条並列する撚糸文が整然と施されている。口縁部には２段ＲＬとＬＲの原体による縄線文が２条一単位でめぐらされ、その間に縄端圧痕文が加えられている。73は口唇が薄みで、口縁部に２段ＬＲの原体による縄線文と縄端圧痕文が口縁部の表裏面に施されている。74は２条並列する撚糸文が施されている。

75～81は厚手で太い条による縄文が施されているものである。条が乱れているものが多い。75、79は口縁部に山形隆起部をもつ。77・78は同一個体の破片。口唇は丸味を帯びた角形である。79～81は同一個体の破片。器壁にやや凹凸がある。口縁部に縄端圧痕文がある。83～85は同一個体の破片。口唇断面は切り出し形で、器面にはＲＬ原体による縄文と横走気味の撚糸

文が施されている。口縁部には2段RLの原体による縄線文を2条めぐらし、その下位に鋸歯状に縄線文を配している。87は条の太い原体による縄文が菱形を構成する様にみえる部分がある。縄文の間には自縄自巻RLの原体による縄端圧痕文が施されている。88・89は同一個体の破片。口縁部に小さな波頂部をもつものである。薄手で、口縁部と角形の口唇上には縄端圧痕文が施されている。非常に整った縄文が施されている。90は口唇がやや丸味を帯びた角形を呈する。91は2条並列する撚糸文が施されている。条が横走気味になっている。

Ⅱ群a類土器（図Ⅲ－95～97－1～20、図版Ⅲ－25－5、－30－4・5、－31－1）

帯状の整った羽状縄文が施されたa－1類（1・2・4、5～17）とやや乱れた羽状縄文が施されたa－2類（3、18～20）がある。

a－1類（1・2・4・5～17）

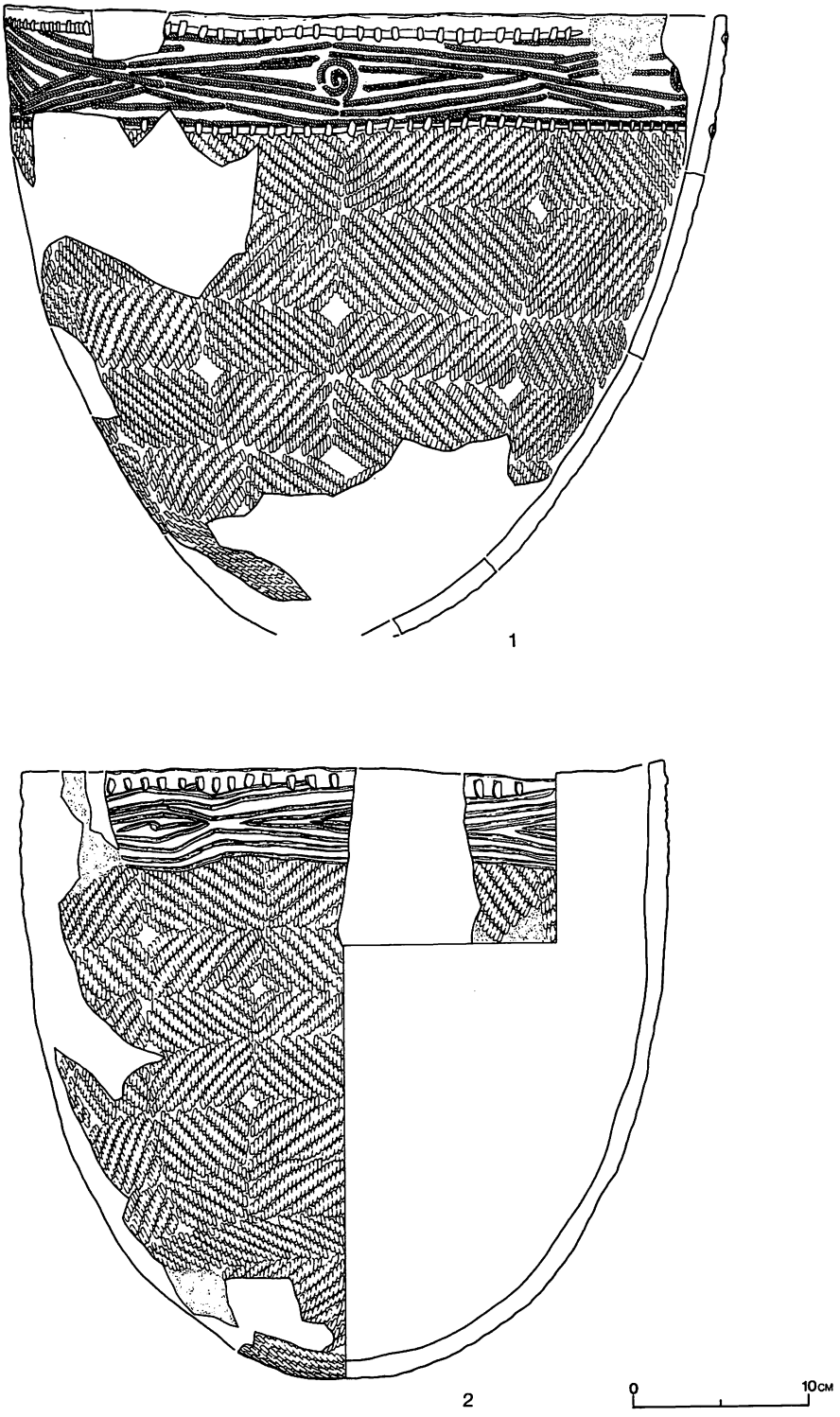
口縁部に文様帯のあるもの（1・2・5～8・11・12）と文様帯のないもの（4・9・10・13～17）がある。

文様帯のあるものでは刺突文をめぐらすもの（1・2・5・6）、組紐圧痕文（1）、沈線文（2）、縄線文（7・8・11・12）で文様が施されるものがある。器面には撚りの異なる2本の原体で羽状縄文を施すもの（4・5～17）、原体を交互に施文することで菱形を構成する羽状縄文が施されるもの（1・2）がある。条の中の節が磨り消されている部分のみられるものもある。いずれも胎土には繊維が混入されている。1・2は大形のもの、いずれも昨年度出土した資料と接合したため、あらためて報告することとする。

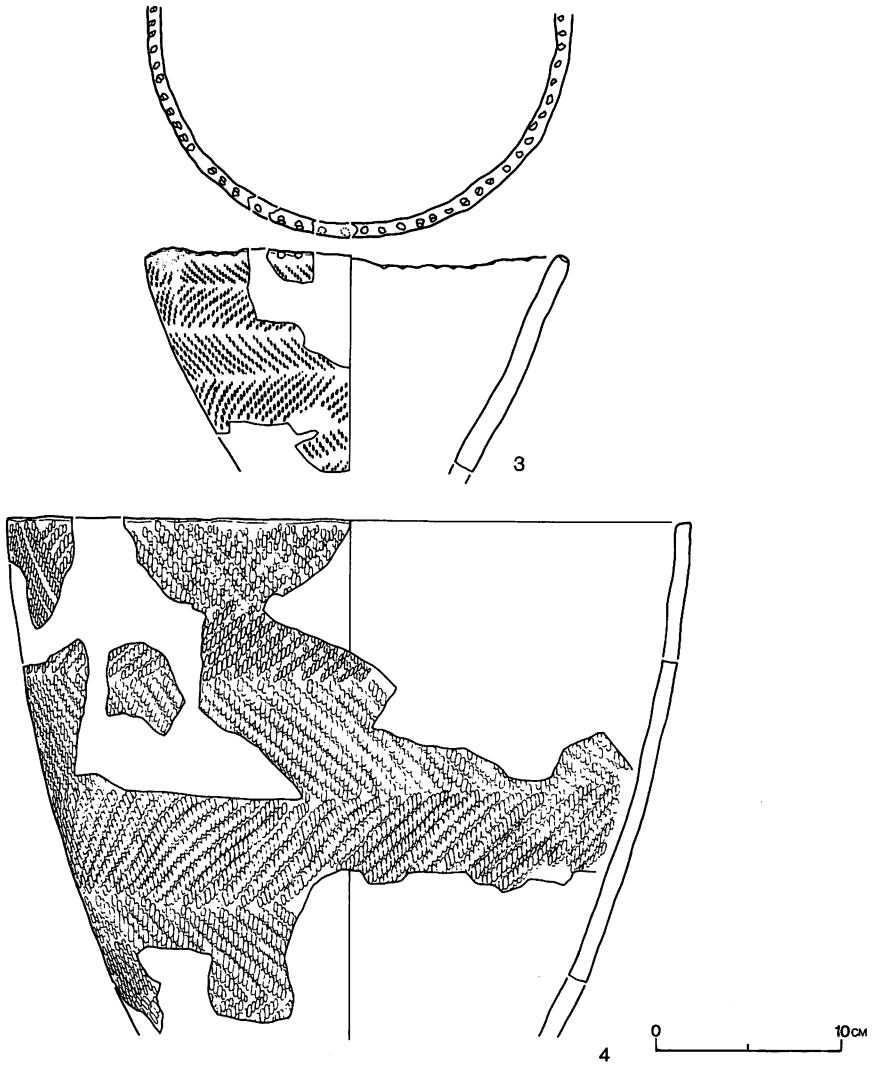
1は昨年度出土した土器片（北埋調報58　p－186、図Ⅲ－110－1）と接合できた資料である。非常に広範囲から破片が出土した。口唇の断面は丸みをもつ切り出し形で、口縁直下に幅の狭い無文帯があり、その下にはわずかに隆帯が形成されている。刺突文は組紐圧痕文による文様帯に、縄端による刺突でなされている。なお昨年度棒状工具による刺突文と報告したのは誤認につき訂正する。2は昨年度出土した土器片（北埋調報58　p－187　図Ⅲ－111－2）と接合し、口縁部から底部まで約二分の一程が復元できた。口唇断面は角形で沈線による文様構成は1と似ている。口縁に沿って縄端による刺突文が施されている。同一個体の破片はP－38からも出土している。

4は口縁部から胴部下半まで三分の二程が残存する。破片の一部はP－47からも出土した。口唇の断面はやや丸みを帯びた角形である。

5・6は同一個体の破片。口唇直下がえぐられたように薄くなり、幅の狭い無文帯を形成し、縄端による刺突文がめぐらされている。7・8は同一個体の破片。胎土に小砂利が混じる。10は条の幅が1㎝程もある太い条による縄文が施されている。器壁は口唇部にむかって薄くなっている。13はP－38出土の土器（図Ⅲ－38－3・4）と同一個体の破片。11・12・14は同一個体の破片と思われる。15～17は細かく割れた破片がc－68－35・36区から多数出土した。接合できた部分は口縁部のみである。縄文を施文後、口唇のなで調整を行っているため、口唇の一部がはみ出している。口唇の調整は2とよく似ている。口唇断面は角形で、胴土は黄褐色を



図Ⅲ－95　Ⅱ群ａ類土器(1)



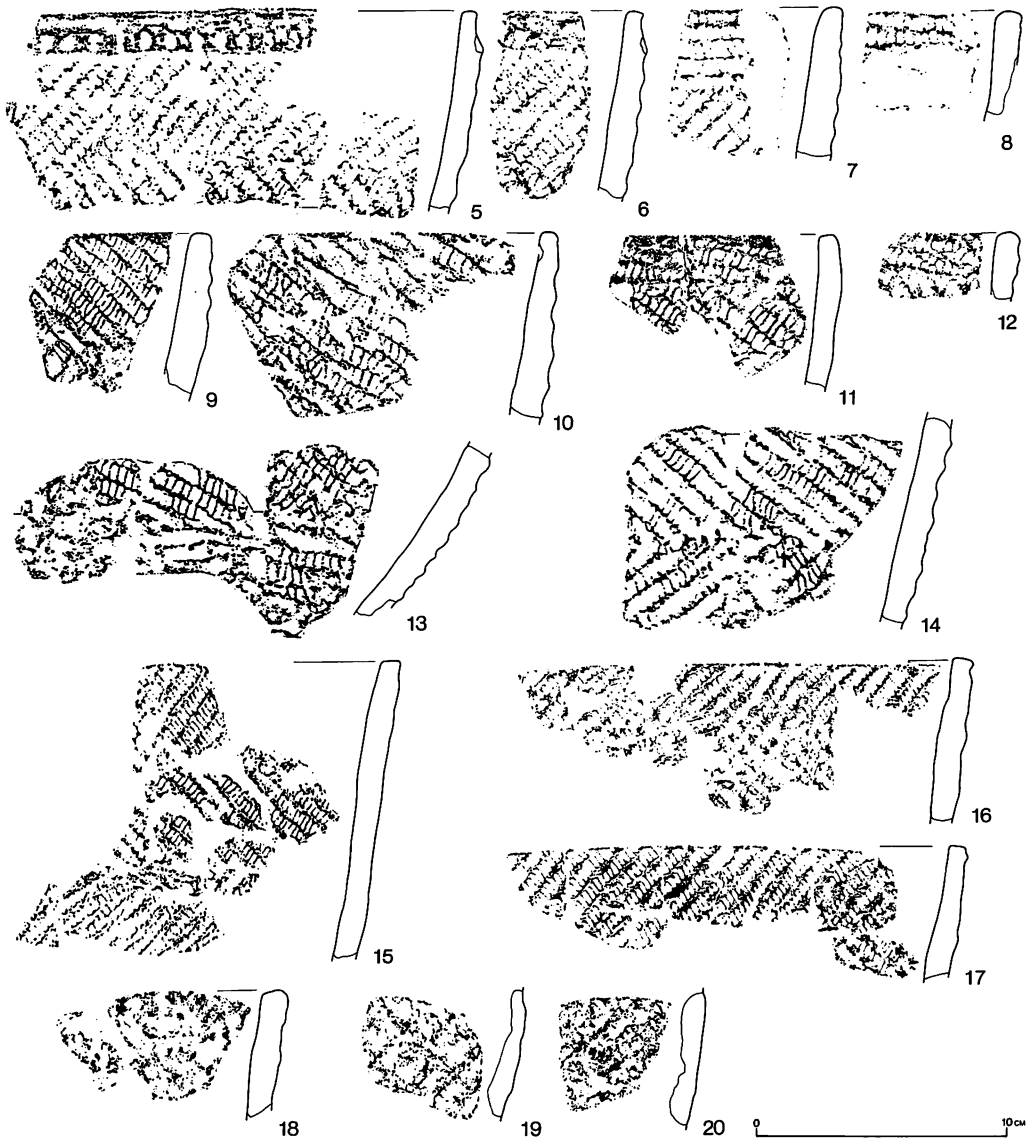
図Ⅲ－96　Ⅱ群ａ類土器(2)

呈する非常に焼成が良い土器である。

ａ－２類（３、18～20）

３は中形で尖底になると思われる。口縁部から胴部上半にかけてのものである。口唇は丸みを帯びた角形で、口唇上には縄端による刺突文がつけられている。器面には条の細い原体による羽状縄文が施されている。

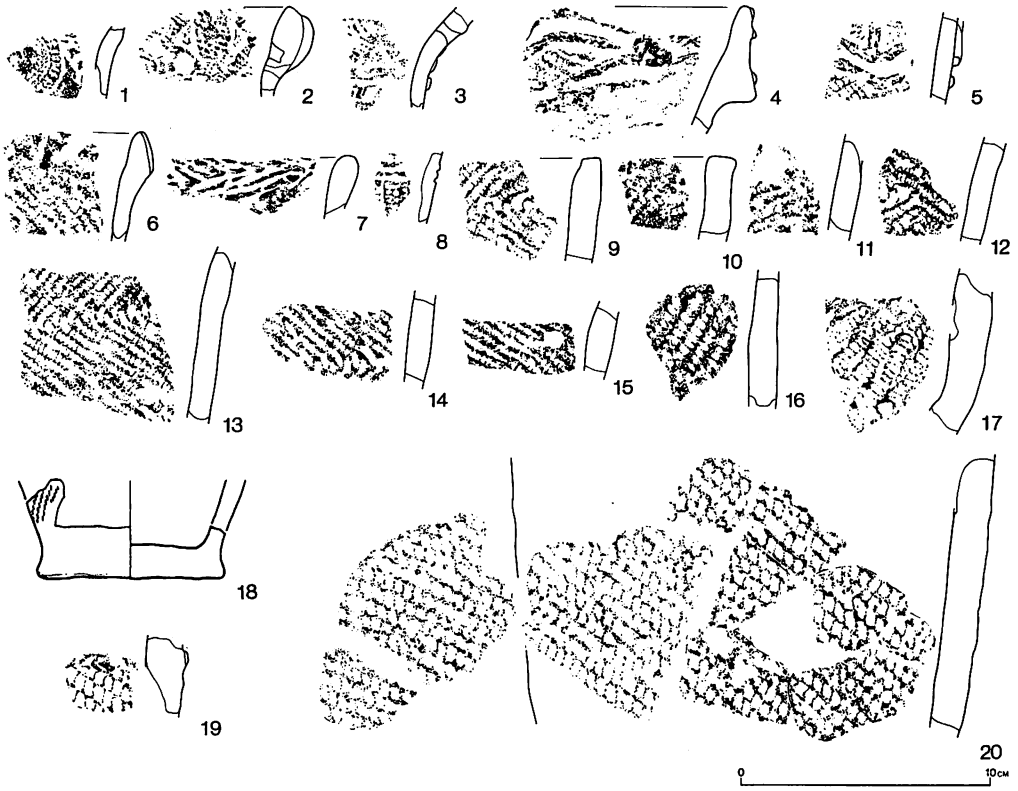
18～20は、ｄ－71区の斜面の低い位置から一個体分がまとまって出土した。破片は多数あったが磨滅が著しく接合できなかった。色調は黒褐色を呈する。二次焼成を受けたかと思われる。非常に軽い。器面には太い条による斜行縄文が施されている。



図Ⅲ－97　Ⅱ群ａ類土器(3)

Ⅲ群ａ類土器（図Ⅲ－98－１～18、図版Ⅲ－37－１）

１～６は貼付帯により文様が施されている。１～３は、突起部あるいは突起部付近の破片。１は貼付帯に沿って、３本一組の縄線文と馬蹄形圧痕文が施されている。貼付帯上には縄の圧痕がつけられている。２・３は同一個体の破片と思われる。突起部には楕円形の貫通孔があり、その部分に縦に橋状の貼付帯がつけられている。貼付帯上には縄の圧痕文、貼付帯間には、撚りの異なる２本一組の縄線文が施されている。４・５は同一個体の破片と思われる。また昨年度調査したｃ－69－51区から出土した破片と、同一個体であると思われる（北埋調報58　ｐ－189、図Ⅲ－112－７）。突起部の下位には鍔状の凸出部があり、細い貼付帯で文様を構成して



図Ⅲ－98　Ⅲ群ａ類、ｂ－１類土器

いる。器面にはあらかじめ、RL 原体による斜行縄文が施されている。6 の口唇の断面は切り出し形で、口縁部に比較的太い貼付帯がつけられている。器面には縄文が施されている。

7・8 は沈線により文様が描かれているもので、同一個体の破片と思われる。7 の口縁部は、半截竹管状工具で矢羽根状に文様が施されている。

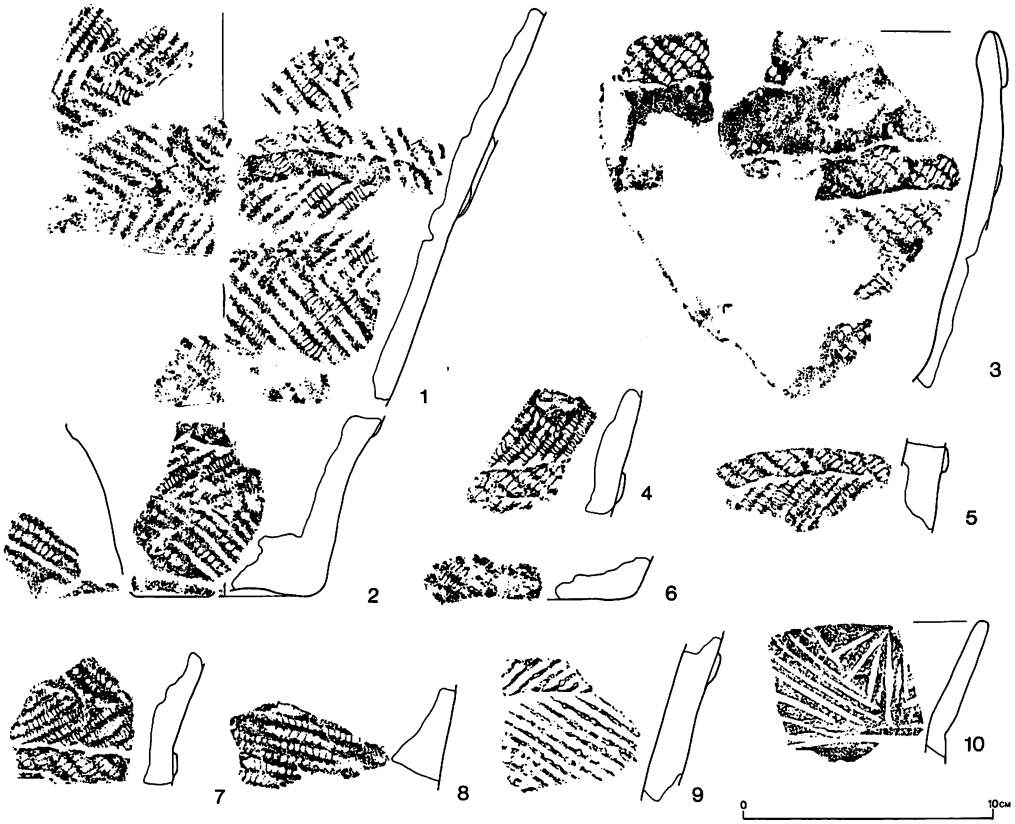
9 は、0 段多条の原体による結束羽状縄文が施されている口縁部の破片、10は突起部の破片である。11～16は胴部の破片でいずれも結束第 1 種羽状縄文が施されている。17は底部付近の破片。段多条の LR 原体による斜行縄文が粗く施されている。18は破片の一部が H －20の覆土からも出土したものである。LR 原体による斜行縄文が施され、底部に近い部分は磨かれている。

Ⅲ群ｂ－１類土器（図Ⅲ－98－19・20、図版Ⅲ－37－１）

19・20は同一個体の破片。この土器の破片は、500点ほどがｃ－68－44区からまとまって出土したが接合できたものは少なく、かろうじて胴部の器形のみが復元できた。器面には、条の太い RLR の原体による複節の斜行縄文が施されている。19は縄文地につけられた貼付帯の部分である。貼付帯上には、矢羽根状の刻み目がつけられている。

Ⅳ群ａ類土器（図Ⅲ－99－１～10、図版Ⅲ－37－２）

１・２・４～９は余市式に相当するもの。１・２・４～７は同一個体の破片である。この個



図Ⅲ－99　Ⅳ群ａ類土器

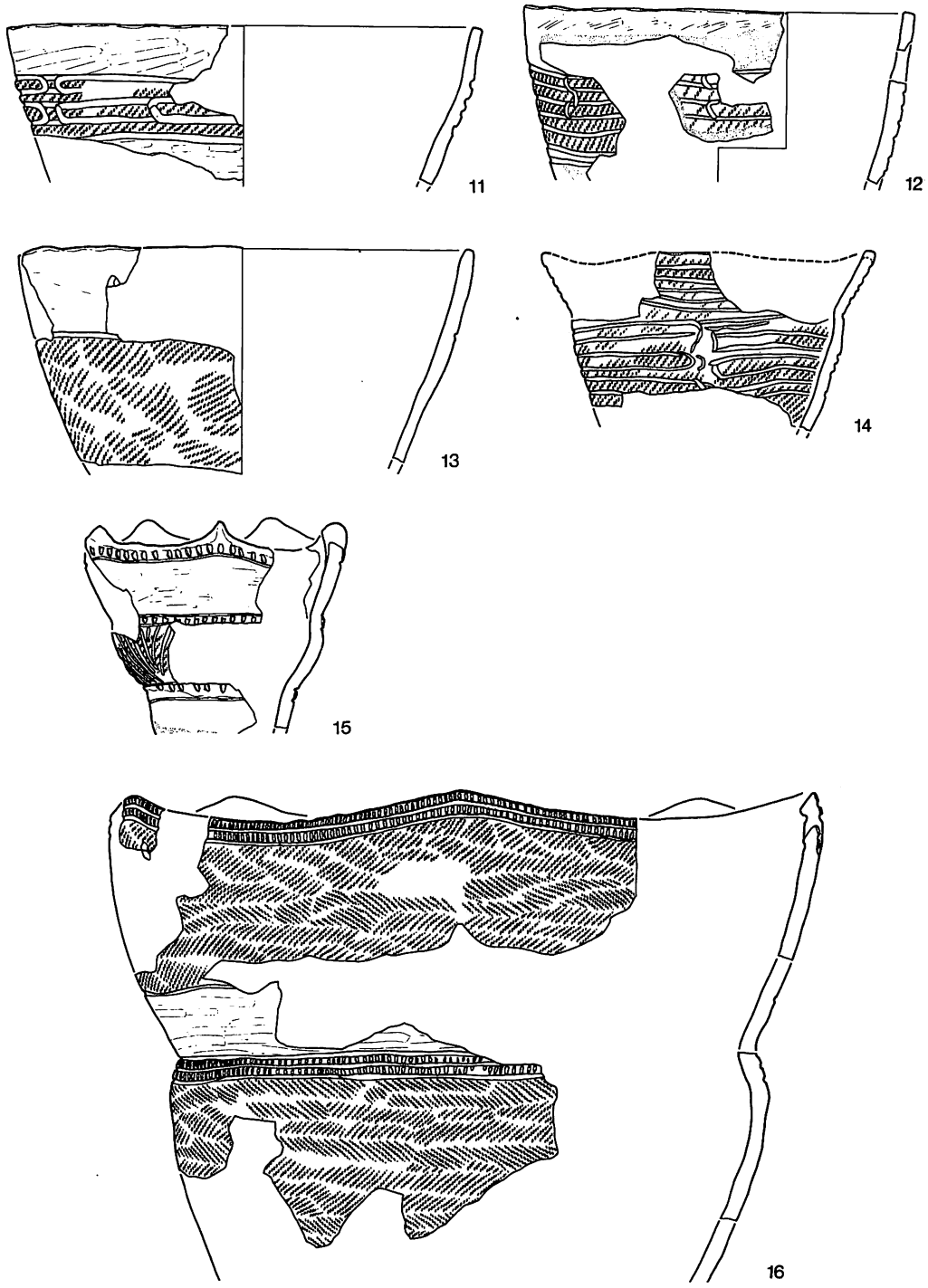
体の破片はｃ－68－28・38区周辺と遺構からまとまって出土した。底部はあげ底状で、ややくびれて胴部から口縁部にむかって直線的に立ち上がる器形とみられる。器面には０段多条のLRとRLの原体により羽状縄文が施されている。縄文施文後に貼付帯をめぐらし、その上にも縄文を施文している。そのため貼付帯がつぶれている。貼付帯は縦位にもつけられている。３は口縁部から胴上半部にかけての破片。器壁には凹凸がある。口縁部はやや内傾する器形のもの。貼付帯は１よりも幅が広く扁平である。地文には条の太いRLの原体を横方向と縦方向に回転することで羽状縄文を施している。その後貼付帯を貼り付け、同じ原体を横方向に回転させ縄文を施している。貼付帯間の縄文がすり消されて無文になっている部分もある。胎土に小砂利が多い。９は０段多条の原体による縄文を施文後、器面をなでている。

10は大湯式に相当するもの。比較的新しい段階のものであろう。口唇断面はやや丸みのある角形で、口縁部には沈線で鋸歯状の文様が描かれている。頸部には沈線で区画された無文帯が形成されていると思われる。

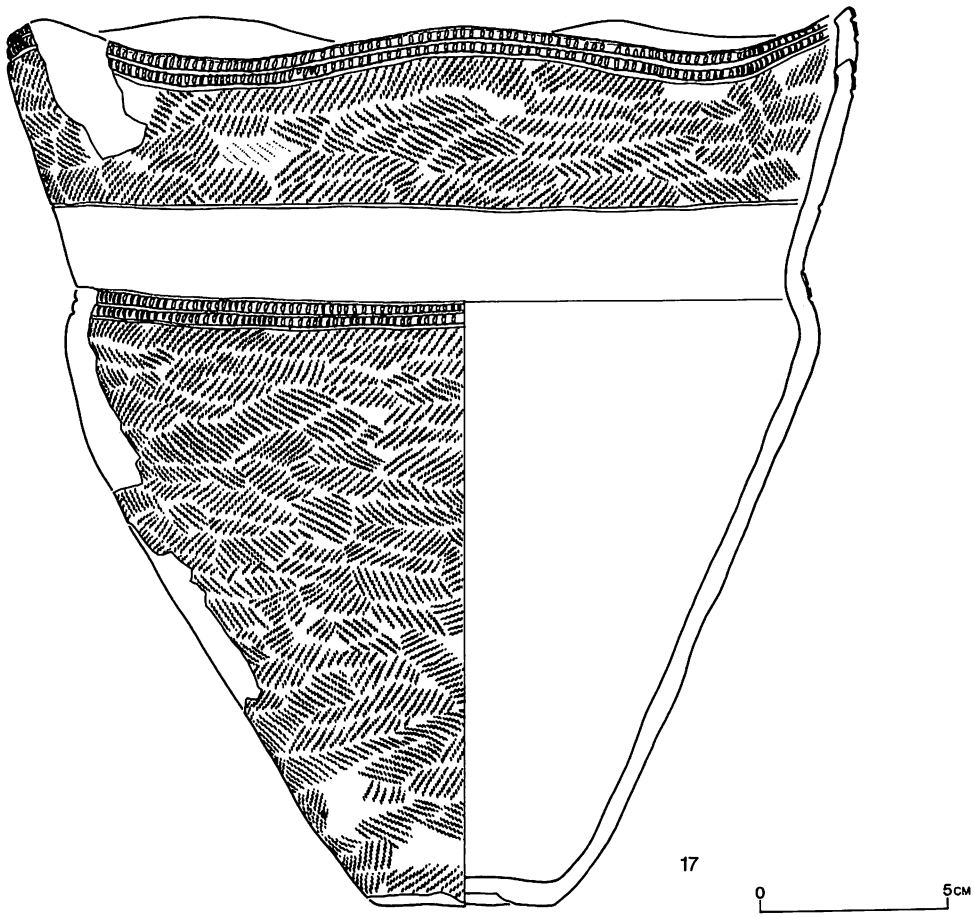
Ⅳ群ｂ類土器（図Ⅲ－100～104－11～37、図版Ⅲ－26－２、－31－２～５）

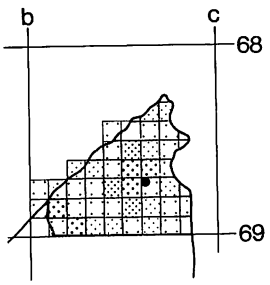
Ⅳ群ｂ類土器は手稲式に相当するｂ－１類（11～14、18～25、37）と鉈澗式、エリモＢ式に相当するｂ－２類（15～36）.に大別できる。

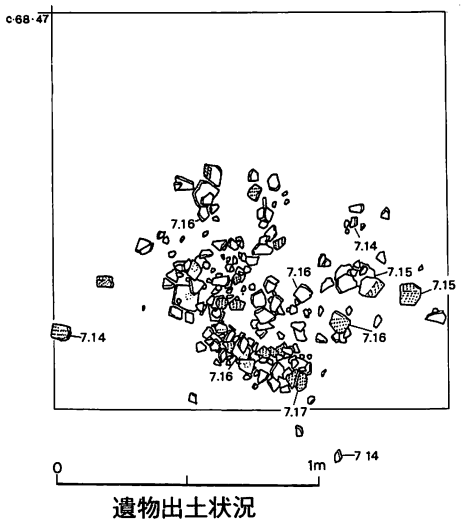
ｂ－１類（11～14、18～25、37）



図Ⅲ－100　Ⅳ群ｂ類土器(1)







遺物出土状況

図Ⅲ－101　Ⅳ群ｂ類土器(2)

鉢形土器（11～14・18～25）と壺形土器（37）がある。鉢形土器には平縁で頸部にくびれのない器形のもの（11～13）と、波状口縁で頸部がくびれて胴部が張りだす器形のもの（14・18～25）とがある。

平縁のものは口縁の断面が角形で、口縁部に無文帯をもち胴部上半に沈線による文様を構成するもの（11・12）と、縄文のみが施されているもの（13）がある。11・12はLR原体による斜行縄文地に平行な沈線を、11では5条、12では6条施し沈線間には短い弧線を施している。

波状口縁のものは頸部が「く」の字にくびれる器形のもの（18～20・22～25）と、くびれが弱いもの（21）がある。前者では口縁部と胴部上半に平行沈線で文様を施し、口唇直下に縄文帯があるもの（18・19）と無文になるもの（19～25）がある。18～20は頸部にも無文帯が形成されている。18・19は同一個体の破片、口唇の断面は角形である。22は口唇断面は丸みを帯びる。波状の口縁に沿って沈線を施し、沈線間を縦に短い弧線で継いでいる。23～25は同一個体の破片。波状口縁部は頂部を中心に非対称な形である。図の左側の口唇の断面は薄みで角形である。右側の断面は厚みで口唇に凹みがある。沈線も非対称である。

37は大形の壺形土器。Ⅱ黒上面から相当数の破片がまとまって出土したが、細かく割れていたために、接合できた部分は少ない。破片から器形を図上で復元したものである。口縁部から底部まで約四分の一程が残存する。口唇断面は角形で口縁部はやや内傾する。頸部がくびれて胴部がふくらむ器形のもの。溝状の沈線で胴部の文様帯を区画した中に、大柄な入組磨消文を施している。沈線を半彫刻的に施して文様を描き、縄文帯を浮きださせる効果をみせている。無文の部分はヘラ磨きによって調整されている。

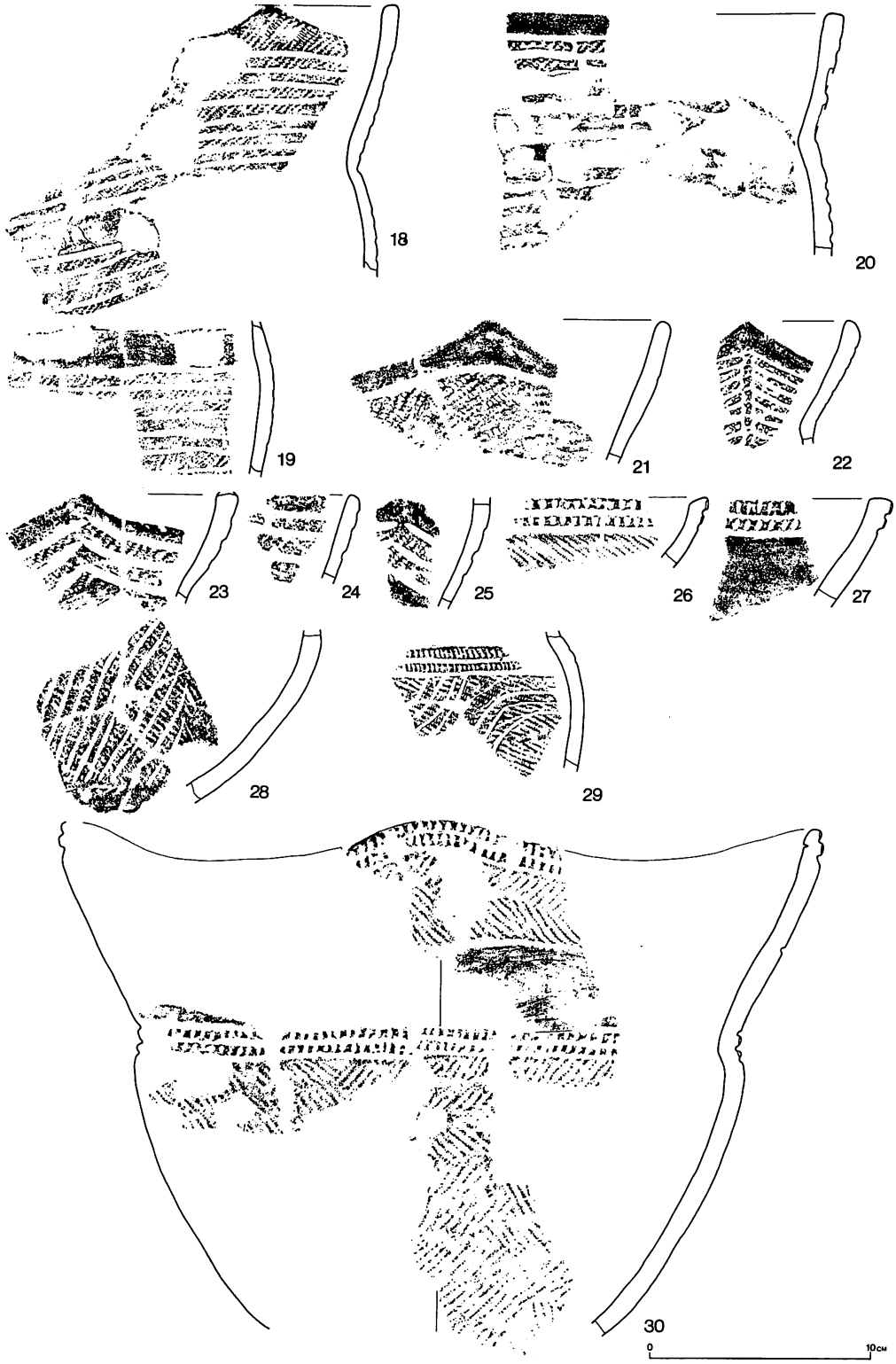
b－2類土器（15～36）

頸部にくびれのある深鉢形土器（15～17・26～34）と頸部にくびれのない深鉢形土器（35）、浅鉢形土器（36）がある。

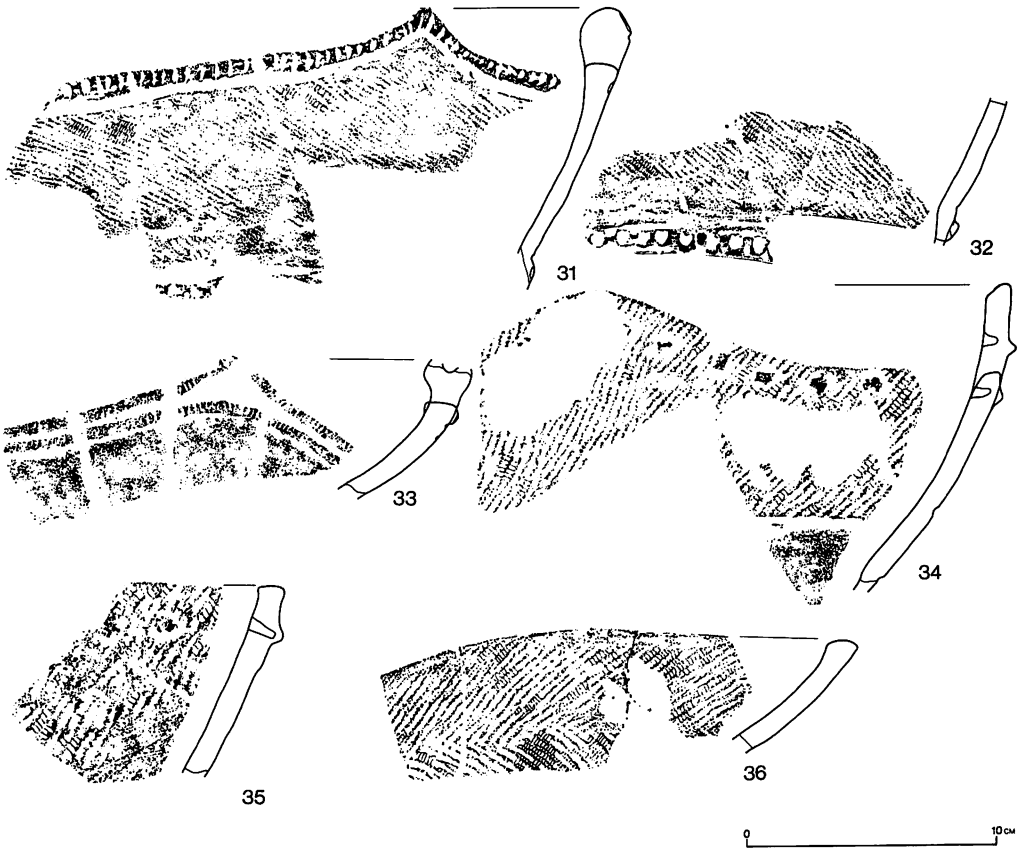
頸部にくびれのある深鉢形土器では、幅広の口縁部に沈線をひき縄文帯と無文帯を区画するもの（16・17・30・34）と縄文のみが施されるもの（31・32）がある。器面に施された縄文は、斜行縄文のもの（15・28・29・34～36）と羽状縄文のもの（16・17・30・37）がある。文様は口縁部やくびれ部に棒状工具で刻み目を施すもの（15～17・26・27・29・30～31）、口縁に突瘤文のめぐらされるもの（34・35）がある。

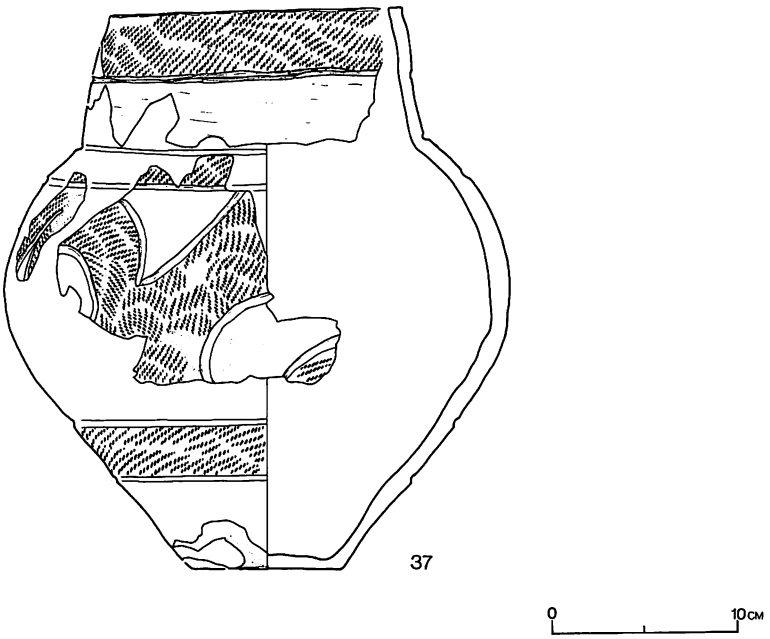
15は小形のもので、底部は輪積の位置で欠損している。口縁部が広がり、胴部に膨らみをもち底部付近では筒形になる器形のもの。口縁の五か所に山形突起部がある。口唇断面は角形で突起部を肥厚させている。胴部には縄文地に沈線を施し、鋸歯状の文様を構成している。

16・17・30は器形、文様構成が非常によく似た土器である。16・17は口径がほぼ同じである。なお17は昨年度出土した土器（北埋調報58、P－195　図Ⅲ－116－34）と接合したため、あらためて報告することとする。口唇断面はいずれも切り出し形で、16・30には内面に整形の際につけられたとみられる1条の沈線が認められる。幅広の口縁部には沈線が1条ひかれ上位は縄文帯、下位は無文帯となっている。16・17・30ともに器面の縄文は0段多条の原体である。

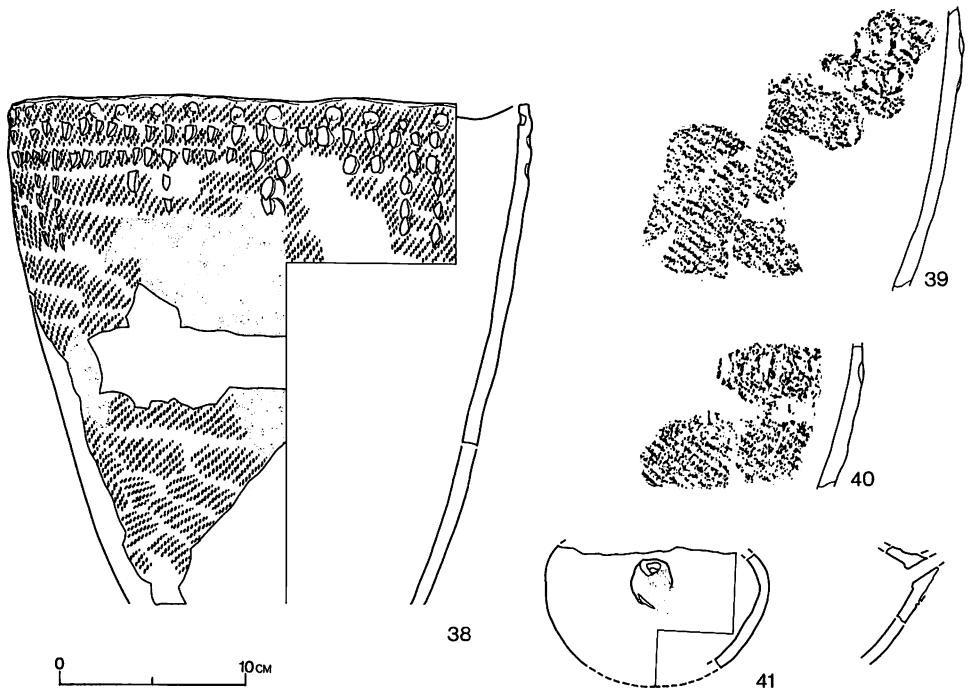


図Ⅲ－102　Ⅳ群ｂ類土器(3)





図Ⅲ－103　Ⅳ群ｂ類土器(4)



図Ⅲ－104　Ⅳ群ｃ類土器(5)

内面はいずれも磨かれている。

26・27は口縁部に沈線を施し、その間に刻み目をつけているものである。非常に焼成の良い土器である。26の刻み目は半截竹管状工具によるかとみられる。

28・29は縄文地に沈線で文様が描かれている。28は底部付近の破片。細い沈線で鋸歯状の文様を描いている。胎土に砂が多い。29の縄文は条の細い原体によるもので、細い沈線で弧線が描かれている。

31・32は同一個体の破片。山形突起部を肥厚させている。口縁部には先の細い工具により刻み目がつけられている。頸部のくびれ部には粘土を貼り付けて厚みをもたせ、その上に円形の刺突文を施している。33は口縁の山形突起部を肥厚させ、口縁に沿って隆起帯状の刻み列を施し、三叉状の空白部を形成している。口縁の内面には稜がある。

34は昨年度出土した土器（北埋調報58　Ｐ－196　図Ⅲ－117－38）と接合したものである。口唇断面は切り出し形である。36は０段多条の原体により羽状縄文の施されているものである。

Ⅳ群ｃ類土器（図Ⅲ－104－38～41、図版Ⅲ－31－５）

深鉢形土器（38～40）と注口土器（41）がある。

いずれもⅡ黒層上面からまとまって出土した。38～40は平縁で胴部にくびれのない深鉢形土器。器壁は薄く、縄文地に口縁にそって爪形文が施されている。38は口縁部から胴部下半までのもの。口唇断面は角形で、口唇上には縄文が施されている。口縁部に沿って突瘤文が１列めぐっている。爪形文は部分的に縦方向にも２列つけられている。焼成は良好で内面は磨かれている。色調は赤褐色を呈する。39・40は同一個体の破片、口縁部付近の破片かとみられる。

24は小形のもの。口縁部と底部は欠損している。無文で頸部が張り出す器形のもの。注口部の下部は欠損している。沈線による文様かとみられる痕跡がある。　（遠藤香澄）

(2)　石器（図Ⅲ－105～124、図版Ⅲ－39～45）

石鏃（1～102）

1～8は長身鏃である。1は側縁が少しふくらみを持つ。基部は平基。2は側縁がふくらむものである。3は側縁がほぼ平行であり、基部に丸みを持つ。

9～31は側縁にふくらみを持つ木葉形の石鏃である。9は最大幅が先端に近い部位にある。9・10は基部に丸みを持つ。11は平基である。12～20は細身で最大幅が、中位から基部に近い部位にある。13は凹基に近い平基、17・21は基部に少し丸みを持つ。24～28は幅があり、丸みを持つものである。26・27の基部は平基に近い凹基である。29～31は凹基。

32～56は五角形を呈する石鏃である。細身のものから幅広のものまである。基部は、平基のものが多いが、34・37・40・48～52は凹基である。

57～76は三角形を呈する石鏃である。57～66は側縁が直線的な二等辺三角形を呈する。57～59は平基である。58は剝片の縁辺部にのみ加工が施されている。60～66は凹基。67～71は幅が広く、側縁は丸みを持つ。基部は凹基。72は側縁に若干丸みを持つ長身の石鏃で基部は凹基。57・72は頁岩製である。73～75は平基か平基に近い凹基を持つ。77～80は、円基・尖基の石鏃である。

81～102は有茎の石鏃である。81はかえしが明瞭ではない。82～87は最大幅が中位と先端に近い部位にあるもので茎の部分が長めである。82～86はかえしの部分が明瞭ではない。88～102は最大幅が中位から下位にあるもので、88～94はかえしが明瞭であるが、95・96は明瞭ではなく、茎も短い。88は側縁にふくらみを持つが、89～96は側縁が直線的である。98～102は側縁が直線的もしくは内湾しており、茎の部分は短い。98は薄身であるが、他は厚身である。

石槍またはナイフ（103～114）

103～105は木葉形を呈する。103は、裏面の基部と先端部の一部に加工が施され、主剝離面を大きく残す。また、最大幅の部分は明瞭でないがわずかに抉入している。104～105は全面加工を施している。106は最大幅が上位にあり、基部は抉入している。主剝離面をわずかに残している。107・108は先端部が欠損しているが、木葉形を呈すると考えられる。109・110は非対称形をなす。11は側縁が抉入している。

石　錐（115～152）

117は角柱状の剝片を素材とし、側縁にのみ加工を施している。先端部に使用痕が認められる。118・120は基部の側縁にふくらみを持つ。121～126は全面加工が施されており、側縁は直線的なものとわずかにふくらむものとがある。124は基部が丸みをおび、側縁は直線的である。127は主剝離面を残し、剝片の側縁部にのみ加工が施されており、五角形を呈する。128は剝片の側縁にのみ加工を施している。129・130は薄身で細い剝片を素材としている。側縁は磨耗している。131～133は断面が三角形状を呈する剝片を素材とし、先端部のみを加工して刃部を形成

している。131は薄身であるが、132・133は厚身である。いずれも縁辺は磨耗している。135・136は厚みのある剝片を加工してあり、菱形を呈する。137～144は厚みのある剝片の側縁を加工して直線的なV字形の刃部を形成している。基部は一部分の加工にとどまっている。145～148は基部から先端部にかけて内湾気味である。基部の加工は粗雑で、主剝離面側の加工は施されていない。150は基部にふくらみを持つように調整加工が施されている。

つまみ付きナイフ（153～202）

153～161・163～167は、主剝離面側の右側縁に細かい加工を施しており、背面の右側縁に急角度の刃部を作り出している。153は幅が広いもの。166は、右側縁に内湾する部分を持つ。167は主剝離面側の加工が右側縁と下端の側縁に施されている。162は主剝離面側の加工はつまみ部周辺にとどまっている。168～180は片面加工のものである。181・182は肩のはらないもので、181は厚みがあり、主剝離面側ではつまみ部の周辺と下端の縁辺に細かい加工を施す。182は横長の剝片を素材としており、主剝離面側の右側縁に加工を施している。183～185は全面加工のものである。183は右側縁が内湾し、左側縁と裏面の右側縁に細かい加工が施されている。186～192は加工が全面に及ばず、縁辺にとどまっている。188～190は背面に自然面を残し、片面加工である。191・192は肩がはらないもの。193・194は横に長く193は側縁に加工が施されていない。194は片面加工。195は粗雑であるが、主剝離面側の右側縁に細かい加工が施してある。196～198は全面加工が施され、小形で細身。199～202はつまみ部が作り出されているが、側縁の加工は施されていない。

スクレイパー類（203～271）

203～219は長方形を呈し、短辺の一つに刃厚の薄い鋭角の刃部を持つ。203～211は小形で下端に比較的角度の浅い刃部を持つ。203～208は楕円形を呈する。203では裏面の加工は全面に及んでいないが、205・206は全面加工が施されている。207は横長剝片を素材とし、裏面縁辺に加工が施してある。208は刃部が斜めである。209～210は楕円形よりバチ形に近い形である。212・213・215・216は、大きめで裏面は縁辺を加工するにとどまっている。214は全面加工のもので、基部は尖がり縁辺にふくらみを持つ三角形状を呈する。219は大形で203～218は直線的な刃部をなすが、219は丸みをおびた刃部を持つ。加工は縁辺部に行なわれており、全面には及んでいない。224～229はエンドスクレイパーである。224は、剝片の側縁にも加工が施されている。227は自然面を大きく残し、左側縁に細かな剝離がみられる。230～239は円形を呈し、全周に調整加工を施してある。230・234・235～238は厚みのある剝片を素材としているが、他は薄い剝片を素材としている。240～266は縦長剝片の側縁を中心に刃部を作り出している。240・242・247は片面加工である。250は横に長い剝片の一角を、主に裏面に加工を施して刃部を作り出している。257・258は横に長い剝片の側辺を加工している。259は右側縁に急角度の刃部を持つ。調整加工からつまみ付ナイフ片の可能性がある。頁岩製。260～266は剝片の形状をあまり変えずに、直線的な刃部を作り出している。267～271は、抉入した刃部を持ったスクレイパー。267～270は剝片の両側縁に刃部を作り出す。271は一側縁に作り出す。268は片面の

加工で刃部を作り出す。

石　斧（272～300）

273・275は、扁平な礫を敲打により整形後、研磨している。自然面が残っている。274は全面研磨されている。276はくさび形を呈する。277・278は擦切痕が残っている。２点とも蛇紋岩製である。279は幅広の全面磨製の石斧である。280・281は敲打による整形後、縁辺部、刃部を中心に研磨している。284はバチ形を呈し、刃部に丸みを持つ。285は厚みのある緑色泥岩を側縁から敲打し、刃部を研磨している。286～297は、全面磨製の石斧片である。298は緑色泥岩製の剝片である。299は細長い扁平な礫の縁辺を敲打し、一部分を研磨調整している石斧未製品である。300も石斧未製品。299・300とも緑色泥岩製。

たたき石（301～314）

301はくぼみ石である。302～304は棒状の礫を利用している。305～310は楕円形の扁平な礫を利用しており、305～308は長辺に、309・310は短辺に使用痕が残る。308は縁辺にすり痕も残っており、すり石であろう。313～314は、円形で扁平な礫を利用しており、311・314には308と同様にすり痕がみられる。側縁・側面に敲打痕が残っているのでたたき石に分類した。

すり石（315～330）

315・316は扁平な円形の礫を利用している。317～330は断面が三角形を呈する。317・319はやや小さめの礫を利用している。321は全面に使用痕がある。322は緑色泥岩製で、側面にも使用面がある。324～327は、厚みのある礫を利用している。

北海道式石冠（331・332）

２点ともｃ－68区から出土している。ともにプロピライト（変朽安山岩）製。

砥石類（333～337）

333は１面、334は３面、335は２面を使用している。すべて砂岩製。336・337は石鋸である。縁辺に使用痕がある。片側は平らで、もう一方は曲面をなす。

石　皿（338～340）

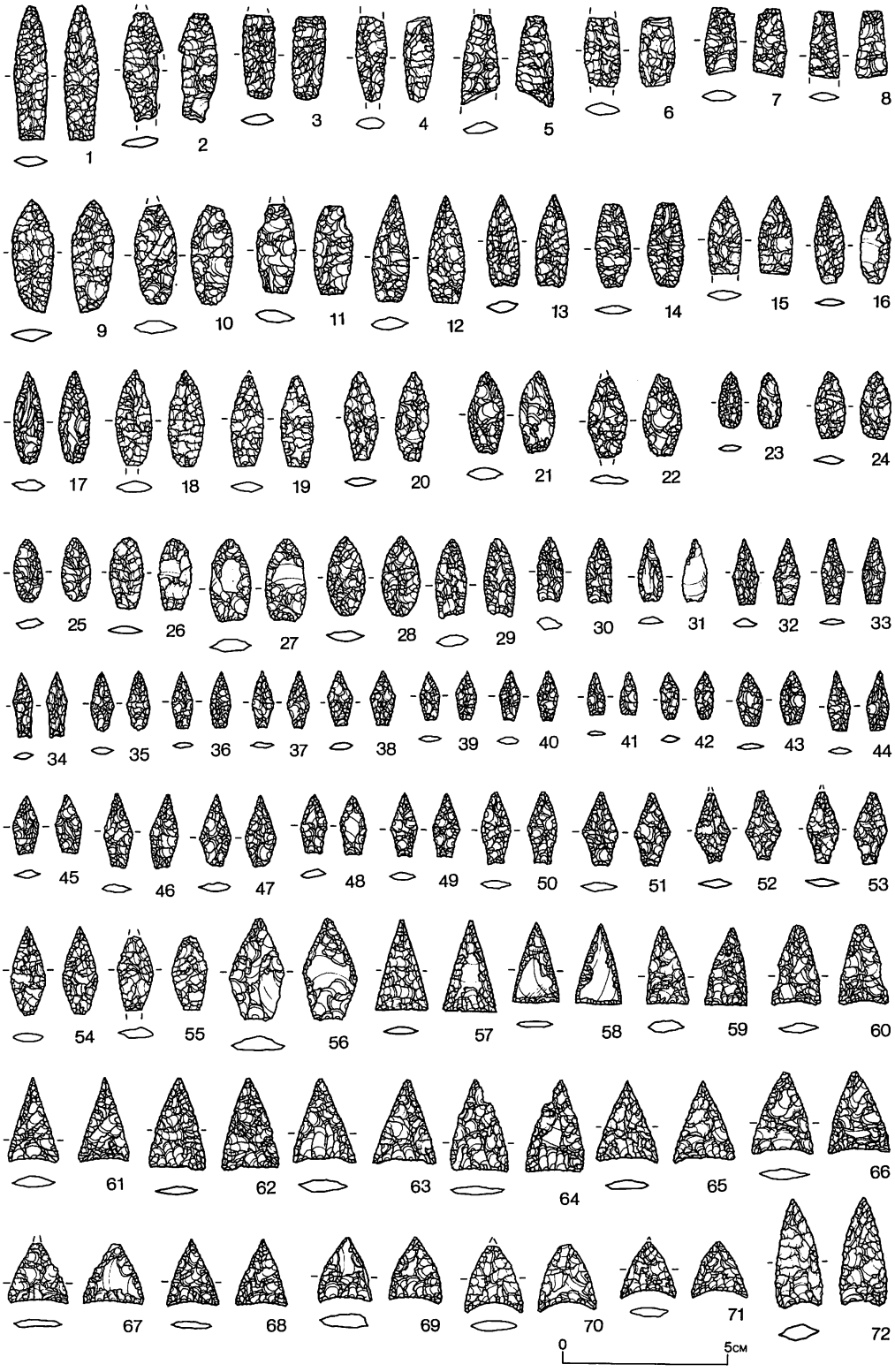
338は厚みのある、多孔質の安山岩を使用している。広い使用面を持つ。339は薄身の石皿片、340は厚みのある石皿片である。

石　錘（341～348）

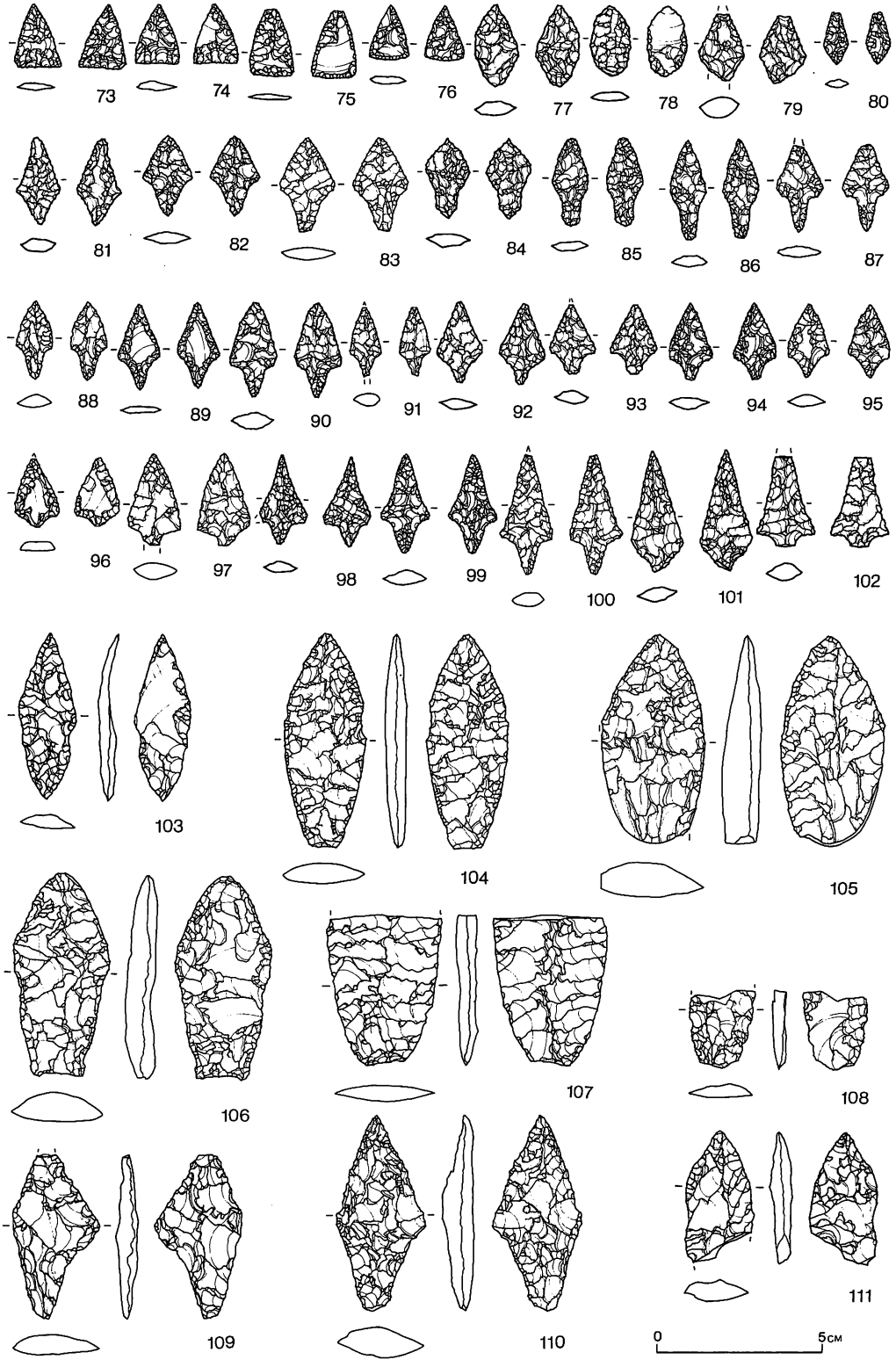
扁平な礫の長軸上の両端を欠いている。347は直線的な縁辺の一部にすり石の使用面に類似する痕がある。

土・石製品（349～356）

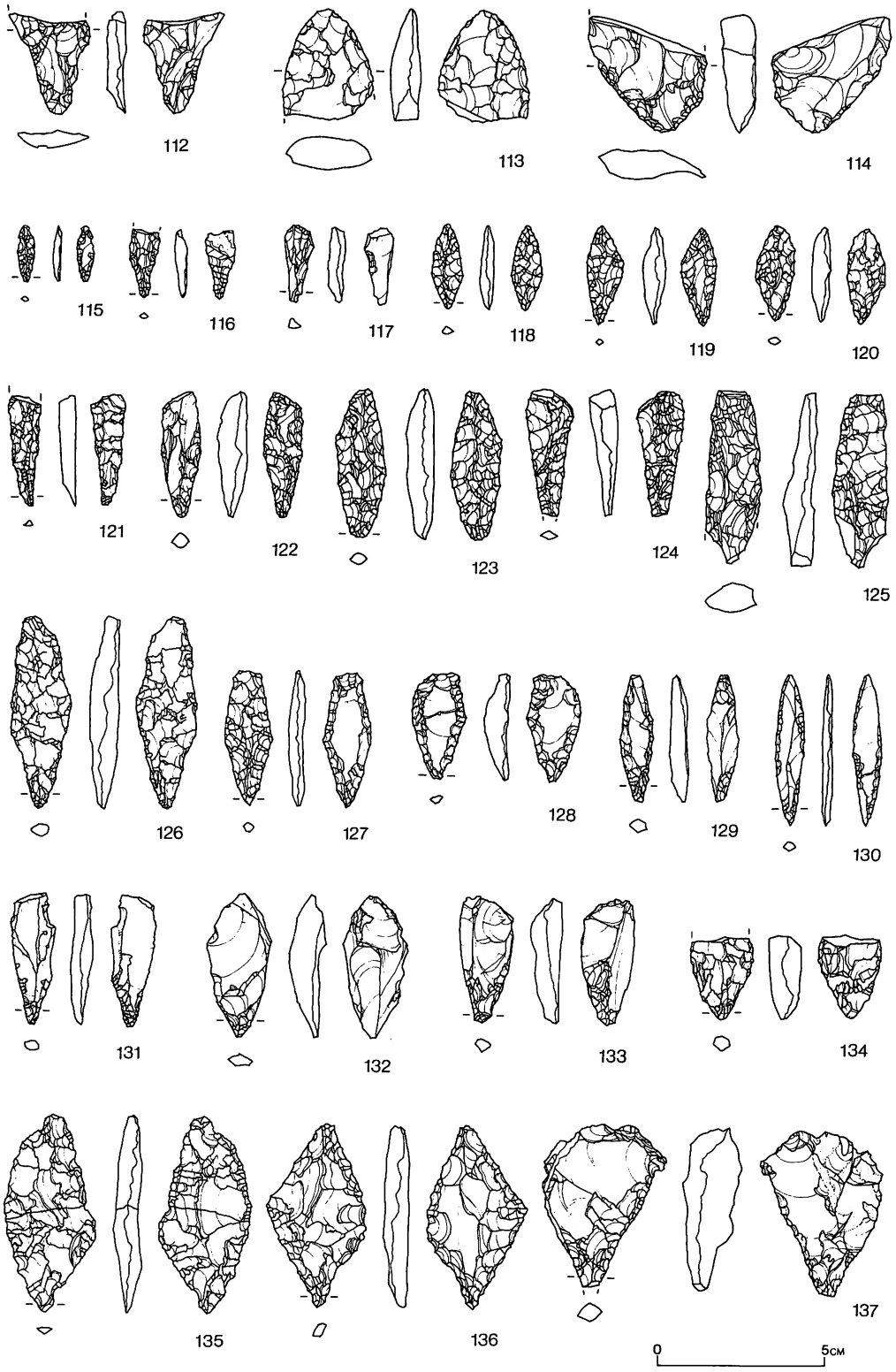
349～351は円盤状土製品。349・350はⅠ群ｂ－１類、351はⅠ群ｂ－２類の土器片を使用している。349・350には孔はないが、351には孔がある。352・353はともにカンラン岩製である。353の直線的な側面には、溝がある。354～356は異形石器。354は中央に抉入部がある。355は三日月形を呈する。356は三脚石器状のものである。（越田雅司）



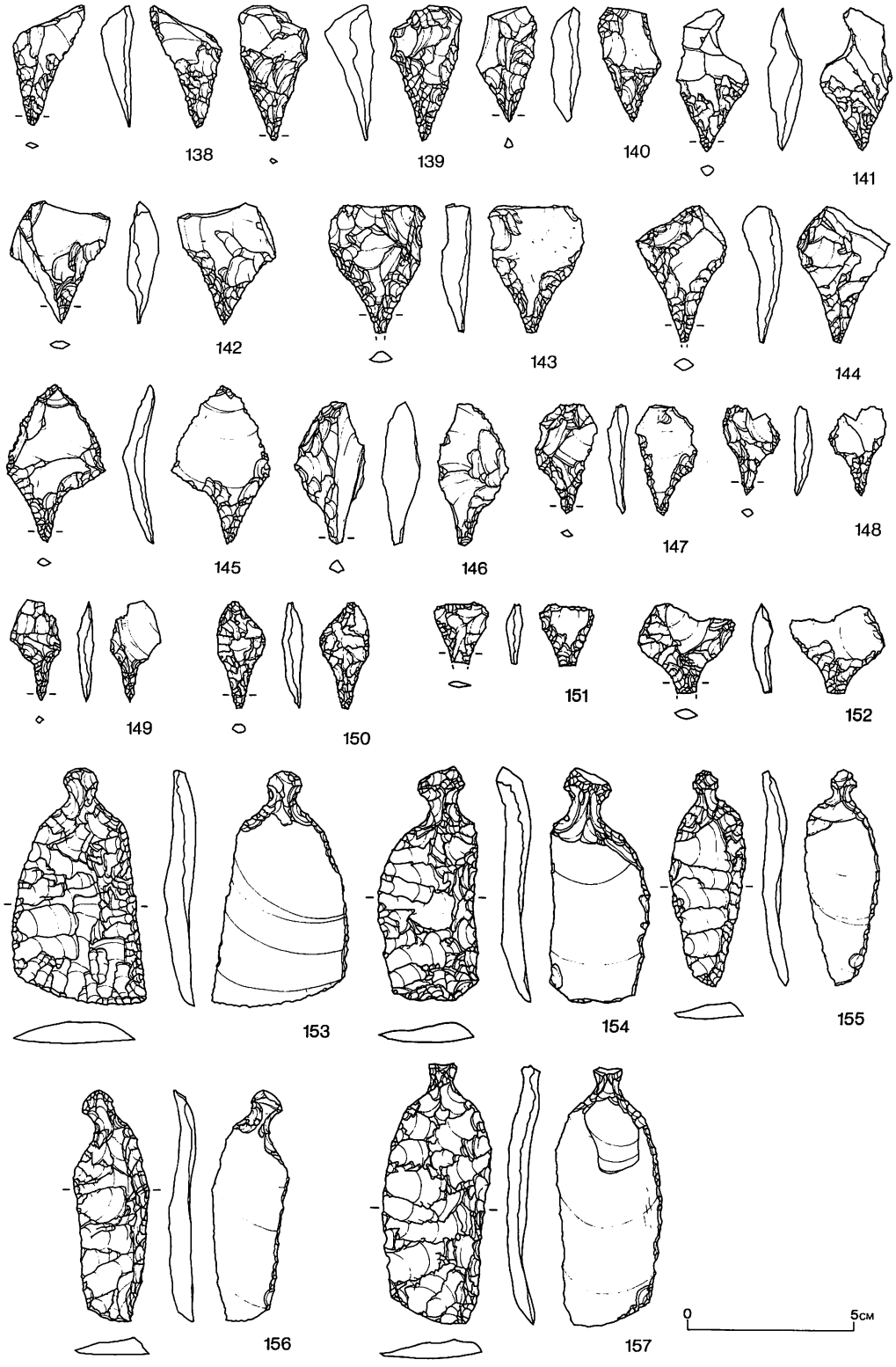
図Ⅲ－105　包含層出土の石器(1)



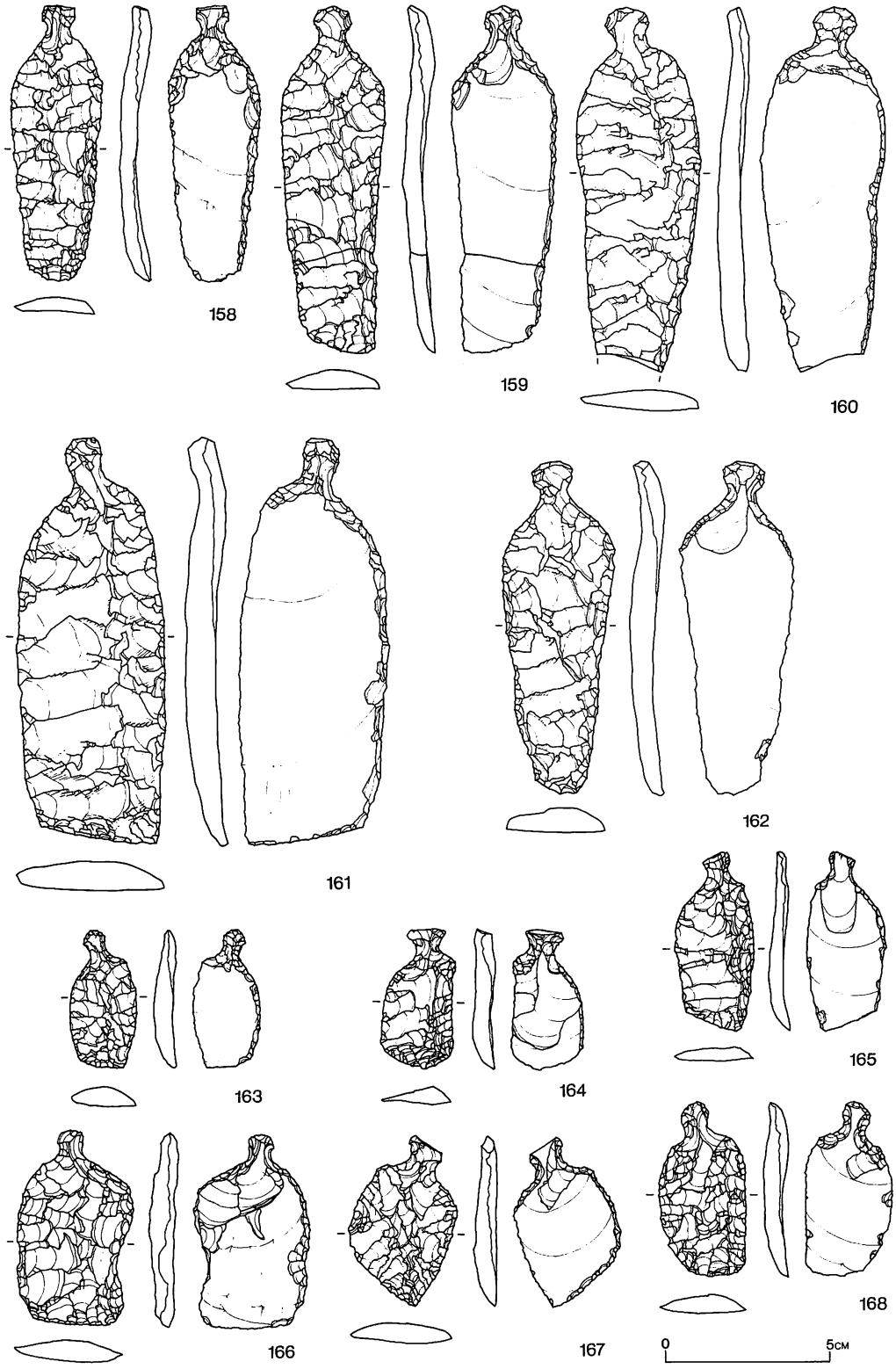
図Ⅲ－106　包含層出土の石器(2)



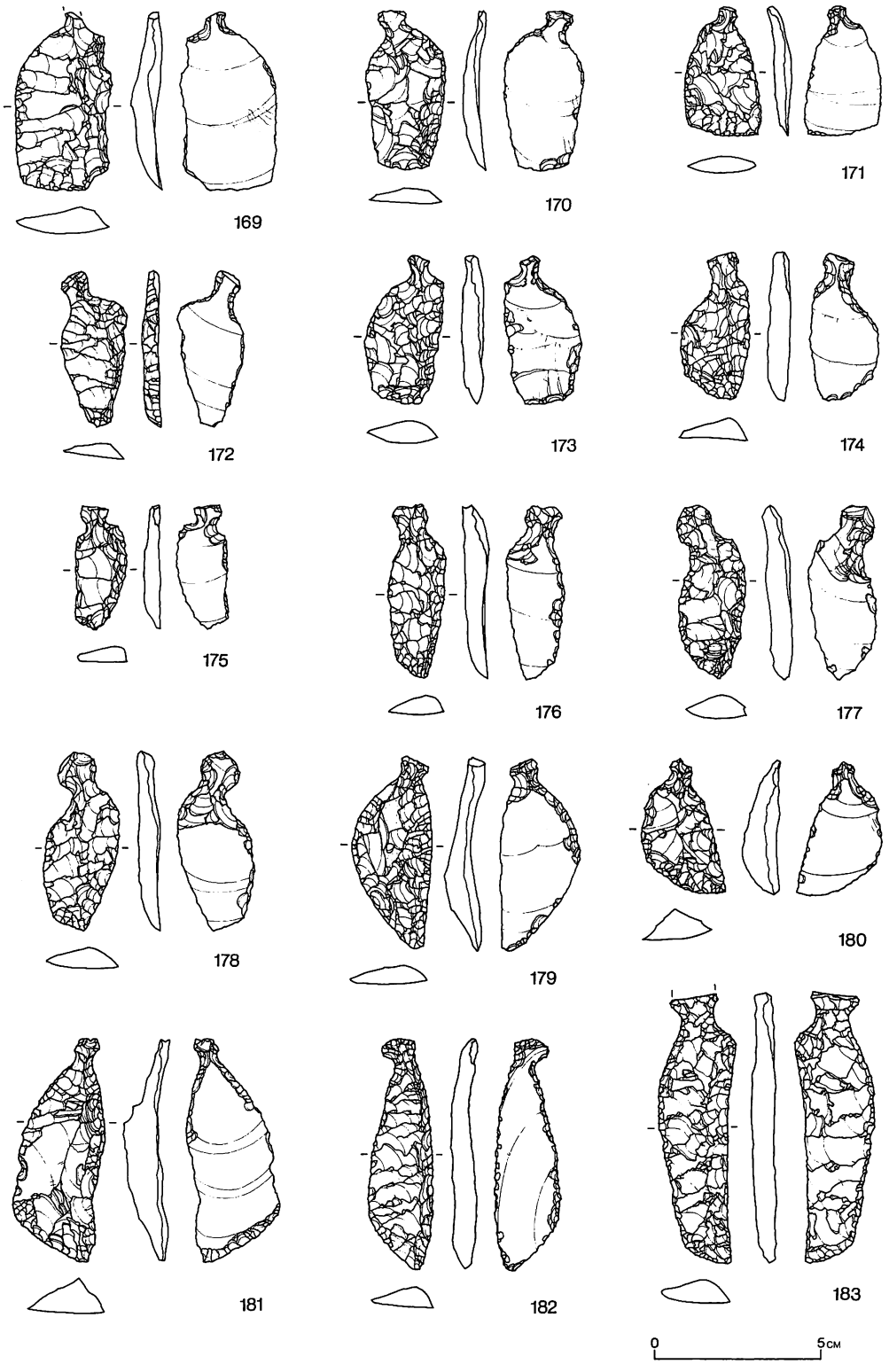
図Ⅲ－107　包含層出土の石器(3)



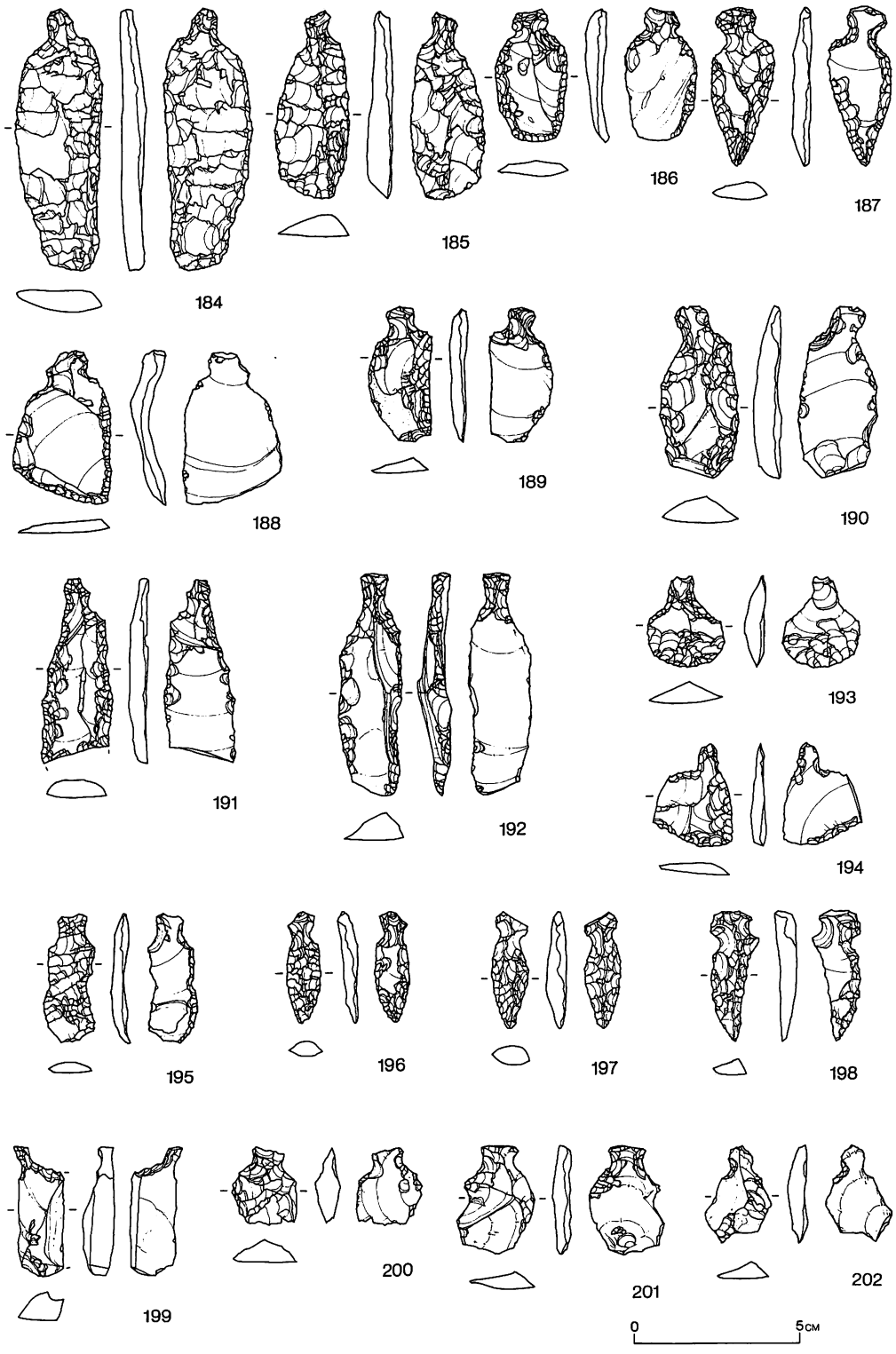
図Ⅲ－108　包含層出土の石器(4)



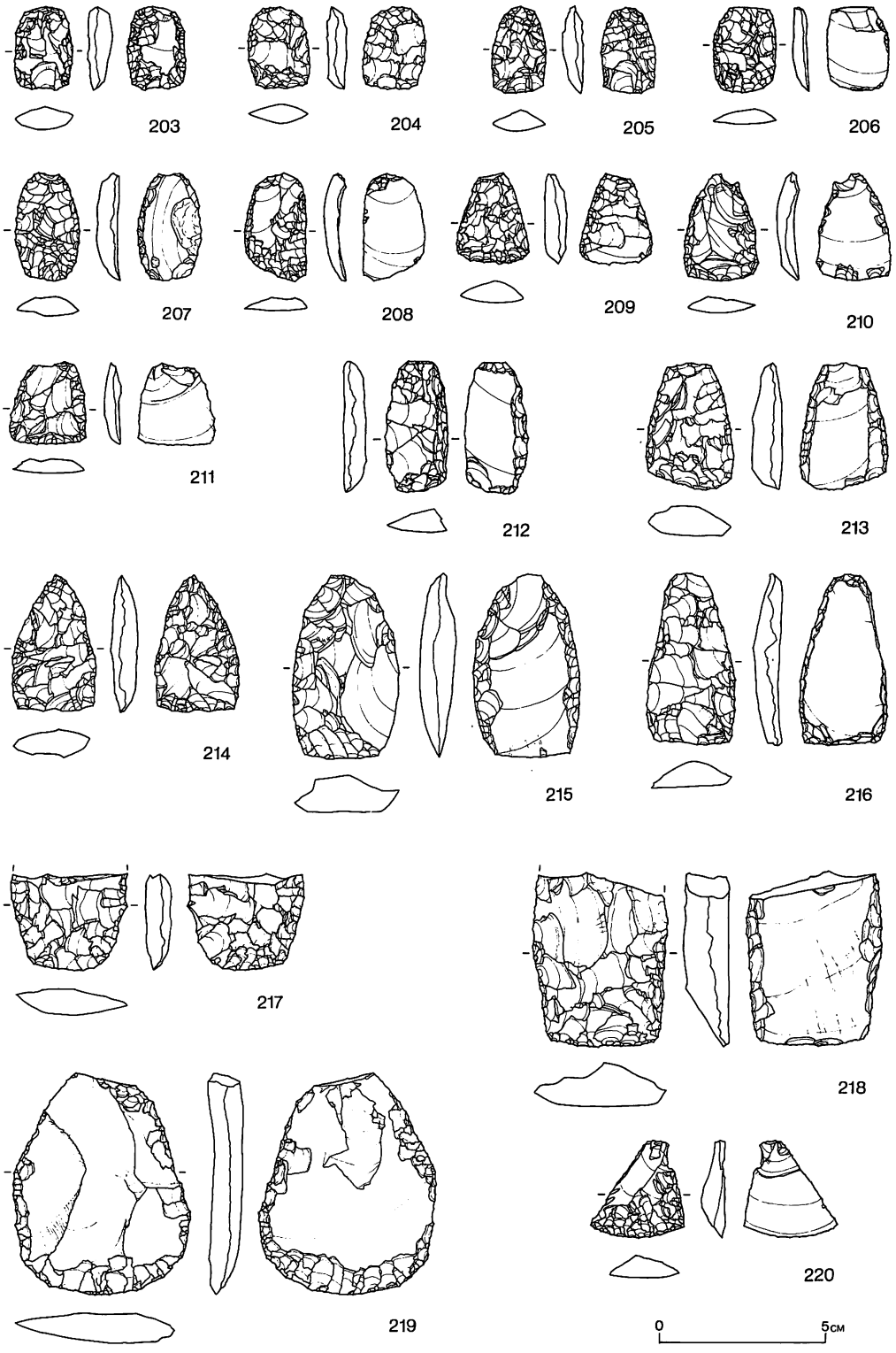
図Ⅲ－109　包含層出土の石器(5)



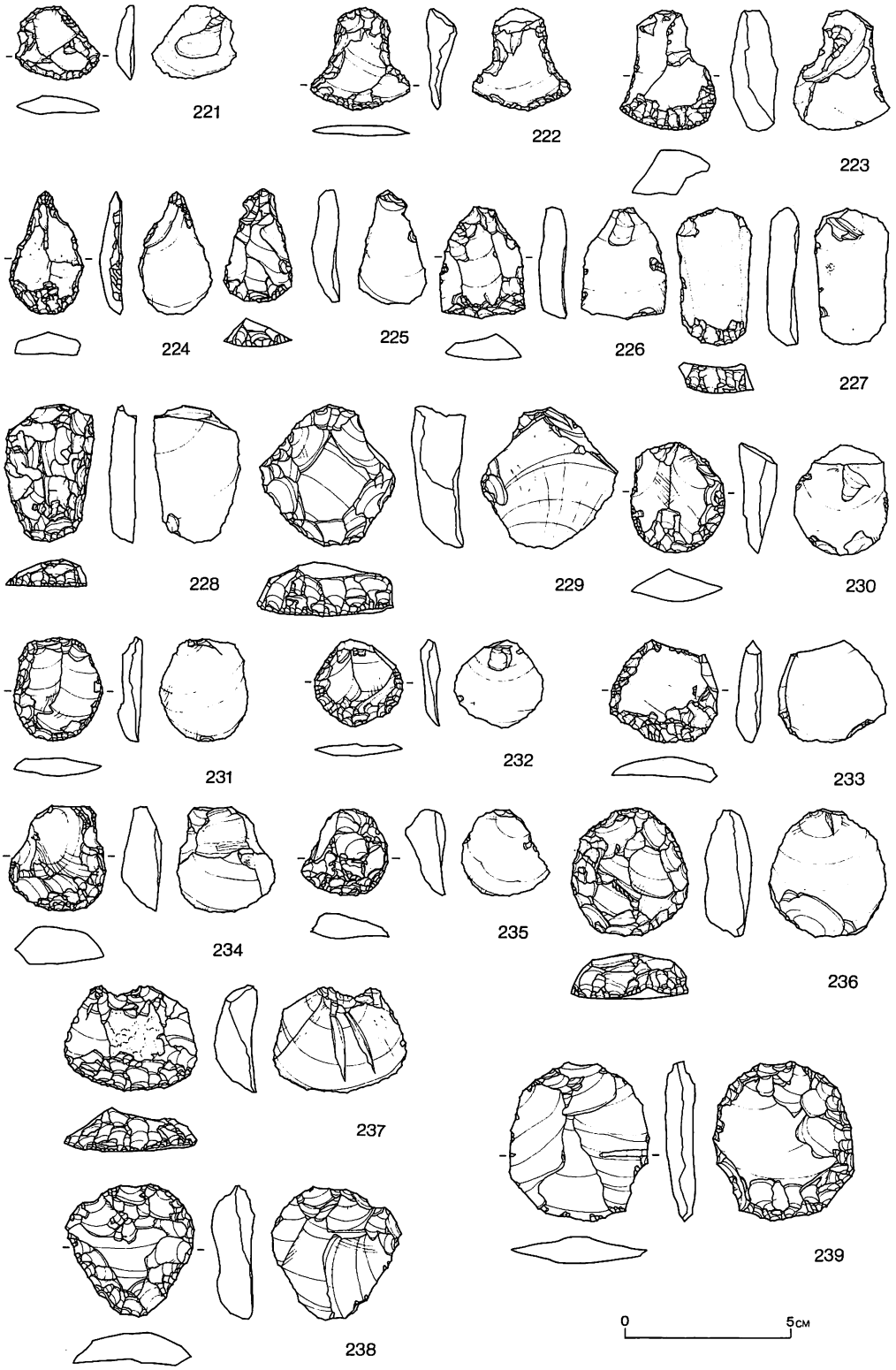
図Ⅲ－110　包含層出土の石器(6)



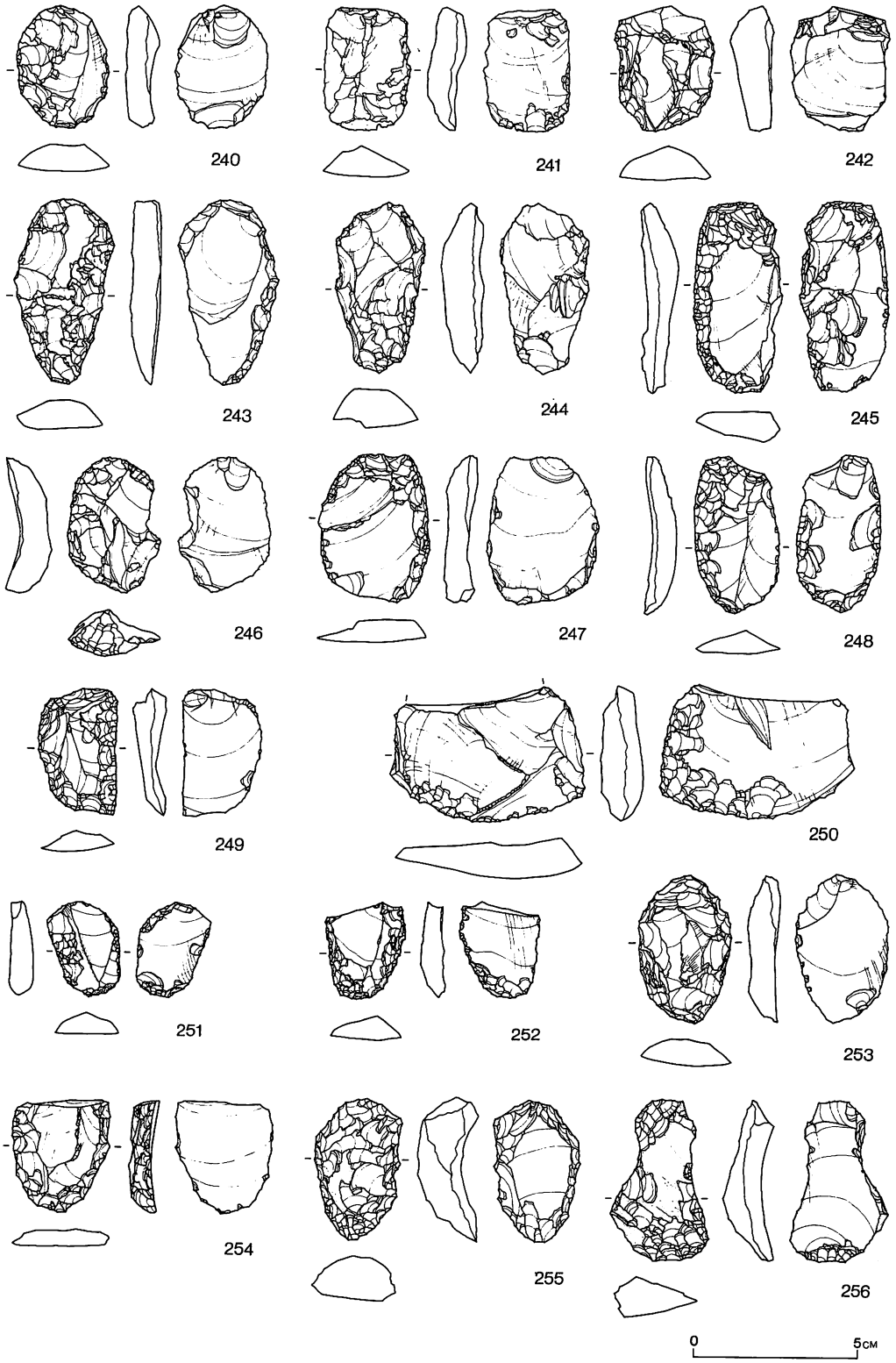
図Ⅲ－111　包含層出土の石器(7)



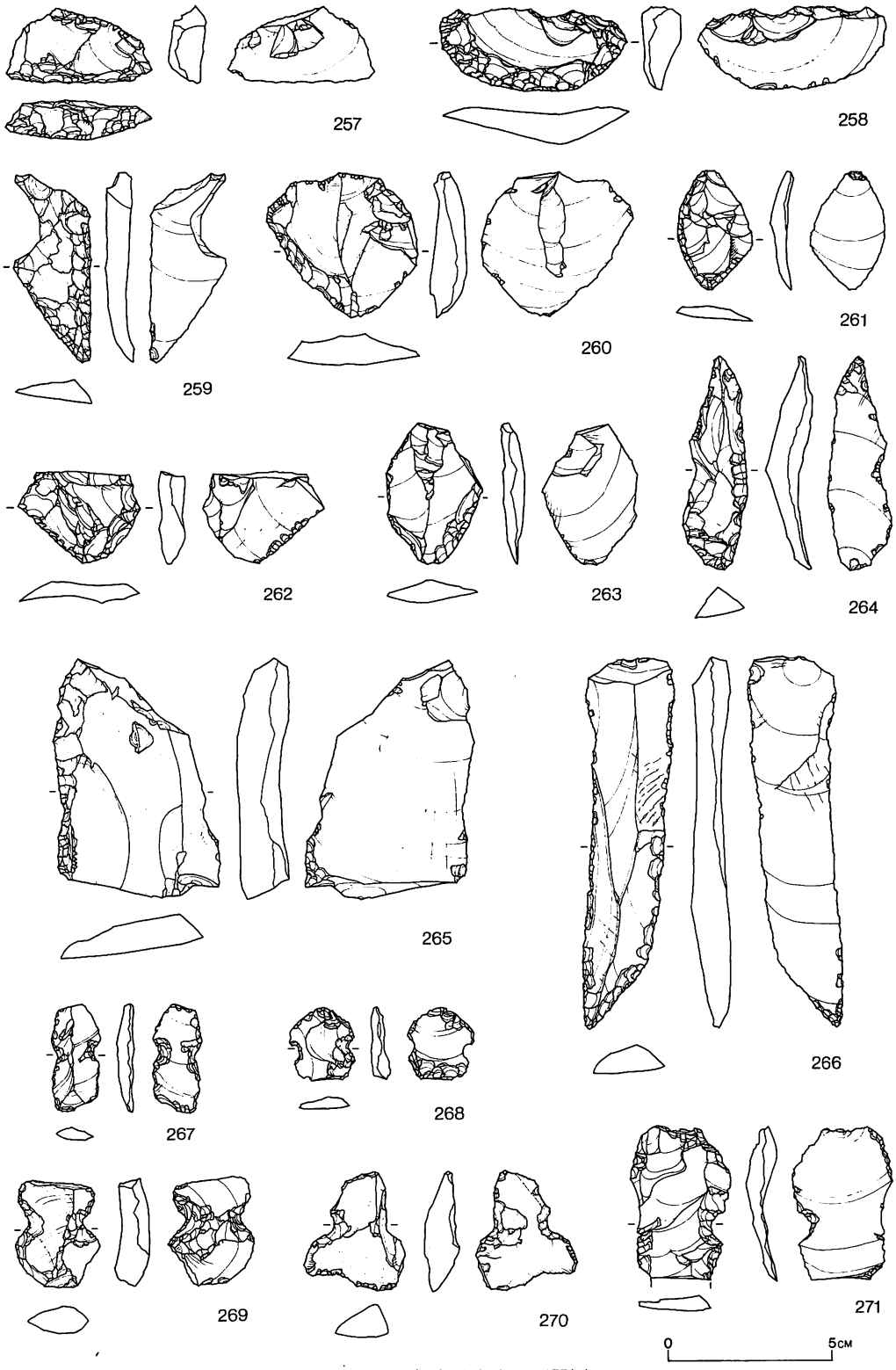
図Ⅲ－112　包含層出土の石器(8)



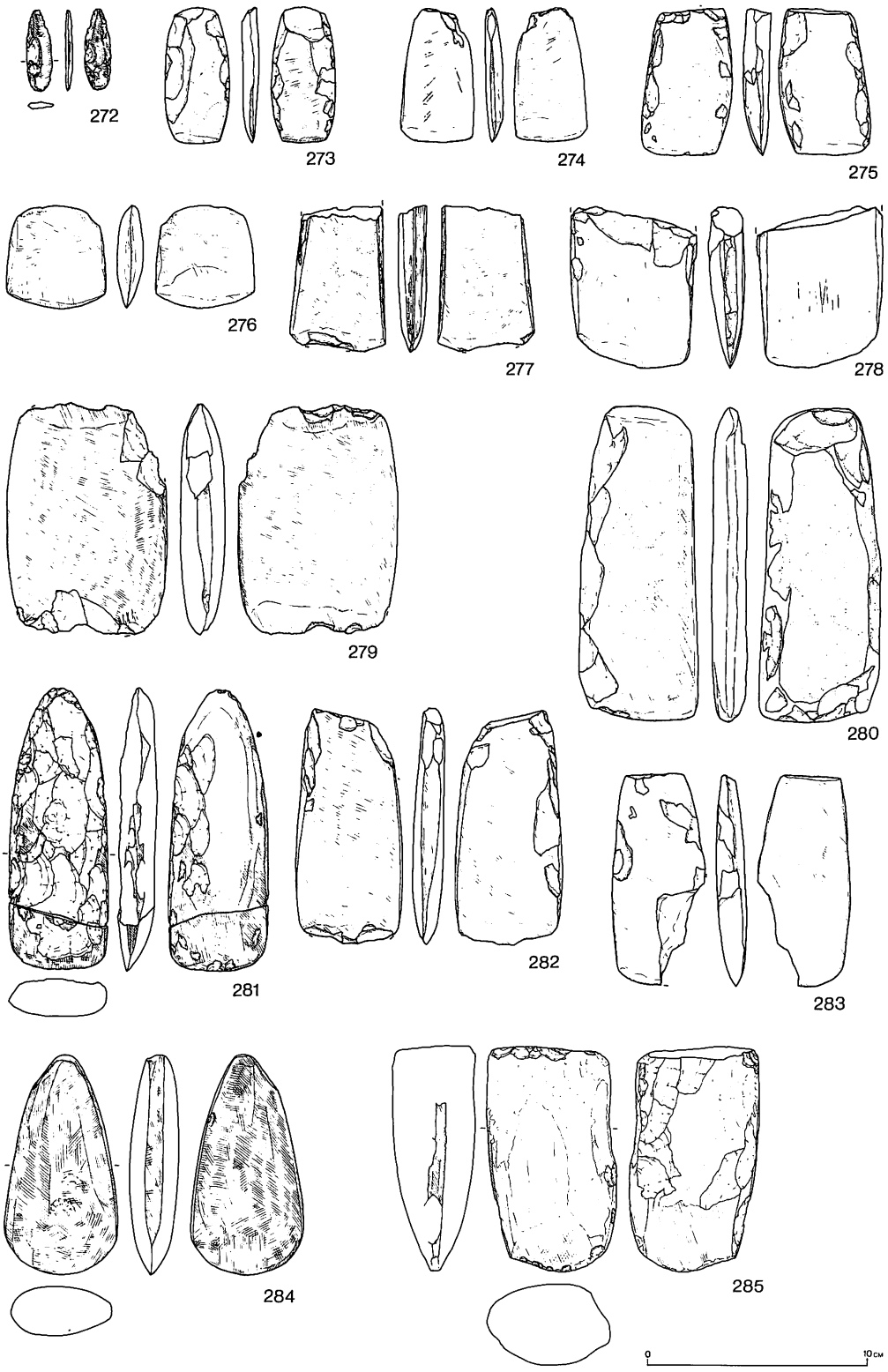
図Ⅲ－113　包含層出土の石器(9)



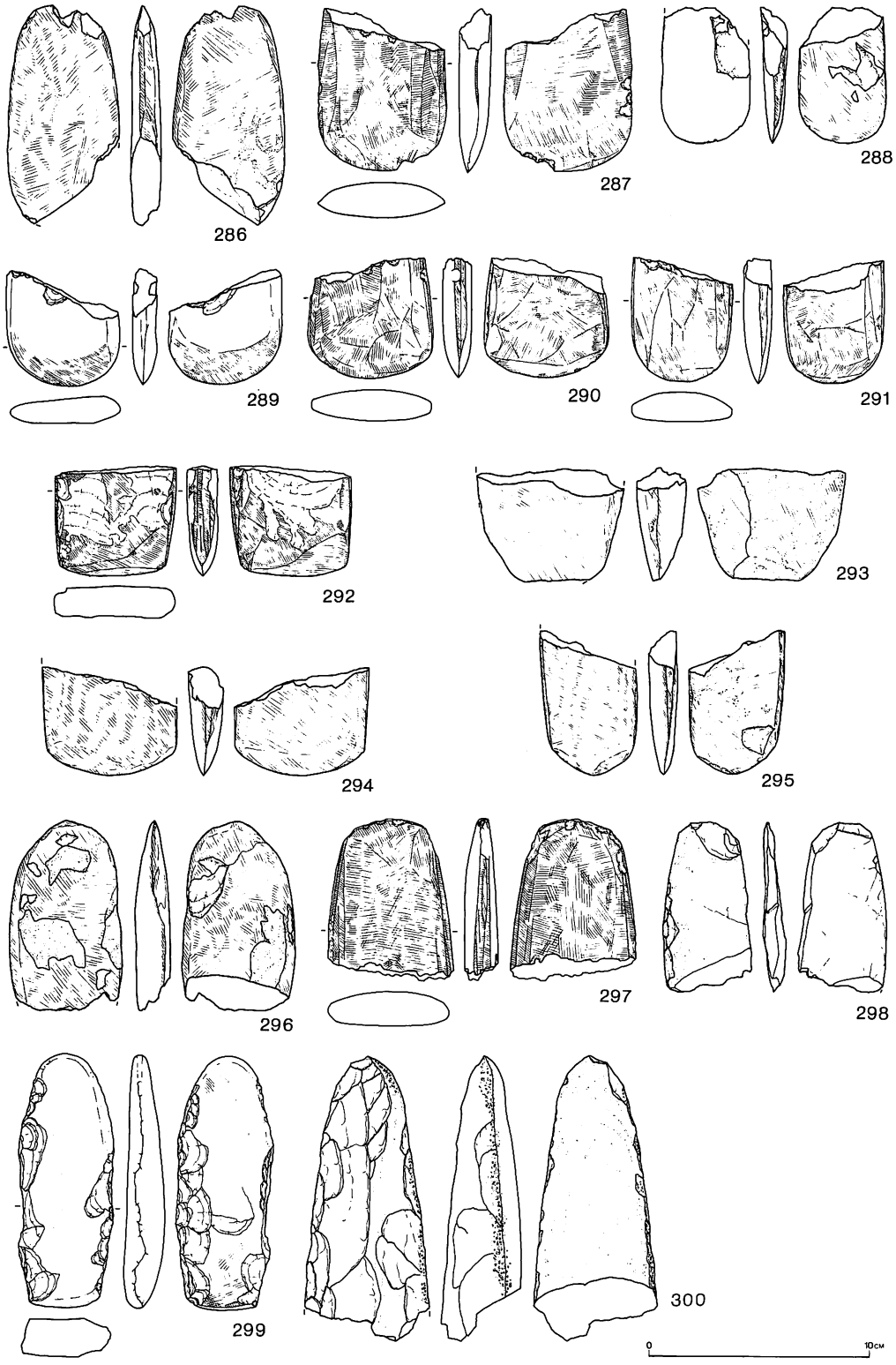
図Ⅲ－114　包含層出土の石器(10)



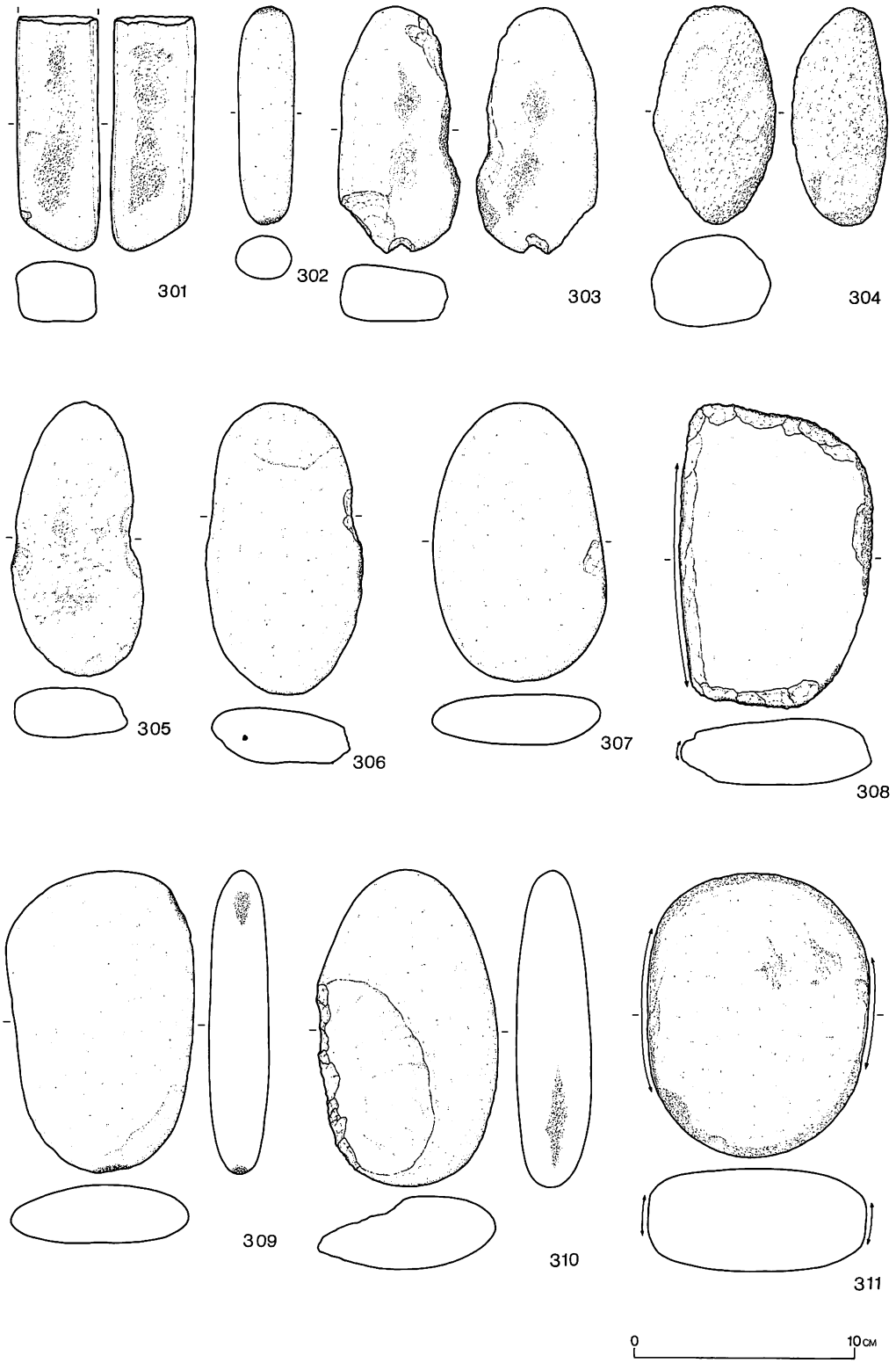
図Ⅲ－115　包含層出土の石器(11)



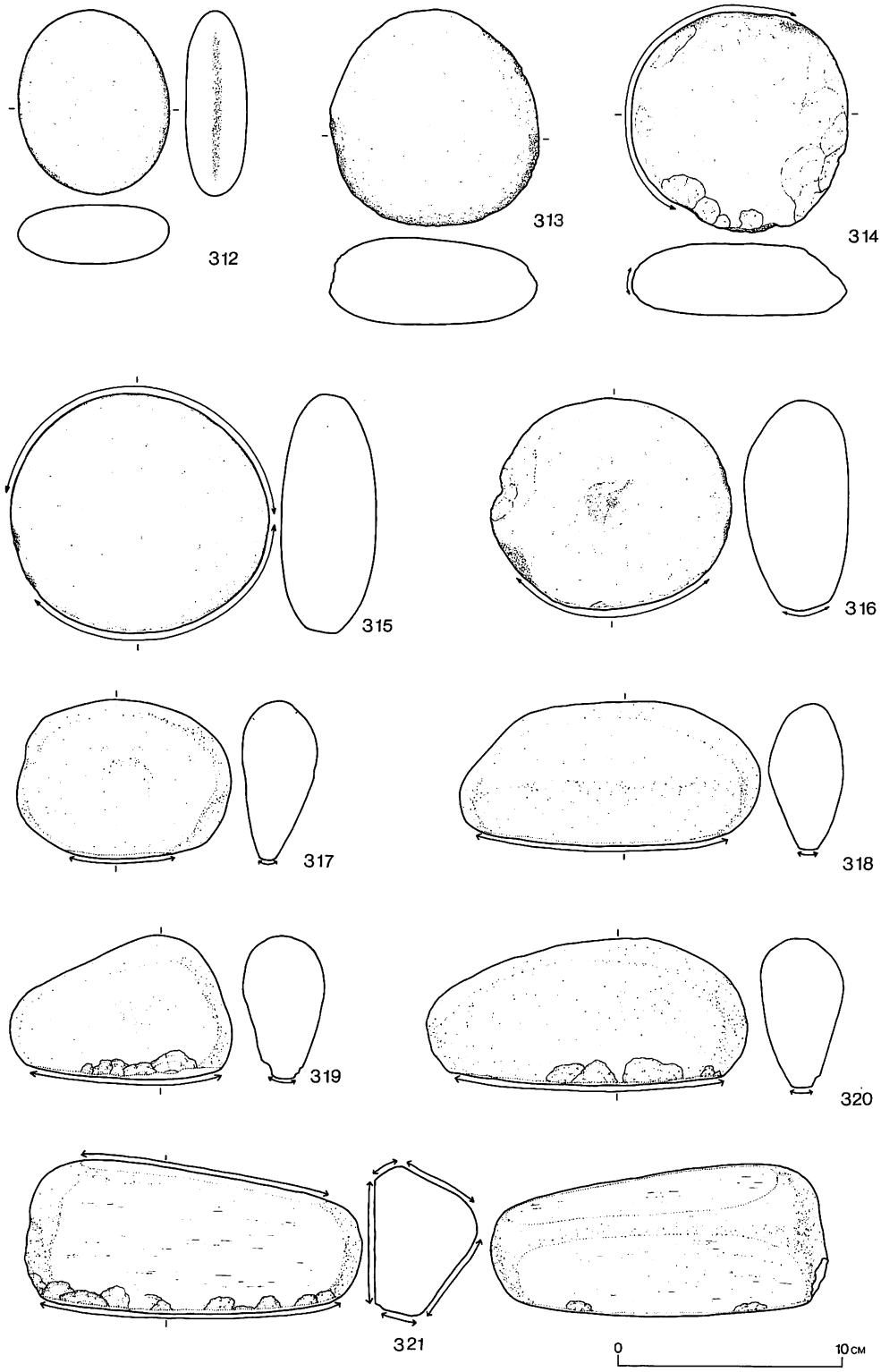
図Ⅲ－116　包含層出土の石器(12)



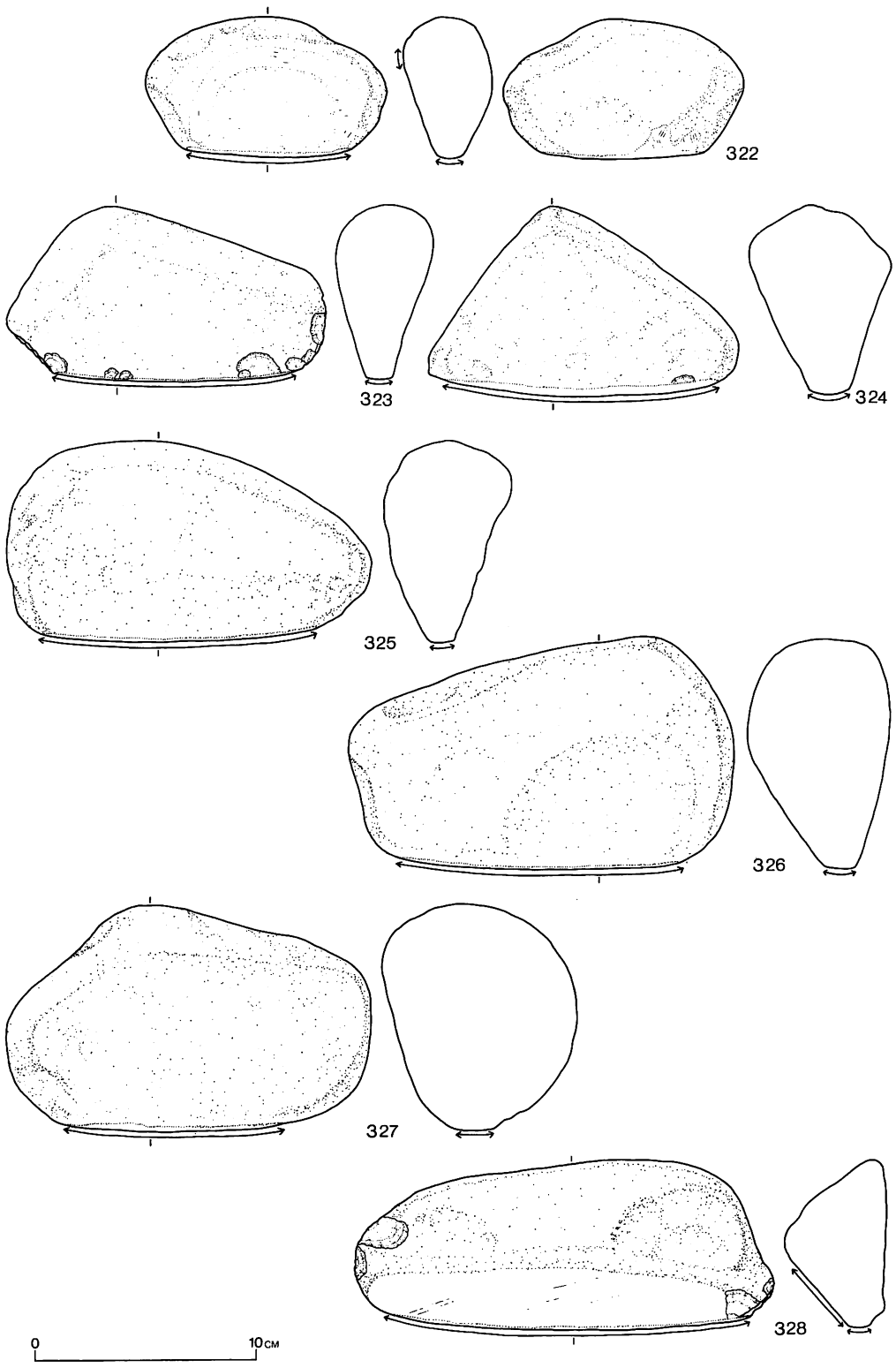
図Ⅲ－117　包含層出土の石器(13)



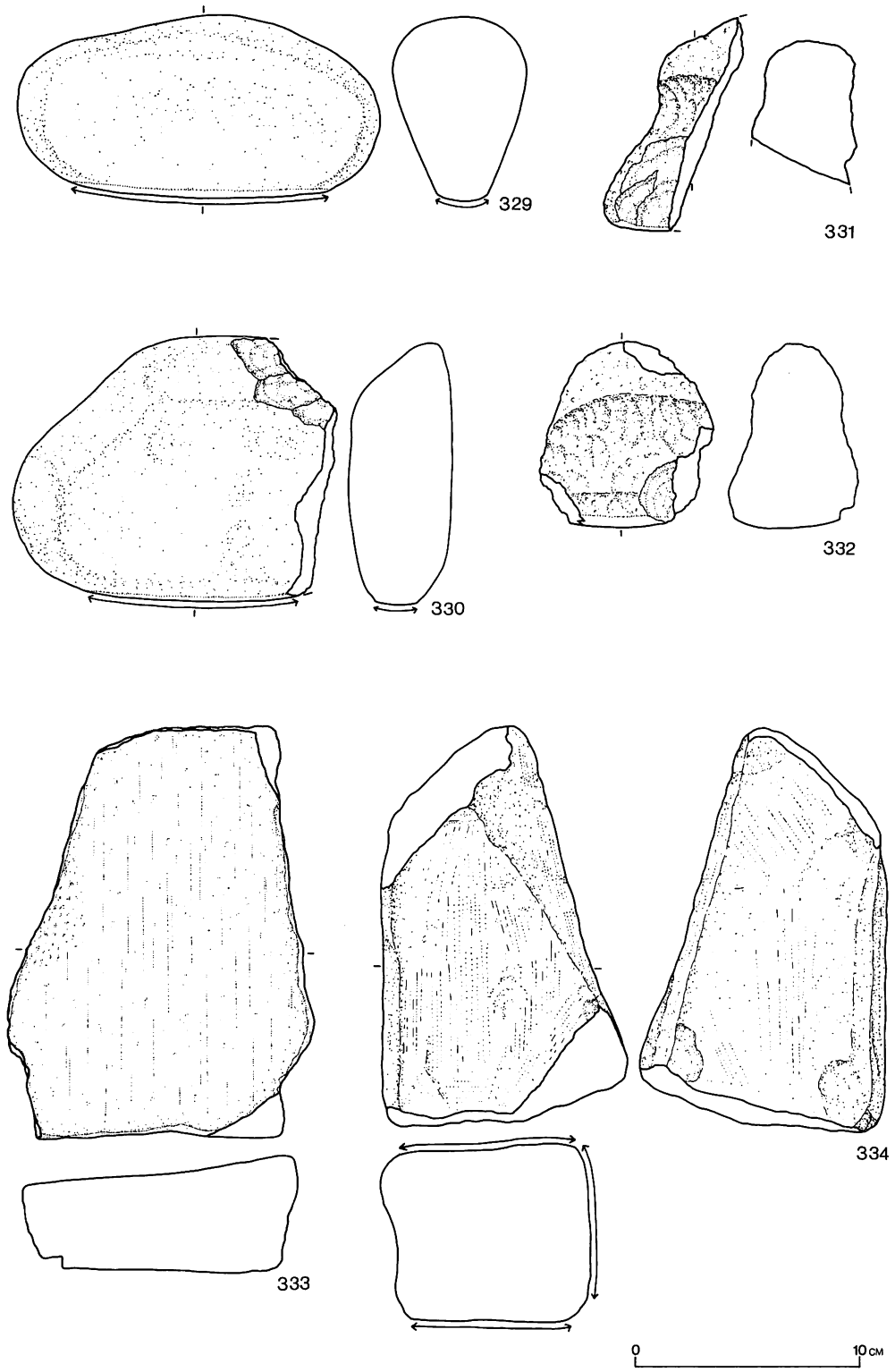
図Ⅲ－118　包含層出土の石器(14)



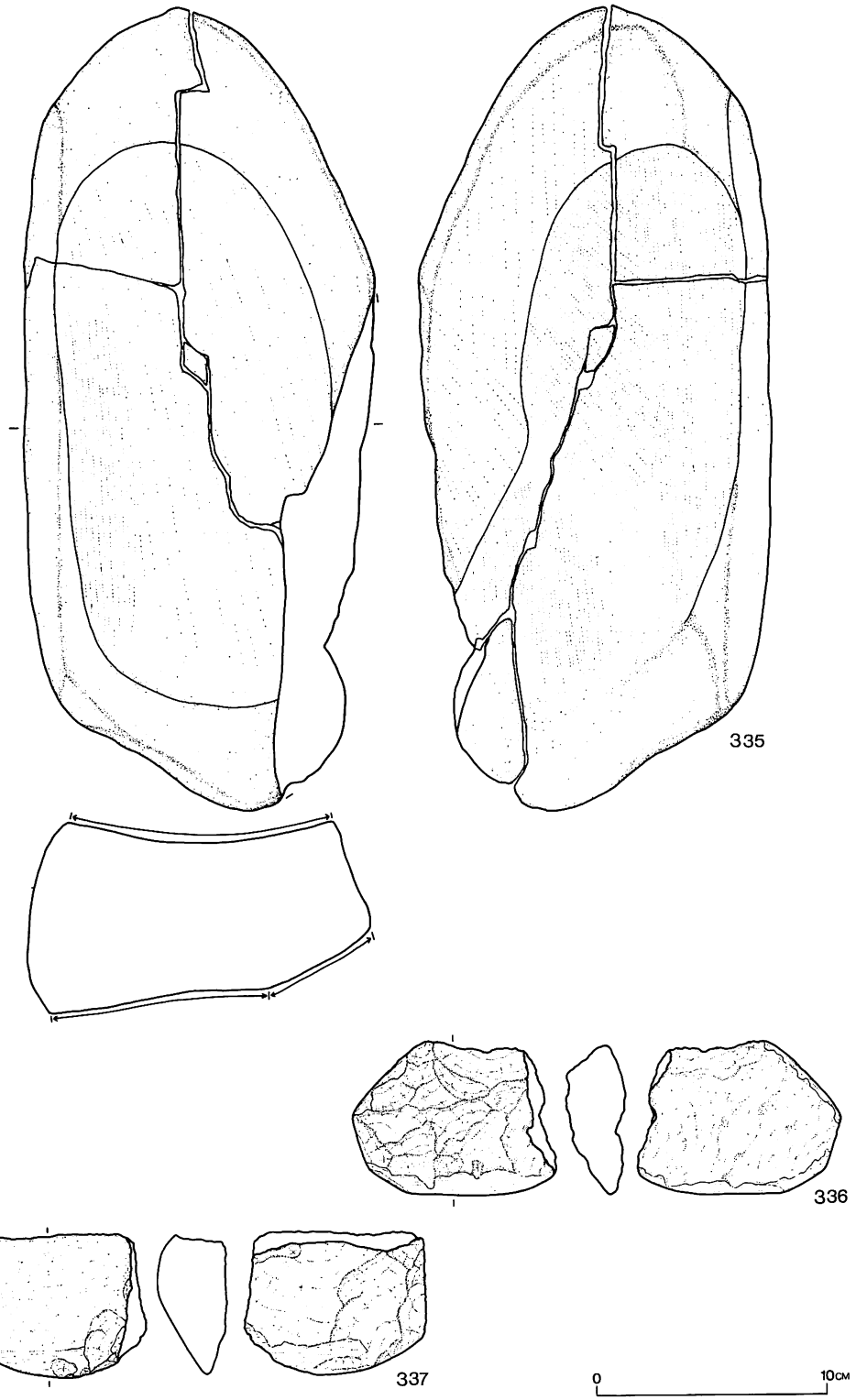
図Ⅲ－119　包含層出土の石器(15)



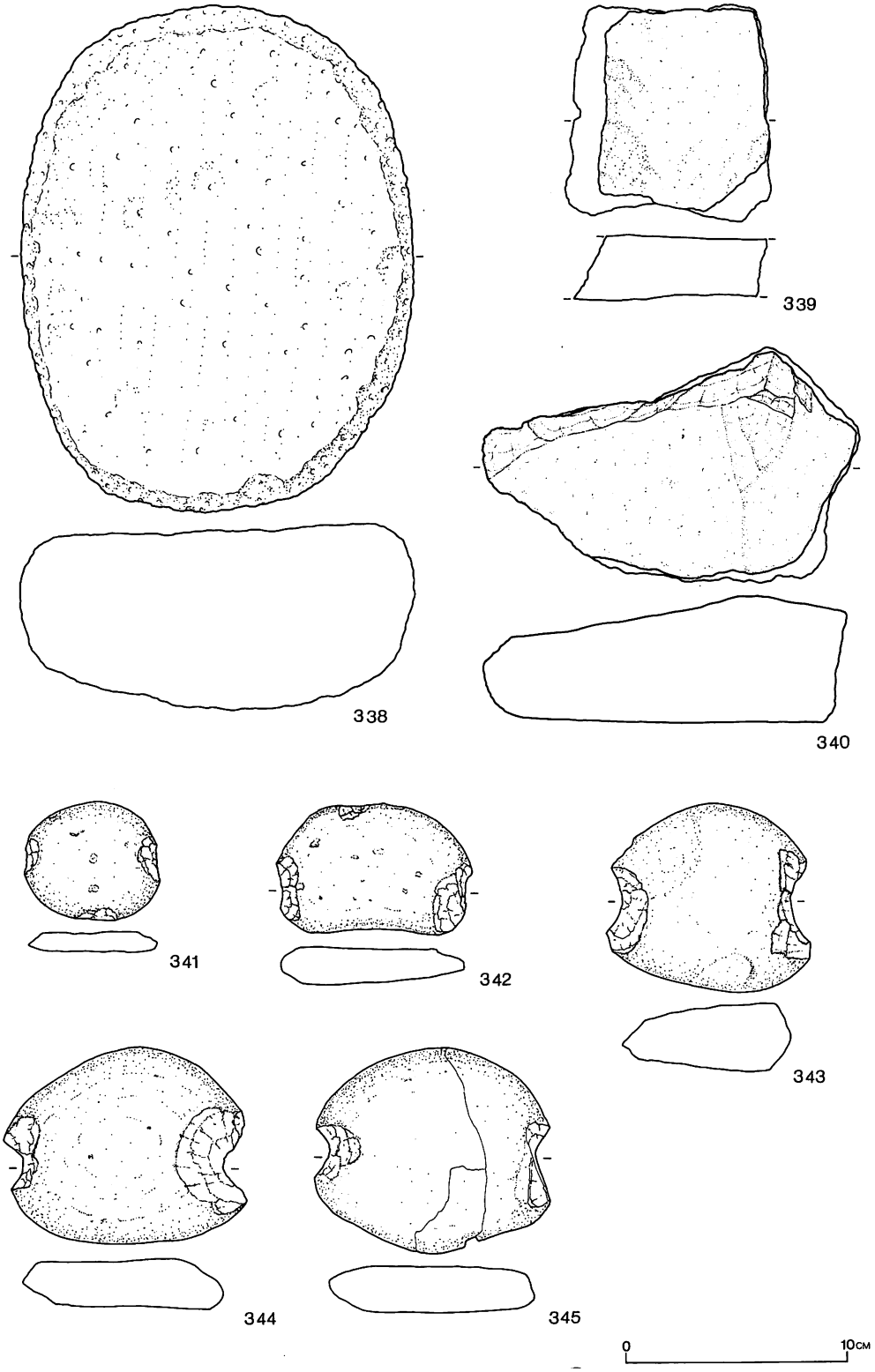
図Ⅲ－120　包含層出土の石器(16)



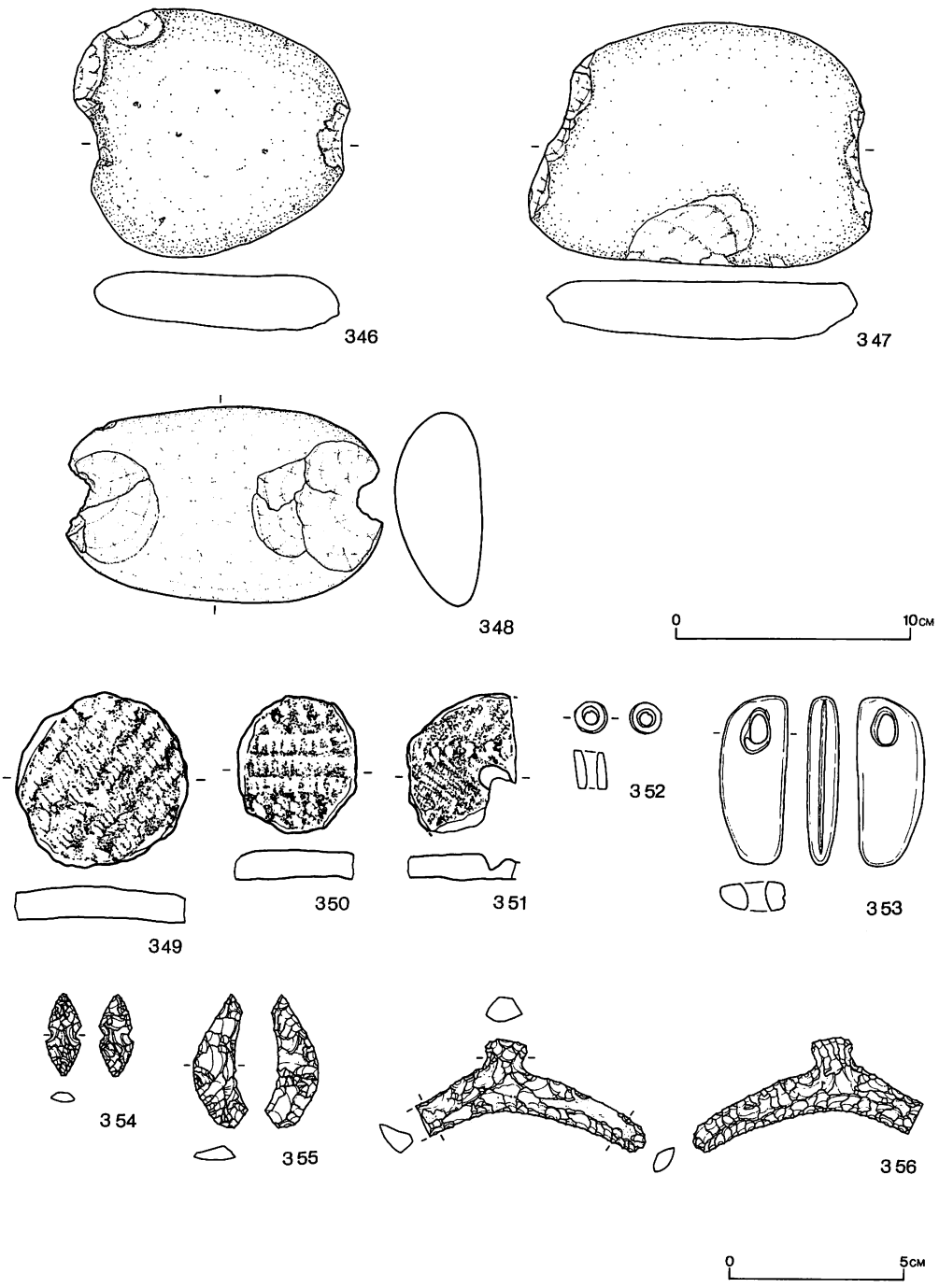
図Ⅲ－121　包含層出土の石器(17)



図Ⅲ－122　包含層出土の石器(18)



図Ⅲ－123　包含層出土の石器(19)



図Ⅲ－124　包含層出土の石器等(20)

7　まとめ

美沢３遺跡の遺構と遺物

本年度の調査は昭和51年度、昭和55年度、昭和63年度についで第４次のものである。縄文時代早期の住居跡、墓壙、土壙、盛土、焼土、前期・後期・晩期の土壙とそれぞれの時期の遺物が多数出土した。遺物はｃ－68区の低位段丘面からその約四分の三近くが出土している。

早期の遺構と遺物

ｃ－68区の低位段丘面から住居跡（２）、土壙墓（２）、土壙（23）、盛土、焼土（27）が検出された。住居跡は段丘の縁辺部かⅠ群ｂ－４類（東釧路Ⅳ式）土器の時期のものが２軒（Ｈ－20・22）発見されているが、いずれも半分以上が美沢川の浸食により削られている。昨年度発見された住居跡同様、掘り込みの深い、比較的小形のものであるが、壁柱穴はＨ－20から１個検出されただけである。覆土からの遺物は少ない。覆土の堆積状態は昨年度のＨ－12と良く似ている。

美沢３遺跡ではこの時期の住居跡は昨年度のものと合せて14軒発見されたことになり、これらの住居跡は低位段丘面を大きくとりまくように弧状に分布し、その内側に同時期の土壙、焼土と遺物を多量に含む盛土がみいだされた。盛土は低位段丘面、ｃ－68区の50ラインより東側に顕著にみいだされたもので、その高まりは昨年度Ⅰ黒層を調査中から知られていた。今年度の調査で盛土がTa－d_1、d_2火山灰層を主とする土で、Ⅱ黒層の下に、Ⅰ群ｂ－４類土器の時期に形成されたことがわかった。住居跡群はこの盛土の外側を大きく弧状にとりまく状態であった。

土壙墓（Ｐ－56・61）は盛土下から検出されたもので、Ⅰ群ｂ－３類（中茶路式）土器の時期とみられる。Ｐ－56は大形のもので壙底にベンガラが厚く堆積していた。Ｐ－61は小形のものである。

土壙は盛土中を調査中に検出されたものでは覆土中に遺物が多い。焼土は数個を除き盛土中から検出された。クルミの堅果・炭化物が混じる焼土もあった。いずれもⅠ群ｂ－４類土器の時期とみられる。Ⅰ群ｂ－３類土器の土壙（Ｐ－62、65～67）は小形のもので、盛土下から検出された。

遺物は、Ⅰ群ｂ－１類土器（東釧路Ⅲ式）が従来よりもやや多く、まとまって出土した。ｃ－68区の低位段丘面の水際に多く、包含層は水面下にも広がっていることが予想できる。

Ⅰ群ｂ－２類土器（コッタロ式）はｂ－１類土器に近いものからｂ－３類土器（中茶路）に近いものまでみとめられて２段階に区分した。ｂ－１類同様に水際に比較的まとまっていた。

Ⅰ群ｂ－３類土器（中茶路式）は出土量は少ないが、地区によって特徴を異にすることがわかり、４段階に区分した。コッタロ式に近いものでは貼付帯上に縄をころがし刻み目をつけるものがみられる。新しい段階になるにつれ、口唇断面は尖り気味で、貼付帯は細く徴隆起線になるようである。

Ⅰ群ｂ－４類土器（東釧路Ⅳ式）はｃ－68区の盛土とその周辺から多量に出土した。昨年度分類したａ～ｆ類の６段階に加えて、ｆ類のうち新しい段階とみられるものをｇ類として区分した。新しい段階のものには器壁が厚いもので、条の太い原体による菱形を構成する文様、口縁部に縄線文による文様を施すなど前期のⅡ群ａ類土器に通じる文様要素をもつものがみられる。

前期・中期の遺構と遺物

Ⅱ群ａ類土器の時期の土壙はⅡ黒層上面でやや凹んだ状態で検出されたもの（Ｐ－38）、盛土調査中に黒色土の落ち込みとして検出されたもの（Ｐ－55・57）があり遺物は遺構を中心に広がっていた。ａ－１類土器には昨年度発見されたものと接合する資料も多くあり、綱文土器を伴なわない羽状縄文土器の資料が追加された。またａ－２類の資料の存在が明確になった。口唇部に刺突を施すこと、器面の縄文が浅く施され、ａ－１類の様に帯状にならないなど、文様にやや特色がある。

中期の遺物はⅢ群ａ類、ｂ類土器片が散点的に出土している。この時期の遺構は追加されていない。Ⅲ群ａ類（円筒上層式）土器の住居跡は昨年度近接した位置から２軒発見されており、関連性がうかがわれる。Ⅲ群ｂ－１類（天神山式）土器は美沢川流域の遺跡群の調査の中では例が少ないものである。

後期の遺構と遺物

後期の遺構には、住居跡（３）、土壙（３）、Ｔピット（４）、焼土がある。後期の住居跡は低位段丘面の平坦部から検出されている。

後期初頭Ⅳ群ａ類（余市式）土器の時期とみられる住居跡（Ｈ－19）が発見された。掘り込みが浅いため一部でかろうじて壁の立ち上がりが確認できたものである。明確な平面形は捉えられなかった。

後期中葉Ⅳ群ｂ類土器の時期の住居跡は２軒（Ｈ－18、21）検出され、昭和51年度（Ｈ－１）、昭和62年（Ｈ－２、３）の発見例を含めてこれで５軒発見されたこととなる。Ｈ－18はＴａ－ｃ層上面から大きく凹んでおりその存在を予想できた。径６ｍをこえる大形の円形プランのもので、昨年度調査したＨ－３に類似したものである。中央やや東寄りの位置に炉跡がみとめられている。鮭澗、エリモＢ式に相当するものである。Ｈ－21は半分以上が川の浸食で失なわれていることから平面形は明確ではないが、円形に近いプランのものかとみられる。覆土中部から床面にかけて炭化物が検出されている。床面下から手稲式の完形土器が検出（Ｐ－68）されていることから、手稲式土器の時期か、それよりやや新しい段階、鮭澗、エリモＢ式土器の時期とみられる。

Ｔピットはｄ－70・71区から４個検出された。杭穴を２個もつもの（ＴＰ－18・19・20）と溝状のもの（ＴＰ－21）で、いずれも昨年度検出されたものと同一の列をなすとみられる。

焼土はⅡ黒層上面からⅣ群ｂ類土器の時期と思われるものが４か所で検出された。

Ⅳ群ａ類土器のうち余市式に相当するものは、昨年度の調査区から続いて小さな広がりを

もって分布している。器形は底部から直線的に立ち上がり口縁部で直立気味になるとみられるものである。器面の羽状縄文には、撚りの異なる２本の原体によるものと、同じ原体を横位、縦位に回転施文するものがみられる。

Ⅳ群ｂ類土器には手稲式と鉈澗、エリモＢ式に相当するものがあり、Ⅱ黒層上面から出土している。前者をｂ－１類、後者をｂ－２類として区分した。ｂ－１類には鉢形土器と大形の壺形土器がある。ｂ－２類土器は低位段丘面全体に広がりがある。Ｈ－18・20はこの時期のものである。

Ⅳ群ｃ類土器は３個体分の破片が出土している。静内御殿山式に相当する深鉢形土器と小形の注口土器である。土器の分布は昨年度の調査区から続いておりｃ－68区西側にまとまっている。

晩期の遺構

ｂ－70区の平坦面から斜面にかけての位置から円形プランの土壙が13個検出された。Ⅱ黒層上面から大きく凹んでおり、掘り上げ土は周辺に広がっていた。同様の土壙は昭和55年度の調査の際にも１個（Ｐ－２）発見されている。遺物は２個を除き出土していない。

なお、昨年度調査したＨ－９，15，16の床面、Ｐ－６の覆土からオニグルミの炭化種子が検出されている。（遠藤香澄）

表Ⅲ－2　包含層の出土遺物一覧

名称		数量
土器	Ⅰ群b-1・2類	3,783
	Ⅰ群b-3類	1,998
	Ⅰ群b-4類	30,360
	Ⅱ群a-1類	1,129
	Ⅱ群a-2類	271
	Ⅲ群a類	79
	Ⅲ群b-1類	689
	Ⅳ群a類	272
	Ⅳ群b類	2,962
	Ⅳ群c類	425
土器計		41,968
石鏃		731
石槍又はナイフ		39
石錐		70
つまみ付ナイフ		258
スクレイパー		269
石斧		96
石斧剝片		178
たたき石		73

名称	数量
すり石	72
砥石	193
石鋸	7
台石	35
石皿	51
石錘	31
コア	29
Uフレイク	86
Rフレイク	676
フレイク・チップ	25,396
礫・礫片	1,144
細礫	19
焼礫	132
原石	18
土製品	4
石製品	5
石器等計	29,612
総計	71,580

表Ⅲ－3　遺構の出土遺物一覧

名称	分類	数量	
		覆土	床面
土器	Ⅰb-1・2	57	6
	Ⅰb-3	185	
	Ⅰb-4	1,706	21
	Ⅱa-1	86	
	Ⅱa-2	446	
	Ⅲa	3	
	Ⅳa	22	
	Ⅳb	190	10
	Ⅳc	2	1
土器計		2,697	38
石鏃		46	2
石槍又はナイフ		2	
石錐		2	
つまみ付ナイフ		16	
スクレイパー		12	2
石斧		3	

名称	分類	数量	
		覆土	床面
石斧剝片		4	
たたき石		6	1
すり石		5	
砥石		25	
台石		16	
石皿			1
石錘		3	
コア		3	
Uフレイク		3	
Rフレイク		49	1
フレイク・チップ		3,245	18
礫・礫片		101	
細礫		19	
焼礫		6	
石器等計		3,566	25
総計		6,263	63
		6,326	

表Ⅲ－4　遺構別出土遺物一覧

(1)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数量 覆土	数量 床面
H－18	土　器	Ⅰb-3	1	
		Ⅰb-4	30	2
		Ⅱa-1	6	
		Ⅳa	1	
		Ⅳb	19	10
		Ⅳc	2	1
	計		59	13
	石　鏃		14	1
	つまみ付ナイフ		1	
	石　斧		1	
	石斧剝片		1	
	たたき石		1	1
	すり石		2	
	フレイク・チップ		116	4
	礫・礫片		2	
216点	計		138	6
H－19	土　器	Ⅰb-1	2	
		Ⅰb-2	1	
		Ⅰb-4	484	
		Ⅱa-1	1	
		Ⅳa	19	
	計		507	
	石　鏃		5	
	つまみ付ナイフ		1	
	スクレイパー		1	
	石斧剝片		1	
	砥　石		15	
	台　石		15	
	Rフレイク		3	
	フレイク・チップ		79	
	礫・礫片		13	
640点	計		133	
H－20	土　器	Ⅰb-1	1	
		Ⅰb-2	1	
		Ⅰb-3	7	
		Ⅰb-4	25	
		Ⅲa	3	
	計		37	
	つまみ付ナイフ		1	
	スクレイパー		2	
	たたき石		2	
	コア		1	
	Rフレイク		3	1
	フレイク・チップ		10	3
	礫・礫片		2	
62点	計		21	4
H－21	土　器	Ⅰb-4	36	
		Ⅳb	1	
	計		37	
	スクレイパー		1	1
	砥　石		1	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		15	3
	礫・礫片		2	
61点	計		20	4
H－22	土　器	Ⅰb-4	2	
	計		2	
	石　鏃		1	
	Rフレイク		2	
	フレイク・チップ		16	3
24点	計		19	3
P－25	礫・礫片		5	
5点	計		5	
P－28	礫・礫片		2	
2点	計		2	

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数量 覆土	数量 床面
P－35	土　器	Ⅰb-4	1	
1点	計		1	
P－37	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	
P－38	土　器	Ⅰb-1	2	1
		Ⅰb-2	2	
		Ⅰb-4	3	
		Ⅱa-1	47	
		Ⅱa-2	445	
		Ⅳb	14	
	計		513	1
	石　鏃		2	
	つまみ付ナイフ		1	
	Rフレイク		2	
	フレイク・チップ		24	
	礫・礫片		1	
	焼　礫		1	
545点	計		31	
P－42	土　器	Ⅰb-1	1	
		Ⅰb-2	3	
		Ⅰb-3	4	
		Ⅰb-4	124	
		Ⅱa-1	1	
	計		133	
	石　鏃		1	
	石斧剝片		1	
	砥　石		9	
	石　錘		2	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		36	
	礫・礫片		24	
	焼　礫		4	
211点	計		78	
P－43	土　器	Ⅰb-2	1	
		Ⅰb-3	1	
		Ⅰb-4	68	
		Ⅳb	1	
	計		71	
	石　鏃		2	
	つまみ付ナイフ		1	
	たたき石		1	
	Uフレイク		1	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		15	
	礫・礫片		2	
94点	計		23	
P－44	土　器	Ⅰb-2	2	
		Ⅰb-4	51	
		Ⅳb	1	
	計		54	
	スクレイパー		1	
	たたき石		1	
	フレイク・チップ		14	
	礫・礫片		13	
83点	計		29	
P－45	土　器	Ⅰb-4	64	
	計		64	
	石　鏃		3	
	つまみ付ナイフ		1	
	石斧剝片		1	
	石　皿			1
	Rフレイク		4	
	フレイク・チップ		64	
	礫・礫片		2	
140点	計		75	1

遺構番号 遺物点数	名称	分類	数量 覆土	数量 床面
P－46	土器	Ⅰb-2		4
		Ⅰb-3	111	1
		Ⅰb-4	94	
		Ⅱa-2	1	
	計		206	5
	石鏃		2	
	石錐		1	
	つまみ付ナイフ		2	
	スクレイパー		1	
	石斧		1	
	すり石		1	
	Rフレイク		2	
	フレイク・チップ		13	
	礫・礫片		12	
246点	計		35	
P－47	土器	Ⅰb-3	1	
		Ⅰb-4	11	
	計		12	
	つまみ付ナイフ		3	
	スクレイパー		1	1
	Uフレイク		1	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		23	
	礫・礫片		1	
43点	計		30	1
P－48	土器	Ⅰb-2	3	
		Ⅰb-3	1	
		Ⅰb-4	28	
	計		32	
	たたき石		1	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		6	
	礫・礫片		1	
	細礫		1	
42点	計		10	
P－49	土器	Ⅰb-4	52	1
		Ⅱa-1	25	
	計		77	1
	石鏃		1	1
	つまみ付ナイフ		1	
	スクレイパー		2	
	コア		1	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		16	2
103点	計		22	3
P－50	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	
P－51	土器	Ⅰb-3	1	
		Ⅰb-4	3	
	計		4	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		5	
10点	計		6	
P－52	土器	Ⅳb	61	
	計		61	
	フレイク・チップ		1	
62点	計		1	
P－53	土器	Ⅰb-3	3	
		Ⅰb-4	84	
		Ⅱa-1	1	
	計		88	
	石鏃		3	
	Uフレイク		1	
	Rフレイク		3	
	フレイク・チップ		51	

遺構番号 遺物点数	名称	分類	数量 覆土	数量 床面
	礫・礫片		2	
148点	計		60	
P－54	土器	Ⅰb-4	18	
18点	計		18	
P－55	土器	Ⅰb-4	10	3
		Ⅱa-1	1	
	計		11	3
	つまみ付ナイフ		1	
	すり石		1	
	Rフレイク		6	
	フレイク・チップ		27	
49点	計		35	
P－56	土器	Ⅰb-2	13	
		Ⅰb-3	25	
	計		38	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		7	
	礫・礫片		1	
47点	計		9	
P－57	土器	Ⅰb-4	30	
		Ⅱa-1	1	
	計		31	
	石鏃		1	
	石槍又はナイフ		1	
	石斧		1	
	Rフレイク		1	
	フレイク・チップ		14	
49点	計		18	
P－58	土器	Ⅰb-1	1	
		Ⅰb-2	5	
		Ⅰb-3	3	
		Ⅰb-4	184	4
	計		193	4
	石鏃		2	
	Rフレイク		2	
	フレイク・チップ		130	
	礫・礫片		1	
332点	計		135	
P－59	土器	Ⅰb-4	2	
	計		2	
	つまみ付ナイフ		1	
	スクレイパー		1	
	フレイク・チップ		7	
11点	計		9	
P－60	土器	Ⅰb-1	3	
		Ⅰb-2	1	
		Ⅰb-4	1	
	計		5	
	フレイク・チップ		7	
12点	計		7	
P－61	台石		1	
	フレイク・チップ		15	
16点	計		16	
P－63	土器	Ⅰb-4	15	
	計		15	
	スクレイパー		1	
	フレイク・チップ		3	
19点	計		4	
P－64	土器	Ⅰb-4	1	
	計		1	
	石鏃		1	
	Rフレイク		2	
	フレイク・チップ		1,390	
	細礫		3	
1,397点	計		1,396	

(3)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数量 覆土	数量 床面
P－65	土　器	Ⅰb-2	1	
	計		1	
	R フレイク		1	
	フレイク・チップ		3	
5点	計		4	
P－66	土　器	Ⅰb-3	1	
	計		1	
	フレイク・チップ		2	
3点	計		2	
P－67	土　器	Ⅰb-3	17	
	計		17	
	フレイク・チップ		3	
20点	計		3	
P－68	土　器	Ⅰb-4	4	
		Ⅳb	90	
	計		94	
	フレイク・チップ		2	
	細　礫		1	
97点	計		3	
P－69	土　器	Ⅳb	1	
	計		1	
	礫・礫片		1	
2点	計		1	
P－70	土　器	Ⅰb-4	10	
		Ⅱa-1	1	
	計		11	
	フレイク・チップ		3	
14点	計		3	
TP－18	土　器	Ⅰb-3	2	
	計		2	
	石　錘		1	
3点	計		1	
TP－19	土　器	Ⅰb-3	1	
1点	計		1	
F－4	土　器	Ⅰb-4		11
	計			11
	フレイク・チップ			3
14点	計			3
F－6	土　器	Ⅰb-4	3	
	計		3	
	フレイク・チップ		13	
	礫・礫片		1	
17点	計		14	
F－7	土　器	Ⅰb-1	10	
	計		10	
	フレイク・チップ		16	
26点	計		16	
F－8	土　器	Ⅳb	1	
1点	計		1	
F－9	土　器	Ⅰb-4	3	
	計		3	
	フレイク・チップ		10	
13点	計		10	
F－10	フレイク・チップ		22	
22点	計		22	
F－11	土　器	Ⅰb-4	11	
		Ⅳa	1	
	計		12	
	フレイク・チップ		1	
13点	計		1	
F－13	土　器	Ⅰb-4	62	
	計		62	
	フレイク・チップ		7	
69点	計		7	
F－14	土　器	Ⅰb-3	1	

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数量 覆土	数量 床面
		Ⅱa-1	2	
	計		3	
	フレイク・チップ		19	
	礫・礫片		3	
25点	計		22	
F－15	土　器	Ⅰb-4	4	
	計		4	
	フレイク・チップ		22	
26点	計		22	
F－16	土　器	Ⅰb-4	3	
	計		3	
	フレイク・チップ		13	
16点	計		13	
F－17	土　器	Ⅰb-4	5	
		Ⅳa	1	
	計		6	
	R フレイク		1	
	フレイク・チップ		22	
29点	計		23	
F－18	土　器	Ⅰb-2	1	
		Ⅰb-4	5	
	計		6	
	フレイク・チップ		26	
32点	計		26	
F－19	フレイク・チップ		11	
11点	計		11	
F－20	土　器	Ⅰb-4	1	
		Ⅳb	1	
	計		2	
	フレイク・チップ		16	
18点	計		16	
F－21	石　鏃		1	
	フレイク・チップ		149	
150点	計		150	
F－22	フレイク・チップ		29	
	細　礫		1	
30点	計		30	
F－24	土　器	Ⅰb-4	166	
	計		166	
	石　鏃		2	
	つまみ付ナイフ		2	
	すり石		1	
	R フレイク		3	
	フレイク・チップ		42	
	細　礫		2	
	焼　礫		1	
219点	計		53	
F－25	土　器	Ⅰb-4	2	
	計		2	
	フレイク・チップ		32	
34点	計		32	
F－26	フレイク・チップ		8	
	細　礫		1	
9点	計		9	
F－27	フレイク・チップ		3	
	細　礫		1	
4点	計		4	
F－28	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	
F－29	土　器	Ⅰb-3	1	
		Ⅰb-4	1	
	計		2	
	フレイク・チップ		16	
	礫・礫片		3	
21点	計		19	

(4)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量 覆　土	 床　面
F－30	石　鏃		1	
	フレイク・チップ		40	
	礫・礫片		1	
42点	計		42	
F－31	土　器	Ⅰb-3	1	
	計		1	
	フレイク・チップ		44	
45点	計		44	
F－32	石　鏃		1	
	コ　ア		1	
	フレイク・チップ		60	
62点	計		62	
F－33	土　器	Ⅰb-1	1	
		Ⅰb-3	3	
	計		4	
	石　鏃		1	
	石槍又はナイフ		1	
	Rフレイク		3	
	フレイク・チップ		161	
	礫・礫片		5	
175点	計		171	
F－34	土　器	Ⅰb-4	1	
	計		1	
	フレイク・チップ		75	
	礫・礫片		1	

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量 覆　土	 床　面
	細　礫		8	
85点	計		84	
F－35	土　器	Ⅰb-4	4	
	計		4	
	フレイク・チップ		131	
	細　礫		1	
136点	計		132	
F－36	土　器	Ⅰb-2	2	
	計		2	
	石　鏃		1	
	スクレイパー		1	
	Rフレイク		3	
	フレイク・チップ		89	
96点	計		94	
F－38	石　錐		1	
	フレイク・チップ		9	
10点	計		10	
F－39	フレイク・チップ		6	
6点	計		6	
F－40	フレイク・チップ		4	
4点	計		4	
F－41	石　鏃		1	
	フレイク・チップ		29	
30点	計		30	

表Ⅲ－5　遺構の掲載土器一覧

(1)

遺構番号	図番号	分　類	層　位
H－18	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	盛　土
	4	〃	覆　土
	5	〃	盛　土
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	〃	床
	9	Ⅱa-1	盛　土
	10	Ⅳa	覆　土
	11	〃	〃
	12	Ⅳb-1	盛　土
	13	〃	覆　土
	14	〃	盛　土
	15	〃	床
	16	〃	〃
	17	Ⅳb-2	覆　土
	18	〃	〃
	19	〃	〃
	20	〃	〃
	21	Ⅳc	〃
	22	〃	〃
	23	〃	床
	24	〃	〃
H－19	1	Ⅰb-1	覆　土
	2	Ⅰb-2	〃
	3	Ⅰb-1	〃
	4	Ⅰb-4	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
	7	〃	〃
	8	〃	〃
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	Ⅰb-2	〃
	13	Ⅰb-4	〃
	14	〃	〃
	15	〃	〃
	16	〃	〃
	17	〃	〃
	18	〃	〃
	19	〃	〃
	20	〃	〃
	21	〃	〃
	22	〃	〃
	23	〃	〃
	24	〃	〃
	25	〃	〃
	26	〃	〃
	27	〃	〃
	28	〃	〃
	29	〃	〃
	30	〃	〃
	31	Ⅱa-1	〃
	32	Ⅳa	〃
	33	Ⅳa	〃
	34	〃	〃
	35	〃	〃
H－20	1	Ⅰb-1	覆　土

遺構番号	図番号	分　類	層　位
	2	Ⅰb-2	〃
	3	Ⅰb-3	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	Ⅰb-4	〃
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	〃	〃
	13	〃	〃
	14	〃	〃
	15	〃	〃
	16	〃	〃
	17	〃	〃
	18	〃	〃
	19	〃	〃
	20	〃	〃
H－21	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	Ⅳb-2	〃
P－35	1	Ⅰb-4	覆　土
P－38	1	Ⅱa-2	覆　土
	2	〃	〃
	3	Ⅱa-1	〃
	4	〃	〃

(2)

遺構番号	図番号	分　類	層　位
P－38	5	Ⅱa-2	覆　土
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	Ⅰb-1	〃
	9	〃	底　面
	10	〃	覆　土
	11	Ⅰb-2	〃
	12	〃	〃
	13	Ⅰb-4	〃
	14	〃	〃
	15	〃	〃
	16	Ⅳb-1	〃
	17	〃	〃
	18	〃	〃
P－42	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	Ⅰb-1	〃
	3	Ⅰb-2	〃
	4	Ⅰb-3	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	Ⅰb-4	〃
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	〃	〃
	13	〃	〃
	14	〃	〃
	15	〃	〃
	16	Ⅱa-1	〃
P－43	1	Ⅰb-3	覆　土
	2	Ⅰb-4	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	〃	〃
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	〃	〃
P－44	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	〃	〃
	9	〃	〃
	10	Ⅳb-2	〃
P－45	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
P－45	5	Ⅰb-4	覆　土
	6	〃	〃
	7	〃	〃
P－46	1	Ⅰb-2	底　面
	2	〃	〃
	3	Ⅰb-4	覆　土
	4	Ⅰb-3	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	Ⅰb-4	〃
	8	〃	〃
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	〃	〃
	13	〃	〃
	14	〃	〃
	15	〃	〃
	16	〃	〃
	17	〃	〃
	18	〃	〃
	19	〃	〃
	20	Ⅰb-4	覆　土
	21	〃	〃
	22	〃	〃
	23	Ⅱa-2	〃
P－47	1	Ⅰb-3	覆　土
	2	Ⅰb-4	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
P－48	1	Ⅰb-2	覆　土
	2	Ⅰb-3	〃
	3	Ⅰb-4	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
P－49	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	Ⅱa-1	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
P－51	1	Ⅰb-3	覆　土
	2	Ⅰb-4	〃
	3	〃	〃
P－52	1	Ⅳb-1	覆　土
P－53	1	Ⅰb-3	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	Ⅰb-4	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
P－53	8	Ⅰb-4	覆　土
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	〃	〃
	13	〃	〃
	14	Ⅰb-4	〃
	15	〃	〃
	16	Ⅱa-1	〃
P－54	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
P－55	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	Ⅱa-1	〃
P－56	1	Ⅰb-2	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	Ⅰb-3	〃
P－57	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	〃	〃
	9	〃	〃
	10	Ⅱa-1	〃
P－58	1	Ⅰb-2	覆　土
	2	〃	〃
	3	Ⅰb-3	〃
	4	Ⅰb-4	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	〃	底　面
P－60	1	Ⅰb-1	覆　土
	2	〃	〃
	3	Ⅰb-4	〃
P－63	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	〃	〃
P－65	1	Ⅰb-2	覆　土
P－66	1	Ⅰb-2	覆　土
P－67	1	Ⅰb-3	覆　土
P－68	1	Ⅳb-1	覆　土
P－69	1	Ⅳb-1	覆　土
P－70	1	Ⅰb-4	覆　土
	2	Ⅱa-1	〃
TP－18	1	Ⅰb-3	覆　土
	2	〃	〃
TP－19	1	Ⅰb-3	覆　土

遺構番号	図番号	分　類	層　位
F－7	1	Ⅰb-1	覆　土
F－11	2	Ⅰb-4	覆　土
	3	Ⅳa	〃
F－13	4	Ⅰb-4	覆　土
	5	〃	〃
	6	〃	〃
F－14	7	Ⅰb-3	覆　土
	8	Ⅱa-1	〃
F－15	9	Ⅰb-4	覆　土
F－17	10	Ⅰb-4	覆　土

遺構番号	図番号	分　類	層　位
	11	Ⅰb-4	覆　土
	12	Ⅳa	〃
F－18	13	Ⅰb-4	覆　土
	14	Ⅰb-2	〃
F－24	15	Ⅰb-4	覆　土
	16	〃	〃
	17	〃	〃
	18	〃	〃
	19	〃	〃
	20	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
	21	Ⅰb-4	覆　土
	22	〃	〃
F－29	23	Ⅰb-3	覆　土
	24	Ⅰb-4	〃
F－31	25	Ⅰb-3	覆　土
F－33	26	Ⅰb-1	覆　土
	27	Ⅰb-3	〃
F－34	28	Ⅰb-4	覆　土
F－35	29	〃	覆　土

表Ⅲ－6　遺構の掲載石器一覧

(1)

遺構番号	図番号	名　称	層　位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
H－18	25	石　鏃	覆　土	1.7X0.4X0.2	0.1	Obs.
	26	〃	〃	(1.3)X0.6X0.1	(0.1)	〃
	27	〃	盛　土	1.4X0.7X0.2	0.2	〃
	28	〃	覆　土	1.5X0.6X0.2	0.1	〃
	29	〃	〃	1.6X0.8X0.2	0.2	〃
	30	〃	〃	2.1X0.7X0.2	0.2	〃
	31	〃	盛　土	(2.0)X1.1X0.2	(0.4)	〃
	32	〃	〃	(0.6)X(0.4)X0.1	(0.1)	〃
	33	〃	覆　土	(0.8)X(0.9)X0.1	(0.1)	〃
	34	〃	〃	1.1X0.8X0.3	0.2	〃
	35	〃	盛　土	2.1X1.3X0.2	0.4	〃
	36	〃	床	(3.0)X1.7X0.3	(1.1)	〃
	37	〃	覆　土	(1.5)X1.3X0.2	(0.7)	〃
	38	〃	盛　土	(2.0)X1.4X0.3	(1.2)	〃
	39	つまみ付ナイフ	〃	(2.1)X2.3X0.4	(4.4)	Sh.
	40	石　斧	覆　土	(13.7)X6.1X2.3	(311.3)	Ser.
	41	たたき石	盛　土	(5.2)X4.4X1.6	(53.0)	Mud.
	42	〃	床	10.7X7.4X3.5	39.8	〃
	43	すり石	覆　土	8.7X15.8X6.7	1,100	And.
	44	〃	盛　土	6.8X14.2X4.9	525.0	〃
H－19	36	石　鏃	覆　土	1.4X0.6X0.2	0.1	Obs.
	37	〃	〃	(0.9)X1.0X0.2	(0.2)	〃
	38	〃	〃	(1.4)X(1.1)X0.2	(0.2)	〃
	39	〃	〃	1.7X(1.1)X0.4	(0.6)	〃
	40	〃	〃	(1.5)X1.4X0.3	(0.7)	〃
	41	Rフレイク	〃	2.0X3.4X0.6	5.0	〃
	42	つまみ付ナイフ	〃	6.0X2.1X0.7	9.5	〃
	43	スクレイパー	〃	4.7X2.2X1.4	13.2	〃
	44	砥　石	〃	10.0X(7.6)X5.2	(388.9)	Sa.
H－20	21	つまみ付ナイフ	覆　土	(2.1)X2.2X0.6	(3.0)	Obs.
	22	スクレイパー	〃	2.6X1.6X0.3	2.1	Che.
	23	〃	〃	4.3X3.4X0.7	14.8	Obs.
	24	コ　ア	〃	2.5X2.9X1.2	10.0	〃
	25	Rフレイク	〃	2.3X1.6X0.4	1.3	〃
	26	〃	床	1.6X1.6X0.4	1.0	〃
	27	〃	覆　土	1.5X2.1X0.3	0.7	〃
	28	〃	〃	1.5X2.1X0.3	0.8	〃
	29	たたき石	〃	10.2X11.0X3.4	640.0	And.
	30	〃	〃	8.8X10.7X3.8	629.0	〃
H－21	7	スクレイパー	床	(2.6)X2.1X0.6	(4.4)	Obs.
	8	〃	覆　土	4.0X1.9X0.6	3.9	〃
	9	Rフレイク	〃	3.1X1.4X0.4	2.6	〃
	10	砥　石	〃	22.0X12.4X7.7	2,000.0	Sa.
H－22	1	石　鏃	覆　土	(1.3)X1.2X0.2	(0.3)	Obs.

遺構番号	図番号	名　称	層　位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
H－22	2	Rフレイク	覆　土	(1.6)X1.3X0.3	0.8	Obs.
	3	〃	〃	(1.9)X1.7X0.2	0.8	〃
P－38	19	石　鏃	覆　土	(2.5)X(1.4)X0.2	(0.5)	Obs.
	20	〃	〃	2.6X1.8X0.3	1.0	〃
	21	つまみ付ナイフ	〃	6.1X2.1X0.5	6.6	〃
P－42	17	石　鏃	覆　土	1.6X0.8X0.2	0.2	Obs.
	18	砥　石	〃	(4.8)X3.9X(2.4)	(57.2)	Sa.
	19	〃	〃	11.6X4.7X4.2	(258.0)	〃
	20	石　錘	〃	5.9X(9.0)X3.2	(256.5)	Gni.
	21	〃	〃	(4.0)X(5.7)X2.6	(103.8)	〃
P－43	13	石　鏃	覆　土	1.5X0.7X0.2	0.2	Obs.
	14	〃	〃	3.4X2.1X0.5	2.2	〃
	15	つまみ付ナイフ	覆　土	4.3X1.4X0.5	3.2	Qua.
	16	たたき石	〃	(9.5)X6.1X1.7	(186.3)	Gni.
P－44	11	たたき石	覆　土	9.5X8.0X3.5	(293.2)	And.
P－45	8	石　鏃	覆　土	(1.6)X0.9X0.2	(0.2)	Obs.
	9	〃	〃	2.1X0.9X0.3	0.4	〃
	10	〃	〃	(1.5)X1.1X0.2	(0.3)	〃
	11	つまみ付ナイフ	〃	4.5X2.6X0.5	5.4	Sh.
P－46	24	石　鏃	覆　土	1.8X0.7X0.2	0.2	Obs.
	25	〃	〃	(1.0)X0.7X0.2	(0.1)	〃
	26	スクレイパー	〃	2.3X1.4X0.3	1.2	Sh.
	27	石　錐	〃	(3.5)X2.3X0.3	(4.1)	Obs.
	28	つまみ付ナイフ	〃	7.7X2.5X0.7	16.3	Qua.
	29	〃	〃	(6.1)X3.4X0.6	(11.6)	Sh.
	30	すり石	〃	6.3X(6.8)X2.7	(222.8)	Gni.
P－47	8	つまみ付ナイフ	覆　土	3.6X2.1X0.6	4.9	Qua.
	9	〃	〃	4.1X1.6X0.7	5.0	Sh.
	10	〃	〃	3.2X2.0X0.7	3.6	Obs.
	11	スクレイパー	〃	2.6X2.7X0.6	5.2	〃
	12	〃	底　面	5.2X5.6X0.9	21.0	〃
P－48	8	たたき石	覆　土	12.4X6.7X2.3	374.4	Gni.
P－49	6	石　鏃	覆　土	(1.6)X0.8X0.2	(0.2)	Obs.
	7	〃	底　面	2.2X1.4X0.4	1.0	〃
	8	スクレイパー	覆　土	(2.4)X1.3X0.5	(1.5)	Obs.
	9	つまみ付ナイフ	〃	(5.3)X1.3X0.5	(4.1)	Qua.
	10	〃	〃	2.7X2.9X1.0	6.0	〃
	11	コ　ア	〃	1.6X2.0X1.2	2.7	〃
P－51	4	Rフレイク	覆　土	3.3X2.9X0.8	6.8	Obs.
P－53	17	石　鏃	覆　土	2.3X1.4X0.4	1.0	Obs.
	18	〃	〃	3.5X1.4X0.4	2.0	〃
	19	〃	〃	(1.3)X0.8X0.2	(2.0)	〃
	20	Uフレイク	〃	3.5X2.5X1.0	7.8	〃
	21	Rフレイク	〃	3.6X4.1X0.7	10.0	〃

(2)

遺構番号	図番号	名　称	層　位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
	22	Rフレイク	覆　土	1.2X1.4X0.2	0.4	Obs.
	23	〃	〃	0.9X1.3X0.2	0.2	〃
P−55	6	つまみ付ナイフ	覆　土	4.3X2.2X0.5	5.4	Sh.
	7	Rフレイク	〃	4.4X2.1X0.7	6.4	Obs.
	8	〃	〃	3.6X1.9X0.4	2.5	〃
	9	〃	〃	(1.8)X1.2X0.1	(0.3)	〃
	10	〃	〃	1.0X1.5X0.1	0.3	〃
	11	〃	〃	(2.3)X2.7X0.2	(1.2)	Sh.
	12	〃	〃	2.6X2.1X0.7	3.4	Obs.
	13	すり石	〃	10.7X(10.1)X4.2	(833.0)	Sa.
P−56	6	Rフレイク	覆　土	1.4X1.2X0.2	0.6	Obs.
P−57	11	石　鏃	覆　土	(1.8)X1.0X0.2	(0.4)	Obs.
	12	石槍又はナイフ	〃	(3.6)X1.6X0.4	(2.5)	〃
	13	Rフレイク	〃	1.3X1.5X0.3	1.0	〃
	14	石　斧	〃	9.0X4.5X1.2	(62.2)	Ser.
P−58	9	石　鏃	覆　土	(2.3)X1.5X0.3	(1.0)	Obs.
	10	Rフレイク	〃	2.6X1.4X0.3	(1.2)	〃
	11	〃	〃	1.8X1.0X0.3	(0.5)	〃
P−59	1	つまみ付ナイフ	覆　土	(4.3)X1.8X0.4	(4.4)	Sh.
	2	スクレイパー	〃	3.3X1.9X0.9	5.8	Obs.
P−61	1	台　石	覆　土	(16.0)X(17.6)X(7.3)	(2,740.0)	不明
P−63	3	スクレイパー	覆　土	2.8X3.0X1.0	8.7	Obs.
P−64	1	石　鏃	覆　土	(1.1)X1.2X0.2	(0.2)	〃
	2	Rフレイク	〃	(1.6)X2.1X0.2	(1.6)	〃
	3	Rフレイク	〃	(1.5)X2.0X0.2	(1.1)	Obs.

遺構番号	図番号	名　称	層　位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
P−65	2	Rフレイク	覆　土	1.9X2.3X0.4	1.8	Obs.
TP−18	3	石　錘	覆　土	6.0X7.9X1.5	127.9	Gni.
F−17	30	Rフレイク	覆　土	2.2X0.9X0.6	1.6	Obs.
F−21	31	石　鏃	覆　土	1.6X(1.0)X0.2	(0.4)	〃
F−24	32	〃	覆　土	1.1X(0.5)X0.2	+	Obs.
	33	〃	〃	1.0X0.5X0.1	0.1	〃
	34	つまみ付ナイフ	〃	5.4X2.4X0.6	7.0	Sh.
	35	〃	〃	(2.0)X1.9X0.4	(1.5)	〃
	36	Rフレイク	〃	1.5X1.5X0.2	0.6	Obs.
	37	〃	〃	1.3X1.5X0.2	0.5	〃
	38	すり石	〃	(3.8)X(5.6)X5.6	(158.3)	And.
F−30	29	石　鏃	覆　土	2.1X0.8X0.1	0.4	Qua.
F−32	40	石　鏃	覆　土	(2.5)X1.0X0.3	(0.8)	Obs.
	41	コア	〃	2.8X3.4X1.0	7.9	〃
F−33	42	石　鏃	覆　土	(1.7)X0.9X0.2	(0.4)	Obs.
	43	石槍又はナイフ	〃	(3.1)X1.8X0.3	(2.3)	〃
	44	Rフレイク	〃	3.1X1.1X0.3	1.5	〃
	45	〃	〃	1.3X1.9X0.3	0.8	〃
F−36	46	石　鏃	覆　土	(1.0)X(0.9)X0.1	(0.2)	Obs.
	47	スクレイパー	〃	2.8X2.2X0.3	(2.2)	〃
	48	Rフレイク	〃	3.8X1.5X0.2	1.9	〃
	49	〃	〃	2.3X2.3X0.8	4.0	〃
	50	〃	〃	2.5X2.1X0.2	1.6	〃
F−38	51	石　錐	覆　土	3.2X1.8X0.4	2.3	Obs.
F−41	52	石　鏃	覆　土	(0.6)X0.5X0.1	+	Obs.

表Ⅲ−7　包含層の掲載土器一覧 (1)　Ⅰ群ｂ−１類

図番号	発掘区
73−1	c-68-65
2	c-68-66
3	c-68-77
4	b-71-71
5	c-68-68・69・78
6	c-68-69
7	c-68-88
8	c-68-66
9	c-68-66
10	c-68-66
11	c-68-66
12	c-68-54
74−13	c-68-66
14	c-68-66
15	c-68-66
16	c-68-68
17	c-68-65
18	c-68-67

図番号	発掘区
74−19	c-68-87
20	c-68-48
21	c-68-76
22	c-68-68
23	c-68-69
24	c-68-65
25	c-68-68
26	c-68-68
27	c-68-77
28	c-68-68
29	b-71-91
30	c-68-69
31	c-68-29
32	c-68-68
33	c-68-77
34	c-68-79
35	c-68-78
36	c-68-78

図番号	発掘区
74−37	c-68-45
38	c-68-45
39	c-68-45
40	c-68-65
41	c-68-68
42	c-68-69
43	c-68-48
75−44	c-68-69
45	c-68-69
46	c-68-77
47	c-68-77
48	c-68-77
49	c-68-67
50	c-68-69
51	c-68-89
52	c-68-87
53	b-70-87
54	b-70-87

図番号	発掘区
75−55	c-68-79
56	c-68-69
57	b-70-59
58	c-68-69
59	c-68-69
60	b-70-57
61	c-68-45
62	c-68-66
63	c-68-69
64	c-68-57
65	c-68-77
66	c-69-32・41・52・63
67	c-68-66・69
68	c-68-69
69	c-68-77・87
70	c-68-87
71	c-68-87
72	b-70-87

図番号	発掘区
75−73	b-70-87・95
74	c-68-47
75	c-68-66
76−76	c-68-69
77	c-68-77
78	b-70-57
79	c-68-88
80	c-68-88
81	b-70-78
82	c-68-69
83	b-70-57
84	c-68-69
85	c-68-67
86	c-68-66
87	c-68-69

表Ⅲ−8　包含層の掲載土器一覧 (2)　Ⅰ群ｂ−２類

(1)

図番号	発掘区
77−1	c-68-17
2	c-68-88
3	c-68-56
4	c-68-56
5	b-69-32
6	b-69-32
7	c-68-39
8	c-68-79

図番号	発掘区
77−9	c-68-37
10	c-68-28
11	c-68-29
12	c-68-28
13	c-68-67
14	c-68-78
15	c-68-42・53・55
16	c-68-77

図番号	発掘区
77−17	c-68-67
18	c-68-77
19	c-69-90
20	c-68-77
21	c-68-56
22	c-68-77
23	c-68-57
74−24	c-68-66

図番号	発掘区
74−25	c-68-36
26	c-68-78
27	c-68-25
28	c-68-24
29	c-68-79
30	c-68-69
31	c-68-39
32	c-68-45

図番号	発掘区
33	c-69-22
34	c-68-29
35	c-68-38
36	c-68-46
37	c-68-39
38	c-68-69
39	c-68-69
40	c-68-79

図番号	発掘区
78—41	c-68-48
42	c-68-37
43	c-68-44

図番号	発掘区
78—44	c-68-54
45	c-68-69
46	c-68-56

図番号	発掘区
78—47	c-68-88
48	c-68-77
49	c-68-88

図番号	発掘区
78—50	c-68-78
51	c-68-56
52	c-68-56

図番号	発掘区
78—53	c-68-57

表Ⅲ－9　包含層の掲載土器一覧（3）　Ⅰ群b－3類

図番号	発掘区
79— 1	c-68-29
2	d-71-70
3	e-70-89
4	f-71-31
5	f-71-31
80— 6	f-71-41
7	f-71-41
8	c-68-36
9	c-68-29

図番号	発掘区
81—10	f-71-30
11	f-71-41
12	f-71-41
13	d-71-61
14	d-71-61
15	d-71-60
16	d-71-70
17	d-71-70
18	d-71-70

図番号	発掘区
20	d-71-40 d-71-61
21	d-71-41 d-71-61
22	d-71-30 d-71-31 d-71-51
23	c-71-61
24	c-71-61
25	d-70-49
26	d-71-60
26	d-71-60
27	d-71-61

図番号	発掘区
81—28	d-71-70
29	f-71-30
30	f-71-31
31	f-71-31
32	f-71-21
33	f-71-41
34	f-71-40
35	f-71-41
36	f-71-41

図番号	発掘区
81—37	e-71-71
38	c-68-28
39	c-68-36
40	c-68-36
41	c-68-36

表Ⅲ－10　包含層の掲載土器一覧（4）　Ⅰ群b－4類

図番号	発掘区
82— 1	c-68-34
2	c-68-34
3	c-68-38
83— 4	c-68-66
5	c-68-37
6	c-78-35
7	c-68-44
8	c-68-66
84— 9	c-68-57
10	b-71-81
11	c-68-24
12	c-68-45
13	a-71-00
14	c-68-39
15	c-69-55
85—16	c-68-66
17	c-68-29
18	c-68-38
19	c-68-67

図番号	発掘区
85—20	c-68-47
86—21	c-68-39
22	b-71-30
23	c-69-20
87—24	c-69-23
25	c-68-28
26	c-68-38
88—27	c-68-28
28	c-68-19
29	c-69-20
30	c-68-38
31	c-68-37
32	c-68-69
89—33	c-68-49
90—34	b-71-90
35	d-71-70
36	b-70-38
37	c-68-39
90—38	c-68-39

図番号	発掘区
39	c-68-28
40	b-71-50
41	c-68-67
42	c-68-76
43	c-68-88
44	c-68-59
91—45	b-70-28·29·38
46	b-70-38
47	b-71-90
48	d-70-59
49	b-70-78
50	b-70-77・78
51	c-68-39
52	b-70-38
53	c-68-15
54	c-68-27
55	c-68-56
56	c-68-29
57	c-68-89

図番号	発掘区
58	c-68-87・89
59	c-68-89
60	c-68-34
92—61	c-68-44
62	c-68-44
63	c-68-55
64	d-71-70
65	c-68-27・66
66	c-68-24
67	c-69-23
68	c-68-54
69	b-69-01 c-69-91
93—70	b-69-01 c-69-91
71	d-70-48
72	d-70-29 d-71-61
73	d-71-60
74	c-68-56・66
75	c-68-47
76	c-68-39 c-69-20

図番号	発掘区
77	c-68-57
78	c-68-57
79	c-68-28
80	c-68-28
81	c-68-28
94—82	c-68-59
83	b-71-50
84	b-71-50
85	b-70-38 b-71-50
86	c-68-46
87	b-70-85
88	c-68-46
89	c-68-46
90	c-68-88
91	c-68-15·25·68·79

表Ⅲ－11　包含層の掲載土器一覧（5）　Ⅱ群a類

図番号	発掘区
95— 1	c-69-31 c-68-28
2	c-69-53 c-68-77
96— 3	c-68-46
4	c-68-57

図番号	発掘区
97— 5	c-68-29
6	c-68-49
7	c-68-39
8	c-68-67

図番号	発掘区
97— 9	c-68-59
10	c-68-25
11	c-68-69
12	c-68-57

図番号	発掘区
97—13	c-68-48
14	c-68-48
15	c-68-36
16	c-68-36

図番号	発掘区
97—17	c-68-36
18	d-71-11
19	d-71-11
20	d-71-11

表Ⅲ－12　包含層の掲載土器一覧（6）　Ⅲ群a類，b－1類

図番号	発掘区
98— 1	c-68-47
2	c-68-77
3	c-68-77
4	c-68-88

図番号	発掘区
98— 5	c-68-24
6	c-68-59
7	c-68-68
8	c-68-28

図番号	発掘区
98— 9	c-68-28
10	c-68-28
11	c-69-40
12	c-68-88

図番号	発掘区
98—13	c-68-49
14	c-68-37
15	c-68-59
16	c-68-88

図番号	発掘区
17	c-68-49
18	c-68-88 H-20
19	c-68-44
20	c-68-44

表Ⅲ－13　包含層の掲載土器一覧（7）　Ⅳ群a類，b類，c類

図番号	発掘区
99－1	c-68-28
2	c-68-38
3	c-68-38
4	c-68-38
5	c-68-38
6	c-68-38
7	c-68-38
8	c-68-38
9	c-68-47

図番号	発掘区
99－10	c-68-39
100－11	c-68-36
12	c-68-46
13	c-68-88
14	c-68-69
15	c-68-23
16	c-69-80
101－17	c-68-47
102－18	c-68-76

図番号	発掘区
102－19	c-68-48
20	c-68-79
21	c-68-48
22	c-68-66
23	c-68-66
24	c-68-68
25	c-68-68
26	c-68-57
27	a-70-28

図番号	発掘区
102－28	c-68-37
29	c-68-46
30	c-68-35
103－31	c-68-33
32	c-68-33
33	c-68-79
34	c-68-79
35	c-68-56
36	c-68-48

図番号	発掘区
103－37	c-68-45
104－38	c-68-79
39	c-68-67
40	c-68-67
41	c-68-35

表Ⅲ－14　包含層の掲載石器等一覧

(1)

番号	名称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
1	石鏃	c68－38	(4.0)×1.0×0.3	(1.2)	Obs.
2	〃	c68－35	(3.2)×(1.2)×0.3	(1.1)	〃
3	〃	c68－55	(2.5)×0.9×0.3	(0.8)	〃
4	〃	f71－90	(2.5)×0.9×0.3	(0.8)	〃
5	〃	b70－44	(2.7)×1.1×0.3	(0.9)	〃
6	〃	f71－21	(2.1)×1.0×0.3	(0.7)	〃
7	〃	c68－66	2.0×1.0×0.3	0.6	〃
8	〃	b71－61	(2.0)×0.9×0.2	(0.4)	〃
9	〃	a71－16	3.4×1.2×0.3	1.4	〃
10	〃	c68－34	(3.0)×1.3×0.4	(1.4)	〃
11	〃	c68－66	(2.6)×1.2×0.3	(1.1)	〃
12	〃	c68－38	3.2×1.1×0.4	1.2	〃
13	〃	c68－47	2.7×0.9×0.3	0.7	〃
14	〃	c68－66	2.5×1.1×0.3	0.7	〃
15	〃	c68－47	(2.3)×1.0×0.3	(0.6)	〃
16	〃	c68－36	2.6×0.9×0.2	0.4	〃
17	〃	c68－38	2.7×0.9×0.3	0.7	〃
18	〃	d71－30	(2.8)×1.1×0.3	(0.8)	〃
19	〃	d70－49	(2.7)×1.0×0.3	(0.6)	〃
20	〃	b70－78	2.7×1.0×0.2	0.6	〃
21	〃	b70－75	2.4×1.1×0.3	1.0	〃
22	〃	c68－29	(2.4)×1.2×0.2	(0.7)	〃
23	〃	c68－36	1.7×0.7×0.2	0.2	〃
24	〃	c68－35	2.0×0.9×0.2	0.4	〃
25	〃	c68－69	1.9×0.8×0.3	0.5	〃
26	〃	c68－67	2.1×1.0×0.2	0.6	〃
27	〃	c68－66	2.5×1.2×0.4	1.1	〃
28	〃	c68－37	2.4×1.1×0.3	0.8	〃
29	〃	c68－35	2.4×0.9×0.3	0.6	〃
30	〃	c68－36	1.9×0.8×0.3	0.4	〃
31	〃	c68－78	1.9×0.7×0.2	0.3	〃
32	〃	c68－49	1.9×0.8×0.2	0.2	〃
33	〃	c68－56	1.9×0.7×0.2	0.2	〃
34	〃	c68－67	1.9×0.6×0.2	0.2	〃
35	〃	c68－67	1.8×0.7×0.2	0.2	〃
36	〃	c68－35	1.7×0.6×0.1	0.2	〃
37	〃	c68－37	1.7×0.6×0.2	0.2	〃
38	〃	a70－07	1.6×0.7×0.2	0.2	〃
39	〃	c68－77	1.5×0.6×0.2	0.1	〃
40	〃	b71－91	1.5×0.6×0.2	0.1	〃
41	〃	b71－81	1.3×0.5×0.2	0.1	〃
42	〃	c68－28	1.4×0.6×0.2	0.2	〃
43	〃	c68－55	1.6×0.7×0.2	0.2	〃
44	〃	b71－90	1.8×0.7×0.2	0.2	〃
45	〃	c68－68	1.7×0.8×0.2	0.2	〃

番号	名称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
46	石鏃	b70－79	2.2×0.8×0.2	0.4	Obs.
47	〃	c68－49	2.1×0.9×0.2	0.3	〃
48	〃	c68－24	1.8×0.8×0.2	0.2	〃
49	〃	b71－91	1.9×0.8×0.2	0.3	〃
50	〃	c68－36	2.1×0.9 ×0.2	0.3	〃
51	〃	d68－44	2.2×1.1×0.3	0.5	〃
52	〃	c68－66	(2.0)×1.0×0.2	(0.3)	〃
53	〃	c68－35	(2.1)×1.0×0.2	(0.4)	〃
54	〃	f71－01	2.7×1.0×0.2	0.5	〃
55	〃	d70－08	(2.2)×1.1×0.3	(0.5)	〃
56	〃	b70－49	3.0×1.6×0.4	1.9	Sh.
57	〃	b70－22	2.7×1.6×0.2	0.7	〃
58	〃	b70－98	2.5×1.4×0.2	0.6	Obs.
59	〃	a70－14	2.3×1.3×0.3	0.7	〃
60	〃	a70－22	2.4×1.4×0.3	0.8	〃
61	〃	c68－35	2.5×1.5×0.3	0.8	〃
62	〃	b70－68	2.7×1.7×0.2	0.8	〃
63	〃	a70－27	2.5×1.9×0.3	1.1	〃
64	〃	b70－49	2.7×1.7×0.2	1.0	〃
65	〃	b70－69	2.5×1.8×0.2	0.7	〃
66	〃	b70－43	2.4×1.8×0.3	1.0	〃
67	〃	b70－48	(1.8)×1.8×0.2	(0.6)	〃
68	〃	c68－34	2.0×1.6×0.2	0.6	〃
69	〃	b70－44	1.9×1.6×0.4	0.9	〃
70	〃	d70－18	(2.0)×1.7×0.3	(0.8)	〃
71	〃	e70－79	(1.7)×1.7×0.2	(0.4)	〃
72	〃	c68－98	3.2×1.4×0.4	1.5	Sh.
73	〃	a71－10	1.9×1.4×0.2	0.4	Obs.
74	〃	c68－59	1.8×1.3×0.3	0.4	〃
75	〃	a70－21	2.0×1.3×0.2	0.5	〃
76	〃	c68－36	1.6×1.2×0.2	0.3	〃
77	〃	b71－70	2.4×1.3×0.4	1.2	〃
78	〃	c68－46	2.1×1.2×0.3	0.7	〃
79	〃	b71－90	(2.0)×1.4×0.6	(1.0)	〃
80	〃	c68－67	1.6×0.7×0.2	0.2	〃
81	〃	a70－15	2.6×1.3×0.4	0.9	〃
82	〃	a70－27	2.4×1.5×0.3	0.9	〃
83	〃	f71－30	2.8×1.6×0.3	1.0	〃
84	〃	a70－23	2.4×1.3×0.4	0.9	〃
85	〃	b70－79	2.6×1.1×0.3	0.8	〃
86	〃	b70－46	3.0×1.1×0.3	0.8	〃
87	〃	a70－04	(2.6)×1.4×0.3	(0.7)	〃
88	〃	f71－80	2.3×1.1×0.4	0.6	〃
89	〃	b71－81	2.6×1.3×0.2	0.6	〃
90	〃	a70－17	2.8×1.4×0.5	1.2	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
91	石　鏃	f 71−61	(2.0)×0.9×0.4	(0.4)	Obs.
92	〃	a 70−17	2.4×1.4×0.3	0.7	〃
93	〃	c 68−34	(2.1)×1.4×0.4	(0.8)	Sh.
94	〃	b 70−63	2.3×1.3×0.4	0.8	Obs.
95	〃	b 70−94	2.2×1.2×0.3	0.7	〃
96	〃	b 70−44	(2.1)×1.3×0.3	(0.6)	〃
97	〃	f 71−11	(2.7)×1.6×0.5	(1.6)	〃
98	〃	b 70−23	2.7×(1.4)×0.3	(0.9)	〃
99	〃	b 70−27	3.0×1.4×0.4	1.0	〃
100	〃	d 71−61	(3.6)×1.6×0.4	(1.3)	〃
101	〃	b 70−54	3.6×1.6×0.4	1.6	〃
102	〃	b 71−70	(2.7)×1.8×0.5	(1.8)	Sh.
103	石槍またはナイフ	c 68−57	5.0×1.7×0.5	3.1	Obs.
104	〃	f 71−41	6.4×2.4×0.6	7.6	〃
105	〃	d 71−00	(6.3)×(3.1)×1.1	(20.2)	〃
106	〃	d 71−11	6.1×2.9×0.9	13.6	〃
107	〃	c 68−39	(4.5)×(3.4)×0.6	(9.3)	〃
108	〃	c 68−39	(2.4)×(1.9)×0.4	(2.0)	〃
109	〃	c 68−49	(5.0)×2.6×0.7	(6.3)	〃
110	〃	c 68−39	5.9×2.7×0.9	9.0	〃
111	〃	c 68−46	(4.0)×2.0×0.6	(4.4)	〃
112	〃	c 68−87	(3.0)×(2.3)×0.6	(2.8)	〃
113	〃	c 68−44	(3.3)×(2.7)×0.9	(8.4)	Obs.
114	〃	f 71−20	(3.5)×3.4×1.0	(9.8)	〃
115	石　錐	c 68−37	1.7×0.5×0.2	0.2	Sh.
116	〃	c 68−38	(2.0)×(0.9)×(0.4)	(0.6)	Obs.
117	〃	c 68−57	(2.5)×(0.9)×0.5	(0.8)	〃
118	〃	c 68−29	2.5×0.9×0.4	0.9	Sh.
119	〃	c 68−56	2.9×1.1×0.6	1.5	〃
120	〃	c 68−39	2.8×1.1×0.5	1.8	〃
121	〃	c 68−28	(3.1)×1.0×0.5	(1.4)	Obs.
122	〃	c 68−27	3.7×1.1×0.9	3.2	〃
123	〃	c 68−29	4.5×1.4×0.8	5.7	Sh.
124	〃	c 68−36	(3.8)×1.5×0.8	(3.5)	Obs.
125	〃	c 68−48	(5.1)×1.5×0.9	(7.5)	Sh.
126	〃	c 68−38	5.6×1.8×0.9	7.5	Obs.
127	〃	c 68−67	4.0×0.9×0.5	2.8	Sh.
128	〃	c 68−66	3.2×1.6×0.7	2.9	〃
129	〃	c 68−17	3.8×1.0×0.5	2.1	〃
130	〃	c 68−36	4.5×0.8×0.3	1.1	Qua.
131	〃	c 68−39	3.9×1.3×0.4	2.2	Obs.
132	〃	c 68−27	4.3×2.0×1.0	6.6	〃
133	〃	c 68−57	(3.7)×1.6×1.0	(4.6)	〃
134	〃	c 68−78	2.4×1.9×1.0	4.4	Sh.
135	〃	c 68−67	5.9×2.7×0.8	10.4	Obs.
136	〃	c 68−37	5.5×2.9×0.7	9.8	〃
137	〃	c 68−66	(4.7)×3.6×1.4	(18.3)	〃
138	〃	c 68−67	3.9×1.6×0.9	3.4	〃
139	〃	c 68−77	4.1×2.0×1.4	7.1	〃
140	〃	c 68−66	3.4×1.6×0.9	4.4	Sh.
141	〃	c 68−48	4.2×2.1×1.0	4.6	Obs.
142	〃	c 68−57	3.7×3.2×0.8	6.6	〃
143	〃	c 68−49	(3.9)×2.7×0.9	(6.8)	〃
144	〃	c 68−25	(4.1)×2.7×1.1	(6.4)	〃
145	〃	c 68−66	4.7×2.9×0.5	5.2	〃
146	〃	c 69−88	4.3×2.2×1.1	6.2	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
147	石　錐	c 68−66	3.3×1.7×0.5	2.4	Obs.
148	〃	c 68−39	(2.7)×(1.6)×(0.5)	((1.4)	Sh.
149	〃	c 68−66	3.0×1.5×0.5	1.2	Obs.
150	〃	c 68−46	3.2×1.4×0.6	1.9	〃
151	〃	c 68−67	(1.8)×1.6×0.5	(1.1)	Obs.
152	〃	c 68−27	(3.7)×2.9×0.6	(2.8)	〃
153	つまみ付ナイフ	c 68−57	7.2×3.9×0.6	19.4	Sh.
154	〃	c 68−49	7.0×2.9× -8	16.4	〃
155	〃	c 68−29	6.4×2.2×0.7	3.9	〃
156	〃	c 68−56	7.0×2.3×0.7	10.4	〃
157	〃	d 71−80	7.9×3.1×0.6	15.5	〃
158	〃	c 68−69	8.3×3.8×0.5	14.6	〃
159	〃	c 68−34	10.4×3.2×0.6	22.8	〃
160	〃	b 71−50	(11.0)×3.7×0.7	(28.4)	〃
161	〃	c 68−76	12.3×4.5×1.0	48.1	〃
162	〃	b 70−87	10.1×3.4×0.8	(21.0)	〃
163	〃	b 70−69	4.1×2.0×0.6	4.3	Qua.
164	〃	c 68−77	4.2×2.2×0.6	5.4	Sh.
165	〃	c 68−57	5.4×2.4×0.4	7.2	〃
166	〃	c 68−39	5.8×3.5×0.7	14.8	Qua.
167	〃	c 68−28	4.3×3.0×0.6	9.4	Sh.
168	〃	c 68−77	5.3×2.6×0.7	9.1	〃
169	〃	c 68−28	(5.3)×2.8×0.8	(11.8)	〃
170	〃	c 68−39	4.8×2.4×0.5	5.5	〃
171	〃	c 68−59	3.8×2.3×0.5	3.7	〃
172	〃	c 68−35	4.7×1.9×0.5	4.1	〃
173	〃	c 68−29	4.5×2.2×0.6	7.0	Qua.
174	〃	c 68−29	4.4×2.1×0.6	5.3	Sh.
175	〃	c 68−68	3.7×1.6×0.4	3.0	〃
176	〃	c 68−67	5.2×1.7×0.7	6.1	〃
177	〃	c 68−56	5.2×1.9×0.7	7.4	Obs.
178	〃	c 68−66	5.3×2.2×0.6	6.9	Sh.
179	〃	c 68−37	5.8×2.4×0.9	9.4	Aga-Sh.
180	〃	c 68−48	4.0×2.2×1.0	6.9	Obs.
181	〃	c 68−59	6.7×2.5×1.0	13.3	Sh.
182	〃	c 68−55	7.0×2.0×0.6	8.5	〃
183	〃	b 70−77	(8.1)×2.1×0.7	(10.9)	Obs.
184	〃	f 71−00	7.8×2.5×0.7	14.0	Sh.
185	〃	c 68−77	5.5×2.2×0.7	8.6	Qua.
186	〃	c 68−79	3.9×2.1×0.6	5.1	Sh.
187	〃	c 68−39	4.7×1.9×0.5	4.8	〃
188	〃	c 68−48	4.6×2.9×0.6	6.2	Obs.
189	〃	c 68−49	4.0×1.8×0.5	4.0	Sh.
190	〃	c 68−98	5.2×2.3×0.8	9.7	Obs.
191	〃	c 68−49	(5.5)×2.0×0.5	6.5	〃
192	〃	c 68−27	6.7×1.9×0.9	8.8	〃
193	〃	c 68−56	2.7×2.3×0.6	2.8	〃
194	〃	c 68−56	3.0×2.2×0.4	2.8	Sh.
195	〃	c 68−66	3.9×1.4×0.4	2.6	〃
196	〃	c 68−48	3.3×1.0×0.5	1.6	〃
197	〃	c 68−88	3.4×1.1×0.6	2.2	〃
198	〃	c 68−77	3.9×1.4×0.5	2.7	〃
199	〃	c 68−48	3.9×1.4×0.9	5.4	Obs.
200	〃	c 68−48	2.3×1.9×0.7	2.1	〃
201	〃	c 68−48	3.3×1.9×0.5	3.5	〃
202	〃	c 68−48	2.9×1.7×0.5	1.8	〃

(3)

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
203	スクレイパー	c 68−77	2.5×1.7×0.7	2.9	Obs.
204	〃	c 68−45	2.4×1.8×0.5	3.0	Qua.
205	〃	c 68−57	2.6×1.6×0.6	2.8	Sh.
206	〃	c 68−39	2.5×1.9×0.4	2.6	〃
207	〃	c 68−28	3.2×1.9×0.6	4.3	〃
208	〃	c 68−36	3.2×1.8×0.5	3.1	Obs.
209	〃	c 68−46	2.6×2.1×0.7	3.8	Sh.
210	〃	c 68−36	3.2×2.1×0.5	3.8	〃
211	〃	c 68−47	2.4×2.2×0.5	3.0	〃
212	〃	c 68−76	3.9×1.9×0.7	6.0	Obs.
213	〃	c 68−39	3.8×2.6×0.9	10.2	Sh.
214	〃	c 68−48	4.1×2.5×0.8	7.2	Obs.
215	〃	c 68−39	5.5×3.2×1.0	18.6	Sh.
216	〃	c 68−68	5.1×2.6×0.8	12.7	〃
217	〃	c 68−88	(2.8)×3.4×0.8	(8.8)	Qua.
218	〃	c 68−29	(5.2)×4.0×1.4	(31.8)	Sh
219	〃	c 68−66	6.6×5.2×0.9	38.8	〃
220	〃	c 68−47	2.9×2.8×0.7	3.7	Obs.
221	〃	c 68−57	2.2×2.5×0.5	2.2	〃
222	〃	c 68−46	3.0×3.0×0.9	4.1	〃
223	〃	c 68−77	3.6×2.8×1.4	4.0	〃
224	〃	c 68−38	3.7×2.2×0.7	4.2	〃
225	〃	c 68−38	3.4×2.0×0.7	3.6	〃
226	〃	c 68−36	3.3×2.4×0.8	5.9	〃
227	〃	c 68−47	4.1×2.2×0.9	9.2	〃
228	〃	c 68−18	4.1×2.6×0.7	10.5	〃
229	〃	c 68−39	4.2×4.1×1.6	23.7	〃
230	〃	c 68−28	3.3×2.8×1.0	6.7	〃
231	〃	c 68−28	3.1×2.6×0.6	4.9	〃
232	〃	c 68−49	2.6×2.6×0.5	3.2	〃
233	〃	c 68−36	3.0×3.2×0.7	6.7	〃
234	〃	c 68−66	3.1×2.9×1.2	9.9	〃
235	〃	c 68−36	2.6×2.5×1.2	5.2	〃
236	〃	c 68−56	3.8×3.5×1.4	18.7	〃
237	〃	c 68−39	3.2×4.0×1.1	12.4	〃
238	〃	c 68−39	4.0×3.9×1.3	14.9	〃
239	〃	c 68−45	4.8×4.2×0.9	15.9	〃
240	〃	c 68−46	3.6×2.8×1.0	9.1	〃
241	〃	c 68−78	3.6×2.6×1.0	8.5	〃
242	〃	c 68−56	3.7×2.7×1.2	12.2	〃
243	〃	c 68−56	5.5×2.7×0.9	14.0	〃
244	〃	c 68−66	5.1×2.7×1.2	15.4	〃
245	〃	c 68−47	5.7×2.7×1.0	14.0	〃
246	〃	c 68−24	3.8×2.8×1.0	10.0	〃
247	〃	c 68−56	4.5×3.3×0.9	14.0	〃
248	〃	c 68−45	4.7×2.6×0.7	8.8	〃
249	〃	c 68−36	3.8×2.3×1.0	6.8	〃
250	〃	c 68−56	4.0×5.7×1.2	31.7	〃
251	〃	c 68−36	2.9×2.0×0.6	3.8	〃
252	〃	c 68−47	2.9×2.4×0.7	4.2	〃
253	〃	c 68−46	4.4×2.8×0.9	10.9	〃
254	〃	c 68−23	3.4×2.9×0.7	9.3	〃
255	〃	c 68−69	4.3×2.6×1.6	17.2	Qua.
256	〃	c 68−46	4.9×2.8×1.2	11.2	Obs.
257	〃	c 68−27	2.2×4.4×1.0	10.1	Sh.
258	〃	c 68−24	2.5×5.6×1.2	12.4	Obs.

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
259	スクレイパー	c 68−66	5.7×2.3×0.7	8.6	Sh.
260	〃	c 68−56	4.4×4.0×1.0	17.1	Obs.
261	〃	c 68−35	3.6×2.3×0.5	3.3	Qua.
262	〃	c 68−36	3.7×2.7×0.8	7.5	Obs.
263	〃	c 68−46	4.2×2.9×0.6	6.6	〃
264	〃	c 68−67	6.4×1.5×1.0	7.2	〃
265	〃	c 68−87	7.2×4.9×1.4	42.6	〃
266	〃	c 68−49	11.2×2.2×1.1	25.6	Sh.
267	〃	c 68−23	3.3×1.5×0.5	25.7	Obs.
268	〃	f 71−01	2.1×1.9×0.6	2.1	〃
269	〃	a 70−15	3.3×2.5×0.9	2.0	〃
270	〃	a 70−15	3.6×3.0×1.1	6.8	〃
271	〃	b 70−49	4.6×3.6×0.8	6.0	〃
272	石　斧	c 68−69	3.6×1.2×0.3	7.4	Ser.
273	〃	c 68−17	6.1×3.0×0.7	1.5	Gr-Mud.
274	〃	c 68−38	6.0×3.3×0.8	22.8	Ser.
275	〃	c 68−38	6.7×4.0×1.2	24.8	Gr-Mud.
276	〃	c 68−47	4.7×4.5×1.2	61.5	Ser.
277	〃	c 68−87	(6.6)×4.4×1.2	39.0	〃
278	〃	c 68−27	(7.0)×5.8×1.7	(65.4)	〃
279	〃	b 70−69	10.5×7.3×2.0	(110)	〃
280	〃	c 68−39	14.2×5.3×1.5	261.8	Gr-Mud.
281	〃	d 71−01	12.6×4.5×1.7	222.8	〃
282	〃	c 68−36	10.5×4.9×1.3	151.9	〃
283	〃	c 68−47	9.5×4.2×1.3	127.7	Ser
284	〃	f 71−30	10.0×5.1×2.2	(80.6)	Gr-Mud.
285	〃	c 68−23	10.1×5.6×3.7	158.4	〃
286	〃	c 68−45	(9.9)×5.2×1.3	350.0	Ser.
287	〃	c 68−27	(7.4)×5.8×1.6	(101.3)	〃
288	〃	c 68−79	(6.3)×4.0×1.1	(90.4)	〃
289	〃	c 68−35	(5.2)×5.1×1.2	(37.9)	Gr-Mud.
290	〃	c 68−25	(5.3)×5.6×1.4	(44.2)	Ser.
291	〃	c 68−23	(5.6)×4.6×1.3	(59.6)	〃
292	〃	d 70−39	(4.9)×5.5×1.4	(51.4)	Gr-Mud.
293	〃	c 68−55	(4.9)×6.7×2.2	(70.5)	Ser.
294	〃	c 68−56	(4.6)×6.0×1.6	(85.9)	〃
295	〃	c 68−79	(6.5)×4.3×1.3	(61.3)	〃
296	〃	c 68−45	(8.6)×5.1×1.6	(50.6)	〃
297	〃	c 68−34	(7.3)×5.6×1.6	(91.6)	〃
298	〃	c 68−39	(7.7)×4.0×1.0	(91.0)	Gr-Mud.
299	〃	c 68−34	11.5−4.3×1.7	(41.4)	〃
300	〃	c 68−79	(13.0)×5.6×3.3	142.6	〃
301	たたき石	c 68−39	(10.6)×3.7×2.7	(290.4)	Sa.
302	〃	c 68−47	9.9×2.5×2.0	(190)	〃
303	〃	c 68−34	11.2×5.5×2.5	81.6	〃
304	〃	c 68−67	9.9×5.6×4.1	220	〃
305	〃	c 68−44	12.5×6.0×2.2	307.1	Gni?
306	〃	c 68−56	13.2×7.2×2.4	265.4	〃
307	〃	d 70−37	12.7×3.8×2.3	399.0	Sa.
308	〃	c 68−47	13.3×8.8×3.0	360.0	Gni?
309	〃	b 71−30	13.8×8.6×2.6	625.0	Sa.
310	〃	c 68−49	14.5×8.2×3.3	550.0	〃
311	〃	c 68−39	13.1×10.1×4.8	535.0	〃
312	〃	b 71−70	8.2×6.8×2.6	1045.0	〃
313	〃	c 68−48	9.7×9.4×3.8	515.0	And.
314	〃	c 68−27	9.8×9.7×3.2	467.8	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
315	すり石	c 68−48	11.7×10.7×4.2	820.0	And.
316	〃	c 68−55	9.4×10.7×4.7	710.0	〃
317	〃	c 68−25	7.2×9.6×3.3	325.0	Sa.
318	〃	c 68−87	6.5×13.4×3.3	460.0	Gni.
319	〃	c 68−79	6.5×10.0×3.7	300.0	And.
320	〃	b 70−86	6.6×14.5×3.8	500.0	〃
321	〃	c 68−66	16.6×15.2×4.6	755.0	〃
322	〃	c 68−35	6.3×11.0×4.0	505.0	Gr-Mud.
323	〃	c 68−39	8.0×14.6×4.4	590.0	Sa.
324	〃	c 68−47	8.6×14.1×6.5	790.0	And.
325	〃	b 70−76	9.2×16.7×5.8	1,182	〃
326	〃	c 68−46	10.5×17.6×6.5	1,650	Gni.
327	〃	c 68−47	8.2×16.3×6.0	1,170	Sa.
328	〃	c 68−39	7.7×19.1×4.6	980.0	And.
329	〃	c 68−46	10.3×16.6×8.5	1,930	〃
330	〃	d 70−77	11.8×(13.9)×4.7	1,320	Sa.
331	北海道式石冠	c 68−56	(8.2)×(3.5)×4.0	(239.0)	Pro.
332	〃	c 68−38	8.3×(7.4)×5.7	(400.0)	〃
333	砥　石	c 68−57	18.3×13.8×5.4	1,730.0	Sa.
334	〃	c 68−44	17.0×11.1×8.1	1,915.0	〃
335	〃	c 68−25	34.5×15.1×6.5	5,500.0	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
336	石　鋸	c 68−34	6.8×(9.0)×2.5	(150.0)	Tu.
337	〃	c 68−39	(6.1)×8.0×3.0	(153.0)	〃
338	石　皿	c 68−56	23.0×17.9×18.1	5,000.0	And.
339	〃	d 70−68	9.9×9.4×3.0	515.0	〃
340	〃	c 68−44	10.6×17.3×5.6	1,310.0	〃
341	石　錘	c 68−29	6.1×5.3×0.9	58.2	Gni.
342	〃	d 71−70	8.8×5.7×1.7	147.4	Gni?
343	〃	c 68−89	4.2×8.4×3.0	281.8	Sa.
344	〃	c 68−89	10.8×8.9×2.2	314.8	〃
345	〃	d 71−00	10.6×9.3×2.1	351.2	And.
346	〃	c 68−39	10.7×10.6×2.3	447.0	Gni?
347	〃	c 68−48	14.6×10.3×2.4	589.6	Gr-Mud.
348	〃	c 68−98	9.3×13.5×4.0	580.0	Sa.
349	土製品	c 68−55	4.9×4.8×0.9	22.2	—
350	〃	c 68−79	3.8×3.4×0.8	11.4	—
351	〃	c 68−88	(3.7)×(3.1)×0.7	(9.4)	—
352	石製品	c 68−57	1.9×0.9×0.9	1.4	Per.
353	〃	c 68−49	4.8×1.9×0.9	12.1	〃
354	〃	c 68−29	2.3×1.0×0.3	0.4	Obs.
355	〃	c 68−45	3.8×1.1×0.4	1.4	〃
356	〃	c 68−48	2.1×(6.6)×1.0	(8.6)	〃

表Ⅲ−15　遺構一覧

(1)

遺構番号	位　置	平面形	規模（m）			備　考
			確認面	底　面	最大深	
H−18	c -68-48・49・58・59・68・69	不整円形	6.37 × 6.06	6.14 × 5.98	0.20	炉（焼土）1，盛土有
19	c -68-28・38		———	———	0.24	
20	c -68-88・98		(2.64)× 3.37	(2.42)× 3.16	0.65	杭 1
21	c -68-26・27・36・37		———	———	0.28	P−68と重復
22	c -68-33		(1.97)× 2.32	(1.87)× 2.27	0.46	
P−25	b -70-96	円　形	1.52 × 1.41	0.78 × 0.70	0.90	
26	b -70-96	円　形	1.46 × 1.37	1.10 × 1.00	0.74	
27	b -70-96・97	円　形	1.57 × 1.50	1.08 × 0.96	0.89	
28	b -71-80	円　形	1.19 × 1.10	0.79 × 0.68	0.66	
29	a -70-06, b -70-96	円　形	1.85 × 1.68	1.16 × 1.12	1.07	
30	a -70-07, b -70-97	円　形	1.48 × 1.40	0.82 × 0.77	1.04	
31	a -70-07・17	円　形	1.40 × 1.26	1.00 × 0.91	0.87	
32	a -70-17・18	円　形	1.58 × 1.46	0.76 × 0.72	1.09	
33	a -70-18	円　形	1.66 × 1.52	1.46 × 1.10	0.98	
34	a -70-19	円　形	1.58 × 1.56	1.18 × 1.16	0.96	
35	b -70-97・98	円　形	1.56 × 1.49	1.14 × 1.11	1.00	
36	a -70-07	円　形	1.38 × 1.11	0.82 × 0.74	0.90	
37	c -68-59・69	長円形	1.04 × 0.73	0.99 × 0.64	0.29	P−38と重復
38	c 68-59・69	楕円形	2.33 × 1.63	2.01 × 1.18	0.44	P−37と重復
39	c -68-39, c -69-30	円　形	0.78 × 0.72	0.45 × 0.42	0.30	
41	b -70-89	円　形	(1.01)×(0.90)	0.85 × 0.78	(0.38)	
42	c -68-19・29	円　形	1.90 × 1.64	1.48 × 1.41	0.35	
43	c -68-28	円　形	1.02 × 0.96	0.74 × 0.65	0.53	
44	c -68-18	楕円形	(1.05)× 0.78	(0.92)× 0.66	0.50	
45	c -68-46・47	円　形	1.91 × 1.79	1.48 × 1.33	0.49	
46	c -68-39	楕円形	1.24 × 1.01	0.85 × 0.66	0.34	
47	c -68-47・57	円　形	1.68 × 1.66	1.53 × 1.51	0.31	
48	c -68-56	楕円形	0.95 × 0.76	0.64 × 0.52	0.40	
49	c -68-57	円　形	1.41 × 1.27	0.97 × 0.76	0.35	
50	c -68-48	円　形	0.99 × 0.94	0.66 × 0.67	0.24	
51	c -68-56	楕円形	0.65 × 0.55	0.39 × 0.33	0.47	
52	c -68-36・46	円　形	0.64 × 0.64	0.50 × 0.50	0.24	P−59と重復
53	c -68-36	楕円形	0.82 × 0.71	0.44 × 0.41	0.36	
54	c -68-67	円　形	1.75 × 1.68	1.38 × 1.30	0.36	

(2)

遺構番号	位　　置	平面形	規　　模（m）			備　　考
			確認面	底　面	最大深	
55	c-68-35	楕円形	0.90×0.77	0.66×0.48	0.44	
56	c-68-48	円　形	1.88×1.73	1.35×0.83	0.93	
57	c-68-24・34	円　形	0.99×0.94	0.56×0.47	0.53	
58	c68-78	円　形	1.70×1.60	1.40×1.21	0.49	
59	c-68-36・46	楕円形	(1.16)×0.99	0.72×(0.62)	0.38	P－52と重復
60	c-68-47		(1.47)×1.07	(0.96)×0.59	0.25	
61	c-68-46	円　形	1.17×1.00	0.58×0.59	0.62	
62	c-68-45	円　形	0.66×0.62	0.54×0.46	0.42	
63	c-68-48	楕円形	0.82×0.72	0.49×0.41	0.32	
64	c-68-36	円　形	0.72×0.68	0.56×0.53	0.33	
65	c-68-45	円　形	0.70×0.70	0.49×0.43	0.36	
66	c-68-45・46	円　形	0.70×0.62	0.54×0.49	0.36	
67	c-68-36・46	円　形	0.51×0.48	0.34×0.37	0.09	
68	c-68-26	円　形	1.01×(0.71)	0.91×(0.34)	0.41	H－21と重復
69	c-68-56	楕円形	0.47×0.56	0.22×0.30	0.07	
70	c-68-36	円　形	0.31×0.25	0.10×0.16	0.42	
T－18	d-70-79・d-71-70	楕円形	2.41×1.29	1.21×0.43	1.73	杭穴2
19	d-71-60	楕円形	2.18×1.23	1.42×0.44	1.27	杭穴2
20	d-71-41・42・51・52	楕円形	2.10×1.30	1.64×0.50	1.54	杭穴2
21	d-71-00・d-70-09	溝　状	3.36×0.94	3.12×0.23	1.36	

Ⅳ　美々３遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

1　調査の概要

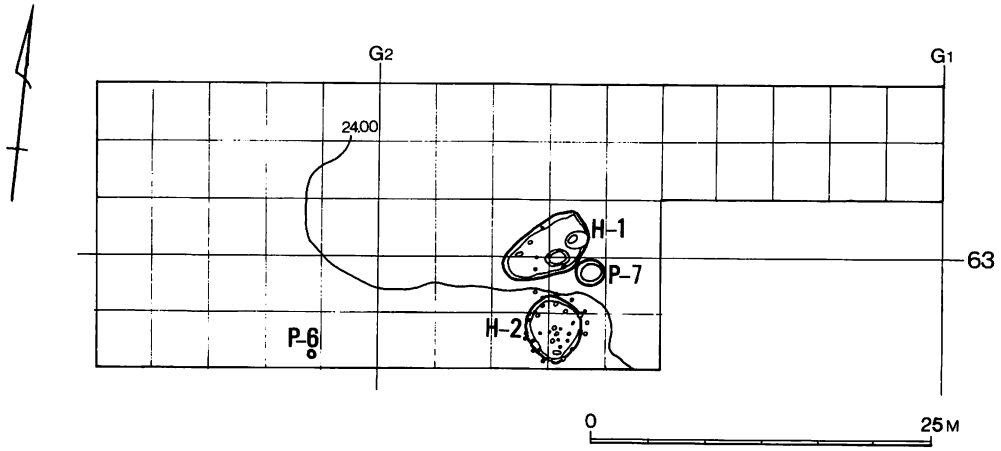
美々３遺跡は、美沢川左岸の台地及び斜面上に位置する。

Ⅱ黒層の調査は、遺跡のほぼ中央部にあたる標高約24ｍの台地上、1,500ｍについておこなった。ここは、昭和61年度調査地区の北側と昭和60年度調査の美々４遺跡の西側に隣接する部分である。

これら隣接地の調査から当該調査区についても縄文時代中期の北筒式期が主体の遺跡であることを想定し、その遺構・遺物の確認に努めた。

調査の結果、竪穴住居跡１軒・竪穴状遺構１基・土壙２個が検出された。これらの遺構は、形状や出土遺物から北筒式の時期か、それに近い時期に構築されたものと思われる。

遺物は、北筒式土器とそれに伴う石器等が多く出土している。石器等の中では、黒曜石・泥岩のフレイク・チップが多い。　　（佐藤和雄）



図Ⅳ－１　遺構位置図

2　遺構

(1)　住居跡

Ｈ－２（図Ⅳ－２・３、図版Ⅳ－２・３）

位　置　G_1－63－60・61・70・71　　**規　模**　5.90×4.64／5.02×4.32／0.50

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）

3　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）　　4　暗褐色（Ⅱ黒＜d_2）

5　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）　　6　橙色（Ⅱ黒≪d_2）

7　暗褐色（Ⅱ黒≫d_2）　　8　暗褐色（Ⅱ黒≪d_2）

特　徴　Ｈ－２は、調査区の南側、美沢川左岸の台地上に位置する。標高は、Ⅱ黒層上面で24ｍである。Ｔａ－ｃ火山灰を除去したⅡ黒層上面のＨ－１（竪穴状遺構）の南側に径1.50ｍ、深さ15㎝程の浅い落ち込みが検出された。Ｈ－１に比べ、窪みの大きさが小さいので、土壙を予想して調査した。調査は、Ｈ－１を調査する時に設定した３本の南北トレンチのうち、西寄りの１本を延長し、それと直交するトレンチを新たに設定して行なった。調査をすすめていくと土壙ではなく、住居跡とわかった。

遺構の覆土上面には、Ｈ－１の掘り上げ土と考えられる、Ｔａ－ｄ火山灰がⅡ黒層上面に拡がっていた。覆土は８層に分けられる。大きく分けると、Ⅱ黒層が主体で軟かい第１・第２層と、Ⅱ黒層に多量のＴａ－d_2がブロック状に混入し、堅い第４層～第７層の二つに分けられる。第８層は柱穴の覆土である。

遺物は、第１・２層からの出土は少なく、ほとんどの遺物は第２層より下位の層で出土した。特に第３層の上面では、遺物の面的な拡がりがみられた。

平面形態は楕円形の一方がすぼまった、卵形を呈する。床面はＴａ－d_2層を浅く掘り込んで構築されている。壁は床面から開きぎみに立ち上がる。部分的にＴａ－d_2層が残り、階段状になっている。床面からは、石囲炉、３個の付属ピット（Ｐ－１・２・３）と、68か所の大小の柱穴が検出された。

石囲炉は、住居跡のほぼ中央部で検出された。炉石は４個残っており、他に１か所、炉石の抜き取り痕が認められる。炉の形態は、炉石が４個しか残っていないので、掘り方から判断すると、長方形を呈する。炉の周辺に炭化物が拡がっている。北側より南側に拡がっており、セクションベルトを設定して調査したところ、炭化物層の下より２か所の炉の掘り方が検出された。掘り方の底面で、Ｔａ－d_2層が焼けて赤化した部分が認められた。土層では確認できなかったが、炉は南側から北側へ作り変えられたと考えられる。

Ｐ－１は、炉の南側で検出された。炉の周辺の炭化物を多く含んだ土が流れ込んでいて、図Ⅳ－４－14に示す土器がまとまって出土した。平面形態は楕円形で、深さは20㎝程と浅い。

Ｐ－２は、長楕円形を呈し、深さが15㎝程と浅い。位置的には、長軸線上に位置している。両端にピットが１つずつ（31・32）存在する。

Ｐ－３は卵形の先端部に位置する。両側には、住居跡の壁際に径・深さとも良く似たピット（60・61）が存在する。

柱穴には、内柱と考えられるものと外柱と考えられるものとがある。

内柱は、壁の周辺に沿うように位置していることから、住居跡を拡長している可能性も考えられる。住居跡の壁にかかっている柱穴と、住居跡の外に位置する柱穴（54～71）は、Ⅱ黒層上面では確認できず、その下のＴａ－d_2層上面で検出した。

外柱は、ほとんどが住居跡の中央に向かって傾斜している。径・深さともに内柱より大きい。外柱は、壁にある柱穴と、だいたい対になって存在している。

Ｐ－２とＰ－１の間には、径が５㎝程で深さが20～30㎝程の小ピット（35～40）がある。

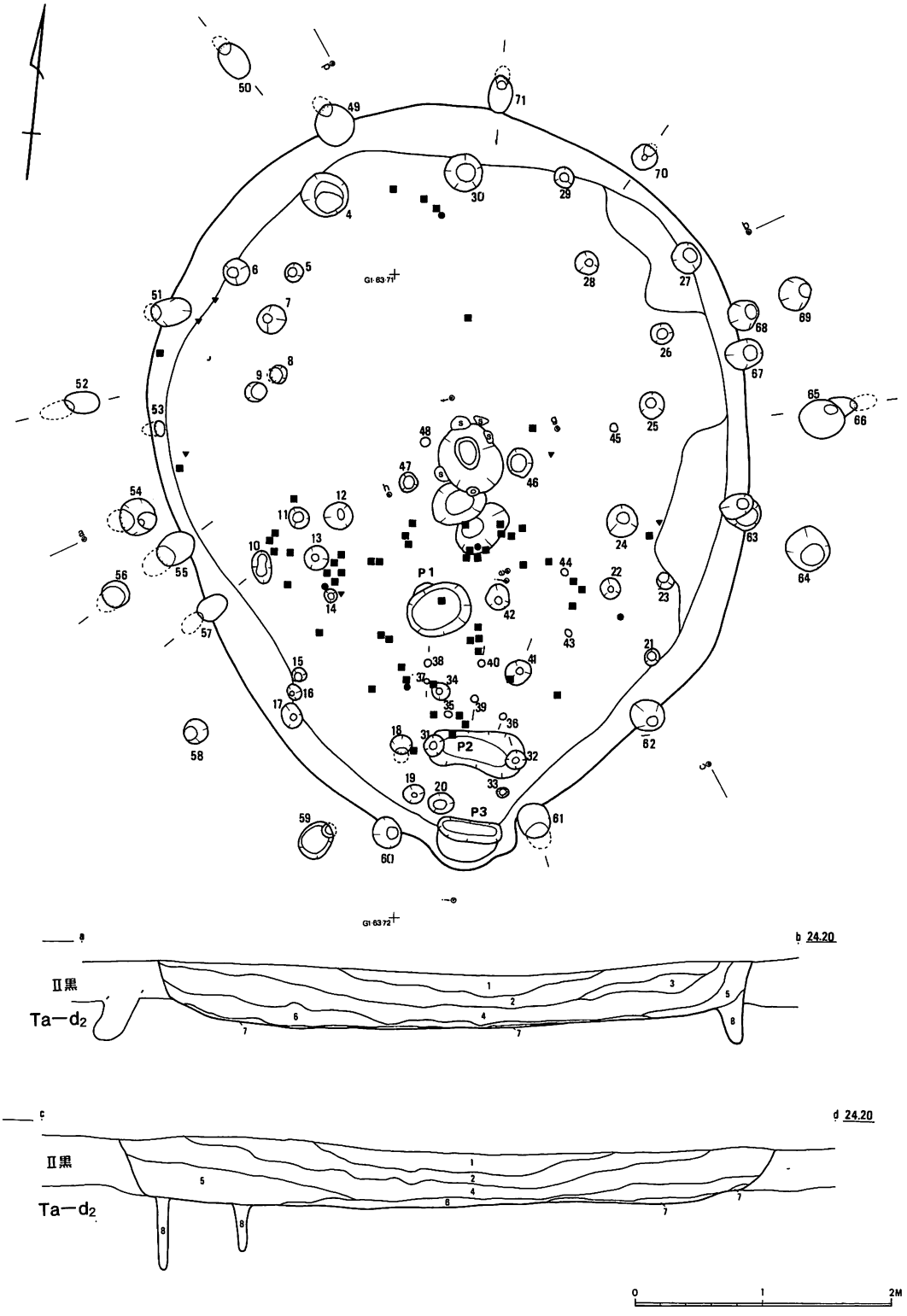
不規則に位置しているようであるが、住居跡内からは他に同様の小ピットはみられない。断面の形状は尖っている。

遺物は、住居跡の中央部より南側で多く出土した。Ⅲ群ｂ－３類土器が多く、床直上の遺物は図Ⅳ－４－14・図Ⅳ－５－24・34である。（越田雅司）

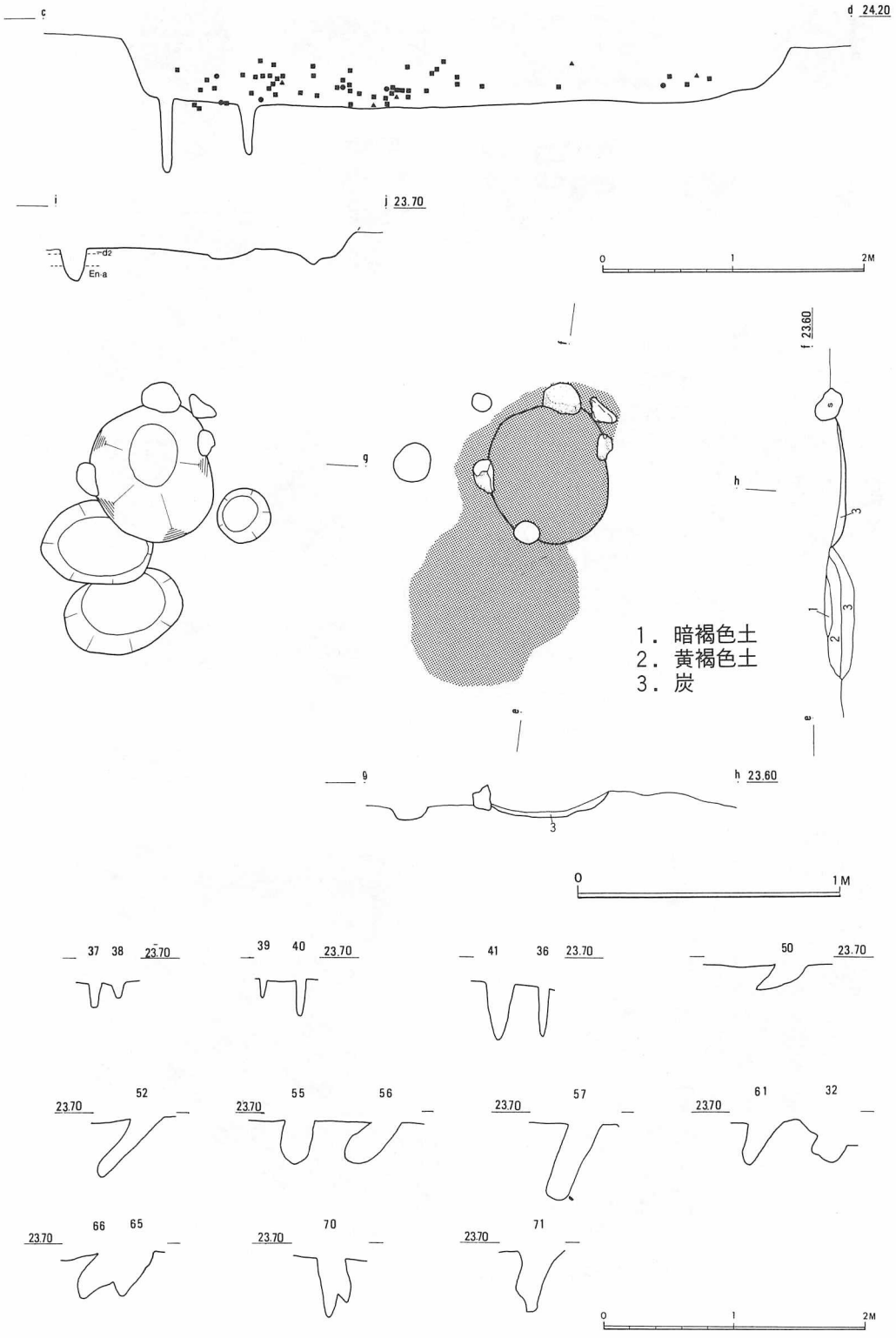
土　器（図Ⅳ－４～６）

１～48はⅢ群ｂ－３類、49・50はⅣ群ａ類の土器である。Ⅲ群ｂ－３類土器のうち１～41は北筒式、42～48はノダップⅡ式・煉瓦台式に関連する資料とみられる。

１・２は口縁の肥厚する土器で、口唇と口縁に押し引き文が施されている。ともに内面に縄文がある。２の円形文は小さい。３は口縁が三角形に肥厚するもので、押引き文がある。縄文は細かい。４・５は小片であるが、口縁に施文されているものである。６は口唇に押引き文のあるもので、強く外反している。７は口縁部に肥厚帯のあるもので、口唇に押引き文を施し、口縁に整った縄文がある。８は大形の深鉢形土器の口縁から体上半部にかけての破片で、口縁と、肥厚帯下縁に横位の押引き文をめぐらし、体部にＹ字状とそれをつなぐ横位の押引き文を施すものである。Ｐ－７にも同一個体の破片がある。９～13は口縁部に肥厚帯のあるもので、押引き文、刺突文が施されている。11の円形文は浅く、内面は平坦に調整されている。20は内面にも押引き文がみられる。13はＨ－１の資料６と同一個体である。14は細かい縄文の施されたもので、口唇は平坦に調整され縄文が施されている。口縁内面の縄文は器面調整によりなで消されている。15は粗い縄文の施されたもので、口縁は無文地に一列の刺突文が施されている。内面の剝落面に羽毛の痕痕跡かとみられるものがある。16は口唇が断面三角形に肥厚するもので、口縁の内面にも縄文が施されている。17は口縁が薄くなり、外反するもので、内面にも縄文が施されている。また、口縁の内面には成形の際についたとみられる爪の痕跡らしきものがある。18は、粗い縄文の施された口縁部の破片である。19は口縁に肥厚帯のないもので、口唇はなで調整され無文である。内面に竹管状工具によるかとみられる円形文が所々ついている。20は粗い縄文の施されたもので、同一個体の破片がＨ－１(2)や包含層から出土している。21～34は縄文の施された体部破片である。21には撚糸文がある。33と34は同一個体である。35は胎土に雲母を含む。38～41は底部の破片である。42は器面に条の横走気味の縄文を施すもので、口唇と内面はなで調整され無文である。胎土に海綿骨針を含んでいる。43は口縁部に半截竹管状工具による刺突文を施すもので、口唇にも縄文がある。44・45は薄手のもので、ともに浅く縄文が施されている。46は内面が磨かれたようになめらかになっている。器面には縄文部を囲む隆起帯がつけられている。47は胎土に火山ガラスと繊維を含み、内面の磨かれた土器で、包含層に同一個体の資料がある。48は器面に隆起帯のある土器で、隆起帯上には縦位に縄文が施されている。包含層に同一個体の資料がある。49、50は器面に縦位施文の縄文の施されているもので、ともに内面は磨かれている。49には胎土に海綿骨針が認められ、50には小円礫が含まれている。42～47はノダップⅡ式、48はは煉瓦台式、49・50は余市式に関連するものとみられる。（大沼忠春）



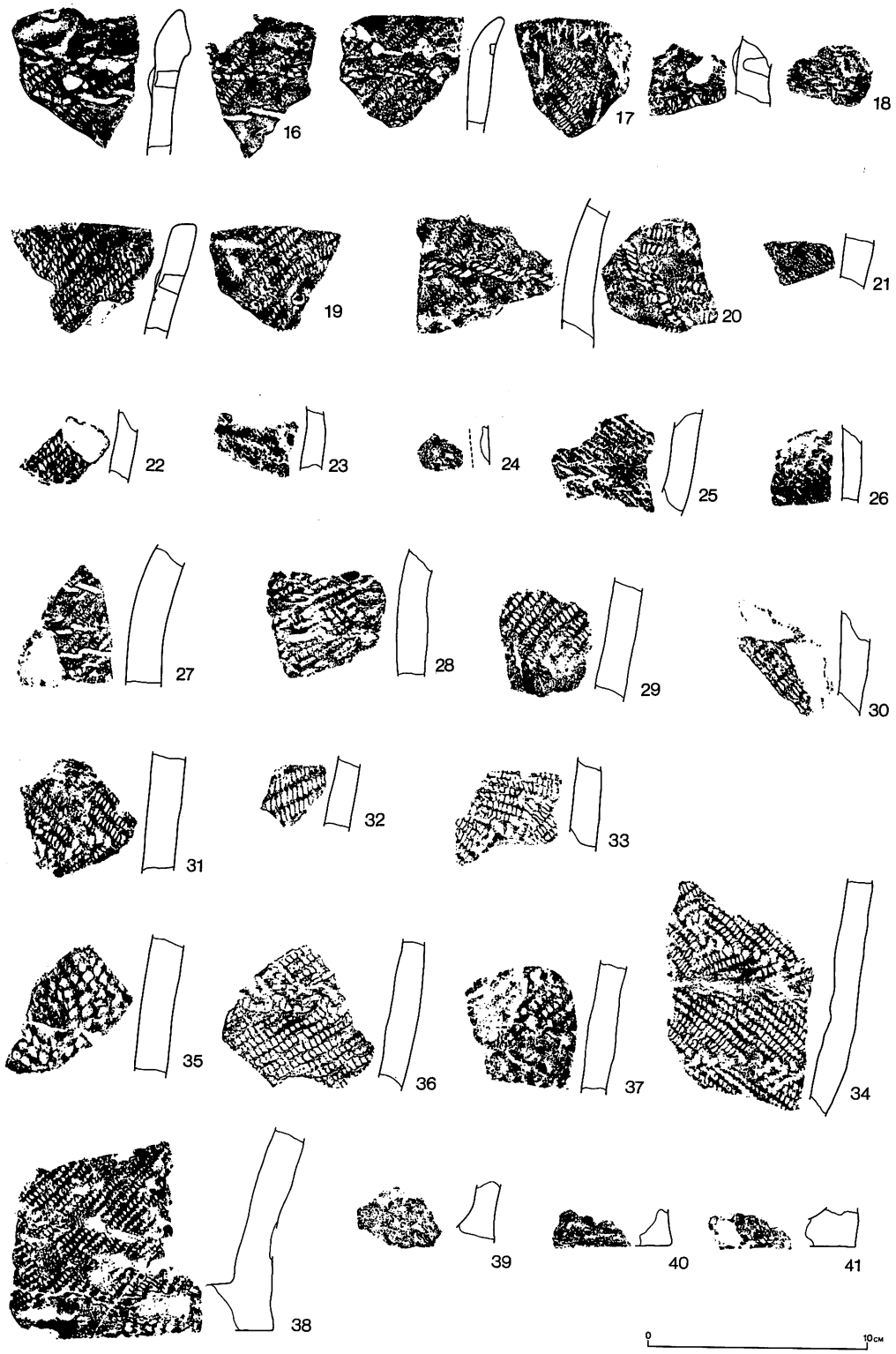
図Ⅳ－２　Ｈ－２(1)


c
d 24.20
i
j 23.70
d2
En-a
0 1 2M
f
f 23.60
g
h
1．暗褐色土
2．黄褐色土
3．炭
e
e
g
h 23.60
3
0 1M
37 38 23.70
39 40 23.70
41 36 23.70
50 23.70
23.70 52
23.70 55 56
23.70 57
23.70 61 32
23.70 66 65
23.70 70
23.70 71
0 1 2M

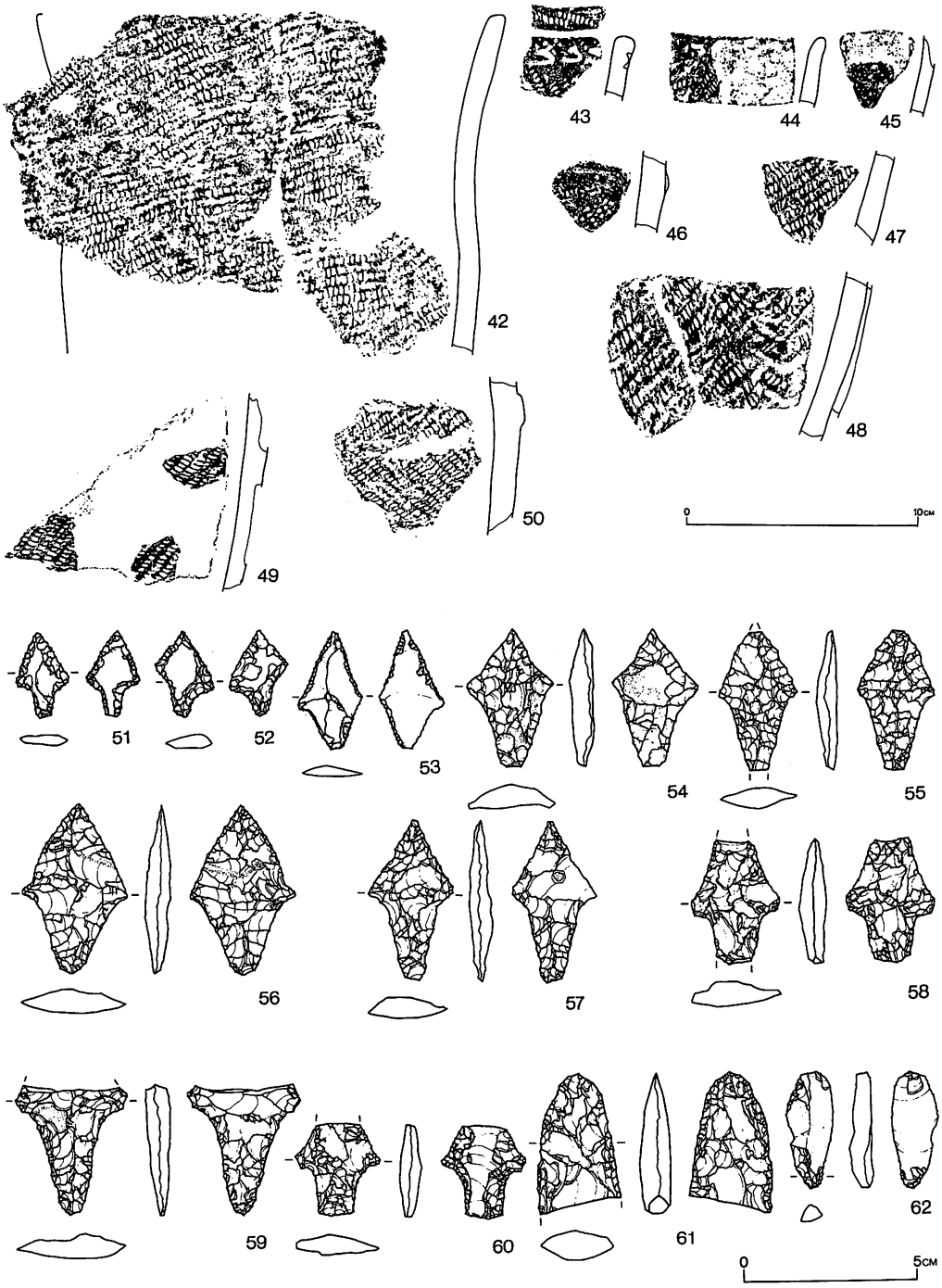
図Ⅳ－3　H－2(2)



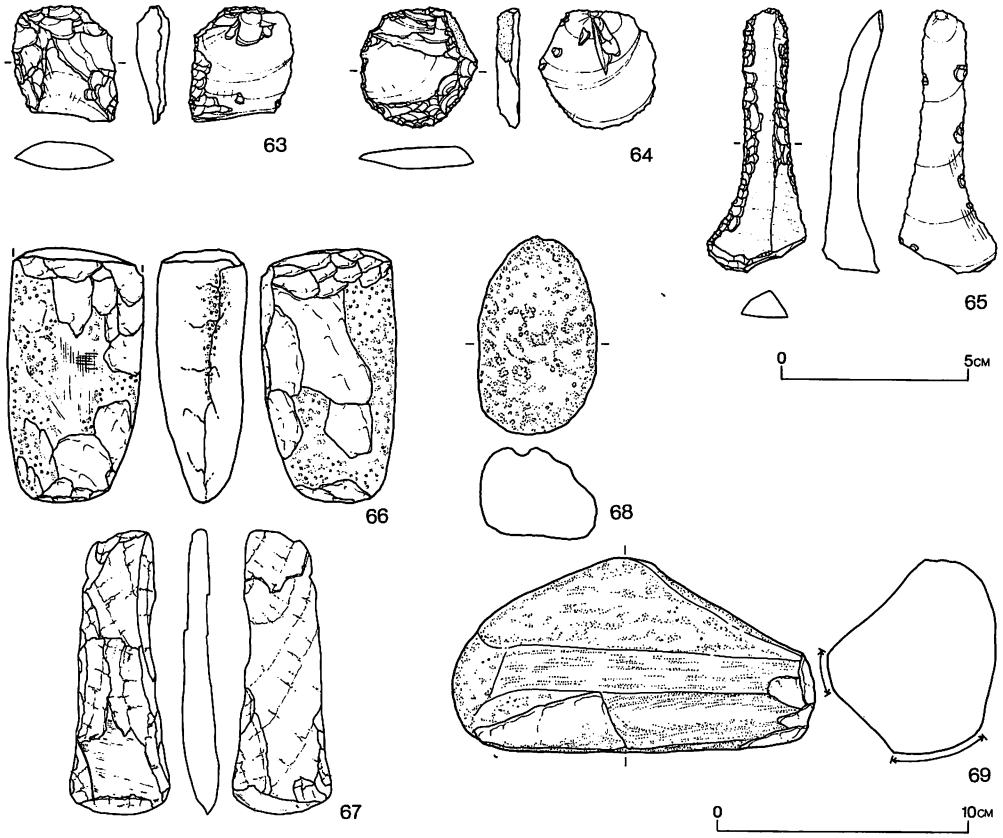
図Ⅳ－４　Ｈ－２出土の土器(1)



図Ⅳ－5　H－2出土の土器(2)



図Ⅳ－６　Ｈ－２出土の土器(3)・石器(1)



図Ⅳ－7　H－2出土の石器(2)

石　器（図Ⅳ－6・7）

51～53は有茎石鏃である。いずれも石鏃の側縁のみに細かな加工を施して、整形している。53は薄い縦長剝片を素材として、側縁・基部に微細な加工を施し、整形している。

54～61は石槍またはナイフ。54～56は最大幅が中位にある。57は、最大幅が中位より上位にあり、茎部はやや細身である。59は、茎部のみのものである。茎部は細く長めである。

62は石錐。角柱状の剝片を素材としており、先端部のみに調整を加えての刃部を作出している。

63～65はスクレイパー。いずれも片面加工である。63は裏面の側縁の一部に加工が施されている。64は自然面を一部に残し、剝片の周縁部に加工を施してある。65は縦長の剝片の両側縁に加工を施している。断面は三角形を呈する。礫皮を大きく残している。

66・67は石斧。66は緑色泥岩製で67は粘板岩製。いずれも敲打による整形後、66は側面を、67は刃部を研磨している。

68はたたき石。流紋岩を使用している。

69はすり石。住居址の炉石として使用されていた。使用面は2面ある。　（越田雅司）

(2) 竪穴状遺構

Ｈ－１（図Ⅳ－８、図版Ⅳ－6～10）

位　置　G_1－62－69・79　G_1－63－60・70　　**規　模**　8.15×4.65／7.54×4.16／0.40

土　層　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　　2　黒褐色（Ⅱ黒＞d_2）
3　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2塊）　　4　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）
5　黒褐色（Ⅱ黒＋d_2）　　6　褐色（d_2＞Ⅱ黒）

特　徴　Ｈ－１は、Ｈ－２・Ｐ－７に近接して位置する。Ｔａ－ｃ火山灰除去後、Ⅱ黒層上面に長軸3.5ｍ、短軸2.1ｍ、深さ30㎝程の窪みが検出された。重複した住居跡の可能性が考えられたので、長軸上に１本、短軸に３本のトレンチを設定した。平面形は不整楕円形を呈する。底面の状態は平坦ではない。部分的に浅い落ち込みがみられる。底面からは、炭化物・焼土は検出されなかった。また、ピットは７か所検出されたが、どれも浅く、柱穴とは考えがたい。積極的に住居跡といえる証在は得られなかったので、Ｈ番号はそのままで、竪穴状遺構として扱うことにした。

覆土は、Ⅱ黒を主体としており、全体に柔らかい。Ｈ－１の掘り上げ土と考えられるＴａ－d_2が、周辺のⅡ黒の上面に薄く拡がっていた。Ｈ－２の上面にも拡がっている。盛り土は全く認められなかった。

底面はＴａ－d_2層を浅く掘り込んで構築されている。凹凸がみられ、浅い落ち込みも２か所で確認できる。この落ち込みは深さがほとんどなく、ピットとは呼べない。底面より検出された７か所のピットの覆土は、いずれも明褐色でボソボソの土である。

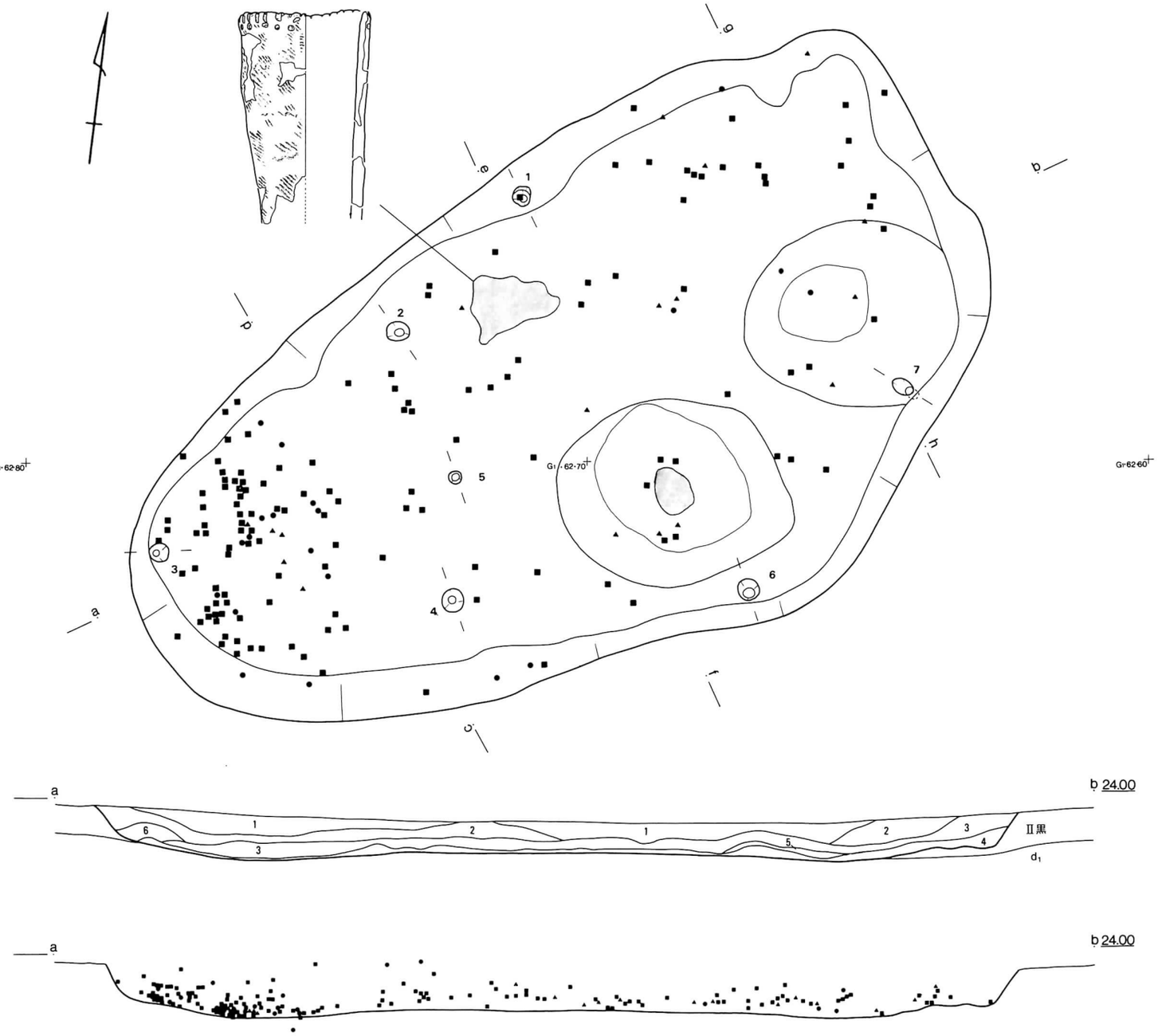
壁面は、はっきりとせず、Ｔａ－d_2層が部分的に残り、張り出したようになっている。東側より西側のほうがⅡ黒層の堆積は厚く、西側の壁は検出しにくかった。壁は、一様ではなく、急角度で立ち上がる部分や、緩やかに立ち上がる部分がある。

遺物は、遺構の西側に集中していた。出土した土器はⅢ群ｂ－３類土器である。特に細かい土器片が出土する２か所のまとまりがみられた。図Ⅳ－８の平面図中でスクリーントーンで示した部分である。土器は図版Ⅳ－９－19と20・21。細かく割れたというより、剝離に近い状態でまとまっていた。石器は、剝片が主体となっており、剝片石器の出土はなかった。礫石器も石斧の素材である緑色泥岩製の大形の剝片や、細かい剝片は出土したが、石斧や他の礫石器は出土していない。出土した土器片・剝片等は、覆土第３層下位から第４層に多く出土している。　（越田雅司）

土　器（図Ⅳ－９・10）

１～54はⅢ群ｂ－３類土器、55・56はⅣ群ａ類の土器である。Ⅲ群ｂ－３類土器のうち、１～47は北筒式土器、50～54はノダップⅡ式・煉瓦台式に関連する土器とみられる。

１・２は口縁に太い隆起帯の横環するもので、１にはこぶ状のたて長の突起がある。２は内面に縄文があり、Ｈ－２出土の資料⑳と同一個体に属する。器面が風化している。３は口縁の隆起部のみわずかに肥厚するもので、器面にはオオバコ回転文が施されている。口縁に円形


G1·62·80
G1·62·70
G1·62·60
a
b
c
d
e
f
g
h
1
2
3
4
5
6
7
24.00
23.60
Ⅱ黒
d1
土器の集中
0
1
2M

図Ⅳ－8　H－1

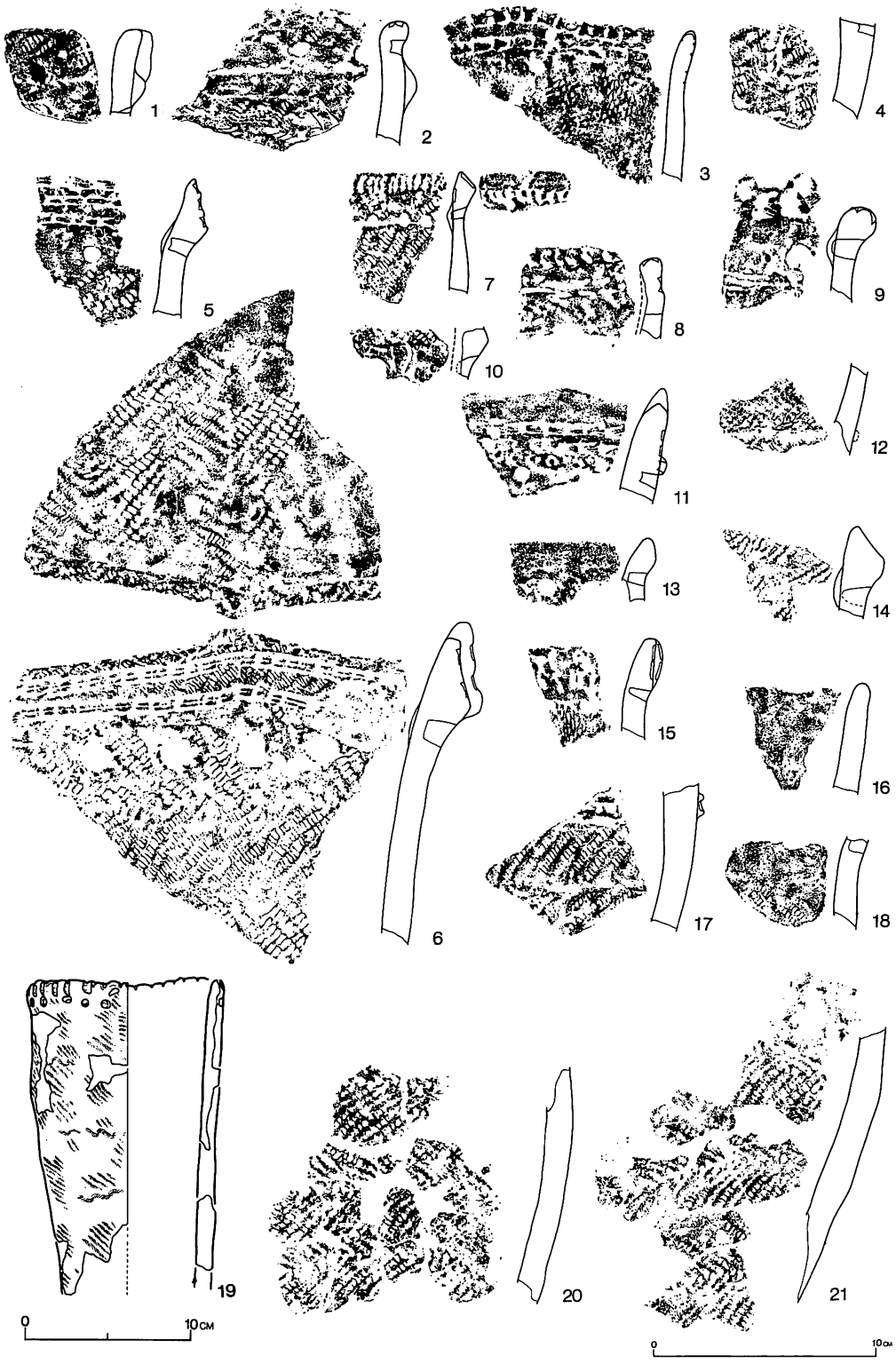
文が浅く施されているけれども、間隔は4㎝ほどである。口縁の隆起部内面にも施文されている。4は器面に半截竹管状工具による押引き文がある。円形文は内面に突瘤を形成していない。5～7は口縁に三角形の肥厚帯があり、押引き文、刺突文などで装飾されている。5は内面に施文がない。器面に赤色顔料の付着がみられる。6は口唇と内面に縄文が施されている。原体は結束第1種で、一方が0段多条のものである。7は口縁内面にも刺突文が施されている。8は口唇と口縁に刺突文を施すものである。9は口縁のふくらむもので、口唇上に深い刺突文が施されている。10は口縁部の肥厚帯の破片である。11は口唇が尖り気味のもので、小突起がある。器面には口縁部の押引き文の下縁に細い貼付帯が横環し、刺突文が加えられている。円形文は径が小さく、内面に突瘤を形成していない。この部分には縄文がない。12は、器面に細い貼付帯の剝れた痕跡がある。地に結束羽状縄文がある。13は包含層から出土し完形に復原された土器の口縁部破片で、口縁は無文である。14は縄文の施されたもので、断面三角形の肥厚帯がある。15は口縁の外反するもので、肥厚帯は三角形状を呈する。口唇に縄文があり、内面はなで調整されていて、円形文は小さく、突瘤を形成しない。16は無文の口縁部である。17は器面にていねいになでつけられた貼付帯のあるもので、貼付帯上には先端に丸味のある工具で押し引き文が施されている。18はやや薄手のもので、内面に突瘤がない。19は底部を欠く筒形の小形土器で、口縁に肥厚帯がなく、口唇と口縁に刺突文を施し、小さな円形文を加えている。器面には無節の縄文が認められる。20・21は同一個体、口縁部破片も存在するが、表面側がなく、口唇と内面は無文である。肥厚帯はあるらしい。結束のある羽状縄文が浅く施されている。22～45は胴部の小破片で、22には網目状撚糸文、24～45には縄文が施されている。23は無文である。46～49は底部である。50・51は同一個体の破片かとみられる。胎土に火山ガラスと小円礫を多く含む。口唇と内面はなで調整され、浅い圧痕の縄文が施されている。52・53は同一個体かとみられる。口縁部に無文部があり、体部に斜行縄文が施されている。54は体部に隆起帯のめぐらされている破片で、粗い斜行縄文が施されている。55・56は器面に縦位施文の縄文のみられるもので、55では貼付帯上に横位施文の縄文がみられる。55の原体はLR、56の原体はRLである。50～53はノダップⅡ式、54は煉瓦台式、55・56は余市式に属すとみられる。

（大沼忠春）

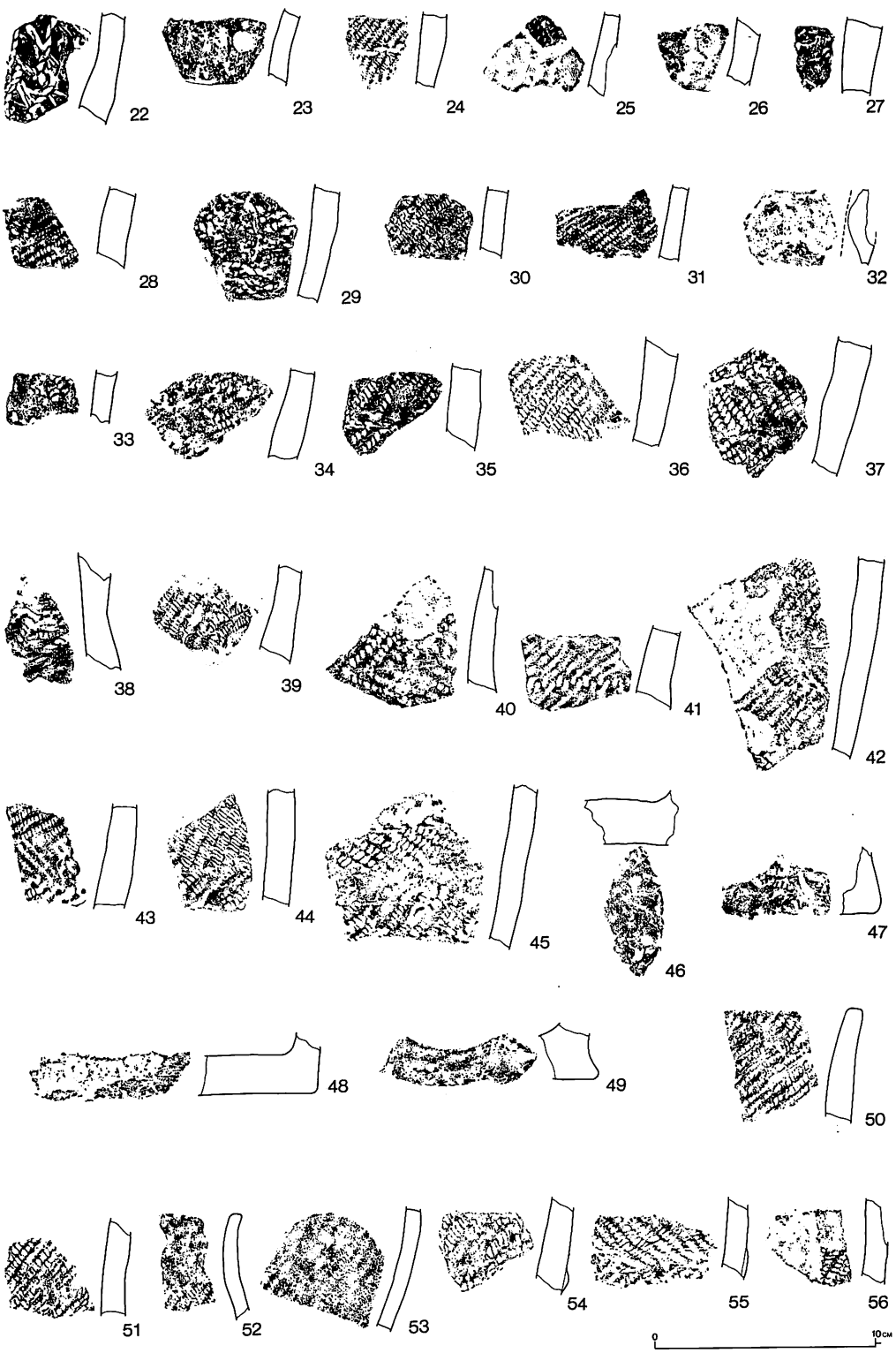
石　器

57～59は、加工痕のある剝片で、剝片の形状を大きく変えずに刃部を作り出している。57は、側縁に細かい加工を施している。58・59は、縦長剝片の両側縁に細加工を施している。60は、頁岩製の大形の剝片で、両側縁の一部に加工が施されている。61は、緑色泥岩製の厚みのある剝片である。62の石質は同じく緑色泥岩で、扁平な礫に敲打による調整を加えている。61・62はともに石斧の素材であろう。

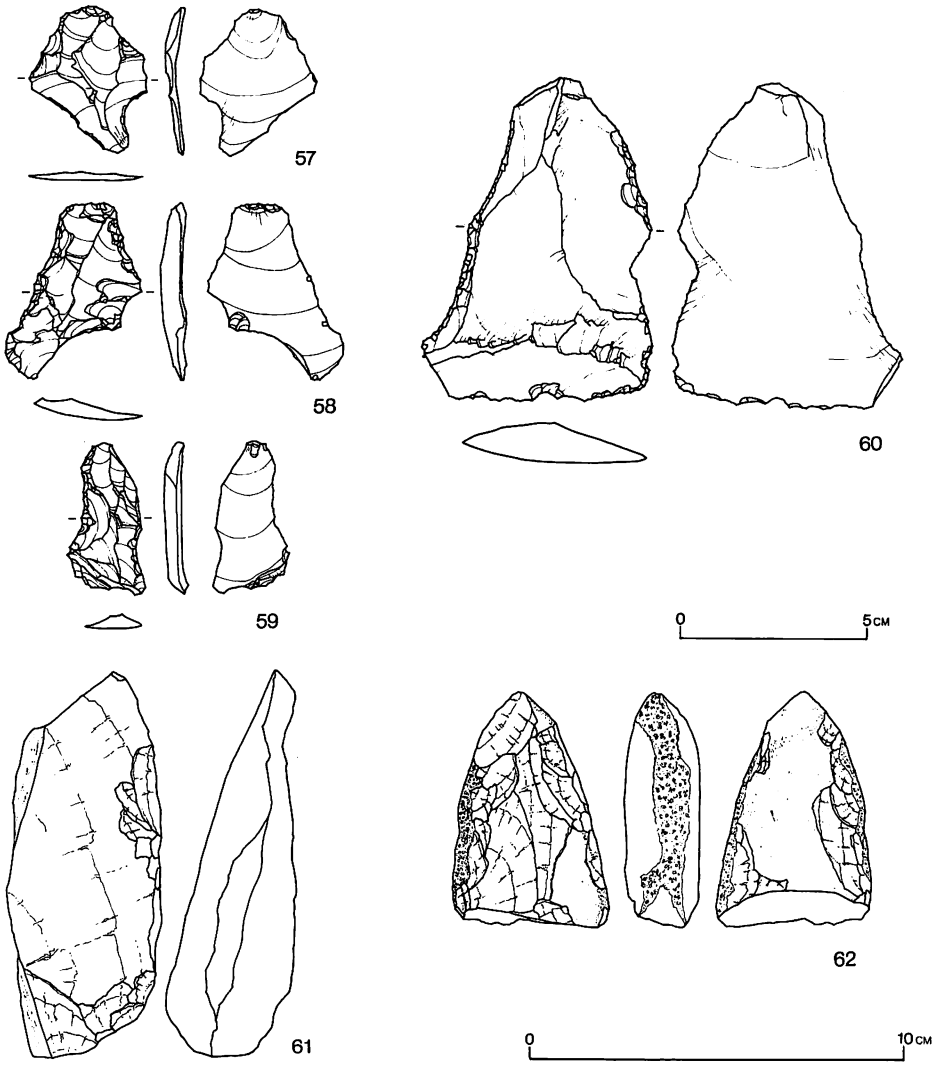
（越田雄司）



図Ⅳ－９　Ｈ－１出土の土器(1)



図Ⅳ－10　Ｈ－１出土の土器(2)



図Ⅳ－11　H－1出土の石器

(3) 土壙

P－6（図Ⅳ－12、図版Ⅳ－10）

位　置　G_2－63－11　　**規　模**　0.66×0.64／0.39×0.42／0.42

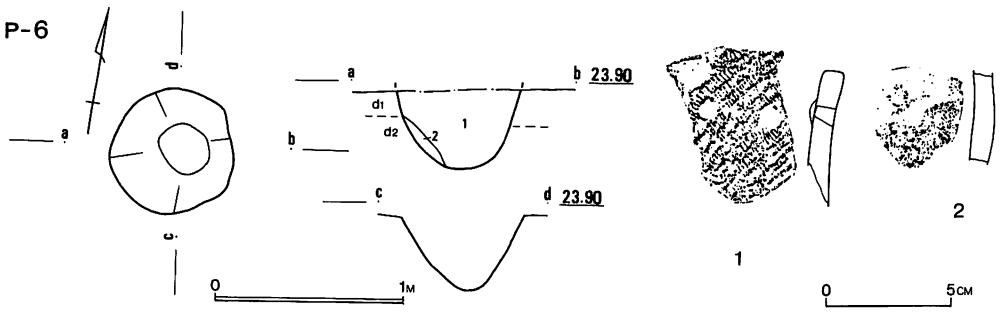
土　層　1　黒色（Ⅱ黒≫d_1＋d_2）　　2　橙褐色土（d_2塊≫Ⅱ黒）

特　徴　Ta－d_1層上面で検出した。平面形はほぼ円形を呈する。壙底面はやや楕円形を呈する。断面は摺り鉢状を呈し、急斜面で立ち上がる。壙底はTa－d_2層を掘り込んで構築している。遺物は覆土1層より出土している。（越田雅司）

遺　物　1・2はともにⅢ群b－3類土器である。1は口縁に肥厚帯がなく、やや外反する口縁部破片である。口唇断面は角形を呈し、口唇と器面に0段多条のLR原体による圧痕の深い縄文が施されている。内面に施文はない。胎土に繊維を含む。2は器面に磨滅のみられる

小片である。胎土に海綿骨針を含み、繊維も含まれているとみられる。器面にやや細かい縄文が施されていて、ノダップⅡ式に属するものとみられる。（大沼忠春）

時　期　出土遺物より縄文時代中期と考えられる。（越田雅司）



図Ⅳ－12　P－6と出土の土器

P－7（図Ⅳ－13・14、図版Ⅳ－10）

位　置　G_1－63－60　　**規　模**　2.71×2.30／2.10×1.69／0.47

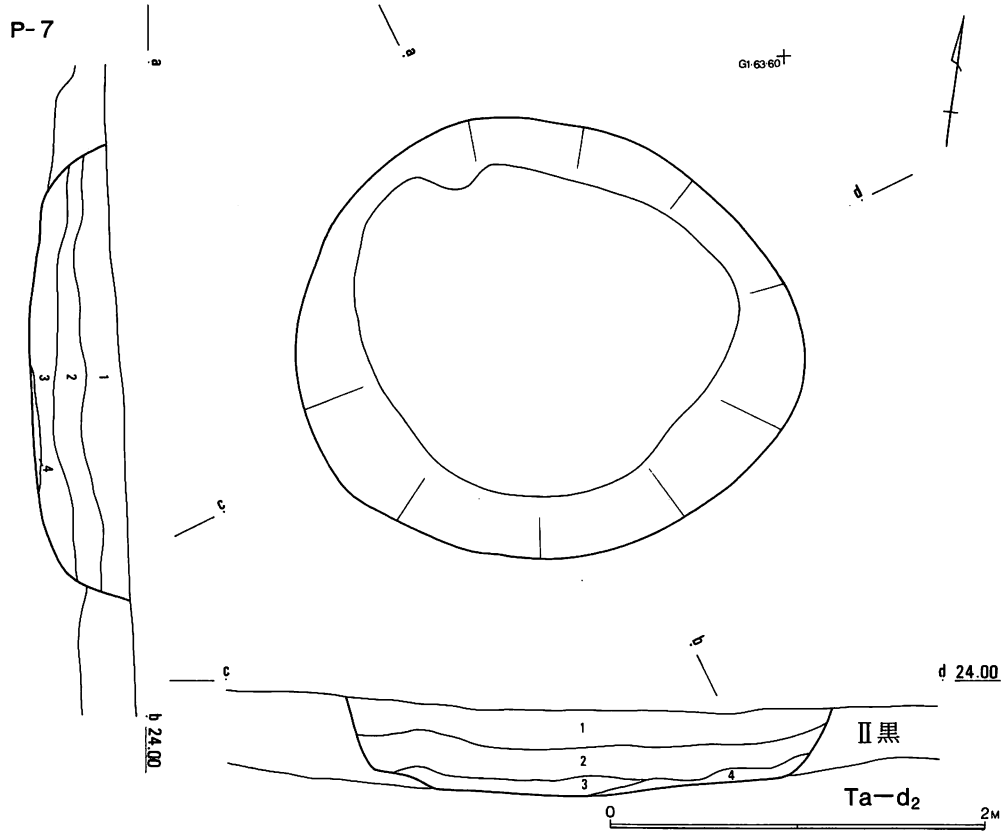
層　位　1　黒褐色（Ⅱ黒≫d_2）　　2　暗褐色（Ⅱ黒＞d_2）

3　暗褐色（Ⅱ黒＋d_2）　　4　黄褐色（d_2≫Ⅱ黒）

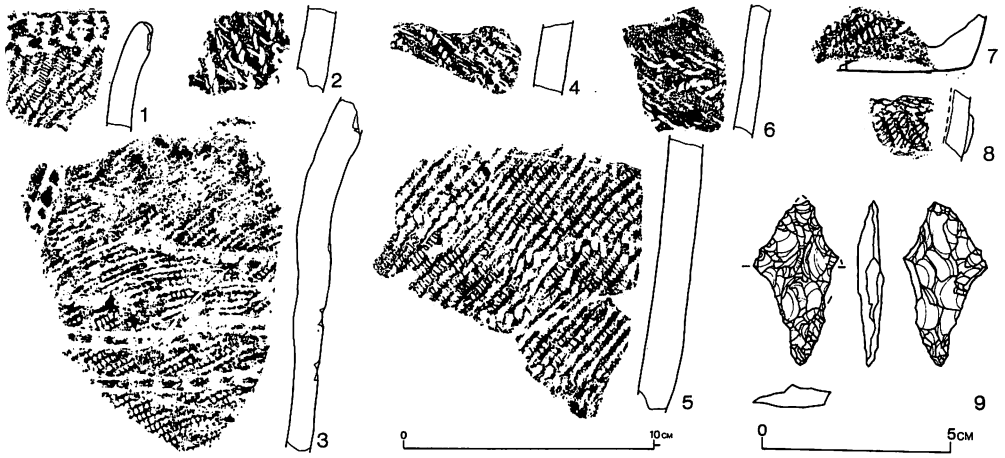
特　徴　1号竪穴状遺構の調査のトレンチに、Ta－d_1層が落ち込んでいる部分があったので、トレンチを拡げ検出した。Ⅱ黒層上面では顕著な落ち込みはみられなかった。平面形は、楕円形を呈する。壙底面はTa－d_2層まで掘り込んで構築されていて、平坦である。壙底面には小ピットは検出されなかった。遺物は、覆土2層からの出土が多く、Ⅲ群b－3類に属する。覆土は4層に分かれ、覆土は、Ⅱ黒層にTa－d層をブロック状に含む。覆土は非常に堅い。断面の形態は、壙底面から開きぎみに直線的に立ち上がる。壁面の状態はTa－d_2層ではしっかりしているが、Ⅱ黒層を掘り込んでいる部分はもろい。

遺　物　1～7はⅢ群b－3類、8はⅣ群a類土器である。1は口縁の外反する深鉢形土器の口縁部で、口縁にわずかな肥厚帯があり、口唇と口縁に半截竹管状工具による押引き文が施されている。内面はなめらかに調整されている。縄文は0段多条のLR原体による。円形文は認められない。2は大形深鉢形土器の体上半部の破片である。器面にヘラ状工具による押引き文が施されている。3～6は体部の破片、3には網目状撚糸文、4には異条縄文、5には結束第1種の原体による整った斜行縄文、6には無節の縄文が認められる。7は底部の破片で、粗い縄文が施され、底部の周囲が削り調整されている。胎土に繊維状の物質がわずかに認められる。煉瓦台式に相当するものとみられる。8は貼付帯のある破片で、包含層出土の資料（191）と同一個体に属する。9は、石槍。黒曜石製であるが表面はくすんでおり、光沢はない。調整加工は粗である。（大沼忠春・越田雅司）

時　期　出土遺物より縄文時代中期と考えられる。（越田雅司）



図Ⅳ−13　Ｐ－７



図Ⅳ−14　Ｐ－７出土の土器・石器

3　包含層出土の遺物

出土遺物には土器と石器、石製品がある。

(1)　土器

土器にはⅡ群ａ－１類、Ⅲ群ａ類、Ⅲ群ｂ－２類、Ⅲ群ｂ－３類、Ⅳ群ａ類、Ⅴ群ｂ類に属するものがある。この内Ⅲ群ｂ－３類に属するものが97％を占め、他のものは少量である。

Ⅱ群ａ－１類土器（図Ⅳ－15－１）

１点のみ出土した。条の横走する綱文土器に属するものである。

Ⅲ群ａ類土器（図Ⅳ－15－２）

風化の著しいもので、大形の円筒土器の弁状突起部の破片である。

Ⅲ群ｂ－２類土器（図Ⅳ－15－３・４）

口縁部と頸部の同一個体に属する破片である。ｒとＲにより２段Ｌとした原体による異条縄文と結束第２種の回転文が施されている。内面はなめらかに調整され、胎土に繊維を含む。

Ⅲ群ｂ－３類土器（図Ⅳ－15～22）

本類には少量のノダップⅡ式、煉瓦台式に近縁の資料と、大量の北筒式土器が含まれる。北筒式の器形は体部上半にゆるやかなくびれをもつものと、筒形に近い器形をもつものがあり、口縁に肥厚帯の作り出されるものが目立っているが、肥厚帯のないものも少なくない。ここでは口縁部の資料を主に示しているので、器形については充分に明らかにはなし得ない。肥厚帯に似たものに貼付帯や隆帯をめぐらすものがある。これらは口縁部の器壁に粘土紐を貼付することによって形成されている。器面に縄文を施文後に貼付したものを貼付帯、縄文施文前に貼付するものを隆帯とする。口縁部の肥厚帯には口唇にそって肥厚し、口唇が広がっている印象を与えるものや、口縁のやや下にふくらみのある肥厚帯をもつもの、口縁の断面形が三角形に近い形をなすものなど種々のものが認められる。それらの形成方法には隆帯によるものと、器体成形の際に最上段の粘土帯を少し外側にはみ出すように付加して形成するもの、あらかじめ切出し形に近く、口縁側を薄く成形した器体に、比較的薄い粘土帯を付加することにより三角形状の肥厚帯をつくり出すもの、また同様の器体に厚味のある粘土帯を加えることにより、幅の広い肥厚帯を作り出すものなどがある。器面調整は指頭によるなで調整のものとヘラ状工具によるなで調整のものがある。施文については、あらかじめ器面と口縁内面、あるいは口唇に縄文を施し、その後ヘラ状工具による刺突、押引き文を施すのが一般的であるが、地の縄文を欠くものもある。また施文位置も口唇と口縁に施文するものと、口縁に施文するものが多いけれども、口唇のみに施されるものもある。工具にはヘラ状工具の他に半截竹管状、棒状のものなどがあり、それらの広いものや狭いものなど変化が多い。また口縁の肥厚帯下に円形の深い刺突文を施し、多くの例では内面に突瘤を形成している。これについては「円形文」と略記する。この円形文も、断面が筒状のもの、漏斗状のもの、径の大きいものから小さいもの、深いものから浅いものなど種々のものがある。地の縄文は０段多条の原体によるＬＲとＲＬが多

く使用され、結束第１種、第２種、結節などの原体も認められる。なお胎土については雲母、細円礫などこの地域の多くの土器の胎土とは異なる混和材を含むものがある。これらの個々については記載し得ないので、特色のみられるものについて記載したい。以下、装飾文様の施文の位置によりＡ～Ｅの５類に区分し、さらに縄文のみのものをＦ類、無文のものをＧ類とし、その他の資料をＨ類とする。

Ａ類（５～11）は器面に貼付帯の施されているものである。５・６は同一個体で、口唇の断面形が丸く、口縁は外反し、整った斜行縄文の地に、口縁と体部とに横環する貼付帯を施し、貼付帯上に刺突文、口縁の貼付帯下縁に小円形文を施す。内面はなで調整され突瘤を形成していない。７・８・10・11は口縁に肥厚帯をもつもので、７は三角形に肥厚し、８は口唇が平坦で、口唇と内面はなで調整され、突瘤を形成していない。８の肥厚帯は口唇の下に断面三角形の隆帯を環らせた趣がある。９は薄い貼付帯の施されたものである。10は口唇にヘラによる押引き文、11は口唇に縄文が施されている。11の口縁はくびれて立上る形態をなし、口縁の肥厚帯にも円形文が施されている。貼付帯の形態、調整手法、口縁の断面形態などに変化があり、これらの間に時間的な差があるのかもしれない。

Ｂ類（12～17）は器面に貼付帯をもたず、押引き文のみられるものである。12は口縁が外反し、肥厚帯のないもので、口唇、口縁、器面に押引き文がある。13は口縁の断面が三角形に薄くなり、口唇が尖るもので、口縁に押引き文がある。14は口縁が断面三角形に肥厚し、強くくびれるものである。15は同一個体の体部破片で、押引き文、刺突文がある。16・17ははは口縁の肥厚帯が三角形状をなすが、くびれて立ち上るもので、16には口唇に施文なく、17には押引き文がある。

Ｃ類（18～66）は口唇と口縁に施文されるものである。18～23は肥厚帯のないもので、18は口唇の断面が丸味をもち、口唇と口縁に押引き文を施し、内面にも縄文地に施文されている。19は口唇が尖り気味で、内面はなで調整されている。器面にはオオバコ回転文が施されている。20は口縁の外反するもので、やや整った斜行縄文が施されている。21は薄手のもので、やや外反気味である。22、23は口縁の内反もしくは直立気味のもので、無文地に刺突文があり、22の内面には無節の縄文が施されている。24～26は口縁の肥厚するもので、口唇と口縁側とに２列の刺突文を加えている。24の縄文は縦行気味である。25の器面には細い撚糸文が施されている。27は口唇に縄線文の施されているもので、口縁の少し下に隆起部があり、先端が丸味のある工具で、えぐりの深い刺突文が施されている。28は口唇が平坦に調整され、表面側に少し張り出す傾向がある。器壁は薄く、口唇の少し下に隆起帯をつけたような肥厚帯があり、口唇と口縁に刺突を加えているものである。内面には粗い縄文が施されている。29は口縁の隆起帯にそって押引き文が施され、隆帯上に圧痕がめぐらされているようである。28・29は比較的薄手である。30～33は隆起帯のあるもので、隆起帯上に刺突文を施している。34は口縁にわずかな肥厚帯があり、円形文を欠く。器面の縄文は整った斜行縄文で、内面は平坦になで調整されている。35～38はやや顕著な肥厚帯のあるもので、口縁が外反している。35・37・38は内面に縄文があ

る。36は内面がなで調整されていて、突瘤はない。39～46は口縁の断面形が三角形状に肥厚するもので、ややくびれて立上る傾向をもつ。40・44・46は内面に縄文がある。47は肥厚帯のあまり顕著でないものであるが、口縁が少しくびれる。48はやや薄手のもので、口縁がやや内湾する傾向がある。細かい縄文が施されている。49はやや薄手で強く内湾するもので、口縁の肥厚部に1列、浅い刺突文が施されている。50・51は口縁の肥厚帯に2条の押引き文の施されたもので、口唇には刺突文が施されている。52～58は口唇にやや幅の広い平坦面をもつもので、口縁の断面形は内湾気味のものから外反するものまである。53は胎土に雲母を含み、内面は平坦に調整されている。57も内面はていねいに調整されている。59・60・62～64は、口唇が丸味をもつものである。61は断面が三角形状の肥厚帯をもつもので、幅の広いヘラによる刺突文が施されている。64は内面にも刺突文が所々施されているが、偶然のものかもしれない。65・66は口唇の幅の広いもので、65は内湾する傾向があり、内面に縄文が施されている。

D類（67～81）は口唇に施文されるものである。67～74は口縁の外反するもので、薄手のものから厚手のものまである。69・74は口縁に器面調整痕を残し、72は縄文施文後になで調整を加え、無文の地に円形文を施すものである。75・76は口縁が直立気味のものである。77は口唇の少し下に隆帯をめぐらすものである。78は薄い粘土帯を貼付して平たい隆帯を施すものである。77は口縁の肥厚するもので、口縁にそって粘土帯を貼付し、肥厚帯を形成しているとみられる。80は口縁の断面がややくびれをもち立上るものである。81は口縁が断面三角形状に肥厚するものであるがやや外反する傾向がある。

E類（82～109）は口縁に施文されるものである。82は口縁の突起部の破片であるが、縄線文の施されたものである。83はえぐりの深い刺突文の施されたもので、口唇は丸味をもち、内面はなで調整されている。84は口唇直下にえぐりの深い刺突文を1条施すもので、口唇と内面はヘラによりなで調整されている。85～95は口縁に断面三角形状の肥厚帯がある。85は口唇が丸味をもち、強くくびれた頭部の無文地に浅い円形文を施している。器壁は薄い。86～88は押引き文が2～3条施されたものである。87には無節の縄文が施されている。89は口縁に1条やや幅の広い工具で刺突文を施している。器面には縦行気味の縄文が施されている。90～93にも押引き文が施されている。90は縄文がなく、口唇に平坦面が形成されていて、肥厚帯は断面三角形状に強く張り出している。94は口縁にややくびれがみられる。96～101は口唇が丸味をもつものである。102・103は口唇がなで調整され、平坦面がある。102は先端に丸味のある棒状工具による押引き文の施されたもので、内面もなで調整されている。103は内面に縄文がある。104～108は口唇にやや幅広く平坦面をもつもので、特に106～108はヘラによりていねいに平坦面の調整がなされている。107は口唇の少し下に薄い粘土帯を貼付することにより隆帯状の肥厚帯を形成するもので、口唇の幅は器壁と同様のものとみられる。肥厚帯上に短い縄の押捺を加えている。108は口縁に肥厚帯のないもので、先端に丸味をもつ工具により刺突を加えている。109は口唇が丸味をもち、肥厚帯に幅の広いヘラ状工具による刺突がめぐらされている。地の縄文はLとRの束の縄か、ゆるいR2段に撚った原体によるものかとみられる。

F類（110～164）は縄文のみのものである。110～118は口唇が角形もしくは角形に近いもので、口唇が無文のものである。110は口縁が外反し、口唇が表面側へやや張り出すものである。111・112は粗い縄文の施されたもので円形文を欠く。113は細かい縄文の施されたもので、やはり円形文を欠く。114は結節の回転文が施されている。115は口縁の外反するもので０段多条の原体による深い圧痕の縄文が施されている。116は細かい結束羽状縄文の施されたものである。117・118は口縁の直立気味のもので、117の口唇はヘラでなで調整されている。

118の口唇もヘラなで調整され、内面はヘラ削り調整がなされている。119～125は口唇が丸味をもち、無文のもので、口縁の外反するものが多いけれども、123は直線的で、125は内反気味である。126～132は口唇に施文のあるもので、口唇は角形か丸味をもつものがある。126は口唇に粗く縄文が施されたためか、口唇の幅の広いものである。127は口唇直下に幅せまく面をもつ部分がある。128は整った斜行縄文が施されている。129～131はやや太い原体により整った縄文が施されている。132はやや厚手のもので、口縁下のなで調整された器面に円形文が施されている。133・134は口縁に隆帯の施されているもので、135も同様のものかとみられる。133は体部に横走気味の細かい縄文が施されている。136～141は口縁が三角形に肥厚するものである。136・137は内面にも縄文が施されている。138は口縁の肥厚帯に突起があり、縦に貫通孔がある。孔の径は５㎜ほどである。器壁は薄く器面に円形文を欠く。139は薄手のもので、内面にかすかに縄文が認められる。140は口縁の肥厚帯下の無文地に円形文が施されている。141は口縁に幅の狭い肥厚帯をもち、内面の口縁に縄文帯がある。142～144は口縁のややくびれる傾向をもつもので、142・143・145は口縁部の器面に薄い粘土帯をつけ肥厚帯を形成するものである。146・147は口縁の少し下に薄い粘土帯をつけ、隆帯状の肥厚帯を形成するもので、147は口唇面がなで調整されている。148～150は口縁の外反するもので口唇に丸味のある肥厚帯をもつものである。151は口唇が丸味をもつもので、口唇直下に面を形成する部分がある。152～157は口縁が外反し、口唇に平坦面をもつもので、口唇はなで調整されている。口縁に薄い粘土帯を貼付し、肥厚帯を形成するものが多いとみられる。158～163は口唇に飾文の施されたものである。158は肥厚帯の上半に施文後、口唇に施文し、その後内面の口縁部になで調整を加えているものである。159は口縁と内面に施文後、口唇に縄文を施している。口唇と内面に縄文を施したのち、口唇と内面になで調整を加えている。163は口縁の縄文帯下に幅広く無文帯を残すものである。164は口唇に丸味をもち、口縁がやや外反し、148～150に類似するが、縄文が粗く、口縁下の無文面に円形文が施されている。

G類は無文のものである（165～168）。口縁部が外反もしくは直立気味で比較的薄手のもの（165・166）と口縁が外反もしくは直立気味で、口唇の断面が丸味をもつやや厚手のもの（167・168）とがある。いずれも胎土に繊維を含み、器面に円形文を欠く。

H類（169～184）は北筒式に伴うとみなされるノダップⅡ式、煉瓦台式に近縁の資料である。169～178はノダップⅡ式に近いものかとみられる。169は口唇に縄文を施し、口縁部に１条の縄線文をめぐらせている。器面の縄文は縦行気味である。胎土に細円礫と繊維を含む。170は

薄手で細い貼付帯の認められるもので、貼付帯の施文手法は5と似ている。171はやや横走気味の縄文の施されたもので、口唇と内面は平滑に調整されている。胎土に細円礫を含む。172は薄手のもので、口唇と内面は平滑に調整されている。173・174はやや整った斜行縄文の施された土器で、口唇はなで調整されている。173の内面は磨かれていて、胎土には繊維と海綿骨針が含まれている。170～172・174にはともに繊維が含まれている。175～178は一個体かとみられるもので、口縁はわずかに外反する。口縁の少し下と体部の位置に、えぐり込みのある短刻線文をめぐらせている。その部分はわずかに隆帯状を呈するかとみられる。胎土に海綿骨針と繊維を含み、口唇と内面は平滑に調整され、内面は磨かれている。縄文は口縁では斜行、体部ではやや横走気味である。179～184は煉瓦台式に関連するとみられる資料である。胎土には繊維を含まないようである。179は口唇と内面が平坦に調整され、口縁に隆起帯がある。隆起帯の断面は丸味をもち、その上にえぐり込みのある短刻文が施されている。地の縄文は比較的整っている。胎土に海綿骨針を含む。180はRLの原体による縄文の施された体部で、179よりはやや小さい短刻文が施されている。181は整った斜行縄文の施された隆起帯のない土器である。口唇と内面はなで調整されている。182は口縁にめぐらされた隆起帯から、縦の隆起帯を垂下し、瘤状の隆起部に刺突を加えている。縦の隆起帯上には縦位に縄文が施されている。器面の縄文は整った斜行縄文である。183は縄線文をめぐらす小形土器で、縄文は太いLRの原体により整った羽状の縄文が構成されている。内面は平坦に調整されている。184は183と同様の原体による縄文の施されたもので、隆起部を境に羽状縄文を構成するものとみられる。隆帯上には縄端による刺突文を加えている。内面は平坦に調整されている。H類はノダップⅡ式に近いかとみなされるもののうち、169～172がやや古く、173～178がやや新しいものとみられる。また煉瓦台式に関連するとみられるものでは、179～182が古く、183・184が新しいものとみられる。一応4段階ほどの変遷が認められそうである。

Ⅳ群a類土器　（図Ⅳ－22－185～194）

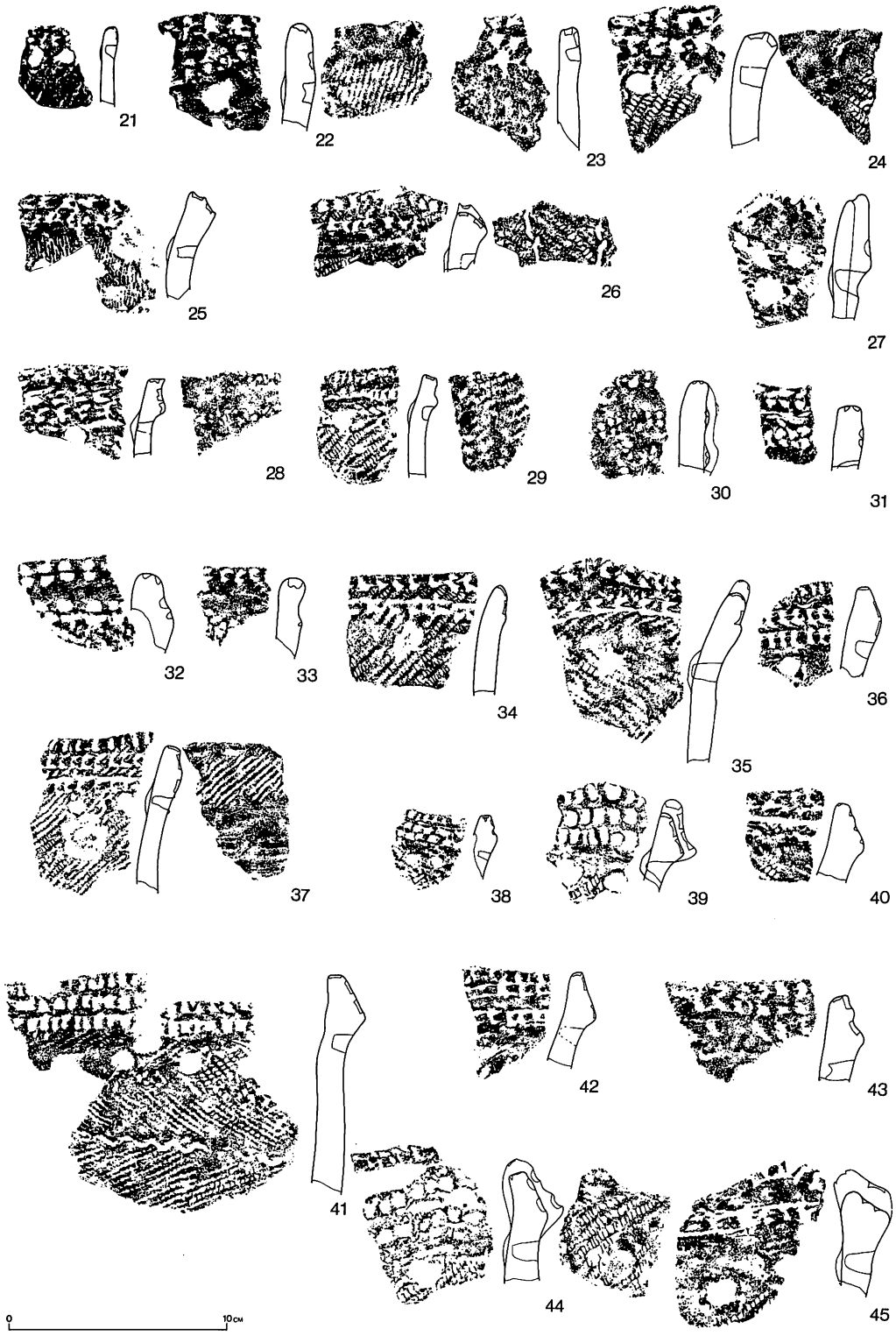
幅の狭い貼付帯のあるもの（185～192）と幅の広い貼付帯のあるもの（193・194）とが認められる。185～189は比較的薄手のものである。口縁と体部に平たい粘土帯を貼付し、その上を横位、器面には縦位に縄文を施している。原体は185ではLR、186～189ではRLである。186～189は同一個体のものとみられ、口唇と内面はみがき調整され、胎土に海綿骨針を含む。本類の他の資料はなで調整され、胎土には細円礫が含まれている。190～192は比較的厚手のもので、190ではLRの原体による縄文地に貼付帯を施し、その上に同一原体の縄文を施している。191はRLの原体による縄文地に貼付帯を施し、その上にLRの原体による縄文を施している。192には器面に縦位施文、貼付帯上に横位施文のLR原体による縄文が認められる。193・194は貼付帯部分の剝落したものである。193の口唇は幅広くなで調整されている。

Ⅴ群b類土器（図Ⅳ－22－195～196）

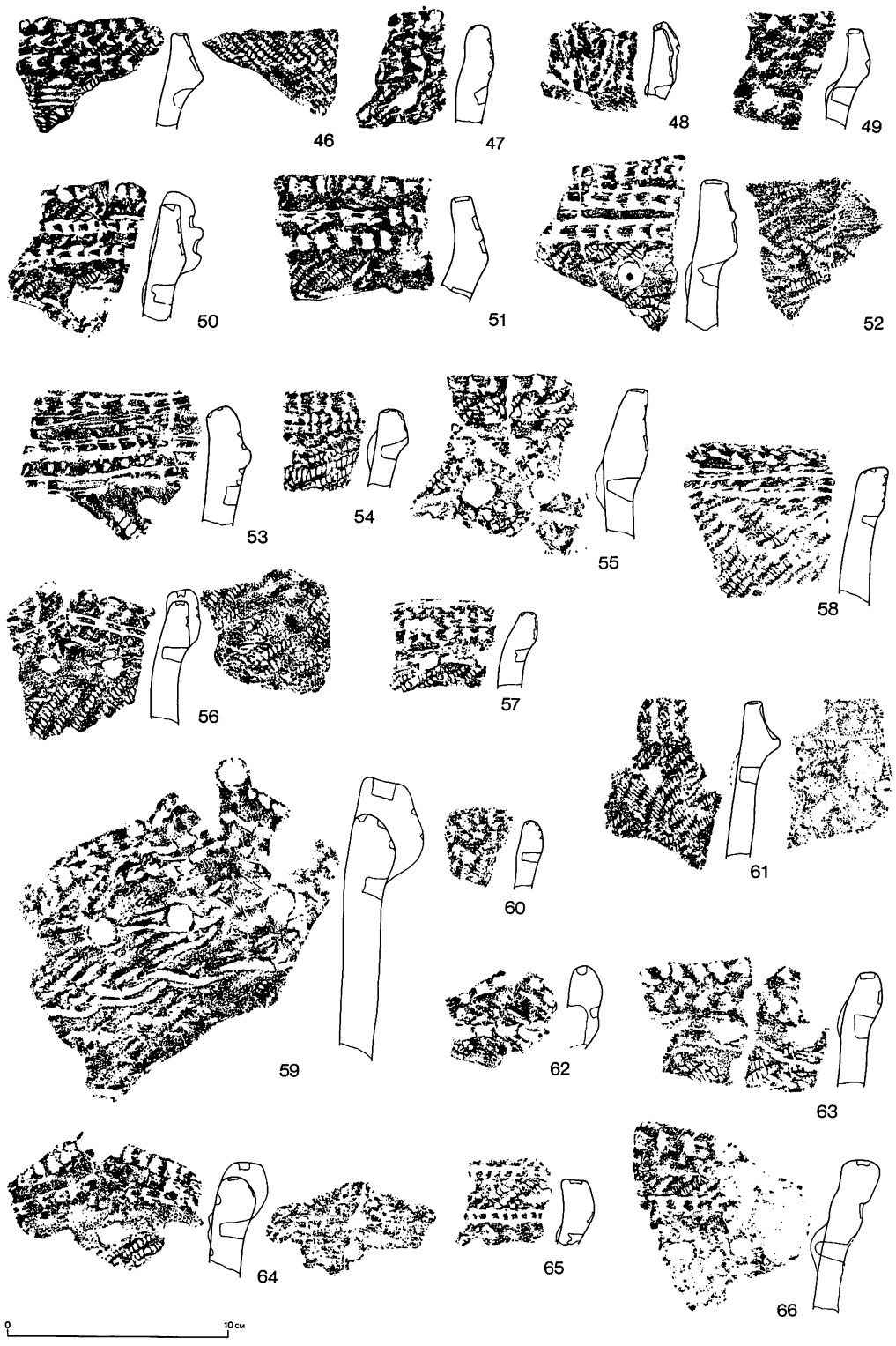
195・196は皿形もしくは鉢形土器の破片である。内面は磨滅しているようである。197は鉢形土器の底部の破片で非常に細かいLRの原体による縄文が施されている。　（大沼忠春）



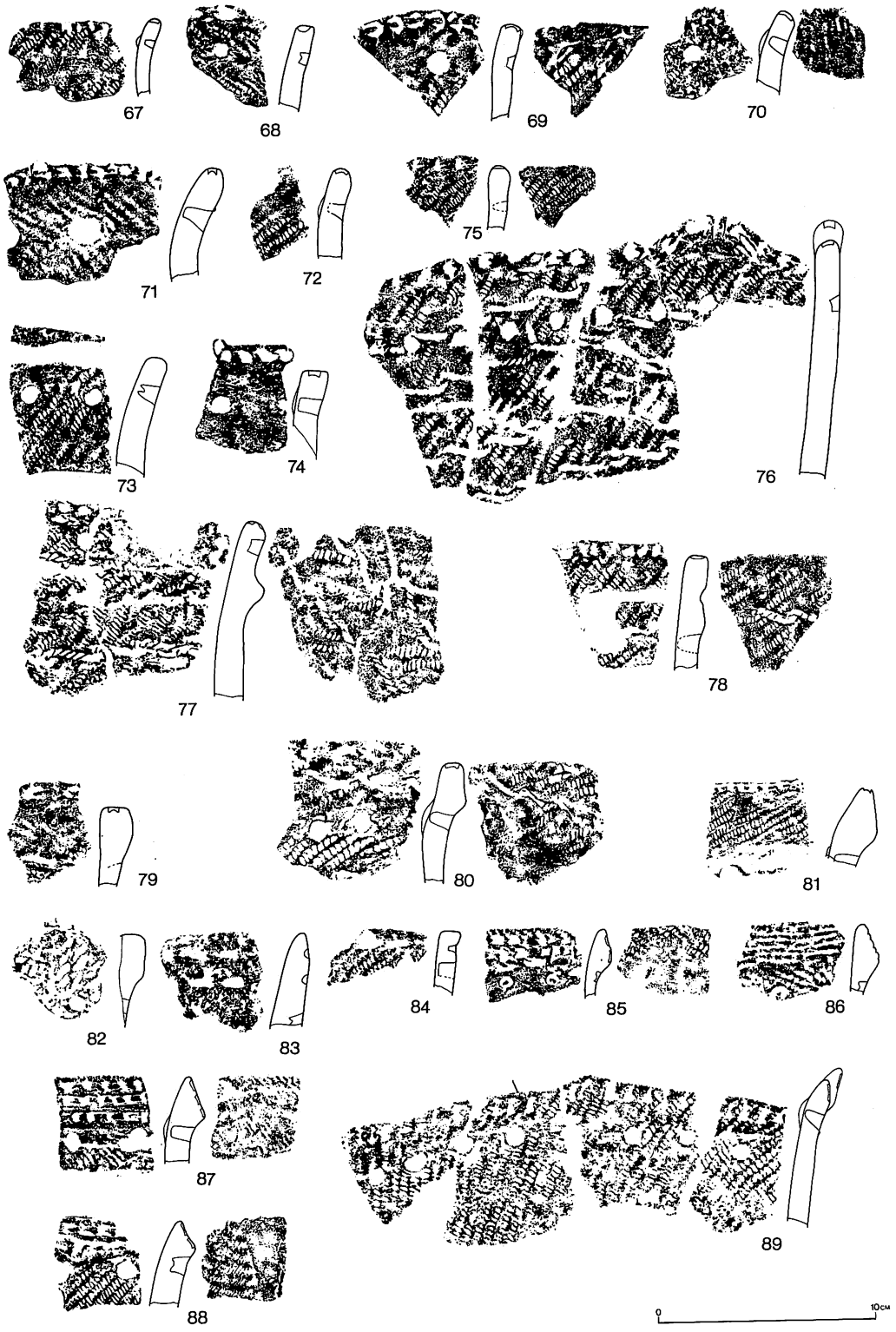
図Ⅳ－15　包含層出土の土器(1)



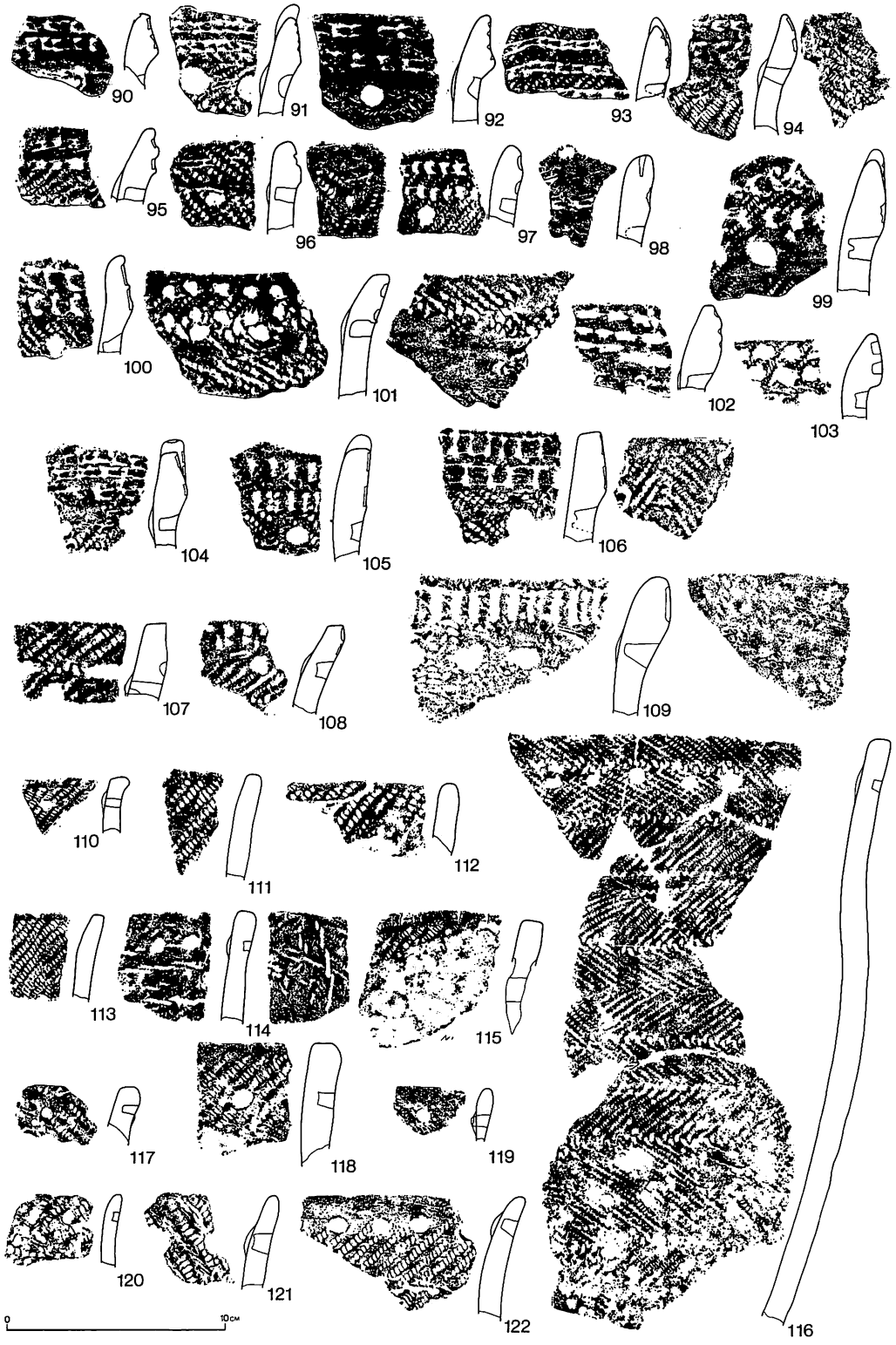
図Ⅳ－16　包含量出土の土器(2)



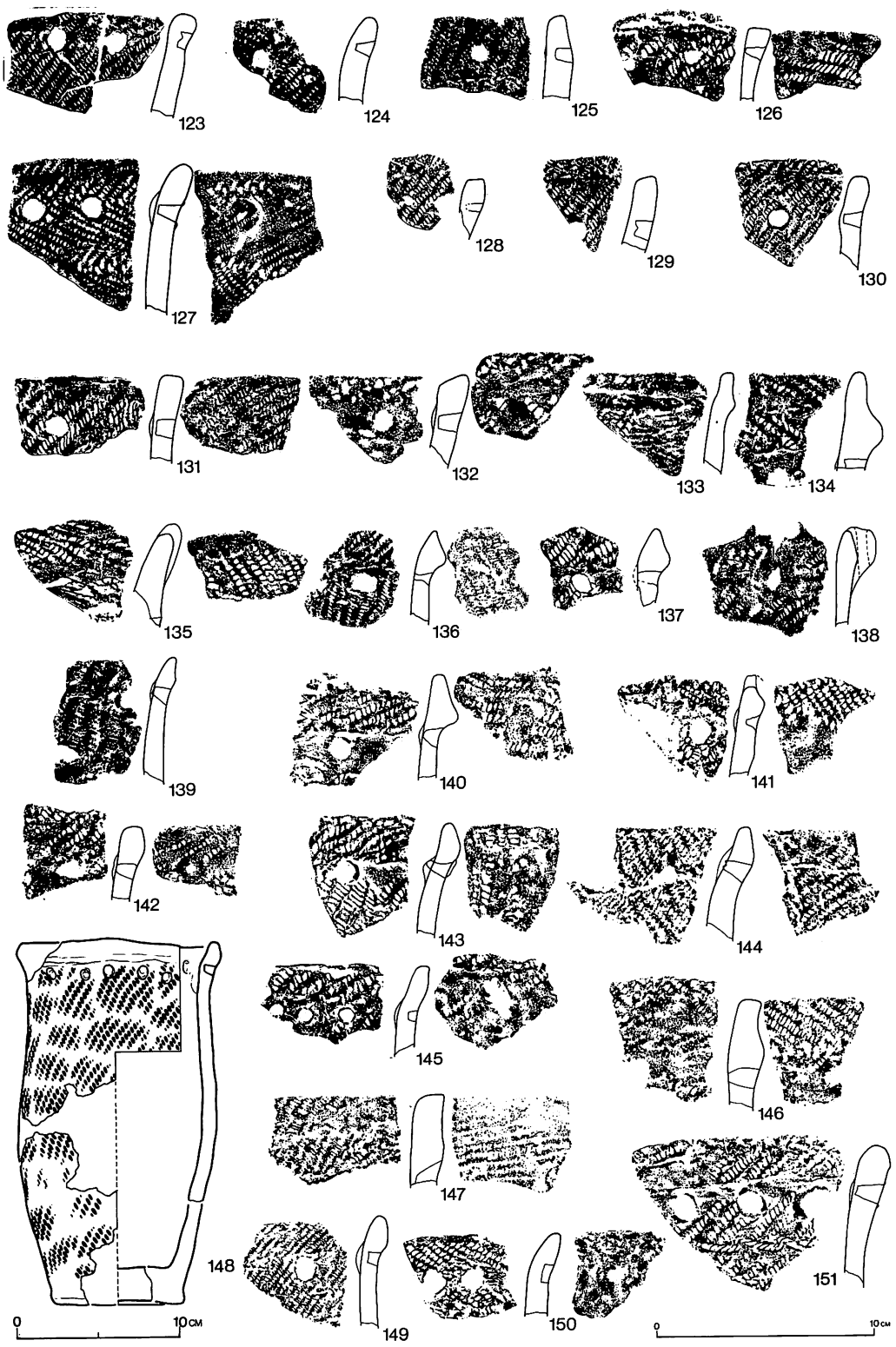
図Ⅳ－17　包含層出土の土器(3)



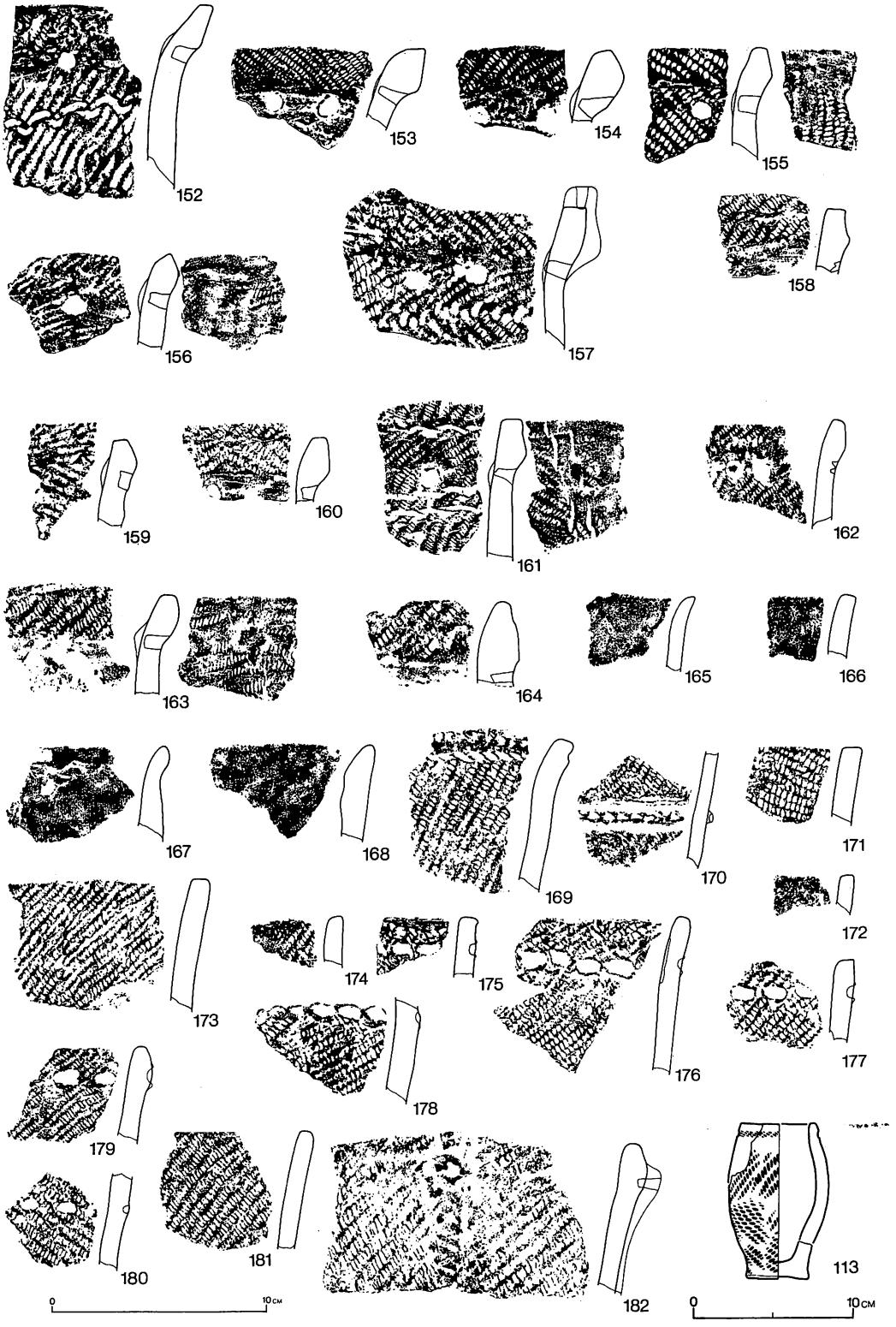
図Ⅳ－18　包含層出土の土器(4)



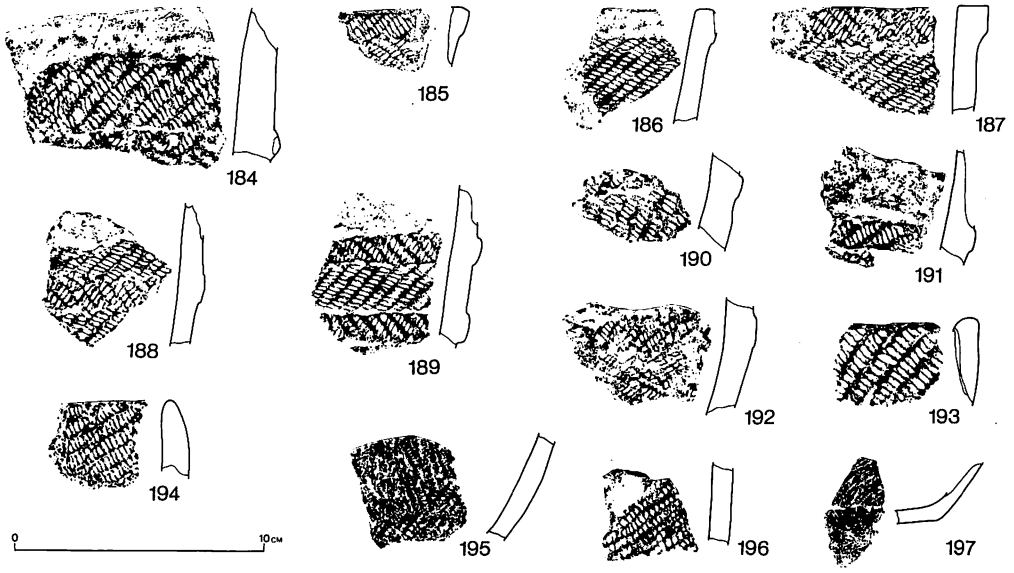
図Ⅳ－19　包含層出土の土器(5)



図Ⅳ－20　包含層出土の土器(6)



図Ⅳ－21　包含層出土の土器(7)



図Ⅳ－22　包含層出土の土器(8)

(2)　石器等（図Ⅳ－23～26、図版Ⅳ－15・16）

石　鏃（1～13）

Ⅱ黒層出土の石鏃は総数24点出土しているが、有茎の石鏃が16点と多い。他に凹基の石鏃が3点、破片が5点である。1・2は三角形を呈し、平基に近い凹基のもの。3～13は有茎のもの。3は加工が全面には及んでいない。4～6は茎部が明瞭ではない。7～10は最大幅が下位にあり茎の短いもの8・9はかえしが明瞭ではない。11～13は最大幅が中位から上位にあり、茎の長めのもの。11・13は主剝離面を残す。

石槍またはナイフ（14～36）

総点数は破片も含めると132点で、出土した剝片石器の約60％を占める。大部分が破損しており、完形品は20点を数えるだけである。14～16は木葉形を呈する。14は厚みがあり、調整も粗い。17は側縁にふくらみと、細身の茎部を持つ。18～25は最大幅が中位にあるもの。18～23は、左右が非対称形を呈し、26～29は最大幅が中位から上位にあるもの。30～32は、最大幅が中位にあり、細身の茎部を持つ。33は側縁が外に開いている。35・36は、側縁にふくらみを持つ。

石　錐（37～41）

37は角柱状の剝片を素材とし、刃部を作り出している。38～40は全面加工のもので、38は基部にややふくらみを持つ。37・38とも側縁に磨耗痕がみられ、先端には細かい加工が施されている。40は基部が丸みをおび、41はやや凸出した形の刃部を持つ。基部には細かい加工はみられない。

スクレイパー類（42～52）

42～46は片面加工のもので、剝片の形状を大きく変えることなく刃部を作り出しているものである。47・51は両面加工のもの。48～50は剝片の周縁に加工を施してある。52は縦長剝片の両側縁に細かい加工を施してある。頁岩製。

石　斧（55～62）

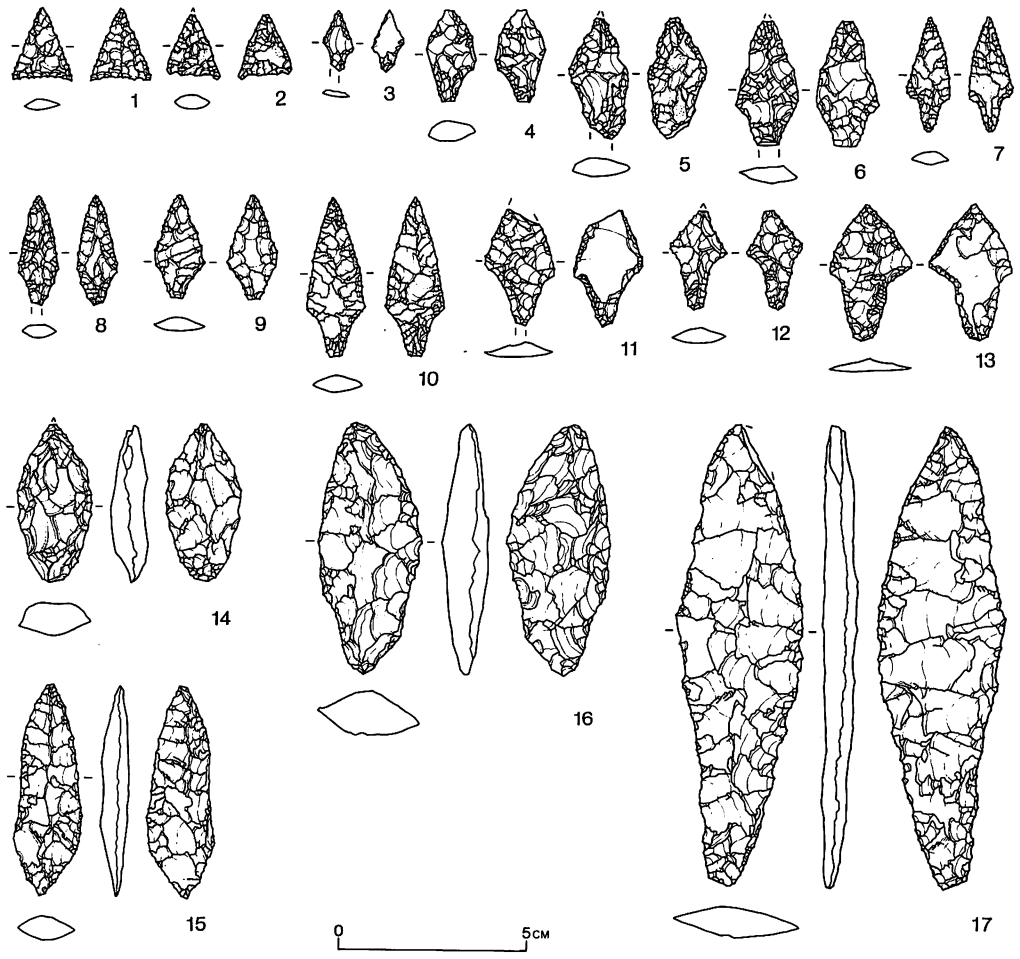
55～58は全面研磨されている。56は石のみであろう。59は敲打後、刃部を中心に研磨している。60～62は石斧未製品。

たたき石・砥石・石錘（63～66）

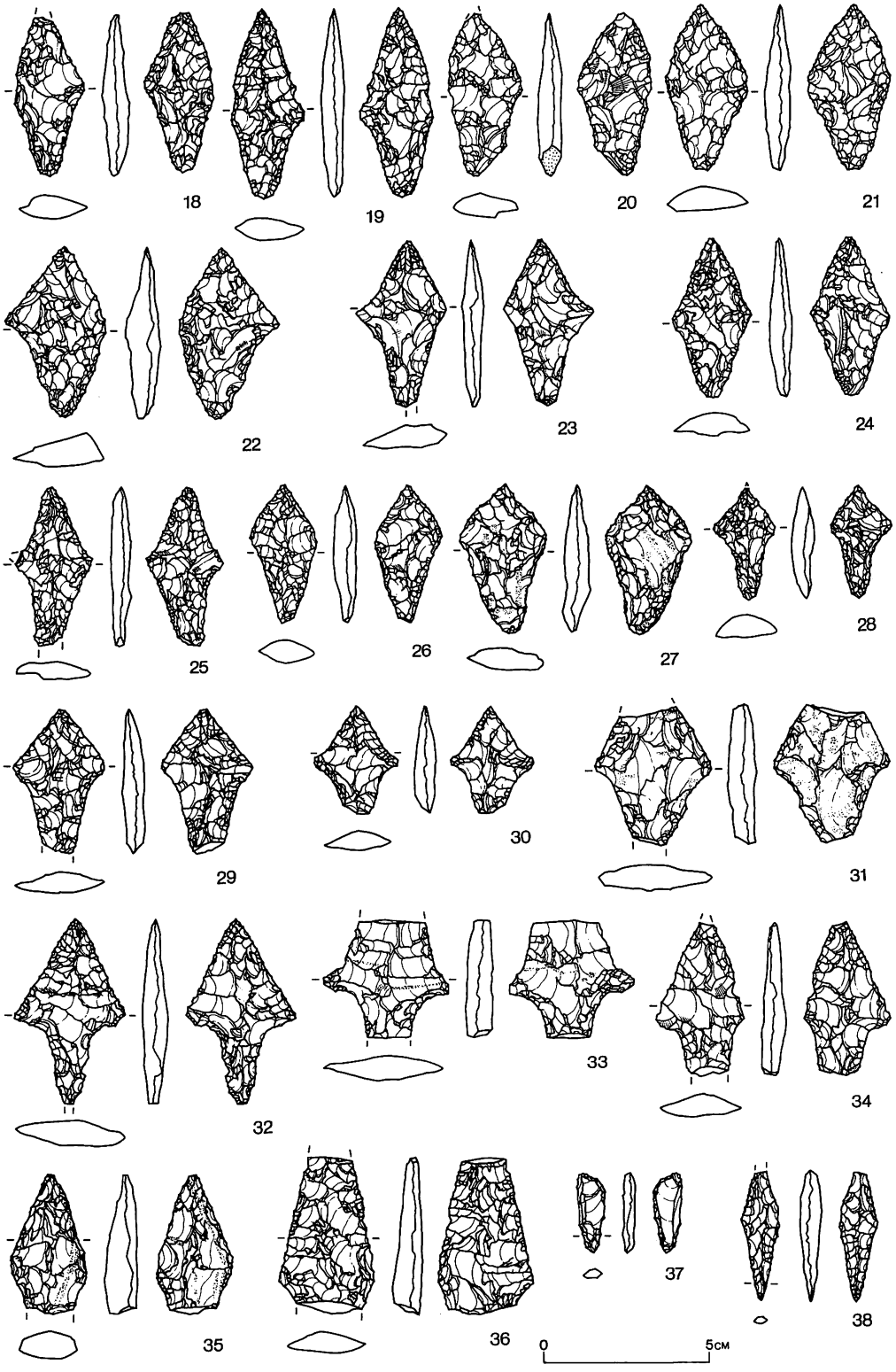
63は偏平な礫を利用したたたき石、64・65は4面使用している砥石。66は石錘である。

石製品（53・54）

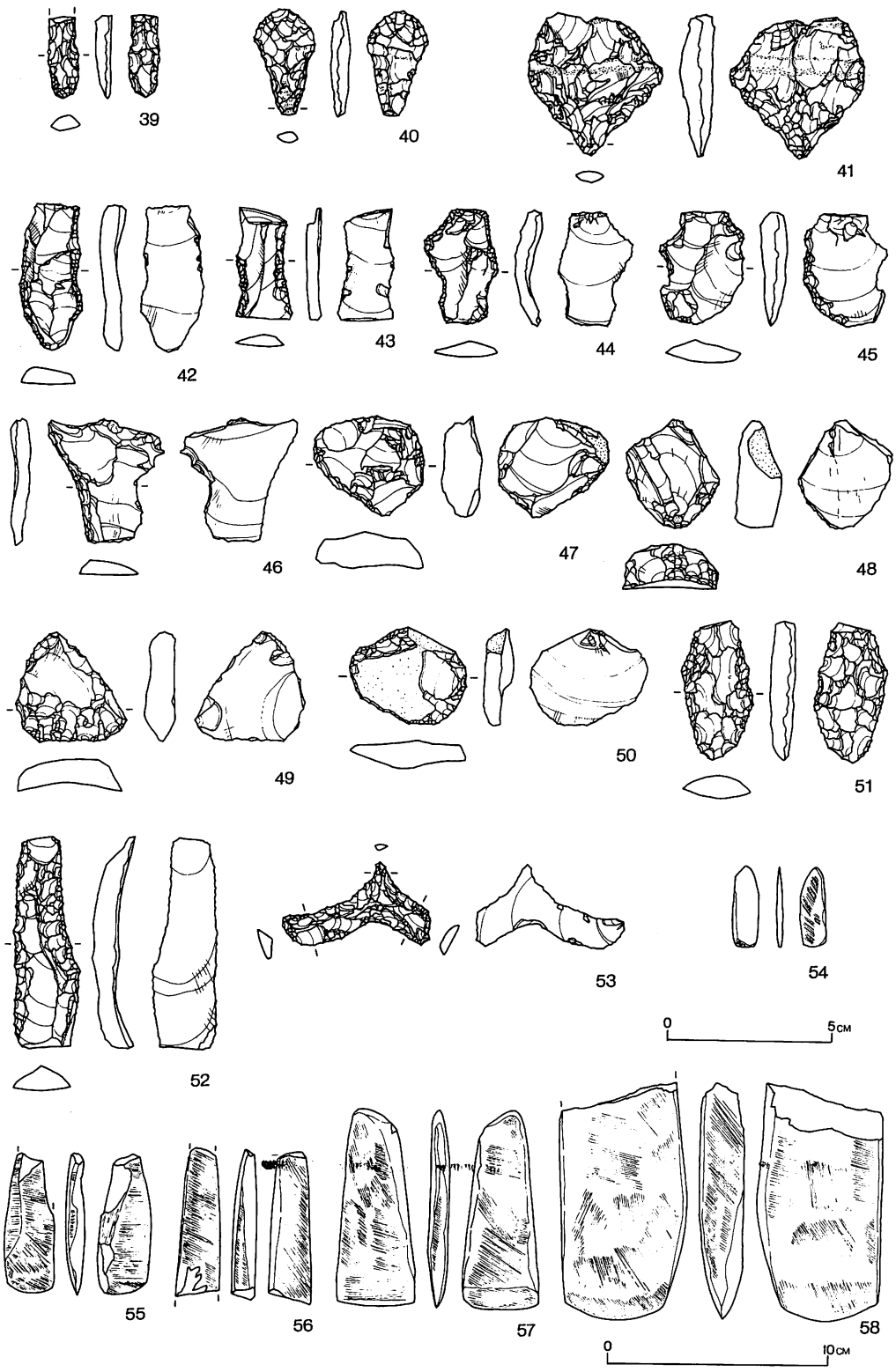
53は異形石器。54はミニチュアの石斧。　　（越田雅司）



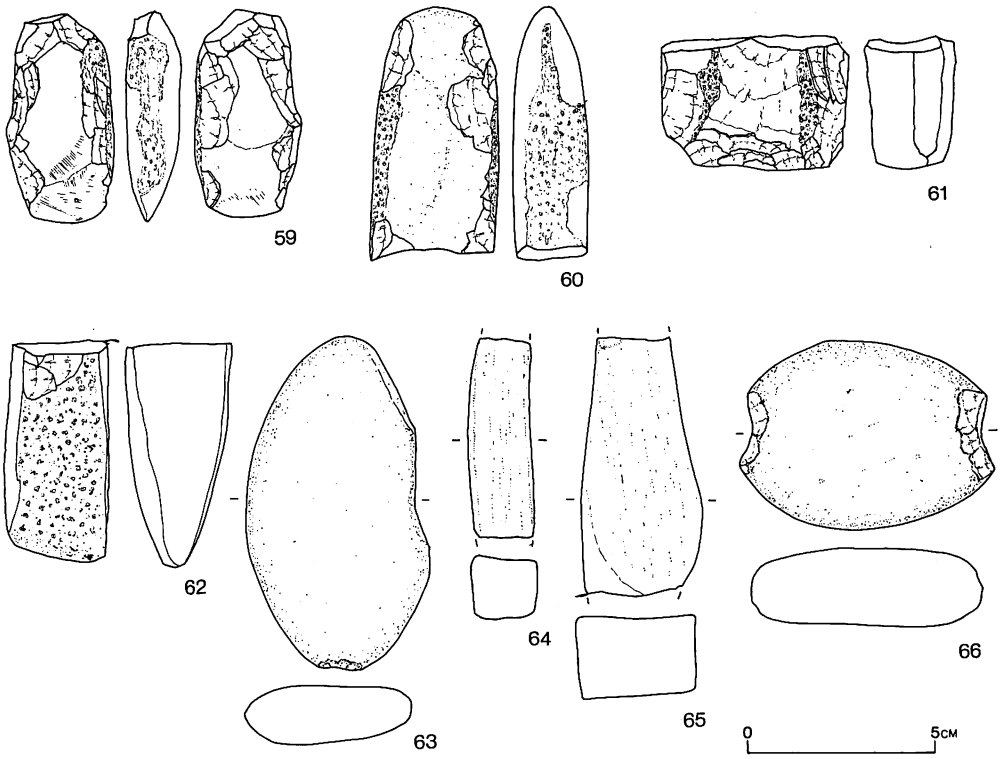
図Ⅳ－23　包含層出土の石器(1)



図Ⅳ－24　包含層出土の石器(2)



図Ⅳ－25　包含層出土の石器(3)



図Ⅳ－26　包含層出土の石器(4)

4　まとめ

(1) 遺構

第Ⅱ黒色土層の遺構には竪穴住居跡1軒、大型の竪穴状遺構1基や土壙2個がある。いずれも縄文時代中期のものである。竪穴住居跡は南北に長軸をもつ卵形で、確認面から50cm程の深さをもつ。中央部に三か所の炉跡がありこのうちの1か所は石囲いのものである。南側の先端部には出入口と推定される掘り込みがある。柱穴は床面に不規則に認められるものと、内傾した外周するものとがある。焼土・柱穴からみて建替えられた可能性がある。このような特徴をもつ住居跡は、道南のノダップⅡ式、煉瓦台式を伴うものである。竪穴状遺構は大型の長円形で、明確な柱穴をもたず、炉跡は検出されない。形状、出土遺物からみて北筒式の時期のものである。類例は美々5遺跡で2基確認されている。Ⅱ黒層上面からの確認の状態は、住居跡は浅くくぼみ、竪穴状遺構は深くくぼんで確認された。この確認の状態からみて、住居跡が古く、竪穴状遺構が新しいと認められる。このようにみていくと住居跡は、道南のノダップⅡ式、レンガ台式をもった人々によって建てられ、廃棄された後、北筒式をもった人々によって建替えられたものと推定される。東側に隣接する美々4遺跡は、美々3遺跡と連続する遺跡である。昭和60年度の調査では縄文時代中期～後期のものと思われる4軒の竪穴住居跡が確認されてい

る。この住居跡は今年度に確認されたものと同じく、台地上の平坦部に位置する。未調査部分の平坦部から、これらに続く住居跡が検出される可能性があり、縄文時代中期から後期にかけての住居跡の特色が明らかになるかもしれない。（佐藤和雄）

(2) 土器

土器は北筒式が多量に出土し、それらに伴うとみなされるノダップⅡ式・煉瓦台式に相当する資料も認められた。それらの道南系の土器を細かく検討すると、若干の時間差をもつもののようであり、それに対応して、北筒式も古い段階から新しい段階へと変遷したことが考えられる。北筒式の中にはノダップⅡ式との関連を示す施文や、煉瓦台式とのかかわりを想わせる特色を示すものもあり、今後の出土状態と合わせて検討すべき課題となる。また本遺跡で認められるような道南系の土器の出土する状態は、道央部でも太平洋側に認められる特色なのではないだろうか。北筒式自体にも微妙な地域差がありそうである。（大沼忠春）

(3) 石器

石器はほとんどが北筒式土器に伴うとみられ、器種別にみると、石槍が多く、破損品も含めて剝片石器の60％を占めている。石鏃は有茎のものが多いが石鏃自体の量は少ない。礫石器は砥石・たたき石が認められるのに対して、すり石が一点も出土していない。このほかの遺物では黒曜石のフレイク・チップが多量に出土している。さらに緑色泥岩の剝片も多く出土している。

石槍の破損品が多く、多量のフレイク・チップがみられることから、石槍の製作がなされていた可能性がある。さらに緑色泥岩の剝片が多いのに対して石斧の量が極めて少ない事から石斧の加工がなされていた可能性がある。

この様な作業場と住居跡との関連は、未調査部分の発掘において明らかになるだろう。

（佐藤和雄）

表Ⅳ－1　包含層の出土遺物一覧

名　　称		数　量
土　　器	Ⅱ群a-1類	1
	Ⅲ群a類	2
	Ⅲ群b-3類	7,856
	Ⅳ群a類	25
	Ⅴ群b類	18
土　器　計		7,902
石　　鏃		28
石槍又はナイフ		132
石　　錐		12
スクレイパー		55
石　　斧		157
石斧剝片		4,157

名　　称	数　量
たたき石	33
砥　　石	23
台　　石	12
石　　皿	4
石　　錘	2
コ　　ア	23
Ｕフレイク	39
Ｒフレイク	291
フレイク･チップ	38,041
礫・礫片	444
細　　礫	16
焼　　礫	19
石　製　品	1
石　器　計	43,489
総　　計	51,391

表Ⅳ－2　遺構の出土遺物一覧

名　　称	分類	数　量	
		覆土	床
土　　器	Ⅲb-3	1,676	29
土　器　計	Ⅳa	21	
土　器　計		1,697	29
石　　鏃		3	
石槍又はナイフ		22	
石　　錐		2	
スクレイパー		6	
石　　斧		10	
石斧剝片		175	3
たたき石		2	
すり石		1	1
台　　石		2	

名　　称	分類	数　量	
		覆土	床
石　　皿		1	
コ　　ア		3	
Ｕフレイク		39	
Ｒフレイク		31	
フレイク･チップ		1,866	57
礫・礫片		10	
細　　礫		18	
焼　　礫		5	
原　　石			4
石　器　計		2,196	65
総　　計		3,893	94
		3,987	

表Ⅳ－３　遺構別出土遺物一覧

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量 覆　土	 床　面
H－1	土　器	Ⅲb-3	1,310	7
		Ⅳa	6	
	計		1,316	7
	石　斧		5	
	石斧素材		1	
	石斧剝片		112	1
	すり石		1	
	台　石		2	
	石　皿		1	
	使用痕フレイク		8	
	加工痕フレイク		11	
	フレイク・チップ		478	2
	礫・礫片		14	
	細　礫		5	
1,964点	計		638	3
H－2	土　器	Ⅲb-3	313	22
		Ⅳa	14	
	計		327	22
	石　鏃		3	
	石槍又はナイフ		21	
	ドリル		2	
	スクレイパー		6	
	石　斧		3	
	石斧素材		1	
	石斧剝片		62	2

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量 覆　土	 床　面
H－2	たたき石		2	
	すり石			1
	使用痕フレイク		30	
	加工痕フレイク		18	
	コア		2	
	フレイク・チップ		1,363	55
	礫・礫片		13	
	焼　礫			4
1,937点	計		1,526	62
P－6	土　器	Ⅲb-3	3	
	計		3	
	フレイク・チップ		1	
4点	計		1	
P－7	土　器	Ⅲb-3	50	
		Ⅳa	1	
	計		51	
	石槍又はナイフ		1	
	石斧剝片		1	
	使用痕フレイク		1	
	加工痕フレイク		2	
	コア		1	
	フレイク・チップ		24	
	礫・礫片		1	
82点	計		31	

表Ⅳ－４　遺構の掲載土器一覧

(1)

遺構番号	図番号	分　類	層　位
H－2	1	Ⅲb-3	覆　土
	2	〃	〃
	3	〃	SP－58覆土
	4	〃	覆　土
	5	〃	〃
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	〃	〃
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	〃	〃
	13	〃	〃
	14	〃	床
	15	〃	覆　土
	16	〃	〃
	17	〃	〃
	18	〃	〃
	19	〃	〃
	20	〃	〃
	21	〃	〃
	22	〃	覆土２層
	23	〃	SP42覆土
	24	〃	床
	25	〃	覆　土
	26	〃	SP－54覆土
	27	〃	覆　土
	28	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
H－2	29	Ⅲb-3	覆　土
	30	〃	〃
	31	〃	〃
	32	〃	〃
	33	〃	〃
	34	〃	床
	35	〃	覆　土
	36	〃	〃
	37	〃	〃
	38	〃	〃
	39	〃	〃
	40	〃	〃
	41	〃	〃
	42	〃	〃
	43	〃	覆土２層
	44	〃	〃
	45	〃	覆土３層
	46	〃	覆　土
	47	〃	覆土１層
	48	〃	覆土３・４層
	49	Ⅳa	覆　土
	50	〃	〃
H－1	1	Ⅲb-3	〃
	2	〃	〃
	3	〃	〃
	4	〃	〃
	5	〃	〃
	6	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
H－1	7	Ⅲb-3	覆　土
	8	〃	〃
	9	〃	〃
	10	〃	〃
	11	〃	〃
	12	〃	〃
	13	〃	〃
	14	〃	〃
	15	〃	〃
	16	〃	〃
	17	〃	〃
	18	〃	〃
	19	〃	〃
	20	〃	〃
	21	〃	〃
	22	〃	〃
	23	〃	〃
	24	〃	〃
	25	〃	〃
	26	〃	〃
	27	〃	〃
	28	〃	〃
	29	〃	〃
	30	〃	〃
	31	〃	〃
	32	〃	〃
	33	〃	〃
	34	〃	〃

(2)

遺構番号	図番号	分　類	層　位
H－1	35	Ⅲb-3	覆　土
	36	〃	〃
	37	〃	〃
	38	〃	〃
	39	〃	〃
	40	〃	床　直
	41	〃	覆　土
	42	〃	〃
	43	〃	〃
	44	〃	〃
	45	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
H－1	46	Ⅲb-3	覆　土
	47	〃	床
	48	〃	覆　土
	49	〃	〃
	50	〃	〃
	51	〃	〃
	52	〃	〃
	53	〃	〃
	54	〃	〃
	55	Ⅳa	〃
	56	〃	〃

遺構番号	図番号	分　類	層　位
P－6	1	Ⅲb-3	覆　土
	2	〃	〃
P－7	1	〃	覆土4層
	2	〃	覆　土
	3	〃	〃
	4	〃	覆土4層
	5	〃	覆　土
	6	〃	〃
	7	〃	〃
	8	〃	〃

表Ⅳ－5　遺構の掲載石器一覧

遺構番号	図番号	名　称	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
H－2	51	石　鏃	覆　土	2.4×1.5× 04	1.1	Obs.
	52	〃	〃	2.4×1.5×0.3	0.7	〃
	53	〃	〃	3.4×1.8×0.3	1.2	〃
	54	石槍又はナイフ	〃	3.9×2.5×0.7	4.2	〃
	55	〃	〃	(3.9)×2.2×0.6	(3.6)	〃
	56	〃	〃	4.8×3.0×0.7	6.3	〃
	57	〃	〃	4.6×2.4×0.6	3.9	〃
	58	〃	〃	(3.5)×2.5×0.8	(4.0)	〃
	59	〃	〃	(3.8)×3.2×0.7	(4.6)	〃
	60	〃	〃	(4.1)×2.3×0.9	(7.4)	〃
	61	〃	〃	(2.7)×2.5×0.6	(2.5)	〃
	62	石　錐	〃	3.3×1.3×0.6	1.9	〃
	63	スクレイパー	〃	3.2×3.1×0.6	5.6	〃

遺構番号	図番号	名　称	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
	64	スクレイパー	覆　土	3.1×2.7×0.8	6.1	Obs.
	65	〃	〃	7.0×2.6×1.4	10.1	〃
	66	石　斧	〃	(10.1)×5.4×3.6	(336.9)	Gr-Mud.
	67	〃	〃	10.2×3.9×1.3	64.8	Sl.
	68	たたき石	〃	8.0×4.8×3.5	168.8	Rhy.
	69	すり石	床	7.8×14.6×6.8	950.0	〃
H－1	57	Rフレイク	覆　土	3.9×3.1×0.4	2.4	Obs.
	58	〃	〃	4.7×2.9×0.6	5.2	〃
	59	〃	〃	4.0×1.8×0.5	3.2	〃
	60	フレイク	〃	8.5×6.1×1.0	48.0	Qua.
	61	石斧未製品	〃	15.2×6.1×5.1	552.8	Gr-Mud.
	62	〃	〃	9.3×6.2×3.0	261.2	〃
P－7	9	石槍又はナイフ	覆　土	(4.4)×(2.2)×0.7	(4.1)	Obs.

表Ⅳ－6　包含層の掲載土器一覧

(1)

図番号	発掘区
1	G_1-67-77
2	G_1-62-48
3	G_2-62-37
4	G_2-62-47
5	G_2-62-08
6	G_1-62-78
7	G_1-63-81
8	G_1-63-81
9	G_1-62-37
10	G_1-63-71
11	G_1-62-89
12	G_1-63-91
13	G_1-62-98
14	G_1-63-61
15	G_1-62-59
16	G_1-63-80
17	G_1-63-81
18	G_1-62-98
19	G_1-63-81
20	G_1-62-99
21	G_1-63-61
22	G_1-62-48
23	G_1-63-91
24	G_1-62-88
25	G_1-62-37
26	G_1-63-70

図番号	発掘区
27	G_1-62-97
28	G_1-63-80
29	G_1-62-98
30	G_1-63-81
31	G_1-62-48
32	G_1-63-51
33	G_1-63-50
34	G_1-62-19
35	G_1-62-78
36	G_1-63-90
37	G_1-63-40
38	G_1-63-61
39	G_1-62-28
40	G_1-62-48
41	G_1-63-60
42	G_1-63-61
43	G_1-63-51
44	G_1-63-81
45	G_1-63-61
46	G_1-62-18
47	G_1-63-71
48	G_1-62-38
49	G_1-63-51
50	G_1-63-81
51	G_1-63-81
52	G_1-63-70

図番号	発掘区
53	G_2-63-11
54	G_1-63-71
55	G_1-62-69
56	G_1-63-80
57	G_1-63-71
58	G_1-63-00
59	G_2-63-11
60	G_1-63-91
61	G_1-62-47
62	G_2-62-48
63	G_1-63-91
64	G_1-63-70
65	G_1-62-89
66	G_1-63-81
67	G_1-62-27
68	G_1-63-90
69	G_2-62-18
70	G_2-62-17
71	G_1-63-81
72	G_1-62-08
73	G_1-63-81
74	G_1-62-08
75	G_1-62-78
76	G_1-63-61
77	G_1-63-80
78	G_1-62-38

図番号	発掘区
79	G_1-62-18
80	G_1-63-61
81	G_1-63-61
82	G_1-63-91
83	G_1-62-38
84	G_1-62-78
85	G_2-63-11
86	G_1-63-81
87	G_1-62-98
88	G_2-63-41
89	G_1-63-20
90	G_2-62-09
91	G_1-63-61
92	G_1-63-71
93	G_2-63-01
94	G_1-62-48
95	G_1-63-61
96	G_1-62-08
97	G_1-63-61
98	G_1-63-80
99	G_2-63-41
100	G_1-63-51
101	G_1-62-78
102	G_1-63-81
103	G_1-63-61
104	G_1-62-98

図番号	発掘区
105	G_1-63-61
106	G_1-63-81
107	G_1-62-87
108	G_1-62-28
109	G_1-63-80
110	G_1-63-81
111	G_1-63-81
112	G_1-64-51
113	G_1-62-77
114	G_1-63-70
115	G_1-63-80
116	G_1-63-81
117	G_1-62-98
118	G_1-63-71
119	G_1-63-71
120	G_2-63-11
121	G_1-62-89
122	G_1-62-18
123	G_2-63-31
124	G_1-62-37
125	G_1-63-61
126	G_1-62-38
127	G_1-63-81
128	G_1-62-89
129	G_2-63-21
130	G_2-63-31

図番号	発掘区
131	G1-62-99
132	G1-63-31
133	G1-63-70
134	G1-63-71
135	G2-63-00
136	G1-62-57
137	G2-63-31
138	G1-62-89
139	G2-62-09
140	G1-63-50
141	G2-62-49
142	G1-63-80
143	G1-62-89
144	G1-62-48

図番号	発掘区
145	G1-63-81
146	G1-63-51
147	G1-63-70
148	G1-62-79
149	G1-63-91
150	G2-62-19
151	G2-62-09
152	G1-63-61
153	G1-63-81
154	G1-63-51
155	G1-62-99
156	G1-63-60
157	G1-63-90
158	G1-63-51

図番号	発掘区
159	G1-62-57
160	G1-63-61
161	G2-62-38
162	G1-63-81
163	G2-62-38
164	G2-63-01
165	G1-63-70
166	G2-63-01
167	G2-62-07
168	G1-62-59
169	G1-63-71
170	G2-63-30
171	G2-62-38

図番号	発掘区
172	G1-63-81
173	G1-62-99
174	G1-63-50
175	G2-62-19
176	G2-63-30
177	G1-62-77
178	G2-62-09
179	G1-63-91
180	G1-63-71
181	G2-63-11
182	G1-63-71
183	G1-62-88
184	G1-63-61

図番号	発掘区
185	G1-62-48
186	G1-63-71
187	G1-63-91
188	G1-62-28
189	G1-63-71
190	G2-63-01
191	G1-63-91
192	G1-63-71
193	G2-62-39
194	G2-62-38
195	G1-63-61
196	G1-62-77
197	G1-62-77

表Ⅳ－７　包含層の掲載石器一覧

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
1	石　鏃	G2-63-40	1.9×1.6×0.3	0.5	Obs.
2	〃	G1-63-91	(1.6)×1.3×0.4	(0.5)	〃
3	〃	G1-63-61	(1.6)×0.8×0.2	(0.2)	〃
4	〃	G2-63-41	2.4×1.3×0.5	1.2	〃
5	〃	G1-63-51	(3.2)×1.6×0.5	(2.0)	〃
6	〃	G1-63-90	(3.3)×1.6×0.6	(2.1)	〃
7	〃	G2-62-01	3.0×1.1×0.4	0.9	〃
8	〃	G2-62-37	(2.9)×1.1×0.3	(0.8)	〃
9	〃	G2-62-38	2.7×1.3×0.4	1.0	〃
10	〃	G2-63-11	4.2×1.5×0.4	2.1	Sh.
11	〃	G2-62-19	(2.6)×1.5×0.4	(1.0)	Obs.
12	〃	G1-63-80	(3.1)×1.8×0.4	(1.7)	〃
13	〃	G1-63-91	3.6×2.2×0.3	1.8	〃
14	石槍又はナイフ	G2-62-18	4.9×2.4×0.7	6.8	〃
15	〃	G2-62-48	5.6×2.2×0.7	5.7	〃
16	〃	G2-63-41	4.7×2.3×0.7	4.5	〃
17	〃	G1-63-71	(5.0)×2.7×0.6	(5.0)	〃
18	〃	G2-63-08	5.1×3.0×1.0	8.1	〃
19	〃	G2-63-01	(4.7)×(2.3)×0.6	(3.9)	〃
20	〃	G2-63-41	(4.8)×2.0×0.8	(4.6)	〃
21	〃	G1-63-91	(4.9)×2.2×0.7	(5.8)	〃
22	〃	G1-63-80	(4.3)×2.7×0.6	(5.0)	〃
23	〃	G2-62-19	4.4×2.6×0.7	5.7	〃
24	〃	G2-62-49	(4.1)×3.5×0.8	(8.7)	〃
25	〃	G1-63-91	(3.3)×1.8×0.7	(2.3)	〃
26	〃	G1-63-71	3.2×2.5×0.6	3.2	〃
27	〃	G1-63-01	12.2×3.3×0.9	(25.6)	Sh.
28	〃	G2-63-01	5.6×1.7×0.7	6.7	Sh.
29	〃	G1-63-91	6.6×2.7×1.2	16.6	Obs.
30	〃	G1-63-90	(4.1)×1.9×0.9	(6.8)	〃
31	〃	G2-63-31	(4.2)×2.2×1.0	(7.0)	〃
32	〃	G2-62-49	(4.1)×3.5×0.8	(8.7)	〃
33	〃	G1-63-80	(4.6)×2.6×0.7	(5 8)	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
34	石槍又はナイフ	G2-63-10	(5.5)×3.3×0.8	(6.2)	Obs.
35	〃	G1-63-80	(4.7)×2.8×0.8	(8.2)	〃
36	〃	G1-63-91	(3.5)×3.8×0.8	(8.2)	〃
37	石　錐	G2-63-01	2.4×0.9×0.3	0.6	Sh.
38	〃	G2-63-11	(3.9)×1.1×0.6	(2.0)	Qua.
39	〃	G2-63-40	(2.4)×0.9×0.5	(1.3)	Obs.
40	〃	G2-63-01	3.1×1.8×0.6	2.8	〃
41	〃	G2-63-01	4.2×4.1×1.0	12.7	〃
42	スクレイパー	G1-63-51	2.9×3.5×0.9	6.7	〃
43	〃	G2-62-08	3.3×1.6×0.4	2.0	〃
44	〃	G2-62-09	3.4×1.8×0.6	3.3	
45	〃	G1-63-81	3.4×2.5×0.8	5.7	Obs.
46	〃	G1-63-91	(3.8)×3.4×0.6	(5.2)	〃
47	〃	G2-63-41	3.0×3.3×1.1	9.7	〃
48	〃	G2-63-20	3.2×2.7×1.3	11.0	〃
49	〃	G1-63-60	3.3×3.1×0.9	8.8	〃
50	〃	G1-63-51	2.9×3.5×0.9	6.7	〃
51	〃	G2-63-01	(4.2)×2.0×0.7	(6.3)	〃
52	〃	G2-63-00	6.4×1.9×0.8	10.0	Sh.
53	異形石器	G1-63-80	(1.8)×(4.4)×0.3	(3.3)	Obs.
54	〃	G1-63-50	2.4×0.8×0.2	0.6	Gr-Mud.
55	石　斧	G2-62-48	6.4×2.3×0.8	17.4	〃
56	〃	G1-63-81	(6.7)×1.9×1.1	(25.2)	〃
57	〃	G2-63-48	9.0×3.5×0.9	60.2	〃
58	〃	G1-63-61	10.8×5.7×2.0	195.4	Ser.
59	〃	G1-62-19	8.2×4.2×2.1	117.4	Gr-Mud.
60	石斧未製品	G1-63-91	10.0×5.0×3.0	279.2	〃
61	〃	G1-63-71	5.0×7.4×3.6	285.8	〃
62	〃	G1-63-81	7.8×4.1×4.1	266.2	〃
63	たたき石	G2-63-40	13.2×7.3×2.4	338.8	Sa.
64	砥　石	G1-63-80	(7.9)×2.5×2.3	(81.8)	〃
65	〃	G1-63-80	(10.3)×4.8×3.0	(221.6)	〃
66	石　錘	G1-63-31	10.2×7.4×3.1	538.0	Gni?

表Ⅳ－８　遺構一覧

名称	位　置	平面形	規　模（m）			備　考
			確認面	底　面	最大深	
H－２	G1-63-60･61･70･71	楕円形(卵形)	5.90×4.64	5.02×4.32	0.50	N－7.0°－W
H－１	G1-62-69･79, G1-63-60･70	不整楕円形	8.15×4.65	7.54×4.16	0.40	N－58.0°－E
P－６	G1-63-11	円　形	0.66×0.64	0.39×0.24	0.42	N－72.5°－E
P－７	G1-63-60	楕円形	2.71×2.30	2.10×1.69	0.47	N－90.0°－E

Ⅴ　美々３遺跡第Ⅰ黒色土層の調査

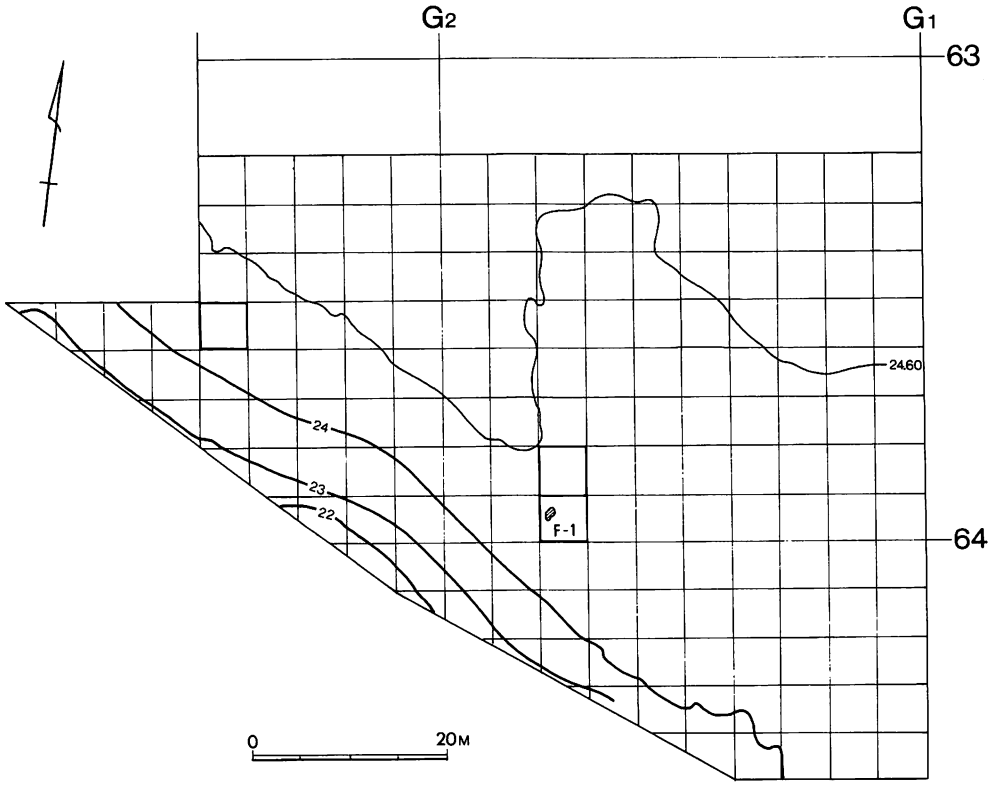
1　調査の概要

Ⅰ黒層は、対象の全面積にあたる6,000㎡についておこなった。Ⅰ黒層の調査範囲は、分布調査・隣接する美々４遺跡の調査結果から、美沢川に近い部分のみである。したがって昭和61年度に調査した北側部分ではⅡ黒層のみを対象としている。

調査区は、美々４遺跡の西側に隣接する標高約22～24ｍの美沢川左岸台地とそれに続く斜面である。

調査の結果、焼土が１か所と縄文時代晩期の土器、石器等が出土した。いずれも量はわずかである。

（佐藤和雄）



図Ⅴ－１　遺構位置図

2　遺構及び遺物の出土状況

(1)　遺構

焼土が1か所確認されたのみである。

(a)　焼土

位　置　G_1－63－79

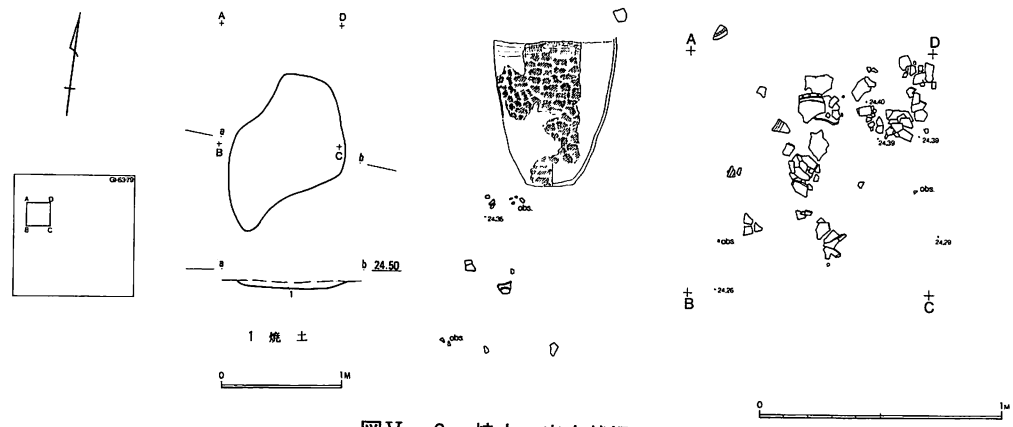
台地の縁辺部に位置する。Ⅰ黒層の中位から、縄文時代晩期の深鉢とともに確認された。焼土の厚さは約6㎝である。

時期は、出土土器から縄文時代晩期と考えられる。

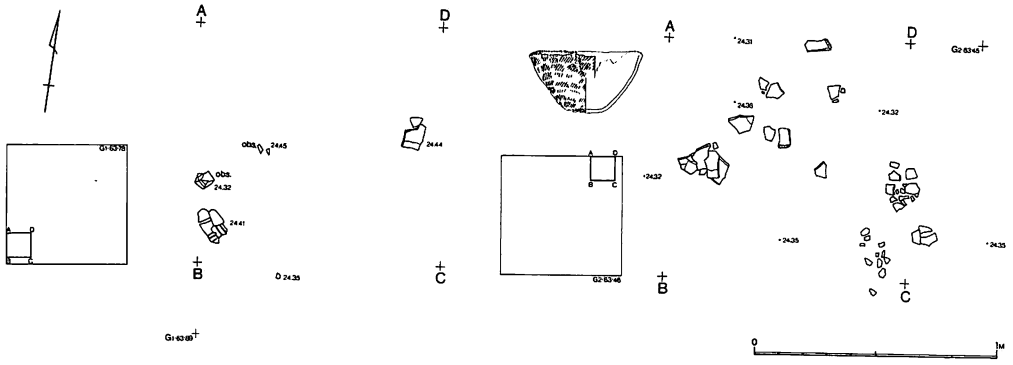
(2)　遺物の出土状況

調査区の南側・台地の縁辺部で4か所遺物がまとまって出土している。このほかには、散在して出土している。遺物はおもにⅠ黒層の中位～下位にかけて出土している。縄文時代晩期の土器片とこれに伴う石器等が主体である。まとまって出土したものには、G_1－63－79で焼土に伴って深鉢1個体、その付近からは浅鉢が1個体出土した。G_2－63－45で鉢、G_1－64－71で深鉢がそれぞれ出土している。G_1－63－78では、土器とともに大型のコアが出土した。

（佐藤和雄）



図Ⅴ－2　焼土・出土状況



図Ⅴ－3　出土状況

3　包含層出土の遺物

第Ⅰ黒色土層から出土した遺物には土器と石器がある。

(1) **土器**（図Ⅴ－4・5）

土器はすべてⅤ群c類に属するものである。これには在地系の文様をもつものと、道南系の文様をもつものとがある。在地系のものでは復元個体が4個体ある。

1は器高30cmあまりの深鉢形土器で、器壁にやや凹凸がある。口縁に3条の細い沈線をめぐらせている。地にLRの原体で浅い圧痕の縄文を施したものである。口唇に縄文を施したのち、口縁を指頭で内側へ押し込んでいる。

2は器高20cmほどの鉢形土器で、口縁部に鋸歯線を2段に重ね、その間に短刻線を配した口縁部文様帯を形成する。体部との境は、指頭による浅い沈線の上、下縁を刺突文で縁取って区画している。

3は口径25cmほどの縄文の施された浅鉢形土器で、口唇断面は切り出し形を呈し、口唇に縄文を施したのち、口縁に指頭を押しつけている。縄文はLR原体による。

4は口径13cmほどの小形の浅鉢形土器で、口縁の突起が1か所残存している。器面にはR原体による無節の縄文が浅く施されている。口唇に縄文施文後に断面円形の棒状工具により刻み目をめぐらせている。底部との境には棒状工具による刺突がつけられている。突起の内面にはR原体の縄の側面圧痕が縦につけられている。

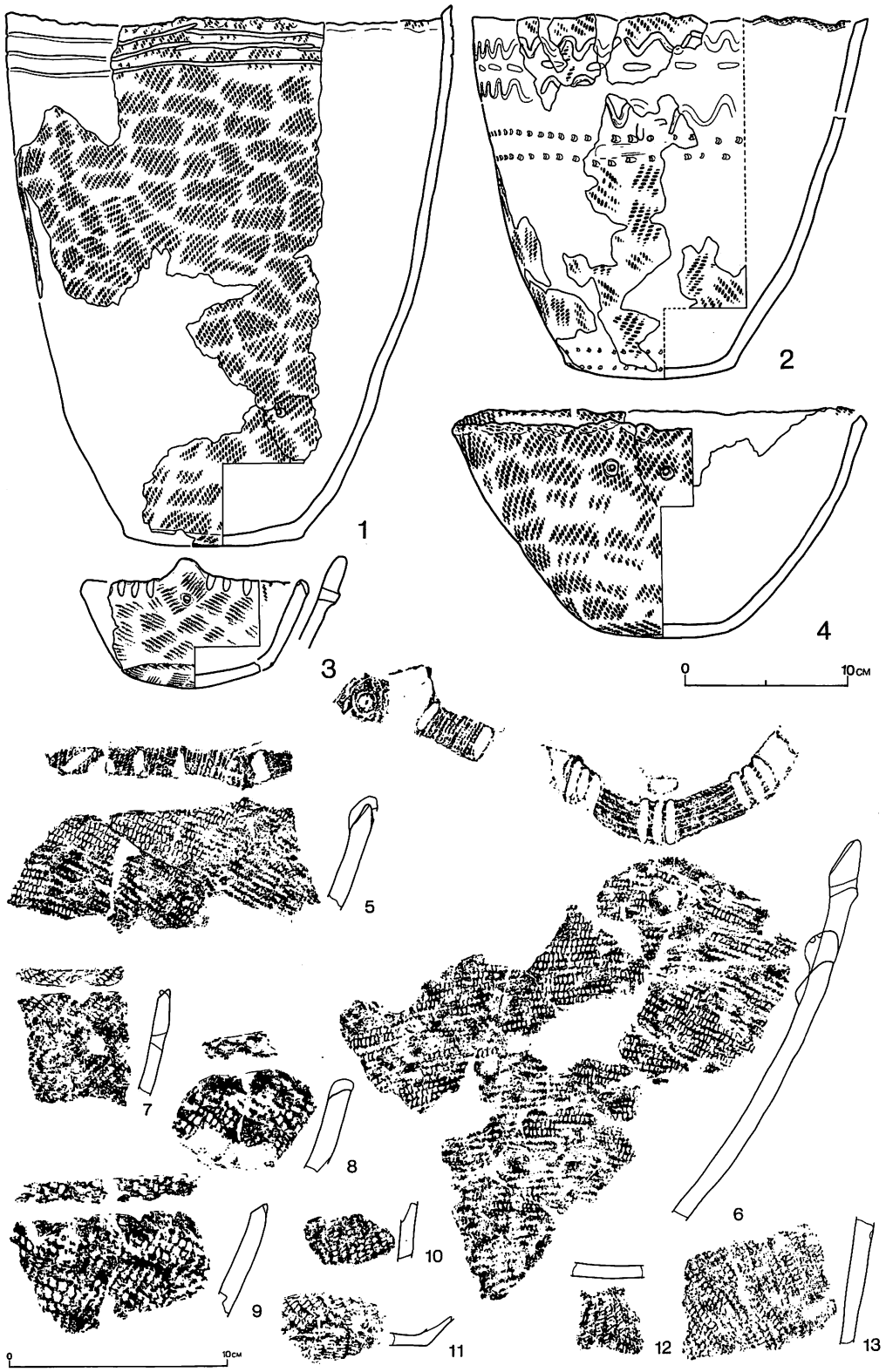
5・6は同一個体の大形皿形土器で、比較的厚手である。器面にはRLの原体による浅い圧痕の縄文が施されている。口唇には細いLの原体をていねいに押しつけ、棒状工具による沈線や刺突文を加えて装飾している。口唇の断面形は切出し形を呈する。

7～9は縄文の施された鉢形土器の口縁部、10は胴部、11は底部、12は底面である。13は口縁部文様帯の下縁を画する刺突文の認められる胴部の破片である。

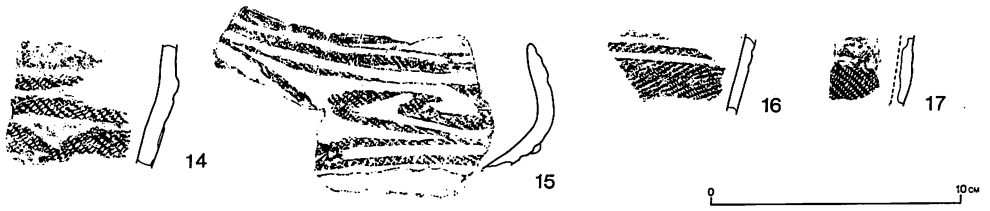
14～17は亀ヶ岡式系統の文様のある土器で、胎土、器壁の調整が在地系の土器と通ずるのは、14のみである。15～17は多量の砂粒を含み、器壁の調整はなめらかである。縄文は細かく整っている。これらは搬入されたものなのであろう。（大沼忠春）

(2) **石器**　（図Ⅴ－6、図版Ⅴ－3－2）

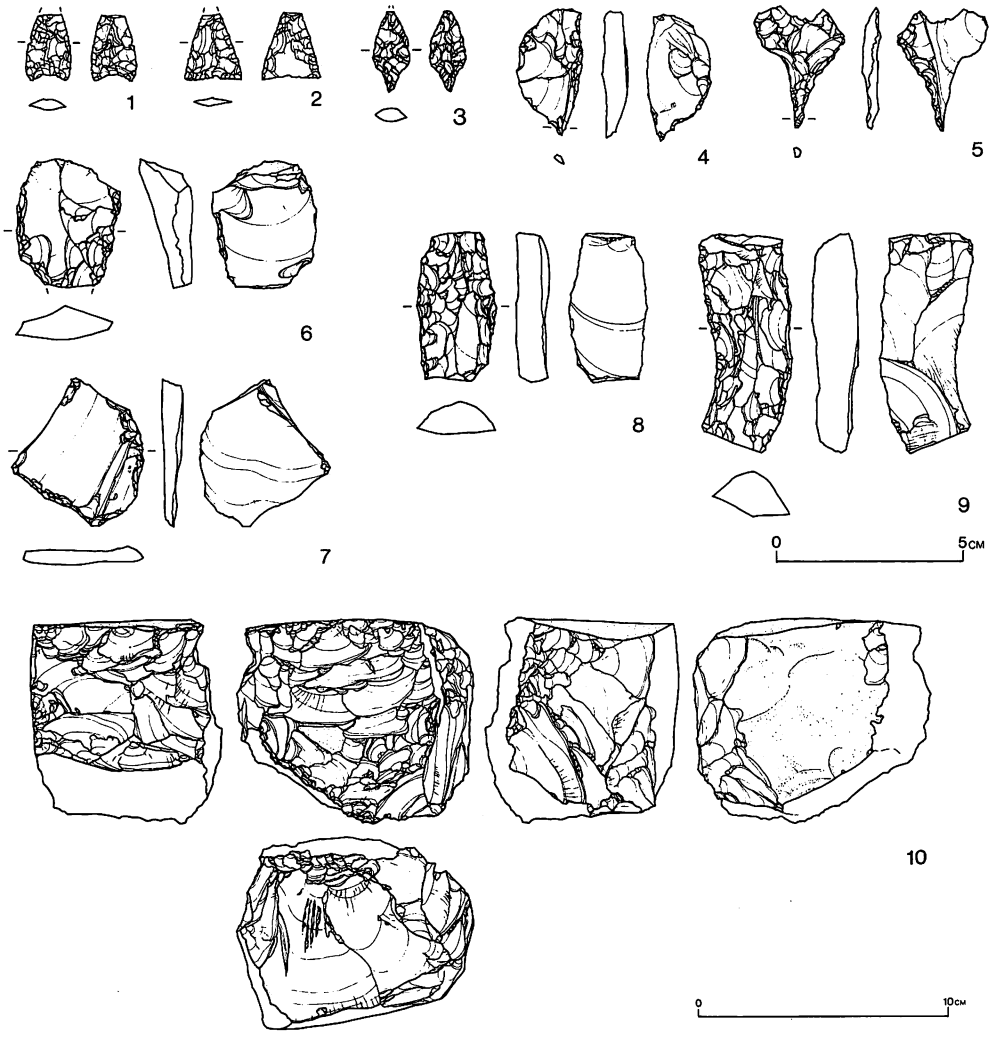
1～3は石鏃。Ⅰ黒層から出土した石鏃は5点、1は凹基、2は平基の三角形鏃。1は側縁にふくらみを持つ。2には裏面の基部調整は施されていない。3は有茎の石鏃。厚みがある。4・5は石錐。4は横長の剝片を素材としている。右側縁には細かい加工がみられるが、基部にはみられない。5は突出した刃部を持つ。側縁には磨耗痕がみられる。6～9はスクレイパー類。6・7は剝片の形状を変えることなく刃部を作出している。8・9は片面加工。10は石核。F－1付近のG_1－63－58区で出土した。少なくとも6回の打面転位を行ないながら不定形の剝片を剝離させている。礫皮面を大きく2面に残す。周辺から黒曜石製の剝片が出土したが、接合関係は見い出せなかった。（越田雅司）



図Ⅴ－４　包含層出土の土器(1)



図Ⅴ－5　包含層出土の土器(2)



図Ⅴ－6　包含層出土の石器

4　まとめ

第Ⅰ黒色土層の遺構は焼土が一か所検出されたのみである。遺物は晩期の土器・石器等が散在して出土した。いずれも点数は僅かであるが、４個体の復元土器・黒曜石の大きな石核が得られている。

東側に隣接する美々４遺跡は本遺跡と連続するものである。昭和58～60年度にわたり調査されていて、晩期の遺構・遺物が確認されている。昭和58年度の調査では遺体を樹皮で包んだ墓壙を含む111個の土壙が検出されている。昭和59年度では40個、昭和69年度では二個の土壙が検出されている。調査結果からみて、晩期の遺跡の主体は東側の斜面部分にあり、西側の平坦部へ向うにしたがって密度が薄くなる傾向にある。この時期の住居跡は美々４遺跡の東側に位置する美々５遺跡で確認されているほか、美沢川上流側の美々２遺跡で、34軒の住居跡・住居跡様遺構が確認され一つの集落を形成しているのが認められている。　（佐藤和雄）

表Ⅴ－１　包含層の出土遺物一覧

名　称	数　量
土器　Ⅲ群ｂ-3類	27
Ⅴ群ｃ類	739
土器計	766
石鏃	5
石槍又はナイフ	3
石錐	2
スクレイパー	7
石斧	1
石斧剝片	26

名　称	数　量
たたき石	1
コア	3
Ｕフレイク	1
Ｒフレイク	9
フレイク・チップ	204
礫・礫片	6
石器計	268
総計	1,034

表Ⅴ－２　包含層の掲載土器一覧

図番号	発掘区
1	G_1-63-79
2	G_1-64-71
3	G_1-63-79
4	G_2-03-45

図番号	発掘区
5	G_1-63-79
6	G_1-63-79
7	G_2-61-1
8	G_1-64-10

図番号	発掘区
9	G_1-63-78
10	G_1-64-21
11	G_2-63-43

図番号	発掘区
12	G_1-64-24
13	G_2-63-27 G_2-63-85
14	G_1-63-42

図番号	発掘区
15	G_1-64-31 G_1-64-32
16	G_1-64-23
17	G_1-64-31

表Ⅴ－３　包含層の掲載石器一覧

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
1	石鏃	G_2-63-44	(1.7)×1.2×0.3	(0.6)	Obs.
2		G_2-63-45	(1.7)×1.5×0.2	(0.5)	〃
3		G_1-63-88	(2.1)×1.0×0.3	(0.5)	〃
4	石錐	G_1-63-89	3.4×1.7×0.7	3.5	〃
5		G_1-63-86	3.3×2.3×0.4	1.3	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
6	スクレイパー	G_1-63-79	3.4×2.6×1.2	9.7	Sh.
7	〃	G_1-63-88	3.9×3.2×0.5	5.6	Obs.
8	〃	G_1-63-89	4.0×2.1×0.8	8.8	〃
9	〃	G_1-63-88	5.8×2.2×1.2	16.6	〃
10	コア	G_1-63-78	(8.1)×(9.4)×(7.5)	(740.0)	〃

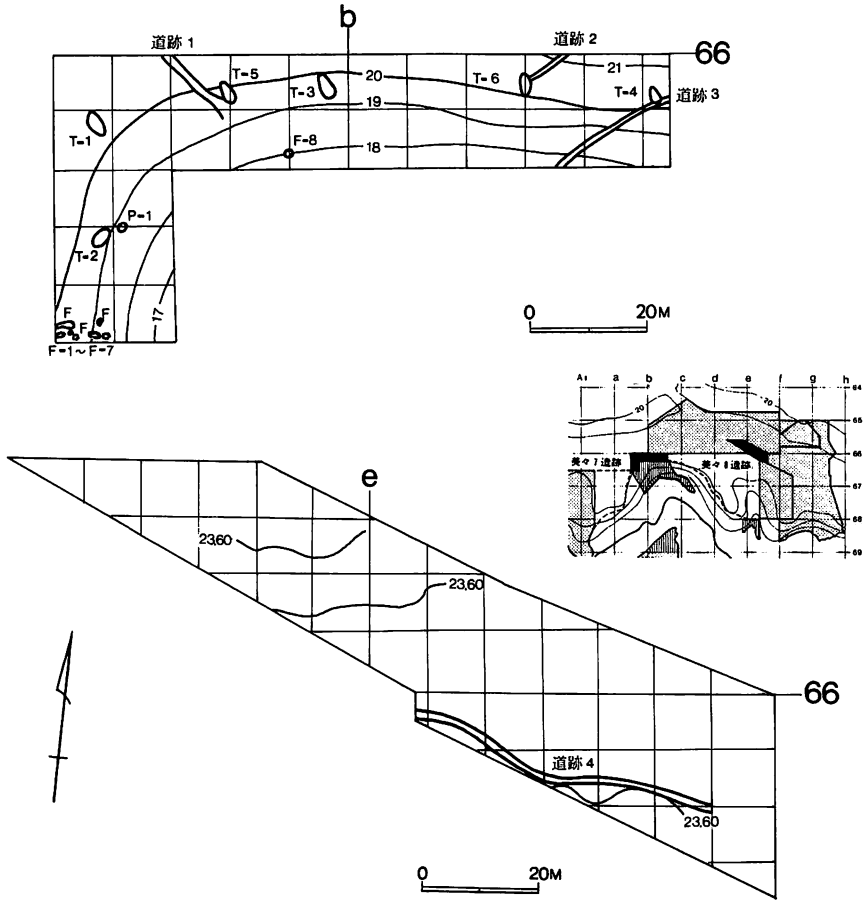
Ⅵ　美々８遺跡第Ⅱ黒色土層の調査

1　調査の概要

Ⅱ黒層の調査は、1,475㎡についておこなった。調査地区は、ｃ・ｂ－66区の台地の縁辺部と、ｅ－65・ｆ－65・66区の台地の平坦部とである。

調査の結果、ｃ・ｂ－66区からは、土壙１個・Ｔピット６基・焼土７か所が確認された。Ⅱ黒層上面からは、道跡が４条確認された。遺物は、縄文時代早期の土器片・石器が少量出土した。

ｅ－65・ｆ－65・66区からは、Ⅱ黒層上面で道跡が確認されたのみである。昭和62年度に調査された道跡へ続くものと思われる。遺物は、縄文時代早期～晩期の土器・石器が少量と石製品が１点出土したのみである。　（佐藤和雄）



図Ⅵ－１　遺構位置図

2　遺構

Ⅱ黒層からは、土壙１個、Ｔピット６基、焼土８か所、道跡４か所が検出された。いずれも標高18から20ｍの台地南縁辺部の急斜面に分布する。土壙及び焼土は、調査区の南西隅のｂ－66－33からｂ－66－44付近に集中する。道跡は、Ⅱ黒層上面で確認され、斜面を斜めに下っているものと、台地上のものがある。

(1)　土壙

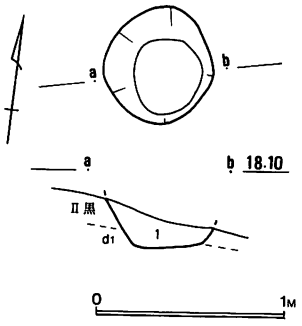
Ｐ－１　（図Ⅵ－２、図版Ⅵ－１、表Ⅵ－１）

位　置　ｂ－66－33　　**規　模**　0.62×0.58／0.39×0.37／0.34

土　層　１　暗褐色土（Ⅱ黒＞d_1）

特　徴　調査区南西斜面の標高17.7ｍに位置する。Ⅱ黒層上面で円形の浅い凹みとして確認された。平面形は不整な円形。堀込み面はⅡ黒中位かと思われる。底面はTa－d_1を浅く堀込んでいる。断面形は底面の平らな鉢形を呈する。遺物は出土していない。

時　期　本遺構周辺からはⅢ群ｂ－２類の土器が多く出土しており、堀込み面や覆土の状況から判断して縄文時代中期頃のものである可能性がある。



図Ⅵ－２　Ｐ－１

(2)　Ｔピット

本年度の調査では６基が検出された。いずれも台地南縁辺部の標高19～20ｍ前後の斜面から、長軸が等高線とほぼ直交する状況で確認された。

Ｔ－１　（図Ⅵ－３、表Ⅵ－２）

位　置　ｂ－66－41　　**規　模**　2.38×1.15／1.85×0.27／1.85

特　徴　調査区西角の比較的傾斜の緩い標高20.0ｍに位置している。Ta－d_1上面で黒色土の落ち込みとして確認された。長軸低地側の壁は底面から40㎝位までオーバー・ハングしている。短軸断面はＹ字状に開く。杭痕はない。遺物は覆土上面から焼成を受けた礫が１点出土した。

Ｔ－２　（図Ⅵ－４、表Ⅵ－２）

位　置　ｂ－66－42・43　　2.06×1.03／1.47×0.31／1.47

特　徴　調査区南西の標高19.5ｍ前後に位置する。Ta－d_1上面で黒色土の落ち込みとして確認された。長軸方向はＮ－41°－Ｅであり、等高線とは斜めに交差する。長軸壁は両側とも壙口付近までオーバー・ハングしている。短軸断面は波打つようなＵ字状である。杭痕、出土遺物はない。

Ｔ－３　（図Ⅵ－４、表Ⅵ－２）

位　置　ｂ－66－00　　**規　模**　2.52×1.27／1.67×0.28／2.07

特　徴　調査区中央の標高19.5m前後の台地南縁辺部に位置している。Ⅱ黒層下位で黒色土の落ち込みとして認された。遺構の壙口は大きく崩落しており、短軸断面はV字状に開く。底面は斜面に沿うように傾斜する。杭痕、出土遺物はない。

T－4　（図Ⅵ－5、表Ⅵ－2）

位　置　c－66－40　　**規　模**　2.07×1.02／1.84×0.33／2.03

特　徴　調査区東端の標高20.0m前後の台地南縁辺部に位置する。Ta－d_1上面で黒色土の落ち込みとして確認された。長軸壁は両側とも底面から40～50cm位までオーバー・ハングしている。短軸断面はY字状に開く。底面は斜面に沿うように傾斜する。杭痕、出土遺物はない。

T－5　（図Ⅵ－5、表Ⅵ－2）

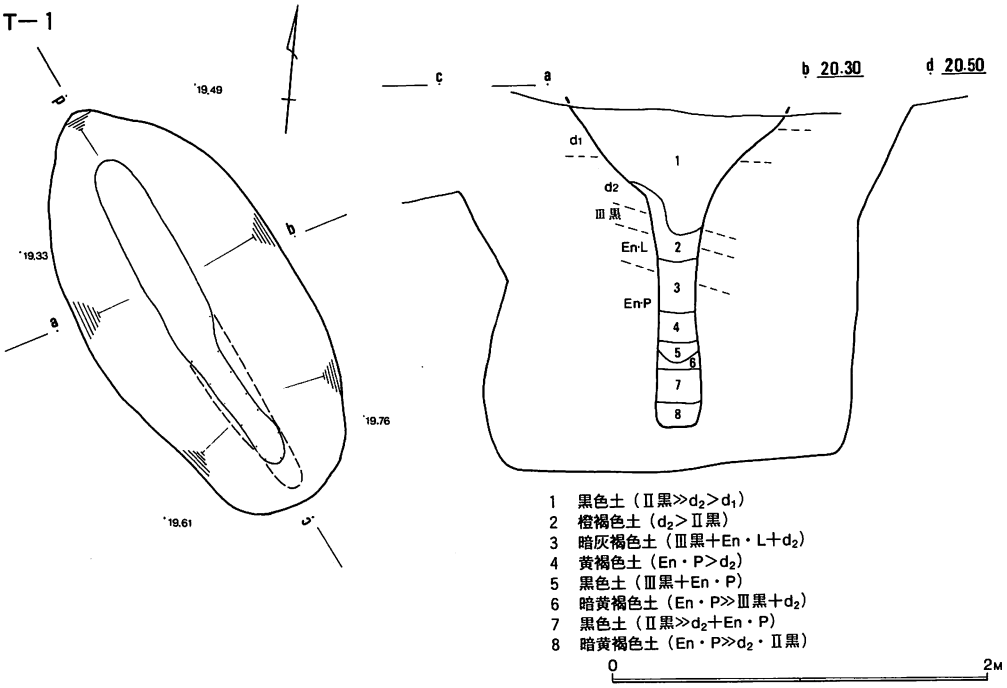
位　置　b－66－20　　**規　模**　2.26×0.86／1.84×0.32／1.97

特　徴　調査区中央のT－3より西へ7m離れた、標高19.5m前後の台地南縁辺部に位置する。Ta－d_2上面で黒色土の落ち込みとして確認された。長軸低地側の壁は、壙口付近まで大きくオーバー・ハングしている。短軸断面はY字状に開く。底面は斜面に沿うように傾斜する。杭痕、出土遺物はない。

T－6　（図Ⅵ－6、表Ⅵ－2）

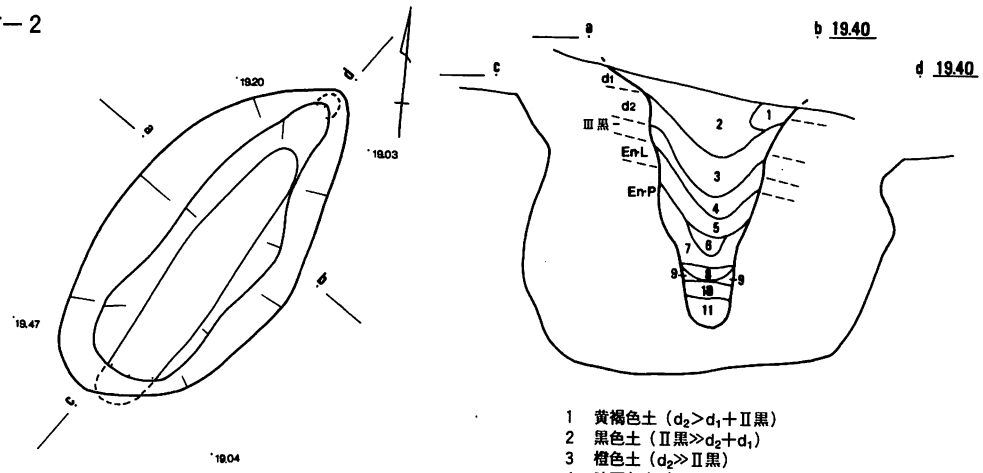
位　置　c－66－70　　**規　模**　2.40×0.97／1.90×0.27／1.92

特　徴　調査区中央のT－3より西へ13m離れた、標高20.0m前後の台地南縁辺部に位置する。Ta－d_2上面で黒色土の落ち込みとして確認された。長軸低地側の壁は壙口付近までオーバー・ハングしている。短軸断面は中央がわずかに膨らんだY字状に開く。杭痕はない。覆土からⅠ群b－4類の土器片（1、2）が出土した。



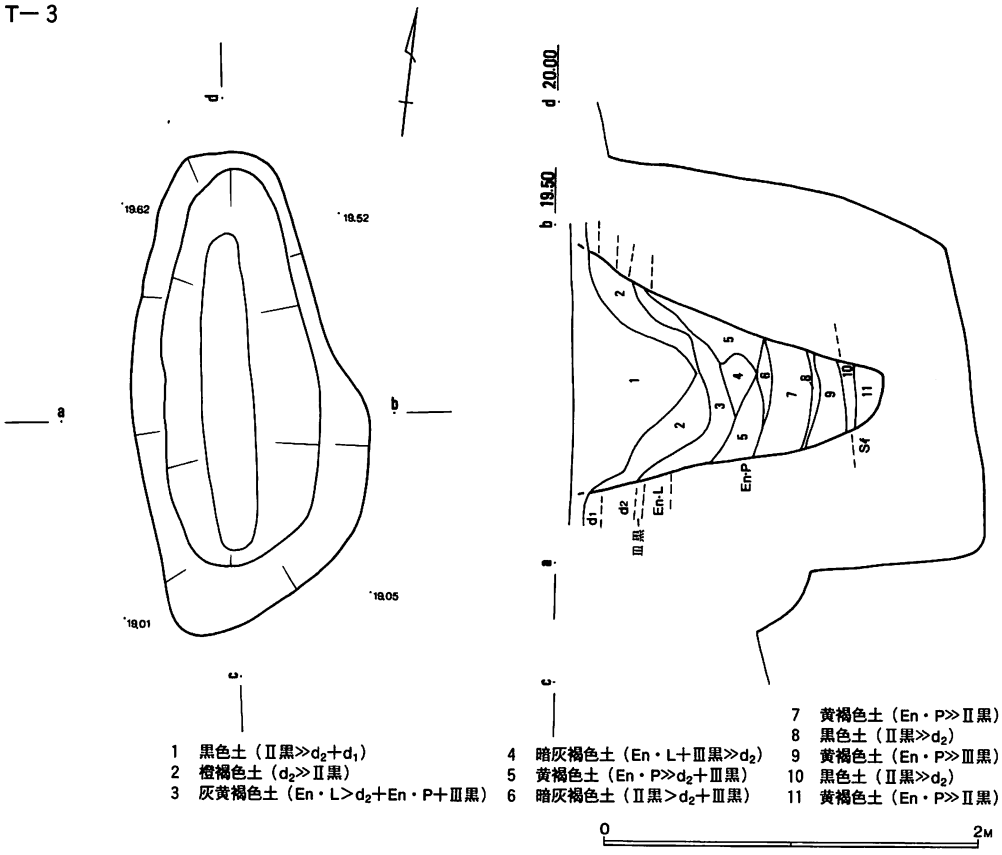
図Ⅵ－3　T－1

T－２



1　黄褐色土（d_2＞d_1＋Ⅱ黒）
2　黒色土（Ⅱ黒≫d_2＋d_1）
3　橙色土（d_2≫Ⅱ黒）
4　暗灰色土（Ⅲ黒≫En・P＞d_2）
5　淡黄褐色土（En・L＞En・P）
6　暗褐色土（Ⅲ黒＋d_2）
7　黄褐色土（En－P≫黒色土＋d_2）
8　黒色土（Ⅲ黒≫d_2）
9　黄褐色土（En・P＋d_2）
10　黒色土（Ⅲ黒≫d_2）
11　暗灰褐色土（Ⅲ黒＞d_2＋En・P）

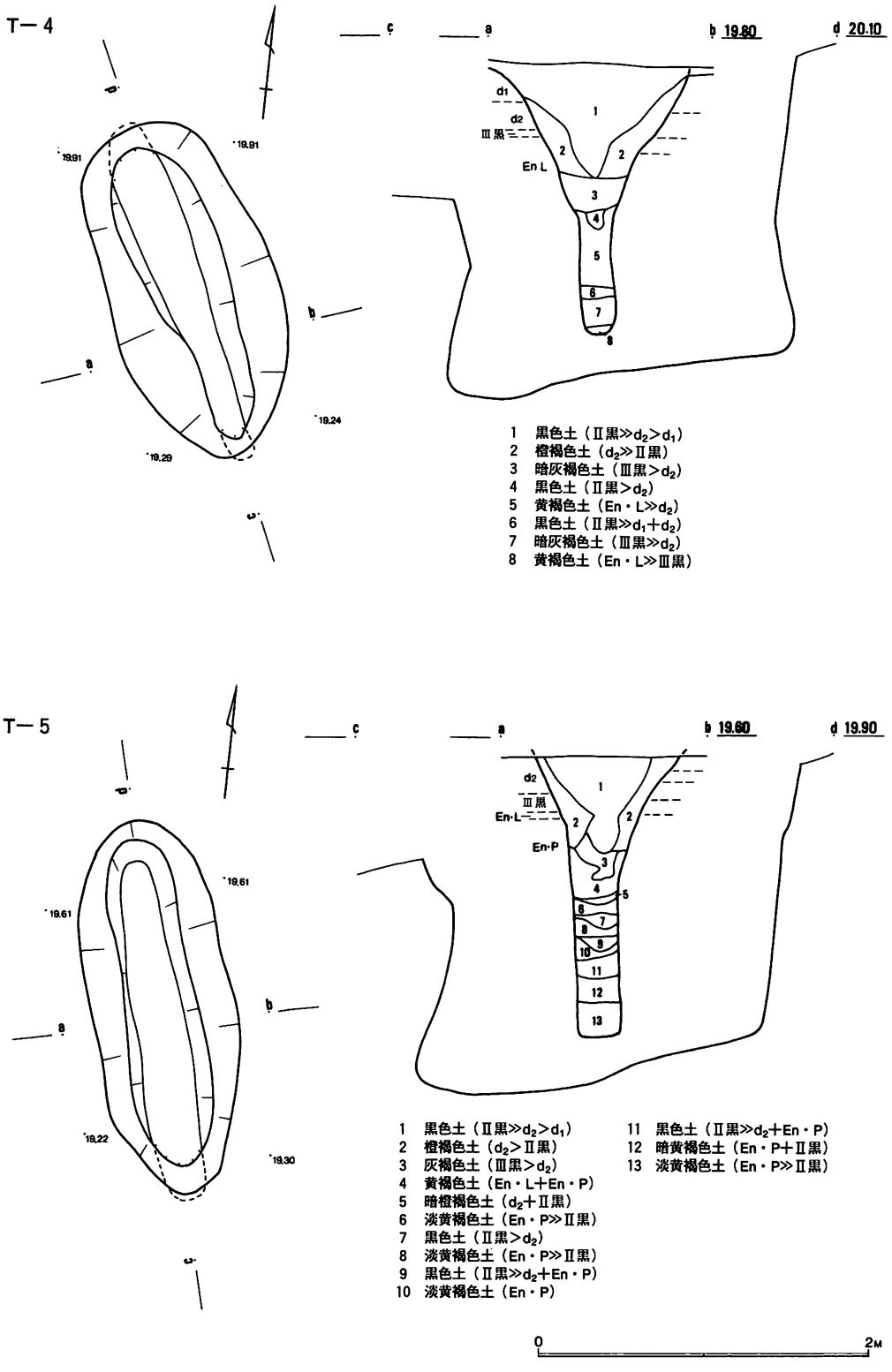
T－３



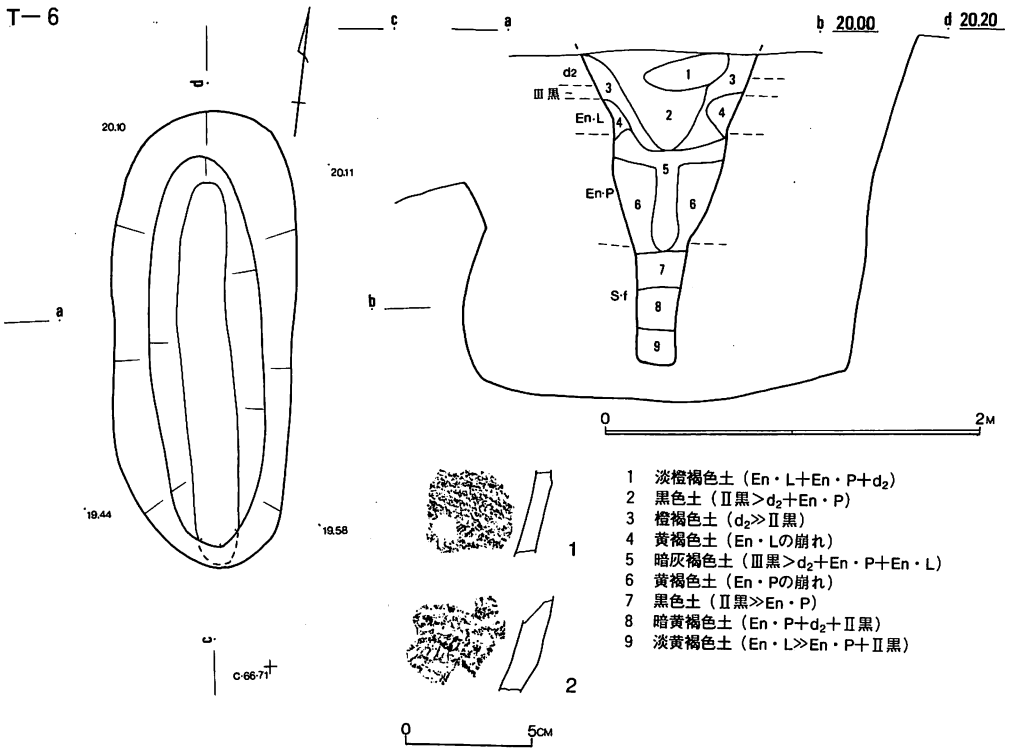
1　黒色土（Ⅱ黒≫d_2＋d_1）
2　橙褐色土（d_2≫Ⅱ黒）
3　灰黄褐色土（En・L＞d_2＋En・P＋Ⅲ黒）
4　暗灰褐色土（En・L＋Ⅲ黒≫d_2）
5　黄褐色土（En・P≫d_2＋Ⅲ黒）
6　暗褐色土（Ⅱ黒＞d_2＋Ⅲ黒）
7　黄褐色土（En・P≫Ⅱ黒）
8　黒色土（Ⅱ黒≫d_2）
9　黄褐色土（En・P≫Ⅲ黒）
10　黒色土（Ⅱ黒≫d_2）
11　黄褐色土（En・P≫Ⅱ黒）

0　2M

図Ⅵ－４　T－２・３


T－4
c
a
b 19.80
d 20.10
19.91
19.91
19.24
19.29
d1
d2
Ⅲ黒
En L
1
2
2
3
4
5
6
7
8
1　黒色土（Ⅱ黒≫d2＞d1）
2　橙褐色土（d2≫Ⅱ黒）
3　暗灰褐色土（Ⅲ黒＞d2）
4　黒色土（Ⅱ黒＞d2）
5　黄褐色土（En・L≫d2）
6　黒色土（Ⅱ黒≫d1＋d2）
7　暗灰褐色土（Ⅲ黒≫d2）
8　黄褐色土（En・L≫Ⅲ黒）
T－5
c
a
b 19.60
d 19.90
19.61
19.61
19.22
19.30
d2
Ⅲ黒
En·L
En·P
1
2
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
1　黒色土（Ⅱ黒≫d2＞d1）
2　橙褐色土（d2＞Ⅱ黒）
3　灰褐色土（Ⅲ黒＞d2）
4　黄褐色土（En・L＋En・P）
5　暗橙褐色土（d2＋Ⅱ黒）
6　淡黄褐色土（En・P≫Ⅱ黒）
7　黒色土（Ⅱ黒＞d2）
8　淡黄褐色土（En・P≫Ⅱ黒）
9　黒色土（Ⅱ黒≫d2＋En・P）
10　淡黄褐色土（En・P）
11　黒色土（Ⅱ黒≫d2＋En・P）
12　暗黄褐色土（En・P＋Ⅱ黒）
13　淡黄褐色土（En・P≫Ⅱ黒）
0
2M

図Ⅵ－5　T－4・5



図Ⅵ－６　T－６と出土の土器

表Ⅵ－１　ピット一覧

名　称	位　置	平面形	規模（m）			長軸方向	備　考
			確認面	底　面	最大深		
P－１	b-66-33	円　形	0.62×0.58	0.39×0.37	0.24	――――	

表Ⅵ－２　Tピット一覧

名　称	位　置	平面形	形態分類	規模（m）			長幅比	長軸方向	備　考
				確認面	底　面	最大深			
T－１	b-66-41	細長小判形	B_1型	2.38×1.15	1.85×0.27	1.85	6.85	N－25°－W	
T－２	b-66-42・43	細長小判形	B_1型	2.06×1.03	1.47×0.31	1.47	4.74	N－41°－E	
T－３	b-66-00	細長小判形	B_1型	2.52×1.27	1.67×0.28	2.07	5.96	N－４°－W	
T－４	c-66-40	細長小判形	B_1型	2.07×1.02	1.84×0.33	2.03	5.57	N－19°－W	
T－５	b-66-20	細長小判形	B_1型	2.26×0.86	1.84×0.32	1.97	5.75	N－８°－W	
T－６	b-66-70	細長小判形	B_1型	2.40×0.97	1.90×0.27	1.92	7.03	N－１°－W	

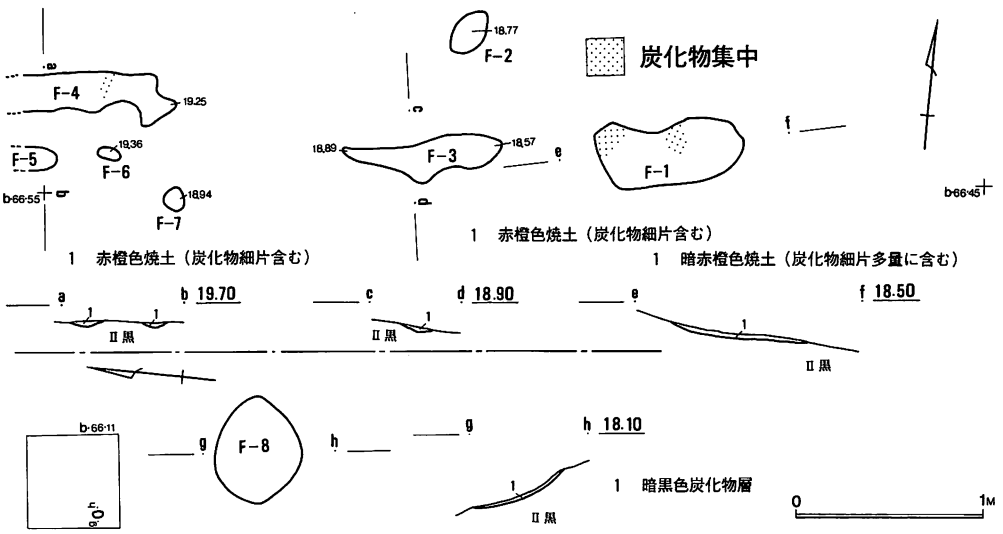
表Ⅳ－３　Tピット掲載遺物一覧

遺構番号	図番号	分　類	層　位
T－６	1	Ⅰb-4	覆　土

遺構番号	図番号	分　類	層　位
T－６	2	Ⅰb-4	覆　土

(3) 焼土　（図Ⅵ－７、表Ⅵ－４）

８か所で検出された。ⅡＦ－１～７は調査区南西端ｂ－66－44付近の東向斜面に集中分布する。標高18～19ｍの斜面に分布する。ⅡＦ－１のみⅡ黒層上面で確認された。他はⅡ黒層中位で確認された。台地上から低地（東方向）に向かって流れ込んだように細長い形態のものが多く、規模は小さいものが多い。焼土の堆積状況は最大厚が１～３㎝程度と薄くシート状である。焼土の色調は炭化物の細片を多く含んだ赤橙色である。遺物は各焼土から炭化物の細片が得られたほか、ⅡＦ－１・３・５からフレイク・チップが各１点検出された。ⅡＦ－８のみ他と離れ調査区ほぼ中央のｂ－66－11から検出された。標高は17ｍである。Ⅱ黒層上面で摺鉢状の落ち込みとして確認された。平面形は円形である。炭化物や炭化材片のみが２㎝前後の厚さで均一にすり鉢に堆積している。当初は土壙としていたが堀込みなどは確認できなかった。遺物は多量の炭化物の細片が得られたのみである。ⅡＦ－５・７は西側が調査区外の美々７遺跡側にかかっている。焼土の周辺にはⅠ群ｂ－４類土器が多く分布しており、検出面のレベルから判断して縄文時代早期後葉のものと考えられる。ⅡＦ－１・８はⅡ黒層上面から検出されており、早期以降のものであろう。晩期のものかとみられる。　（田口　尚）



図Ⅵ－７　Ｆ－１～８

表Ⅵ－４　焼土一覧

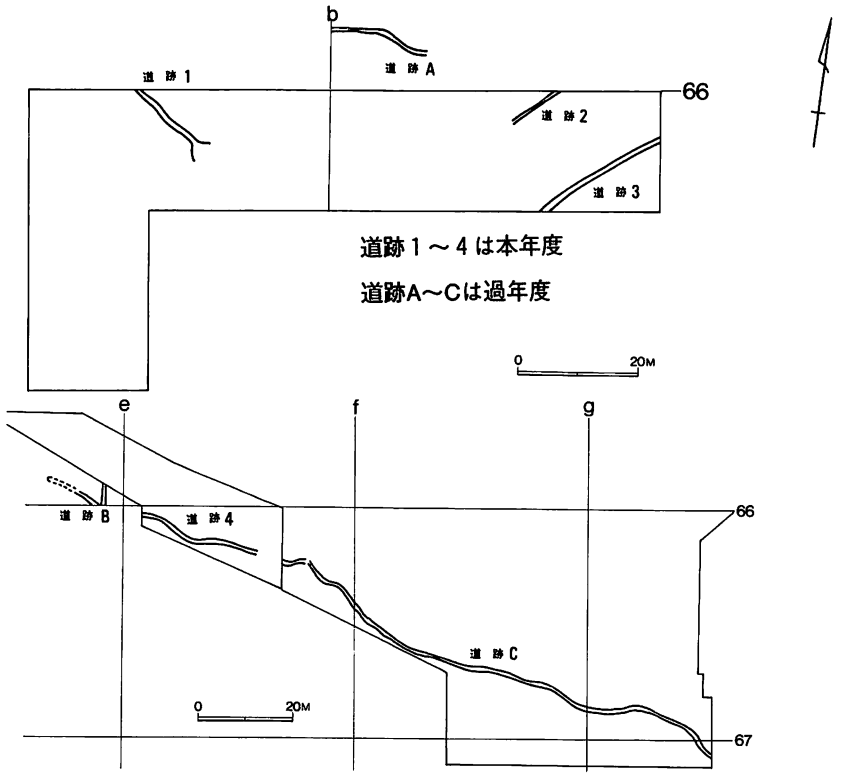
名　称	位　　置	確認面	規　　模（m） 長軸長×短軸長×最大厚	確認面 レベル	出　土　遺　物	備　　考
Ｆ－１	ｂ-66-44	上面	0.79 ×0.28×0.016	18.376	フレイク・チップ１点	
Ｆ－２	ｂ-66-44	中位	0.28 ×0.17×0.010	18.768		
Ｆ－３	ｂ-66-44	中位	0.86 ×0.18×0.017	18.757	フレイク・チップ１点	
Ｆ－４	ｂ-66-44	中位	(0.82)×0.21×0.031	19.571		
Ｆ－５	ｂ-66-44	中位	0.17 ×0.13×0.023	19.593	フレイク・チップ１点	
Ｆ－６	ｂ-66-44	中位	0.13 ×0.06×0.012	19.362		
Ｆ－７	ｂ-66-44	中位	0.12 ×0.11×0.020	18.940		
Ｆ－８	ｂ-66-11	上面	0.56 ×0.47×0.025	17.910		

道跡（図Ⅵ－８）

４か所検出されている。道跡１はｂ－66区に認められ、斜面を下る浅いくぼみをなし、幅40cm、深さ５cm前後、長さは８ｍほどである。道跡２はｃ－66区の斜面上部にあり、Ｔ－６のところでとまっている。幅30cm、深さ４cm前後、長さは４ｍほどある。道跡３はｃ－66区の発掘区の南東隅に認められたもので、急な斜面を斜に下っている。幅40cm、深さ５cm前後、長さは10ｍほどである。これらに伴う遺物はなく、風倒木痕や、流水によるもの、あるいは人以外の動物の通路ともまぎらわしい。今後の類例を待って検討することになる。

道跡４はｆ－66区に認められたもので、台地上に安定した状態で30ｍ近く続いている。幅60cm、深さ６cm前後である。このような台地上の道跡は、昭和56年度の際に注目されたもので、ｃ－65区で道跡Ａ、ｅ－65区で道跡Ｂが最初に検出されたものである。その後、昭和62年度の調査の際、幅60cm、長さ約115ｍの溝状の遺構（道跡Ｃ）が検出され、その実態がよくわかるようになった。今回検出した道跡４は、道跡ＢとＣとの中間部分に相当するものである。この全長は150ｍほどとなり、美々８遺跡を東西に貫通する往時の主要な通路であったかもしれない。今後川寄りの部分の調査によって枝道などの実態が一段と明らかになるものとみられる。

（大沼忠春）



図Ⅵ－８　道跡

3　包含層出土の遺物

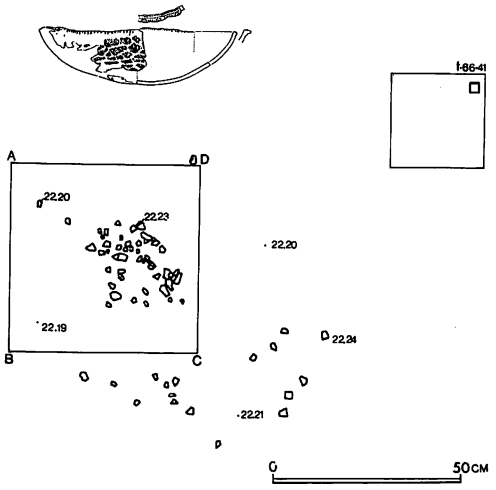
第Ⅱ黒色土層から出土した遺物には、土器、石器、石製品がある。

(1)　**土器**（図Ⅵ－10・11、図版Ⅵ－３）

出土した土器にはⅠ群ｂ－３・４類、Ⅱ群ａ類、Ⅲ群ｂ－１・２類、Ⅳ群ｂ・ｃ類、Ⅴ群ｂ類に属するものがある。

Ⅰ群ｂ－３類（１・２）

１は貼付帯が顕著に認められるもので、貼付帯上から貼付帯間にかけて短縄文の圧痕が認められる。２は隆起線状の貼付帯の認められるもので、隆線の間に幅せまく短縄文の施されているものである。口唇の形態は断面が尖り気味で、Ⅰ群ｂ－３類の特色を示している。１は比較的古い特色をもち、２は新しい特色を示すものであろう。



図Ⅵ－９　土器出土状況図

Ⅰ群ｂ－４類（３～27）

比較的古い特色を示すものから新しい特色をもつものまで認められる。３は口縁部に隆起線の認められるもので、本類に含めるとすれば最古の段階を示すものである。４～６は細い条の原体による綾絡文の施されるもので、比較的古い段階の特色を示すものである。７～19は条の比較的細いもので、20～27は比較的太いものである。自縄自巻の原体によるものが多いとみられる。なお22は撚りのあまり戻っていないＬＬ原体によるものである。

Ⅱ群ａ－１類（28・29）

28は口唇がやや切り出し形を呈する綱文土器である。29は０段多条の原体による比較的整った斜行縄文の施されているものである。

Ⅲ群ｂ－１類　（30）

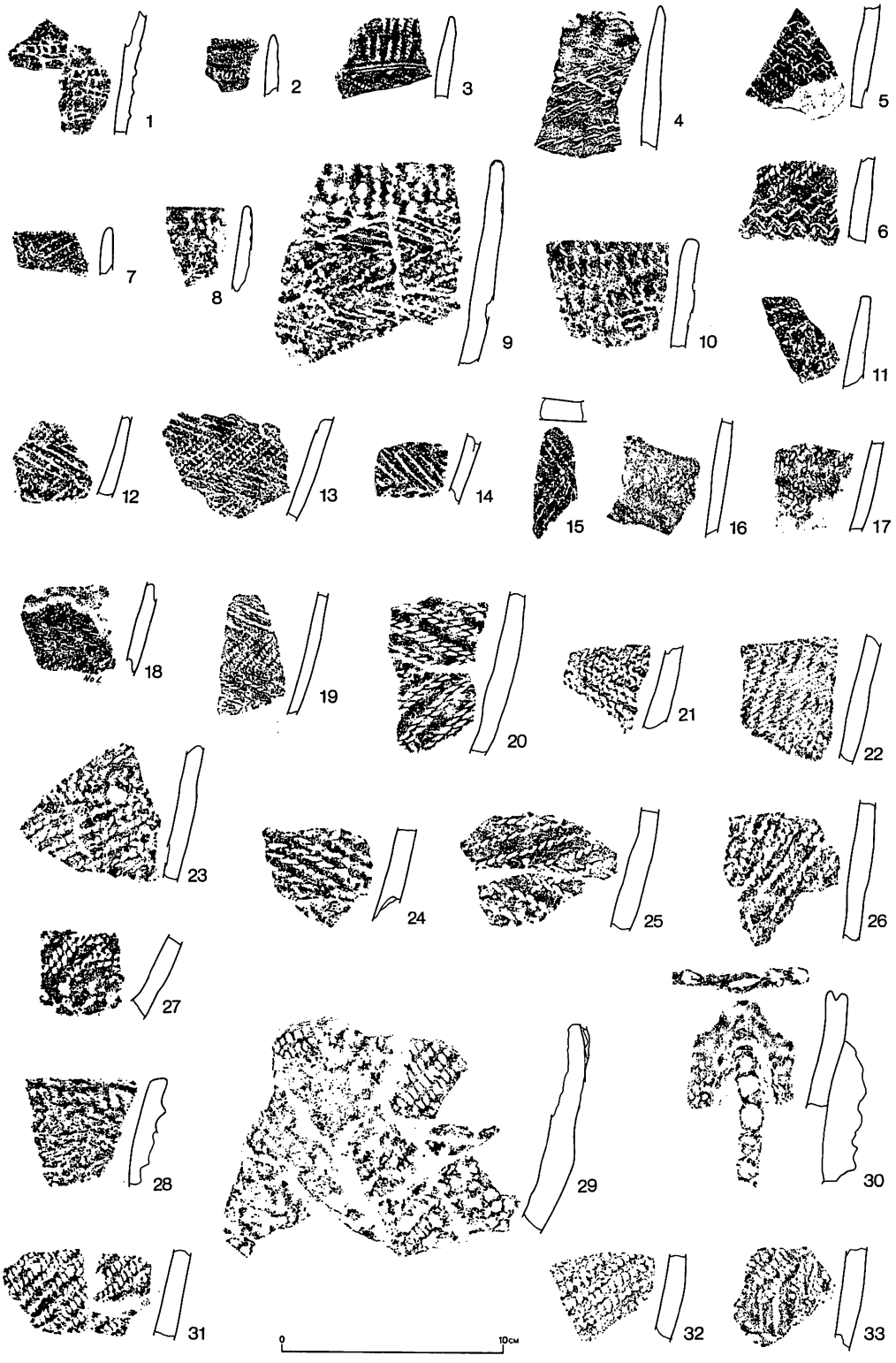
30は器面の剝落が多いけれども、ＬＲの原体による単節斜縄文の地に縦方向の貼付帯があり、その上を半截竹管状工具により刺突を加えている。萩ケ岡２式もしくは３式（高橋　1982）に相当するものとみられる。

Ⅲ群ｂ－２類（31・33）

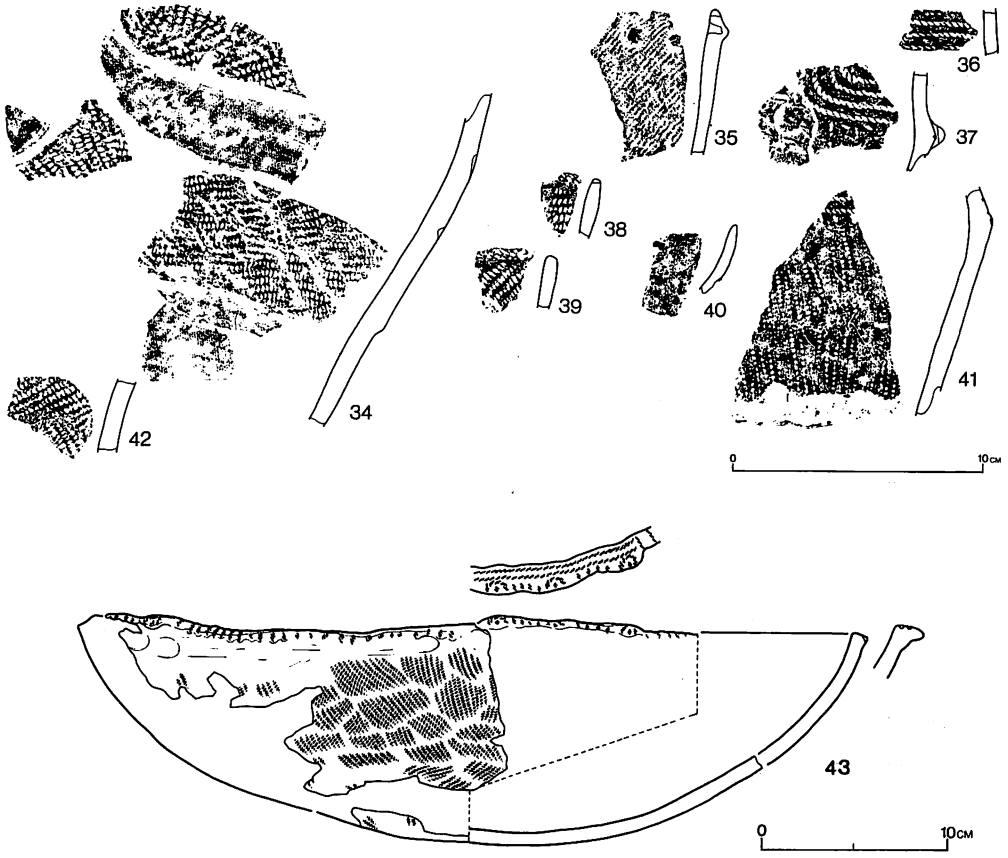
口縁に突起をもち、その下に指頭の押捺の加えられた貼付帯がある。貼付帯の両側縁にそって棒状工具による刺突文が加えられている。Ⅲ群ｂ－１類のなごりをとどめるものかとみられる。器面にはＬＲの原体による粗い縄文が施されている。内面は所々みがかれている。

Ⅳ群ｂ類　（34）

深鉢形土器の体部の破片で、大柄な磨消縄文が施されている。



図Ⅵ－10　包含層出土の土器(1)



図Ⅵ－11　包含層出土の土器(2)

Ⅳ群ｃ類　(35)

口縁に刻み目のある小波状縁の深鉢形土器で、口縁に突瘤文がめぐらされている。細かい斜行縄文が施されている。

Ⅴ群ｂ類（36～43）

36～38は同一個体で、口縁へ向ってやや内傾する深鉢形土器とみられる。体部には浅い縦行縄文が施されている。39～40は縄文の施された土器で、内面が平坦に調整されている。43は大形の皿形土器かとみられる。42は羽状縄文の施された土器で、内面が平坦に調整されている。43は大形の皿形土器である。中華鍋を想わせるものである。底の内面はよく磨かれている。口唇の断面形は角形を呈する。　（大沼忠春）

(2)　石器等　（図Ⅵ－12・13、図版Ⅵ－４）

石　鏃（１～14）

石鏃は総数28点出土した。五角形鏃８点、三角形鏃11点、有茎６点、破片のため不明３点である。１～５は五角形鏃。２は基部は凹基。３は右側縁に丸みを持ち、基部は平基に近い凹基。５は最大幅が上位にある。６～９は三角形鏃。６・７は平基に近い凸基である。８・９は凹基。９は側縁にやや丸みがある。10は裏面に細かい調整はみられず、基部は丸みがある。11～14は有茎鏃。11は厚みがあり茎は短い。12は、加工が側縁にとどまっている。

石　錐（15）

石錐は15の１点のみである。厚みのある三角形状を呈し、直線的な刃部を作出している。頁岩製で、側縁に磨耗痕が認められる。

つまみ付ナイフ（16～23）

つまみ付ナイフは10点出土した。16・17は裏面の右側縁に細加工を施すもの。18は片面加工。19・20は黒曜石製でつまみ部が大きい。21はメノウ製。23は側縁に磨耗痕がみられる。

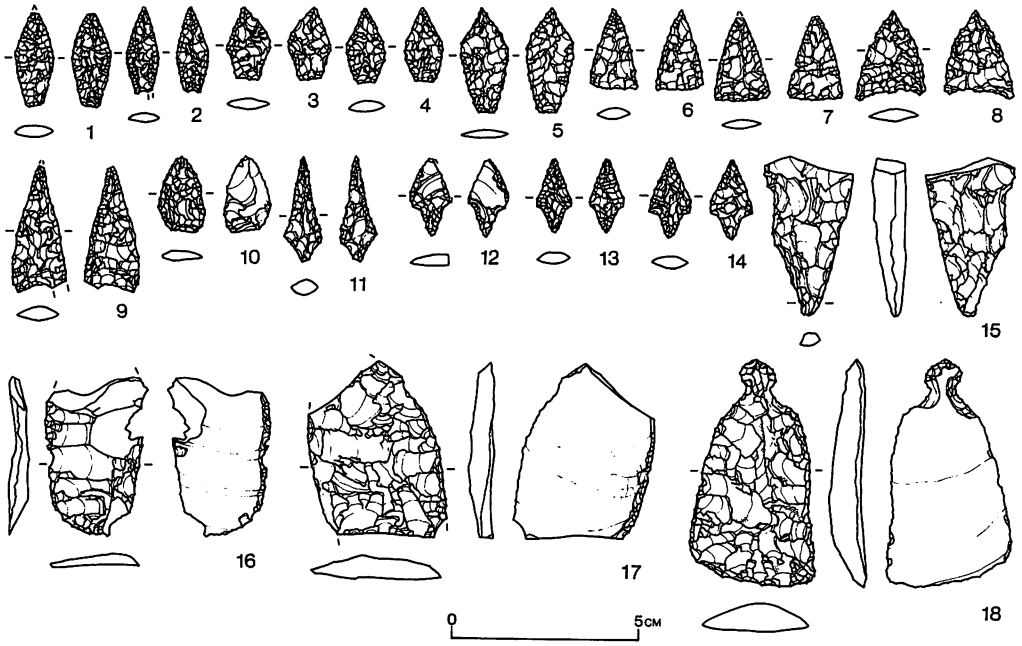
スクレイパー類（24～28）

24は裏面の縁辺に加工が施され、急角度の刃部を持つ。26は縦長剝片の下端に刃部を作出している。27は裏面の側縁にも細加工が施され、28は片面加工。

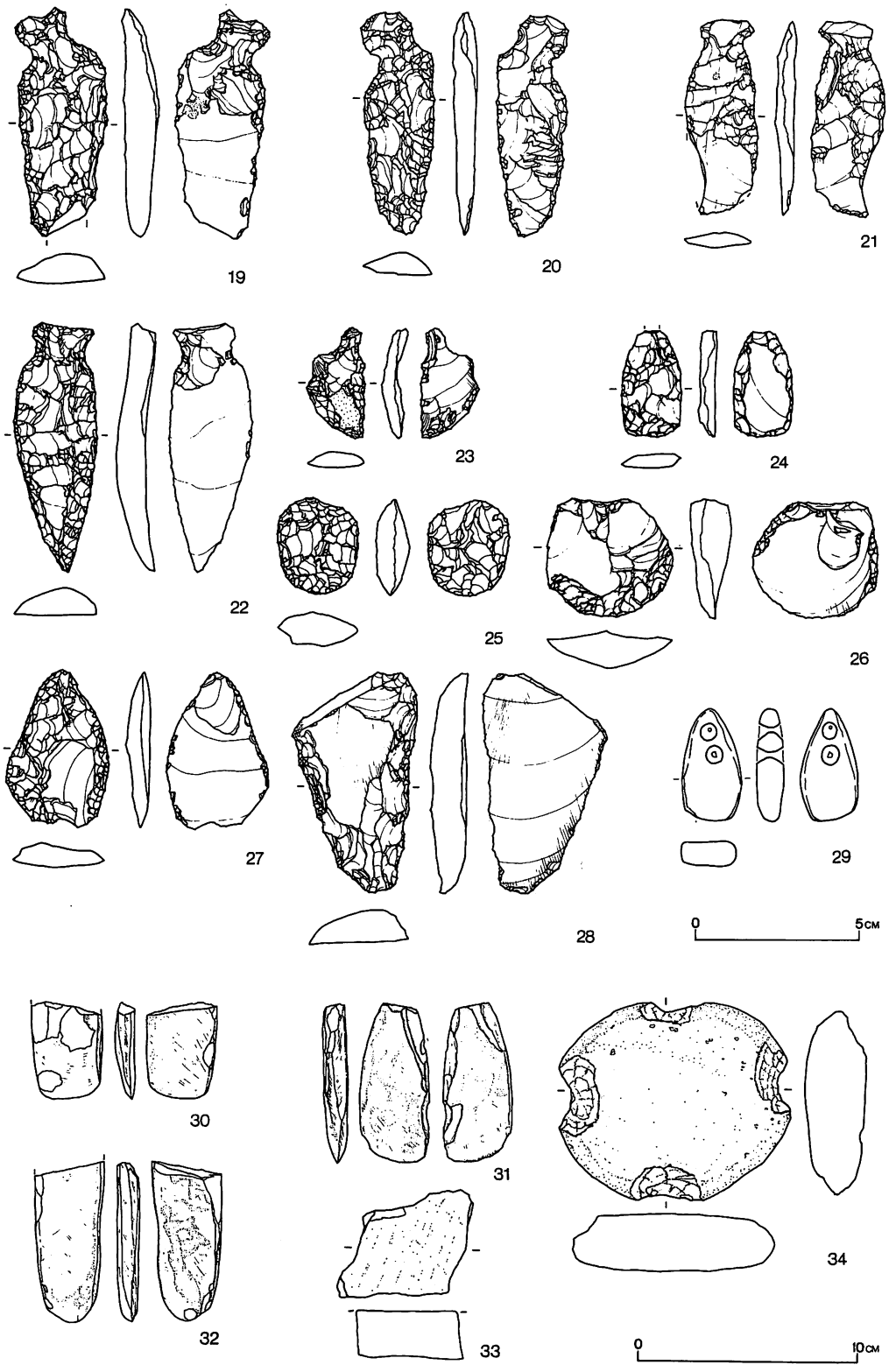
石製品・礫石器（29～34）

29は孔を二つ持つ垂飾、ｆ－66－41で出土した浅鉢（図Ⅵ－11－43）と同じ地点で出土。

30～31は磨製石斧。33は石皿。34は偏平な礫の長軸と短軸を欠いた石錘。　（越田雅司）



図Ⅵ－12　包含層出土の石器



図Ⅵ－13　包含層出土の石器・石製品

4　まとめ

本年度の遺構・遺物の分布状況から判断して、西側に隣接する美々７遺跡側に分布がさらに広がるものと考えられる。また、調査対象外とされてきた美々７遺跡の南側やｂ－65区は既に工事用道路の造成や土採りによりEn－ａ層まで削平されている。本年度の結果から本調査区に続く遺構や遺物が分布していたと考えられる。

(1)　Ｔピット

本年度の調査では６基が検出された。いずれも台地南縁辺部の標高19～20ｍ前後の斜面から、長軸が等高線とほぼ直交する状況で確認された。これまでの美々８遺跡の調査からは昭和56年度29基、昭和57年度７基、昭和60年度14基、昭和62年度37基の計88基が検出されている。本年度の調査で検出されたＴピットは、昭和56年度のｃ－65区およびｄ－65区から検出された台地南縁辺に沿って弧状に配列される一群（Ｐ－11・13・14・15・16・17）としたものに連なるように分布する。形態分類は「Ｔピット」（『美沢川流域の遺跡群　発掘調査の概要昭和56年度』遠藤）を基本に柱穴の有無およびＣ型を追加してさらに細分した「Ｔピット論」（『北海道の研究』考古篇Ⅰ　森田・遠藤　1984）に基づいて平面形、長軸比、杭穴の有無を中心に行った。Ｔピットの一覧表もそれに従った。本年度のものはすべて平面形が細長い小判形（長楕円形）で、底面の幅広い溝状を呈し長軸比が4.7～7.0となった。したがって、底部幅はＡ型よりやや広く、杭穴のないタイプのB_1型に分類できる。B_1型は短軸断面の形態がＵ字形を呈するもの（Ｔ－３）が一般的とされている。しかし、短軸断面の形態では、壁面の崩落、掘り上げ土などの被覆や流れ込みの度合により、壙口に向かってＶ字状（Ｔ－２）やＹ字状（Ｔ－１・４・５・６）に開くもの等様々である。壙口から底部までの短軸断面ではＡ型と区別し難いものが多い。短軸底（底面）部断面のみに限定した場合にはほぼＵ字状をなすと言え、該当するものが多い。これまでの美沢川の遺跡群の調査においてB_1型は、台地の縁の等高線に沿って配列をなすものが一般的であり、今回検出されたＴピットも同様の配列をもつものであった。　（田口　尚）

(2)　土器について

第Ⅱ黒色土層から出土した土器には早期から晩期に及ぶ各時期のものがある。美々８遺跡のこれまでの調査では各年次に亘り資料が出土していて、それらを合わせて考えると、縄文時代のかなりの部分がカバーされる。ここでは、それらの特色をまとめておくこととする。

縄文時代早期の資料は昭和56年度に、Ⅰ群ｂ－２・３・４類、昭和57年度に中茶路式（Ⅰ群ｂ－３類）、東釧路Ⅳ式（Ⅰ群ｂ－４類）、昭和60年度にⅠ群ｂ－３類、昭和62年度にⅠ群ｂ－３・４類、が出土している。これと今回の資料を合わせるとほぼⅠ群ｂ－３・４類土器が主体をなすとみられる。なお昭和56年度にⅠ群ｂ－２類とされた資料には底部に張り出しがあってⅠ群ｂ－２類の特色をよく示すものがあり、この頃からこの場所が利用されてきたことが知られる。Ⅰ群ｂ－３類には昭和60年度の出土資料に短縄文帯の間に無文部を設けるものがあり、この時期の内では古い方のものではないかと考えられる。結節の回転文を施す資料

が56・57・60年度の資料に認められる。Ⅰ群ｂ－３類の内では比較的新しい段階のものとみられる。

Ⅰ群ｂ－４類土器には口縁部にｂ－３類土器のなごりとみられる微隆起線をもつものが出土している。また結節の回転文を施すものが認められ、それらはⅠ群ｂ－４類の内では初頭頃のものとみられる。他方２条並列する撚糸文の施されるものが認められ、口縁部に縄線文や、縄端による刺突文、ヘラ状工具による刺突文のみられるものなど、Ⅰ群ｂ－４類の内では終末期と考えられる資料、さらに、魚骨回転文の施された資料があり、これなどは細い撚紐を巻いた絡条体の代用かとみられるものであり、Ⅰ群ｂ－４類の内では、中葉もしくは前半期のものと考えられるものである。

縄文前期に属する資料は昭和60年度に住居跡が出土し、その前葉の資料が多く認められている。綱文土器が主体をなしている。綱文土器の口唇に刻み目のあるものが認められ、綱文土器の内では古いものかと考えたけれども、本年度の美沢３遺跡の調査から、綱文土器の典形的な資料は、縄文前期の初頭までさかのぼらないと考えられ、若干新しい時期に出現するものなのであろう。なおこれらとともに、一見、組紐によるかともみられる条節の密着した縄文の施された土器も認められている。

縄文時代早、前期の資料は、全体としてなおわずかではあるが、対岸の美沢３遺跡はなどに認められない資料があり、微妙な時期的な差のありそうなことは、今後の調査の中で追求すべき課題となるであろう。美沢11遺跡や美々８遺跡などの東釧路Ⅳ式末葉から美沢３式、さらに美々７式を経て美々８遺跡のような綱文土器への変遷がたどられるものとみられる。

中期の資料はこれまで、昭和56年にⅢ群ｂ－２類、60年度にⅢ群ａ類土器がやや多く出土した。本年度出土した資料はわずかではあるが、Ⅲ類ｂ－１類とｂ－２類に属するものと考えられた。ｂ－２類としたものは口唇に小突起があり、縦に大きい貼付帯を施すものであるが、その貼付帯の両側にそって、Ⅲ群ｂ－１類の天神山式の手法を想わせる刺突が加えられている。半截竹管状工具を用いないもので、Ⅲ群ｂ－２類としてはその初頭頃に位置づけられるものかと考えられる。美沢川流域の遺跡群では天神山式に相当する資料は極めてわずかであるけれども、それからⅢ群ｂ－２類への移行の過程は、それまでの道南の榎林式系の土器と、道央の天神山式系の土器の地域差が失なわれていく状況を示すとみられるので興味深い資料かとみられる。

なお晩期中葉の資料が出土しているけれども、これは、昭和56年と62年に出土した資料と共通のものであり、一連のものとしてとらえられることができる。　（大沼忠春）

表Ⅵ－５　包含層の掲載土器一覧

図番号	発掘区
1	b-66-43
2	b-66-44
3	c-66-81
4	c-66-51
5	e-65-17
6	e-65-28
7	c-66-91
8	c-66-70
9	b-66-44

図番号	発掘区
10	f-65-99
11	b-66-44
12	c-66-50
13	b-66-11
14	c-66-51
15	b-66-41
16	c-66-70
17	e-65-18
18	e-65-26

図番号	発掘区
19	c-66-41
20	e-65-36
21	b-66-43
22	b-66-43
23	b-66-30
24	c-66-70
25	b-66-43
26	b-66-44
27	b-66-00

図番号	発掘区
28	f-66-90
29	b-66-30
30	b-66-33
31	b-66-42
32	c-66-91
33	b-66-10
34	c-65-07 c-65-27
35	b-66-30
36	f-65-98

図番号	発掘区
37	f-65-98 f-65-89
38	e-65-18
39	e-65-18
40	e-65-37
41	e-65-18
42	f-66-51
43	f-66-40

表Ⅵ－６　包含層の掲載石器一覧

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
1	石　鏃	e-65-36	(2.5)×1.0×0.3	(0.6)	Obs.
2	〃	f-66-78	(2.3)×0.8×0.2	(0.4)	〃
3	〃	b-66-43	1.9×1.1×0.3	0.4	〃
4	〃	b-66-10	2.0×1.0×0.3	0.4	〃
5	〃	c-66-90	2.8×1.3×0.2	0.7	〃
6	〃	f-66-31	2.1×1.2×0.3	0.7	〃
7	〃	c-66-81	(2.2)×1.4×0.2	(0.6)	〃
8	〃	f-65-78	2.3×1.8×0.3	1.0	〃
9	〃	f-65-99	(3.3)×1.4×0.4	(1.2)	〃
10	〃	c-66-70	1.9×1.3×0.2	0.6	〃
11	〃	f-66-80	2.7×1.0×0.4	0.7	〃
12	〃	f-66-51	2.0×1.0×0.3	0.4	〃
13	〃	c-66-50	1.9×0.9×0.3	0.3	〃
14	〃	b-66-42	2.1×1.1×0.3	0.5	〃
15	石　錐	c-66-51	4.2×2.3×0.9	7.6	Sh.
16	つまみ付ナイフ	c-66-81	(4.2)×2.6×0.3	(4.8)	Sh.
17	〃	c-66-70	(4.7)×(3.5)×0.6	(11.0)	〃
18	つまみ付ナイフ	b-66-34	6.1×3.3×0.8	14.6	Sh.
19	〃	b-66-34	(6.9)×2.7×0.9	(15.4)	〃
20	〃	b-66-44	6.7×2.1×0.7	10.2	Obs.
21	〃	c-66-91	5.9×2.1×0.5	(7.7)	Aga.
22	〃	f-66-31	7.5×2.5×0.8	15.2	Qua-Sh.
23	〃	f-65-79	3.3×1.8×0.4	2.1	Obs.
24	スクレイパー	e-65-17	(3.2)×1.8×0.4	(4.2)	Sh.
25	〃	b-66-34	2.9×2.5×1.0	6.8	〃
26	〃	e-65-18	3.5×3.8×1.1	16.2	Obs.
27	〃	c-66-70	4.7×3.1×0.7	7.6	Sh.
28	〃	b-66-11	6.7×3.7×1.0	26.1	Obs.
29	石製品	f-66-30	3.4×1.8×0.7	7.0	Per.
30	石　斧	e-65-26	(4.4)×3.2×0.9	(21.8)	Gr-Mud.
31	〃	f-66-31	7.3×3.2×1.1	40.5	〃
32	〃	e-65-27	(7.3)×3.2×1.0	(39.6)	〃
33	石　皿	b-66-33	(4.8)×(4.9)×(2.0)	(99.6)	And.
34	石　錘	c-66-81	10.3×9.0×2.7	413.8	Gni?

表Ⅵ－７　包含層の出土遺物一覧

名　称	数　量	名　称	数　量
土　器(Ⅰb-1)	1	つまみ付ナイフ	10
(Ⅰb-2)	2	スクレイパー	13
(Ⅰb-3)	2	石　斧	5
(Ⅰb-4)	417	石斧剝片	3
(Ⅱa-1)	1	たたき石	3
(Ⅱa-2)	4	砥　石	5
(Ⅲa)	34	台　石	6
(Ⅲb)	11	石　皿	3
(Ⅲb-2)	6	石　錘	1
(Ⅳb-1)	25	Ｕフレイク	1
(Ⅳb-2)	3	Ｒフレイク	14
(Ⅳc)	1	フレイク・チップ	251
(Ⅴb)	17	礫・礫片	43
(Ⅴc)	196	細　礫	3

名　称	数　量	名　称	数　量
土　器　計	720	焼　礫	1
石　鏃	28	石製品	1
石　錐	1	石　器　計	392
つまみ付ナイフ	10	総　計	1,112

表Ⅵ－８　遺構の出土遺物一覧

名　称	分　類	数　量	
		覆　土	床
土　器	Ⅰb-4	2	
土　器　計		2	
フレイク・チップ		3	
焼　礫		1	
石　器　計		4	
総　計		6	

表Ⅵ－９　遺構別出土遺物一覧

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量 覆　土	 床　面
ＴＰ－１	焼　礫		1	
1点	計		1	
ＴＰ－６	土　器	Ⅰb-4	2	
2点	計		2	
Ｆ－１	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	
Ｆ－３	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	
Ｆ－４	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	

Ⅶ　美々８遺跡第Ⅰ黒色土層の調査

1　調査の概要

Ⅰ黒層の調査は、4,182㎡を対象として実施した。調査地区は、ｂ・ｃ・ｄ－66・67区（台地の縁辺部から美沢川に向う斜面部分）、ｅ－65・ｆ－65・66（台地の平坦部）、ｅ・ｆ－68（涸れ沢部分）の３か所である。

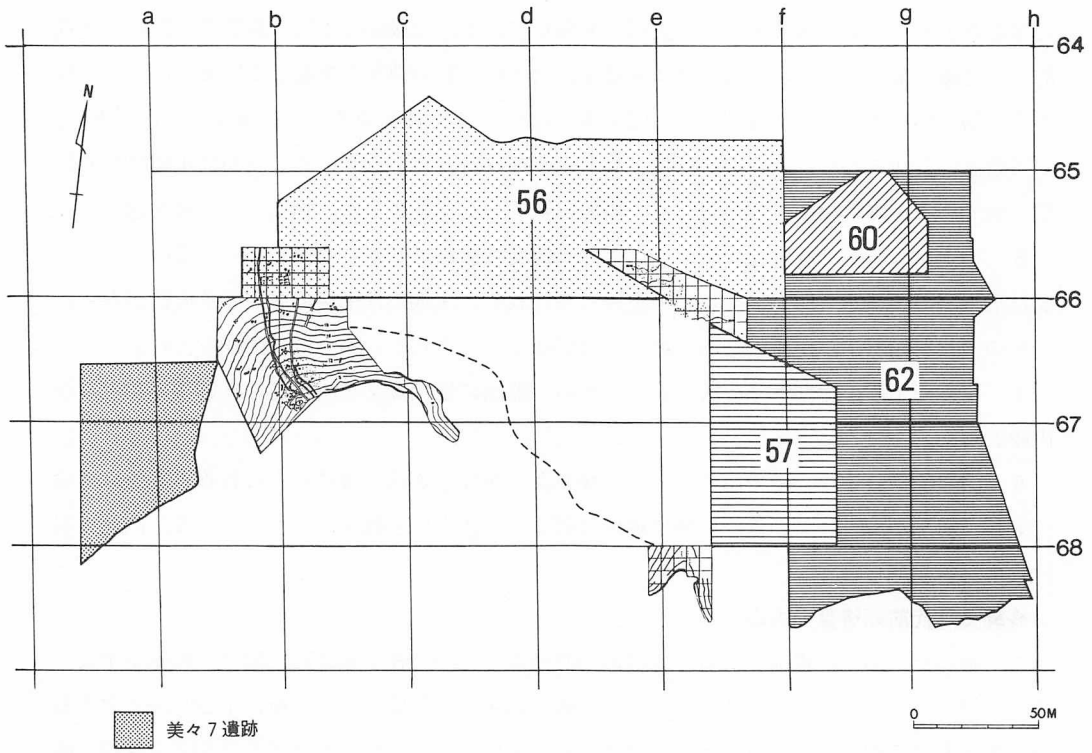
今回の調査では、続縄文時代、擦文時代、中・近世の各期にわたる生活の跡が確認された。

続縄文時代は、ｃ－66・ｆ－68区で土器がそれぞれ１個体出土したほか、石器が少量出土している。遺構は、確認されていない。

擦文時代は、ｆ－68区で建物跡と思われる柱穴列が２か所隣接して検出されている。ｅ－65・ｆ－65・66区では、82か所の柱穴・38か所の焼土・11か所の集中礫が確認された。

遺物は、ｆ－65・66区で多量の土器が出土し、それに伴う礫、土製玉、土・石製品、金属器、鉄滓などが出土している。土器は、擦文時代初頭のものが主体をなしている。

中・近世は、ｂ－65・66、ｃ－66区で、美沢川に向う斜面上から４条の道跡が確認されている。このうち西側で確認されたものは、昭和56年の道跡へつながった。斜面下側の道跡の周



図Ⅶ－１　遺構位置図

囲には、住居跡２軒．柱穴群・焼土35か所がみられた。この地区から出土した遺物には、珠洲系陶器、磁器、金属製品、古銭、骨角器などがある。　（佐藤和雄）

2　縄文・続縄文時代の遺物

美々８遺跡ではこれまで４次の調査が行なわれ、第Ⅰ黒色土層からは、擦文時代を中心として、それ以前の縄文時代晩期から続縄文時代の遺物や、中・近世の遺構・遺物が発見されている。本年度の調査でも縄文・続縄文時代の遺物が僅かながら出土し、これらについて擦文時代の遺構・遺物とは分けて記載することとした。

(1)　出土状況

遺物には土器と石器があり、いずれも遺構に伴わずに出土している。土器は続縄文時代前期前葉のものがｆ－68区、同前期末葉のものがｃ－66区に認められた。いずれも斜面にそって流れた状態で出土したが、それぞれ器形、文様の知られる資料が得られた。層位的には第Ⅰ黒色土層の中部から下部である。石器はｂ－66区、ｃ－66区、ｆ－65区に散点的に認められた。これらの出土位置と、出土状況を示すと図のようになる。

(2)　土器

続縄文時代前期前葉のもの（１・３～５）

４個体分の資料があり、いずれもｆ－68区の近い位置から出土し、一群のものとみなされる。

１　器形は口縁がほぼ直立し、体部が直線的にすぼまり、口経は22㎝ほど、高さは30㎝ほどになるかとみられる深鉢形土器で、底部を欠失している。口縁部に幅広く無文帯を設け、比較的太い沈線により変形工字文風の文様を描き、所々に円形の刺突文を配している。体部には縦行する帯状縄文がやや間隔をあけて明瞭に施されている。縄文原体は０段多条のRLである。口唇断面は丸味をもち、口唇上に棒状工具による刻み目が施されている。内面は平坦になで調整されている。炭化物の付着が著しく、器面の剝落した部分が多い。胎土に小円礫を含む。

３　横走する三条の沈線と、その下に縦位の縄文に重ねて施された横走縄文が認められる。深鉢形土器の頸部から体部にかけての破片とみられる。沈線には細線の並列する痕跡がみられ、工具の素材を知る手がかりとなる。縄文は帯状縄文とみられる。胎土に小円礫を含む。

４　深鉢形土器の体部下半の破片とみられる。器面に帯状縄文を浅く施している。胎土に小円礫を含む。

５　口縁部の破片で、やや斜にひらく口縁をもつ深鉢形土器の破片とみられる。器面には縦行気味の縄文が施されている。口唇は角形に近く、口唇上にも縄文が施されている。内面に炭化物の付着が著しい。

続縄文時代前期後葉のもの（２）

２に示した１個体の資料である。ほぼ器形を知ることのできる深鉢形土器で、体部下半まで接合し得たが、底部の小片も認められる。口縁がわずかに外反し、４か所に小さな隆起部をもつ。体上半は直線的に立上り、下半はなだらかにすぼまる。底部はあげ底をなす。文様は、体

下半に、縦行縄文を施し、体上半には横走する縄文を施している。体上半にはこの縄文を地として隆起線による文様が構成されている。口唇直下と体部中央に横線を加え、文様の範囲を限定し、その中間と、口縁部に3条の細隆起線をめぐらせ横位の区画を形成している。それに口縁の隆起部に対応する縦線を4か所に加え、横線との間を弧線でつないでいる。また下段の横線の上側に弧線を加えている。隆起線の間には斜めの刻文が横位に加えられ、口唇にも刻み目が施されている。体下半には縦行縄文に重ねて、横走する帯状縄文が施されている。内面はいぶされたように黒く、ていねいに磨かれている。胎土には石英、角閃石などを含み、小円礫は認められない。技法は洗練されていて、後北C_1式の特色をよく示すものである。（大沼忠春）

(3)　石器（1～4）

縄文・続縄文時代の石器とみなされるものは石鏃のみである。3は粘板岩製であるが、他は黒曜石製である。1・2は凹基の三角形鏃で長さがある石鏃である。3は二等辺三角形を呈する。細かな調整は縁辺部のみに施されている。4は有茎石鏃であるが返しが丸みを帯び小型である。（越田雅司）

表Ⅶ－1　縄文・続縄文時代の掲載遺物一覧

図番号	発掘区
1	f-68-92

図番号	発掘区
2	c-66-40

図番号	発掘区
3	f-68-80

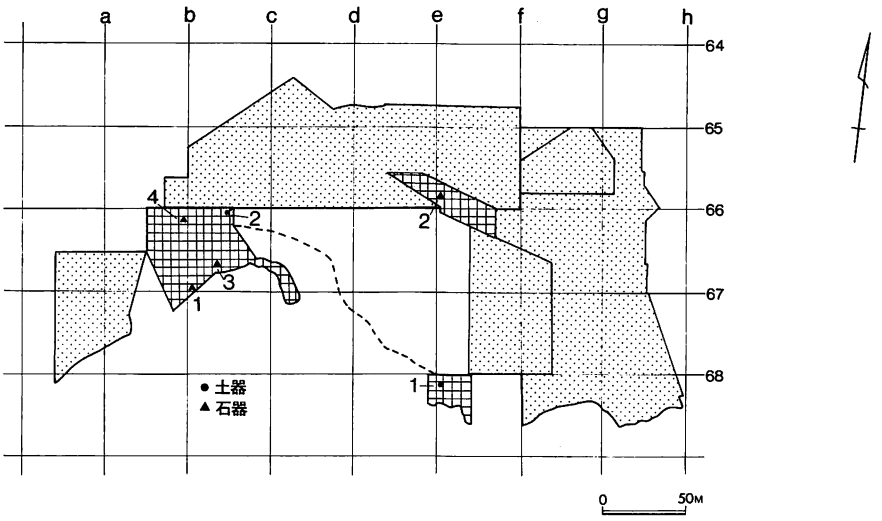
図番号	発掘区
4	f-68-71

図番号	発掘区
5	f-68-92

（石器）

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
1	石　鏃	c-66-99	3.1×1.3×0.4	1.2	Obs.
2	〃	f-65-98	3.1×1.4×0.3	1.1	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
3	石　鏃	c-66-66	2.3×1.7×0.2	0.8	Sl.
4	〃	b-66-01	1.6×1.3×0.3	0.5	Obs.



図Ⅶ－2　遺物出土位置図



図Ⅶ－３　土器出土状況図・包含層出土の土器・石器

3　擦文時代の遺構と遺物

(1)　遺構

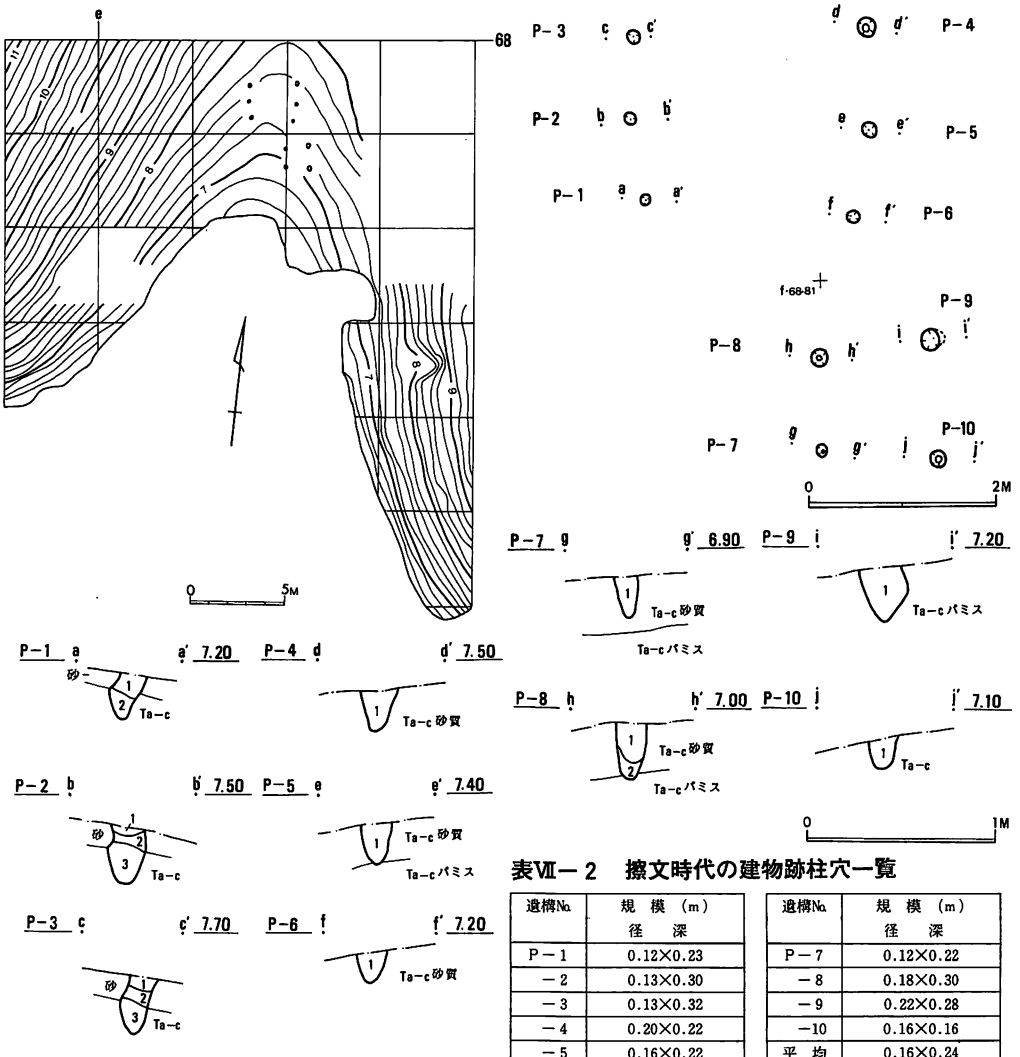
(a)　建物跡（図Ⅶ－４）

ｆ－68区の涸れ沢上で２軒検出された。柱穴は、Ｔａ－ｃ上で確認された。径は、12～22cm、深さは、16～30cmである（表Ⅶ－２）。

南東側の柱穴は、２本ずつ２列をなす。柱穴の間隔は、南北方向が0.95ｍ、東西方向が1.05ｍである。北西側の柱穴は、２本ずつ３列をなし、２列目が東西にやや張り出す。柱穴の間隔は、南北に0.78ｍ、東西に2.35ｍである。

南東側の建物跡と北西側の建物跡との間隔は、1.5ｍほどである。

時期は、付近から擦文時代の土器片や礫が出土していることから、擦文時代に構築されたものと考えられる。（佐藤和雄）



図Ⅶ－４　擦文時代の建物跡位置図

表Ⅶ－２　擦文時代の建物跡柱穴一覧

遺構No.	規模（m）径　深	遺構No.	規模（m）径　深
Ｐ－１	0.12×0.23	Ｐ－７	0.12×0.22
－２	0.13×0.30	－８	0.18×0.30
－３	0.13×0.32	－９	0.22×0.28
－４	0.20×0.22	－10	0.16×0.16
－５	0.16×0.22	平　均	0.16×0.24
－６	0.14×0.16		

(b)　柱穴群（図Ⅶ－５）

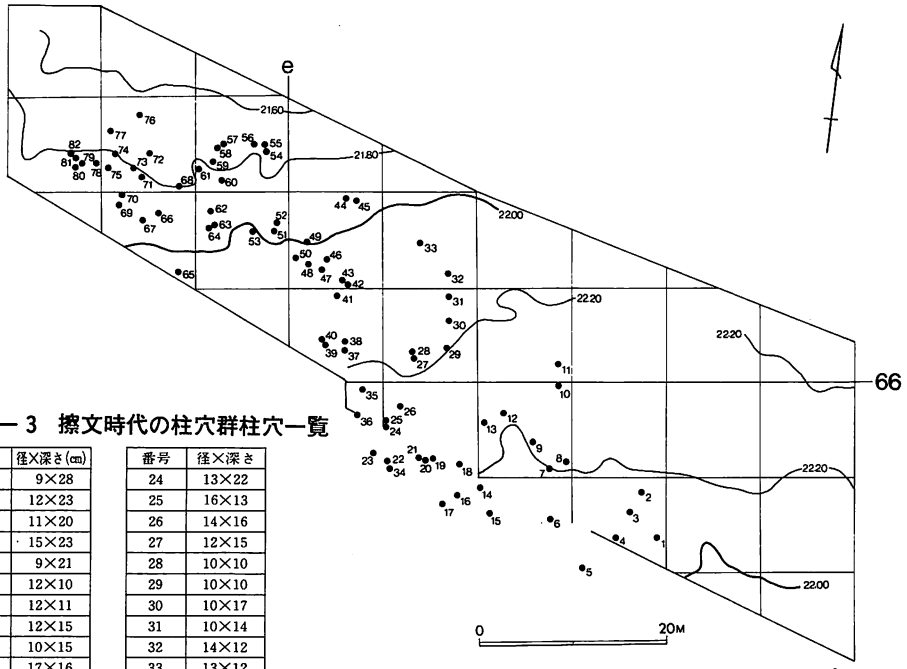
ｅ－65・ｆ－65・ｆ－66区の平坦部で、82か所検出された。確認面は、Ｔａ－ｃ上面である。建物跡などのように規則性のあるものはない。

柱穴の規模は、径７～24cm、深さ７～41cmである。

断面形は、先端が細くなる杭状をなし、不規則に傾斜しているものが多い。

遺物は、ｐ－22から骨片・炭化物・ｐ－71から土製玉が出土している。いずれも覆土からである。

時期は、付近から擦文時代の土器片・礫などが出土していることからみて同様の時期と思われる。



図Ⅶ－５　擦文時代の柱穴群位置図

表Ⅶ－３　擦文時代の柱穴群柱穴一覧

番号	径×深さ(cm)
1	9×28
2	12×23
3	11×20
4	15×23
5	9×21
6	12×10
7	12×11
8	12×15
9	10×15
10	17×16
11	13×12
12	12×11
13	12×12
14	14×28
15	13×14
16	12×14
17	12×14
18	12×22
19	10×17
20	9× 7
21	10×12
22	14×16
23	13×14

番号	径×深さ
24	13×22
25	16×13
26	14×16
27	12×15
28	10×10
29	10×10
30	10×17
31	10×14
32	14×12
33	13×12
34	9×10
35	9×10
36	14×15
37	7×15
38	10×16
39	11×12
40	10×21
41	9× 9
42	12×16
43	13× 9
44	12×10
45	10×10
46	17×21

番号	径×深さ
47	15×14
48	10×10
49	16×17
50	12×14
51	14×30
52	11×18
53	8×17
54	9× 8
55	13×18
56	11×23

番号	径×深さ
57	8×12
58	8×14
59	20×41
60	10×12
61	9×10
62	12×20
63	14×13
64	10×14
65	10×11
66	8× 8

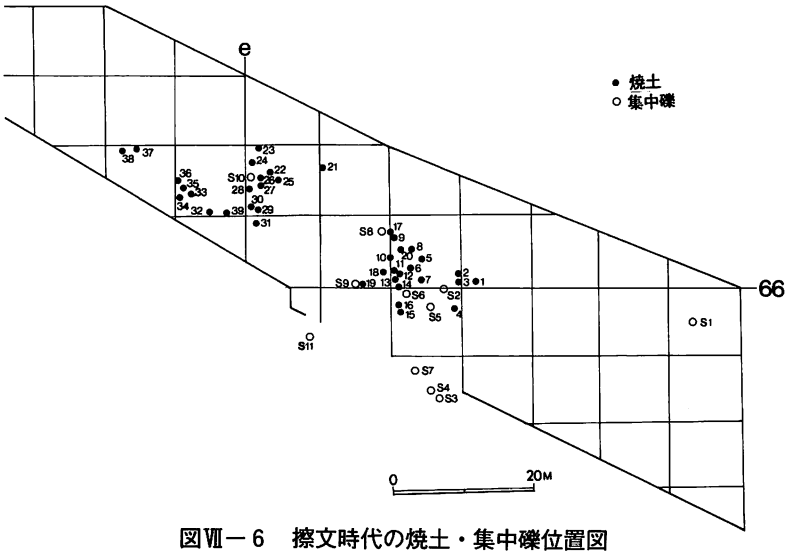
番号	径×深さ
67	12×17
68	13×12
69	10×13
70	12×12
71	13×16
72	12×11
73	16×12
74	24×15
75	12×23
76	10×15

番号	径×深さ
77	18×16
78	12×12
79	19×12
80	16×10
81	16×20
82	10×23

(c)　焼土（図Ⅶ－６）

Ⅰ黒層を３～４cm掘り進んだ時点で確認した。厚さは、0.5～3.8cmで、１～２cmのものが多い。焼土中には、焼獣骨の破片・炭化物が含まれている。

分布は、ｅ－65－08・ｆ－65－98とｆ－65－79の２か所に集中し、焼土群を形成している。



図Ⅶ－6　擦文時代の焼土・集中礫位置図

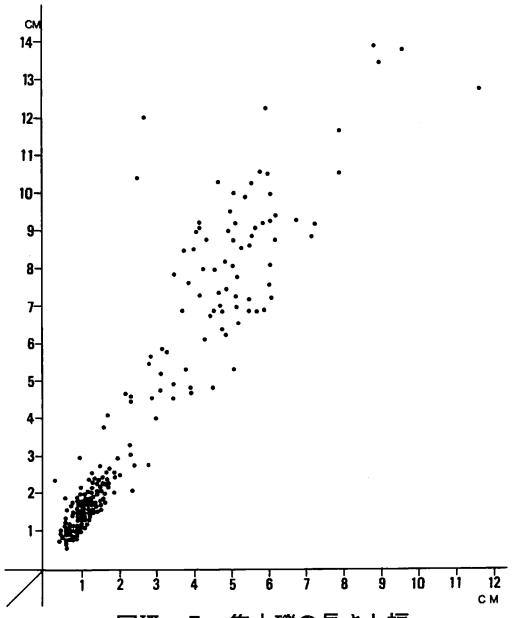
(d) **集中礫**（図Ⅶ－6）

f－65・f－66区の平坦部で、11か所検出された。これらの集中礫は、Ⅰ黒層の中位～下位で確認されている。出土状態をみると、礫が重なって出土したもの（S－5・10)、やや間隔をおいて出土したもの（S－1・2・3)、まばらに出土したもの（S－6・7・11)、小砂利を敷きつめたように出土したもの（S－4・8・9）などがある。このうちS－5は、浅い凹みに存在した。

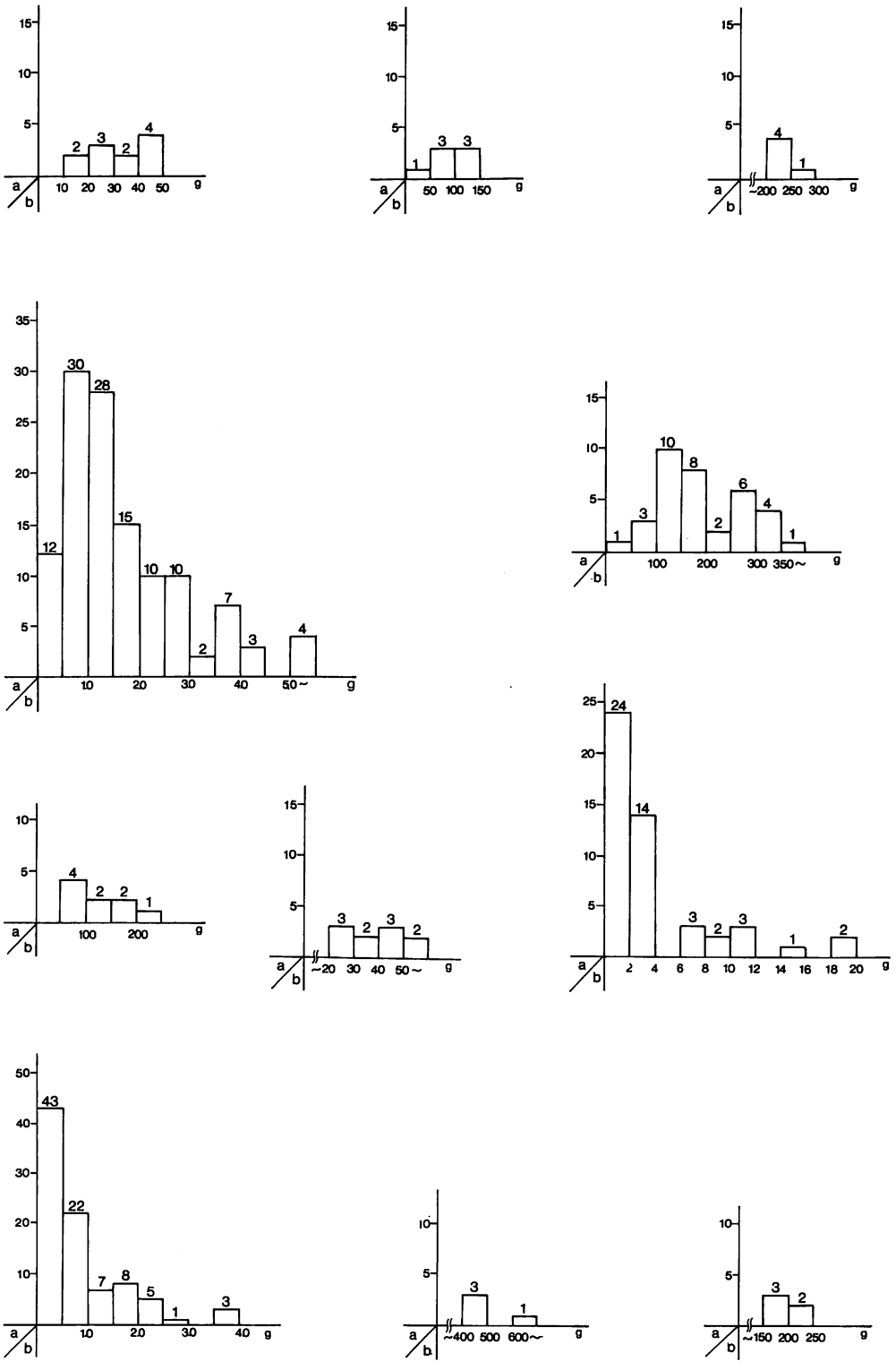
集中礫は、似た形状のものが集まっていて、個々の礫の形から4つに分けられる。A：扁平で細いもの（S－2・5・6・11)、B：扁平で円いもの（S－3・7・10)、C：棒状のもの（S－1)、D：卵形のもの（S－4・8・9)。図Ⅶ－7は、長さと幅の相関グラフである。

形状別の重量は、Aが50～360g、平均151g、Bが20～645g、平均254g、Cが10～50g、平均33.8g、Dが0.2～20g、平均2.0gである。図Ⅶ－8は、重量分布を示したものである。

石質は、砂岩・泥岩・片麻岩・珪岩・チャートである。　（佐藤和雄）



図Ⅶ－7　集中礫の長さと幅



図Ⅶ－８　集中礫の重量分布

(2) 土　器（図Ⅶ－9～17）

個々の土器については表Ⅳ－4の観察表に示してある。土器の分布については復元土器を図Ⅶ－18に図示してある。

表Ⅶ－4　擦文時代の土器の観察表

番号	発掘区	名　称	法　量(cm)	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
1	f-65-69 f-66-70	深　鉢 擦　文	口径　22.8 くびれ径　17.4 高さ　31.0 底径　7.3	口縁部は外反する。肩部に稜をもつ。底部は張り出す。	外面・内面ともにヘラミガキされる。	口縁部に円形刺突文をもつ。	内外面に炭化物付着。 底面に砂の圧痕
2	e-65-07·08	深　鉢 擦　文	口径　22.7 くびれ径　17.5 高さ　34.0 底径　8.6	口縁部は外反する。底部は張り出す。	外面・内面とも口縁部ヨコナデ、頸部から胴部にかけては、ハケメ後ヘラミガキされる。	口縁部に円形刺突文内面に突瘤がつく。頸部に鋸歯状の沈線肩部に沈線をもつ。	外面に炭化物付着
3	f-66-71	深　鉢 擦　文	口径　19.5 くびれ径　14.6 高さ　23.9 底径　7.5	口縁部は外反し端部は凹む。肩部に段をもつ。底部は張り出す。	外面は口縁部から肩部にかけて、ナデ、肩部から底部にかけてヘラケズリされる内面は、ヘラケズリされる。	口縁部に円形刺突文内面に突瘤がつく。頸部には、斜めに刺突文列がつきそれを囲むように「ノ状」の沈線がつく。	内外面の上部に炭化物付着
4	f-65-79 f-66-70	鉢 擦　文	口径　13.0 くびれ径　10.8 高さ　13.8 底径　5.6	口縁部は、外反する肩部に沈線による段をもつ。底部は張り出す。	外面は、口縁部から頸部にかけてナデ肩部から底部にかけてヘラミガキされる。内面はヘラミガキされる。	口縁部から肩部にかけて沈線をもつ。頸部には沈線をはさんで、2列の円形刺突文がつく。	内外面炭化物付着
5	f-66-90	擦　文		口端部は凹む。	外面、内面ともにヘラミガキされる。	円形刺突文をもつ。	
6	e-65-09	擦　文			外面、内面ともにヘラミガキされる。	内面に突瘤をもつ。	
7	f-65-89	擦　文			外面、内面ともにヘラミガキされる。	沈線と円形刺突文をもつ。	外面に炭化物付着
8	e-65-18	深　鉢 擦　文	口径　25.0	口端部は凹む。口唇部に指頭による圧痕がつく。	外面は、口縁部ナデ頸部、ハケメ調整、内面はヘラミガキされる。	連続山形文の上に横走沈線がつく。	口縁部のみ$\frac{1}{2}$残存
9	f-65-89 f-66-80	深　鉢 擦　文	口径　26.4 くびれ径　20.4	口縁部は外反する。	外面は、口縁部、頸部、ハケメ、胴部ヘラミガキされる。内面は、ヘラミガキされる。	頸部から口縁部にかけて鋸歯状の沈線が施され、その中に横位・斜位の沈線をもつ。この横には「X状」の文様が施される。	胴部中位から約$\frac{1}{3}$残存。

番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
10	f -66-60	深　鉢 擦　文	口径　(29.6 くびれ径(23.6)	口縁部は外反し、端部凹む。	外面は、口縁部ナデ胴部、ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。	口縁部に、山形の沈線、頸部に２条の沈線がつく。	胴部中位から$\frac{1}{3}$残存。
11	e -65-09	深　鉢 擦　文	口径　19.0 くびれ径　16.0 高さ　22.2 底径　8.4	口縁は、外傾し、肩部に稜をもつ。	外面、内面ともカキメ後ヘラミガキされる。	頸部に沈線をもつ。	$\frac{1}{3}$残存。
12	e -65-17	擦　文			外面は口縁部ナデ、頸部ハケメ。内面はハケメ調整される。	外面に３～４本単位の「⌣」字文がつく内面に「V」字の刻文がつく。	
13	e -65-07	甕 土師器	口径　17.0 くびれ径　13.1 高さ　20.7 底径　7.0	口縁部は外反する。肩部は沈線による段をもつ。底部は、やや張り出す。	外面、内面ともに、口縁部から頸部にかけてナデ、肩部から底部にかけてヘラミガキされる。	口縁部から肩部にかけて沈線をもつ。	内外面に炭化物付着$\frac{2}{3}$残存。 底面に砂の圧痕。
14	f -65-69 f -66-70	甕 土師器	口径　30.0 くびれ径　22.5	口縁部は上部が内傾する。	外面は、口縁部ナデ頸部から胴部にかけてハケメ調整。内面はハケメ調整される。	口縁部と頸部に沈線をもつ。	内外面、炭化物付着。底部欠失。補修孔１対。
15	f -66-80	甕 土師器	口径　21.1 くびれ径　17.0	口縁部は、上部ややや内傾し、端部凹む。	外面は、口縁部ナデ胴部ハケメ調整される。 内面は、ハケメ調整される。		内外面、炭化物付着、胴下半から底部欠失。
16	f -66-51･61	甕 土師器	口径　17.4 くびれ径　11.1 高さ　22.0 底径　6.6	口縁部は外反する。肩部に稜をもつ。底部は張り出す。	外面、内面ともに口縁部ナデ、頸部から底部にかけてハケメ調整される。		内外面、炭化物付着。 $\frac{1}{3}$残存。底面に笹圧痕。
17	f -66-70	甕 土師器	口径　16.1 くびれ径　12.0 高さ　18.5 底径　6.4	口縁部は外反し、端部凹む。 肩部張り出す。	外面は、口縁部から頸部にかけて、ナデ肩部から底部にかけてハケメ調整される 内面は、ハケメ調整される。		内外面、炭化物付着。 口縁部$\frac{1}{4}$残存。

番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
18	f-65-79	球胴甕 土師器	口径　15.3 くびれ径　12.1 高さ　17.6 底径　6.9	口縁部は外反し、口端に凹みがつく。肩部に段をもつ。胴中央部が張り出す。底部張り出す。	外面は、口縁部、頸部ナデ肩部から底部にかけてハケメ。内面は、口縁部ミガキ頸部から底部にかけてハケメ後ヘラミガキされる。		
19	f-66-70	甕 土師器	口径　20.1 くびれ径　15.5	口縁部は上部内傾し端部丸くなる。肩部に段をもつ。	外面は、口縁部ナデ胴部ハケメ調整される。内面は、ヘラミガキされる。	頸部に沈線をもつ。	
20	f-66-80	鉢 土師器	口径　12.3 くびれ径　9.7 高さ　12.4 底径　7.0	口縁部は、外反し端部は丸味をおびる。肩部に段をもつ。底部は張り出す。	外面は、口縁部ナデ肩部から底部にかけてヘラミガキされる内面はヘラミガキされる。	口縁部に沈線をもつ	外面上部に炭化物付着。
21	e-65-08	甕 土師器	口径　19.0 くびれ径　12.6 高さ　22.5 底径　6.8	口縁部は外反し、端部が凹む。肩部に段をもつ。底部はやや張り出す	外面は、口縁部ヨコナデ、頸部から胴部にかけては、ハケメ後ヘラミガキされる。内面はハケメ調整。	口縁部と肩部に沈線をもつ。	内外面に炭化物付着
22	f-66-41	甕 土師器	口径　23.4 くびれ径　17.6 高さ　29.5 底径　7.3	口縁部は上部がやや内彎する。肩部に段をもつ。底部は張り出す。	外面、内面とも口縁部ナデ、頸部から底部にかけてハケメ調整される。	頸部と肩部に沈線をもつ。	底面に笹圧痕をもつ。
23	f-65-78・98	甕 土師器	口径　25.7 くびれ径　18.0 高さ　32.5 底径　8.3	口縁部は、外反する肩部に段をもつ。底部は張り出す。	外面はハケメ。内面は口縁部から肩部にかけてハケメ後ヘラミガキ、胴上部から底部にかけてはハケメ調整される。	口縁部と頸部下位に沈線をもつ。	内外面上部に炭化物付着。
24	f-65-89・98	甕 土師器	口径　22.9 くびれ径　18.1 高さ　26.5 底径　7.1	口縁部は、外反し上部やや立ち上がる。頸部と肩部に段をもつ。底部は、やや張り出す。	外面は、口縁部ナデ頸部から底部にかけてハケメ後部分的にヘラミガキされる。内面は、口縁部から頸部にかけてハケメ後ヘラミガキ、胴上部はハケメ後部分的にヘラミガキ、胴下部から底部にかけてハケメ調整される。	口縁部に沈線をもつ	内外面、炭化物付着。

番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
25	f -68-92	甕 土師器	口径　(22.4) くびれ径(17.4) 高さ　(27.2) 底径　(7.2)	口縁部は外反し、上部やや立ち上がる。端部は浅く凹む。頸部から肩部にかけて段をもつ。	外面は口縁部から頸部にかけてナデ、胴部ハケメ後ヨコナデされる。 内面は、口縁部ナデ頸部から胴部にかけてハケメ調整される		内外面炭化物付着 1/2残存。
26	f -65-88･98	甕 土師器	口径　23.6 くびれ径　18.6 高さ　26.0 底径　8.0	口縁部は外反する。肩部に稜をもつ。底部やや張り出す。	外面、内面ともにハケメ調整される。		外面に厚く炭化物付着。
27	e -65-09 f -65-99	甕 土師器	口径　27.3 くびれ径　20.3	口縁部は外反し、端部凹む。 肩部に段をもつ。	外面は口縁部ナデ、頸部ハケメ後ヘラミガキ胴部ヘラミガキ 内面はハケメ後、ヘラミガキ	頸部に沈線をもつ。	胴部中位から欠失 内外面上部炭化物付着。
28	f -65-99	甕 土師器	口径　23.7 くびれ径　16.6 高さ　32.5 底径　8.0	口縁部は外反する。肩部に段をもつ。底部張り出す。	外面は、口縁部、頸部ナデ、肩部から底部にかけてハケメ調整される。 内面は、ヘラミガキされる。	口縁部から肩部にかけて横走沈線をもつ	口縁部に補修孔３対、内外面上部に炭化物付着。
29	e -65-08･09	甕 土師器	口径　24.0 くびれ径　17.0	口縁部は、外反するが先端部は直線的に立ち上がる。 肩部は段をもつ。	外面は、口縁部から頸部にかけナデ、肩部から胴部にかけてヘラミガキとハケメ調整、内面はハケメ調整される。	口縁部から肩部にかけて横走沈線をもつ	胴下部から底部欠失。内外面の上部炭化物付着。
30	f -65-78･89	甕 土師器	口径　24.0 くびれ径　15.0 高さ　26.1 底径　8.1	口縁部は外反し、肩部に段をもつ。 底部はやや張り出す	外面は、口縁部ナデ頸部の一部と、肩部から底部にかけてハケメ調整される。 内面は、ハケメ調整される。	口唇部に短刻文、口縁部、頸部に沈線をもつ。	底面に笹圧痕。

番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
31	f-66-60・70	深　鉢 擦　文	口径　28.8 くびれ径　20.7	口縁部は、外反する	外面、内面ともにヘラミガキされる。	口唇部に短刻文、頸部に沈線をもつ。	口縁部のみ残存、内外面炭化物付着
32	f-66-30・40・60	深　鉢 擦　文	口径　30.0 くびれ径　21.7	口縁部は外反し、上部内傾する。 肩部に稜をもつ。	外面、内面ともハケメ後ナデ調整される	口唇部に短刻文、頸部に沈線をもつ。	胴上部から下位欠失。
33	f-66-60	擦　文			外面、内面ともにヘラミガキされる。	横走沈線を切って斜沈線がつく。 その直下に「＞」字の短刻文がつく。	外面、炭化物付着
34	f-66-71	擦　文			外面は、ハケメ内面はヘラミガキされる	口唇部に短刻文、口縁部に矢羽根状文をもつ。	
35	f-68-80	深　鉢 擦　文	口径　(16.0) くびれ径(13.8) 高さ　(19.2) 底径　5.5	口縁部は、外反し上部から立ち上がる。 底部やや張り出す。	外面は、口縁部から頸部にかけてナデ、胴部へラケズリ後ヘラミガキされる。 内面は、ヘラミガキされる。	文様帯は、横走沈線によって区切られる口縁部は、2列の短刻文、その下に斜沈線、頸部は2本単位の鋸歯状文、肩部は横走沈線と矢羽根状文がつく。	内黒。内外面炭化物付着。½残存。
36	f-66-60		底径　7.9	底部やや張り出す。	外面、内面ともにハケメ調整される。		底面に木葉痕がつく。
37	e-65-08		底径　7.5	底部やや張り出す。	外面、内面ともハケメ調整。		底面に木葉痕がつく。
38	f-68-71		底径　7.0		外面、内面ともにヘラミガキされる。		底面に笹圧痕がつく。

番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
39	f -65-69	ミニチュア土器	口径　5.8 高さ　3.7	口縁部は、やや内彎する。	外面の口縁部は、ヨコナデされる。内面は、ヘラミガキされる。		1/2残存。
40	f -66-80	坏 土師器	口径　13.4 高さ　4.4	丸底。体部中位に段をもつ。 口縁部は、外反する	外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキされる 内面は、ヘラミガキされる。		内黒。 1/3残存。胎土に海綿骨針を含む。
41	f -66-60	坏 土師器	口径　16.0 高さ　(5.2)	丸底？外面、内面とも体部中位に段をもつ。口縁部は、内彎ぎみに立ち上がるが上部ではやや外傾する。	外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキされる		内黒。 1/8残存。
42	f -66-60	坏 土師器	口径　16.2 高さ　5.0	丸底。体部下位に段をもつ。 口縁部は、直線的に立ち上がる。	外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキされる 内面は、ヘラミガキされる。		内黒。 1/8残存。
43	f -65-98	坏 土師器	口径　15.9 高さ　5.6	丸底。外面体部中位に浅い段をもつ。 口縁部は、やや外反する。	外面は、口縁部から体部にかけて、ハケメ後ヘラミガキ、底部がヘラケズリ後ヘラミガキされる。内面は、口縁部がハケメ、体部から底部にかけてハケメ後ヘラミガキされる。		
44	e -65-30・42 43・51	坏 土師器	口径　20.0 高さ　6.7	丸底。体部下位に段をもつ。 口縁部は、直線的に立ち上がる。	外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキされる 内面はヘラミガキされる。		内黒。

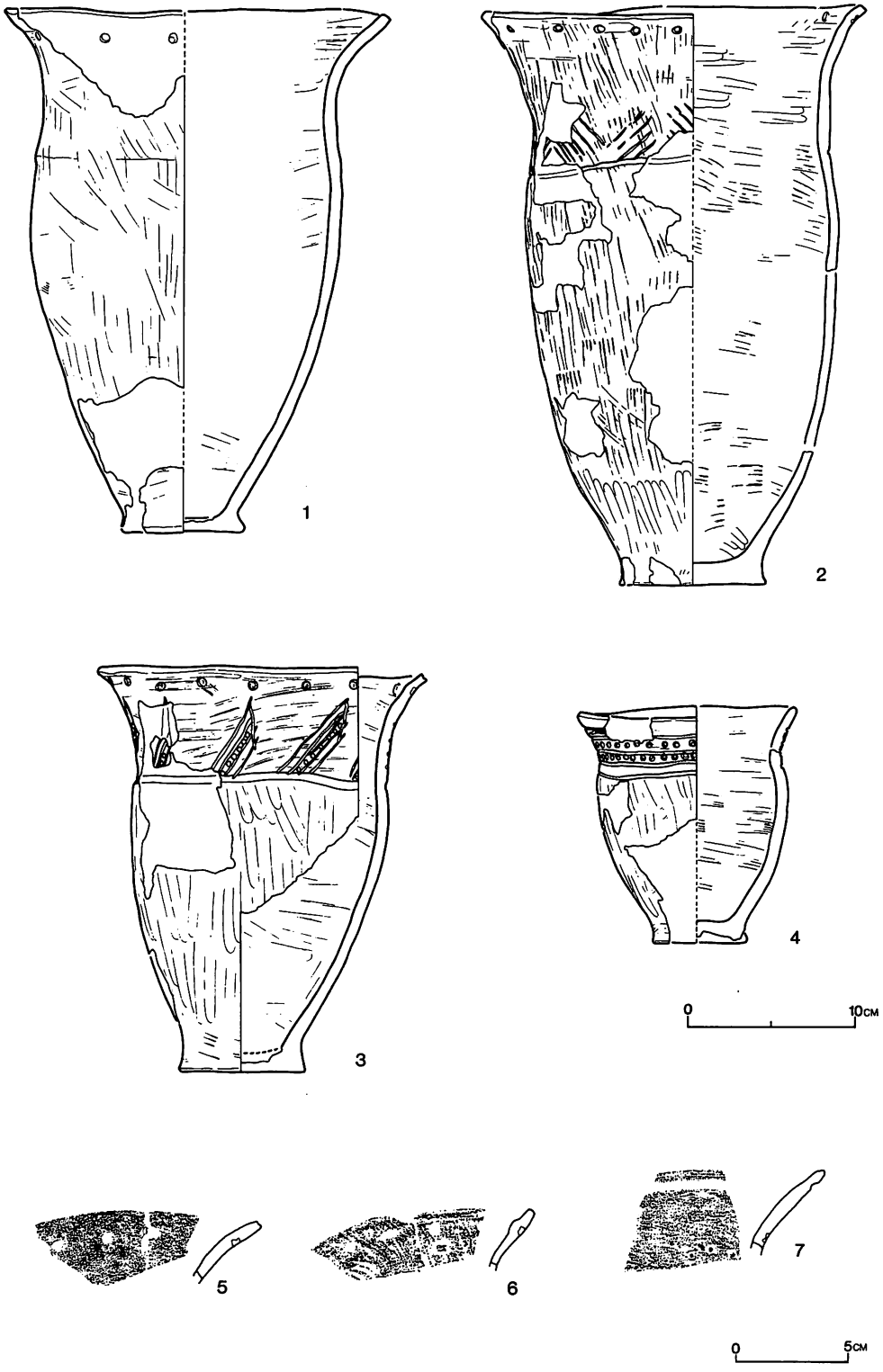
番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
45	f -66-81	坏 土師器	口径　20.8 高さ　7.1	丸底。体部中位に稜をもつ。 口縁部は直線的に立ち上がる。	外面は、口縁部がヘラケズリ後ヘラミガキ、体部から底部にかけては、ハケメ後ヘラミガキされる。 内面はハケメ後ヘラミガキされる。		内黒。 外面に炭化物付着 $\frac{1}{3}$残存。
46	e -65-72	坏 土師器	口径　19.0 高さ　6.2	丸底。体部下位に稜をもつ。 口縁部は、やや内傾する。	外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は、ヘラミガキされる。		内黒。 $\frac{1}{4}$残存。
47	f -65-89	高　坏 土師器	口径　18.0 高さ　(8.4)	体部中位に沈線をもつ。口縁部はやや外反する。.	外面は口縁部から体部にかけてハケメ後ヘラミガキ、底部がヘラケズリ後ヘラミガキされる。 内面は、ヘラミガキされる。		内黒。高台の剝離痕が残る。 底部に補修孔１対 $\frac{1}{2}$残存。
48	f -65-69 f -66-60･70	坏 土師器	口径　16.0 高さ　5.5	丸底。口縁部は、やや直線的になる。	外面、内面ともヘラケズリ後、ヘラミガキされる。		内黒。 $\frac{1}{4}$残存。
49	f -66-80･81	坏 土師器	口径　20.4 高さ　5.3	平底気味の丸底。 体部下位に段をもつ 口縁部はやや内彎する。	外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキされる 内面は、ヘラミガキされる。		
50	f -65-89	坏 土師器	口径　14.4 高さ　4.6	平底風の丸底。体部下位に段をもつ。 口縁部は、直線的に立ち上がる。	外面は、口縁部から体部にかけてヘラケズリ後ヘラミガキ、底部がヘラケズリされる。内面は、ヘラミガキされる。		内黒。

番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
51	f-65-80 f-66-89	坏 土師器	口径　18.0 高さ　5.5	平底風の丸底。体部下位に浅い沈線をもつ。口縁部は直線的に立ち上がる。	外面はヘラケズリ後ヘラミガキされる。内面はヘラミガキされる。		内黒。
52	f-65-86	坏 土師器	口径　15.8 高さ　5.5	内彎ぎみに立ち上がり口縁部は、やや外傾する。	外面は、口縁部から体部にかけてヘラケズリ後ヘラミガキ、底部がハケメ後ヘラミガキされる。内面はハケメ後ヘラミガキされる。		内黒。 内面の剝離がいちじるしい。 $\frac{1}{3}$残存。
53	f-66-70・71	坏 土師器	口径　16.6 高さ　5.2	平底風の丸底。体部中位に稜をもつ。口縁部は、直立気味に立ち上がる。	外面は、口縁部から体部にかけて、ヘラケズリ後ヘラミガキ底部がヘラケズリされる。内面は、ヘラミガキされる。		内黒。
54	f-66-40	坏 土師器	口径　15.5 高さ　5.8	平底風の丸底。体部下端に段をもつ。口縁部は内彎する。	外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキされる内面は、ヘラミガキされる。		底部の内面剝離。
55	f-65-89	坏 土師器	口径　18.5 高さ　6.8	外面、内面の体部中位に沈線をもつ。口縁部は内彎する。	外面はヘラケズリ後ヘラミガキされる。内面は、ヘラミガキ		内黒。 底部欠失。
56	f-66-50	坏 土師器	口径　17.4 高さ　6.0	平底風の丸底。体部中位に沈線をもつ。口縁部はやや内彎する。	外面は、口縁部がヘラミガキ、体部から底部にかけてヘラケズリ後ヘラミガキされる。内面は、ヘラミガキされる。		内黒。 $\frac{1}{3}$残存。

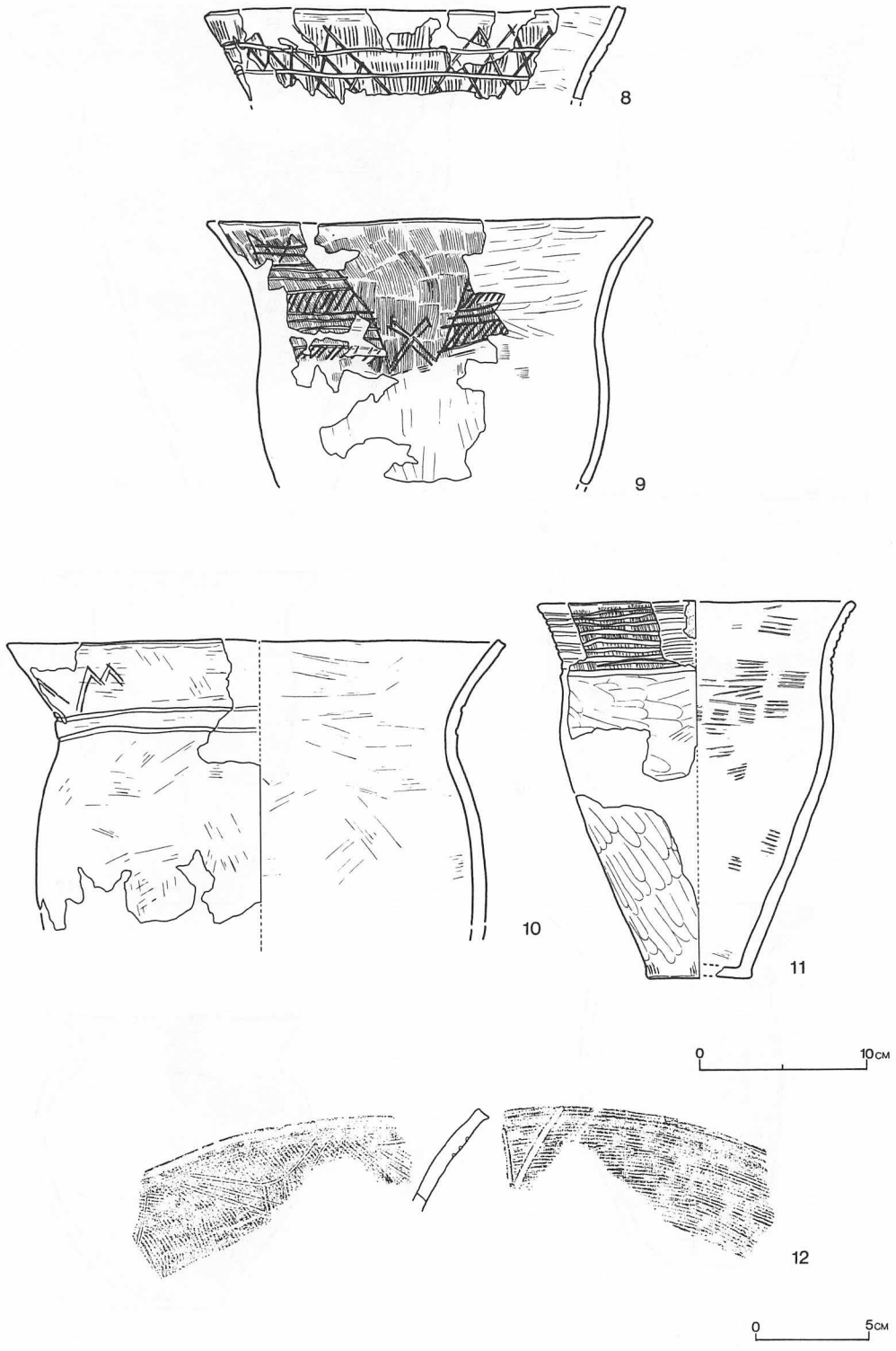
番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
57	e-65-62	坏 土師器	口径　(15.2) 高さ　(4.3) 底径　5.0	平底。体部に沈線をもつ。	外面ヘラケズリ後、ヘラミガキ。内面ヘラミガキされる。		内黒。 口縁部欠失。 $\frac{2}{3}$残存。
58	f-66-70	坏 土師器	口径　12.4 高さ　5.0	体部下位に沈線をもつ。口縁は内彎ぎみに立ち上がる。	外面は、口縁部から体部中位にかけてヘラケズリ後ヘラミガキ、体部下位から底部にかけてヘラケズリされる。内面は、ヘラミガキされる。		内黒。 $\frac{1}{3}$残存。
59	f-66-50	坏 土師器	口径　16.6 高さ　6.6 底径　6.8	平底。体部下位に沈線をもつ。 口縁部は内彎する。	外面はヘラケズリ後ヘラミガキされる。 内面は、ヘラミガキされる。		内黒。 補修孔3対。 $\frac{2}{3}$残存。
60	f-65-69	坏 土師器	口径　18.0 高さ　7.3 底径　6.0	平底。体部中位に稜をもつ。 口縁端部は細くなる	外面は、口縁部がヘラミガキ、体部がヘラケズリ後ヘラミガキ、底部がヘラケズリされる。 内面はヘラミガキされる。		内黒。 $\frac{2}{3}$残存。
61	e-65-08	坏 土師器	口径　14.0 高さ　6.5 底径　6.5	平底。体部中位口縁部に稜をもつ。 口縁部強く内彎する	外面は、口縁部ヘラミガキ、体部から底部にかけてヘラケズリ後ヘラミガキされる。内面はヘラミガキされる。		内黒。 $\frac{1}{2}$残存。
62	f-65-89・99	坏 土師器	口径　12.0 高さ　(5.5)	口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる。	外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキされる。		口縁部$\frac{1}{2}$残存。

番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
63	f-65-89・98	坏 土師器	口径　14.8 高さ　7.5 底径　6.2	平底。口縁部はほぼ直立する。	外面は、口縁部から体部にかけてヘラミガキ、底部がヘラケズリされる。内面はヘラミガキ。		内黒。 $\frac{1}{2}$残存。
64	e-65-57・72	鉢 土師器	口径　22.6 高さ　(9.0) 底径　9.5	高台をもつ。口縁部に段をもつ。底部から内彎ぎみに立ち上がるが、口縁部は外反する。	外面は、口縁部から体部にかけてヘラミガキ、底部はヘラケズリ後、ヘラミガキされる。 内面は、ヘラミガキ		内黒。 内外面剝離がいちじるしい。口縁部$\frac{1}{3}$残存。胎土に海綿骨針を含む。
65	f-66-70	椀 土師器	口径　13.1 高さ　5.7 底径　6.0	底部から口縁部にかけて内彎ぎみに立ち上がる。 口縁部は体部に比べて厚くなる。	回転糸切り後、ヘラで周囲調整される。		内黒。
66	e-65-08 f-65-97・98	椀 土師器	口径　12.7 高さ　(6.0) 底径　5.5	底部から体部にかけて内彎ぎみに立ち上がり口縁部は、ほぼ直立する。	回転糸切り周囲調整される。		内黒。 $\frac{2}{3}$残存。
67	e-65-09 f-65-98	椀 土師器	口径　15.4 高さ　6.6 底径　5.9	底部から口縁部にかけて内彎ぎみに立ち上がり口縁部はやや直立する。	回転糸切り後周囲を調整される。		内黒。 $\frac{1}{2}$残存。
68	f-66-71	椀 土師器	口径　12.5 高さ　5.6 底径　4.5	体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。	回転糸切り、周囲調整される。		内黒。 $\frac{2}{3}$残存。
69	f-65-88	椀 土師器	口径　6.8 高さ　(4.5) 底径　6.8	底部から体部にかけて内彎ぎみに立ち上がり口縁部はやや外反する。	回転糸切り後、ヘラで周囲調整される。		内黒。 $\frac{1}{3}$残存。
70	f-65-89 f-66-70・80	坏 須恵器	口径　12.0 高さ　3.5 底径　6.0	底部から体部にかけて直線的に立ち上がるが、口縁はやや外反する。	ロクロ整形。 回転ヘラ切り。		$\frac{1}{3}$残存。

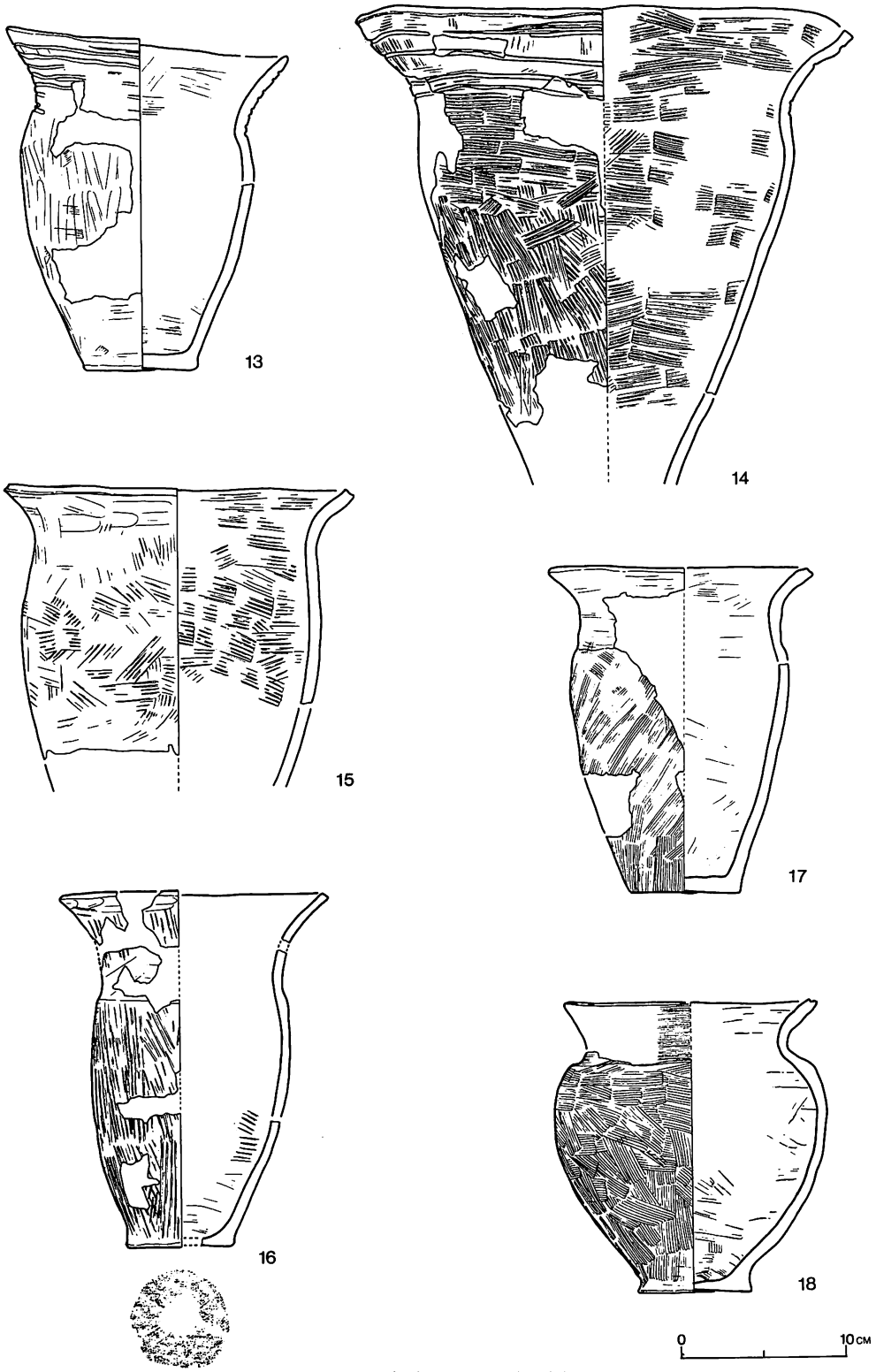
番号	発掘区	名　称	法　量（cm）	器形の特徴	技法の特徴	文　様	備　考
71	f-65-98 e-65-18	坏 須恵器	口径　12.2 高さ　4.0 底径　6.0	底部は内彎ぎみに立ち上がり、体部から口縁部にかけては、ほぼ直立する。	ロクロ整形。 回転ヘラ切り。		3/8残存。
72	f-66-80	坏 須恵器	口径　13.4 高さ　3.8 底径　6.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	ロクロ整形。 回転ヘラ切り。		外面磨耗。 1/4残存。
73	e-65-07・18	坏 須恵器	口径　13.1 高さ　3.9 底径　6.4	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ整形。 回転糸切り、未調整		1/2残存。
74	f-66-51	坏 須恵器	高さ　(2.6) 底径　6.9	やや内彎ぎみに立ち上がる。	ロクロ整形。 回転糸切り未調整。		底部1/2残存。
75	f-65-98	椀 須恵器	口径　14.5 高さ　(6.3)	体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ整形。		1/4残存。
76	e-65-17	椀 須恵器	口径　15.5 高さ　(4.2)	やや内彎ぎみに立ち上がり、口縁は外反りする。	ロクロ整形。		口縁部のみ1/2残存
77	f-66-90	壺 須恵器	口径　7.0 高さ　(2.5)	口縁部、外反する。	ロクロ整形。		口縁部1/4残存。
78	e-65-18	須恵器			ロクロ整形。		
79	f-65-99	須恵器			外面に叩き目がつく 内面に当て具痕がつく。		
80	f-66-71	須恵器			外面に叩き目がつく 内面に当て具痕がつく。		
81	f-65-98	須恵器			外面に叩き目がつく 内面に当て具痕がつく。		



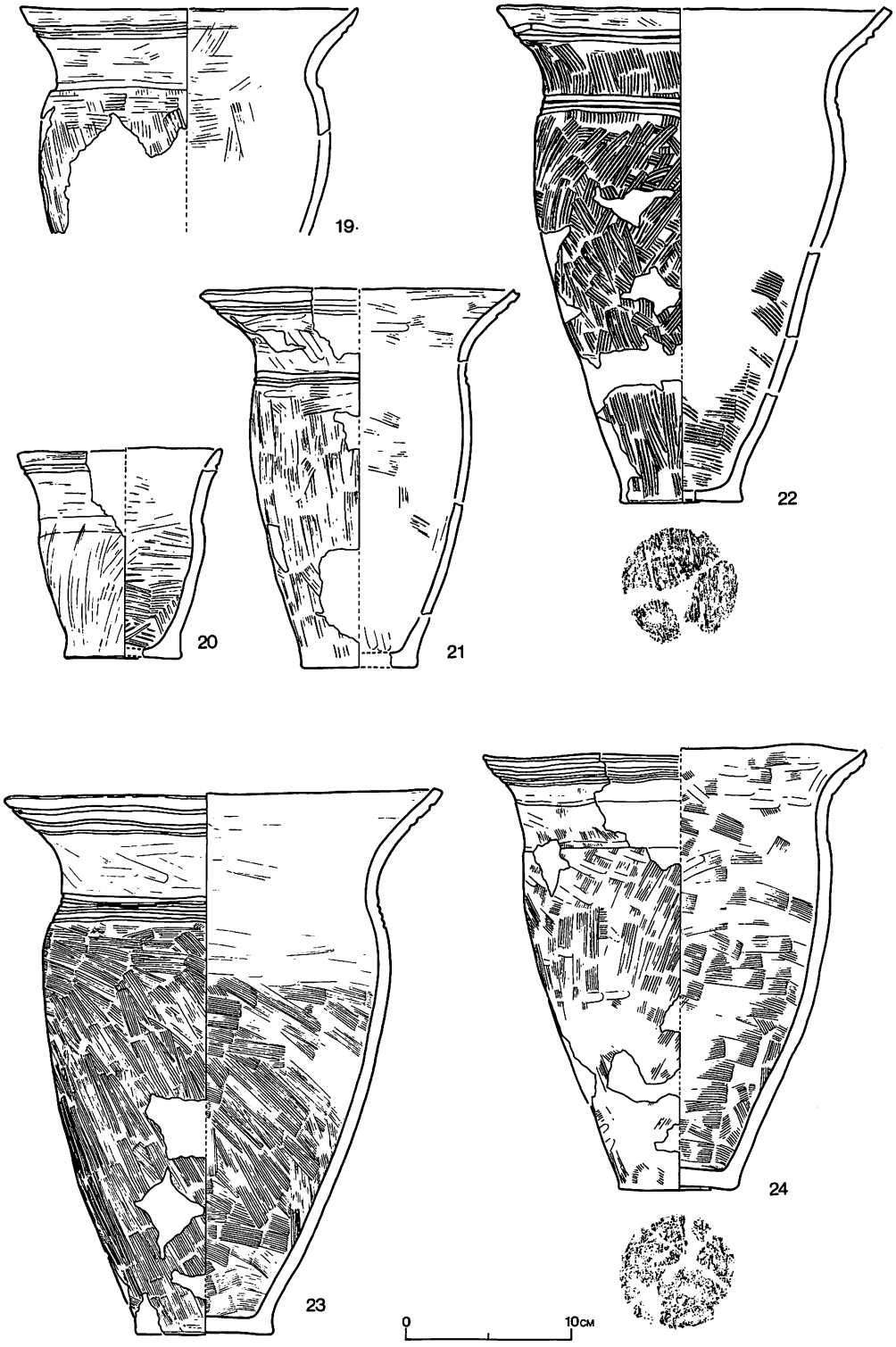
図Ⅶ－９　包含層出土の土器(1)



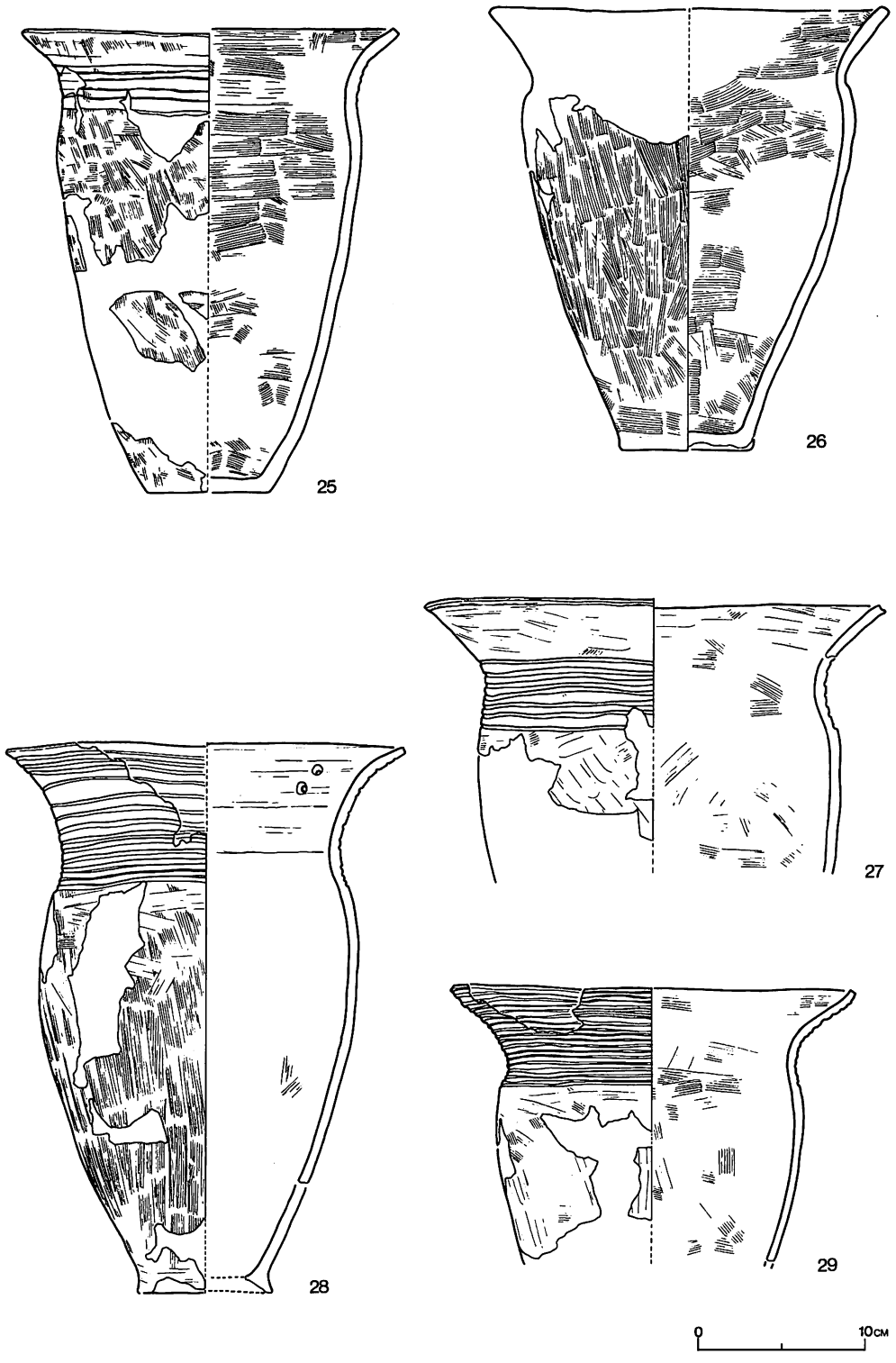
図Ⅶ－10　包含層出土の土器(2)



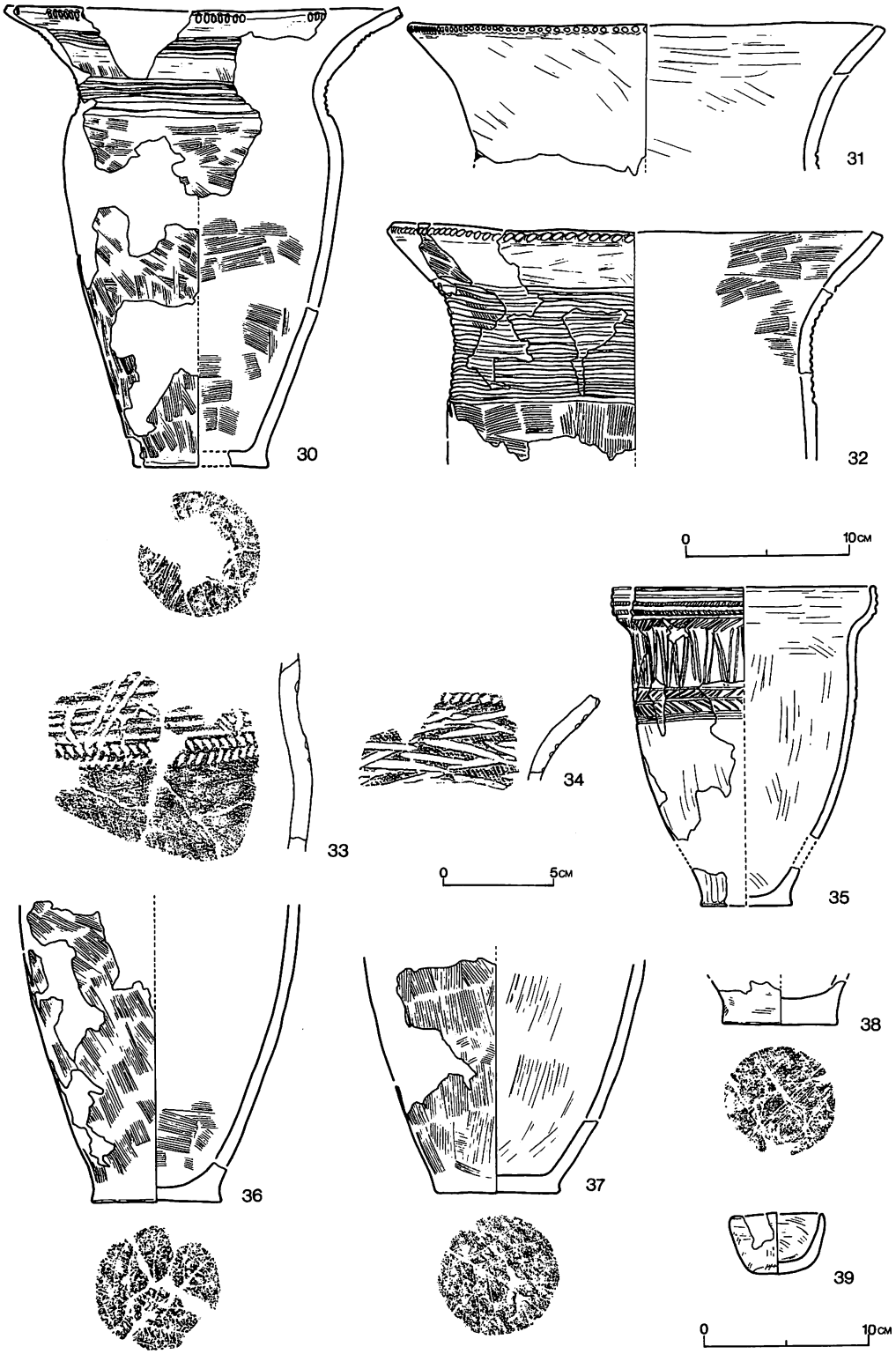
図Ⅶ－11　包含層出土の土器(3)



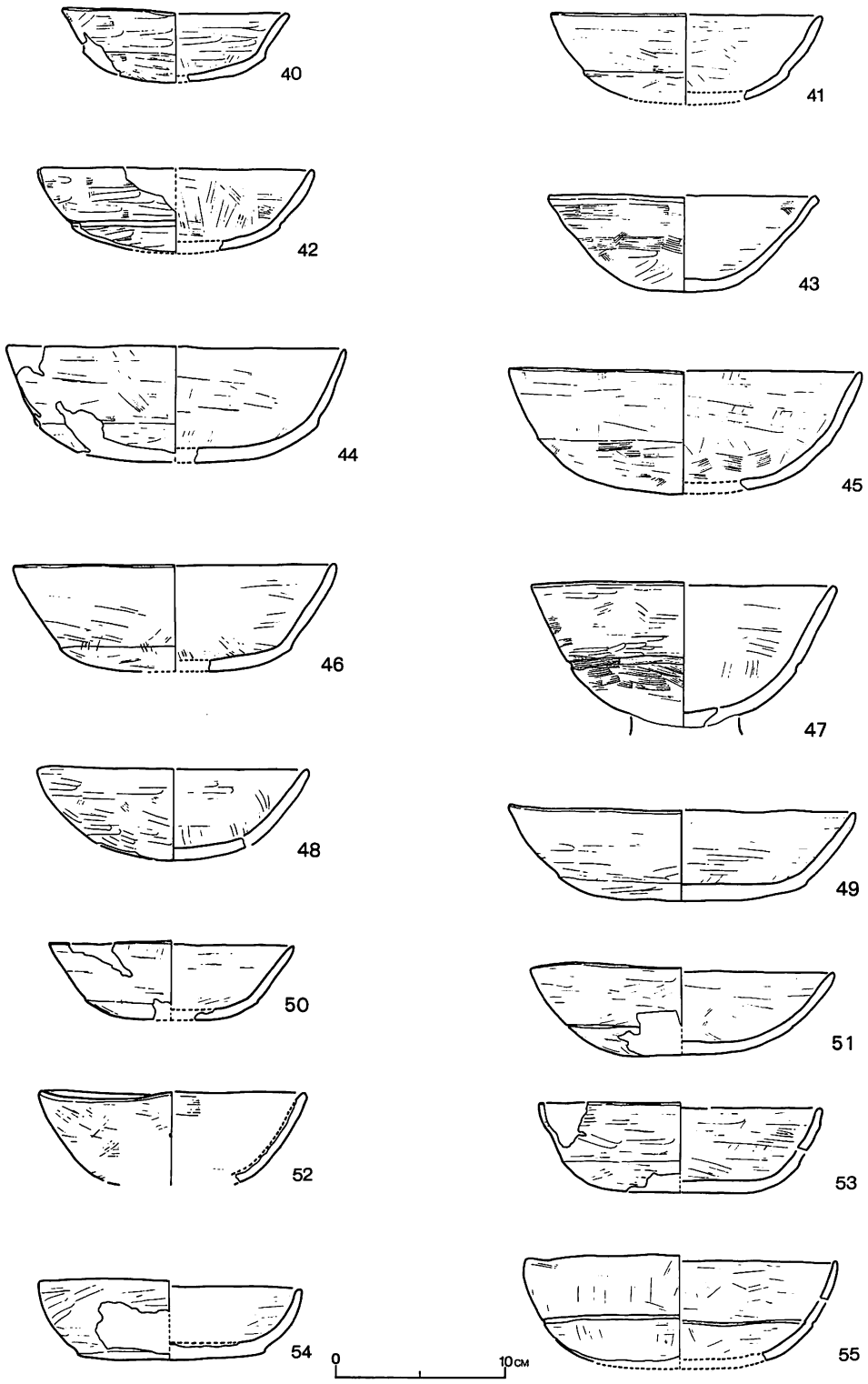
図Ⅷ－12　包含層出土の土器(4)



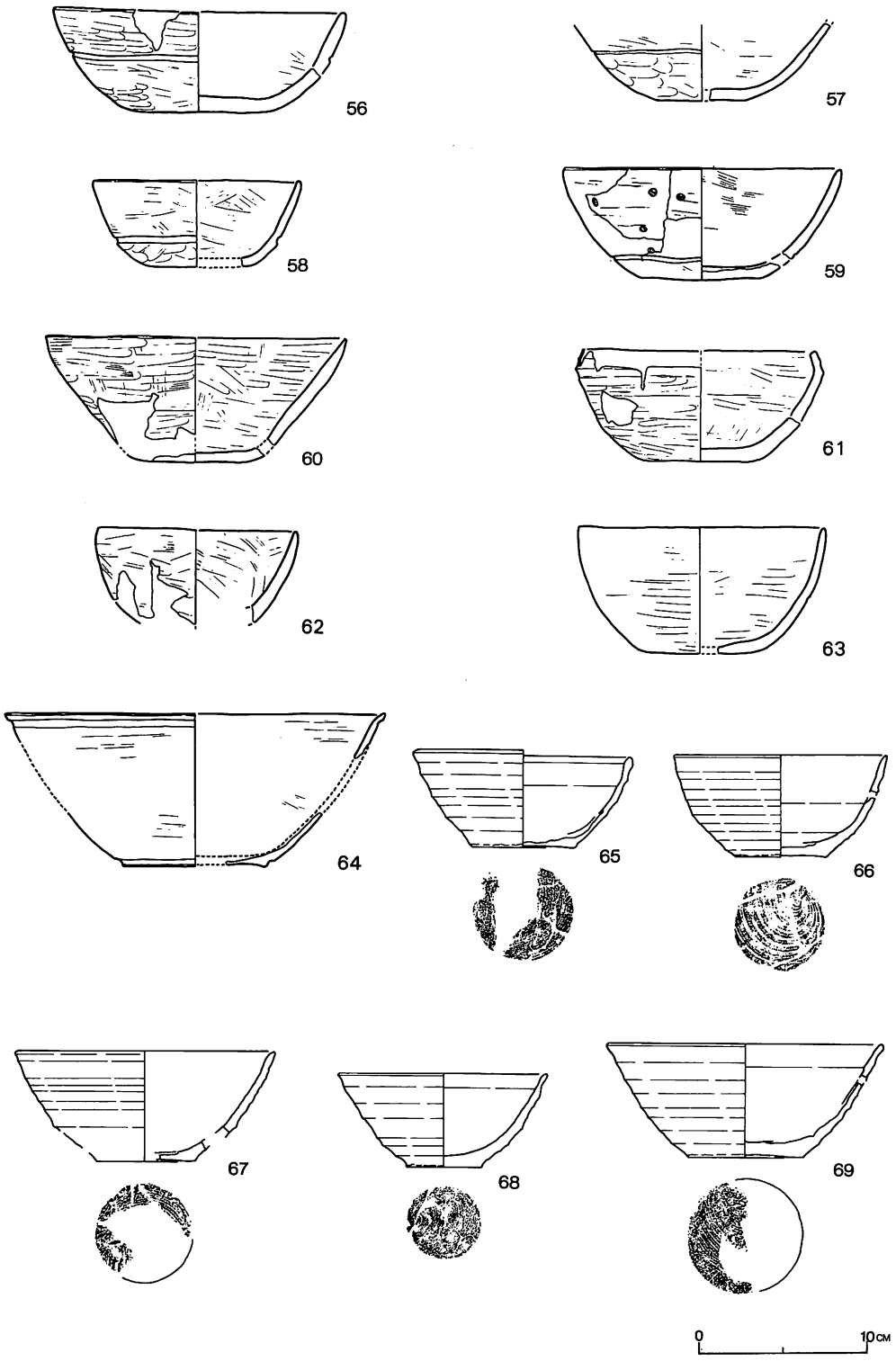
図Ⅶ－13　包含層出土の土器(5)



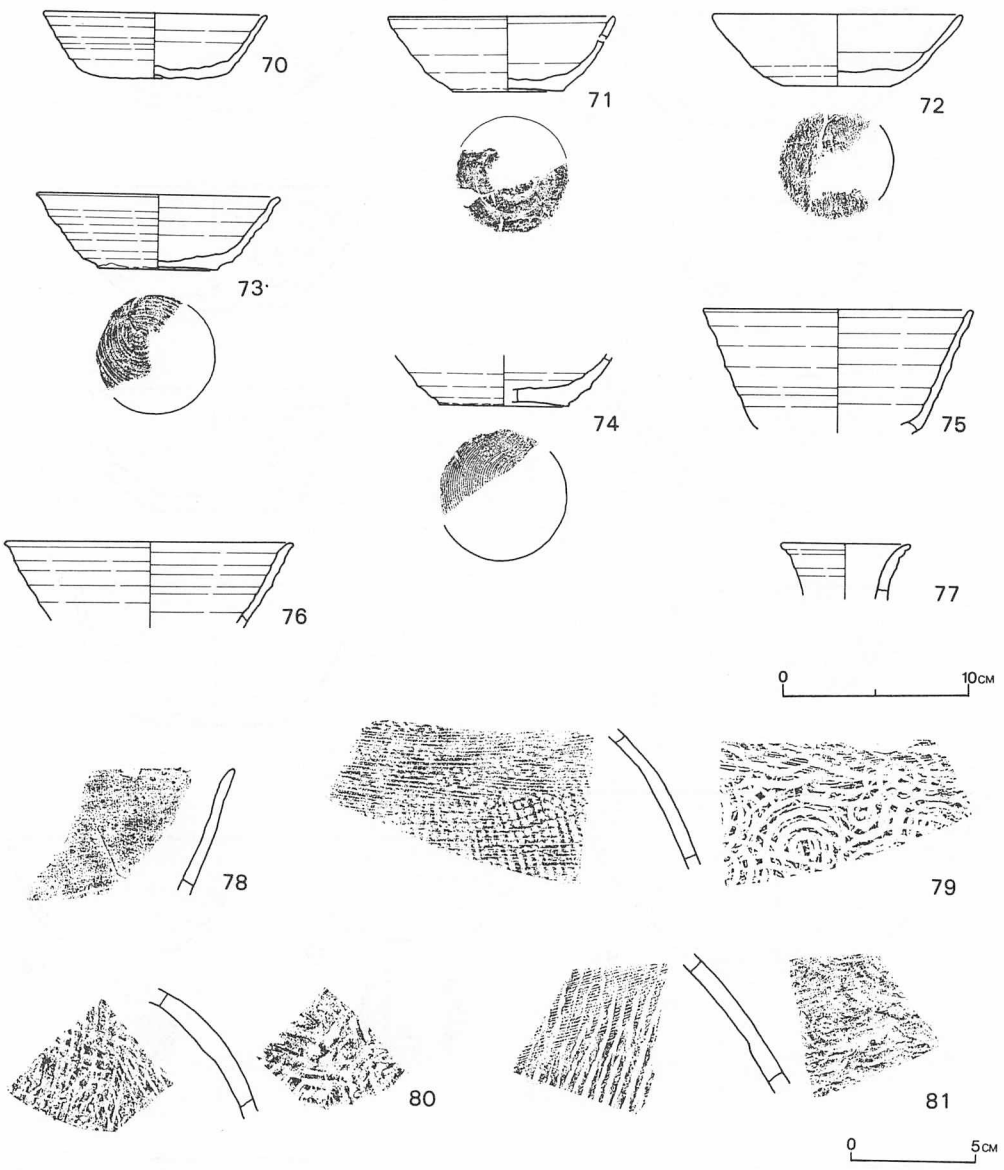
図Ⅷ－14　包含層出土の土器(6)



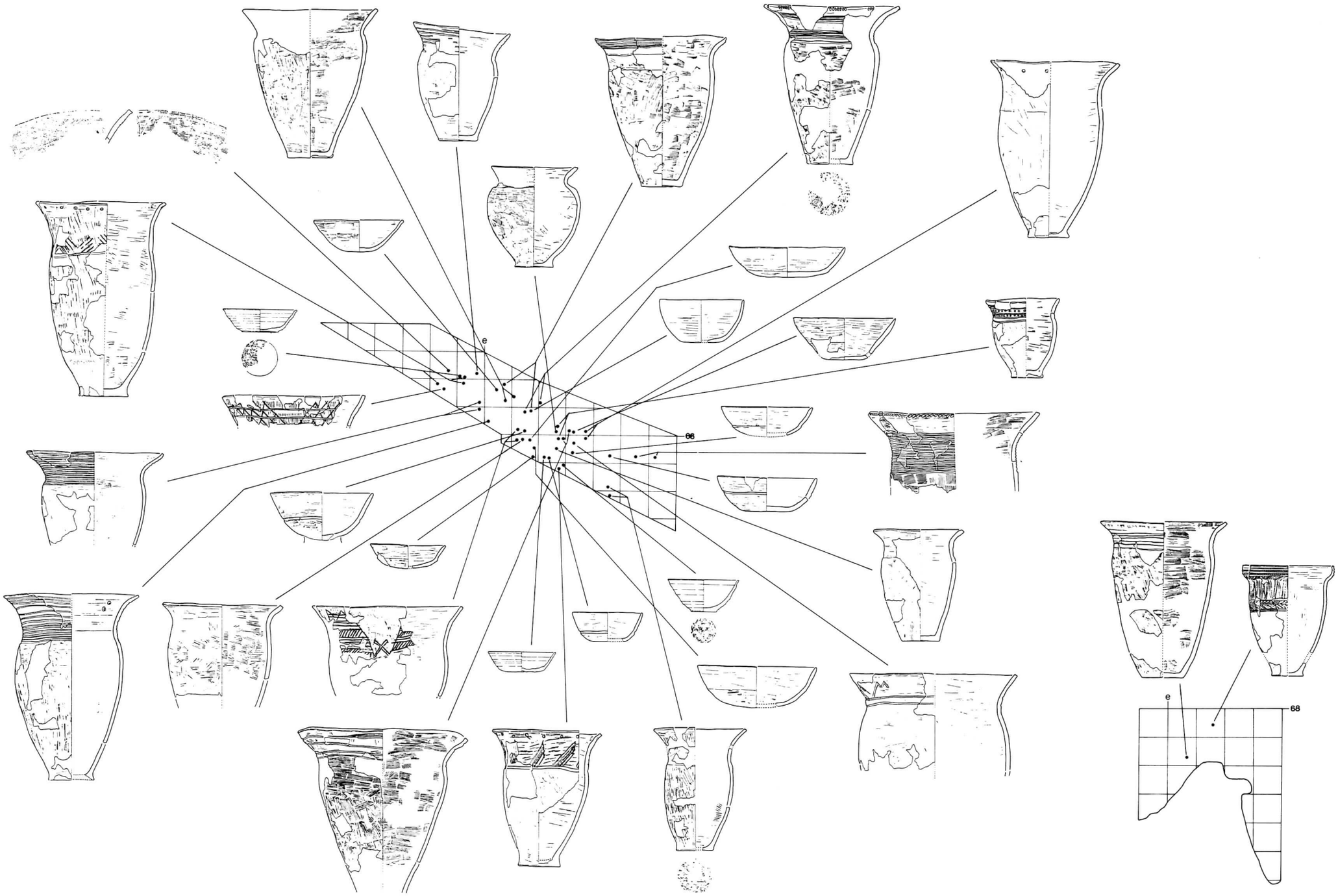
図Ⅶ－15　包含層出土の土器(7)



図Ⅶ－16　包含層出土の土器(8)



図Ⅶ－17　包含層出土の土器(9)



図Ⅶ－18　土器出土位置図

(3) 土・石製品

(a) 土製玉（図Ⅶ－20－1～28）

28個出土した。形態から次の4つに分類される。A：径と高さがほぼ等しく、断面が円形に近いもの。B：径と高さがほぼ等しく、断面が方形に近いもの。C：径が高さより大きく、断面が長方形に近いもの。D：高さが径より大きく、断面形が長円形に近いもの。

形態別の点数は、Aが15点、Bが5点、Cが4点、Dが4点である。

大きさは、最大径が1.0～1.4cm、高さが0.6～1.5cmで、平均値は、最大径1.2cm、高さ1.1cmである。

調整は、形態別に差はなくナデ調整されている。

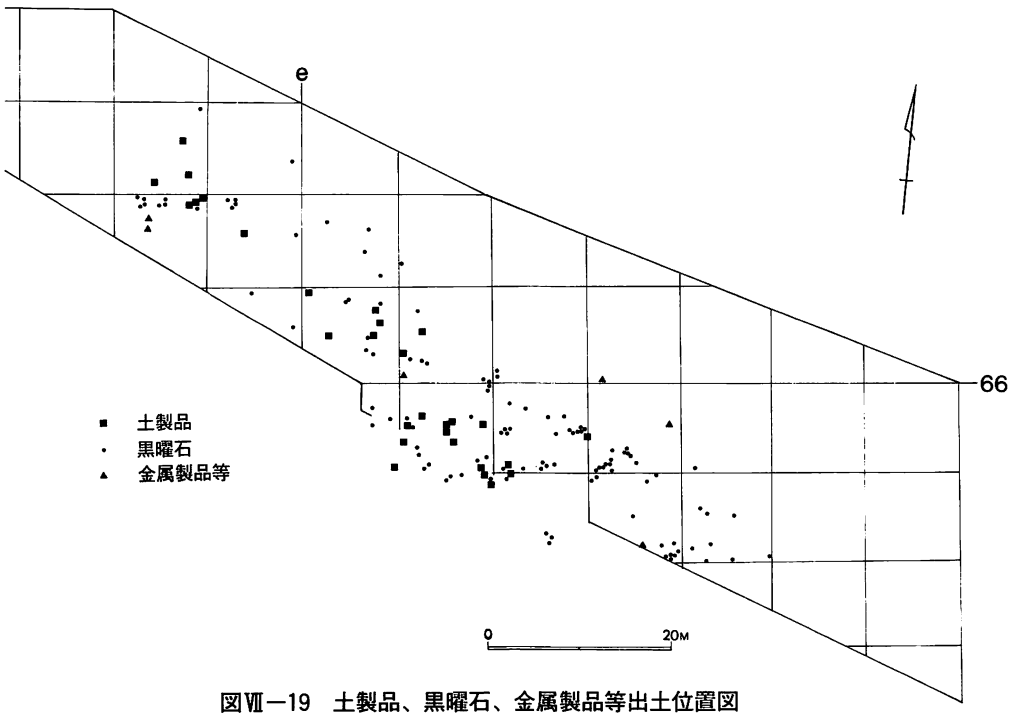
色調・胎土は、表Ⅶ－5に示してある。

貫通孔の径は、0.1～0.4cmで、0.2cmが13点、0.3cmが9点、0.4cmが4点、0.1cmが2点ある。平均値は、0.25cmである。断面はほぼ垂直になるものが多いが、No 9・19・20は「くの字状」になる。

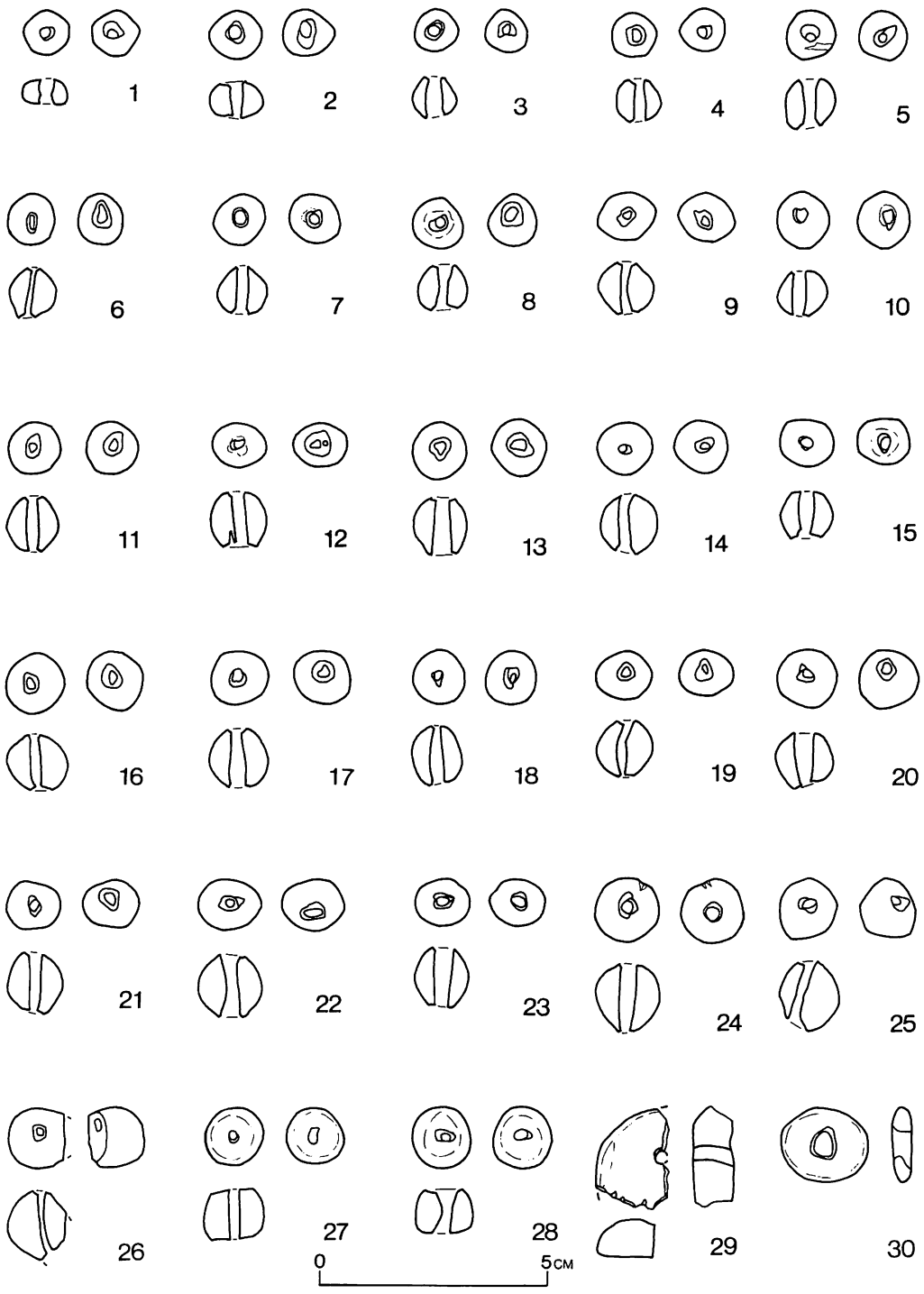
これらの貫通孔は、穿孔されたものでなく、断面に植物繊維の圧痕が残ることから、植物の茎などの軸に土を丸めて団子状にしたものを焼成し穿たれたと考えられる。

分布状態は、e－65－17・18、f－65－89・99、f－66－80地区の3か所に集中している（図Ⅶ－19）。

出土状況は、No 7が柱穴の覆土から出土したほかは、Ⅰ黒層の中位～下位にかけて、土器片や礫と共に出土している。（佐藤和雄）



図Ⅶ－19　土製品、黒曜石、金属製品等出土位置図



図Ⅶ－20　Ｐ－71、包含層出土の土・石製品

表Ⅶ－5　擦文時代の土・石製品一覧

No.	名称	形態	発掘区	最大径(cm)	高さ(cm)	貫通孔直径(cm)	備考
1	土製玉	C	f-65-89	1.0	0.6	0.3	色調　褐色 胎土　砂粒多い
2	〃	C	f-66-80	1.1	0.8	0.2	色調　褐色 胎土　砂粒多い
3	〃	B	e-65-18	1.0	0.9	0.3	色調　明褐色
4	〃	B	e-65-18	1.0	0.9	0.2	色調　明褐色
5	〃	B	e-65-18	1.1	1.1	0.4	色調　明褐色
6	〃	A	f-65-99	1.0	1.1	0.1	色調　暗褐色
7	〃	A	P－71覆土 (e-65-17)	1.2	1.0	0.2	色調　暗褐色
8	〃	B	f-65-99	1.1	0.9	0.3	色調　暗褐色
9	〃	A	e-65-08	1.3	1.1	0.2	色調　暗褐色
10	〃	A	f-66-70	1.2	1.0	0.2	色調　褐色
11	〃	A	f-66-81	1.2	1.2	0.2	色調　暗褐色
12	〃	A	f-66-80	1.2	1.2	0.2	色調　暗褐色
13	〃	A	e-65-17	1.2	1.2	0.3	色調　暗褐色
14	〃	A	e-65-17	1.2	1.3	0.3	色調　暗褐色
15	〃	B	f-66-80	1.2	1.0	0.3	色調　褐色
16	〃	A	f-65-89	1.3	1.2	0.2	色調　暗褐色 胎土　砂粒多い
17	〃	A	f-66-80	1.3	1.3	0.2	色調　暗褐色 胎土　砂粒多い
18	〃	D	f-66-80	1.1	1.3	0.2	色調　暗褐色
19	〃	A	f-66-80	1.2	1.2	0.2	色調　暗褐色
20	〃	A	f-66-80	1.3	1.2	0.3	色調　暗褐色
21	土製玉	D	f-66-80	1.2	1.3	0.3	色調　暗褐色 胎土　砂粒多い
22	〃	A	f-66-80	1.4	1.4	0.4	色調　暗褐色
23	〃	D	f-65-99	1.2	1.3	0.4	色調　暗褐色
24	〃	A	f-65-99	1.4	1.5	0.3	色調　暗褐色 胎土　砂粒多い
25	〃	D	f-65-99	1.3	1.5	0.2	色調　暗褐色 胎土　砂粒多い
26	〃	A	f-66-70	1.4	1.5	0.1	色調　暗褐色 胎土　砂粒多い
27	〃	C	f-66-71	1.3	1.1	0.2	色調　褐色
28	〃	C	f-66-90	1.4	0.9	0.4	色調　暗褐色

No.	名称	発掘区	大きさ(cm) 長×幅×厚	重さ(g)	材質
29	土製品	f-65-99	－×－×0.8	－	色調　明褐色土 胎土　長石が多い
30	有孔石製品	f-65-89	1.9×1.6×0.4	2.0	Mud.

表Ⅶ－6　擦文時代の土製玉大きさ一覧

形態	最大径(cm)	高さ(cm)
A	1.0～1.4	1.0～1.5
B	1.0～1.2	0.9～1.1
C	1.0～1.4	0.6～1.1
D	1.1～1.3	1.3～1.5

(b)　土製品・石製品（図Ⅶ－20－29・30）

土製品は、3分の2程度を欠失した円盤状のものが1点出土した。片面が平坦になっており、短軸方向に2か所の貫通孔がある。色調・胎土については、表Ⅶ－5に示してある。

石製品は、泥岩製のものが1点出土した。扁平な石を素材とし、中央部に両側から穿孔されている。

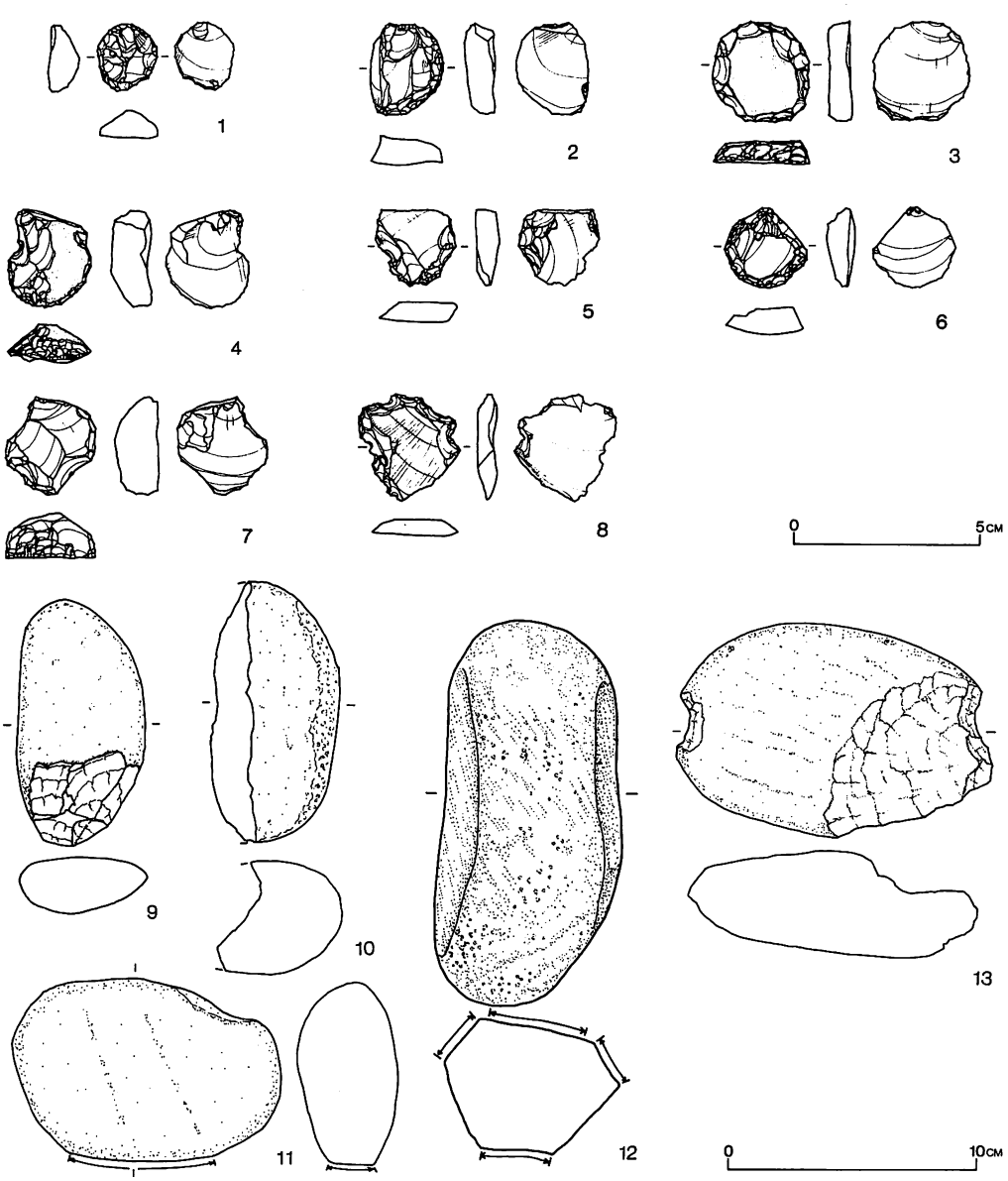
土製品・石製品のいずれも、土製玉の集中地点から出土しており、出土状況も土製玉と同じである。（佐藤和雄）

(4)　石　器（図Ⅶ－21、図版Ⅶ－14－2）

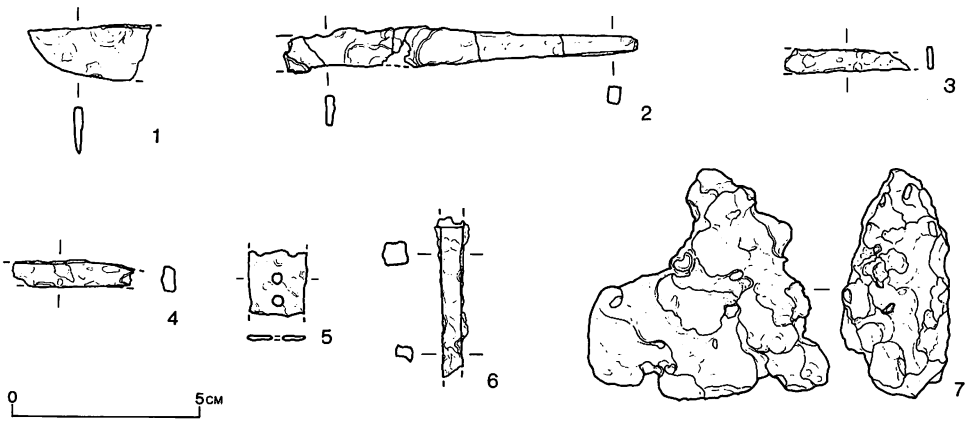
1～8はスクレイパー。小形のものが多く、e・f－65区、f－66区から出土した。出土した総数は14点である。全て片面加工である。1・3は調整加工が全周縁に施されている。1は断面形が三角形を呈するが、2・3は偏平であり、3は中央に大きく礫皮を残している。2は一部欠損している。4～8は側縁の一部に、剝片の形状を大きく変えずに刃部を作出している。4・7は剝片の一端に刃部を作出し、5・6・8は剝片の一側縁に直線的、内・外湾した刃部を作出している。

9・10はたたき石。9は偏平な礫を、10は厚みのある礫を利用している。10は側縁にも使用

面がある。11はすり石。使用面の幅は広い。12は砥石。擦文土器と出土した。4面を使用面としており、ともに中央部が凹んでいる。鉄製品に使用していた可能性がある。13は石錐。長軸上の両端を欠いている。11はⅠ黒層より出土したが、その形態よりⅡ黒層のものが混入したと考えられる。（越田雅司）



図Ⅶ－21　包含層出土の石器



図Ⅶ－22　金属製品等

表Ⅶ－7　擦文時代の掲載金属製品等一覧

No.	名　称	位　置	大きさ（単位cm）長さ × 幅 × 厚さ	重さ(g)	材　質	備　考	写真図版
1	刀子	e-65-09	(3.2)× 1.5 × 0.2	(3.8)	鉄	MV－1減圧含浸	Ⅶ-14-3-1
2	刀子	f-66-60	(9.4)× 1.0 × 0.3	(5.9)	鉄	MV－1減圧含浸	Ⅶ-14-3-2
3	刀子	e-65-18	(3.3)× 0.6 × 0.1	(1.2)	鉄	MV－1減圧含浸	Ⅶ-14-3-3
4	刀子	f-65-69	(3.2)× 0.7 × 0.4	(1.7)	鉄	MV－1減圧含浸	Ⅶ-14-3-4
5	小札	f-65-89	(1.7)× 1.5 × 0.1	(1.2)	鉄	MV－1減圧含浸	Ⅶ-14-3-5
6	角釘	f-66-61	(4.2)× 0.9 × 0.6	(3.6)	鉄	MV－1減圧含浸	Ⅶ-14-3-6
7	鉄滓	f-65-89	6.1 × 6.4 × 2.9	108.6	鉄	MV－1減圧含浸	Ⅶ-14-3-7

(5)　金属製品など（図Ⅶ－22、表Ⅶ－7、図版Ⅶ－14－3）

7点の金属製品が出土した。焼土や礫の集中する地点の外側に散点的に分布し、際立った集中や規則性は認められない。

1は刀子の切先部分の破片である。幅1.5cm、厚さは0.2cmである。平棟？平造りであろう。2は切先から刃部中央を欠損した刀子である。刃部の幅は1.0cm、厚さ0.2cmである。茎の長さは4.4cm、茎尻部分での幅は0.4cm、厚さは0.3cmである。刃区、棟区とも不鮮明で刃部から茎尻に向かって緩やかに窄まる。3は刀子の茎部分である。区側及び茎尻を欠損している。幅は0.6cm、厚さは0.1cmである。4は刀子の茎部分である。区側及び茎尻を欠損している。幅は0.7cm、厚さは0.4cmである。5は小札である。両端を欠損している。幅は1.5cm、厚さは0.1cmである。狭長で非常に薄く、中央に孔が2穴認められる。上部は破損により不鮮明であるが孔が横に2穴存在するようにも見える。6は上部の欠損した角釘と思われる。現存の幅0.9cm、厚さ0.6cmである。上部が厚いのは錆による膨張のためであろうか。2・4・6同様に刀子の茎の可能性もある。7は飴状に溶解した鉄滓である。部分的に黒色のガラス化した気泡部分が認められる。なお、1・2・4・5・7については岩手県立博物館の赤沼英男氏に分析を依頼中である。

（田口　尚）

表Ⅶ－8　擦文時代の遺構出土の動物遺存体

地区 遺構名	層	貝類(甲殻類) 種・部位	数	重量	魚類 サケ 部位	数	重量	魚類 その他魚類 種・部位	数	重量	鳥類 種・部位	数	重量	哺乳類 陸海獣 種・部位	数	重量	その他 種・部位	数	重量	総重量 (g)	備考
P－22	覆土													焼獣骨 fr		10.26				10.26	
F－20	焼土													焼獣骨 fr		5.43				5.43	
合計																15.69				15.69	

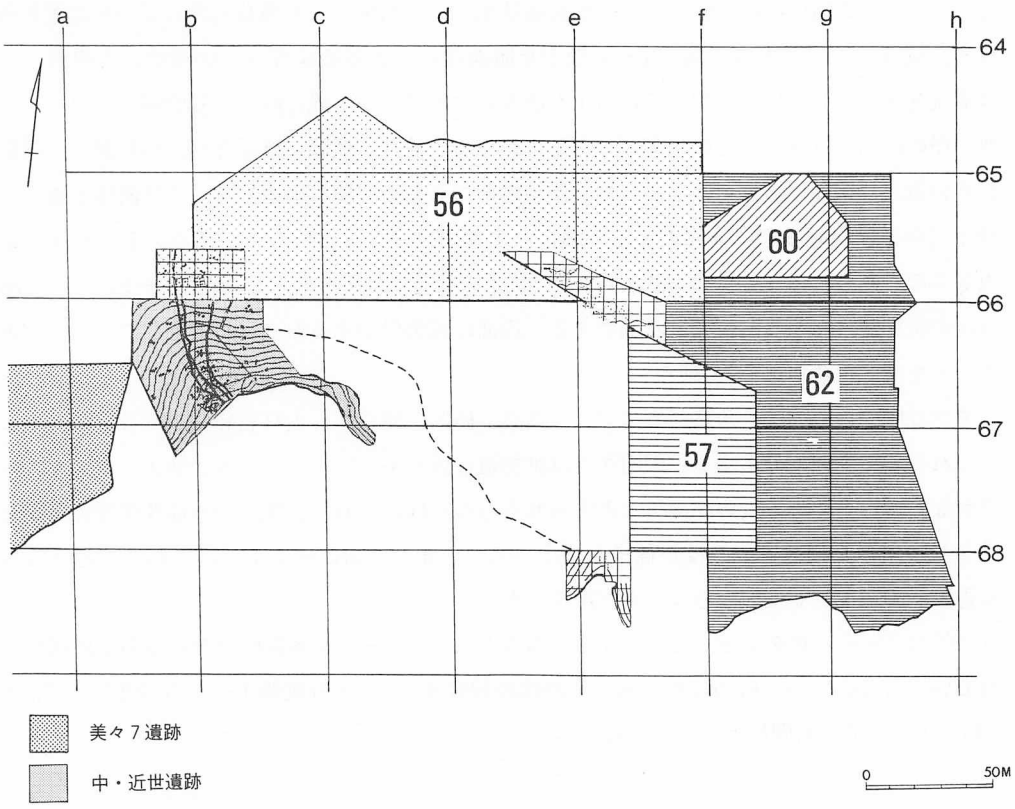
表Ⅶ－9　擦文時代の包含層出土の動物遺存体

地区 遺構名	層	貝類(甲殻類) 種・部位	数	重量	魚類 サケ 部位	数	重量	魚類 その他魚類 種・部位	数	重量	鳥類 種・部位	数	重量	哺乳類 陸海獣 種・部位	数	重量	その他 種・部位	数	重量	総重量 (g)	備考
e-65-07	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		1.58				1.58	
e-65-08	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		6.74				6.74	
f-65-79	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		35.78				35.78	
f-65-89	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		1.77				1.77	
f-65-99	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		3.60				3.60	
f-66-60	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		0.18				0.18	
f-66-70	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		9.93				9.93	
f-66-71	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		0.25				0.25	
f-66-80	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		18.00				18.00	
f-66-90	Ⅰ黒													焼獣骨 fr		3.66				3.66	
f-68-72	Ⅰ黒	ウバガイ殻頂 R		5.78																5.78	
合計				5.78												81.49				87.27	

4　中・近世の遺構と遺物

調査は当初、ｄ－66区からｃ－66区にかけての1,320㎡を対象としていた。調査が進行して行くにしたがい道跡などの遺構や遺物がｂ－66区側に続いていることが判明したため、北海道教育委員会文化課の範囲確認調査が実施された。この結果ｂ－66区部分が追加され、台地斜面の2,900㎡を対象に調査を行った。この地区は台地上の昭和56年度（北埋調報７）の調査において、中・近世の道跡、柱穴群、焼土群をはじめ、珠洲系の陶器、金属製品、古銭などが多量に検出されており、隣接する今回の調査区ｂ－66区からｃ－66区にかけて中・近世の遺構と遺物が出土することは予想されていた。地形は標高６～21ｍ、南向きのすり鉢状の沢地形である。斜面の傾斜は強く、最大斜度37度、平均斜度24.8度、遺跡中央の遺構などが密集する比較的なだらかな部分でも13.5度となっている。調査の結果この斜面から中・近世の住居跡２軒、焼土42か所、道跡４か所、杭跡群1,709個が検出された。これらの遺構にはＴａ－ｂ層上面に構築されたもの、Ⅰ黒層上面に構築されたもの、Ⅰ黒層に構築されたものなどがあることが判明した。

遺物は遺構および包含層から中・近世の小刀、刀子、鉄鍋、マレック、釣針、角釘、カスガ



図Ⅶ－23　Ⅰ黒層の中・近世の遺跡

イ、古銭、火打金？などの金属製品のほか、珠州系擂鉢、伊万里系碗、硯、コハク、火打ち石、礫、礫片等が出土した。他に、住居跡、焼土、包含層から骨角器、サケ、ウグイ等の魚類、シカ等の獣骨、ホタテ、カワシンジュガイなどの貝類など多量の動物遺存体が検出された。

昭和56年度の調査区から続く道跡や杭跡群はともに美沢川の低湿地部に続いていて、遺跡がさらに広がることが予測されたため、低湿地部分を対象に、文化課による範囲確認調査が実施された。その結果4,000㎡余に及ぶ低湿地部分が新たに調査対象地に加えられることになり、この地区については次年度以降に調査を実施することとなった。

(1)　遺構

(a)　住居跡

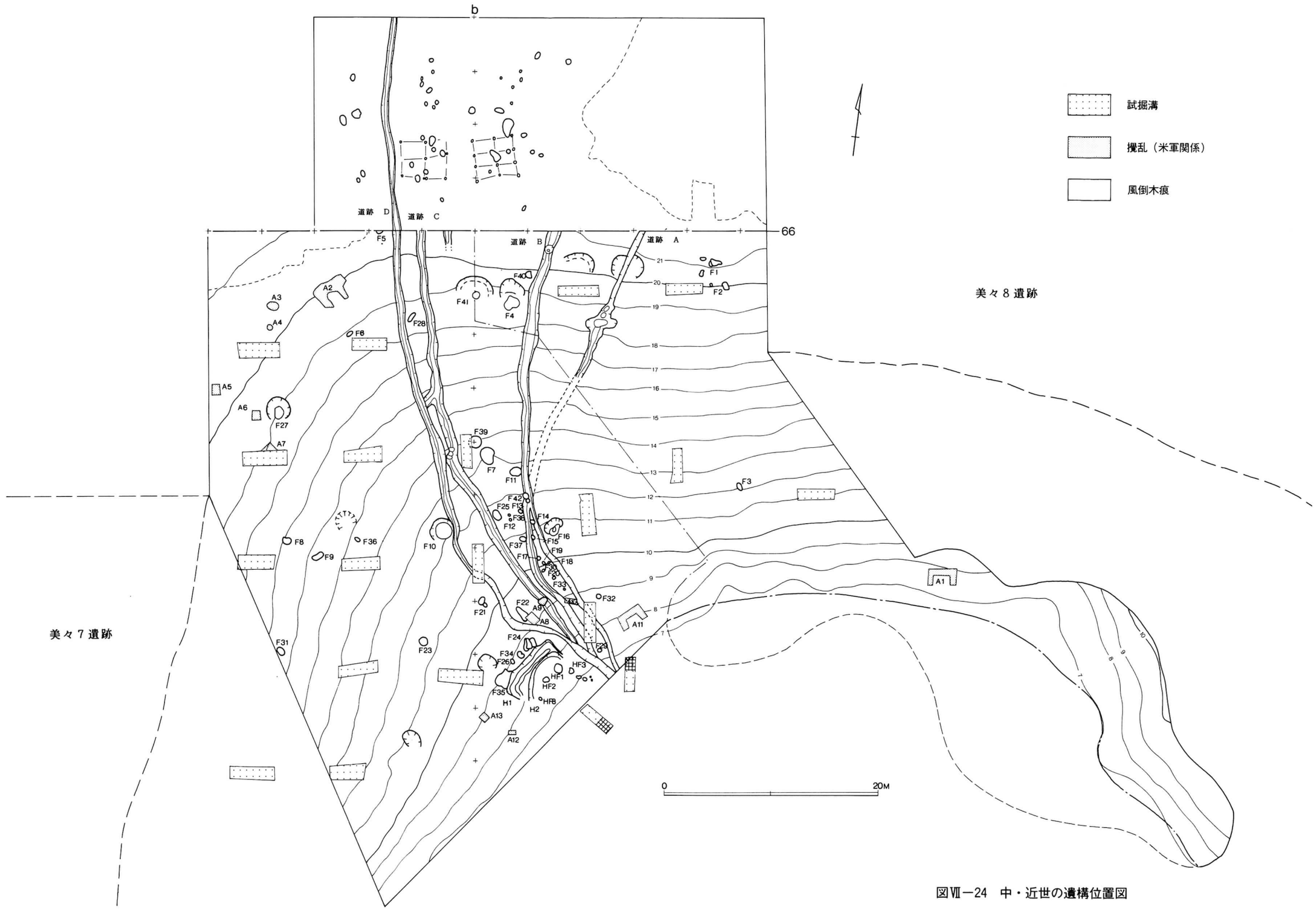
Ｈ－１（図Ⅶ－24・25・27～29、表Ⅶ－10・14、図版Ⅶ－17～19・24～30）

位　置　ｃ－66－87・88・97・98　　**規　模**　6.35×(推定約6.0)／6.20×(推定約6.0)／0.30

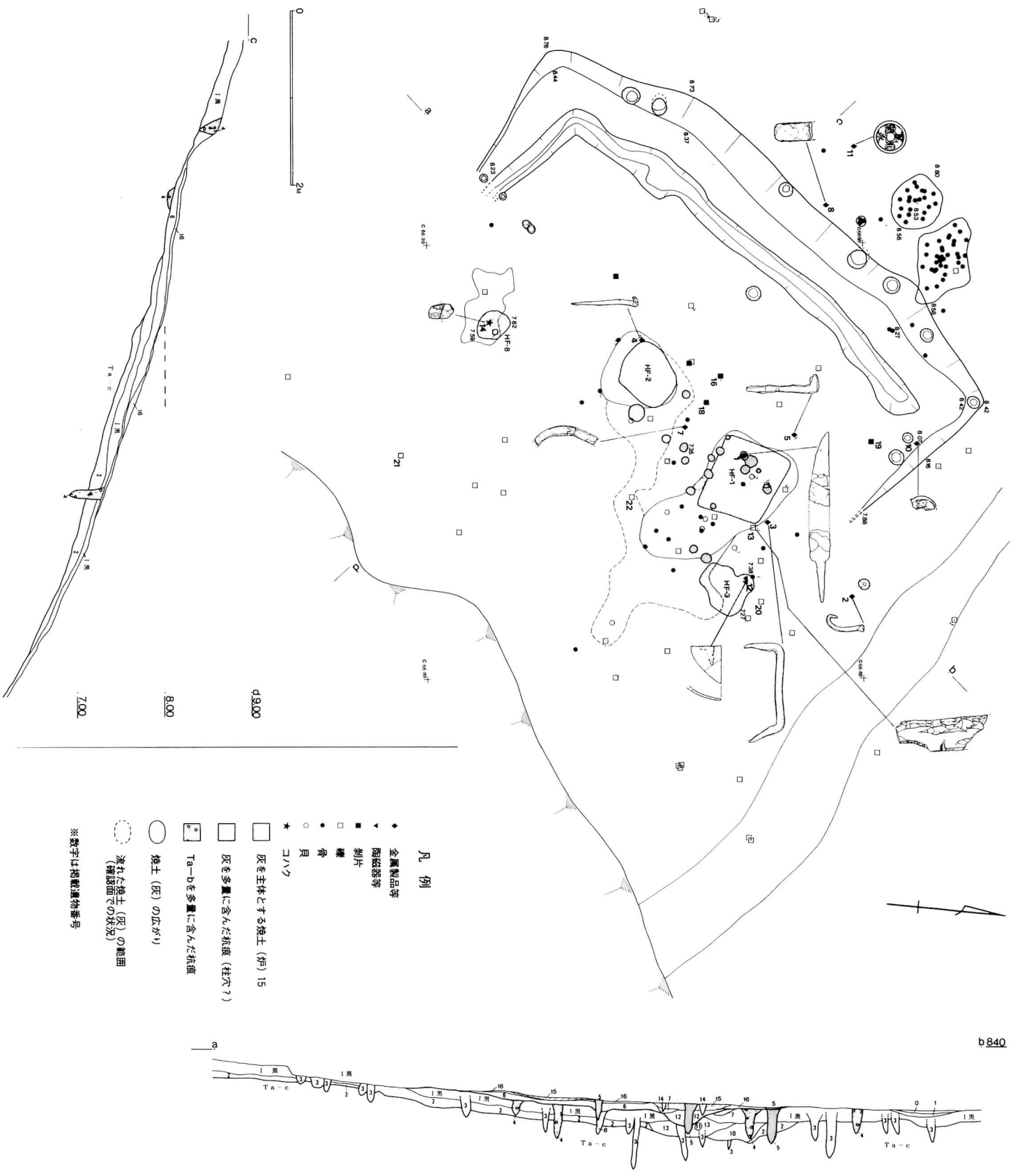
特　徴　調査区南端の水際標高７～９ｍの傾斜地に位置する。Ｔａ－ａ層の落ちこみとして確認された。火山灰を除去した結果、動物遺存体や種子、炭化物を多量に含む流れたような汚れた淡灰色の広がりが認められ、灰を多量に含んだ焼土や鉄製品が検出された。Ｈ－２の上に構築されている。掘込み面は、住居跡の床面がＴａ－ｂを多量に含む杭跡の上に構築されていることからＴａ－ｂ層上面と考えられる。住居南西部分は崩落のため失われている。斜面の肩をＴａ－ｃまで掘り込み、その掘上げ土を盛り土として利用し平坦面を造成していたと考えられる。従って、斜面上方ではＴａ－ｃ層中を床面とし、下方ではＨ－２の覆土、Ⅰ黒層或いは盛土を床面としている。現状では盛土が流れたため床面が水際に向かって傾斜している。北側の壁際には深さ８㎝ほどの周溝がカギ型にめぐる。柱穴は壁際に確認されたが杭跡群と重複しているため明確に把握できなかった。傾斜地であるため片屋根構造であった可能性もある。焼土（炉）は灰を多量に含んだ方形のＨＦ－１やＨＦ－３・ＨＦ－８がある。ＨＦ－１には火箸や串を刺した様な細杭痕が認められる。焼土の周辺には灰を含んだ、深さ20～30㎝、径８㎝前後の杭跡が分布する。配列は不明である。内面に媒の付着する帆立貝が出土しており、燈火用の木を立てた跡かもしれない。

遺物は床面から刀子、角釘、カスガイ、古銭、磁器、硯片？、火打石砕片、礫などが出土し、いずれも焼土周辺に分布する。床面からは動物遺存体も多く出土し、シカ、サケ、ウグイ、ホタテなどやホタテガイ製の穂摘具と考えられるものも検出された。焼土からはサケ等の魚類を中心に多量の動物遺存体のほか種子も検出された。また、ＨＦ－１から針入れ？と考えられる骨角器、ＨＦ－８上面からコハクが出土した。

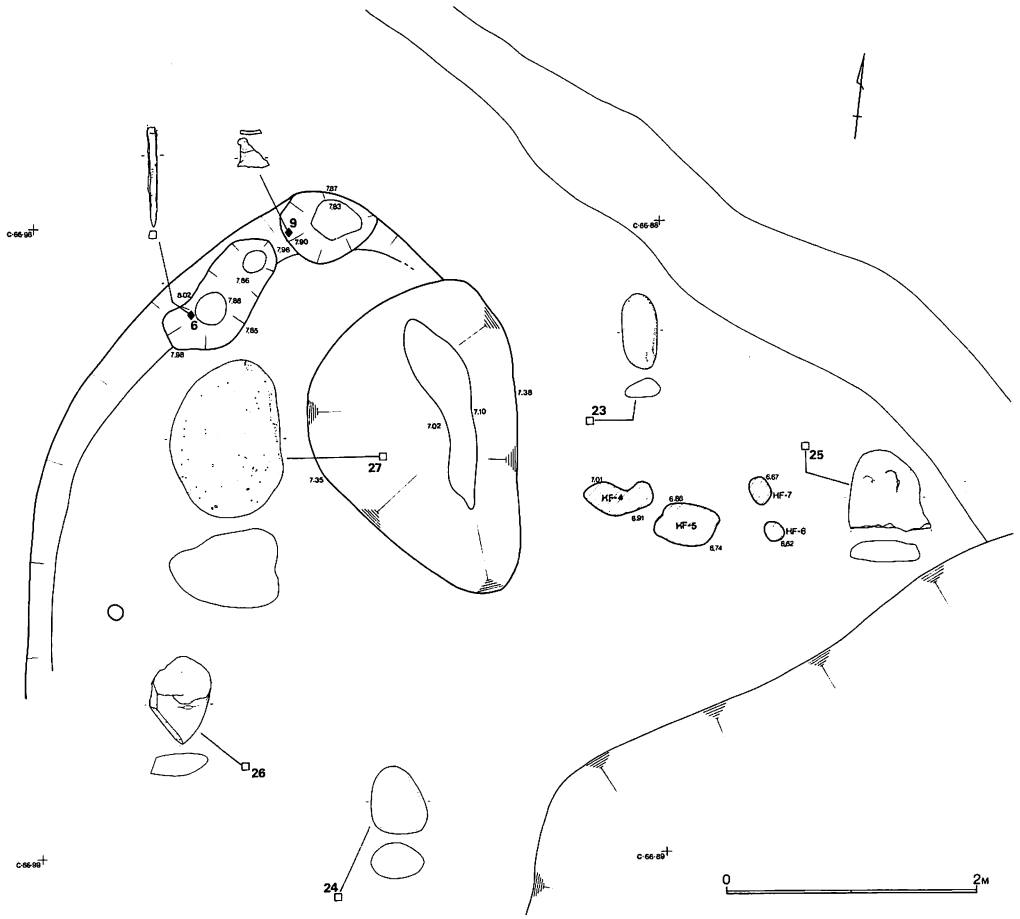
時代はＴａ－ｂ層を切って掘り込んでいることや、Ｔａ－ｂを多量に含む杭跡の上に構築されていることのほか、碗の年代から江戸時代の1667年（Ｔａ－ｂ層降下）から1739年（Ｔａ－ａ層降下）までの時間幅と考えられる。



図Ⅶ－24　中・近世の遺構位置図


HF-1
HF-2
HF-3
HF-8
凡　例
土　層
0　黒色土（Ta−aとTa−bの間の黒色土）
1　褐色土（Ta−b≫黒色土）
2　暗褐色土（Ⅰ黒漸移層）
3　黒色土（Ⅰ黒の杭痕、しまりない）
4　黒褐色土（Ta−b≫黒色土、Ta−b上面の杭痕
5　淡黄色土（灰を多量に含む杭痕、焼土（灰）を切る。炭化物細片多量に含む
6　暗褐色土（Ⅰ黒≫Ta−c＋Ta−b、粘性ある）
7　暗黄褐色（Ta−b≫Ⅰ黒）
8　茶褐色土（Ta−c≫Ⅰ黒）
9　暗灰黄色土（灰を多量に含んだ焼土＋Ⅰ黒、粘性非常にある）
10　褐色土（Ⅰ黒＞Ta−c）
11　Ta−cブロック（斜めにささった杭）
12　暗黒褐色土（Ⅰ黒≫焼土（灰））
13　黒褐色土（Ⅰ黒＋Ta−c）
14　淡灰橙色焼土（焼土≫黒色土、炭化物細片含む）
15　淡黄灰色焼土（炭化物極細片、骨片多量に含む）
16　暗赤褐色土（Ⅰ黒≫Ta−b＋Ta−c＋焼土（15）、炭化物細片、骨片含む）

図Ⅷ−25　H−1



図Ⅶ－26　Ｈ－２

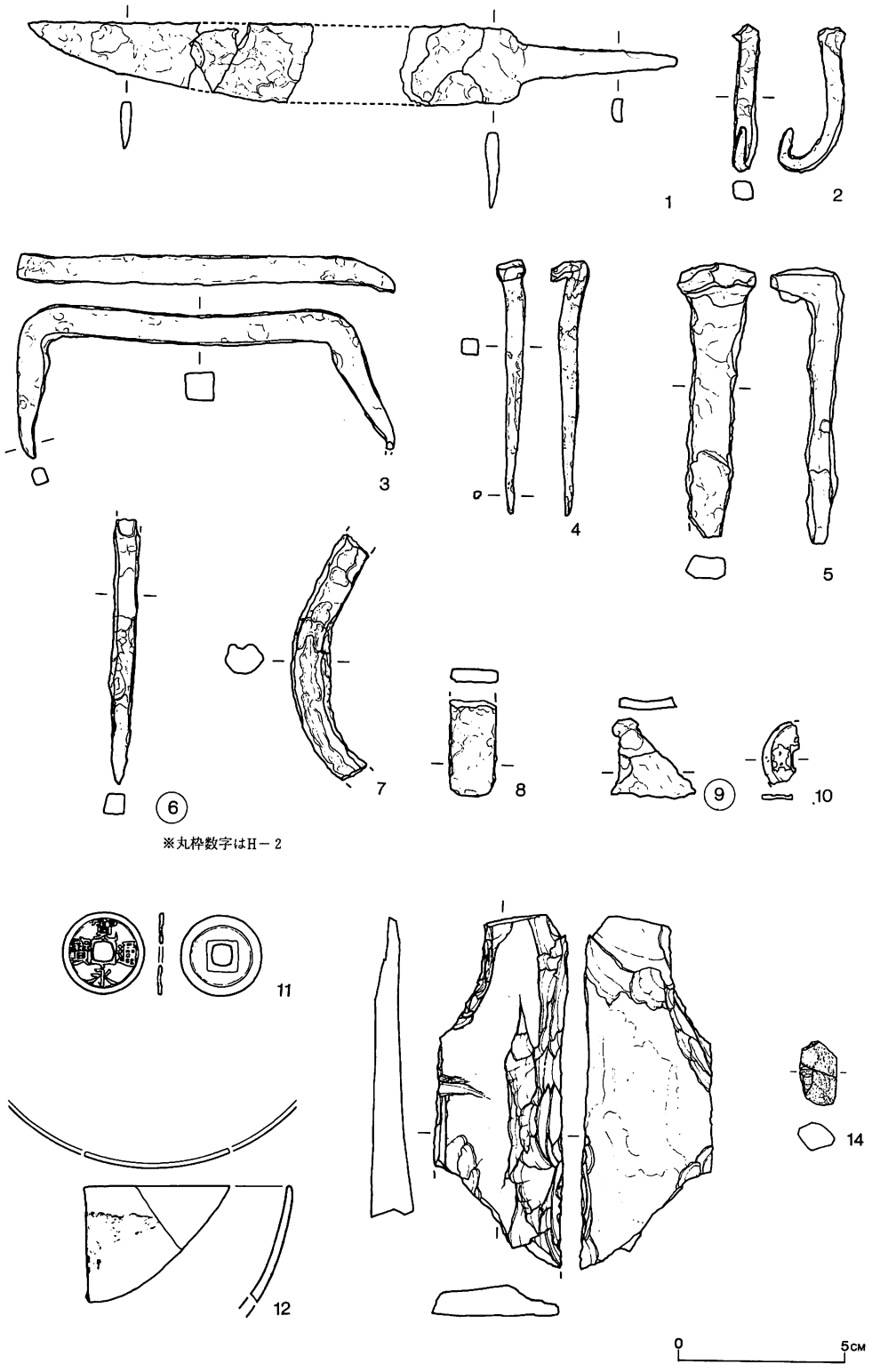
Ｈ－２（図Ⅶ－24・26～27、表Ⅶ－10・14、図版Ⅶ－17～19）

位　置ｃ－66－87・88・97・98　　**規　模**　4.75×(推定約4.0)／4.25×(推定約5.0)／0.12

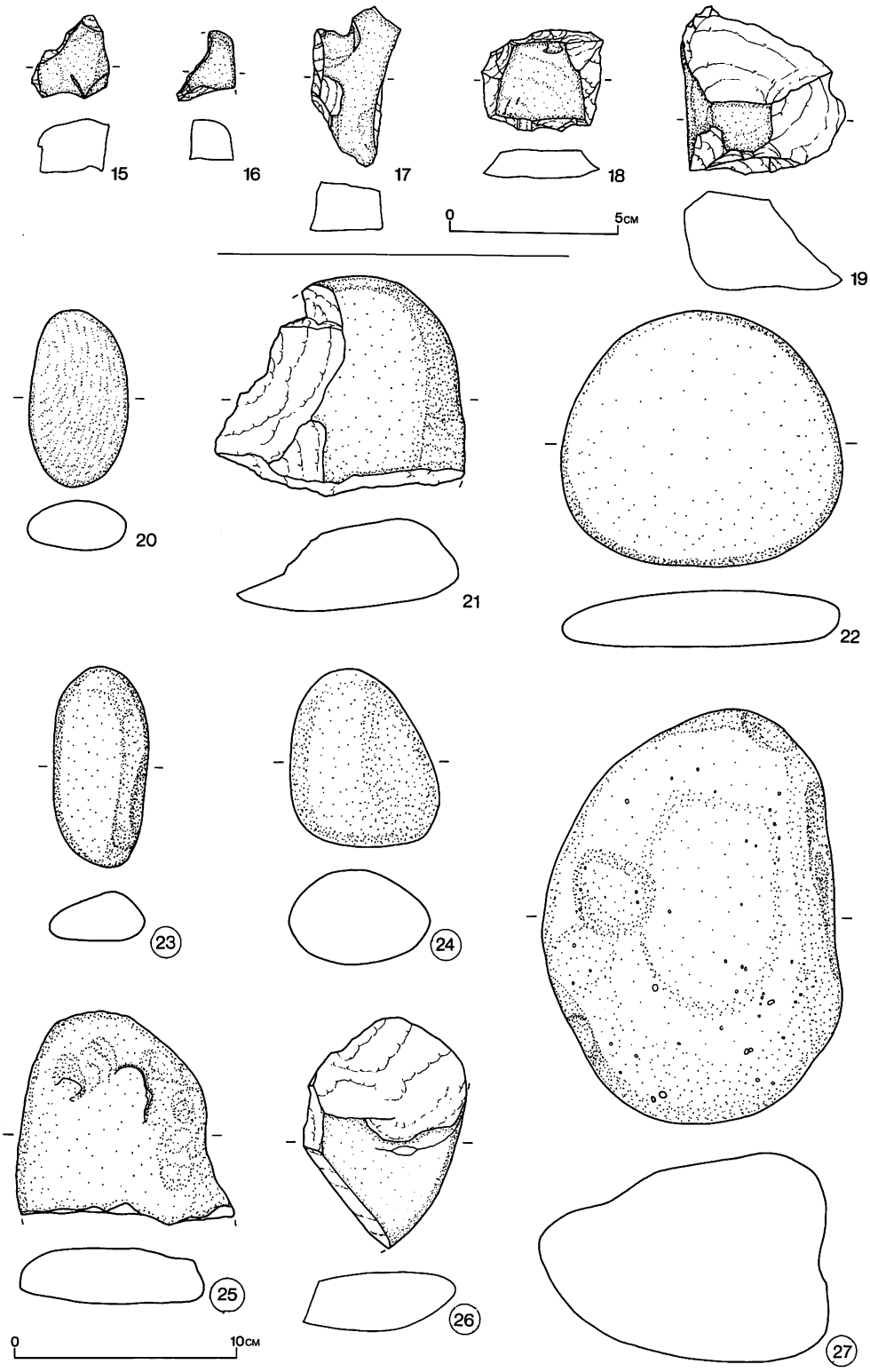
特　徴　Ｈ－１の床面を精査中に黒色土の落ちこみとして確認された。Ｈ－１と重複し、上部を削平されている。覆土中にはＴａ－ｂを含まず、Ｔａ－ｂを多量に含む柱穴に切られている。掘り込み面はⅠ黒層と考えられる。床面はＨ－１同様に一部Ｔａ－ｃを掘り込んで造成したものと考えられる。柱穴は多数の杭跡群のため不明である。壁際に２つの掘り込みがあり、その中からシカなどの動物遺存体が多量に出土した。焼土は本遺跡に関連あると考えられる(斜面水際に位置する）４か所をＨＦ－４・５・６・７とした。いずれもサケ、シカ等の動物遺存体を多量に含む。遺物には鉄製品、動物遺存体のほかや火打石砕片、台石、礫、礫片が出土している。

時代は江戸時代の1667年（Ｔａ－ｂ層降下）以前である。

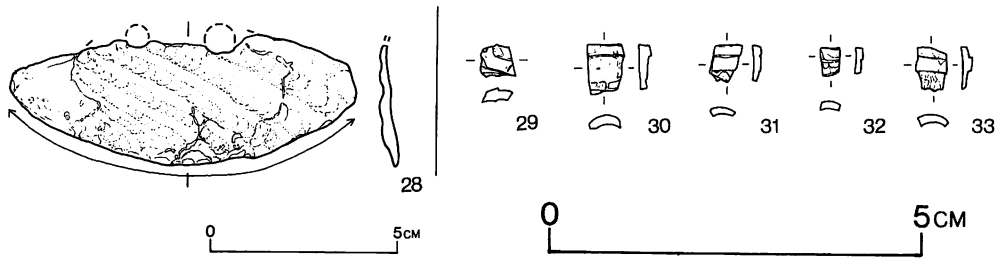
遺　物　住居跡からは金属製品、磁器、硯片？、火打石砕片、大小の礫、骨角器、貝製品などが299点出土した。ここでは周辺から出土した遺物も住居と関連あるものとして掲載した。遺



図Ⅶ－27　Ｈ－１・２出土の遺物(1)



図Ⅶ－28　H－1・2出土の遺物(2)



図Ⅶ－29　貝製品・骨角器

物はＨ－１・２を一括して掲載した。６・９・23～27はＨ－２出土遺物（図中の丸数字）、２・８・11はＨ－１周辺の遺物である。これらの遺物のほか、焼土（炉）や床面からサケ、ウグイ、ニシン、シカ、貝類など多量の動物遺存体が検出されている（詳細は表Ⅶ－14参照）。

１は刀子である。平棟、平造りで刃区、棟区をもつ刀子である。茎は長さ4.2cm、最大幅1.3cm、厚さ0.35cmで茎尻に向かって細くなる。刃部は良く使い込まれ、切先に向かってわずかに反る。マキリと思われる。２は釣針である。断面が正方形の角釘を再加工したものである。３は中央断面が正方形のカスガイである。上部はわずかに凹み、片側が外に開く。４～６は角釘である。４は断面がほぼ正方形で、頭部がほぼ直角に折り曲げられている。銅製である。５は断面がほ

表Ⅶ－10　Ｈ－１・２掲載遺物一覧

No.	名　称	層　位	大　き　さ（単位　）	重さ(g)	材　質	備　　考	写真図版
			長さ　×　幅　×　厚さ				
1	刀子	床	(16.9)×　2.3　×　0.4	(14.8)	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 1
2	釣針	遺構外	4.4　×　0.8　×　0.6	7.6	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 2
3	カスガイ	床	11.3　×　1.1　×　0.8	57.6	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 3
4	角釘	床	7.6　×　0.8　×　0.4	14.2	銅	MV-1滅圧含浸・インクララック塗布	Ⅶ- 18-1- 4
5	角釘	床	8.2　×　2.3　×　0.7	32.7	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 5
⑥	角釘	床	(7.9)×　0.7　×　0.6	(10.4)	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 6
7	鉄製品	床	(7.3)×　1.2　×　0.9	18.9	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 7
8	鉄製品	遺構外	(2.8)×　1.3　×　0.4	8.4	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 8
⑨	鉄製品	床	(2.4)×　(2.5)×　0.3	(4.8)	鉄	MV-1滅圧含浸	Ⅶ- 18-1- 9
10	元豊通寶	床	(1.8)×　0.9　×　0.1	(0.7)	銅	北栄 初鋳1078年 インクララック	Ⅶ- 18-1-10
11	寛永通寶	遺構外	2.5　×　2.5　×　0.1	2.7	銅	初鋳1626年　インクララック塗布	Ⅶ- 18-1-11
12	磁器	床	(3.5)×　(4.3)×　0.3	(6.4)	－－－	推定口径12cm	Ⅶ- 18-2-12
13	硯？	床	(10.5)×　(3.8)×　(1.2)	(43.8)	Ｓ１		Ⅶ- 18-2-13
14	琥珀	F-8上面	1.9　×　1.1　×　0.8	1.0	コハク		Ⅶ- 18-2-14
15	火打石砕片？	床	(2.4)×　(2.3)×　(1.5)	(9.0)	石　英		Ⅶ- 18-2-15
16	火打石砕片？	床	(1.7)×　(1.7)×　(1.1)	(4.0)	Ａｇａ		Ⅶ- 18-2-16
17	火打石砕片？	床	(4.7)×　(2.5)×　(1.4)	(16.1)	Ａｇａ		Ⅶ- 18-2-17
18	火打石砕片？	床	(3.0)×　(3.6)×　(0.8)	(16.6)	Ａｇａ		Ⅶ- 18-3-18
19	火打石砕片？	床	(4.8)×　(4.8)×　(2.9)	(75.4)	Ｃｈｅ		Ⅶ- 18-3-19
20	楕円礫	床	7.9　×　4.5　×　2.2	129.4	Ｇｎｉ		Ⅶ- 18-3-20
21	破損礫	床	(9.6)×(11.7)×　3.7	(530.0)	Ｓａ		Ⅶ- 18-3-21
22	扁平礫	床	11.3　×　12.6　×　2.4	542.0	Ｓａ		Ⅶ- 18-3-22
㉓	楕円礫	床	8.9　×　4.2　×　2.2	143.1	Ｇｎｉ		Ⅶ- 19-1-23
㉔	亜円礫	床	7.9　×　6.5　×　4.2	314.7	Ｑｕａ		Ⅶ- 19-1-24
㉕	扁平礫破損	床	(9.0)×　8.4　×　2.5	(281.1)	Ｓａ		Ⅶ- 19-1-25
㉖	扁平礫破損	床	(10.3)×　(7.0)×　2.6	(230.9)	Ｓａ		Ⅶ- 19-1-26
㉗	台石	床	18.5　×　13.0　×　9.4	3640.0	Ａｎｄ		Ⅶ- 19-1-27
28	貝製品	床	9.3　×　(3.4)×　0.3	15.12	ホタテガイ	パラロイドＢ72塗布	Ⅶ- 30-5-28
29	骨角器破片	床	(0.4)×　(0.5)×　0.2	0.028	獣骨加工	パラロイドＢ72塗布	Ⅶ- 30-2-29
30	骨角器破片	床	(0.7)×　(0.5)×　0.1	0.042	獣骨加工	パラロイドＢ72塗布	Ⅶ- 30-2-30
31	骨角器破片	床	(0.5)×　(0.4)×　0.1	0.023	獣骨加工	パラロイドＢ72塗布	Ⅶ- 30-2-31
32	骨角器破片	床	(0.4)×　(0.3)×　0.1	0.016	獣骨加工	パラロイドＢ72塗布	Ⅶ- 30-2-32
33	骨角器破片	床	(0.6)×　(0.4)×　0.1	0.031	獣骨加工	パラロイドＢ72塗布	Ⅶ- 30-2-33

ぼ長方形で厚い。6は頭部を欠損しているが、断面がほぼ正方形で形態的に4に似るものである。鉄製である。7は両端を欠損した弧状を呈する鉄製品である。断面は両側縁が叩かれて分銅型につぶれている。おそらく、カスガイか角釘を再加工したものであろう。マレック或いはアプ等の破片かもしれない。8は断面が長方形で上部を欠損した楔形の鉄製品である。9は板状で、断面がわずかに湾曲する鉄片である。鉄鍋などの破片かもしれない。10・11は古銭である。10は1／3ほどの破片であり、判然としないが行書体の形態などから元豊通寶（北宋神宗1078初鋳）と思われる。11は寛永通寶（1626初鋳）である。書体の形態から古寛永である。12は碗の口縁部である。文様はコンニャク版により鳥が描かれている。釉は光沢をもち、呉須は明青灰色である。17世紀末から18世紀初頭の伊万里系と考えられる。13は粘板岩製の硯？と考えられる。周縁を破損しているが、内外面とも良く擦られ、上端に向かって擦りくぼんでいる。14はコハクである。加工痕などは認められない。15～19は火打石と考えられる石英、めのう、珪岩の砕片である。20～27は礫である。楕円形（20～23）、扁平（21・22・25・26）、亜円形（24・27）のものがある。20・23は形態的にござ（トマ）や袋（サラニプ）を編むための錘石（ピッ）に似ている。21・25・26は破損している。27は台石である。表面に敲き痕があり、黒色の付着物が認められる。28はホタテガイを加工した穂摘具（ピパ）と考えられる。上部にひもを通す二つの孔が開けられ、刃部は摩耗している。29～33は獣骨製の管状骨角器の細片である。同一個体と考えられ幾何学文が彫刻されている。熱を受けて白色化している。推定径は0.6cmほどである。針入れであろうか。　（田口　尚）

(b)　焼土（図Ⅶ－24・30～37、表Ⅶ－11・12、図版Ⅶ－21・29・30）

焼土は42か所確認された。炭化物の集中も焼土に含めた（位置、規模は表Ⅶ－11参照）。

焼土覆土の状況により4タイプに分けられる。酸化した焼土中に灰を多量に含むもの①（Ｆ－24・35）、②酸化した焼土と炭化物の広がりをもつもの（5・12・13・15～20・22・29・30・32・33・37・38・39）、③酸化した焼土にTa－bを含むもの（Ｆ－21・23・26・34）、④炭化物や炭化材の集中のみのもの（1～4・6～11・14・25・27・28・31・36・40・41・42）。

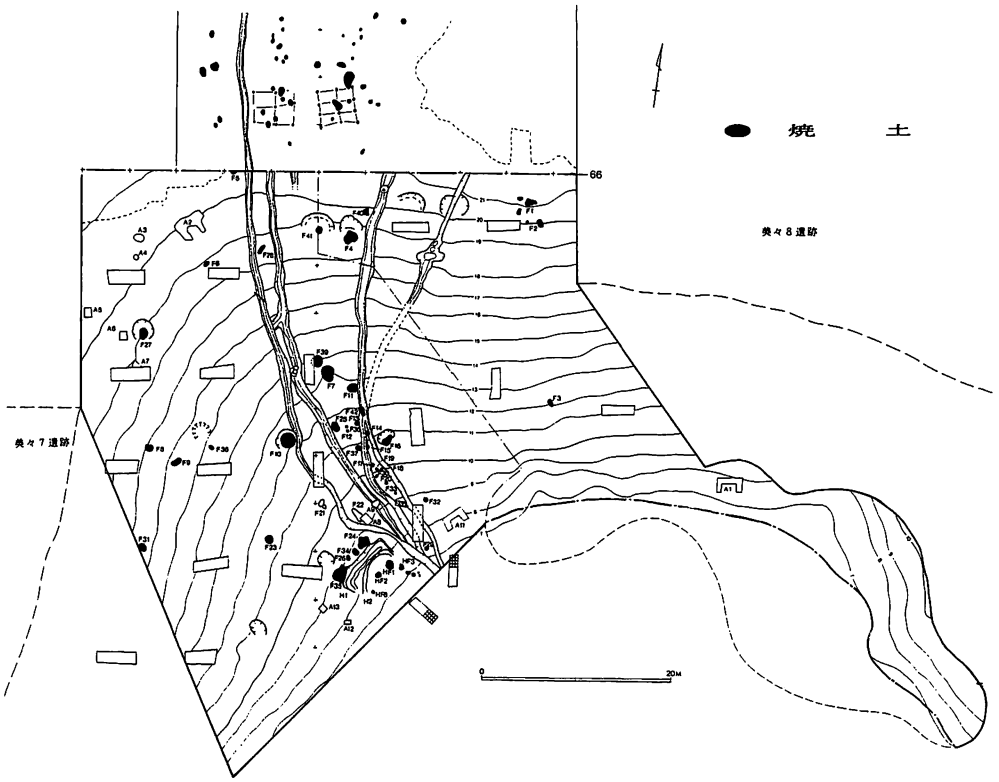
焼土は道跡沿いのものや住居跡周辺に分布するものが多い。道跡Ｂの上に位置するもの（Ｆ－14・15・42）やＨ－1に切られたもの（Ｆ－24・35）もある。台地の肩に位置するもの（Ｆ－4・6・8・9・27・28・31・40）や風倒木痕等により凹んで平坦をなす部分に存在するもの（Ｆ－4・10・16・27・41）は④のタイプが多い。①のタイプは住居跡の焼土と酷似しており、炉として使用されたと考えられる。②③④のタイプは焚火や炉として使用した以外に、夜間に道やこの場所（地区）の所在や危険箇所を指示するための明かりであったとも考えられる。

遺物は②③のタイプの焼土から検出される場合が多い。金属製品がＦ－14・Ｆ－24から出土しているほか、Ｆ－37の側からは曲がった細い帯状の銅製品が出土している。その他、礫、細礫、フレイク・チップ（火打ち石砕片）、サケ、ウグイ、イトウ等の魚骨、シカ等の獣骨、ホタテガイ、ウバガイ等の貝類など多量の動物遺存体や種子が検出されている（詳細は表Ⅶ－

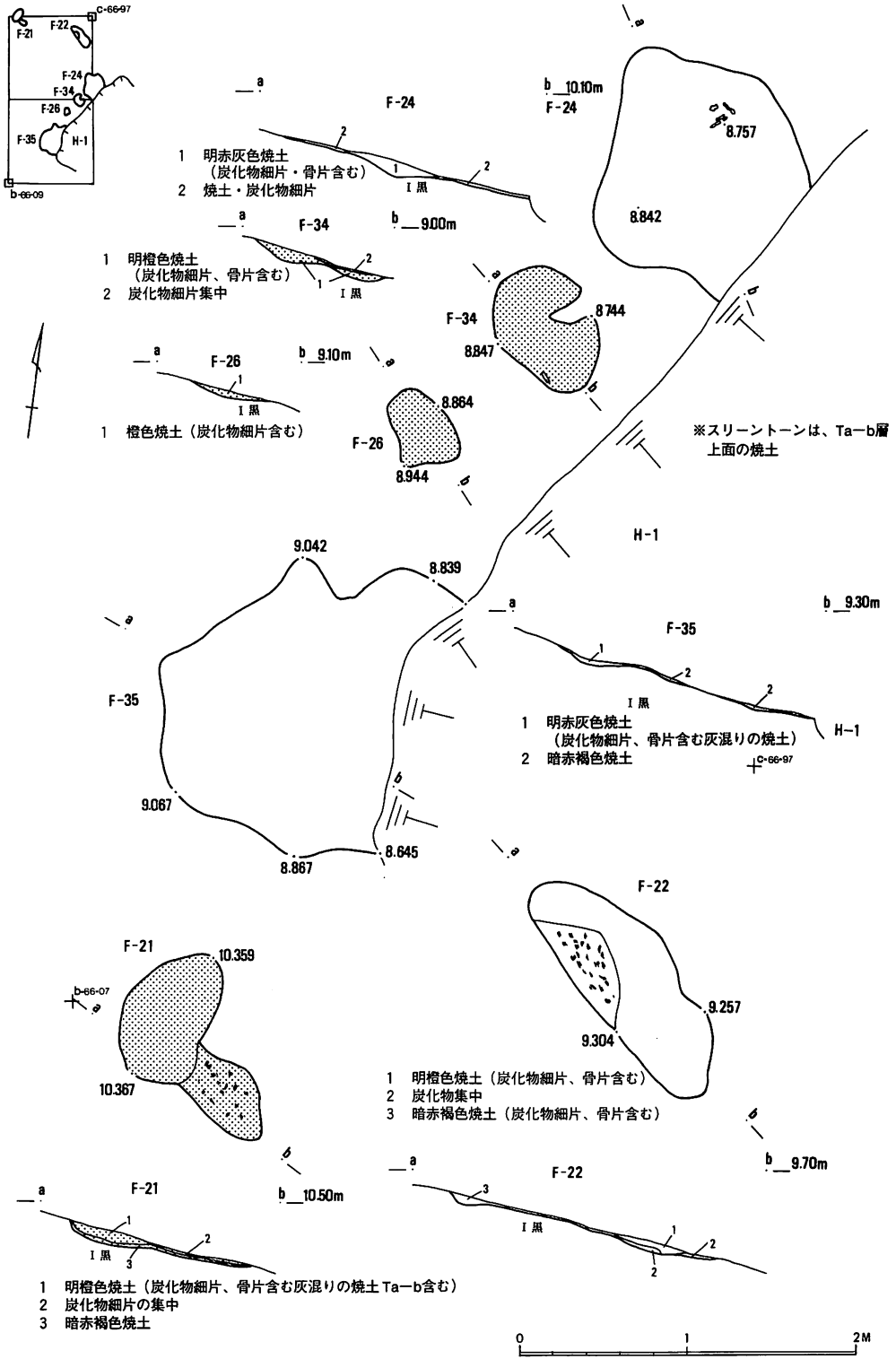
11・15参照)。

検出された焼土は次の三期に分けられる。Ⅰ期：Ta－b上面のもの（F－7・10・11・14・21・23・26・34・42)、Ⅱ期：Ⅰ黒層上面のもの(F－3～6・8・9・12・13・15～20・22・24・25・27～33・35～41)、Ⅲ期：Ⅰ黒層中のもの（F－1・2)。Ⅰ期は江戸時代と考えられ、1667年（Ta－b層降下）から1739年（Ta－a層降下）までの時間幅と考えられる。Ⅱ期は1667年（Ta－b層降下）以前、Ⅲ期は周辺の遺物から続縄文時代の可能性が強い。

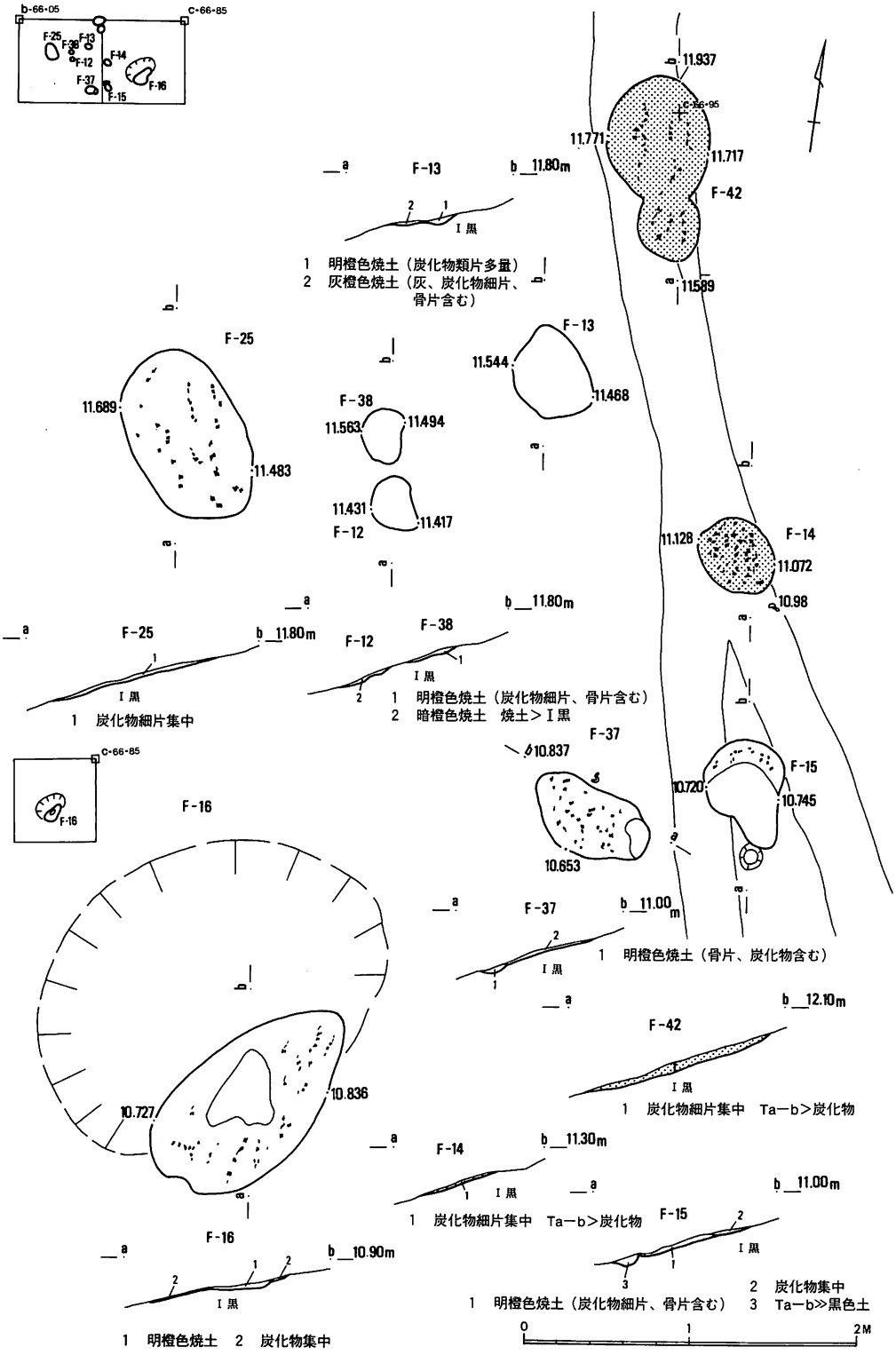
遺　物　1は小札である。上下部を欠損した2穴のものである。2は断面楕円形の棒状の鉄片である。3は断面が正方形の細い角釘状の鉄製品である。



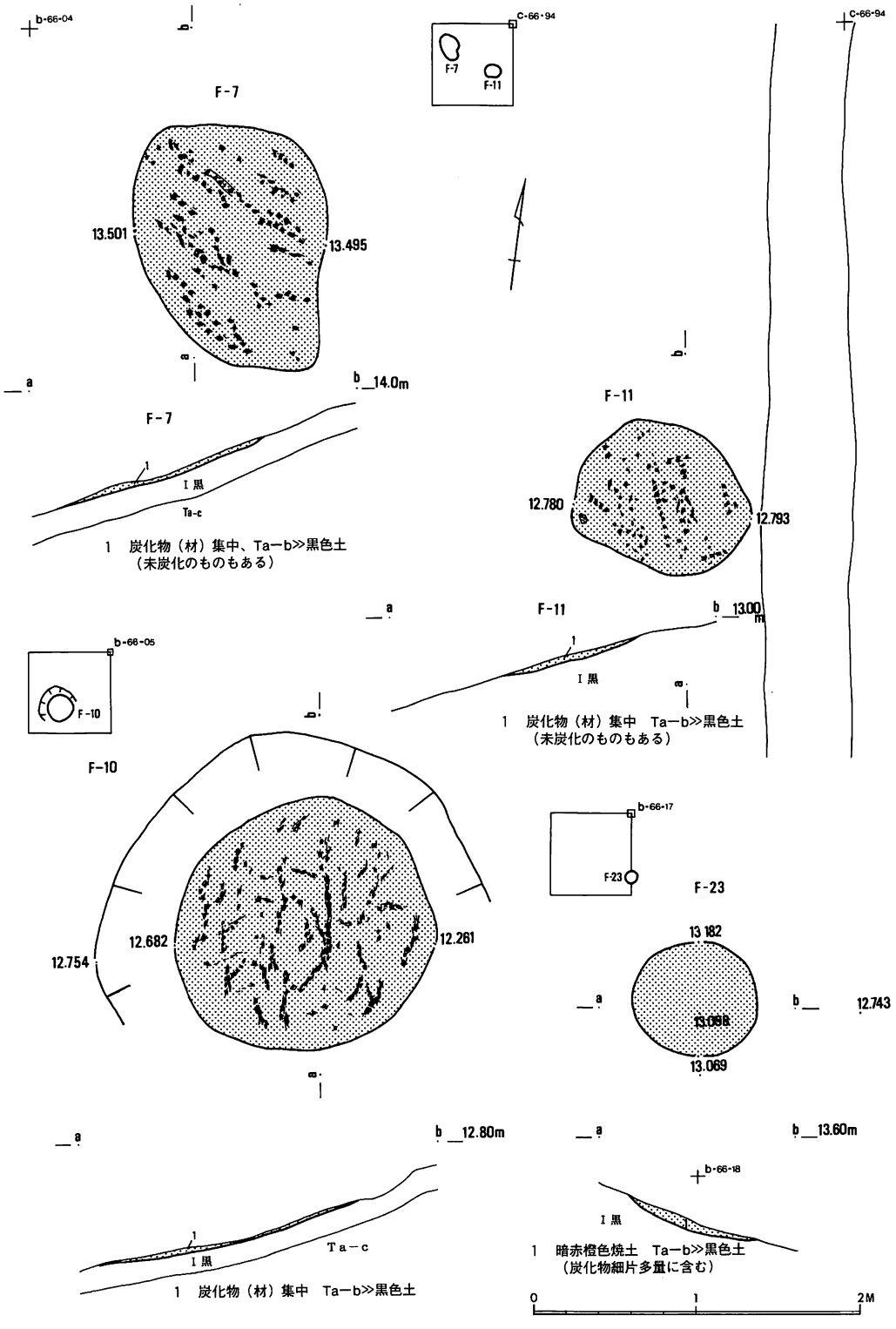
図Ⅶ－30　焼土位置図


c-66-97
F-21
F-22
F-24
F-34
F-26
F-35
H-1
b-66-09
F-24
1　明赤灰色焼土
（炭化物細片・骨片含む）
2　焼土・炭化物細片
I 黒
b 10.10m
8.757
8.842
F-34
b 9.00m
1　明橙色焼土
（炭化物細片、骨片含む）
2　炭化物細片集中
8.744
8.847
F-26
b 9.10m
1　橙色焼土（炭化物細片含む）
8.864
8.944
※スリーントーンは、Ta−b層
上面の焼土
H-1
9.042
8.839
b 9.30m
F-35
1　明赤灰色焼土
（炭化物細片、骨片含む灰混りの焼土）
2　暗赤褐色焼土
H-1
c-66-97
9.067
8.645
8.867
F-22
F-21
10.359
b-66-07
9.257
9.304
10.367
1　明橙色焼土（炭化物細片、骨片含む）
2　炭化物集中
3　暗赤褐色焼土（炭化物細片、骨片含む）
b 9.70m
F-22
F-21
b 10.50m
1　明橙色焼土（炭化物細片、骨片含む灰混りの焼土Ta−b含む）
2　炭化物細片の集中
3　暗赤褐色焼土
0
1
2M

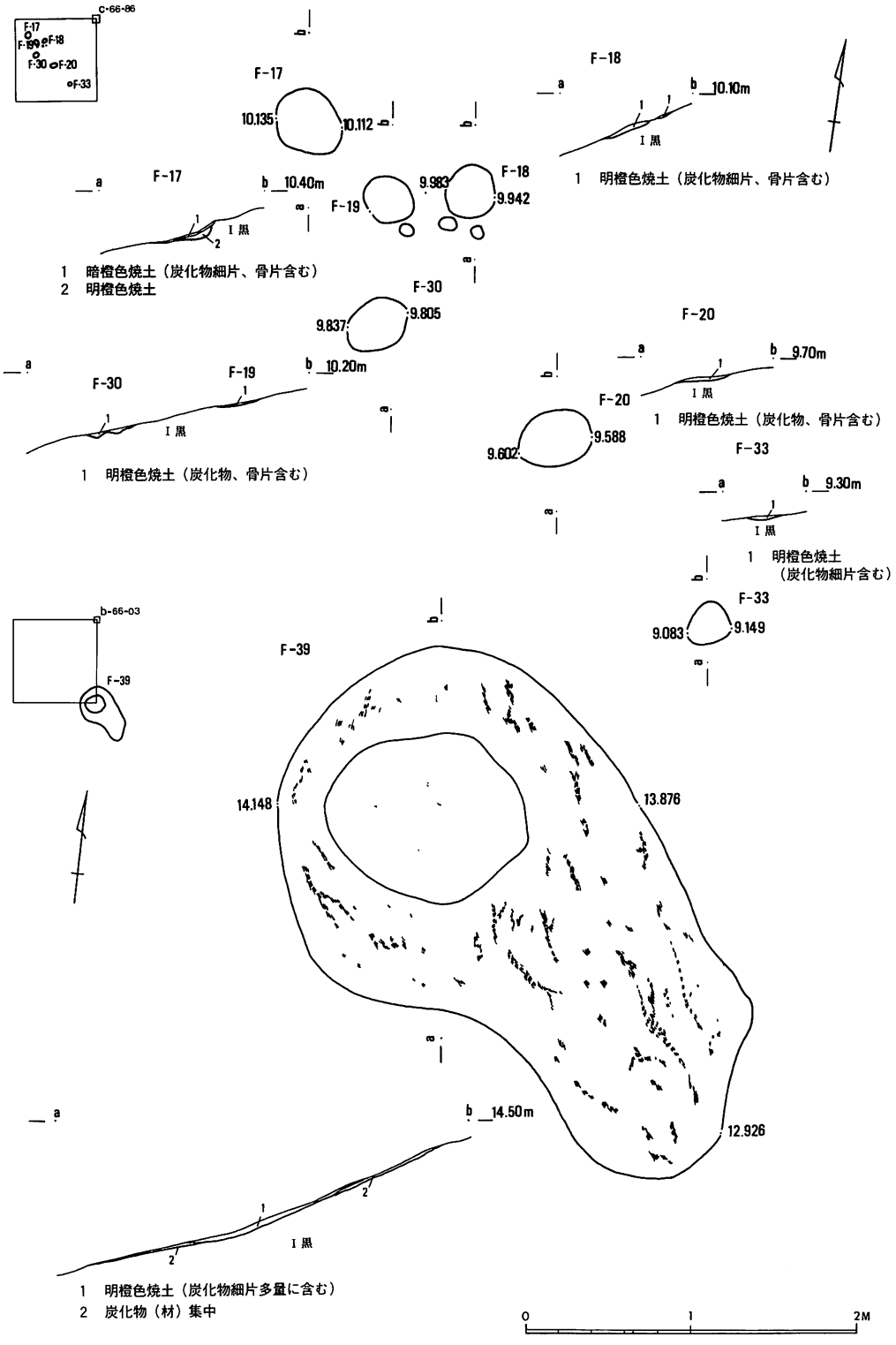
図Ⅶ−31　焼土(1)


b-66-05
c-66-85
F-25
F-38
F-13
F-12
F-14
F-37
F-16
F-15
11.937
c-66-95
11.771
11.717
F-42
11.589
F-13
11.544
11.468
F-25
11.689
11.483
F-38
11.563
11.494
11.431
11.417
F-12
11.128
F-14
11.072
10.98
F-25
b 11.80m
1 炭化物細片集中
F-38
F-12
b 11.80m
1 明橙色焼土（炭化物細片、骨片含む）
2 暗橙色焼土　焼土＞Ⅰ黒
F-37
10.837
10.653
F-15
10.720
10.745
c-66-85
F-16
F-37
b 11.00m
1 明橙色焼土（骨片、炭化物含む）
F-42
b 12.10m
1 炭化物細片集中　Ta−b＞炭化物
10.727
10.836
F-14
b 11.30m
1 炭化物細片集中　Ta−b＞炭化物
F-15
b 11.00m
F-16
b 10.90m
1 明橙色焼土　2 炭化物集中
2 炭化物集中
1 明橙色焼土（炭化物細片、骨片含む）　3 Ta−b≫黒色土
Ⅰ黒
0
1
2M

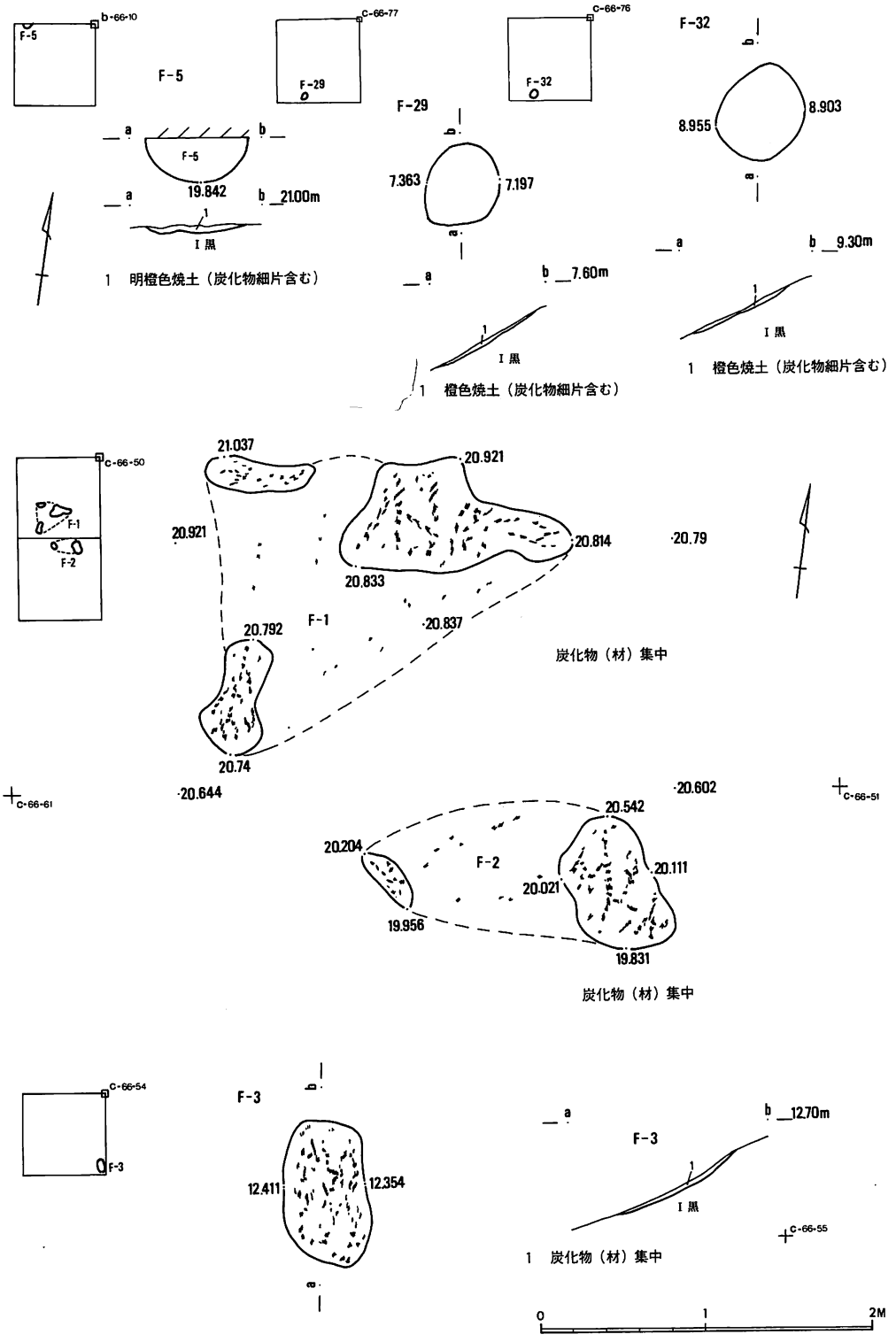
図Ⅶ−32　焼土(2)


b-66-04
F-7
13.501
13.495
a
b
14.0m
F-7
1
I 黒
Ta-c
1　炭化物（材）集中、Ta−b≫黒色土
（未炭化のものもある）
c-66-94
F-7
F-11
c-66-94
F-11
12.780
12.793
F-11
13.00m
1
I 黒
1　炭化物（材）集中　Ta−b≫黒色土
（未炭化のものもある）
b-66-05
F-10
F-10
12.682
12.754
12.261
b-66-17
F-23
F-23
13.182
13.098
13.069
12.743
12.80m
1
I 黒
Ta−c
1　炭化物（材）集中　Ta−b≫黒色土
13.60m
b-66-18
I 黒
1
1　暗赤橙色焼土　Ta−b≫黒色土
（炭化物細片多量に含む）
0
1
2M

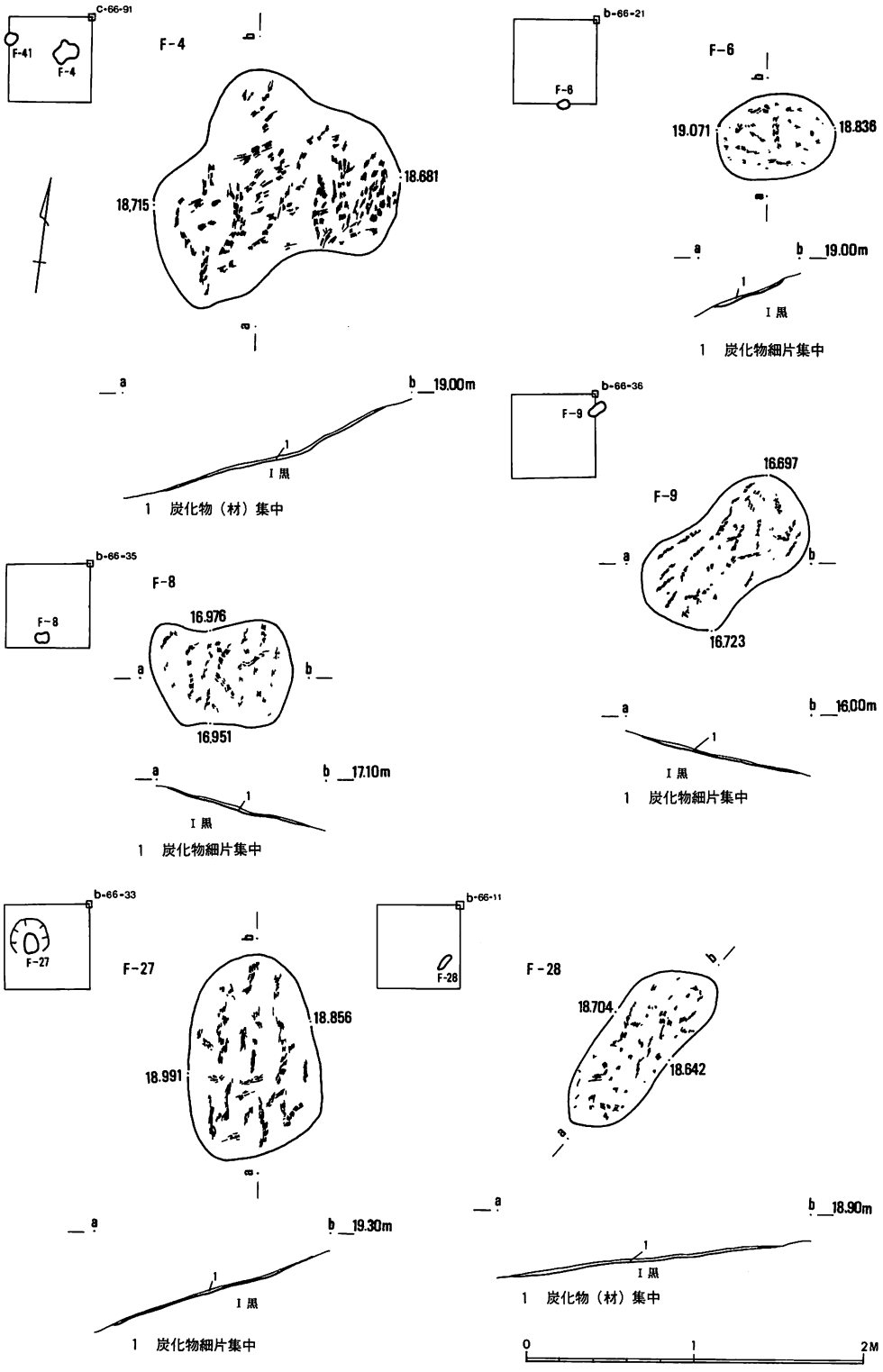
図Ⅶ−33　焼土(3)


c-66-86
F-17
F-18
F-30
F-20
F-33
F-17
10.135
10.112
F-18
a
b
10.10m
1
Ⅰ黒
1　明橙色焼土（炭化物細片、骨片含む）
F-17
b
10.40m
F-19
9.983
F-18
9.942
1
2
Ⅰ黒
1　暗橙色焼土（炭化物細片、骨片含む）
2　明橙色焼土
F-30
9.837
9.805
F-30
F-19
b
10.20m
1
Ⅰ黒
1　明橙色焼土（炭化物、骨片含む）
F-20
b
9.70m
1
Ⅰ黒
F-20
9.602
9.588
1　明橙色焼土（炭化物、骨片含む）
F-33
b
9.30m
1
Ⅰ黒
1　明橙色焼土
（炭化物細片含む）
F-33
9.083
9.149
b-66-03
F-39
F-39
14.148
13.876
12.926
b
14.50m
1
2
Ⅰ黒
1　明橙色焼土（炭化物細片多量に含む）
2　炭化物（材）集中
0
1
2M

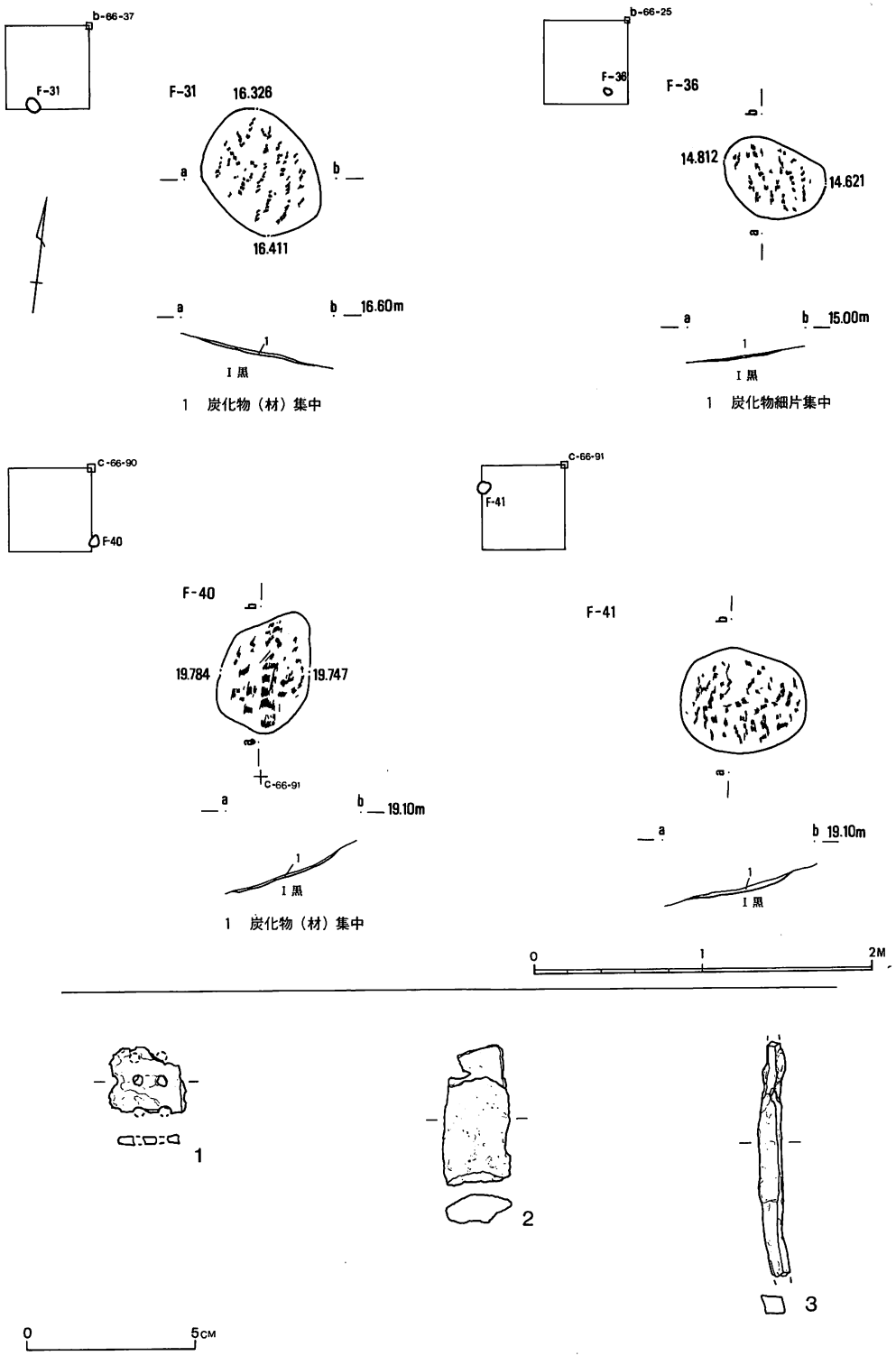
図Ⅶ－34　焼土(4)


F-5
F-29
F-32
19.842
21.00m
7.363
7.197
8.955
8.903
9.30m
7.60m
1 明橙色焼土（炭化物細片含む）
1 橙色焼土（炭化物細片含む）
I 黒
F-1
F-2
21.037
20.921
20.814
20.833
20.837
20.792
20.74
20.644
20.79
20.602
炭化物（材）集中
20.542
20.204
20.111
20.021
19.956
19.831
F-3
12.411
12.354
12.70m
1 炭化物（材）集中
0
1
2M

図Ⅶ－35　焼土(5)


C-66-91
F-41
F-4
F-4
18.715
18.681
a
b
1 炭化物細片集中
b-66-21
F-6
19.071
18.836
19.00m
I黒
1 炭化物細片集中
b-66-36
F-9
16.697
F-9
16.723
16.00m
I黒
1 炭化物細片集中
b-66-35
F-8
F-8
16.976
16.951
17.10m
I黒
1 炭化物細片集中
b-66-33
F-27
F-27
18.856
18.991
19.30m
I黒
1 炭化物細片集中
b-66-11
F-28
F-28
18.704
18.642
18.90m
I黒
1 炭化物（材）集中
0
1
2M

図Ⅶ－36　焼土(6)



図Ⅶ－37　焼土と焼土出土の金属製品

表Ⅶ－11　中・近世の焼土一覧

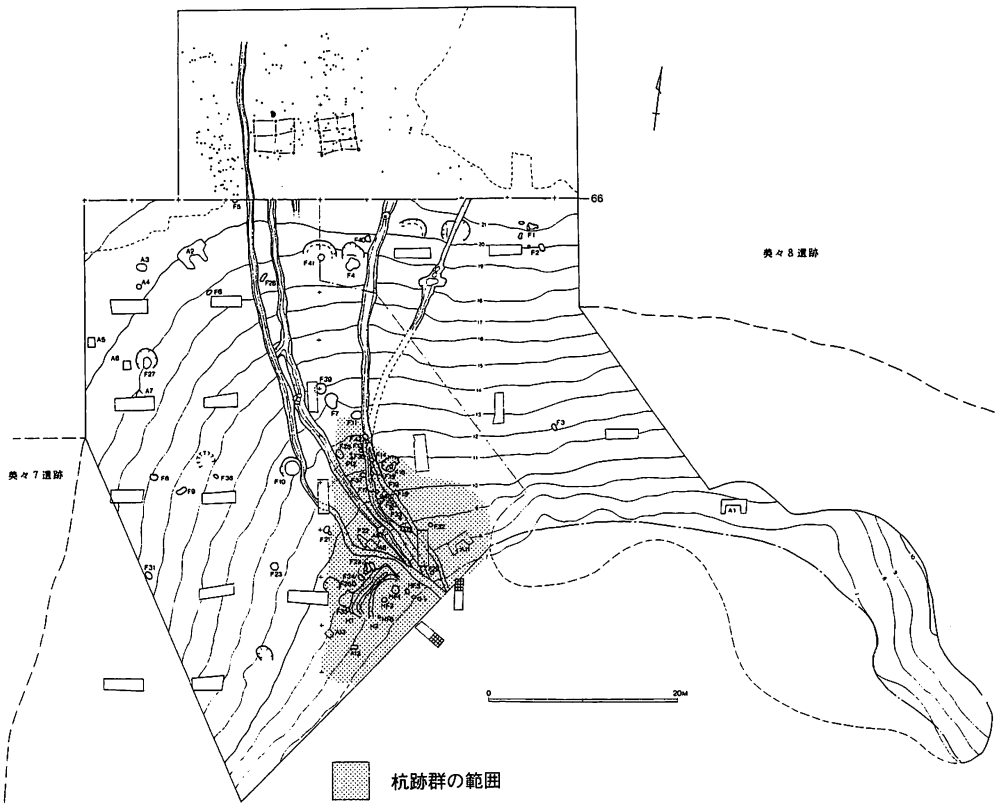
名　称	位　　置	層　位	規　　模（m） 長軸長×短軸長×最大厚	確認面 レベル	出　土　遺　物	備　　考
F－1	c-66-50	Ⅰ黒中位	2.26　×1.56　×0.01	21.04		
F－2	c-66-51	Ⅰ黒中位	1.94　×0.81　×0.01	20.54		
F－3	c-66-54	Ⅰ黒上面	0.91　×0.52　×0.03	12.53		
F－4	c-66-91	Ⅰ黒上面	1.50　×1.06　×0.03	18.92		
F－5	b-66-10	Ⅰ黒上面	0.62　×0.27　×0.04	20.89		
F－6	b-66-21・22	Ⅰ黒上面	0.70　×0.49　×0.02	19.07		
F－7	c-66-94	Ta-b上面	1.71　×1.19　×0.03	13.71	フレイク・チップ1.	
F－8	b-66-35	Ⅰ黒上面	0.91　×0.54　×0.02	17.05		
F－9	b-66-26・36	Ⅰ黒上面	1.07　×0.52　×0.02	16.72		
F－10	b-66-05	Ta-b上面	1.58　×1.50　×0.04	12.68		
F－11	c-66-94	Ta-b上面	1.10　×0.91　×0.04	12.89		
F－12	c-66-95	Ⅰ黒上面	0.33　×0.24　×0.03	11.46	フレイク・チップ6.細礫7.焼獣骨.	
F－13	c-66-95	Ⅰ黒上面	0.56　×0.45　×0.04	11.57	細礫7.焼獣骨.	
F－14	c-66-85	Ta-b上面	0.48　×0.40　×0.02	11.16	細礫9.金属製品等3.	
F－15	c-66-85	Ⅰ黒上面	0.67　×0.47　×0.05	10.81	細礫16.焼獣骨.	フローテーション含む
F－16	c-66-85	Ⅰ黒上面	1.43　×0.75　×0.03	10.82	細礫24.	
F－17	c-66-86	Ⅰ黒上面	0.44　×0.37　×0.07	10.22	フレイク・チップ1.細礫6.焼獣骨.	
F－18	c-66-86	Ⅰ黒上面	0.33　×0.29　×0.04	9.95	細礫30.	
F－19	c-66-86	Ⅰ黒上面	0.33　×0.28　×0.02	10.07	フレイク・チップ1.礫1.細礫19.サケ.魚骨.焼獣骨.	
F－20	c-66-86	Ⅰ黒上面	0.46　×0.34　×0.03	9.95	細礫15.サケ.焼魚骨.魚骨.焼獣骨.	
F－21	c-66-96・97	Ta-b上面	1.17　×0.65　×0.09	10.39	礫1.細礫26.貝.サケ.魚骨.焼獣骨.獣骨.	
F－22	c-66-97	Ⅰ黒上面	1.57　×0.54　×0.07	9.57	フレイク・チップ2.礫3.細礫53.サケ.魚骨.焼獣骨.	
F－23	b-66-07・17	Ta-b上面	0.78　×0.71　×0.07	13.18		
F－24	c-66-87・97	Ⅰ黒上面	1.54　×1.26　×0.09	9.87	フレイク5.礫・礫片.細礫102.金属製品1.ホタテ.貝.サケ.イトウ.ウグイ.焼魚骨.魚骨.シカ.獣骨.	
F－25	c-66-95	Ⅰ黒上面	1.06　×0.67　×0.03	11.69	細礫10.	
F－26	c-66-98	Ta-b上面	0.51　×0.35　×0.04	9.00	細礫1.	
F－27	b-66-33	Ⅰ黒上面	1.18　×0.75　×0.03	19.16		
F－28	b-66-11	Ⅰ黒上面	1.17　×0.43　×0.03	18.74		
F－29	c-66-77	Ⅰ黒上面	0.48　×0.44　×0.03	7.43		
F－30	c-66-86	Ⅰ黒上面	0.40　×0.29　×0.03	9.98	細礫44.焼獣骨.	
F－31	b-66-37・38	Ⅰ黒上面	0.76　×0.59　×0.02	16.48		
F－32	c-66-76	Ⅰ黒上面	0.57　×0.49　×0.03	9.15		
F－33	c-66-86	Ⅰ黒上面	0.27　×0.24　×0.03	9.16		
F－34	c-66-97・98	Ta-b上面	0.79　×0.35　×0.07	8.92	細礫17.ウバガイ.サケ.焼獣骨.	
F－35	c-66-98	Ⅰ黒上面	2.01　×1.32　×0.03	9.10	細礫41.	
F－36	b-66-25	Ⅰ黒上面	0.61　×0.43　×0.02	14.87		
F－37	c-66-95	Ⅰ黒上面	0.76　×0.41　×0.02	10.83		
F－38	c-66-95	Ⅰ黒上面	0.33　×0.22　×0.03	11.58		
F－39	b-66-03・04 c-66-93・94	Ⅰ黒上面	3.50　×3.50　×0.04	14.36		
F－40	c-66-80・90	Ⅰ黒上面	0.74　×0.52　×0.02	18.89		
F－41	b-66-01 c-66-91	Ⅰ黒上面	0.75　×0.61　×0.03	18.94		
F－42	c-66-84・85 c-66-84・85	Ta-b上面	1.11　×0.59　×0.07	11.93		

表Ⅶ－12　中・近世の焼土の掲載金属製品一覧

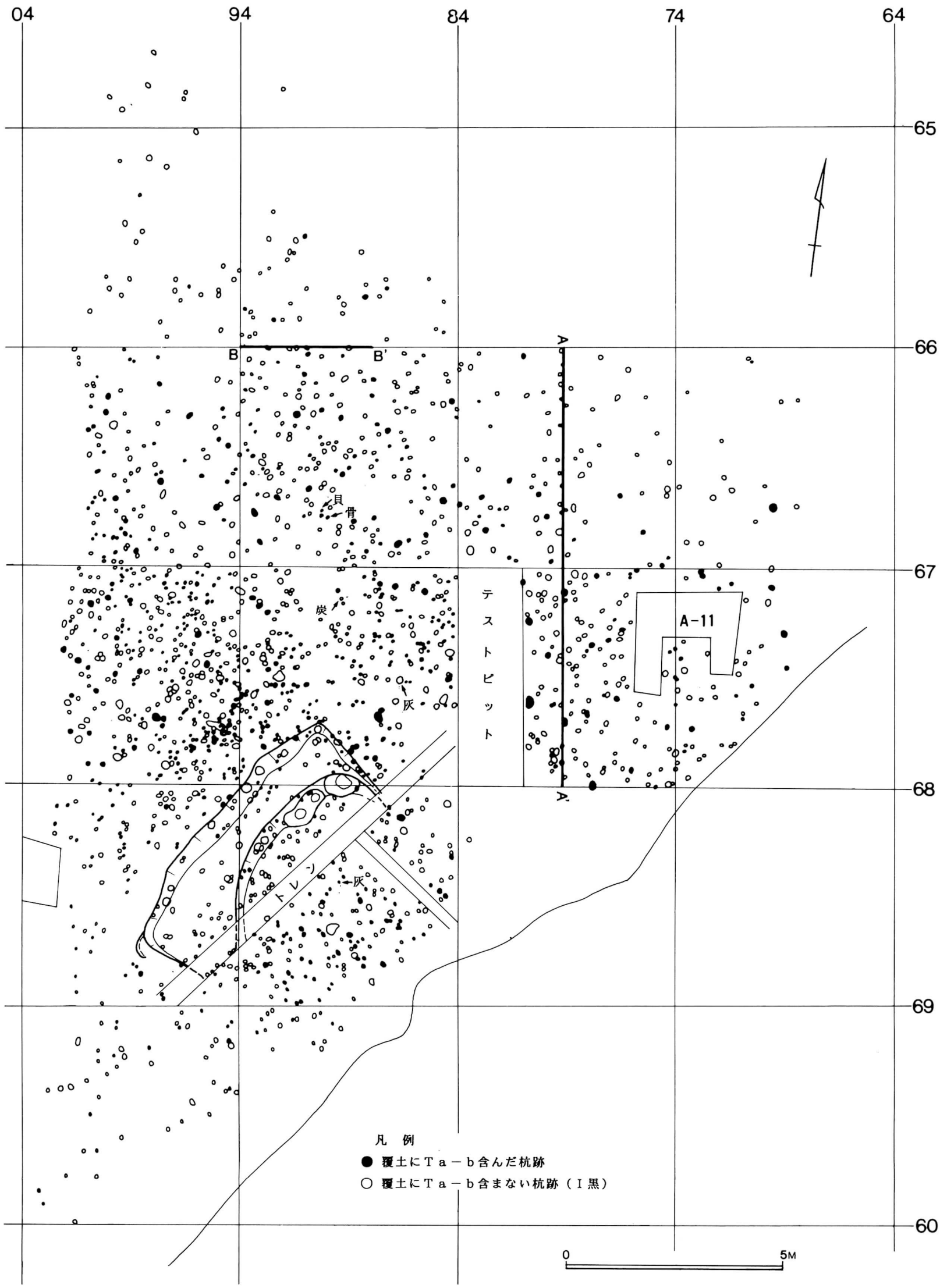
No.	名　　称	遺構名	大　き　さ（単位cm） 長さ　×　幅　×　厚さ	重　さ (g)	材　質	備　　考	写真図版
1	小札	F－14	2.3　×2.0　×0.2	1.9	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-21-1-1
2	鉄製品	F－14	4.2　×1.9　×0.8	5.1	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-21-1-2
3	角釘状	F－24	7.0　×0.8　×0.5	9.0	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-21-1-3

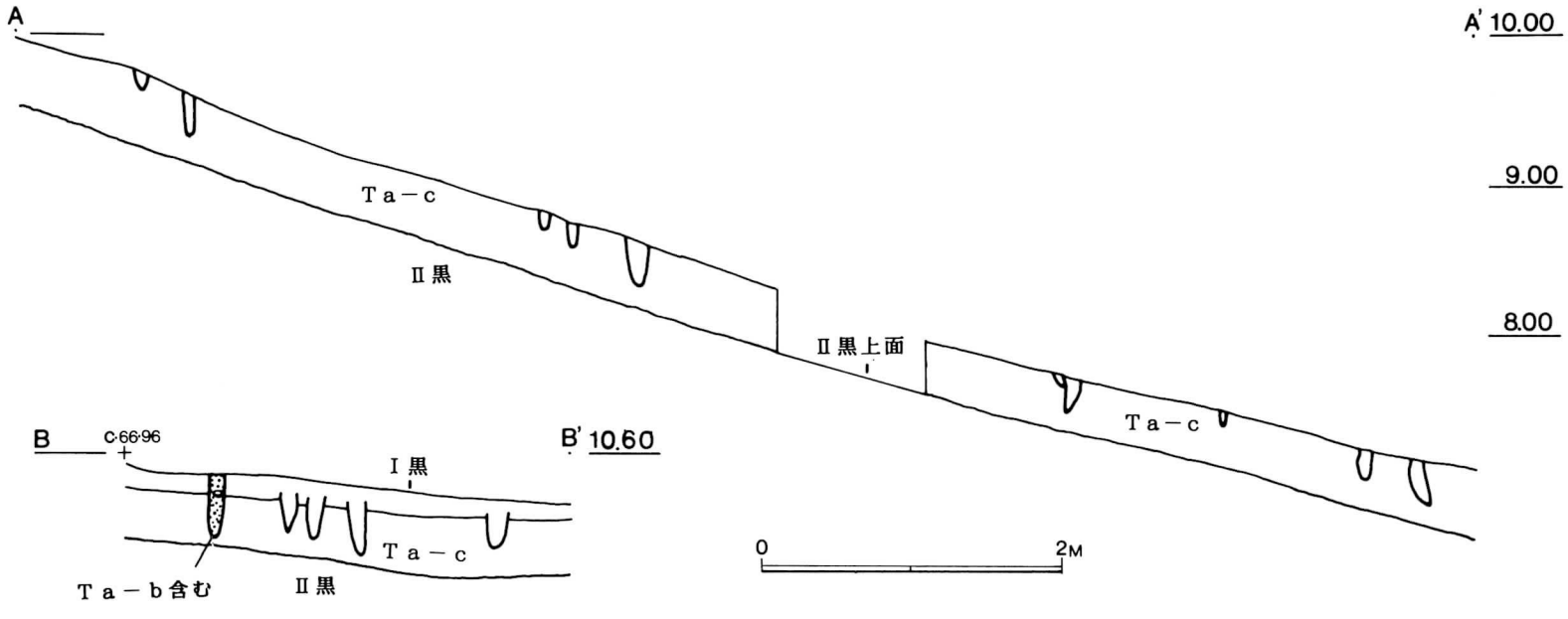
(c) 杭跡群（図Ⅶ－24・25・38・39、図版Ⅶ－19・20）

1,709か所確認された。Ta－c層上面で確認されたものである。標高8～13mの比較的傾斜の緩くなる焼土の密集部分や、住居部分に過密に分布し美沢川へさらに続いている。図Ⅶ－25のH－1・2のセクションや図Ⅶ－39のセクションが示すようにTa－bを覆土に多量に含む杭跡（270か所）、Ⅰ黒層中に灰を含む杭跡（15か所）、Ⅰ黒層のみあるいはTa－cをわずかに含む杭跡（1,416か所）など時間差が認められる。また、ホタテガイ、骨片、礫、炭化物を含むもの（8か所）などもある。杭跡は掘り込まれたものではなく、すべて打ち込み杭である。確認面での径は6～20cmと様々である。深さは30～60cmでⅡ黒層に達しているものもある。杭跡群が最も密集するのはb－66－97であり、25㎡で294か所確認された。グリッド平均では106か所、1㎡あたり4か所となる。トレンチや攪乱部で削平されたものを加えるとさらに増える。明確な配列や規則性などは認められないが、Ta－bを含むものの中には短い間隔で列をなすように見えるものもある。隣接する台地上の昭和56年度（北埋調報7）調査区から検出された多数の柱穴群と合わせて検討する必要がある。ここでは住居などの建物跡ではなく、ヌサ場、住居跡の付属施設、狩猟や漁労に関わる乾燥棚などの施設が幾年も使用された結果と考えておきたい。



図Ⅶ－38　杭跡群位置図


04
94
84
74
64
65
66
67
68
69
60
B
B'
A
A'
貝
骨
炭
灰
テストピット
A-11
トレンチ
凡　例
● 覆土にＴａ－ｂ含んだ杭跡
○ 覆土にＴａ－ｂ含まない杭跡（Ⅰ黒）
0
5M

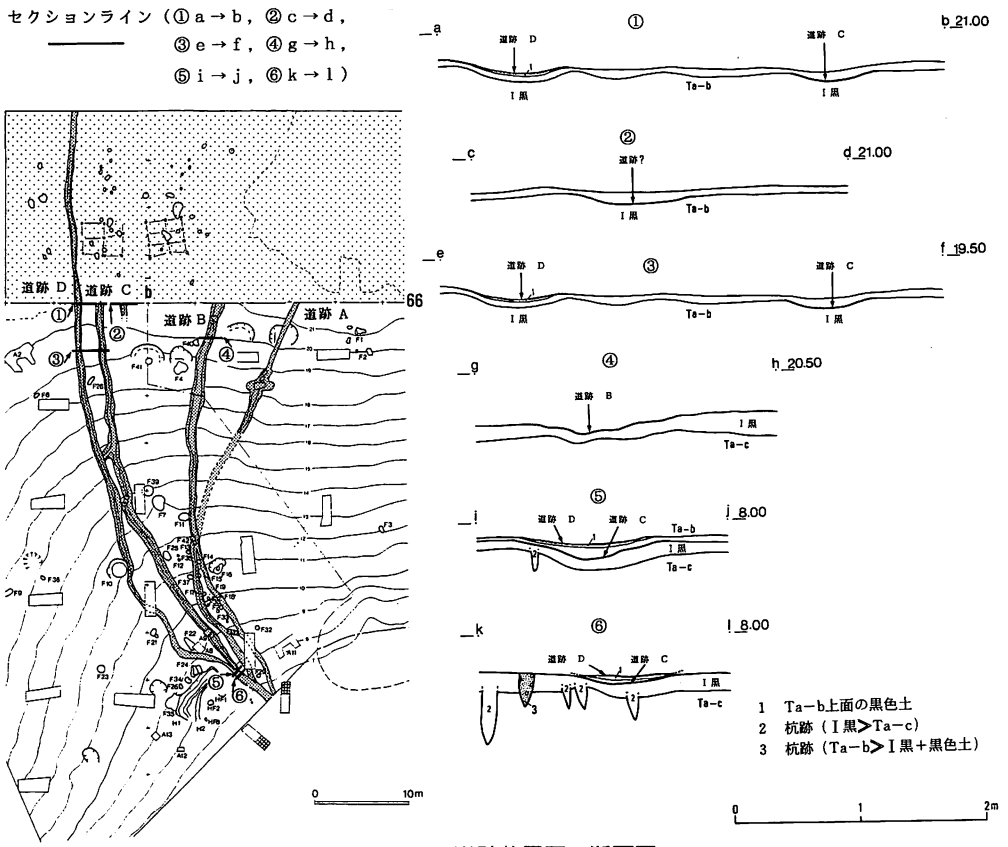

A
A' 10.00
9.00
8.00
Ta－c
Ⅱ黒
Ⅱ黒上面
Ta－c
B
C-66-96
B' 10.60
Ⅰ黒
Ta－c
Ta－b含む
Ⅱ黒
0
2M

図Ⅶ－39　杭跡分布図

(d) 道跡（図Ⅶ－24・40、図版Ⅶ－16）

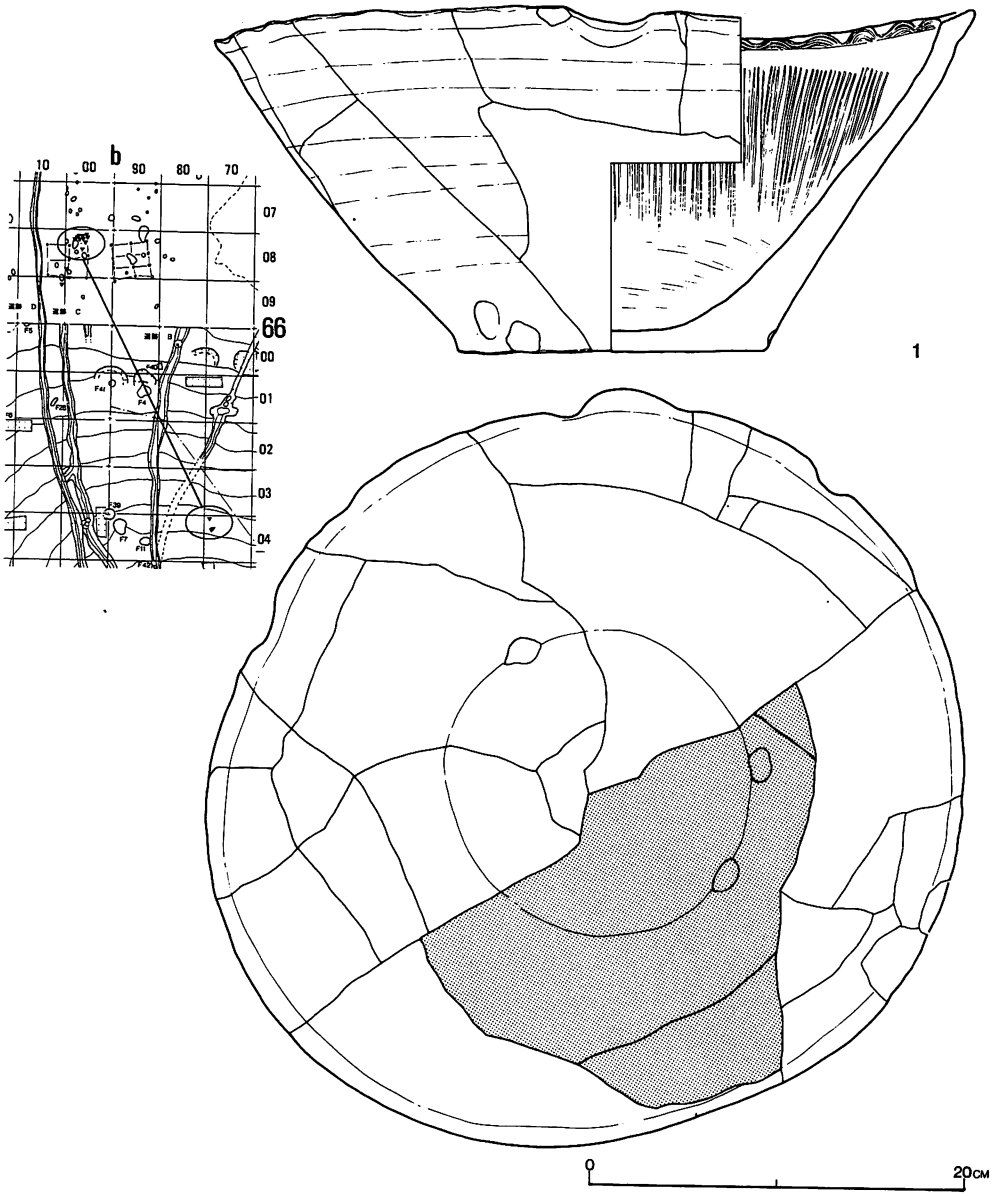
本年度検出された道跡は4か所である。そのほかｂ－66－00区に2ｍほどの短い溝状遺構が1か所ある。道跡はこれまで昭和56年度（北埋調報7）1か所、昭和57年度（北埋調報8）1か所、昭和62年度（北埋調報4）2か所が確認されている。道跡はTa－ｂ火山灰の充填された幅60から90㎝の浅い溝状のくぼみとして確認された。本年度のものを東から順にそれぞれ道跡Ａ～Ｄと呼称する。道跡は台地南縁から比較的傾斜の緩い焼土群などが密集する沢底に向かって伸び、低湿地部へと続いている。また、道跡Ａ～Ｄの順に斜面の傾斜がわずかながら緩いルートを通っている。道跡Ｄは昭和56年度（北埋調報7）の続きの道跡であり、Ta－ｂ層上面のものである。道跡Ａ～Ｃは昭和56年度（北埋調報7）の調査では確認できなかったが、南北方向へ延びる焼土の分布や点々と続く金属製品などの遺物の散布状況から判断して、道が同様に存在したと想定できる。道跡Ａ～ＣはⅠ黒層上面のものである。道跡Ａ・Ｂの上面には焼土が存在することから、道跡Ｃよりも古い可能性がある。道跡Ａは不鮮明で断続的にしか確認できず、道跡Ｂとの交差状況から判断して最も古い道跡であろうか。

道跡Ａは幅60㎝前後、深さ7㎝前後である。確認できた長さは約15ｍである。ｃ－66－40あたりでほとんど消滅しているが、斜面を南西方向に下り道跡Ｂにつながると考えられる。



図Ⅶ－40　道跡位置図・断面図

ｃ－66－72には階段状の段差が認められる。道跡Ｂは幅70～150cm、深さ10cm前後である。確認できた長さは約48cmである。ｂ－66－85・95で二本に別れるが、西側の道跡は道跡Ａから連続するものと考えられる。Ｆ－14・15・42が道跡上にあり、Ｔａ－ｂ層上面やⅠ黒層上面の焼土より古いと考えられる。道跡Ｃは幅80～110cm、深さ12cm前後である。確認できた長さは約48ｍである。ｂ－66－03で２本に別れ、道跡Ｄの下になっている。ｂ－66－04には階段状の段差が認められる。上面に焼土などはない。道跡Ｄは幅50～85cm、深さ５～９cmである。確認できた長さは約48ｍである。Ｔａ－ｂ層上面の道跡であり、Ｔａ－ｂ層上面の焼土（Ｆ－10・21・22）やＨ－１を避けながら道跡Ｂ・Ｃ上を横ぎって低湿地部に続いている。



図Ⅶ－41　珠洲系すり鉢

(2) 包含層出土の遺物

(a) 珠洲系擂鉢（図Ⅶ－41、図版Ⅶ－21－4）（詳細は北埋調報7を参照。）

北埋調報7に掲載した擂鉢と同一個体の胴から底部の破片3点がｃ－66－74区から出土した。焼土群や柱穴群が分布し、破片が一括出土したｂ－65－08区と直線にして約32ｍの距離で接合した。本年度のｃ－66－74区は他に礫が数点検出されたのみである。台地状から投げ捨てられたものであろう。再復元した結果口径約40.5cm、底径約16.3cm、器高約18.2cmとなった。内面には卸し目が10前後の単位で施されているが見込部分は長期間使用されたため摩耗し、器厚も薄くなっている。底面には静止糸切り痕が残っている。器形は珠洲Ⅴ期の特徴を示すが胎土や焼成はⅣ期に近く、製作時期は15世紀の中頃と推定されている。

(b) 金属器・金属製品（図Ⅶ－42～43、表Ⅶ－13、図版Ⅶ－22～23）

中・近世の金属器・金属製品は住居跡周辺のほか、道跡や焼土の分布に沿って散布している。

調理具

1は鉄鍋の口縁部破片である。損傷部分を薄い鉄版で固定し補強している。

切裁具

2・5は刀子である。2は切先尖端及び刃部中央を欠損する。平棟、平造りである。刃区、棟区は明瞭である。茎は長さ9.0cm、幅1.1～0.6cm、厚さ、0.5～0.3cmで刃区側が細くなっている。茎尻は栗尻と思われる。5は完形で出土した。刃長9.0cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmである。切先に向かって次第に細くなる。平棟、平造りである。刃区、棟区は明瞭でなくゆるやかに茎に続く。茎は長さ4.3cm、幅0.8～0.6cm、厚さ0.3cmである。茎尻は切である。3・4・6は小刀である。3は同一個体の切先部を欠損した刃部と柄である。ｃ－66－92の道跡Ｂの傍らから出土した。鞘の木質および口金物を残す。柄は摩耗しているが鹿角製である。平棟、平造りと思われる。4は完形で出土した。刃長20.0cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmである。平棟あるいは丸棟の、平造りである。刃区はなだらかに茎に続く。棟区は明瞭である。茎は長さ9.6cm、幅1.4～1.0cm、厚さ0.3cmである。茎尻は切である。6は刃部のみの破片である。平棟、平造りである。棟は部分的に敲かれており、破損後は木割り具などとして代用されたと考えられる。なお、4・5はｃ－66－70の風倒木痕によりくぼみとなった比較的平坦な面からセットで出土した。

漁労具

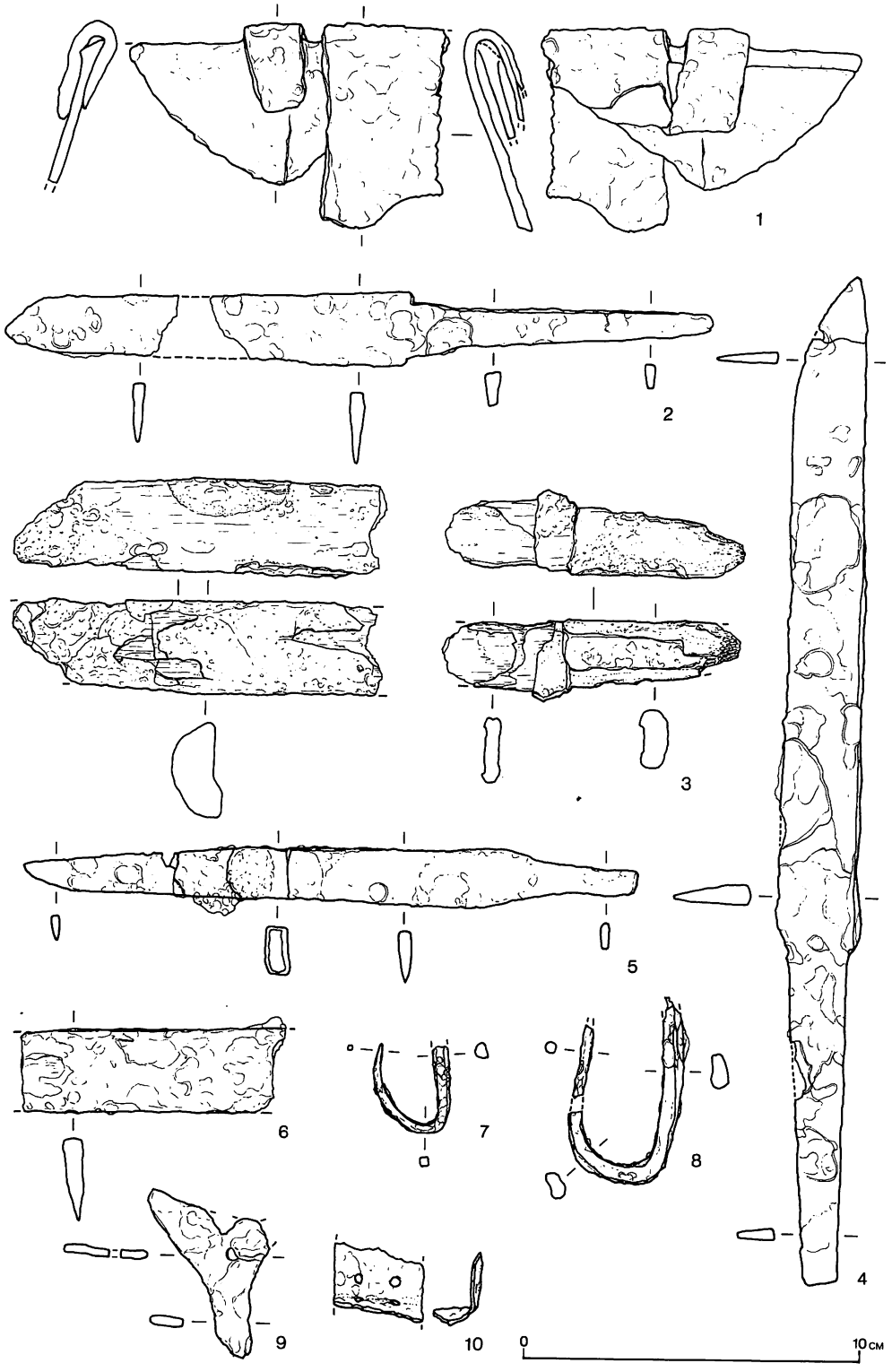
7は釣針である。Ｈ－1、Ｆ－24の側から出土した。軸頂部を欠損している。ふところは深く、逆刺はない。8はマレックである。軸頂部、針先欠損している。細い角釘などを敲いて加工したものと考えられ、軸の断面が方形或いは瓢箪形に潰れている。

小札

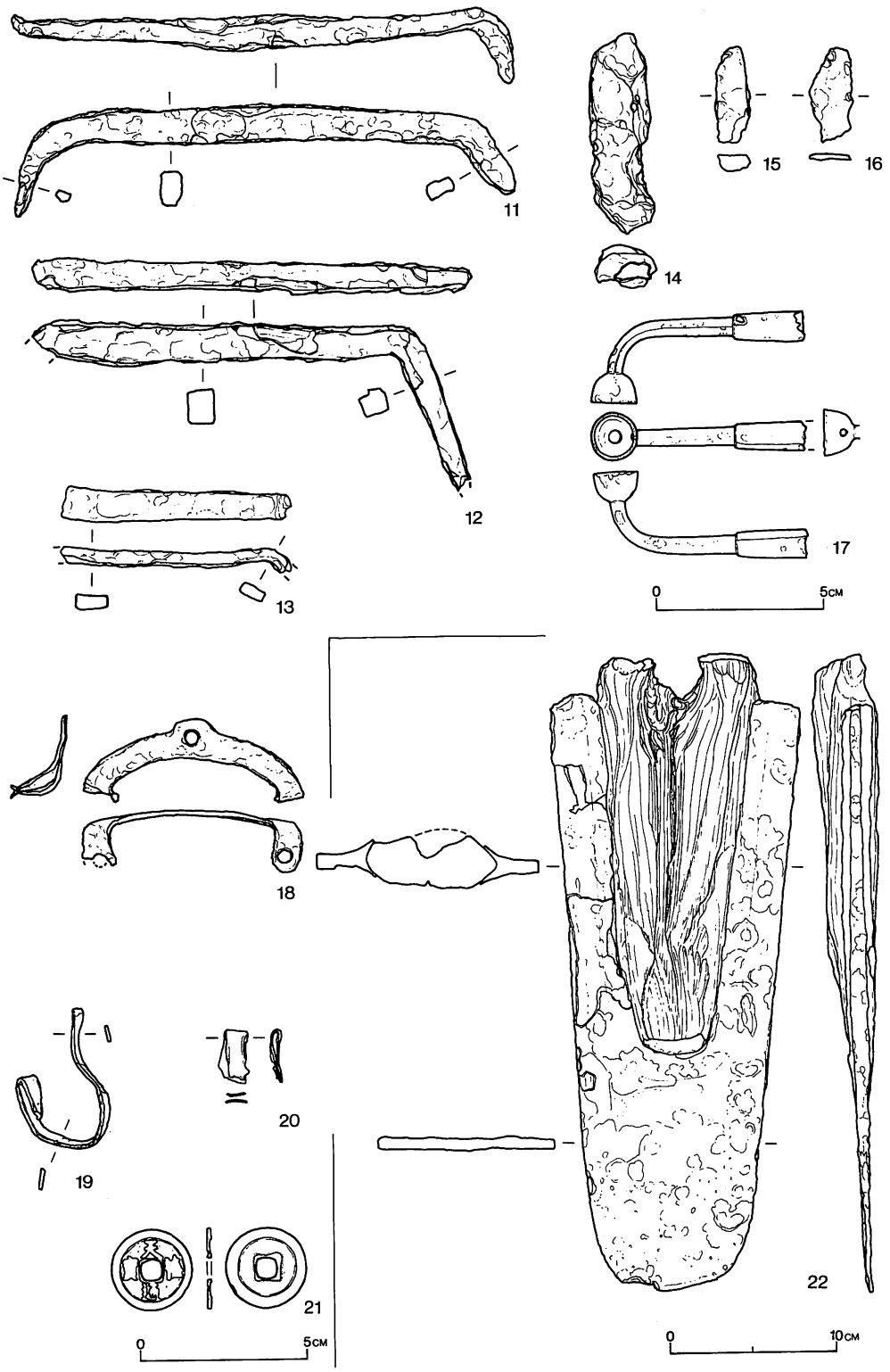
10は上下部を欠損している。径2.5mmの孔が2穴並んでいるものである。中央から90°に折れ曲がっている。

加工具・生産具

11から13はカスガイである。11は中央断面が方形のものである。カギの部分は2.0cm前後と



図Ⅶ－42　中・近世の金属製品(1)



図Ⅷ－43　中・近世の金属製品(2)

短く、全体にねじれている。再加工途中のものかもしれない。12のみ地区の離れたｅ－66－00から検出されたものである。中央部断面が方形のものである。カギ部は4.5cmと長く、片側を欠損している。カギ部分は外に開く。13は小型で中央部断面が薄い長方形のものである。カギ部を欠損している。

農具

22は踏み鋤である。ｄ－66－87の沢地形の地区から出土した。刃部幅は刃先に向かって細くなり、刃先は丸みをもつ。側縁は角形である。木質部分は樹木の枝別れ部分を利用して柄が付けられていたと考えられ、挿入される風呂の形態にあわせて丹念に面取りされている。木質の上部は足をかける部分を平らに加工している。柄は節目から裂けるように足掛け部分をえぐって欠損している。

その他の鉄製品

９はＹ字状の中央部に貫通孔がある。形態的には雁股鏃に似るが刃部の加工なく、茎部の構造が見られず薄い。火打金であろう。14～16は棒状の用途不明の鉄片である。

嗜好具

17は煙管の雁首である。火皿は内径13㎜、深さ９㎜、羅字方向に径1.5㎜の孔が開けられている。羅字挿入部分の径は８㎜である。銅製である。

飾り金具

弧状を呈し、両端及び突起のある中央部に４㎜の釘穴が開けられている。両端は端部から13㎜ほどの部分で80～90°に折れ曲がっている。角箱の角に縁飾りとして付けられたものであろうか。

表Ⅶ－13　中・近世の掲載金属製品一覧

No.	名　称	発掘区	大きさ（単位cm） 長さ × 幅 × 厚さ	重さ (g)	材質	備　考	写真図版
1	鉄鍋	c-66-64	6.0 × 9.3 ×1.5	85.9	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-22-1-1
2	刀子	c-66-96	20.0 × 2.2 ×0.4	38.5	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-22-2-2
3	小刀	c-66-92	(19.7) × 2.8 ×1.3	5 56.8	鉄	木質残る。柄頭角製。MV-1減圧含浸	Ⅶ-22-3-3
4	小刀	c-66-70	29.7 × 2.5 ×0.6	38.5	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-22-4-4
5	刀子	c-66-70	18.2 × 1.8 ×0.4	31.4	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-22-4-5
6	小刀	c-66-91	(7.8) × 2.8 ×0.6	48.4	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-22-4-6
7	釣針	c-66-87	(2.5) × 1.7 ×0.3	(2.2)	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-7
8	マレック	c-66-71	(5.5) × 2.9 ×0.5	(14.0)	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-8
9	火打金？	c-66-67	(5.7) × 2.3 ×0.3	10.1	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-9
10	小札	c-66-86	(2.0) × 2.1 ×0.1	3.5	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-10
11	カスガイ	b-66-01	15.0 × 1.1 ×0.7	46.3	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-11
12	カスガイ	e-68-00	(13.1) × 1.3 ×1.0	50.5	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-12
13	カスガイ	c-66-77	(6.9) × 0.9 ×0.4	10.7	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-13
14	鉄製品	c-66-85	5.9 × 1.8 ×1.3	1 10.8	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-14
15	鉄製品	c-66-85	2.9 × 1.0 ×0.5	1.8	鉄	MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-1-15
16	鉄製品	c-66-92	2.7 × 1.3 ×0.1	0.9	鉄	MV-1減圧含浸	
17	煙管（雁首）	d-66-97	(6.3) × 2.8 ×0.8	(4.4)	銅	火皿1.3X0.9 インクララック塗布	Ⅶ-23-2-17
18	縁飾り	d-66-97	1.2 × 6.6 ×0.2	8.0	銅	インクララック塗布	Ⅶ-23-2-18
19	銅製品	c-66-95	4.1 × 2.4 ×0.1	5.5	銅	インクララック塗布	Ⅶ-23-2-19
20	銅製品	c-66-87	1.6 × 0.9 ×0.3	0.7	銅	インクララック塗布	Ⅶ-23-2-20
21	天禧通寶	c-66-34	2.4 × 2.4 ×0.1	3.1	銅	北宋初鋳1017年インクララック塗布	Ⅶ-23-2-21
22	鋤先	d-66-87	38.1 ×14.8 ×3.8	1240.0	鉄	木質残る。MV-1減圧含浸	Ⅶ-23-3-22

その他の銅製品

19は螺施が解けたような幅６㎜、厚さ１㎜の帯状の銅製品である。ｃ－66－95のＦ－37の傍らから出土した。何かを接続するために口金等として巻いて固定したと考えられる。20は薄い幅６㎜、厚さ0.5㎜の帯状の金具である。口金あるいは装飾のための環状のものがつぶれたものであろう。

古銭

書体から天禧通寶（北宋銭　初鋳1070年）と読める。　（田口　尚）

(c)　自然遺物

自然遺物の検出について

本年度は動物遺存体を中心に資料を抽出した。選別によって得られた動物遺存体の同定は金子浩昌氏にお願いした。植物遺存体については来年度以降の調査と合わせて報告したい。

遺物は現場で取り上げられたもののほかに、乾燥後の土壌サンプルを①フルイ分け法（４㎜・２㎜・１㎜メッシュ使用）、②水洗選別法【ウォーターセパレーション法】（４㎜・２㎜・１㎜メッシュ使用）によるもの、③浮遊選別法【フローテーション法】（金属フルイ1.41㎜・0.50㎜・0.42㎜メッシュ使用）により検出されたものがある。フローテーション法によって得られた沈降土壌は選別過程で2.0㎜・0.71㎜メッシュで粒径をそろえて抽出した。今回得られた資料の多くは①②の方法による。なお、Ⅰ黒層のＨ－１のHF－１・床面、Ｆ－15の土壌サンプルのみ③を併用した。表にはフローテーション法で得られた点数・重量を含め記している。

今年度の美々８遺跡から表土層23.14ｇ、Ⅰ黒層672.53ｇの動物遺存体が得られた。以下各層ごとに概略のみまとめる。（詳細は表Ⅶ－８・９・14～17、図版Ⅶ－24～30参照）

擦文時代

擦文時代の動物遺存体はＰ－22から15.69ｇ、Ｆ－20から5.3ｇ、包含層から87.27ｇが得られている。ｆ－68－72のウバガイを除いて、すべて焼獣骨の細片であった。

中・近世

中・近世の動物遺存体はＨ－１・２から507.97ｇ、焼土から58.51ｇ、包含層から5.09ｇの計569.57ｇが得られている。

Ｈ－１・２のHF－１～８や床面から多量の動物遺存体が得られた。貝類ではウバガイ、カワシンジュガイ、ホタテガイが検出された。魚類では多量のサケの歯骨、上顎、歯、椎体、棘に次いでニシン、ウグイなどの椎体、鰓蓋骨が得られている。サケは焼成を受けていないものが多い。ほかに多量の焼けた椎体片、魚骨片のほか、数点のイトウ、カレイが検出された。鳥類は３点と非常に少ない。哺乳類でシカが多く、角、脛骨、踵骨、距骨、上腕骨、足根が検出されている。焼獣骨片も多い。ネズミ上顎切歯等も検出された。そのほか、HF－１から針入れなどと考えられる獣骨製の骨角器片、床面からホタテガイを加工した穂摘具なども得られた。

焼土からは貝類ではホタテガイ、ウバガイが検出された。魚類ではＨ－１・２同様にサケ

表Ⅶ－14　Ｈ－1・2出土の動物遺存体

(1)

地区	層	貝類（甲殻類）			魚類 サケ			魚類 その他魚類			鳥類			哺乳類 陸・海獣			その他			総重量	備考
遺構名		種・部位	数	重量	部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	(g)	
Ｈ－1	HF-1	ウバガイ		2.85	歯	61	0.88	イトウ椎体破損(小)		0.01	鳥骨	1	0.08	シカsib~dis L	1	24.96	骨角器(獣骨加工)破片	5	0.14		
		カワシンジュガイ L		19.77	歯 R	6	1.21	ニシン耳骨	1	0.06	鳥骨小骨	1	0.05	獣骨 fr		0.75	マイマイ		0.39		
		ホタテガイ fr		1.46	歯 L	6	0.21	ニシン椎体完存	10	0.06				獣骨 fr	2	2.87	マイマイ(幼貝)		0.02		
		貝(淡水貝) fr		0.09	歯(中・小型鈎形)	12	0.13	ニシン椎体	15	0.08				焼骨		3.01					
		貝 fr		1.33	歯(小型鈎形)	1	0.01	ニシン尾椎	1	+				焼骨 fr		2.43					
					歯(中・小型)		0.05	ウグイ主鰓蓋骨 R		0.01				獣骨 関節部		0.22					
					歯(歯冠小のもの)	4	0.05	ウグイ主鰓蓋骨 L		0.02				中獣骨		0.14					
					椎体完存(腹椎1含む)	6	0.66	ウグイ鰓蓋骨 R	1	0.01				ネズミ類上顎切歯 R	1	0.02					
					椎体完存	1	0.01	ウグイ椎体完存	7	0.19				ネズミ類上顎切歯 L	1	0.01					
					椎体(小)	2	0.02	ウグイ第一腹椎	1	0.01											
					椎体 fr		17.31	ウグイ椎体	12	0.27											
					棘 fr		9.03	カレイ類椎体棘突起基部		0.05											
					焼椎体		0.07	サケ他椎体破損		0.52											
					焼骨 fr		0.94	不明種		0.05											
					サケ椎体主体 fr		2.21	魚肩胛骨(種未同定)	2	0.07											
								魚骨(腹椎体1) fr		0.08											
								魚焼骨		0.71											
								魚骨 fr		13.28											
								魚骨	2	0.02											
								魚歯	2	0.02											
								魚棘 fr		0.01											
	計			25.5			32.79			15.53			0.13			34.41			0.55	108.91	
				0.67	歯	16	0.24	魚骨 fr		5.65				獣骨 Fr		0.65	マイマイ		0.09		
					歯 R		0.05	魚焼骨 fr		0.53				焼獣骨		0.05					
					歯骨 R		0.70	ウグイ椎体完存	6	0.23											
					歯(中・小型が主)	28	0.46	ウグイ椎体	2	0.10											
					歯(下顎歯?)湾曲強く大	2	0.02	ウグイ椎体 fr		0.01											

地区	層	貝類			魚類						鳥類			哺乳類			その他			総重量	備考
		(甲殻類)			サケ			その他魚類						陸・海獣							
遺構名		種・部位	数	重量	部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種ゲ部位	数	重量	(g)	
H－1	HF-2			-	歯(下顎歯)?湾曲弱小。	2	0.02	その他椎体	2	0.07											
					椎体完存	9	1.59	サケ主体棘 「r		1.57											
					椎体 「r		2.28														
					焼椎体 「r		1.07														
					棘 「r		2.40														
	計			0.67			8.83			8.16						0.70			0.09	18.45	
H－1	HF-3				歯(小型)	2	0.02	魚骨 「r		0.08	鳥骨	1	0.21	焼獣骨		5.09					
					椎体		0.24	ニシン尾椎	1	0.01											
					椎体 「r		0.02	ウグイ腹椎	1	0.02											
								サケ主体棘 「r		0.17											
								その他	1	0.01											
	計						0.28			0.29			0.21			5.09				5.87	
H－2	HF-4	貝 「r		20.68	歯	1	0.03	魚骨 「r		+				シカ R 腫骨	1	2.54					
					椎体 「r	2	0.01							シカ 腫骨 「r		1.05					
					椎体 「r		0.01							獣骨 「r		0.05					
					蓋 「r		0.02							焼獣骨	2	0.14					
	計			20.68			0.07			+						3.78				24.53	
H－2	HF-5				歯	1	0.01	魚骨 「r		0.08				シカ足根R中心足根C14		8.17	マイマイ			0.02	
					椎体 「r	1	0.01							焼獣骨 「r		0.17					
					棘 「r		0.09														
	計						0.11			0.08						8.34			0.02	8.55	
H－2	HF-6							魚骨 「r		0.10				中型獣肢骨 「r		0.05				0.15	
H－2	HF-7													焼獣骨		0.12				0.12	
H－1	HF-8				歯	1	0.01	ウグイ椎体	1	0.02				シカ脛骨~dis L							
					棘 「r		0.19	魚骨 「r		0.01				シカ脛骨~dis R							
	計						0.20			0.03										0.23	
H－1	床	ウバガイ 「r		2.46	歯	255	12.18	ウグイ歯	1	+				シカ脛骨~dis L	3	57.23	ホタテガイ加工品		15.12		
		ホタテガイ		17.58	歯骨 R	6	0.88	ウグイ尾椎	1	0.03				シサ脛骨~dis R	2	36.03	マイマイ		0.14		

(3)

地区	層	貝類 (甲殻類)			魚類 サケ			魚類 その他魚類			鳥類			哺乳類 陸・海獣			その他			総重量	備考
遺構名		種・部位	数	重量	部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	(g)	
H－1	床	カワシンジュガイ		0.07	歯骨 L	4	0.81	ウグイ腹椎	1	0.01				シカ角片 枝尖端	1	19.90					
		貝 「r		1.78	歯骨 R	1	0.10	ウグイ前鰓蓋骨 R		0.03				シカ距骨 L	1	14.17					
					歯骨 R		0.42	イトウ椎体	1	0.02				シカ距骨 R	1	14.96					
					歯骨 L		0.31	魚骨 「r		0.92				シカ橈骨 「r	1	3.38					
					上顎骨「r(歯3本残る)	1	0.07							シカ橈骨?	1	2.65					
					歯骨R・L角骨ほか		5.70							シカ部位不詳		15.51					
					頭蓋 「r		11.13							シカ 「r	4	7.48					
					上顎 L	6	0.87							獣骨 「r		12.34					
					上顎 R	4	0.40							獣骨「r部位不詳		6.82					
					歯骨 L	6	0.73							焼獣骨		0.67					
					歯骨 R	4	0.40							ネズミ歯	1	0.02					
					歯骨Rその他		5.15														
					頭蓋 「r		6.48														
					頭骨前頭～口蓋～後頭		2.81														
					椎体	1	0.05														
					椎体 「r		0.08														
					椎体完存	3	0.47														
					椎体「r 2個分		0.13														
					椎体「r 2個分		0.08														
					椎体「r 2個分		1.50														
					棘 「r		2.62														
					骨片大部分		12.62														
				21.9			65.99			1.01						193.16			15.26	297.32	
H－2	床	ホタテガイ		16.16										シカ脛骨 L	1	15.41					
														シカ上腕骨 R	1	9.32					
														焼獣骨 「r	3	2.52					
														獣骨 「r		0.42					
				16.16												27.67				43.83	

(4)

地区 遺構名	層	貝類（甲殻類） 種・部位	数	重量	魚類 サケ 部位	数	重量	魚類 その他魚類 種・部位	数	重量	鳥類 種・部位	数	重量	哺乳類 陸・海獣 種・部位	数	重量	その他 種・部位	数	重量	総重量 (g)	備考
IF-19					歯破損	1	0.01	魚骨 「r		0.03				焼獣骨 「r		1.65				1.69	
					椎体破損		0.01													0.01	
	計						0.02			0.03						1.65				1.70	
IF-20					椎体 「r		0.06	焼魚骨 「r	2	0.06				焼獣骨 「r	2	0.10				0.22	
					椎小片	1	＋	魚骨 「r	3	0.01										0.01	
	計						0.06			0.07						0.10				0.23	
IF-21		貝 「r		0.01	椎体 「r	2	0.01	魚骨 「r		0.01				焼獣骨 「r		8.83				8.86	
														獣骨 「r		0.56				0.56	
	計			0.01			0.01			0.01						9.39				9.42	
IF-22					焼歯(鈎形)	1	0.02	魚棘 「r		0.02				焼獣骨 「r		0.36				0.40	
	計						0.02			0.02						0.36				0.40	
IF-24		貝 「r		0.01	椎体完存1、一部破損4)	5	0.09	イトウ焼椎体	4	0.02				シカ角 枝尖端		3.97				4.09	
		マイマイ 「r		＋	椎体 「r		0.07	ウグイ椎体	3	0.02				シカ 「r		14.39				14.48	
		ホタテ 「r		3.09	焼椎体 「r		1.11	焼魚骨 「r		0.01				焼獣骨 「r		1.20				5.41	
					未焼椎体 「r		0.24	魚骨 「r		0.90				獣骨 「r		0.98				2.12	
					棘 「r		0.86	魚棘(未焼,焼) 「r		1.16										2.02	
					焼歯(鈎形)	5	0.04													0.04	
	計			3.10			2.41			2.11						20.54				28.16	
IF-30														焼獣骨 「r		1.91				1.91	
	計															1.91				1.91	
IF-34		ウバガイ		10.10	椎体 「r	1	0.02							焼獣骨 「r		0.01				10.97	
	計			10.10			0.02									0.01				10.97	
総計				14.05			2.54			2.24						37.68				56.51	

※ 焼土の動物遺存体は土壌サンプルを乾燥させ、予め5㎜・2.5㎜メッシュで篩い分けしたのちに肉眼により選別した資料である。なお、IF－15の土壌サンプルの内半分はフローテーション法をもちい、沈降した土壌を乾燥させ、2.0㎜・0.71㎜メッシュで篩い分けした後、同様に選別した。表中の数値にはフローテーション法で得られた焼獣骨2.40g を含めている。植物遺存体については現在作業中であるので来年度の調査と合わせて報告したい。

表Ⅶ－15　中・近世の焼土の動物遺存体

地区	層	貝類（甲殻類）			魚類 サケ			魚類 その他魚類			鳥類			哺乳類 陸・海獣			その他			総重量	備考
遺構名		種・部位	数	重量	部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	(g)	
ⅠF-12														焼獣骨 fr		0.18				0.18	
	計															0.18				0.18	
ⅠF-13														焼獣骨 fr		0.06				0.06	
	計															0.06				0.06	
ⅠF-15														焼獣骨 fr		3.20				2.40	
	計															0.28				3.20	
ⅠF-17														焼獣骨 fr		0.28				0.28	
	計															1.65				0.28	

表Ⅶ－16　中・近世の包含層出土の動物遺存体

地区	層	貝類（甲殻類）			魚類 サケ			魚類 その他魚類			鳥類			哺乳類 陸・海獣			その他			総重量	備考
遺構名		種・部位	数	重量	部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	(g)	
c-66-85	Ⅰ黒上													焼獣骨(シカ?) fr		0.27				0.27	
c-66-86	Ⅰ黒	ホタテガイ	1	4.11										獣骨(シカ?) fr		0.25				4.82	
		貝?(淡水でないもの)		0.46																	
	計			4.57												0.25				4.82	
合計				4.57												0.52				5.09	

表Ⅶ－17　表土層出土の動物遺存体

地区	層	貝類（甲殻類）			魚類 サケ			魚類 その他魚類			鳥類			哺乳類 陸・海獣			その他			総重量	備考
遺物名		種・部位	数	重量	部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	種・部位	数	重量	(g)	
f-68-71	表土	ホタテガイ fr		22.50																22.50	
		貝 fr		0.64																0.64	
総計				23.14																23.14	

が多く焼けた椎体、棘、歯が検出された。他にウグイ、イトウや焼けた魚骨片も検出された。哺乳類では、シカ、シカ角のほか、焼獣骨片が多い。

包含層からはホタテガイ、貝類、シカ、焼獣骨が検出された。

表土

表土からホタテガイ、貝類が23.14ｇ出土した。

なお、昭和56年度の調査（北埋調報７）では、包含層中に動物遺存体の集中箇所があり、上記の動物遺存体のほかに貝類ではアカニシ、哺乳類ではクジラが検出されている。また、骨角器では鹿骨製の回転式離頭銛などが３点が検出されている。（田口　尚）

5　まとめ

(1)　縄文晩期から続縄文時代の遺物

美々８遺跡の第Ⅰ黒色土層から発掘され、報告された縄文晩期から続縄文時代に属する遺物には、昭和56年に出土した有茎石鏃、無茎石鏃、太い茎をもつナイフ（遠藤、1982）、昭和57年に出土した無茎石鏃、スクレイパー、太い茎をもつナイフ（森田、1982）、昭和60年に出土した無茎石鏃と後北Ｂ式土器片（佐川、1986）、昭和62年に発掘された縄文晩期の土器と、無茎石鏃、有茎石鏃、ナイフ片（佐藤、森岡、1988）がある。これらの内、無茎石鏃には二等辺三角形を呈するものと凹基のものとが認められる。これらと本年度の出土資料を合わせて考えると、美々８遺跡の地域の第Ⅰ黒色土層には縄文時代晩期後葉と、続縄文時代前期前葉、続縄文時代前期後葉の時期の遺物が残されているとみなされ、それらには土器と石鏃、ナイフなどのあることが知られる。これらの遺物のあり方は、季節的な生業の場としてこの地が利用されたことを示しているようにもみえる。

美沢川流域でこれまで調査された他遺跡では、第Ⅰ黒色土層における縄文時代晩期から続縄文時代の遺構・遺物のあり方にやや多様なものがある。住居跡の発見されている遺跡には美々５遺跡（『美沢川流域の遺跡群』Ⅲ、以下Ⅲと略）、と美々２遺跡（Ⅸ）があり、土壙もしくは土壙墓とみなされる遺構は美々５遺跡（Ⅲ）、美々４遺跡（Ⅰ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ）、美々２遺跡、美沢１遺跡（Ⅰ）がある。それらの時期をみると、住居跡はいずれも縄文時代晩期後葉のもので特に美々２遺跡では群をなす状態が知られている。土壙も縄文時代晩期の例が多く、美々２遺跡の川沿いの低地で、続縄文時代前期の土壙とみなされるものが２例調査されている。遺構・遺物の量からみて、第Ⅰ黒色土層の時期ではその初期、即ち樽前ｃ火山灰の降灰直後の時期には集落が営なまれ墓地が形成されるなど生活の安定していた時期が認められ、遺物も多量に残されているが、縄文時代晩期終末期には集落が廃絶していたことを示しているようである。以来続縄文時代前期を通じて、さらにその後の時代に及んで、集落の形跡は認められていない。

しかしながら、本遺跡では続縄文時代初期の遺物が標高の低い位置でまとまって出土している。また昨年調査された対岸の美沢３遺跡でも低い段丘面で本遺跡例と同時期かやや先行する時期の資料がまとまって出土した。美々２遺跡での調査所見では川沿いの低地に本遺跡の前期

前葉の例よりやや後れる時期の墓壙が認められている。昭和61年に調査されたペンケナイ川流域（『ペンケナイ川流域の遺跡群』Ⅰ）では続縄文時代前期末葉の時期の墓が発見されていて、美沢川流域においても続縄文時代前期の遺跡がわずかながらも時期のとぎれることなく見出されていることを考え合わせると、果して、季節的な一時の生業の場としてのみ利用されていたのであろうか。その他に、少なくとも人々の往来の途切れることのなかった何らかの訳があったのかもしれない。少ない資料からではあるが、今後引きつづき検討されるべき課題となる。

（大沼忠春）

文献

遠藤香澄（1982）「石器」『美沢川流域の遺跡群』Ⅴ　p90

森田知忠（1982）『美沢川流域の遺跡群』Ⅵ　p11～14

佐川俊一（1986）「第Ⅰ黒色土層の遺構と遺物」『美沢川流域の遺跡群』Ⅸ　p502

佐藤和雄（1988）「土器・陶器」『美沢川流域の遺跡群』Ⅺ　p22

森岡健治（1988）「石器等」『美沢川流域の遺跡群』Ⅺ　p27

(2)　擦文時代の土器

今回の調査では擦文式土器の古い段階のものが比較的まとまって出土した。ここでは7～8世紀代の土器を中心に本遺跡における土器の内容を明らかにしていきたい。

①　分類

形態・技法の特徴・文様から次のように分類できる。

深鉢・甕・球胴甕

Ⅰ（図Ⅳ－9、1～7）

口縁部は外反し、底部は張り出す。肩部に陵をもつものもある。

体部はヘラミガキされる。

口縁部、頸部に円形刺突文が施され、内面に突瘤をもつものもある。頸部に鋸歯状の沈線をもつものもある。

Ⅱ（図Ⅶ－10、8～12）

口縁部は外反する。肩部に陵をもつものもある。

体部はヘラミガキされるものや、ハケメ調整されるものがある。

文様は、口縁部から頸部にかけて横走沈線、鋸歯状文、「X状文」がつく。

Ⅲ（図Ⅶ－11、13～18）

口縁部は外反し、端部が内湾気味のものもある。底部は張り出し、肩部に段をもつものともたないものがある。

口縁部から頸部にかけて数条の横走沈線がつくものと、無文のものがある。

球胴甕は胴部中央に最大径をもつ。

Ⅳ（図Ⅶ－12、19～24）

口縁部は外反し、端部が内傾する。肩部に段をもち、底部は張り出す。

口縁部はナデられ、体部はハケメ調整される。ハケメ調整後にヘラミガキされるものもある。

口縁部と肩部に数条の横走沈線をもつ。

Ⅴ（図Ⅶ－13、25～29）

口縁部は外反する。底部は張り出すものと張り出さないものがある。

口縁部はナデられる。体部はハケメ調整・ヘラミガキ・ハケメ調整とヘラミガキを施されるものがある。

頸部に横走沈線をもつものと、口縁部から頸部にかけて横走沈線をもつものがある。

Ⅵ（図Ⅶ－14、30～32）

口縁部は外反する。

調整はハケメ・ヘラミガキ・ハケメ後ナデられるものがある。

口唇部に短刻文をもつ。口縁部、頸部、肩部に沈線をもつ。

Ⅶ（図Ⅶ－14、35）

口縁部は外反し上部は立ち上がる。底部は張り出す。

口縁部はナデ、体部はヘラケズリ後ヘラミガキされる。

口縁部から肩部にかけて短刻文、鋸歯状文、矢羽根状文がつく。

坏、高坏

Ⅰ（図Ⅶ－15、40～42）

丸底で体部に段をもち、内面にも段をもつものがある。口縁部は外傾するものと直線的に立ち上がるものがある。

外面はヘラケズリ後ヘラミガキされている。内面はヘラミガキされ、内黒である。

Ⅱ（図Ⅶ－15、43～53）

丸底で、体部に段・沈線をもつものともたないものがある。口縁部は直線的に立ち上がるものが多い。

外面はハケメ後ヘラミガキされるものとヘラケズリ後ヘラミガキされるものがある。内面は、ハケメ後ヘラミガキされるものと、ヘラミガキされるものがある。内黒である。

Ⅲ（図Ⅶ－15・16、54～59）

丸底と平底風のものがある。体部に沈線をもつものが多い。口縁部は内傾する。

外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキされ内黒である。

Ⅳ（図Ⅶ－16、60～64）

平底で、体部に段、沈線をもたない。口縁部は内傾するものが多い。

外面は、ヘラケズリ後ヘラミガキされるものや、部位によってヘラミガキ、ヘラケズリされるものがある。内面は、ヘラミガキされ内黒である。

Ⅴ（図Ⅶ－16、65～69）

糸切痕のある土師器。回転糸切り底で、周囲は調整されている。

Ⅵ（図Ⅶ－17、70～桟77）

須恵器。a：回転ヘラ切り（70～72）、b：回転糸切り（73、74）。

②　土器群の類別

Ⅰ群の深鉢はいわゆる北大Ⅲ式に相当する。ウサクマイ遺跡（西連寺　1979）出土の資料に類似する。ただし、4は頸部に円形刺突文がつくことから新しくなると思われる。

Ⅰ群の坏は東北南部の栗囲式の古い部分に類似するものである。東北北部の高柳遺跡（桐生1987）、御駒堂（小井川・小川　1982）、根城跡（宇部　1983）などで、Ⅰ群の深鉢と伴出している。

Ⅱ群の深鉢は十勝茂寄の土器（大沼　1979、1989）に相当する。類似する資料は本遺跡で昭和56・62年度に出土したものやチブタシナイ遺跡（峰山・大島　1988）で出土のものがある。高柳遺跡では口縁部に突瘤がなく、頸部に鋸歯状の沈線をもつ甕が出土している。

Ⅲ群の甕は土師器甕を模倣したような形のいびつなもの（13）や十勝茂寄の土器から続く沈線が失われるもの（15～17）がある。18の肩部に強い段をもつ球胴甕はこのころものと思われる。

Ⅳ群の甕は口縁部と頸部に沈線をもつもので、19は北大構内サークル会館遺跡（横山　1780）、21は柏木川遺跡出土の土の資料に類似する。

北大構内サークル会館遺跡では、坏のⅢ～Ⅳ群と、須恵器のⅥ－aがともに出土している。

Ⅴ群の甕は頸部もしくは口縁部から頸部にかけて多条の沈線をもつもので、中島松7遺跡、中島松6遺跡（松谷・上屋　1988）のものに類似する。

Ⅵ群の甕は口唇部に短刻文をもつもので、蘭島餅屋沢遺跡（峰山・大島　1985）に類例がある。

Ⅶ郡の甕は、道央部に類例が見当らない。道東では常呂町栄浦第2遺跡（駒井　1963）出土の資料がある。

③　土器群の年代

図Ⅶ－23～図Ⅶ－25は今年度の調査で出土したものに、前4回の調査で出土したものを加えて時期別に整理したものである。Ⅰ群～Ⅹ群に分けられる。

Ⅰ群

深鉢はいわゆる北大Ⅲ式と十勝茂寄式[註1]である。坏は丸底で、口縁部が外反し、体部内外に段・陵をもつ。器面調整はヘラミガキされ内黒である。

Ⅱ群

甕は、土師器甕の初現的形態を示すもので、頸部に段をもつ球胴甕がある。器面調整は、ハケメ・ヘラミガキである。坏は丸底、丸底風で、口縁部はやや内傾するものと、直線的に立ち上がるものがある。体部には、段、沈線をもつものが多い。器面調整は、ハケメ、ヘラミガキである。

Ⅲ群

甕は口縁部、頸部に横走沈線をもち、口端部が内傾する。球胴甕は口縁部が内傾する。坏は、平底風で口縁部は内彎する。体部に沈線をもつものが多い。器面調整はヘラミガキで、内黒である。

Ⅳ群

甕は口縁部から胴部にかけて横走沈線をもつ。口端部が内傾するものが多い。坏は平底で口縁部は内彎する。器面調整はヘラミガキされるものが多く、内黒である。須恵器は回転ヘラ切りのものである。

Ⅴ群

甕は口端部が内傾しなくなり、口唇部に短刻文をもつものがでてくる。須恵器は頸で回転糸切りのもの。やや後に回転糸切りの土師坏がでてくる。

Ⅵ群

深鉢は口唇部に短刻文をもち、口縁部から頸部にかけて多条の横走沈線がつく。回転糸切りの土師器甕がある。

Ⅶ群

深鉢は口唇部にあった短刻文が口縁部よりになり、肩部にもつくようになる。縦位・斜位の沈線が施され、横走沈線を下地にするものとしないものがある。

Ⅷ群

深鉢は口縁部がやや屈曲し口端部が直立する。文様帯は縦の分割がみられ、Ⅶ群に比べて文様が複雑になる。胴部に貼付帯をもつものがあらわれる。

Ⅸ群

口縁部は強く屈曲し、端部が直立あるいは内傾する。文様帯は複雑化し、口縁部・胴部の貼瘤・貼瘤帯に刻目や押捺文が施される。

Ⅹ群

口縁部は強く屈曲し端部は内傾ぎみに立ち上がる。Ⅸ群に比べて文様が単純化してくる。

Ⅰ群は7世紀前葉～中葉、Ⅱ群は7世紀後半～8世紀前葉、Ⅲ群は8世紀中葉、Ⅳ群は8世紀後半～9世紀初頭、Ⅴ群は9世紀中葉、Ⅵ群は9世紀後葉～10世紀前葉、Ⅶ群は10世紀中葉～10世紀後葉、Ⅷ群は11世紀中葉、Ⅸ群は11世紀後葉～12世紀前葉、Ⅹ群は12世紀中葉と推定される。

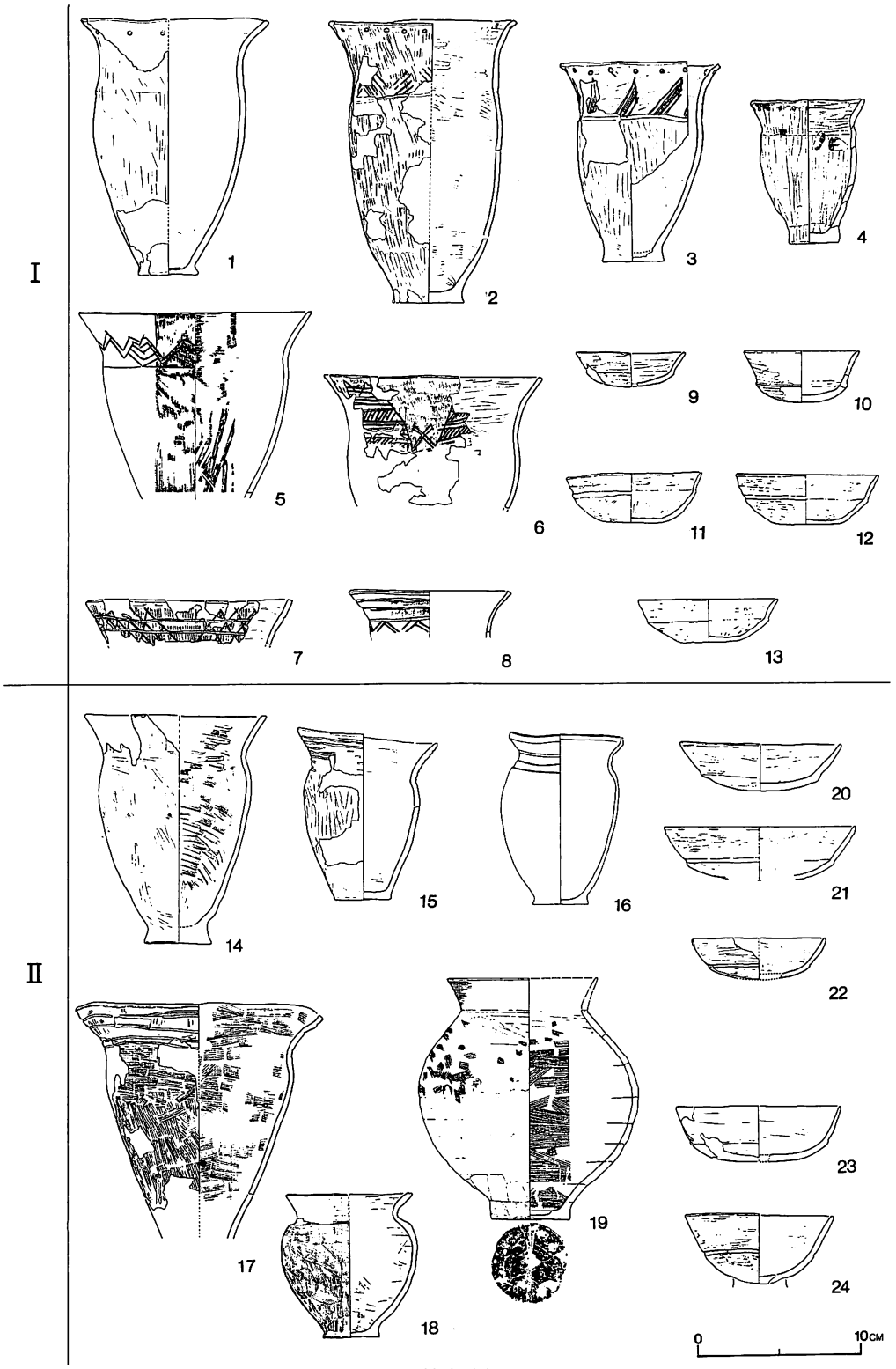
図示した資料は多くの復元個体の中のごく一部である。したがって今回図示したものは大まかな一試案にすぎない。年代観については大沼（文献6）宇部（文献12）両氏の教示による。

註－1　大沼忠春氏（文献6）は北大Ⅲ式を含めて初期擦文式土器を十勝最寄式と提唱している。最寄は茂寄の誤記である。ここではいわゆる北大Ⅲ式とその他の十勝茂寄式とが初期擦文式土器と考えている。（佐藤和雄）

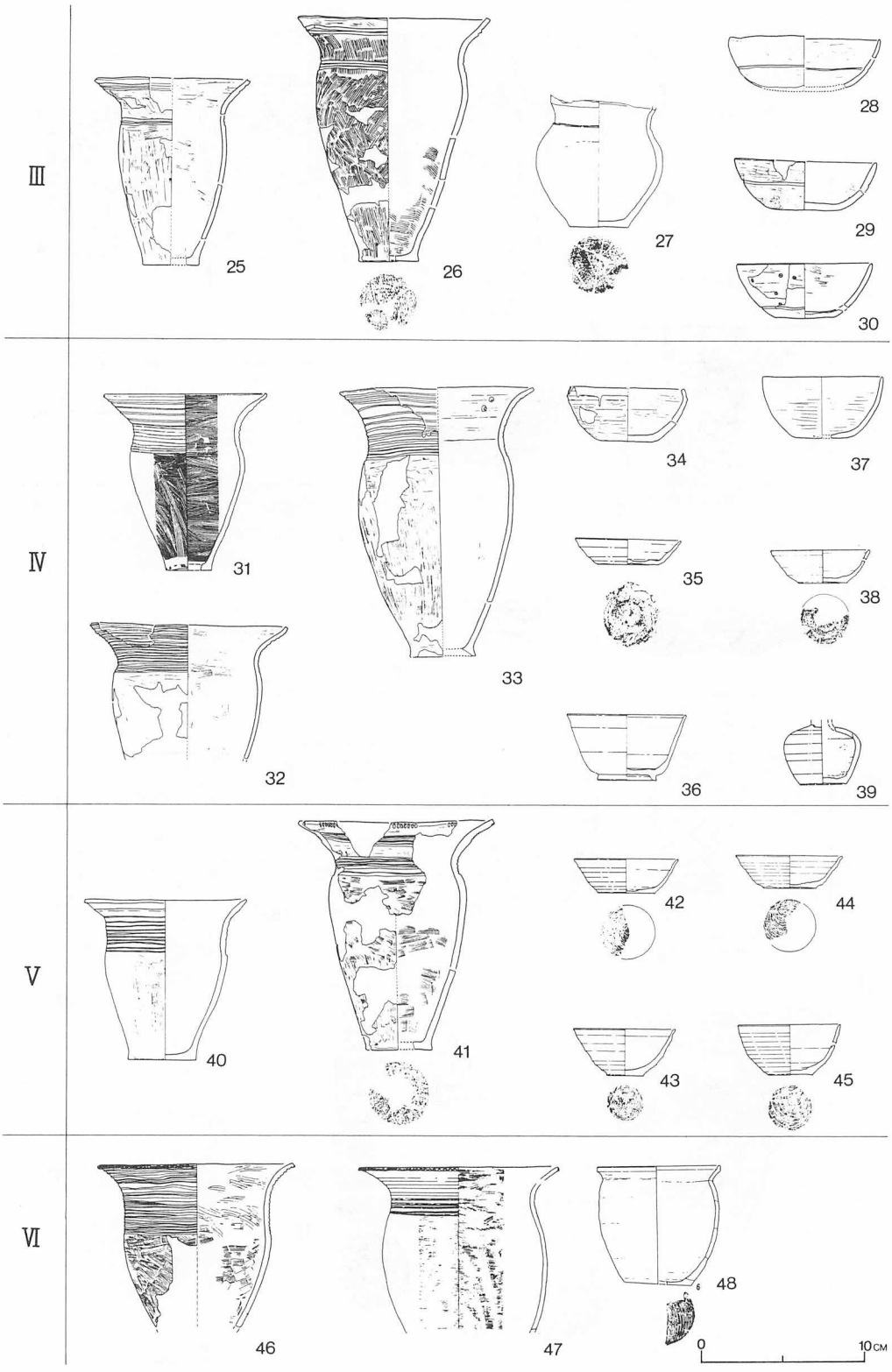
文献

1　西連寺健他　1979　「ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査」『千歳市文化

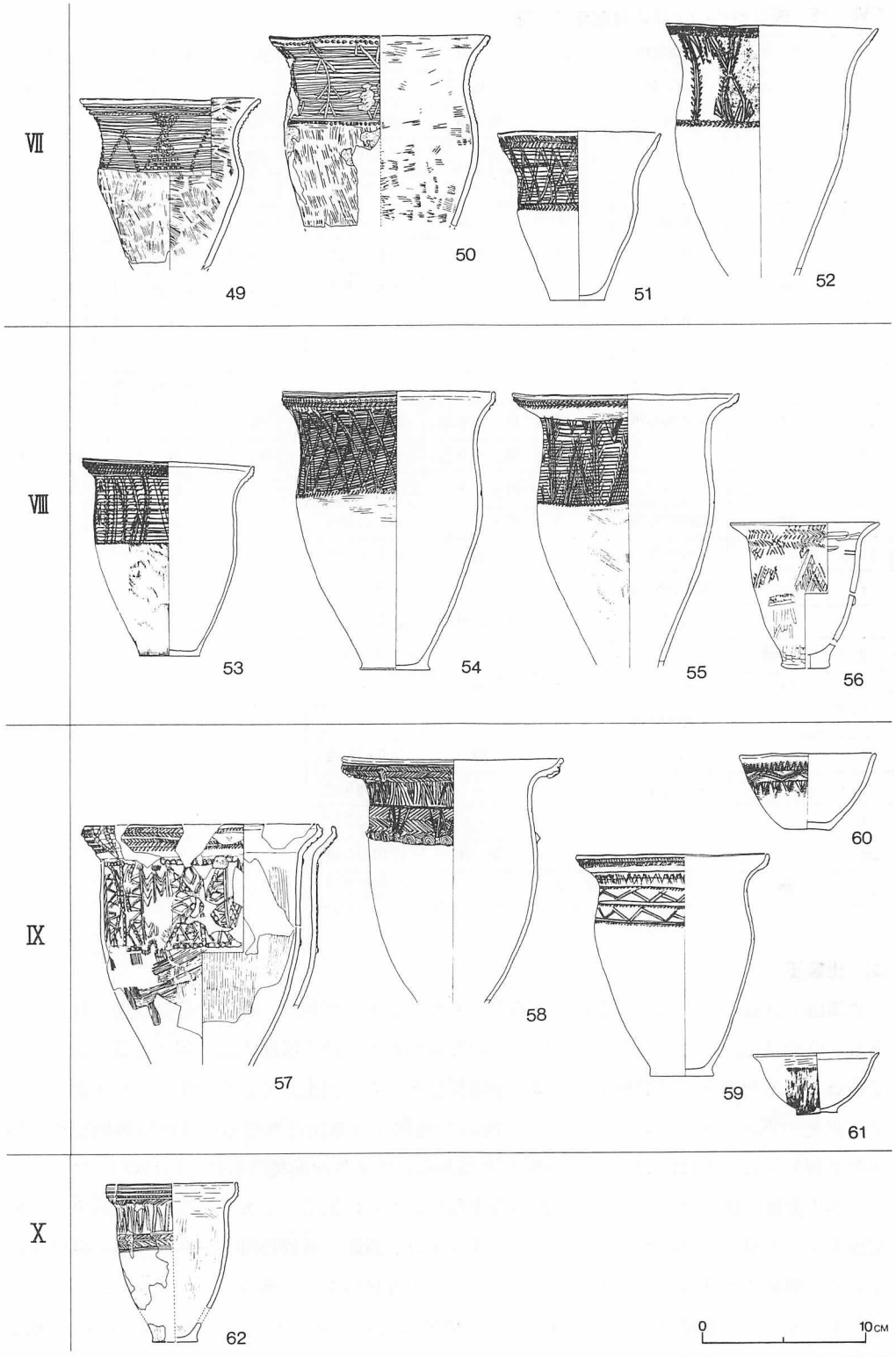
財調査報告書Ⅳ』千歳市教育委員会
2　桐生正一　1987　『高柳遺跡』　滝沢村教育委員会
3　小井川和夫・小川淳一　1982　「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』　宮城県教育委員会
4　宇部則保　1983　『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ』　八戸市教育委員会
5　大沼忠春　1979　「北海道中央部の擦文文化」　どるめん22号
6　大沼忠春　1989　「北海道の文化」　古代史復元９
7　横山英介　1980　「課外活動共用施設建設予定地の調査」『北大構内の遺跡(1)』　北海道大学
8　松谷純一　1988　「中島松６・７遺跡」『恵庭市発掘調査報告書』　恵庭市教育委員会
9　峰山　巌・大島秀俊　1986　「蘭島餅屋沢遺跡・蘭島遺跡」『蘭島川水系河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査概報』　小樽市教育委員会
10　駒井和愛編　1963　「常呂町栄浦第２遺跡」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡上巻』東京大学
11　宇田川洋　1977　「北海道考古学講座７　擦文期」『北海道史研究』北海道史研究会
12　宇部則保　1989　「青森県における７・８世紀の土師器―馬淵川下流域を中心として」『北海道考古学第25号』　北海道考古学会
13　峰山　巌・大島秀俊　1988　「蘭島遺跡・チブタシナイ遺跡」『蘭島川水系河川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査概報』



図Ⅶ－44　擦文時代の土器(1)



図Ⅶ－45　擦文時代の土器(2)



図Ⅶ－46　擦文時代の土器(3)

表Ⅶ－18　擦文時代の土器の発掘年度一覧

番号	名　称	発掘年度
1	深　鉢	昭和57年度
2	〃	平成元年度
3	〃	〃
4	〃	〃
5	〃	昭和56年度
6	〃	平成元年度
7	〃	〃
8	〃	昭和56年度
9	坏	平成元年度
10	〃	昭和57年度
11	〃	昭和56年度
12	〃	〃
13	〃	〃
14	甕	昭和62年度
15	〃	平成元年度
16	〃	昭和56年度
17	〃	平成元年度
18	球胴甕	〃
19	〃	昭和57年度
20	坏	昭和62年度
21	〃	昭和56年度
22	〃	平成元年度
23	〃	〃
24	〃	〃
25	甕	〃
26	甕	平成元年度
27	球胴甕	昭和56年度
28	坏	平成元年度
29	〃	〃
30	〃	〃
31	甕	昭和57年度
32	〃	平成元年度
33	〃	〃
34	坏	〃
35	〃	〃
36	皿・須恵器	昭和56年度
37	坏・須恵器	平成元年度
38	椀・　〃	昭和56年度
39	壺・　〃	昭和57年度
40	甕	昭和56年度
41	〃	平成元年度
42	坏・須恵器	昭和56年度
43	〃・　〃	平成元年度
44	椀	〃
45	〃	〃
46	甕	昭和62年度
47	〃	昭和56年度
48	〃	昭和57年度
49	深　鉢	昭和62年度
50	〃	昭和56年度（未報告）
51	深　鉢	昭和56年度
52	〃	〃
53	〃	〃
54	〃	〃
55	〃	〃
56	鉢	昭和62年度
57	深　鉢	昭和60年度
58	〃	昭和56年度
59	〃	〃
60	浅　鉢	〃
61	〃	〃
62	鉢	平成元年度

(3)　土製玉

本遺跡では28個の土製玉が多量の土器片とともに出土しており、周辺には柱穴群、焼土群がある。時期は土器からみて７～８世紀のものと思われる。他の遺跡の出土例は表Ⅶ－19に示してある。柏木川遺跡では墳墓から土器、金属製品とともに出土しており、伴出した土器からみて８世紀中葉のものと思われる。祝梅三角山Ｄ遺跡から検出されたものは住居跡周辺から14個の土製勾玉とともに出土した。住居跡の土器からみて８世紀前葉のものと思われる。サクシュコトニ川遺跡は炭化マウンド、炭化物から土器片とともに出土しており、土器片からみて８世紀後半から９世紀中葉のものと思われる。イルエカシ遺跡では建物跡、炉跡などから検出されており、遺構内、外の金属品・ガラス製品から中・近世のものである。

形状・大きさを比較すると（表Ⅶ－19）本遺跡のものに近い形状を示すものは祝梅三角山Ｄ遺跡のもので、長円形のものを除いて円形・方形・長方形のものからなる。大きさは本遺

跡のものが平均最大径1.2cm、平均高さが1.1cmあり、これに近い数値を示すのはサクシュコトニ川遺跡とイルエカシ遺跡のものである。単位は柏木川遺跡のもので3個、本遺跡のものは分布状態からみて5～6個で一単位になろう。用途は装飾品と考えられ、柏木川遺跡墳墓の出土例からも推定できる。祝梅三角山D遺跡のものは土製勾玉とともに住居跡の周辺でまとまって出土していることから祭祀的なものであったと考えられる。サクシュコトニ川遺跡のものは炭化マウンド、炭化物から出土しており推定すると土製玉製作に関係があるかもしれない。イルエカシ遺跡のものは炉址・建物内などからまとまって出土しており、破片が多いことから廃棄されたものと考えられる。本遺跡のものは時期・形状が祝梅三角山遺跡のものに近く、未調査部分から土製勾玉が出土したならば祭祀的なものの可能性がある。

土製玉は7世紀から中・近世にかけて装飾品として一般的にもちいられ、祭事があるとそれをささげる風習もあったと考えられる。（佐藤和雄）

文献

高橋正勝編　1971　「柏木川」　北海道文化財保護協会

大谷敏三他　1978　「祝梅三角山D遺跡における考古学的調査」『千歳市文化財Ⅲ」　千歳市教育委員会

北海道大学埋蔵文化財調査室編　1986　「サクシュコトニ川遺跡」　北海道大学

豊原熙司・鶴丸俊明　1989　「イルエカシ遺跡」　平取町遺跡調査会

表Ⅶ－19　土製玉遺跡別一覧

遺跡名	遺構名	形状・個数	大きさ(cm)
柏木川	ＰＩＴ77	円形　1	最大径　1.5～1.8
		長方形　2	高さ　1.0～1.2
			平均最大径　1.66
			平均高さ　1.08
祝梅三角山D	4号住居跡の	円形　9	最大径　0.6～1.2
	煙道の西側	方形　8	高さ　0.6～1.4
	盛土とその周辺	長方形　3	平均最大径　0.95
			平均高さ　0.92
サクシュコトニ川	炭化マウンド	方形　9	最大径　0.9～1.6
		円形　4	高さ　0.7～1.5
		長方形　1	平均最大径　1.1
		破片　1	高さ　0.9
	炭化物	方形　1	
		円形　1	
イルエカシ	16号址の炉址	円形　1	最大径　0.68～1.84
		長方形　1	高さ　0.65～1.25
		孔なし　1	平均最大径　1.2
		破片　8	平均高さ　1.02
	1号炉址	円形　13	
		方形　5	
		長方形　3	

遺跡名	遺構名	形状・個数	大きさ(cm)
		破片　6	
	10号炉址	方形　1	
		破片　1	
	16号址内部	円形　1	
		方形　1	
		長方形　1	
		ヒシ形　1	
		破片　6	
	7号址内部	方形　1	
		菱形　1	
		孔なし　4	
		破片　8	
	16・17号址外	円形　2	
		孔なし　1	
		破片　3	
美々8	Ｐ－71覆土	円形　1	最大径　1.0～1.4
	遺構外	円形　14	高さ　0.6～1.5
		方形　5	平均最大径　1.2
		長方形　4	平均高さ　1.1
		長円形　4	

表Ⅶ－20　包含層の出土遺物一覧

名　称	数　量	名　称	数　量
土　器(Ⅰ群)	12	u フレイク	3
(Ⅵ群)	558	R フレイク	8
(Ⅶ群)	25,573	フレイク・チップ	468
土　器　計	26,143	礫・礫片	2,475
石　鏃	7	細　礫	1,219
スクレイパー	14	焼　礫	84
石　斧	1	原　石	1
たたき石	7	土製品	31
すり石	1	石製品	1
砥　石	3	鉄製品	56
台　石	16	陶器他	2
石　皿	1	石器計	4,409
石　錘	1	総　計	30,552
コ　ア	10		

表Ⅶ－21　遺構の出土遺物一覧(擦文)

名　称	分類	数　量
		覆　土
土　器	Ⅶ	410
土　器　計		410
フレイク・チップ		7
礫・礫片		284
細　礫		263
土製品		1
石　器　計		555
総　計		965

表Ⅶ－22　遺構の出土遺物一覧(中・近世)

名　称	数　量	
	覆　土	床
R フレイク		1
フレイク・チップ	16	21
礫・礫片	49	75
細　礫	427	182
通貨・古銭		2
鉄製品	4	13
陶　器　他		2
計	496	296

表Ⅶ－23　遺構別出土遺物一覧(擦文)

(1)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量	
			覆　土	床　面
P－71	土製品		1	
1点	計		1	
F－1	礫・礫片		6	
	細　礫		2	
8点	計		8	
F－3	土　器	Ⅶ	1	
1点	計		1	
F－4	土　器	Ⅶ	1	
	計		1	
	細　礫		3	
4点	計		3	
F－5	細　礫		2	
2点	計		2	
F－6	フレイク・チップ		1	
	礫・礫片		1	
	細　礫		4	
6点	計		6	
F－7	土　器	Ⅶ	2	
	計		2	
	細　礫		2	
4点	計		2	

(2)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量	
			覆　土	床　面
F－8	土　器	Ⅶ	3	
	計		3	
	細　礫		6	
9点	計		6	
F－10	細　礫		2	
2点	計		2	
F－11	土　器	Ⅶ	1	
1点	計		1	
F－12	土　器	Ⅶ	4	
4点	計		4	
F－14	細　礫		4	
4点	計		4	
F－15	土　器	Ⅶ	1	
	計		1	
	礫・礫片		6	
	細　礫		10	
17点	計		16	
F－16	細　礫		1	
1点	計		1	
F－18	礫・礫片		1	
1点	計		1	
F－19	土　器	Ⅶ	9	
	計		9	
	礫・礫片		27	
	細　礫		75	
111点	計		102	
F－20	土　器	Ⅶ	137	
	計		137	
	礫・礫片		2	
	細　礫		7	
146点	計		9	
F－22	土　器	Ⅶ	49	
	計		49	
	フレイク・チップ		1	
	礫・礫片		1	
	細　礫		13	
64点	計		15	
F－23	礫・礫片		1	
	細　礫		2	
3点	計		3	
F－24	細　礫		2	
2点	計		2	
F－25	土　器	Ⅶ	95	
	計		95	
	細　礫		11	
106点	計		11	
F－26	土　器	Ⅶ	7	
	計		7	
	細　礫		2	

(3)

遺構番号 遺物点数	名　　称	分　類	数　量	
			覆　土	床　面
9点	計		2	
F－28	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	
F－29	土　　器	Ⅶ	4	
	計		4	
	フレイク・チップ		3	
7点	計		3	
F－31	土　　器	Ⅶ	2	
	計		2	
	細　　礫		2	
4点	計		2	
F－32	土　　器	Ⅶ	12	
12点	計		12	
F－34	土　　器	Ⅶ	25	
	計		25	
	細　　礫		2	
27点	計		2	
F－35	土　　器	Ⅶ	51	
	計		51	
	細　　礫		3	
54 点	計		3	
F－36	土　　器	Ⅶ	3	
	計		3	
	細　　礫		1	
4点	計		1	
F－37	土　　器	Ⅶ	2	
	計		2	
	細　　礫		2	
4点	計		2	
F－38	土　　器	Ⅶ	1	
	計		1	
	フレイク・チップ		1	
2点	計		1	
S－1	礫		11	
11点	計		11	
S－2	礫		7	
7点	計		7	
S－3	礫		5	
5点	計		5	
S－4	礫		102	
	細　　礫		19	
121点	計		121	
S－5	礫		35	
35点	計		35	
S－6	礫		9	
9点	計		9	

(4)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量	
			覆　土	床　面
S－7	礫		9	
9点	計		9	
S－8	礫		29	
	細　礫		20	
49点	計		49	
S－9	礫		23	
	細　礫		66	
89点	計		89	
S－10	礫		4	
4点	計		4	
S－11	礫		5	
5点	計		5	

表Ⅶ－24　遺構別出土遺物一覧（中・近世）

(1)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量	
			覆　土	床　面
H1・2	加工痕フレイク			1
	フレイク・チップ			21
	礫・礫片			75
	細　礫			185
	通貨・古銭			2
	釘			4
	刀子・小刀			4
	鉄　片			3
	カスガイ			1
	釣　針			1
	磁　器			2
299点	計			299
F－7	フレイク・チップ		1	
1点	計		1	
F－12	フレイク・チップ		6	
	細　礫		7	
13点	計		13	
F－13	細　礫		7	
7点	計		7	
F－14	細　礫		9	
	鉄製品		3	
12点	計		12	
F－15	細　礫		16	
16点	計		16	
F－16	細　礫		24	
24点	計		24	
F－17	フレイク・チップ		1	
	細　礫		6	
7点	計		7	

(2)

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量	
			覆　土	床　面
F－18	細　礫		30	
30点	計		30	
F－19	フレイク・チップ		1	
	礫		1	
	細　礫		19	
21点	計		21	
F－20	細　礫		15	
15点	計		15	
F－21	礫		1	
	細　礫		26	
27点	計		27	
F－22	フレイク・チップ		2	
	礫		3	
	細　礫		53	
58点	計		58	
F－24	フレイク・チップ		5	
	礫・礫片		44	
	細　礫		102	
	鉄　製　品		1	
152点	計		152	
F－25	細　礫		10	
10点	計		10	
F－26	細　礫		1	
1点	計		1	
F－30	細　礫		44	
44点	計		44	
F－34	細　礫		17	
17点	計		17	
F－35	細　礫		41	
41点	計		41	

表Ⅶ－25　擦文時代の掲載石器一覧

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
1	スクレイパー	e-65-08	1.8×1.6×0.7	1.8	Obs.
2	〃	f-66-70	2.4×1.9×0.8	4.1	〃
3	〃	f-65-98	2.6×2.6×0.6	5.4	〃
4	〃	f-66-61	2.6×2.2×1.0	5.5	〃
5	〃	f-66-51	2.1×2.1×0.5	2.7	〃
6	〃	e-65-08	2.0×2.2×0.7	3.1	〃
7	〃	f-66-70	2.5×2.4×1.2	6.5	〃

番号	名　称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
8	スクレイパー	f-66-51	2.8× 2.7 ×0.4	3.6	Obs.
9	敲　石	f-66-50	9.8× 5.1 ×2.2	200.4	Sa.
10	〃	f-66-71	10.4×(5.1)×4.6	337.4	〃
11	すり石	c-66-77	10.8× 7.3 ×4.0	474.4	〃
12	砥　石	f-65-98	15.5× 7.0 ×5.2	839.0	And.
13	石　錘	d-66-87	12.7× 8.5 ×7.6	367.2	Gni?

Ⅷ　美々８遺跡表土層の調査

1　調査の概要

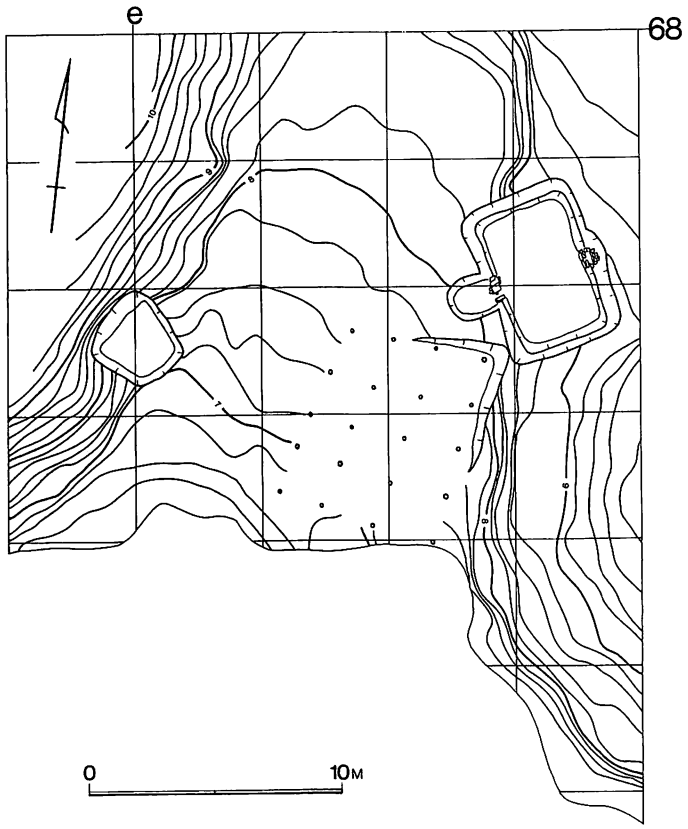
表土層の調査は538㎡についておこなった。位置はｅ－68・ｆ－68区で、昭和57年度調査地区の南西側にあたる。ここは標高約７ｍ～10ｍの美沢川に向う涸れ沢の斜面である。

昭和56年度の調査で、表土層の遺構・遺物は「ユウフツ越」「室蘭街道」に関係することが指摘されている。またユウフツ越の際、松浦武四郎が図示した「ミミ憩所・船乗場」（註１）が本遺跡の美沢川付近に存在した可能性があることから、調査にあたってはそれらの遺構・遺物の確認に努めた。

調査の結果、ミミ憩所（ビビ小休所）跡と思われる近世の建物跡１軒・近代の炭焼窯跡２基竪穴状の遺構１基が確認された。

遺物は、炭焼窯跡に関係する金属製品・陶磁器・ビン類が出土した。　（佐藤和雄）

（註１）　松浦武四郎　弘化３年（1846）『再航蝦夷日誌』



図Ⅷ－１　遺構位置図

2　近世の遺構

(1)　建物跡（図Ⅷ－２）

ｆ－68区の涸れ沢の底面から東斜面にかけて柱穴列が検出された。東側斜面は、3.3×7.3ｍの範囲で切り崩され、平坦になっている。

規模は、東側7.3ｍ、西側6.8ｍ、南側5.1ｍ、北側6.2ｍで、平面形は東側と西側が長くなるややいびつな長方形をなす。

柱穴は、４本ずつ５列をなす。間隔は、1.2ｍ～2.3ｍで、多くは1.7ｍほどである。

柱穴の大きさは、径0.12～0.16ｍ、深さ0.42～0.80ｍである（表Ⅷ－１）。

断面形は、先端が細くなる杭状をなす。

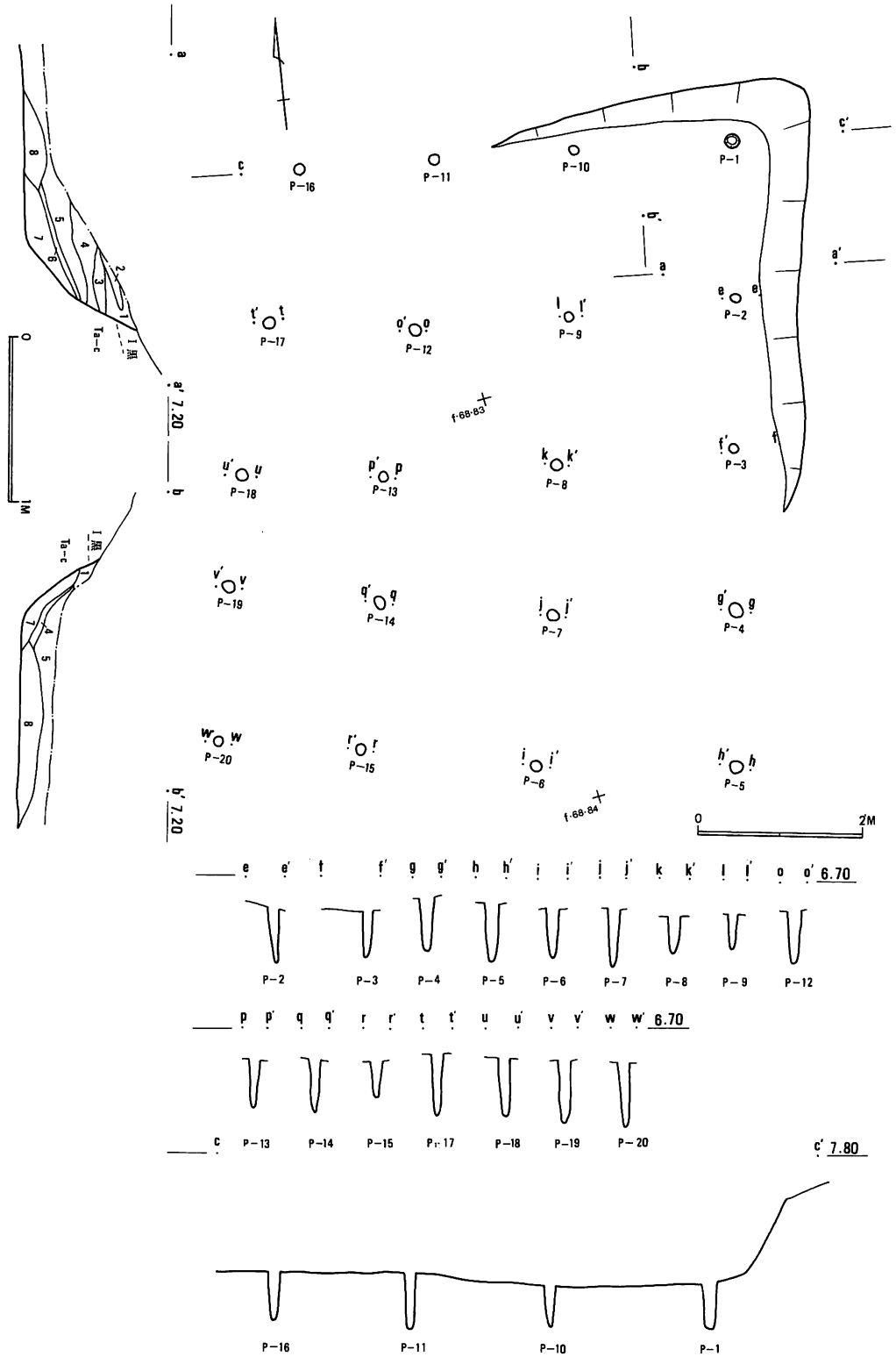
遺物は、崩落土よりカワシンジュ貝が１点得られたのみである。

時期は、時期決定できる遺物の出土がなく困難であるが、層位的には時間幅を与えることが、できる。柱穴がＴａ－ａ層を切っていること、表土上層の炭焼窯跡が大正～昭和初期であることから、Ｔａ－ａ火山灰の降下年代1739（元文４）年以降から、表土下層の年代の間、江戸時代～明治時代という幅でとらえられる。　（佐藤和雄）

表Ⅷ－１　建物跡柱穴一覧

遺構No.	規模 径×深(m)	備　考
Ｐ－１	0.16×0.60	最大径
－２	0.13×0.66	
－３	0.12×0.58	
－４	0.16×0.64	最大径
－５	0.16×0.72	〃
－６	0.14×0.59	
－７	0.14×0.70	
－８	0.13×0.46	
－９	0.12×0.42	
－10	0.12×0.50	
－11	0.13×0.68	

遺構No.	規模 径×深(m)	備　考
Ｐ－12	0.14×0.64	
－13	0.13×0.58	
－14	0.15×0.66	
－15	0.13×0.46	
－16	0.14×0.60	
－17	0.15×0.74	
－18	0.14×0.70	
－19	0.14×0.76	
－20	0.13×0.80	最深
平　均	0.14×0.62	径　0.12～0.16
		深　0.42～0.80


P-16
P-11
P-10
P-1
P-17
P-12
P-9
P-2
P-18
P-13
P-8
P-3
P-19
P-14
P-7
P-4
P-20
P-15
P-6
P-5
f·68·83
f·68·84
a' 7.20
b' 7.20
c' 7.80
6.70
6.70
Ta-c
I 黒
1M
0
2M

図Ⅷ－2　建物跡

3　近代の遺構と遺物

(1)　遺構

(a)　炭焼窯跡

工事用道路の盛土を除去したところ、多量の炭が検出された。炭焼窯跡を想定して精査したところ、涸れ沢の斜面上で確認された。

プランは、6.6×4.6ｍの方形で、窯壁の内側にはタールの付着がみられた。さらにこれより規模を一回り小さくした方形のプランがみられたことから、本炭焼窯跡は２度にわたって構築されたことが判明した。

記載にあたっては、外側の大きな炭焼窯跡を１号、内側の小さな炭焼窯跡を２号とした。

窯跡の西側には、幅約８ｍ、長さ約20ｍの広がりをもつ灰原があり、最も厚い層で約25㎝である（図Ⅷ－３）

南側の斜面直下の窪みから原木がまとまって検出された。径、長さとも不揃いなことから燃材のあまり木と推定した。（図Ⅷ－３）

※炭焼窯の各部の名称及び用語は、「炭窯百態」（三浦伊八郎　1933）による。

炭焼窯跡１号　（図Ⅷ－４）

位　置　ｆ－68－61・62・71・72　　**規　模**　6.62×4.64／5.68×3.76／1.06

標高８～９ｍの東斜面を掘り込んでつくられている。

炭化室は、Ｓ－Ｎに長軸方向をもつ長方形である。

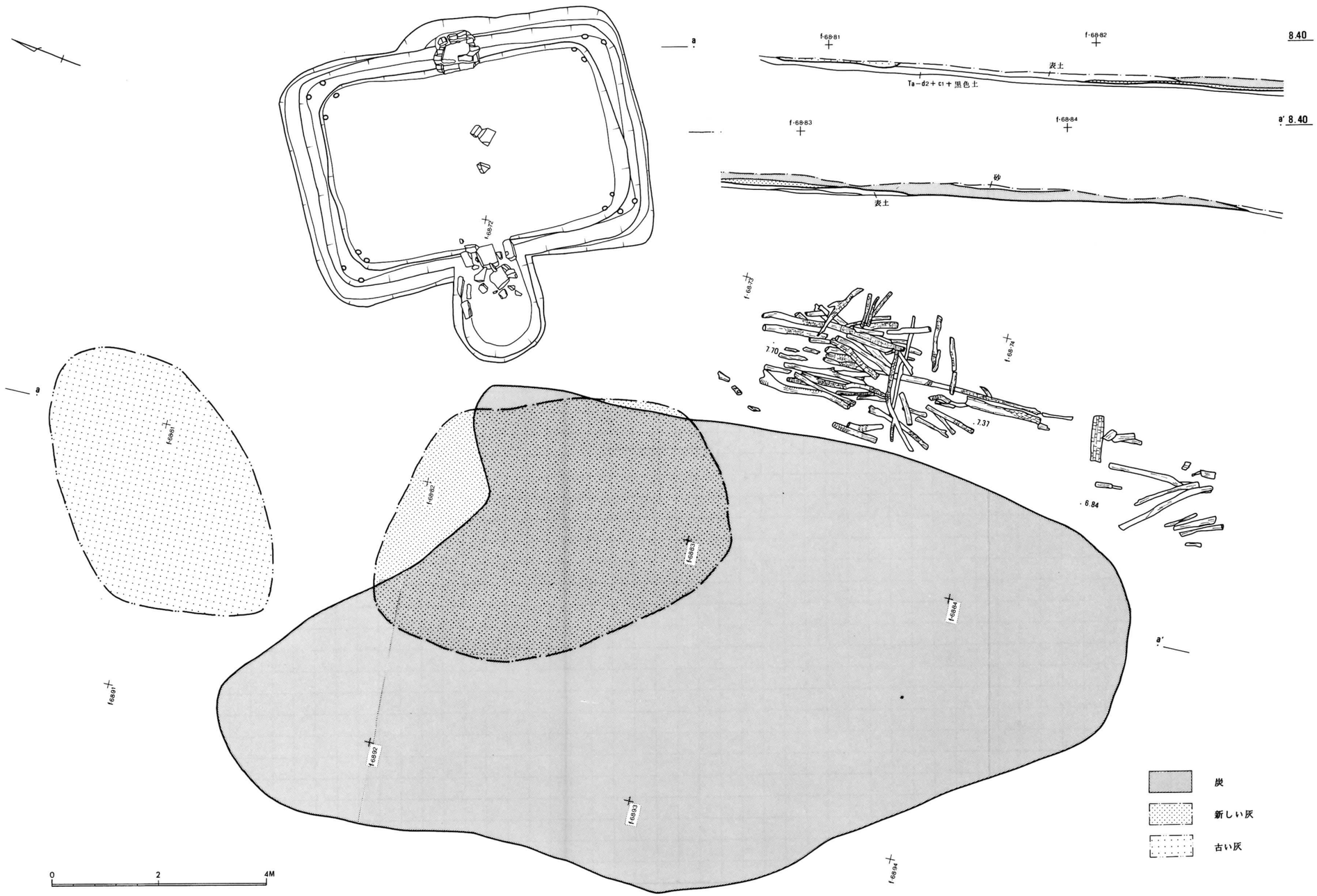
窯壁は、支笏の火山灰でつくられており、厚さは約30㎝である。この火山灰は、固く締っており、壁面には、厚くタールの付着がみられる。

窯底の四隅には、１対の木杭が検出されている。径は、８㎝ほどで先端が細くなっている。50㎝ほど地山に入り込んでおり、窯底部では炭化、窯壁部では焼けて痕跡だけになっている。この中で、Ｐ－１のみが掘り方をもつ。木杭は、このほか煙道付近に３本、焚口付近に５本検出されている（表Ⅷ－２）。

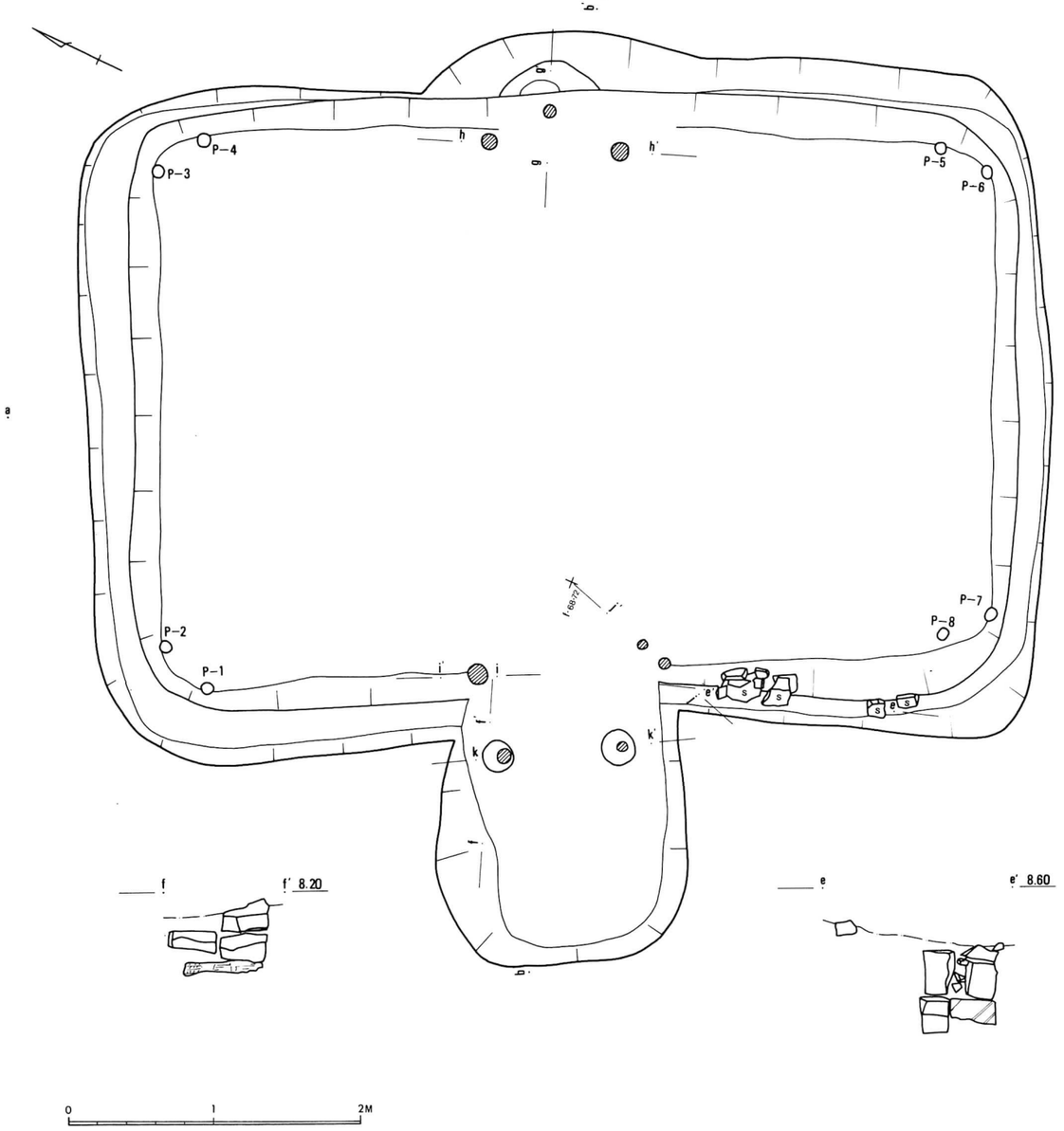
煙道は、東壁の中央部にある。窯壁を掘り込んで、地山との境に割り石を配してある。煙道内からは、むしろ状の編物が円筒状にコークス化しているのが検出された。

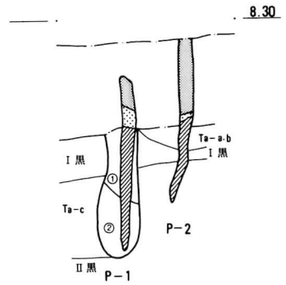
焚口は、西側の中央部にあり、ピット状の窯口が設けられている。袖石は廃棄の際取り去られたためか、不明である。

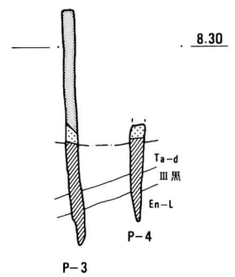
西壁と窯口の壁には石組がみられる。西壁のものは、４個の割石を配してある。焚口の壁は、木材の上に３個の割石を配してある。割石はいずれも約30㎝（１尺）である。壁の崩れを補修したものと考えられる。　　（佐藤和雄）

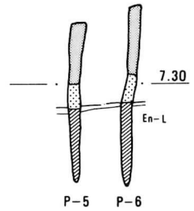


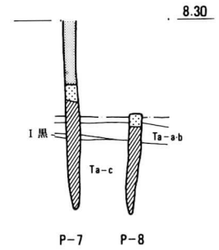
図Ⅷ－3　炭焼窯跡・灰原・燃材位置図


P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
f　f' 8.20
e　e' 8.60
0　1　2M

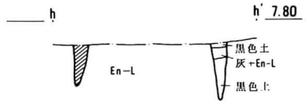

8.30
I 黒
Ta-c
Ta-a-b
I 黒
II 黒
P-1
P-2

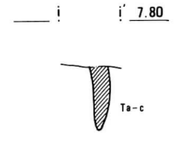

8.30
Ta-d
III 黒
En-L
P-3
P-4

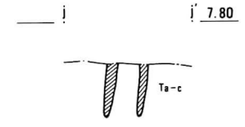

7.30
En-L
P-5
P-6

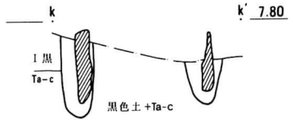

8.30
I 黒
Ta-a-b
Ta-c
P-7
P-8

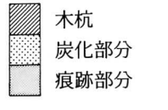

g　g' 7.80
黒色土
En-L


h　h' 7.80
黒色土
灰+En-L
黒色土
En-L


i　i' 7.80
Ta-c

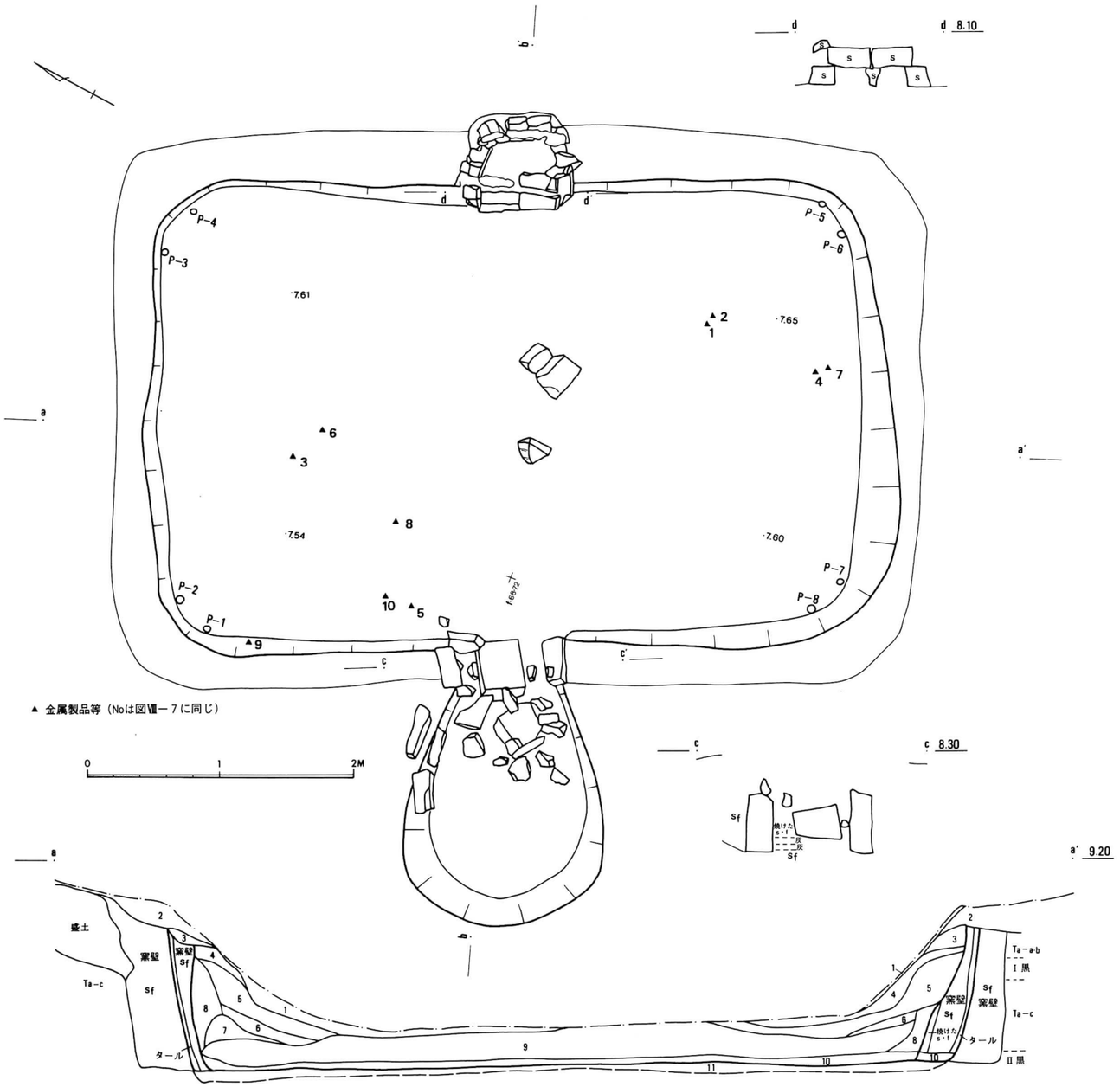

j　j' 7.80
Ta-c

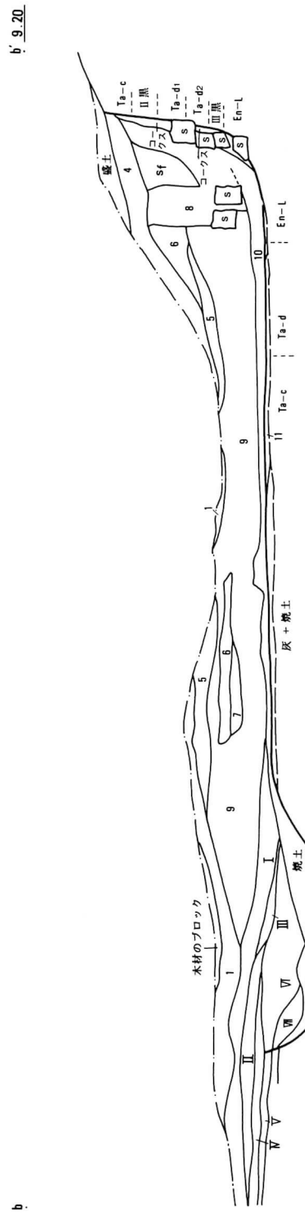

k　k' 7.80
I 黒
Ta-c
黒色土+Ta-c

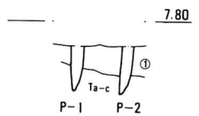

木杭
炭化部分
痕跡部分

0　1M

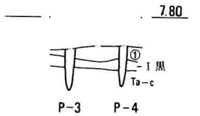
図Ⅷ－4　炭焼窯跡1号



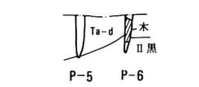


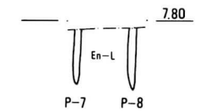


①黒褐色土（Ta－b・c≫黒色土・d_2）



①黒褐色土（Ta－b・c≫黒色土・d_2）





図Ⅷ－５　炭焼窯跡２号

表Ⅷ－2　炭焼窯跡1号杭跡一覧

番号	規模 径×長さ(m)	備考
P－1	0.10×0.82	掘方0.22×0.94
－2	0.06×0.50	
－3	0.08×0.66	
－4	0.10×0.52	
－5	0.08×0.48	
－6	0.07×0.55	
－7	0.08×0.56	
－8	0.08×0.60	

番号	規模 径×長さ(m)	備考
P－9	0.11×0.26	
－10	0.12×0.37	
－11	0.08×0.20	
－12	0.12×0.42	
－13	0.08×0.34	
－14	0.06×0.34	
－15	0.10×0.47	掘方0.21×0.50
－16	0.08×0.38	掘方0.23×0.28

炭焼窯跡2号　（図Ⅷ－5）

位　置　f－68－61・62・71・72　　**規　模**　6.10×4.20／5.30×3.36／1.02

炭焼窯1号の中に規模を一回り小さくして構築されている。

窯壁は、支笏の火山灰が使用され、固く締まっている。厚さは約30cmである。

窯底は、炭焼窯1号と共通である。窯底の四隅には、1対の木杭の痕が検出された。木質部が残っているのは、P－6のみである。径は約6cm・深さ約30cmで、先端部が細くなっている。

煙道は、炭焼室1号と共通で、煙道内には、円筒状のコークスが2枚重ねになった状態で検出されている。

排煙口は、約30cm（1尺）の割石が配されている。

焚口は、西側の中央部にあり、窯口をもつ約60cmの幅をもち、両袖の立石には、約45cm（1尺半）の割石が使用されている。窯口の割石は、上部の石が崩れ落ちたものと考えられる。

表Ⅷ－3　炭焼窯跡2号杭跡一覧

番号	規模 径×長さ(m)
P－1	0.08×0.28
－2	0.07×0.32
－3	0.07×0.27
－4	0.06×0.28

番号	規模 径×長さ(m)
P－5	0.06×0.27
－6	0.05×0.25
－7	0.04×0.35
－8	0.05×0.40

遺物は、覆土から吊金・針金・鉄板・陶磁器が出土している。陶磁器以外のものは、天井の崩落土から出土しており、天井構築の際に使用されたものと考えられる。　（佐藤和雄）

炭化室・煙道のセクション

1　黒褐色土（表土＞炭化物）
2　灰褐色（汚れたSpfl）
3　黒黒褐色（Spfl＋ス）
4　灰黄褐色土（焼けたSpfl）
5　灰褐色（Spflの流れ込み）
6　暗灰褐色土（ススノ流れ込み）
7　灰橙色土
8　黒色土（ス）
9　橙灰色土（天井崩落土）
10　黒色土（炭化物を含む）
11　赤褐色土（焼土）

窯口のセクション

Ⅰ　暗灰褐色土（黒色土＋灰＋炭）　　Ⅱ　淡橙色土（焼土＞Spfl）

Ⅲ　暗灰褐色土（灰＋炭化物）　　Ⅳ　暗灰褐色土（灰＞炭化物）

Ⅴ　淡灰褐色土（灰）　　Ⅵ　灰褐色土（灰≫炭化物）

Ⅵ　暗褐色土（汚れたTa－a、b）　　Ⅶ　灰褐色土（Ta－c＞炭化物＋焼土）

(b)　**竪穴状遺構**（図Ⅷ－６）

位　置　e－68－02、f－68－92　　**規　模**　3.28×3.0／2.36×2.38／1.04

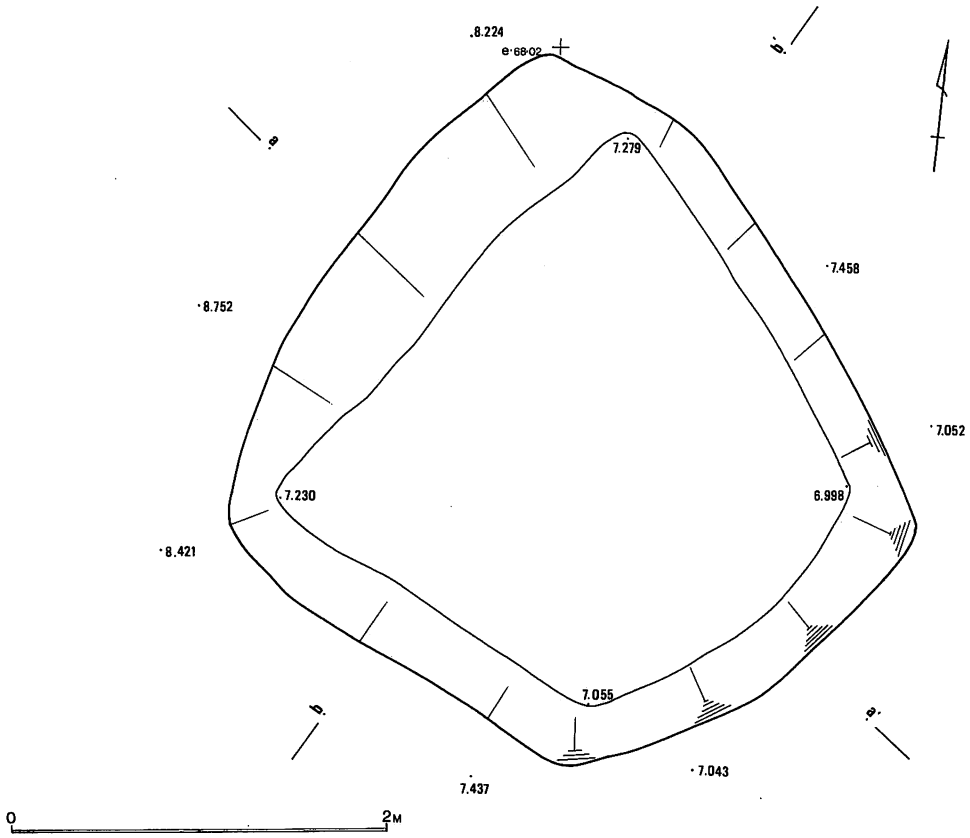
eライン上の涸れ沢西斜面に位置する、凹みに抜木などのボサがたまった状態で確認された。

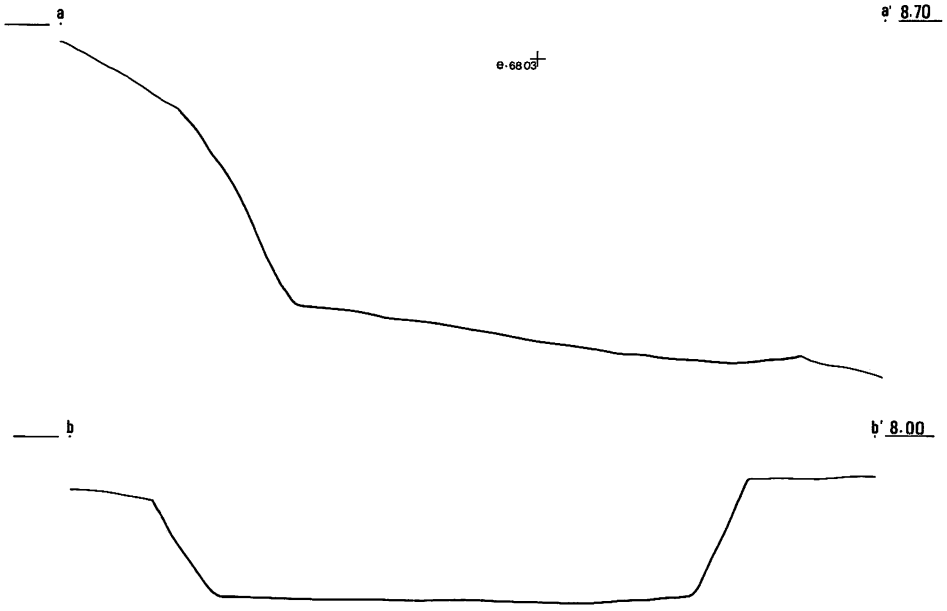
覆土は、崩れたTa－a・b層と表土が５cmほどの厚さで堆積していた。

平面形は、山側に長軸・谷側に短軸をもつ台形状である。

床面は、地形に沿って谷側に傾斜している。

時期は、遺物の出土がなく確認はできない。ただし覆土の堆積が浅いことから廃棄後長い時間がたっていないと考えられる。　（佐藤和雄）


8.224
e·68·02
a
b'
7.279
7.458
8.752
7.052
7.230
6.998
8.421
7.055
b
a'
7.437
7.043
0
2M

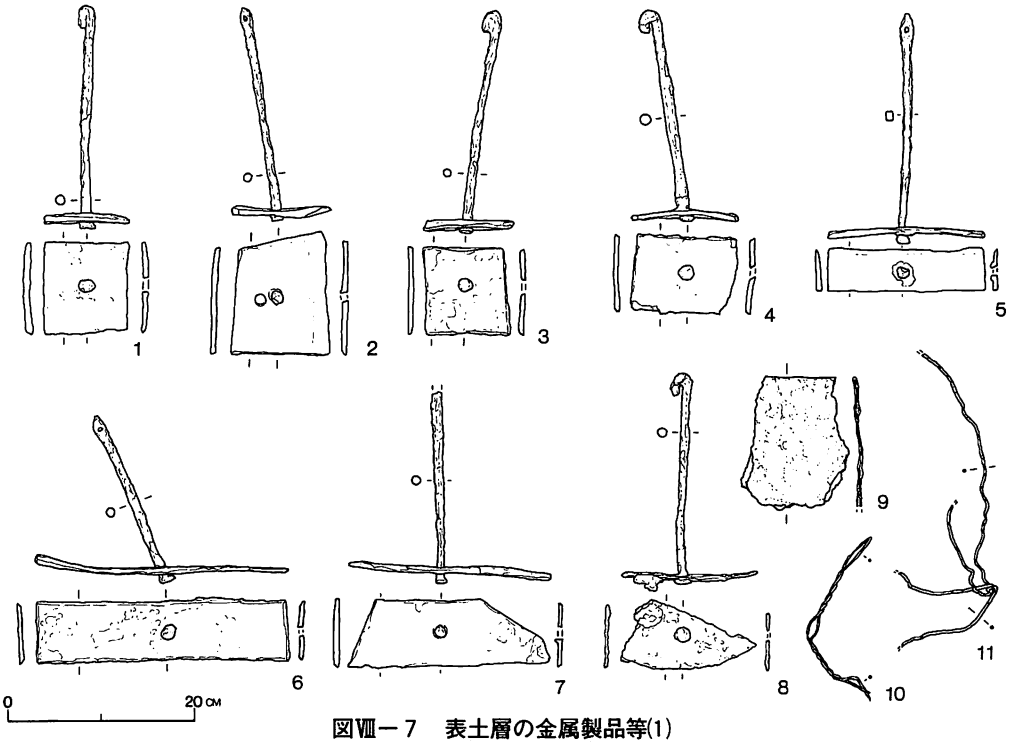

a
a' 8.70
e·68·03
b
b' 8.00

図Ⅷ－6　竪穴状遺構

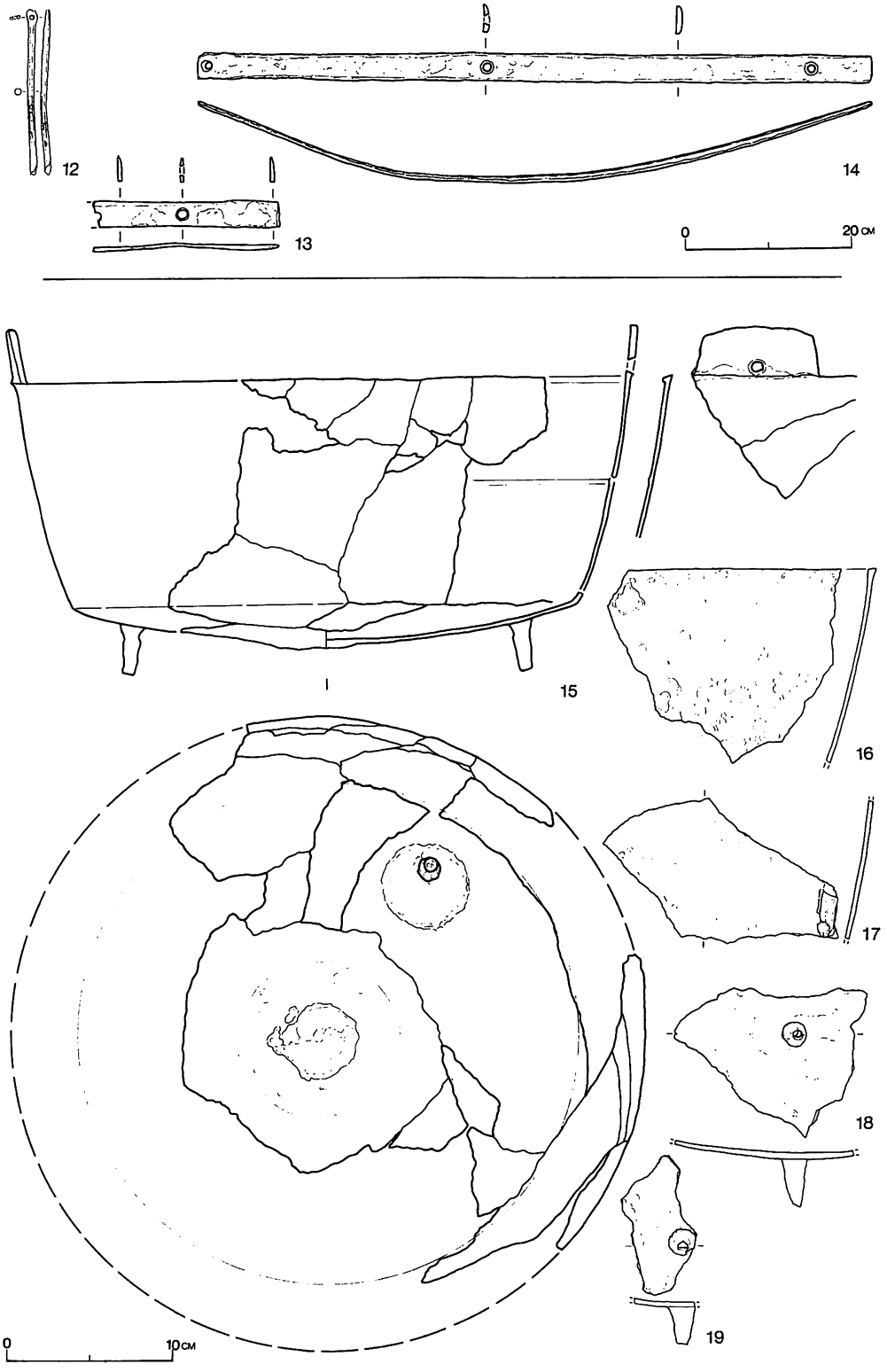
(2)　遺物（図Ⅷ－７～９、表Ⅷ－４・５、図版Ⅷ－６～９）

１～11は炭窯跡２号から出土した遺物である。１～８は炭焼窯の天井を補強するための吊り金で、入手可能な板状鉄製品を用いて自家製作したものである。軸長は22㎝前後、径約1.2㎝の鉄棒を適当な大きさの鉄板に通し、先端を叩き潰し抜け落ちないようにしている。針金などを通すために鉄棒の上部をフック状に折り曲げたもの（１・34・８）、先端を平らにつぶして貫通孔を開けたもの（２・５・６）がある。板の形態は方形（１～４）、長方形（５・６）、台形（７）、三角形（８）などがある。９は18ℓ缶を数回折り曲げて板状にしている。10・11は針金である。吊り金を吊ったか、木組などを固定したのであろう。12は吊り金の鉄棒部分である。13・14は吊り金板の素材となる馬車の車輪に付けられた鉄板である。片減りしている。５は同様の素材を使用したと考えられる。12と13は組合うのかもしれない。

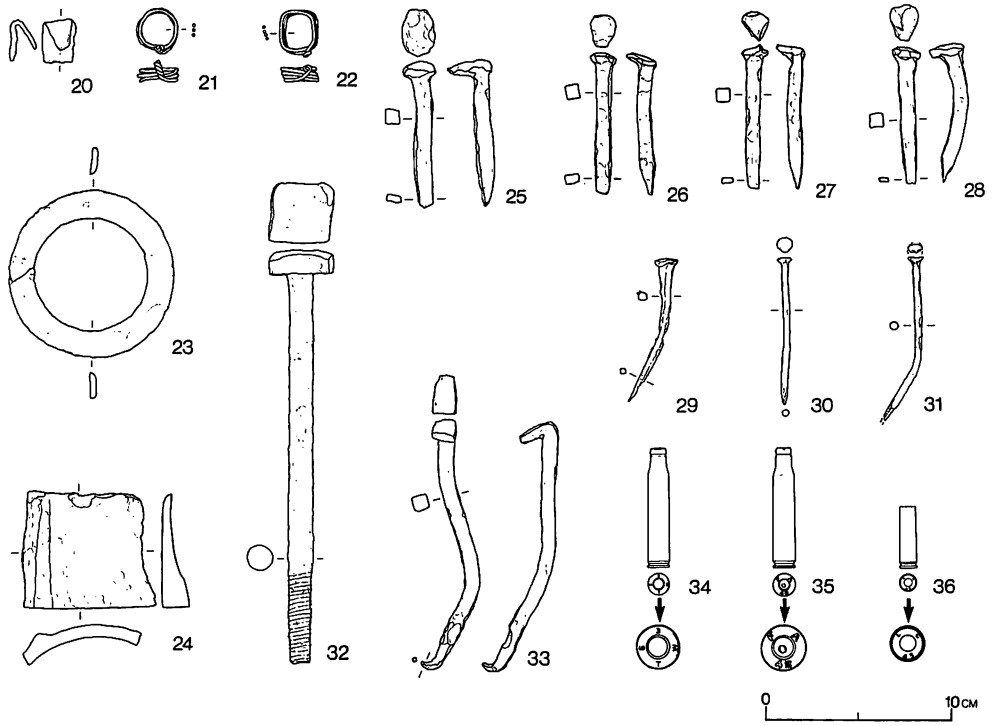
15～19は鉄鍋である。16～19は別個体の口縁部、胴部、底部である。15は１／３ほどを欠損する。口縁部の括れはなく、内面にわずかに段が付く。口唇には孔が１つ開けられ台形の耳が付く。底部は湯口の整形が丹念に行われ、細長い脚が３個付けられる。実測図から４升炊きと算出した。20はフック状の鉄製品、21・22は接合物を固定するためにコイル状にした針金である。23は薄い環状の鉄製品である。接合部は重なりあっている。24は円筒状の鉄製品の破片である。25～28・33は軸断面が正方形の角釘である。33は軸が長くねじれている。尖端はカギ形に曲がっている。29～31は丸釘である。29は細い角釘かもしれない。32は角頭のボルトである。34～36は薬莢である。朝鮮戦争時に駐留米軍が演習に使用したものであろう。



図Ⅷ－７　表土層の金属製品等(1)



図Ⅷ－8　表土層の金属製品等(2)



図Ⅷ－９　表土層の金属製品等(3)

表Ⅷ－４　炭焼窯跡２号の掲載金属製品一覧

No.	名　称	層位	大　き　さ　(単位cm) 長さ×幅(板縦×板横×板厚)×厚さ(軸径)	重さ(g)	材質	備　　考	写真図版
1	吊り金	覆土	22.9×(8.7× 9.6×0.6)×(1.0)	399.1	鉄	鉄板形態は方形。	
2	吊り金	覆土	22.8×(10.6×13.0×0.6)×(0.8)	468.4	鉄	鉄板形態は方形。	
3	吊り金	覆土	23.2×(9.2× 9.4×0.8)×(0.9)	398.2	鉄	鉄板形態は方形。	Ⅷ-6-2
4	吊り金	覆土	22.0×(8.2×10.4×0.4)×(1.2)	314.4	鉄	鉄板形態は方形。	
5	吊り金	覆土	24.1×(4.6×16.5×0.6)×(0.8)	297.5	鉄	鉄板形態は長方形。	Ⅷ-6-2
6	吊り金	覆土	19.7×(6.9×27.5×0.4)×(1.0)	449.0	鉄	鉄板形態は長方形。	
7	吊り金	覆土	19.9×(7.4×21.6×0.6)×(1.1)	526.8	鉄	鉄板形態は台形。	
8	吊り金	覆土	22.3×(13.0×14.3×0.3)×(0.8)	178.1	鉄	鉄板形態は三角形。	Ⅷ-6-2
9	鉄板	覆土	14.4× 11.5 × 0.7	220.2	鉄	角形18ℓ 缶つぶしたもの。	
10	鉄板	覆土	17.5× 2.5 × 0.2	10.2	鉄	吊り金を吊った針金か。	Ⅷ-6-2
11	鉄板	覆土	24.9× 1.1 × 0.3	28.0	鉄	吊り金を吊った針金か。	

表Ⅷ－５　表土層の掲載金属製品一覧

No.	名　称	位　置	大　き　さ　(単位cm) 長さ × 幅 × 厚さ	重さ(g)	材　質	備　　考	写真図版
12	吊り金棒	f -68-71	19.9 × 1.3 ×径0.8	60.5	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-1
13	鉄板	f -68-83	22.1 × 3.2 × 3.0	(223.2)	鉄	MV-1含没	
14	鉄板	f -68-92	80.4 × 3.1 × 0.8	974.1	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-1
15	鉄鍋（復元）	f -68-64	(37.5)×(21.2)× 0.3	(1415.0)	鉄	f -68-74と接合　MV-1含没	Ⅷ-9-1
16	鉄鍋口縁部	f -68-74	(16.4)×(19.5)× 0.4	(178.0)	鉄	MV-1含没	
17	鉄鍋胴部	f -68-93	(11.6)×(19.7)× 0.4	(125.7)	鉄	MV-1含没	
18	鉄鍋底部	f -68-92	(12.0)×(16.5)× 0.5	(112.0)	鉄	脚１　MV-1含没	
19	鉄鍋底部	f -68-92	(12.8)× (6.4)× 0.4	(57.0)	鉄	脚１　MV-1含没	
20	鉄板	f -68-64	2.3 × 1.8 × 1.4	5.8	鉄	MV-1含没	
21	針金コイル状	f -68-74	2.5 × 2.2 × 1.2	2.7	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-1
22	針金コイル状	f -68-72	2.5 × 2.0 × 0.8	4.9	銅	インクララック塗布	Ⅷ-8-1
23	円盤状鉄製品	f -68-80	8.8 × 8.8 × 0.3	58.6	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-2
24	鉄製品	f -68-81	(7.0)× (6.1)× 0.7	(233.5)	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-2
25	角釘	f -68-72	10.9 × 3.5 × 1.4	40.4	鉄	MV-1含没	
26	角釘	f -68-83	10.6 × 2.2 × 1.0	27.6	鉄	MV-1含没	
27	角釘	f -68-71	10.4 × 2.2 × 1.5	27.7	鉄	MV-1含没	
28	角釘	f -68-72	10.2 × 2.7 × 1.5	26.8	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-2
29	丸釘	f -68-84	7.6 × 1.2 × 0.4	9.5	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-2
30	丸釘	f -68-71	7.7 × 0.8 × 0.4	5.3	鉄	MV-1含没	
31	丸釘	f -68-72	8.5 × 0.8 × 0.5	6.6	鉄	MV-1含没	
32	ボルト	f -68-83	21.8 × 3.3 ×径1.3	269.5	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-1
33	長角釘	f -68-93	13.3 × 2.0 × 0.8	62.8	鉄	MV-1含没	Ⅷ-8-2
34	薬莢	f -68-82	6.3 × 1.2	12.1	真鍮	インクララック塗布　他３点	Ⅷ-8-2
35	薬莢	b -66-43	7.7 × 1.3	12.3	真鍮	インクララック他６点	Ⅷ-8-2
36	薬莢	c -68-87	3.3 × 0.9	4.7	真鍮	インクララック塗布	

4　まとめ

近世の遺構についてはⅨ章で述べられるので、ここでは近代の遺構について記すこととする。

近代の遺構

調査の結果、炭焼窯跡２基、竪穴状遺構１基、炭焼窯跡に関係する金属製品・陶磁器・ビン類が確認された。この遺跡付近で大正末期から昭和初期にかけて炭焼きをしていた、咲間清春氏（苫小牧市字美沢８番地在住）からの聞き取りをもとに、当時の炭焼きの状況を復元してみたい。咲間氏は大正12・13年ころから昭和７年に植苗に入植するまで丸山で、炭焼きをしていた。本遺跡の炭焼き窯跡については、咲間氏の窯よりやや古く炭焼きがおこなわれていたようで、窯主名を記憶されている。出土したビール瓶（大日本麦酒）が明治39（1906）年から昭和24（1949）年の間のものであることからみて、明治末～昭和20年代までに限定できる。

築窯に関すること

構築時期は春先で、掘り方は馬・モッコを使う。窯壁の構築はオサツ粘土をカケヤで叩き固める。天井・窯壁の構築には７・８人で１日がかりであった。角窯の規模は２間×３間が一般的である。焚口や排煙口に使用された熔結凝灰岩は、島松で１尺・３尺の規格で切売りされていたものを購入。現在でも島松駅逓所跡にある顕彰碑北側の坂道に露出しているのがみられる。

製炭に関すること

炭材は秋～春に切り、切りだめをする。炭焼きは普通１ヵ月に２枚焼くが、12月には３枚焼くこともある。木炭はスゴメ（カシワ・ナラの皮つき）・１等・２等・ボカ炭（軟木の炭）の４つにランク付されていた。

木炭の運搬に関すること

生産された木炭は千歳川から江別・石狩まで舟で運ぶ。冬には札幌からも馬ソリで買いに来る者もいた。値段は１表１円80銭であった。

本遺跡の窯は２間×３間の角窯の規格に合うものである。煙道は１か所である。天井の崩落土内の吊金、窯底に残る木杭などは築窯に関する良好な資料である。角窯の類例は対岸の美沢３遺跡で検出されている（皆川1988）。３か所の煙道をもつものである。周辺では静川29遺跡（工藤1984）、静川９遺跡（宮夫1985）の例がある。静川29遺跡の窯は３か所の煙道をもつ。静川９遺跡のものは２か所の煙道をもつものと、３か所の煙道をもつものとが重複して検出されている。周辺の窯の例からみて１か所の煙道をもつものは稀である。

大正初期には窯のほとんどが角窯であったようである。角窯は四隅に火のまわりが悪く未炭化のものが残る欠点があった。そのため昭和の初期ごろから四隅を省いたベコ窯に変っていった。

（佐藤和雄）

文献

皆川洋一　1988　「付篇　炭焼窯跡について」『美沢川流域の遺跡群Ⅻ』　（財）北海道埋蔵文化財センター

工藤　肇　1984　「静川29遺跡」『苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ』
苫小牧市教育委員会・苫小牧埋蔵文化財センター
宮夫靖夫他　1985　「静川９遺跡」『ニナルカ』　苫小牧市教育委員会・苫小牧埋蔵文化財
センター

表Ⅷ－６　包含層の出土遺物一覧

名　称	数　量
フレイク・チップ	1
焼　礫	4
鉄　製　品	134
米　軍　関　係	197
陶　器　他	114
計	450

表Ⅷ－７　遺構の出土遺物一覧

名　称	分類	数　量	
		覆　土	床
礫		1	
木　材		5	
杭		16	
炭　化　材			1
鉄　器		8	
鉄　板		149	
釘		3	
針　金		6	
アスファルト		7	
陶　器		4	
総　計		199	1

表Ⅷ－８　遺構別出土遺物一覧

遺構番号 遺物点数	名　称	分　類	数　量	
			覆　土	床　面
炭焼窯跡１号	木　材		3	
	杭		16	
	アスファルト		2	
	計		21	
炭焼窯跡２号	礫		1	
	木　材		2	
	炭　化　材			1
	鉄　器		8	
	鉄　板		149	
	釘		3	
	針　金		6	
	アスファルト		5	
	陶　器		4	
	計		178	1
	総　計			179

Ⅸ 総 括

1 調査の成果と課題

本年度の調査によって、旧石器時代、縄文時代各時期、続縄文時代、擦文時代、中・近世、近・現代に及ぶ資料が追加された。各章のまとめにおいて概括されているが、それぞれに特色をもっていて、新たな課題を提示している。ここでは、それらのいくつかについて述べることとした。

(1) 旧石器時代の遺物

新空港用地内の調査によって、En－a層下のローム質土層から遺物の発見された例は、昭和53年に美沢1・美々5遺跡[註1]を最初として、昭和59年には美々4遺跡[註2]、昭和61年には美沢10遺跡[註3]、昭和62年には美々8遺跡[註4]で出土し、今年度の美沢3遺跡の出土と合わせて6遺跡になった。美々5遺跡では出土層準が確認できなかったけれども、他の5遺跡では確認され、特に美沢1、美沢10、美沢3遺跡では10点以上の資料が出土している。いずれも少規模な遺跡であるが、わずかな範囲の確認調査によって発見された状態から判断すると、これらの小河川沿の台地縁辺には、かなりの密度で旧石器時代の遺跡が分布していることになる。美沢10遺跡や美沢3遺跡では炭化木片の集中域や焼土の存在していることから、当時の人々がそこで火を焚き、石器の製作などをしていたことが知られる。

これらの石器の年代と、文化的な所属については、これまでの調査の経過の中で考察が加えられてきている。美沢1遺跡の黒曜石の水和層年代は18,500±1000年B.P.であり、昭和59年に美々4遺跡から出土した黒曜石の水和層年代は18,000±700年B.P.と測定された。このような状況の下で、千葉英一氏は、北海道の代表的な石器群の一つとして、最古の石器群の中に美沢1遺跡の石器群を含め、祝梅三角山遺跡の石器群に比べて上位の層準であること、両面加工のポイント様石器、インバースリタッチによって作出されたスクレイパーの存在、石材が多様であること、剝片には定形性がなく、打面が自然面か平坦面であること、年代測定値が祝梅三角山遺跡の石器群よりも新しい値をもつことなどから、20,000年B.P.前後の石刃技法の存在しない祝梅三角山遺跡などのIa期の石器群と、18,000～15,000年B.P.と考えられる石刃技法を主体的な技術基盤とする前期白滝文化の石器群との過渡期的なIb期の石器群かもしれないと推定した[註5]。昭和61年に美沢10遺跡で、美沢1遺跡の例と同様な石材に多様性を示す石核と剝片が出土し、その水和層年代測定値が17,000±900年B.P.と16,100±1,000年B.P.と与えられた。畑　宏明氏は、この石器群が祝梅三角山遺跡の石器群とは差異のあることを認め、美沢1遺跡の石器群とは「年代測定値には差があるものの、基本的には同一の石器群とみなしうるもの」と判断した[註6]。

美沢10遺跡の年代測定値から、この石器群を15,000～18,000年B.P.の前期白滝石器群や広

郷８遺跡のナイフ形石器をもつ広郷８遺跡の石器群と対比し、「美沢１遺跡や美沢10遺跡では今のところ石刃技法はみられないが、今後その存在が確認される可能性は十分予測される」との見通しを畑氏は述べられたが、この後、昭和62年に美々８遺跡から白色メノウのフレイクが１点追加され、今年度美沢３遺跡の資料が加えられることとなり、それらにはいずれも石刃技法の存在は認められていない。一方、昭和62年に函館市桔梗２遺跡の発掘区南端から発見された石器ブロック（KSb－１）の石器群には石刃技法の存在が認められず、道内では最古の石器群の一つとして位置づけられる可能性をもつことが指摘されている[註7]。美沢１遺跡の石器群にも、桔梗２遺跡で知られたような「不定形剝片技法」による剝片に近い、長幅指数が同じくらいのものや、むしろ横の幅の広い剝片の存在することから、美沢１遺跡の石器群は、なお、最古の石器群に近い年代のものと考えられる。美沢１遺跡の石器群の年代は大きな幅をとると19,500～15,000年B.P.ほどの範囲となるが、美沢１、美沢10、美沢３遺跡の多数の資料の集中する部分の層準は共通し、さほど大きい年代幅をもたないと考えられる。美沢１遺跡の測定値と、美沢10遺跡の中心部から出土した資料の年代を合わせて考えると、18,000年B.P前後のものとみなし得る。資料の蓄積が進めば、道南から東北地方北部へかけての文化と関連して理解される可能性がある。

(2)　縄文時代早期の遺構と遺物

美沢３遺跡の第Ⅱ黒色土層からは縄文時代早期の遺構と遺物が多く認められた。Ta－b層上の第Ⅱ黒色土層から出土する遺物で最も古い時期のものは、有珠川２遺跡で知られたアルトリ式などの筒形平底の貝殻文土器であり、Ta－d層下の貝殻文尖底土器などとは時間差をもつことが知られていた[註8]。昨年、美沢３遺跡で道東の資料と共通するタイプの石刃鏃が出土し、それらに伴う土器の出土が予測されたけれども、本年度の調査では認められなかった。第Ⅲ黒色土層には包含層が認められず、今のところ、美沢３遺跡では、石刃鏃が第Ⅱ黒色土層の最も古い時期の遺物と考えられる。

昭和52年の美沢２遺跡の調査以来、資料の乏しかった東釧路Ⅲ式土器がやや多く出土した。近年、東釧路式系の土器と対応する青森県側での資料が充実してきて、これまでの編年対比を考え直さざる得ない状況となっている。また道内の道央部から道南地方にかけて、これまで不明であった、東釧路Ⅱ式に相当する資料が出土する例が増え、これまでの調査資料の中からも改めて東釧路Ⅱ式に相当する資料が認められてきている状況である。今後の見通しを含めて検討すべき課題を述べておきたい。表館遺跡[註9]のⅥ群、Ⅶ群土器は従来の早稲田４類、同Ⅷ・Ⅸ群土器は早稲田５類と近縁もしくは同一とみなされ、道南の西桔梗式は表館Ⅵ、Ⅶ群に相当するものと考えられる。東釧路Ⅱ式からⅢ式への変遷過程は、これまで資料が少なく、充分明らかではなかったけれども、52年に美沢２遺跡で出土した資料にはLR原体で縦位の羽状の縄文を構成するような、早稲田５類に近い土器も存在していた。道央部から道南地方の東釧路Ⅲ式は早稲田５類とのかかわりで改めて検討を要することとなる。

コッタロ式に相当する資料は東釧路Ⅲ式に近いものから中茶路式に近いものまで認められ、

その変化は漸移的である。本年度出土した資料は2段階に区分されているが、他遺跡の例も含めて、今後検討されることとなろう。表館遺跡のX群土器には、コッタロ式に相当するものがあるとみなされる。道南地方の資料には共通する文様要素をもつものがある。

中茶路式に相当する資料は出土地点により特色を異にするものがあり4段階に細分されている。本年度の調査ではこの時期の大型墓壙が発見され、ベンガラも認められた。昨年度は東釧路Ⅳ式の時期の大型墓壙から足形付土版が出土したけれども、このような大型の墓壙が、中茶路式の時期から存在することが明らかとなった。中茶路式は青森県内から北海道と同様のものが出土していて、表館遺跡ではXI群土器とされている。

東釧路Ⅳ式に相当する資料は、昨年a～fの6段階の区分を行ったが、本年度はfの内の新しいとみられる部分を分離して、a～gの7段階に区分している。昨年度調査された住居跡群とつながるとみられる住居跡が2軒調査されている。表館遺跡からは東釧路Ⅳ式と近似の文様構成をもつ土器が出土していて、XII群土器とされ、在地系の土器と考えられている。東釧路Ⅳ式の新しい部分に相当すると考えられている。

なお、昨年出土した資料により、美沢3式と称することにした前期初頭の資料が追加されている。この組成には器面全面に横走する縄文を施した綱文土器を伴わないことが明らかになった。また口縁に沈線により文様の施された土器、角形の口唇で羽状縄文の施された土器を伴っている。主要な特徴は、長七谷地Ⅲ群の主体をなす資料と共通している。表館遺跡の報告においてはX群土器が、東北地方北部に共通に認められ、早期末葉ものとして理解されていて、他方、XIII群、XIV群とされた長七谷地Ⅲ群の資料も前期初頭のものとみなされているところから、XI、XII群土器が早期終末の土器より新しく、前期初頭の土器より古く位置づけられると認識されている。しかし、X群土器は早期終末のものではないかもしれない。北海道でのこれまでの調査の結果では、中茶路式から東釧路Ⅳ式の終末までには、相当長期の文化的変遷があり、東北地方北部に共通して認められる前期初頭の土器は、少くとも道央地方までの範囲では東釧路Ⅳ式からスムーズな変遷をたどると考えられる。青森県では、表館X群を早期末に位置づけることに重きを置き中茶路式以降を前期と理解しようとしているが、東北地方に共通に認められる前期初頭の資料とみなされる道南の松江式、道央ではそれより若干新しいかとみられる美沢3式以降を前期として理解するのが、これまでの調査の歩みから妥当であろう。問題はむしろ、青森県において、表館XI群の中茶路式が搬入品であるならば、それが何に伴うかを明らかにする課題があり、同XII群の東釧路Ⅳ式を含む土器群が、東北地方においてどのようなあり方をするのか、今後検討を要することとなろう。これまでのところ、東北地方の早期から前期にかけては、まだ位置づけを留保されている資料がある。早期末葉にはかなりの地域差が認められるのではなかろうか。

(3)　縄文時代中期の遺構と遺物

美々3遺跡の第Ⅱ黒色土層の調査によって、多量の北筒式土器が出土した。この遺跡では北筒式以前の柏木川式が少量出土し、北筒式に後続する余市式系の資料も若干得られていて、北

筒式の時期の集落遺跡とみることができる。本年度は住居跡１軒の調査であり、今後の調査によって明らかにされる部分が多い。

北筒式土器については、古くから知られた型式であり、特に道東地方の資料について編年上の検討が進められてきている。近年の調査では、北筒式の分布範囲が、後志、担振地方に及ぶ状況が明らかとなり、道央部においても、より細かな型式の認定と編年上の検討が必要となっている。本年度の調査では、北筒式に伴うとみなされる道南地方のノダップⅡ式や煉瓦台式がわずかながら出土していて、それらには若干の時間差があるとみなされた。今後の調査の中で、北筒式の編年を検討してゆくこととなる。

中期と後期の境を道南地方では煉瓦台式と天祐寺式の間、道央では北筒式と余市式の間に置いている。美々３遺跡で出土した資料に、道南の天祐式とみなされるものがあり、道央の北筒式から余市式への変遷とどのように対応するのか、北筒式から余市式への移行の過程も合わせて検討されることになる。

(4)　擦文時代の遺構と遺物

美々８遺跡の調査により焼土、礫群、柱穴群などと伴に多量の擦文土器が出土した。これらとこれまでの出土例を合わせると、この地域の擦文土器の変遷が、初期から末葉まで、ほぼたどることができるようになった。今年度の調査では特にその初期の資料が充実している。なお、これまでの調査ではほとんど例のなかったラウンドスクレイパー状の石器が出土し、これらは初期の擦文土器に伴うものかとみられる。土玉も多く出土し、７・８世紀頃のものかと考えられている。このような長期に亘る擦文時代の遺跡は、道内でも類例がほとんど知られていない。このことは、交通上の要地として、この場所が継続的に利用されてきたことと関わりがあるのであろう。擦文文化の成立からその展開過程を知る上で、より詳細な分析、検討が必要となる。

(5)　中・近世の遺構と遺物

美々８遺跡からは擦文時代以降、中世から近世にかけての遺構・遺物が出土している。この時期の遺物は対岸の美沢３遺跡にも認められるが、美々８遺跡に集中的に残されている。擦文時代以来のこの遺跡の性格が基本的に続いているとみなされる。昭和56年に台地上で家屋の跡かとみられる柱穴群と道跡が発見されていたが、本年度の調査によりこの道跡が斜面を下り調査区外の水面下に没していることが判明した。この道跡はTa－b層上に存在した可能性がある。他に、Ta－b層下の道跡もある。道跡の周辺の杭跡群にもTa－b層上から打込まれたものが認められた。焼土も多数存在し、シカの骨片やサケの椎骨、頭骨片など多数の遺存体が含まれていた。斜面下部の道跡のわきにTa－b層を切る住居跡とみられる遺構が存在し、その付近のTa－b層下から古寛永銭が出土している。出土遺物には17世紀から18世紀にかかる頃のものが多いとみられる。他遺跡の出土例などと合わせて今後検討しなければならない。また文献記録から知られるこの地方の状況も合わせて考えてゆくことになる。中世の資料としては56年度に珠洲系のすり鉢が出土していた。本年度の調査で同一個体の破片が斜面から出土している。北宋銭や明銭も中世に伝えられた可能性はある。これらの意味するところも考えるべ

き課題である。

(6)　近世の遺構

美々８遺跡の表土層からは炭焼窯跡と、その下層から「ビビ小休所」跡とみられる建物跡が発見された。松浦武四郎が、このビビを訪れたのは、弘化三年（1846年）９月22日で、朝チトセを出発、ビビで乗船してユウフツへ至る行程であった。

「扨、二十二日、雨少し降れども晴るを待て出立しぬ。出立して。比処より荷物は皆馬に而送り、多き時は車ニ而も送る也。此間秋味最中ニは皆車馬ともに往来すると。其故番屋元ニは馬も車も留有たる也。此道は六十年前山田屋文右衛門と申すものが初て切墾し由也。其迄はわづかの山路と聞侍りけり。故ニチトセ、ユウフツの二場ともニ此山田屋文右衛門などの未だ請負をして、其後公料及び増々此処繁昌せし也。実ニ国家の大切とも云べし。運上屋元馬二十七、八疋、車は弐十輌斗也。打貫門を出て平坦道よろし。左右雑樹陰森として道は皆白砂也。夷人小屋二、三軒有る。ママツ。平山。雑木立。小川有。土橋を架る也。越て。ヌフノシケ。此処少し峠をなす也。此処よりシコツ沼見える也。并て、キサラコツ。并て。オホコツ。此処又小川有。少しの坂有。越て。ルイカウンコツ。越て坂を下りて小休所ニ着也。蝦夷行程記。従チトセ、ママツ、六丁。従ママツ、ヌフノシケ、三十丁。従ヌフノシケ、キサラコツへ十四丁。従キサラコツ、オホコツへ八丁。従ヲホコツ、ルイカウンコツ、六丁。従ルイカウンコツ、ルヲサニ、五丁。従ルヲサニ、ビビ小休所、坂下る也。

ミミ。従チトセ番屋。山道弐りといへども近きやニ覚ゆ。此処小憩所有。うらに夷人小屋弐軒有。此山中ニ而焼たる炭を皆此処へ出す。是よりして□□に□□也。又秋味は此処に□□□□り積来り□より小船ニ而送る。此処より上船す。其船石カリ川の如し。皆苫屋根を作る。是より蘆葦深き中を行こととしばしニして。ハンケビビ。扨、此処惣而ミミなれどもビビと訛る也。枝川有。此辺り沼とも陸とも不附して蘆葦深く生繁る。しばし此中を行て。ヒホイカリ。并て同じく中を行て。ヲハンケウ。此処両岸樹木一株もなし。只蘆葦の高き事凡一丈ニも及ぶ中を行て。ベンケナイ。枝川有。并て。バンケナイ并てまた小憩所ニ到る。蝦夷行程記。従ビビ、ハンケビビ、二十六丁。従ハンケビビ、ヒホイカリ。六丁。従ヒホイカリ、ヲハニケウ、十八丁。従ヲハニケウ、ベンケナイ、三丁。従ベンケナイ、バンケナイ、七丁。従バンケナイ、ビビフト、三十丁。等皆蘆葦の中斗也[註10]。」

と松浦武四郎は再航蝦夷日誌に記している。そこに「ミミ憩所船乗場之図」と記された図も付されている。当時馬や車でこのビビへ物資を輸送していたことが知られる。同書に「チトセ運上屋之図」が載せられていて、それをみると大八車が描かれている。船乗場の図をみると、比較的幅の狭い沢の中にやや大きい建物があり、その背後に小さな家屋がある。文中の「うらに夷人小屋弐軒あり」と記されているところから、沢の中の建物が「小憩所」であることが判る。このような地形の所を現地で捜すと、美沢川流域ではｅ、ｆ－66～68区にかけての小さな沢があるのみで、他には車が川端へおりられる場所はない。ここには空港建設の頭初に、川へおりる工事用道路がつくられていた。この図によって、「ビビ小休所」の位置が判ったので、本年

度調査した結果、図の通りの位置に3間×4間の建物跡が発見されたのである。

この建物はいつ建てられ、いつまで使用されていたのであろうか。武四郎の記述の中に、この道は六十年前に山田屋文右衛門と申す者が切墾し由なり、とある。『三航蝦夷日誌』の書かれたのは嘉永三年（1850年）のことであり、60年前は寛政二年（1790年）となる。その頃の記録に串原正峯の『夷諺俗話』がある。寛政四年（1792年）の記録である。「石狩川シコツ越の事」として「ソウヤより松前へ歸郷の節、イシカリ川より夷船にて東蝦夷地シコツという所へ出たり。イシカリ出舟して其夜はトマヽタエといふ所に止宿し、（此川筋止宿はみな夷小屋に泊るなり）二日目イベチといふ所へ着船。三日目シコツえ出たり。夫より山越をしてビヾといふ所より又船に乗る。此所よりは夷の丸木船にてユウブツといふ所へ着船せしなり。イシカリより川路山越とも三十六里餘なり。今年イシカリ川にて鮭御用交易ありしか、予は宗谷に詰居たる故、秋鮭漁は見ざりしが、右川路通行の節、シコツ川鮭多く、船中より川中を見るに背を揃えたる所、夥しさたとえん様なし。夷ともヤスにて突漁するなり。尤最早秋ゆえ、錆魚ゆへ、干してから鮭となすなり。―中略―予通行の節は、前にもいふことく最早鮭もさひて夷どもヤスにて是を突、鍵にて引懸あぐるなり。これをから鮭になし、交易荷物に出し、又はテンヒラといふて鮭をひらきになし、食糧になすなり。シコツ川のから鮭、夷交易米八升入壹俵に付八束位の相場なり。一束は貳拾本結なり[註11]。」と記されている。これをみると当時シコツからビビの間に道路が開かれていたようには見えない。ビビで丸木舟に乗っているところをみると、ビビに舟乗場があったものであろう。少くとも舟を漕ぐ人のいたことは確かである。しかし、「此川筋止宿はみな夷小屋に泊るなり」と記しているところをみると、当時通行者のための家屋は建てられていなかったと考えられる。

享和元年（1801年）の磯谷則吉の『蝦夷道中記』には「（五月四日）ユウブツ川を登る。凡十間余りにして浅き川なり。二里計にして湖に至る。廻り凡三里もあるべし。中央を通りて又一里半計にしてビビと云所に至。三四家ありてシコツより鮭を運送す。此所にいたり川内いと狭くしてチプさえ横たへかたし。（チフは蝦舟の名巾弐尺四五寸長さ壱丈計り木ヲクリて両端に壱尺計り板を付木之皮を以て結付たり。）是より林中を行事半里にして左右眼及限甘棠の花盛なる事壱里に及ぶ。其気色行過かたくそ覚ゆ。ロウサンと云所の会所に至。[註12]」とみえる。また「ビビ番屋ありシコツより此所ヱ鮭を運送シ、ユウフツへ出す也。此間山道甘裳多し、ユウブツより凡七里。ロウサン会所。支配人。夷家、凡七八戸。長、脇、小。ローサンニ隣三四丁、シコツ会所。支配人。夷家、凡十二三戸。長、脇、小。此所より石狩迄川船ニテ下り。シコツ川と云水源はエニハノボリの麓シコツトウより流れ出ル。[註13]」と記されている。磯谷則吉は蝦夷地御用掛松平信濃守忠明の蝦夷地巡見の一行に属していた。この前年寛政十二年に皆川周太夫が松平信濃守に呈出した内陸調査の復命書に「尤当時シコツ川通御開発有之候共」と記されていて[註14]寛政十二年（1800年）か翌享和元年（1801年）のはじめ頃にこのビビに番屋が建てられたのであろう。「シコツよりここへ鮭を輸送し」と記されているところをみると、多量に輸送できる道路や施設がつくられていたと考えられる。この番屋はその後の記録には認

められ、文政年間には「休所」と記されるようになる。これらを表示すると次のようになる。

表Ⅸ－1　「ビビ小休所」関係主要記録一覧

年　代	記録者	文献名	名称
寛政4年(1792)	串原正峯	夷諺俗話	(ビビ)
享和元年(1801)	磯谷則吉	蝦夷道中記	番屋
文化4年(1807)	田草川傳次郎	西蝦夷地日記　(註15)	番家
文政7年(1824)	上原熊次郎	蝦夷地名考并里程記　(註16)	休所
天保10年(1839)		西地イシカリヨリ東地ユウフツ越川通略図　(註17)	御小休所
弘化3年(1846)	松浦武四郎	再航蝦夷日誌	小休所ほか
安政5年(1858)	松浦武四郎	新道誌　(註18)	番屋（廃）

1850年代には、この施設が廃止されることとなり、ほぼ19世紀前半の50年間ほど使用された建物であった。輸送された物資の一時保管や、通行者の休憩所として利用されたことが知られる。

武四郎の60年前という記述は寛政年間という伝聞によって記された可能性がある。とすれば、寛政12年に設置された可能性が高い。

やがてこの小さな沢は土砂に埋れ、大正時代に炭焼窯がその上に築かれることとなった。窯の造られた面から1ｍほど下の位置になっていた。　（大沼忠春）

註

1）北海道教育委員会（1979）『美沢川流域の遺跡群』Ⅲ、PP．503～511
2）北海道埋蔵文化財センター（1985）『美沢川流域の遺跡群』Ⅷ、PP．182～184
3）北海道埋蔵文化財センター（1987年）『ペンケナイ川流域の遺跡群』Ⅰ　PP．79～89
4）北海道埋蔵文化財センター（1988）『美沢川流域の遺跡群』Ⅺ　PP．95～97
5）千葉英一（1985）「日本の旧石器――第1～3回――北海道（1～3）」『考古学ジャーナル245～247
6）畑宏明（1987）「ローム質粘土層出土の石器群について」前註3文献
7）石川朗・長沼孝（1988）「旧石器について」『函館市桔梗2遺跡』北埋調報46
8）北海道教育委員会（1979）『有珠川2・植苗3遺跡』
9）青森県教育委員会（1989）『表館(1)遺跡』Ⅲ
10）吉田武三校註（1971）『三航蝦夷日誌』下巻PP．55、66（吉川弘文館刊）
11）高倉新一郎編（1969）『日本庶民生活史料集成』4　P．516
12）札幌市教育委員会（1989）『新札幌市史』1　P．495
13）苫小牧市（1975）『苫小牧市史』上　P．426
14）前註12文献　P．493
15）中山利國編（1944）『西蝦夷地日記』P．160　（石原求龍堂刊）
16）山田秀三監修、佐々木利和編（1988）『アイヌ語地名資料集成』P．52
17）前註13文献　P．673
18）松浦武四郎著、高倉新一郎校訂　秋葉実解読『戌午東西蝦夷山川地理取調日誌』中　P．434

2　東釧路Ⅳ式土器について（図Ⅸ－１～３）

昨年度を今年度の調査で出土した東釧路Ⅳ式（Ⅰ群ｂ－４類）土器は、復元された個体のみについてみると64個体分である。これに昭和51年（1977）から昭和63年（1989）まで新千歳空港用地内の遺跡で発見された資料を加えて、東釧路Ⅳ式土器を通観してその特徴をみることとする。なおａ～ｇ類は本年度の分類による。

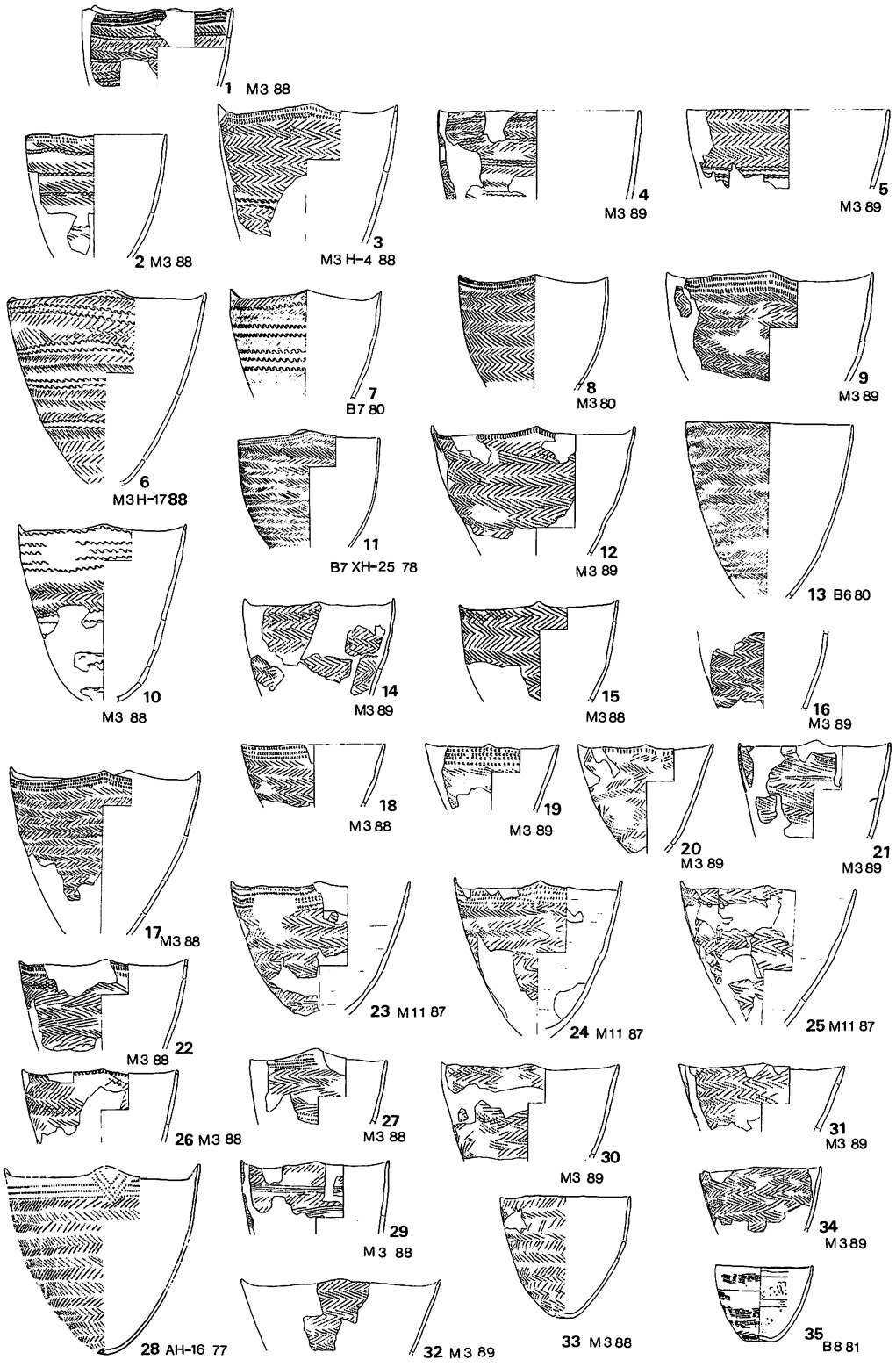
１はａ類に相当する。口唇は薄みで丸味を帯びた角形で、口縁部に中茶路式の名残りかとみられる微隆起線があり、その間に短縄文をめぐらしている。器面には、自縄自巻の原体による縄文が施される。

２～16はｂ類とｃ類に相当するもの、口唇断面はやや丸味を帯びた角形のもの、薄みで尖気味になるものがある。器壁には凹凸のあるものが多い。波状口縁のものでは四か所に小さな波頂部をもつものがある。器面には自縄自巻の原体で整った羽状縄文が施される。自縄自巻の原体によるものでは条と条の間に節がみえるものがある。原体の条は細い。縄文に重ねて縄文帯の間や口縁部に、２、３条一単位で綾絡文を数列施すもの（１～７、10）が多くみられる。綾絡文の原体の条は細く、無節の原体によるものがみられ、ｂ類ではその間隔は狭い。ｃ類にはやや間隔が広いものがみられる。口縁部に文様帯のあるものでは、器面に用いた縄文の原体がある。縄文のみのもの（13～15）もみられる。

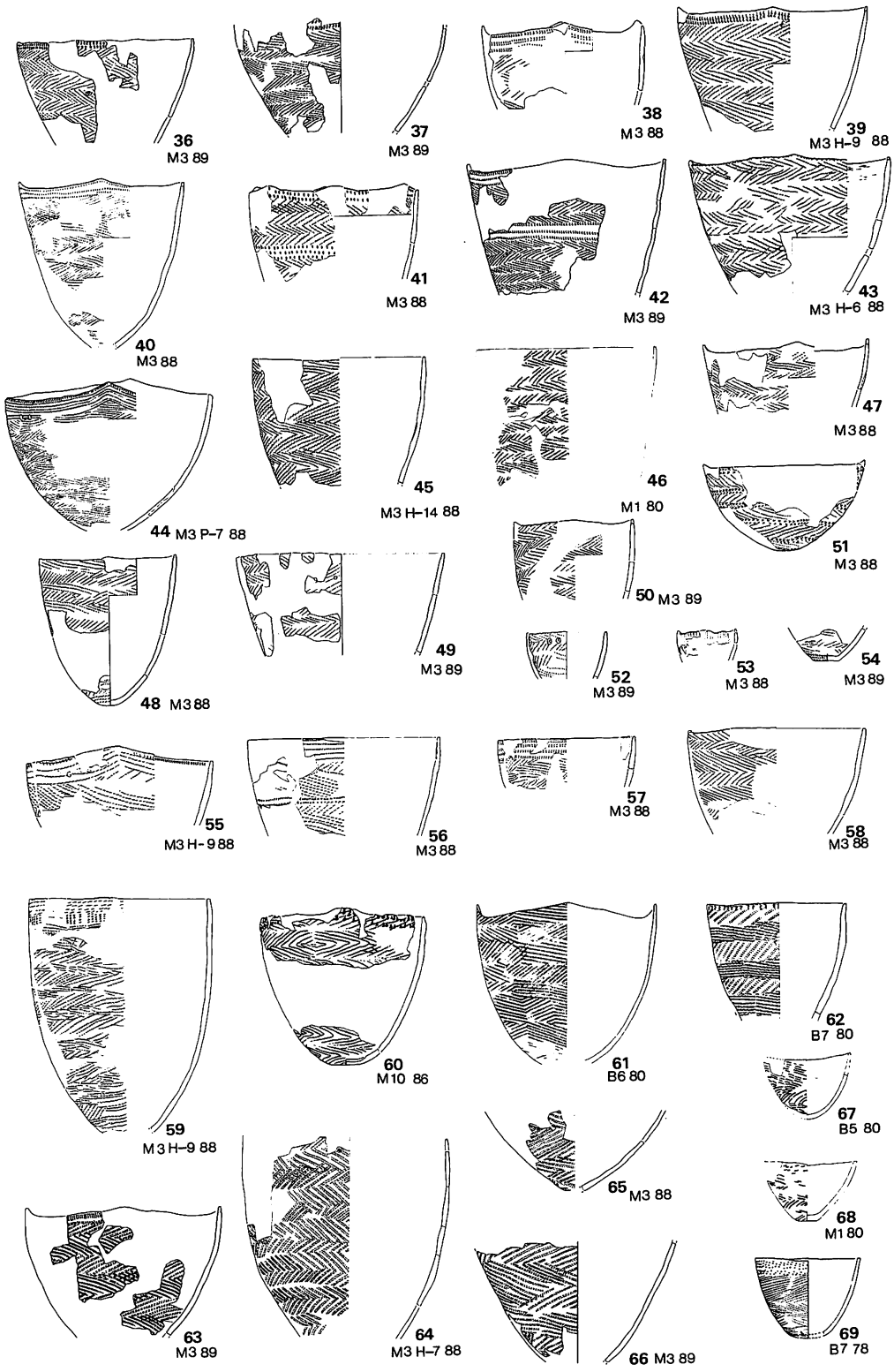
17～35はｄ類に相当するもの。口唇の断面は尖り気味のもの、丸味を帯びた角形で小さな波頂部をもつもの（19、20、24）、切り出し形（22、26）のものがある。器面には自縄自巻の原体による縄文が施されるもの、ニシンの腹椎骨による魚骨回転文のみが施されるもの（35）がある。ａ～ｃ類に比べて条が乱れているもの、横走気味になるもの（21）が多い。縄文面に重ねて魚骨回転文を施すもの（29）、絡条体圧痕文を施すもの（27）がみられる。口縁部に文様帯のあるものでは絡条体圧痕文を施すもの（24、27、28）、縄端圧痕文を数列めぐらすもの（17～20、22、23、26）がある。28は山形隆起部に鋸歯状に絡条体圧痕文を施している。口唇が切り出し形を呈するもの（22、26）では、口唇上に施文がされている。

36～54はｅ類に相当するもの。鉢形、舟形土器（51）がある。口唇の断面は比較的薄手で角形のもの、丸味をもつもの、切り出し形のものがある。器壁はｄ類よりもやや厚手になるものが多い。器面に自縄自巻の原体による羽状縄文が施されるもののほか、細い原体による撚糸文が施されるもの（40）がみられる。条が乱れて横走気味となり、撚糸文風になるもの、大柄な施文のものがある。器面や口縁部の文様帯に縄端圧痕文を施すもの（36～39、41、42、44、51、53）、絡条体圧痕文を施施すもの（40）がみられる。切り出し形の口縁のものでは、口唇上にも施文がある。

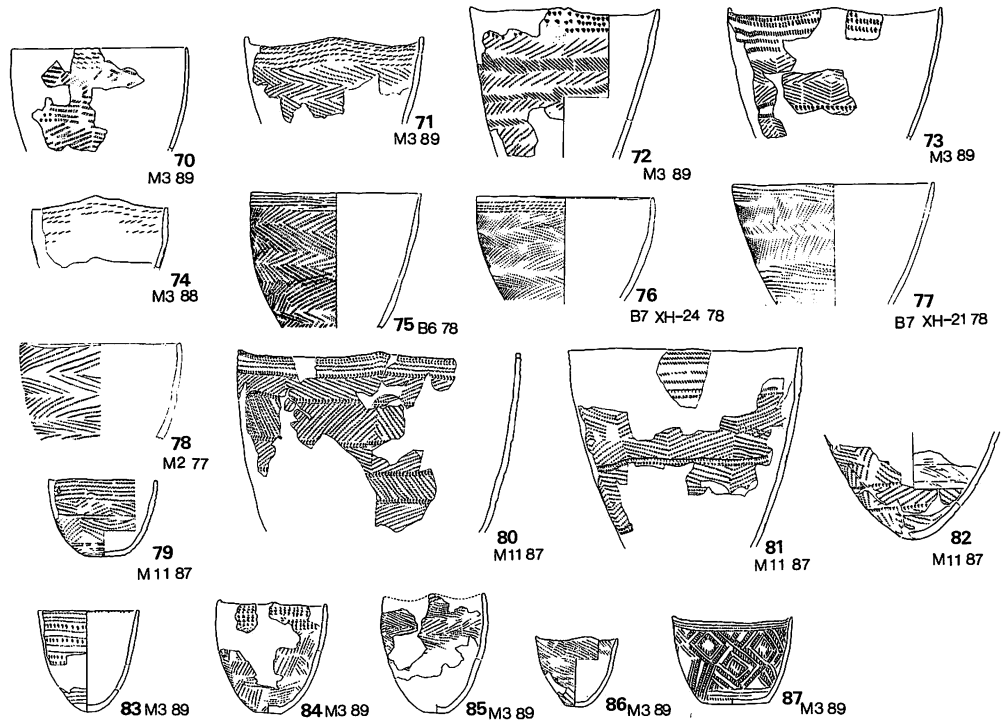
55～69はｆ類に相当するもの。口唇断面が角形で口縁部が薄く体部が厚手のもの、口唇が丸味を帯びた角形のものがある。体部がやや薄手のものもみられるが概して厚手である。平底のものがみられる。口縁部にやや幅の広い文様帯を形成するものがある。器面には自縄自巻の原



図Ⅸ－1　東釧路Ⅳ式集成図(1)



図Ⅸ－２　東釧路Ⅳ式集成図(2)



図Ⅸ－3　東釧路Ⅳ式集成図(3)

註　M1～M11は美沢1～美沢11遺跡、B5～B8は美々5～8遺跡、XH－、H－1は住居跡、P－はピットを表わす。77～89は西歴1977～1989を表わす。
縮尺は1/12である。

体による羽状縄文に加えて、普通の縄文のもの、2条並列する撚糸文が施されるもの（61、63～66）、撚糸文と縄文とを組合せるもの（62）がみられる。菱形の文様構成のものもある（60）。条は乱れて撚糸文風になるものがある。口縁部の文様帯には1段あるいは2段の縄による縄線文を数条施すもの（55、56、59）、縄端圧痕文が施されるもの（57、60、62、63）がある。67・68は小形であるが厚手で、条の乱れた縄文が施されている。69は条が横走気味で撚糸文風である。67～69は一応f類に含めた。

70～87はg類に相当するもの。深鉢形、鉢形に加えて、器高が高い小形の砲弾形のもの（83～85）、舟形のもの（87）がある。口唇断面は角形、丸味を帯びた角形、切り出し形のものがある。器壁は厚手で、口縁部から体部にむかって厚みを増すものが多い。口縁部にやや幅の広い文様帯を設けるものがみられる。自縄自巻の原体による縄文、2条並列する撚糸文（70、75）、普通の縄文が施されるものに加えて、0段の原体による四本平組紐を軸に巻いた絡条体の回転文、鋸歯状を構成する文様を施すもの（79、81）、軸に1条巻いた撚糸文、撚りの異なる縄を3本並列に巻いた撚糸文で菱形を構成する文様を施すもの（80）、原体を縦方向と横方向に回転施文し鋸歯状に似た文様を施すもの（84）がある。縄線文に短縄文を加えて非常に精巧な菱形の文様構成を施すもの（87）など多様な原体による文様がみられる。器面には縄文帯間に縄

端圧痕文をめぐらすもの（73、79、80、82）、刺突文を施すもの（81）がある。口縁部文様帯には比較的太い原体による縄線文を数列めぐらすもの（70、71、74～77、81）が多くあり、縄端圧痕文と縄線文を組合せて施すもの（80）、縄端圧痕文を数列施すもの（73、84、85）があり、縄端で刺突文風に圧痕文を施すもの（72）もある。83は縄線文と縄端圧痕文を組合せている。口唇上に施文するものがある（72、80、81、83）。78は厚手で、縄文の原体は条の太いものである。一応ｇ類に入れておく。

以上通観すると、ａ～ｇ類は大まかに、比較的古いグループ（ａ～ｃ類）、新しいグループ（ｆ、ｇ類）、その中間のグループ（ｄ、ｅ類）の３グループにまとまりそうである。

古いグループは中条路式の名残りをもつａ類を含めて、器面の縄文が整っていて口唇が尖り気味のもの、器面に綾絡文が数条一単位で施されるものがみられる。綾絡文はａ類では無節で条の太いものがみられ、その間隔は狭い。ｃ類では条もやや太くなり間隔が広くなる。ｂ類の綾絡文はその中間的特徴をもつとみられる。

中間のグループでは器面の縄文がやや乱れ、大柄に施文されるもの、条が横走気味になるもの撚糸文風になるものがみられる。条の太さは、古いグループのものより太い原体となる。ｄ類では、絡条体圧痕文、魚骨回転文を組合せるものがある。器壁はｄ類では比較的薄手で、ｅ類ではやや厚手である。ｅ類では装飾的文様を施すものもわずかにみられる。

新しいグループのものでは、器壁が厚手で口縁部に幅広く文様帯を形成するものがみられる。器面には自縄自巻の原体による縄文の他、２本並列する撚糸文が多く用いられるようである。ｇ類では２本並列する撚糸文に加え、０段の原体による四本平組紐を軸にまいた絡条体の回転文、３本並列する撚糸文などで菱形や鋸歯状を構成する文様も施すもの、縄線文で幾何学的文様を施すものがみられるようになる。ｇ類は装飾の多いものと、文様帯のないものとが出現する段階のようである。口縁部には１段あるいは２段の原体による縄線文を数列めぐらすものがあり、ｆ類ではまだ撚りがゆるいものや条が細いものがあるが、ｇ類では条が太く沈線を思わせるような縄線文がみられる。ｇ類にみられる、装飾的文様の土器の出現や口縁部文様帯のあり方は前期Ⅱ群ａ類土器に続くものではないだろうか。ｇ類の土器は早期末葉から前期への過度期の要素をもつものといえるのかもしれない。

なお前回の報告（北埋調報58『美沢川流域の遺跡群Ⅻ』）で、本文中のⅠ群ｂ－４類土器の原体の記載において、自縄自巻ＲＲとしたものは自縄自巻ＬＬであり、自縄自巻ＬＬとしたものは自縄自巻ＲＲである。ここに訂正を行うものである。　（遠藤香澄）

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第62集

美沢川流域の遺跡群　XIII

―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成２年３月27日　発行

編集　財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561－3131

印刷　富士プリント株式会社

064 札幌市中央区南16条西９丁目

Tel (011)531－4711